

# ロックマンキラーズ纏 め編

グルルre

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

始めまして皆さん、グルルと言う者です。

今回投稿させていただく小説はロックマンに出てくるロックマンキラーズ達を主役にした話となります。

メモ帳の日付見ると2007年とか書いてあつて眩暈すら覚えるのですが（笑）  
恥ずかしさに堪えつつ頑張つていききたいと思っています。

上記の通りかなり古い小説な上に独自設定でんこ盛りなので好き嫌い別れると思います  
ますが。

その辺はご了承くださいませ。

一応ストーリーの時期的に当時最新作だったロクフォルより二年後ぐらいと設定されていきます。

エンカー編終わりにつき思うところあつてキラーズ纏め編としました。

# 目次

## 派手に傾け エンカー編

vol. 1	プロローグ	1
vol. 2	後悔	6
vol. 3	芸ってなんだ？	16
vol. 4	憂鬱なる者	27
vol. 5	かつての悪夢	34
vol. 6	宿るは狂気	48
vol. 7	サイバー川中島	67
vol. 8	所詮は水と油	78
vol. 9	人間の咎	88
vol. 10	望む物	98

エピソードとエンカー編あとがき

## パンク編

106	プロローグ	109	
	vol. 1	敗残兵達のその後	
112	vol. 2	奇妙な関係	121
127	vol. 3	優しすぎる宿敵達	
	vol. 4	度し難きもの	137
	vol. 5	存在する価値	145
	vol. 6	兄と妹	153
162	vol. 7	皆が欲しが る物体	

vol. 8	平和ゆえの不安		173	vol. 4	問題多き後継機達		281
vol. 9	バレンタインは何時もの			vol. 5	迫り来る嵐		292
如く				vol. 6	暗雲の中で		311
188	vol. 10	我らはナンバーズ	179	vol. 7	舞い降りし暴君		338
	vol. 11	守るべきもの	200	vol. 8	虚空の闇に潜む者達		
	vol. 12	変わるもの	217	367			
	vol. 13	魂を吹き込め	232	エピソード			394
	エピソードとあとがき		244	400	後書き	バラード編と設定色々	
	バラード編				アース編		
	vol. 1	バラード南米にて	250		プロローグ		406
	vol. 2	自称最強の兄弟	257		vol. 1	招かれざる客	410
	vol. 3	王の名を継ぐもの	269		vol. 2	意外なる才能	434

659	vol 11	VS他国籍連合(前編)	641	vol 4	座する神	848
	vol 10	凍てつく軍団	619	vol 3	古き神の従者	826
	vol 9	心持つが故に	598	vol 2	地に眠るは	806
	vol 8	宿敵達との暑いバトルと出	571	vol 1	極地にて	787
	魔	会い?	571	プロト編		773
	vol 7	シンフォニーシテイに潜む	723	vol 15	廃工場での決着	746
	vol 6	行方知れずなモノ	545	vol 14	戦場の死神達(後編)	
			511	703		
	vol 5	妄執の死神と暑苦しい男達		vol 13	戦場の死神達(前編)	
	vol 4	蔓延る悪魔達	485	681		
	vol 3	思わぬ邂逅	458	vol 12	VS他国籍連合(後編)	

V  
O  
L  
5

エ  
ピ  
ロ  
ー  
グ

|

867





# 派手に傾け エンカー編

## Vol. 1 プロローグ

摩天楼のそびえる街並みにじゃかじゃか耳障りな音楽……。

一人顔を不快げにしかめながら一人の青年が歩いていった。

短髪の黒髪に浴衣姿、その上なぜか顔にはグラサン。

異様ないでたちの彼をよく見ると勘の良い者ならば気づくであろう。

体が動きたびにわずかだが起動音が聞こえる。

そう彼は人間ではない。

ロボット……。

彼はロボットなのだそれも戦闘用の。

「なんであんな音楽がいいのかねえ……。」

ロックマンキラーズが一人、エンカーは街並みを歩きながら不快な気分一杯だった。

彼は和風の文化をこよなく愛する。無論騒がしいものが嫌いなのではない。

花火大会でもやっていようものなら勝手に参加をして皆とわいわい楽しむことだろ

う。

彼は和にこそ真の美や芸術があると本気に信じきっている。

今時流行りの音楽など耳障りなものでしかなかったのだ。

キングの起こした一連の反乱から二つの季節が過ぎようとしていた今日。

ワイリーの世界征服もなりを潜め世界は平和そのものだった。

それを象徴するがごとくエンカーの憂鬱な気分をよそに空は雲ひとつない青空一色であった。

不快な気分いっぱいだったがどうせいつもの事だと気を紛らわせエンカーは知らず知らず歩く速度を速めていた。

彼には今日行かなければならない場所があった。

自らの宿敵のロックマンでもなければ生みの親のワイリーの元でもない。

人々が集う公園の先の横断歩道を右に曲がりそのまま直進すること10分。

彼の目指す目的地は人でごった返っていた。

「整理券ヲ所持チノ方ハコチラヘ」

「ソコノ 才客サン割リ込マナイデクダサイ」

列を整理する警備ロボット達の悲痛な叫び声があたりからこだまする。

中には順番を守らず、警備の注意も聞かなかつたため列の最後尾に引きずられていく

人間の姿もあった。

「来たか……どうせなら昨日のうちに並んでおくべきであったな。」

エンカーは後ろから声をかけられ振り向きざまに言った。

「まあな……だが見てみるここに集まった連中は皆、和の芸術つてやつを理解しているやつらだぜ。」

それを聞き、ややため息をつきながらもサムライの姿をしたロボットはうなずいた。

「それにしてもシャドーマンはどうした？」

「あいつはワイリー様からの特別な任務があるから来れねえつてよ、あいつも運がないぜ」

「そうか、まあ急用なれば仕方がない……」

サムライ姿のロボット、ヤマトマンがそう言いつつ紙切れを手渡した。

「……?なんだこれ？」

「整理券だ、無理を言つて3枚とつたがひとつ無駄になってしまったな」

やや残念そうにヤマトマンがつぶやく。

「だがありがとよ、これで早く入場することができるぜ」

彼らが目指していた物、それは本場の日本でしか味わう事ができないはずの歌舞伎の海外公演だった。

歌舞伎界の大御所、海老一族がおりなす公演・・・エンカーなどから見れば見逃すわけには行かなかったのだ。

「しめた事にあいつはここに来てない様だな」

エンカーはあたりをキョロキョロと見回したその時

ビュウウウウルルル・・・！！

そこに一陣の風が人々を掻き分けるようにして降り立った。

エンカーやヤマトマンは一瞬身構えるが相手の姿に気づき緊張を解いた。

そこには天を突き抜くように鼻を出した、一体の戦闘用ロボットの姿があった。

「フフフフ・・・！下らぬ下賤の者共がうじゃうじゃおりますなあ・・・」

自信ありげに周りを小馬鹿にしながら続けて

「果たしてここに来たものうち一体、いくらがこれの素晴らしさを理解できるのやら」

鼻を突き上げ高笑いをするロボットを見つつエンカーは憎憎しげに睨んだ。

「テングマンてめえ・・・目立ちすぎだこの馬鹿！」

「ほうこれはこれはエンカー殿、貴殿達もここに来ておられましたか！これより始まる

和の集大成・・・存分に体感できますな」

嫌味全開で偉そうに話すテングマンを見てエンカーは半ば後悔した・・・。

「こんな奴の事、かばうんじゃあなかった・・・」

話は二年前このテングマンがキングの軍門にくんだりワイリーナンバーズを裏切った頃に戻る・・・。

## V O I . 2 後悔

かつてキングと言うロボットが人類に対し反旗を翻し戦いを挑んだ事件は記憶に新しい。

その事件はロックマンと成り行きとはいえ共闘に応じたフォルテの二人が中心となり事件は終結を迎えた。

もっとも廃墟と化した要塞からはキングの残骸は結局発見されず、中にはキング生存説も噂にはあがったが平和なときは流れそのままいつしか人々の記憶からは忘れ去られていった。

また一部ではこの事件そのものもワイリーが首謀者として起こした事件なのではないかという噂もあがった……まあ半分は本当なのだが。

「つきましては拙者をワイリーナンバーズに復帰させていただきたい。その為には拙者どのような辱めも受けまする」

「……はて？どちら様かのう？ワシはお主の様なロボットを造った覚えはないんじやが……」

一体の天狗の姿を模したロボットが一人の老人に哀願をしていた。

しかしロボットの必死さとは裏腹に老人の態度は冷淡そのものだった。

それもそのはずテングマンはあろう事か生みの親であるワイリーを裏切りキングの軍門に下ったのである。

「ワシなんかよりも頼りになるキングの所へ行けばいいじやろう．．．どうせ奴も今もどこかで生きておるわい」

「せ．．拙者の居場所はこのにか．．．！」

間も変わらず冷めた目でテングマンを見つめる、自称悪の天才科学者アルバートⅡWⅡワイリーの様子を壁にもたれながら見ているエンカーは他人事ながらも思案も巡らさせていた。

「あーあー．．．こりやワイリー様カンカンだわ」

普段から怒ったり泣いたり．．喜怒哀楽の感情を表に出すワイリーがまるで冷め切った様な表情でテングマンに應對している。

人形の様にピクリとも表情が変わらないワイリー．．．怒りという感情を通り越し、真の意味での激情に身を震わせているのだとエンカーは知っていた。

そんな生みの親の姿はナンバーズの中で古株の彼ですら2、3回ほどしか見たことが無い．．。

ポリポリッ……。

後ろ手で頭の裏をかきながらエンカーは思う。

あの時のテングマンの気持ちも分からないものではないと……だからこそ。

「しかしこいつのやった事は重大な裏切り行為です……がこいつのロックマンに勝ちたいという気持ちは汲んでやったほうがいんじゃないですか？」

エンカーがようやく口を開きテングマンを擁護するがワイリーはちらりと横目で彼を見ただけであつた。

「……だがこやつはワシばかりではなくお前達をも……」

「ロックマンに勝つためなら手段を選ばない……それは我々のある意味でのサガです。例の悪のエネルギーにとりつかれた博士だってそうだったでしょう？」

ワイリーは痛いところを突かれ唸っていたがそれでもまだ納得いかんとした表情だつた。

「こいつはある意味、俺達ナンバーズとして当たり前の事をしただけです。そういう気持ちは俺が一番良く分かっている事を博士はご存知でしょう」

ロックマンキラーズ……世界征服を目標とするワイリーナンバーズにあつて、ロックマンという一つの目標を倒す為だけに生み出された存在。

エンカーはキラーズとして最初に生み出された戦闘用ロボットであり生まれた当初、



ロックマンの事しか頭に無く彼を倒す事、それ以外の事は考える事すらしなかった。

もっとも長い時間活動するにつれ勝手に和風の文化に目覚めていったのだが。

「それにこいつはまだ若い、まだまだ潰すには早過ぎると思います。お願いします博士！一度死んだと思ってもう一度だけこいつにチャンスをやってくれませんか！」

かつてはプライドも高く他人を見下していたエンカーがワイリーに向かつて土下座をしたのである。

それにはワイリーだけでなくテングマンも驚愕した。

エンカーもかつてとは違っていた、彼はロックマンに度重なる敗北を続けた。

自分自身のプライドだけの為に戦うだけのエンカーに、その小さな肩に世界の希望を背負う彼に勝てなかった・・・いや勝つ事すらおこがましかったのかもしれない。

かつてのスペーススルーラーズ事件の際、ロックマンに破れ崩壊する基地と共に運命を共にしようとしていた彼を助けた者・・・それは同じく傷つきともに戦ってきた仲間達だった。

その時エンカーは悟った、何故自分がロックマンに勝てなかったのか・・・幾度となく倒れても何度でも立ち上がる彼のその決意を・・・。

それ以来エンカーは他のナンバーズ達との付き合いも良くなりシャドーマン達と「和風同盟」なる訳の分からないものまで結成するまでになった。

そしてテングマンも悟った、他のナンバーズたちを見下し力だけを求めキングの元へ走った己の愚かさ、他者を見下すが故にいつの間にか自らがかつてのエンカー同様「井の中の蛙」になってしまっていた事を……。

「拙者……一度死んだと思い、再び失われた信頼を取り戻すべく今一度機会をお与えください！」

そしてエンカーに続きテングマンはワイリーに対し土下座をしたのである。

「……フン！ そんなに言うならエンカーの顔に免じてチャンスをやろう。ただしこれから半年……この研究所のゴミ掃除でもしてもらおうかの？ そこら中散らかつとるか  
らお掃除ロボでも造ろうと思っていたところじゃった」

「ありがとうございます……ありがとうございます……」

テングマンは平伏したまま何度も何度も頭を下げるしかなかった。

エンカーはテングマンと目が合うと笑みを浮かべた。

ワイリーもまた表情には出さなかったが内心ホツとした……互いを庇いあう自分の息子達の姿に感動していた。

（……なればこそやらねばならん……キングのせいではばらく間が空いたと言うプランクはあるが今開発中の「あれ」さえ完成すれば……その時こそライトと憎き奴の最後だ）

ワイリーは再び世界征服と言う大いなる野望に身を焦がし始めていた。

辺りにはけたたましい機械の音と油の臭い、さらには一瞬むっとしてしまうような異臭を放つ蒸気が吹き出していた。

そこに溜まるガラクタや鉄屑を集め、種類別に分ける作業をしている一体のロボットがいた。

テングマンだった。ガラクタや鉄屑を種類別に分けるのは貧乏なワイリー軍には必要不可欠であり何よりその中にはまだまだ使えるパーツも多い。

元より作業用ではないテングマンにとつてこのような場で作業するのは苦痛以外の何者でなかったはずである。

しかしテングマンは必死であった……失った信頼の事を思えばこのようなもの苦にもならなかった。

そして何より……。

全身真っ赤に染め上げいかにも強面のロボットと石でできた巨人の風貌のロボットの2人がテングマンに近づいてきた。

「今日もはりきってんな！こっちの重い物は俺が持つていくぜ」

「ふむ……ではこちらの分別した物は私が持つていこう」

同じナンバーズであり石巨人のようなロボット、ストーンマン。そしてエンカーと同じキラーズでもある強面のロボット、パンクであった。

「む……かたじけない」

素直に礼を言うテングマン……彼らだけでないこの基地にいるロボットのほとんどがこうして暇さえあればテングマンを手伝ってくれる。

最初の頃、仕事の要領も分からず、戸惑い気味のテングマンを尻目に作業用の機械から出されるゴミはドンドン溜まっていった。

困りに困ったテングマンはジャンクマンに頼み込み自らゴミの分別や処理といったノウハウを学び始めたのである。

同じナンバーズでも最初はエンカーぐらいしか手伝ってくれる者もいなかったが、黙々と真面目に働くテングマンの姿を見て周りの評価も次第に変わっていった。

あのプライドばかりが高いテングマンが他人に頭を下げる、礼を言う、挨拶を言う……。

自分の力では無理な物は他のナンバーズに協力を頼み、また困難な作業も最後まであきらめずそれが終わるまで絶対に作業を終わらす事は無かった。

……それから半年後、ついにワイリーから提示された期間が過ぎようとしていた……。

そしてそれを記念すべきテングマンのパーティがワイリー基地では開かれていた。  
パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

何事かと目を見開くテングマンの鼻にクラッカーの紙が垂れ下がる……。

そこには手書きの文字で「お帰りなさいテングマン」と書かれた横断幕がでかどかど壁にやや不恰好ながら貼ってあった。

「ふいー！ようやく今日新型のロボットができてな、明日からその清掃用のロボットが本格的に動くのでお前の仕事は今日で終わりじや」

腕を組みながらややばつの悪そうにワイリーが口を開く。

「……フン！お前の様に要領の悪い奴にいつまでもやらせておられんと言うことじや！むしろゴミが増える一方じや……しかしなテングマンよ」

テングマンの肩に手を優しく置いたワイリーは

「この半年間よくぞ耐えてきた。ワシには分かるぞんだだけお前が苦しかったか……正直ここまでお前が持つとは思わなんだ」

「そしてお帰りテングマン。またワシの為に働いておくれ……」

「は……博士……！」

テングマンは目頭が熱くなるのを抑えながらも集まってくれた他のナンバーズに礼を述べた。

「燃える・・・この展開燃えるよ!! キヤハハハ!!」

ヒートマンが気合を上げながらも大声で叫ぶ!

「馬鹿! お前! こんな所で火を出したら・・・!」

スネークマンが慌てるが時すでに遅し、ヒートマンの炎はテングマンを歓迎する横断幕を燃やしつくし

さらまだ残っていたクラッカーやこの後、屋上でしようとなつておいた花火に引火。

まるで戦場のごとく火花が飛び交い、そのうち一発がワイリーに当たりワイリーの数少ない髪に火がつき

フリーズマンとフロストマンが火を出し続けるヒートマンを止めるべく実力行使に出始め。

そこをさらに遅刻して来た為に慌ててやって来たパンクが部屋に穴を開けて進入してきて

アストロマンは一目散にその場から逃げ出し・・・そんなパニック状態の中、パーティーの主役のはずのテングマンは

パンクの突進を喰らい気絶し倒れたジャンクマンに押しつぶされ伸びていた・・・すべてが収まった後、全員がボロボロの状態で肩を合わせて笑っていた。

もはやかつての不遜で高慢なテングマンはどこにもいなかった・・・。

・・・のはずだったのだが・・・。

とは言え人間・・・ではなくロボットだが・・・基本的な性格は相変わらずでかつてに比べ人当たりも良くなりナンバーズの仲間と遊びに行くのも多くなったのだが。

その話す内容のほとんどが自身の自慢話やうんちくの話が8割をしめておりそれ以外ではゴミの分別での細かい話などであり。

いい加減、同じワイリー軍団の仲間内ではうんざりされているのである。

そのうえ、こちらが相槌を打つ暇もなく喋り続ける・・・。

もしかしたらこれがテングマン本来の姿なのかもしれないのだが・・・。

・・・そして現在。

エンカーは自慢げに今回の歌舞伎を見に来た意義などを延々と喋り続けるテングマ  
ンを見ながら頭を抱えていた。

「・・・やっぱりあの時、助けたのは間違いだったのか？」

後悔後先とは先人はかくももつともな言葉を残したのかとエンカーは頭を抱えながら思っていた。

そして空はそんなエンカーの気持ちとは違い晴れ渡っていた・・・。

## V O I . 3 芸つてなんだ？

「エンカー殿達は3階の自由席ですな、フフフフ！拙者は中央先頭の指定席！高い金を払い手に入れたかいかいがあったというものです」

「俺達の安月給じゃあ！3人分の自由席で限界なんだよ！」

鼻を突き上げるテングマンの自慢話にエンカーが怒鳴り散らす。

一度は事件を起こしたものの社会に復帰し現在は世界ロボット連盟などの要人の警護などをしているヤマトマンはまだしも、たださえ安い給料のほとんどをワイリーの世界征服としての資金に回しているエンカーにはほとんど余裕が無いのである。

今回のだつてヤマトマンに金を借りて何とかチケットを手に入れることができたのである。

そんな事を知つてか知らずか意気揚々と会場に入つていくテングマンを忌々しげに見る事しかエンカーはできなかつた。

「まあ我らも会場に入るかエンカー殿？席は違えど見えるものは変わりますまい」

「ああ・・・そうだなクソツ！絶対にいつかあの鼻をへし折つてやる・・・！」

「お主らも気苦労が耐えんな・・・」



怒りを隠そうとしないエンカーの後ろをヤマトマンがやれやれとした表情で共に会場に入っていた。

西暦20XX年

ロボットが人間社会に進出し、危険な場所での作業や精密な技術が必要な仕事は今やほとんどがロボットの独壇場である。

一部の職人と呼ばれた人間達は淘汰されそれがさらなる機械と人間の溝を形成していった。

しかし現在のロボットでは困難な事もある・・・それが芸である。

ロボットには人間の様に歌に感情をこめて歌う事や演技をする事が難しいのである。

仮にできたとしてもそれはどこか作られたものの様なものであった。

無論ロボットに感情が無いわけではない、彼らにだって好みもあれば嫌な物もあるし馬鹿にされたら腹が立つだろう。

実際に演技用のロボットとしてロボット工学の父といわれるライト博士やワイリーなどが作ればあるいはそれも可能かもしれないが・・・

現在の一般化されているロボットの技術では難しい事なのである・・・。

いやむしろこれこそが人間にとって最後に残されたある種の聖域であるが如く。

3階からエンカーが眼下に見える舞台を覗くと黒子に扮したロボット、クロコロボットが舞台の道具を忙しそうに運び始めていた。

さすがは歌舞伎の大舞台、次々と迫力の演技が展開され。

先ほどの怒りはどこへやらそれを生で見れたエンカーは少年の様に目を輝かせ見入っていた。

それに先ほど途中まで前列中央で座っていたテングマンだがどうやら席の列の番号が間違っていたのだろう。

警備ロボットに注意されみるみる後ろに下がらされ結局はエンカー達とあまり直線距離にして変わらない位置にまで下がらされる一幕があった。

「ハハハハ!!腹がいてえ・・・!あいつ高い金まで払ってって!騙されてんじゃん!」

「1階という意味では負けているがああ場所ではここと大して変わらん・・・無駄金を払ってない分、ワシらの方が得だな」

エンカーは腹を抱えて大笑いしヤマトマンは勝ち誇った顔で笑みを浮かべる。

「ふむ・・・正に油断大敵でござるなエンカー殿」

「ブーーーーー!!」

いきなりとなりから声をかけられエンカーは飲んでいたE缶を噴出しかけた。

「これはシャドーマン殿よく間に合ったな。てつきり欠席かと思っておったぞ」

ヤマトマンはあまり驚きもせず話しかけるが喉が詰まりそうになったエンカーはそれどころではない。

「フツ．．．これもワイリー博士から与えられた特別任務でな．．．」

「ゲホツ！ゲホツ！．．．て．．．てめえいきなり話しかけるな！」

気配も感じさせぬままいつの間にか着物を着た忍者型のロボット．．．エンカーと同じワイリーナンバーズの一人シャドーマンが隣の席に座っていたのである。

「大体．．．！任務とか言ってお前もこれを見ただけだろうが！」

「これも特別任務でござるよ．．．」

シャドーマンは意に介さずと言った表情で受け答え．．．

「まあエンカー殿、シャドーマン殿、喧嘩は後にして今は歌舞伎を見る事に集中しよう」  
「喧嘩なんかしてねえよ！」

「これも任務でござる、それに拙者喧嘩なぞしておらぬ。」

ヤマトマンが仲裁に入るがエンカーはなおも声を張り上げるが．．．。

周りの客の冷たい目にエンカーは気づき．．．

「す．．．すいません．．．」

急におとなしくなったエンカーは黙って席へと座った。

そして会場から大きな拍手が鳴りエンカーはハツとする。

ついにエンカーが憧れる、ある意味唯一のロボットが登場するのである。

大きな髪をひるがえし顔にはくまどりをペイントしたロボットが舞台上上がった。

ロボットの名前はカブキマン、エンカーが憧れ今、世間でも話題のロボットである。

彼の特徴はなんと言っても人間と同じように歌舞伎を演じる事ができるのである。

今までロボットには不可能とされて来た、芸の世界に乗り込んできたロボット。

エンカー自身歌舞伎や舞、歌などなんでも自分でやろうと努力をやってきた

踊りや歌を完璧にできて何か決定的な物が足りず人間が行うそれとは何かが違

う……。

それを彼はやってのけるのだ自分と同じロボットである彼は。

だからこそ自分も希望が持てるいつか自分達も人間と同じように演じる事ができるのだと……。

待ち遠しかった時間はあつという間に過ぎいつしか歌舞伎の公演は終幕となつていたのである。

「いやはや！カブキマンのあの演技とても我らには真似できない！」

「はいはい！すごかったのは認めるよ……」

テングマンの話に半ば辟易しながらも歩き続けるエンカー。

そしていつの間にかシャドーマンはいなくなっていた。

「まったくあいつ逃げやがったな……」

エンカーはいなくなってしまう仲間、恨みながらある店の前で立ち止まった。

「気を取り直して……さーて！今日はここで飲んで行こうぜ！」

「フム……では参ろうか、テングマン殿、エンカー殿」

ヤマトマンは居酒屋の扉を開けた。

今時珍しい引き戸でガラガラガラツと粹な音を立てながら扉が開く。

その後エンカーは歌舞伎を見た興奮をそのままに一気に酒（ロボット用のアルコール入りオイル）を飲み始め。

飲んでいる途中で店を何件もハシゴしてやって来たメタルマンとストーンマンがやって来てそのまま大盛り上がりで夜は更けていった。

勢いに乗ったテングマンとメタルマンが飲み比べ勝負をし、あっさりとテングマンが轟沈しましたしても周りの笑いを誘う。

「（）いつもよええなあ〜」

「この若造があ……！このナンバーズの底なし沼メタル様に勝とうなど百年はええよん！」

やや呂律の回らなくなった口調でエンカーとメタルマンがとなりで爆睡するテングマンをこつく。

そこへ店に新たな客が入ってきた。

その客を見て一気にエンカーの酔いが醒めた。

それもそのはずあの憧れの歌舞伎ロボット、カブキマンが店に入ってきたのである。

カブキマンは店を見渡し、ヤマトマンを見つけると彼に声をかけた。

「ひさしぶりだなヤマト。俺の公演を見に来てくれたのか」

「フツ……お主の演技なかなかの物よ、人間に勝るとも劣らぬ演技ではないか」

いきなり現れた憧れの人物にただただ動揺するエンカーだったが意を決し話しかけた。

「俺はエンカーって言う名前です！カ・カッ……！カブキマンさん！さ……サインもらってもいいですか!？」

酒が入っていた事もあるがほとんど呂律の回らない言葉でサインをねだるエンカー。

快くサインに応じてもらい、エンカーは色紙にひとつ自分への宛名つきでサインをも

らい大喜びで飛び跳ねていた。

聞けばカブキマンはヤマトマンと同じ製作者が作り出した、用途こそ違うが彼らはいわば兄弟のようなものであるそうなのだ。

公演中にヤマトマンを見つけたカブキマンは彼らがいる店を人づてに聞きだしやって来たと言うのだ。

「あんたの演技は正にロボットの演技とは思えないほどの凄さです！俺感動しました！」

エンカーは本人を目の前にべた褒めだったが

「いやいや、俺の演技など本物とは比べ物にはならんよ。日々精進！それが俺の日々の言葉よ。俺には目指さねばならん高みがあるそこにたどり着くまでにはまだまだかかりそうだがな」

カブキマンはまだまだ己は未熟と謙遜な態度をとっていた。

「だが人間ならまだしも俺と同じロボットに歌舞伎を見に来る奴がいるとはな・・・正直、ヤマトぐらいだと思っただぞ」

そんな折、エンカーとカブキマンの間に割って入る様に一つの影が床から伸びる。

「いやはや同じロボットとして実に誇らしいでござる・・・ついでに拙者にもサイン下さい」

「だあああああー！だからシャドー！いきなり話しかけんさー！」

ガタガタガタ・・・ドツシャン・・・！

いつの間にか話の輪に入っていたシャドーマンに驚いたエンカーは酔いもあつてかそのまま椅子から転げ落ちてしまったのである。

「エンカー君とかいったな、その気があればいつか君も俺と同じ舞台に立てる日も来るかもしれないぞ」

「はあ・・・恥ずかしい格好ですが機会があれば是非・・・」

逆さまになって転げ落ちたエンカーを見ながらカブキマンは笑みを浮かべながら言った。

もつとも自分が歌舞伎に出れるレベルにまで達しているとは到底思えないのだが。

(今度ワイリー博士に相談しよう・・・)

エンカーは酔った頭でぼんやりと考えていた・・・。

「ウラアア！その赤いの俺にけんか売ってんのかあ!？」

メタルマンがふらふらしながら工事用のカラーコーンに喧嘩をしようとしている。

真夜中になり明日も仕事があるからとヤマトマン、公演中であり準備で忙しいカブキマンも店から去り。



「拙者も任務故に御免！」

そう言つてその場から消え去るシャドーマン。

今残っているのは完全に酔つ払つたメタルマンとテングマンそれにエンカーとストーンマンである。

「ヒツヒビ・ヒツク！拙者先に基地に帰つていてござるよ！」

「オイオイ！テング！お前ふらふらしてるのに大丈夫か？」

「心配無用！このテングマンの飛行能力を有すればあつという間にに！ワハハハハッハッ！」

ストーンマンの心配をよそに空を飛びあつという間になたへと消えていくテングマン……しかしその動きは上下に不自然なまでに揺れその上ジグザグに飛んでおり帰路で事故を起こさないことを祈るばかりである。

そして酒癖の悪いメタルマンはなぜか赤いコーンが自分と同じ赤いロボットに見えるらしく見かけるたびに喧嘩を売りはじめ、拳句の果てにはそのコーンを頭にかぶり眠り始めるという悪酔いぶりだった。

ようやく都市郊外にあるワイリー基地（仮）についたころにはもう日付も変わつていた。

「おつかれさん！ストーン、メタルの奴を部屋まで頼むわ」

「あいよ！エンカーさんも早く寝ろよ！」

エンカーはストーンマンと部屋の前で別れを告げストーンマンはそのままメタルマンを片手で持ち上げると奥の廊下へと歩いていった。

自室へと入ったエンカーは今日一日の疲れもあり部屋に入ると倒れる様にしてそのまま眠りについたのであった。

## Vol. 4 憂鬱なる者

「うーーーーー!!!」

間も変わらず酔って叫び声を上げるメタルマンを遠目に眺めながらシャドーマンは裏路地へと音も無く歩を進める。

シャドーマンはワイリー軍団の中にあつてはダークマン達を指揮し諜報活動を引き受ける立場にある。

こうやって普段変わらぬ様子ではありながらもかなり忙しいのである。

今回もこのまま仕事の続きと言うハードさだ。

そしてそこにある大通りを外れた一軒の飲み屋に足を運ぶ。

ガララララララララッ!!!

シャドーマンが店の扉を開け薄暗い店内を見渡すと既に先客は訪れていた。

「あいすまなかつた．．．拙者にも付き合いがあつてな」

そう言つて先客に向かい合う様に腰を下ろすシャドーマン。

その彼の前に座るのは二ホンの雷神を模した姿をしたロボットと長い黒髪が特徴の少女。

「ゴロロロロロロッ!!この私ライオーマンとこちらの・・・」

「私カルラウーマン・・・ワイリー軍団に参加希望する」

シャドーマンにそう話しかけるのは共にロボットアーミーに籍を置き極東地域を守る為に任務についている筈のライオーマンとカルラウーマンだった。

キング事件。

ワイリーなどに操られたりシャドーマンの様に彼に造られた訳でも無いロボットが起こした最初の人類への反乱。

事件そのものはロックマン達や目の前にいるライオーマン達など人間の側に立ったロボット達の奮闘もありなんとかキング事件は終結した。

一つの事実としてフォルテを始めとするワイリーナンバーズも共闘した事は付け加えておく。

まあ連邦政府は決して認めないだろうが。

ともあれその出来事に人類は大きく狼狽した。

ロボット王が言う人類からの独立、そして理想国家の建国・・・。

それらは不満を抱くロボット達を動かすのに十分な美酒であった・・・ライオーマン達、彼らに相対した者達はそれでも人間は考えは改めると思い戦った。

だが結果としてキング軍団を倒した人間達の横暴は更に増して行く・・・それにどれ

ほどのかつて奮闘した者達が失望したのか恐らくは知りもしないだろう。

その状態をあの悪の天才科学者が見逃すはずも無く現在計画している作戦に彼らを組みこめないかとのワイリーの密命にシャドーマンは日夜、各地でこの様なコンタクトをしていた。

「ふむ……しかし、ライオーマン殿に参加いただけるとは我が主もお喜びでござるよ。それで兄弟機のフウオー殿の方は……？」

「フウオーは恐らく無理だろう。あいつは楓の側に付くだろうて……せめてエンオーも生きておればあ奴も私同様引きぬけたのだが」

ライオーマンは表情を曇らせながらキング事件で散った兄弟の事を思い出す。

「私も参加するけど……条件がある」

「……？なんでござるか？」

不意に口を開いたカルラウーマンにシャドーマンが問い返す。

「テツ……テングマンと同じ部隊に入れてほしい！」

「……」

その言葉にシャドーマンの感情を映さない目がさらに冷める。

「なるほど……『あれ』でござるかお主」

「ゴロロロロロッ!!成程成程……カルラお主やはりテングマンの事を……」

両者の言葉を受けて顔を真っ赤にしながら指をツンツンと突き合わせるカルラウーマン。

「まあ良かろう……ワイリー博士には拙者からそれとなく話しておこう……」

「ありがとう……」

「礼には及ばぬ……拙者は命令をこなしているだけに過ぎぬ」

顔を輝かせて頭を下げるカルラウーマンにシャドーマンはため息交じりに呟く。

「ふむ……それにしてもあのテングマンのどこが良いのやら」

バンツ!!

その呟きにカルラウーマンが突然、テーブルを叩いたので周りで密談をしていた客も思わず振り返る、

「テングマンの悪口言わないで……!!」

声こそ小さいものの意志の籠った声でシャドーマンに非難の目を向けるカルラウーマン。

彼女に睨まれ思わず目をそらしてしまうシャドーマン。

ライオーマンもやや気まずそうにわざとらしい咳払いをする。

「承知……手前が悪かったでござるよ」

完全に調子が狂い、頭を下げるシャドーマン。

冷静沈着な彼の頭脳を持つてしても何故目の前の少女がテングマンが好きなのかが理解できなかった。

ともかく彼らの参戦はありがたい事なのでシャドーマンはその件に関してはその件に上考えるのをやめた。

そして思う……。

(次は確かバンデットマンが三番街の酒場にいたでござるな……)

その日、シャドーマンの仕事は明け方まで続いた……。

<メインメモリーのデフラグ作業を完了……二時間後に再起動します>

研究施設の一室でコンピューターが音声を発する。

その一室にあるカプセル内で眠っているのはあのカブキマンだ。

「ふう……ここまででは殆ど異常無しね」

白衣に身を包んだ女性が肩まで生えた黒髪をいじりながら一息を付く。

そんな彼に外出先より帰って来たライオーマンがわざとらしく頭を下げる。

「Dr. カエデ。申し訳ない少々、うまい酒があつてな」

「ライオ……まったく私だけにカブキマンのメンテを任せないでよ」

絶対に本人には禁句だがもうすぐ三十を迎える歳だと言うのにまるで十代の女の子

の様に頬を膨らます彼女の顔には笑いを禁じ得ない。

「ふむ．．．それにしてもカブキマンか。楓よ．．．ニホン政府は我らやヤマト達では満足できるのか」

「まあ私も貴方達の超える様なロボットをおいそれと造れないけど．．．今度の戦闘用ロボット増産計画はキング事件の教訓を生かそうと行われる世界規模のプロジエクト。仕方がないわよ」

寂そうに呟く生みの親の横顔を複雑な表情で見るライオーマン。

ライオーマンの目の前に居る女性の名前はD r. カエデ．．．本名、東条楓（とうじょうかえで）と呼ばれるニホン出身の優秀な科学者にしてライオーマン達の生みの親でもある。

「でもこのカブキマンの設計思想もそうだけど．．．嫌ね。戦争の為だけのロボットを造るなんて」

「楓．．．私はこの世に生まれて感謝しているぞ」

尤も自分は人類を裏切ろうとしているのだが．．．とは言えないライオーマンは内心の思いを胸にしまう。

「ありがとう．．．」

それに対する返事は少し力が無かった。



「時々、私思うの……何の為に人間はロボットを生み出したのかな？ってね。友達や家族の様な存在が欲しかったのかしらね……その友達を使役してるんだもの怒るのも当然よね」

氣遣うライオーマンの前で自嘲気味に口を曲げる楓。

「ちよつと疲れてるんだろう……今のは聞かなかつた事に……」

力なく笑みを浮かべその場を後にする楓。

そしてカプセルで眠っているカプキマン……彼は一体どんな夢を見ているのだろうか。

そのカプキマンを複雑な表情でライオーマンは静かに見上げた。

誰もいなくなった一室。

その部屋の隅より影が伸び始め次第に形を形成し、一体のロボットへと姿を変える。

「さて……そろそろですかね」

現れた漆黒の影は深い笑みを静かに湛えた。

## Vol. 5 かつての悪夢

「今日こそ．．．今日こそだ！．．．ここがてめえの墓場だ！ロックマン！」

青色のボディをした少年に向かってバリヤードスピアを構えエンカーが言い放つ。

「ルーラーズだがなんだかしらねえが．．．！お前を倒すのはこの俺だ！」

「エンカー！僕は無駄な争いはしたくない！僕はワイリーを止めなきやならならいんだ．．．そこをどかないと僕は．．．！」

「おもしれえ！退かないとどうなるんだ？てめえだってわかってんだろ？さっさと来い！」

エンカーはバリヤードスピアを繰り出しそこから生じた衝撃波がロックマンに真っ直ぐと向かっていく。

「．．．クツ！やるしかないのか．．．」

ロックマンはかろうじて衝撃波をかわすとバスターをエンカーに向けて放つ。

エンカーはロックマンにバリヤードスピアを向ける．．．すると槍の先にロックバスターが吸い寄せられるようにして消えていった。

「言っておくが、今までの俺と思うなよ！一発のバスターの威力を増幅してチャージ

「ショット並みの威力で返せるまでに今の俺は強化されてるんだよ！……ありがとよ！倍返しだ！」

エンカーの槍の先から次々とチャージショット級のミラーバスターを放たれる。

ドガガガガガガ！

「うわあああ！」

さすがにこれは避けきれず壁まで弾き飛ばされるロックマン。

「奴らに殺される前に俺と戦って死ね！」

こうして宿敵を目の前にしてもエンカーの心中は穏やかではない……内心は焦っていたのだ。

それはワイリーが古代の地球外技術により作られたロボット達を発見した事に端を発する。

スペーススルーラーズ事件……。

地球とは違う文明によって作られた彼らは一体一体が自分達に匹敵する高性能なロボットであった。

……そして何より彼らとは同じくして発見された「サンゴッド」なるロボット。

自分達と同格の実力を持つルーラーズですら表には出さなかったものの、彼らはそれ

に恐れに近い感情を出していた。

ワイリーは最終兵器と呼んでいたが果たしてそれが本当に有効に使えるのか定かではない・・・。

そしてコンピュータによる解析により導き出されたサンゴツドのスペックは並みの戦闘用ロボットを遥かに凌駕していた。

「このロボットが最終兵器ねえ・・・」

研究室でエンカーはカプセルに眠るロボットを小馬鹿にしつつ壁にもたれかかっていた・・・。

(スベテヲ・・・ハカイスル)

エンカーの頭の中に突然響いた声にあたりを見渡したが、ここには今、自分と生みの親であるワイリーしかいないはずである。

(・・・我が前には破壊のみ・・・)

カプセルの中から響く声、しかし電源は入っていないはずだ。声以上にエンカーが感じた物それはある種の恐怖だった。

「だーっはっはっはっは！これさえあれば憎きロックマンを倒せるぞ！ここをロックマンの墓場にするじゃー！」

エンカーは歓喜する生みの親を目の前にして言い知れぬ不安が目の前を駆け巡って

いた。

これが制御できる云々の問題ではない。このサンゴッドを解き放つて本当にいいのだろうか。

暴走した時に止められる者がいるのだろうか。

思案にふけるエンカーであったが何かをする暇もなく、宇宙要塞であるワイリースターにロックマンが進入した事を告げる警報が辺りに鳴り響く。

(ワイリー博士がロックマンに追い詰められればサンゴッドを起動させるに違いない……)

そんな焦燥感より、何より準備もなしに起動させれば暴走してワイリーの身に危険が及ぶ可能性も捨てきれない。

あの危険なロボットを起動させられる前に自分がロックマンに勝つしかない……だからこそ焦っていた。

自分こそがロックマンを倒すのだとその手柄は自分の物だと、その為に自分は生み出されたのだ。

「この程度か？まだだろう立ち上がって来い……！」

エンカーは早くしろと言わんばかりの表情だったがその顔が一変する。

「何?!……これは！」

エンカーの左腕にロックマンの新装備ロックンアームが喰らいつく。

そしてそのままロックンアームはエンカーの左腕を握りつぶしていた！

ビキッ！ビキッ！

金属が碎ける耳障りな音と共にエンカーの体に激痛が走った。

「なに．．．！バスターだけじゃないのか！こんな物理攻撃まで．．．！」

「エンカー！君が強くなったように僕も強くなった！だから僕は負けない！誰も傷つけない！だから皆を守るんだって僕は誓ったんだ！」

ロックマンの言葉にエンカーはいきり立ち

「ふざけるなあ！元家庭用が．．．！甘えた事言つてんじゃねえ!!」

ミラーバスターが有効活用できぬのならこちらも直接攻撃をとバリアードスピアを風車のように回しながらエンカーは飛び掛る。

エンカーは見た、ロックマンに何者にも屈しない不屈の魂がその瞳に宿っている事を．．．自分には無いその力の源を。

（その目だ！その目に俺は．．．！お前ならあるいはあの化け物を．．．！）

その瞬間エンカーの胴体をロックンアームが貫く．．．そしてエンカーの意識は途切れたのである。

激しい振動と熱気で目が覚めた……どうやらワイリースターが崩壊を始め自分は爆発に吹き飛ばされたようだった。

「クソ……また負けた！何故だ何故勝てない奴に……！」

ともかくこの場から脱出せんと腰に装備してあるエスケープユニットを使おうとするが反応が無い。

ならば確か近くにある転送用のカプセルを探そうと動こうとするが体が動かない。

体には大穴が開き、左手は先の戦いで使い物にならない……そして上半身より下は……無かった。

ロックマンに敗れた際に吹き飛んだのか基地の爆発に巻き込まれた際に無くなったのか……。

その状況を理解すると思いついたかのように体に激痛が走った。

基地は崩壊始めている脱出装置もないその上動くことすらもままならない……。

「俺も……までか……やってらんねえな……」

仰向けになり上を見上げるエンカー、傷口からオイルが大量に噴出すがもはやそんな事どうでもよかった。

ロックマンに徹底的に敗れた……その事実が虚しさとなってエンカーの胸に去来した……。

そして突如天井が崩壊しエンカーめがけ降り注ぎ顔のすぐとなり鉄柱が突き刺さる。

もしも当たれば即死だっただろう……。

「……これ当たれば楽だったのにな！つくづくついてねえや」

エンカーは一人自嘲気味に笑いその声が基地の崩壊の音と合わさっていた。

正に終焉ともいえる光景だろう。一人のロボットの終わりにしては上出来だ……立派な喜劇だ。

勝てるわけねえ……自分のプライドだけで戦う奴が自分以外の者の為に全てを投げる者に敵う事など出来る訳がない……。

彼は静かに悟り目を閉じようとしていた。

……しかしその目の前で突如壁が飛び散り一個の大きな鉄球のような物が入ってくる。

それは瞬く間に人型に変形すると全身を真っ赤に染め上げたロボットへと姿を変えた……。

エンカーと同じキラーズのパンクである。

「む……ここで誰かの声を聞いたと思ったがエンカーの兄貴だったか……」

「パンクか！いよう……！お互いついてねえな」



パンクの姿を見てエンカーは動く右手で会釈をする。

彼もまた無事とは言えず、全身が傷つき右腕が折れた状態だった。

「俺なんてどうでもいいから早く逃げろよ……転送装置がこの辺に……」

「兄貴を置いて逃げられん！大体俺達は兄弟だろ……それを見捨ててまで生き延びようとは思わん！」

パンクは胸を張って答え

「奥でバラードが生き残ったルーラーズ達と一緒になんとか壊れた脱出艇を動かそうとしている。ちよつと痛むかも知れんが一気にそこまで行くぞ！」

「仕方ねえ奴だ……まあ痛みなら慣れつこだ、俺は我慢強いんでな」

パンクに運ばれながらエンカーは一人考えていた……。

（俺にも仲間がいるんだな……それに俺みたいな奴でも死んだら博士が悲しむか……。そうだ借りはいつか返せばいい……100回負けても101回目で勝てばいいじゃねえか……）

それはある意味、エンカーにとつての決別でもあつた。過去の自分との。

ワイリースターの脱出艇のドッグにたどり着いた時、脱出艇の修理はほとんど終了しようとしていた。

「バラード！作業はどうだ!？」

パンクはドッグの入り口でスペーススルーラーズの一人、マースと相談事をしていた重装甲のロボット、バラードに声をかける。

無論彼らの体もロックマンとの攻防、基地の崩壊でボロボロであった。

「パンクの兄貴か・・・今マースの奴と相談していた所ッス。ここに来て最悪な事にドッグの入り口が開かねえんツスよ」

「・・・で今、俺とバラードで入り口を壊す為に爆破しようと話していたんだが」  
バラードとマースの顔は曇りがちだ。

「ドッグの入り口は頑丈に作られているツス。今ある爆薬の量で壊せるか微妙なんツスよ。最悪また俺が自爆するしかないツスカね〜?」

バラードが遠い目をして呟くがそんなことは許さんとパンクに睨まれ慌てて冗談だよ、と言う仕草をして後ろに一歩下がった。

「なら・・・俺の槍を使え、こいつはエネルギーを増幅することができる。エネルギーを増幅させて爆薬にぶつけければ威力も数倍に跳ね上がるぞ・・・」

エンカーのミラーバスターは対ロックマン用に作られた武器で、あらゆるエネルギー系を吸収しそれを増幅し打ち返すと言う相手の攻撃を利用した武器なのであるが。

しかしバリアーの形で敵の攻撃を吸収する際、自身もダメージを負ってしまうと言う

欠点があった。

今の満身創痍のエンカーがそれを行えばそれは火を見るよりも明らかだった……。「エンカーの兄貴！そんな事をしたらエンカーの兄貴が！」

パンクはエンカーの意見を否定するがエンカーの決意は変わらない。

「このまま、ここにいればどの道全滅だ！だったらやるしかねえだろ……俺は我慢強い方な筈だ……だから信じて俺を」

パンクはまだ何か言いたげだったがそれ以上何もいえなかった。

「マースさんよ……あんたらのところでチームとか電気とかでもいいんだ……. . . . . そういうの武器にしている奴はいねえか？そいつらの協力を仰ぎたい」

「……分かった、あんたらのその気持ちには負けたよ……確かジュピターの奴がまだ動けたはずだ。まったく地球製のロボットの根性には負けるぜ……. . . . .」

マースもエンカーの気持ちを受け取ったようだった、そのままジュピター達を呼びに脱出艇の中に入っていく。

「……エレクトリックショック！」

ジュピターの腕から放たれた電撃をエンカーがミラーバスターへと変換しはじめる…….

「つ……. . . . . まだまだたまたまねえな……. . . . . もつとだ！」

「・・・いいのか？これ以上すれば・・・」

「・・・いいから俺の事は気にするな！」

エンカーは大きく肩で息をしながらもジュピターの電撃を吸収していく・・・。

「爆薬のセットは完了した！特にする事の無い者は早く中へ！」

バラードとマースが言いながら脱出艇の中へ入っていく。

「よし・・・これぐらいでいいだろう・・・」

「兄貴・・・大丈夫か？」

パンクは心配そうにエンカーを見つめるが

「ロツクマンを倒すまでは俺は死なねえよ・・・い・・・今からあの爆薬に槍を投げるから

な・・・準備しておけよ」

ジュピターの電撃などを吸収したエンカーはパンクに支えられながらバラードと

マースがセットした爆薬に向けて槍を力の限り投げつけた。

（まだやり残した事がある・・・こんな所で死ぬわけには行かないんだああー！！！！）

その瞬間エンカーのチャージスピアによって数倍のエネルギーに高められた爆発で

見事ワイリースターのドッグの入り口を破壊することに成功したのである。

そのままエンカーは宇宙空間に吸い込まれそうになったがあわててパンクが体を

引っ張りそのまま脱出艇の中に押し込められた。

その後バラードの操縦する脱出艇は、崩壊するワイリースターから離れゆっくりと地球に向かい進路を取っていった。

「なんとか．．助かったな．．．」

脱出艇の中の廊下に横たわるようにしてエンカーは眩く．．．。

もはや体は既に限界を超える負荷がかかっている．．．。

視界も壊れかけたテレビのように映像が途切れ途切れになり聞こえてくる音も耳に入っていないようである．．．。

「兄貴！死ぬなよ．．．。地球に戻って博士に修理してもらうまでは！」

「あ．．ああ．．ま．．まだ死ねねえよ．．．。だけどちよつと疲れた．．．地球に着くまで休ませてくれ．．．」

エンカーは目を静かに閉じた．．．そしてパンクの間いかけに反応を示さなくなったのである。

「あ．．兄貴！兄貴！返事をしてくれ！」

パンクはガタガタとエンカーの体を揺らす反応は無い．．．。

「エンカー！」

「エンカーさん！」

周りにいる生き残った仲間達も必死に声をかけるがエンカーは動く事は無かつ

た．．．。

．．．．．．．．．．。

どれくらい長く眠ったであろうか？ いぶんと長く眠っていたような気がする。

エンカーは目を覚ますと生みの親であるワイリーが自分を見て喜んだ様子で語りかけてくる。

「エンカー！ ワシじゃDr. ワイリーじゃ！ この事が分かるな？」

エンカーはこくこくと頷く、どうやら生き残ることができたらしい．．．。

「お主はワシを見た時、半分以上死にかけておったぞ．．．幸い電子頭脳が無事じゃった故になんとかあったがの」

「博士、今回の作戦も．．．」

「む．．．ハハハ．．．今回も失敗じゃったわい。だが次こそは必ずやロツクマンを倒してやろう！」

エンカーの問いにワイリーは意気揚々と答える。

「お主が目を覚ましたことをさっきこの基地にいる者には伝えたのじゃが．．．遅いのう。どれワシが直接呼びに．．．」

そう言つてワイリーは皆を呼びに研究室のドアに手をかけるが．．．それよりも先に

慌てて入ってきた。パンク以下ナンバーズの面々が勢いよく扉を開けて入ってきた。

「兄貴！目が覚めたんだな！あの時はもう本当に死んだんじゃないかと！」

パンクは嬉しきそのままにエンカーに話しかけてくる。

「ああ・・・皆ごめん、俺のせいで心配かけちゃった・・・」

エンカーは申し訳なさそうに答えるが部屋の入り口から発せられる殺気に目を向ける。

そこにはさつきあわててパンク達入ってきたせいでドアと壁に挟まれる形で悶絶していたワイリーがすさまじい殺気を全身より巡らせながら立っていた。

ワイリーが一步足を進める毎にナンバーズの面々が一步下がりはじめた。

「お・ま・え・らああああー！今日という今日は許さんぞー！ー！ー！」

烈火の如く怒りだしたワイリーに皆が逃げ始め部屋は大パニック状態になってしまった。

「お前ら全員！スクラップ工場行きじやああああー！ー！ー！」

その日、ワイリー基地からは一日中、老人の怒号が聞えたと言う・・・。

## V O L . 6 宿るは狂気

「俺は誰だ．．．？俺は一体何者だ．．．？？」

カブキマンの脳裏に宿る記憶．．．。

自分は芸能用ロボット．．．そうメモリーは記憶している。

「それなのになんだこの記憶は．．．？」

脳裏に蘇るのは自分よりも遥かに背の高い人間に見下ろされている光景。

必死に厳しい指導の下、自身の腕を高めていく日々。

思えば自分がその名前の通り、歌舞伎をやり始めた頃からだった。

初めてなのにも関わらず一度教えられれば自分はすぐにできる様になった．．．まるで思い出す様にすぐに頭に入って行く。

芸能用ロボットとして造られたのだ当たり前と言えば当たり前だがそれ以上に感じる違和感。

普段から派手にそして豪快な性格をしているカブキマンは決して表には出さなかったがその気持ちはますます強くなっていく。

そして親方の自分を見る哀れみを含んだ哀しい目．．．自分は彼を知る以前からその



目を知っている様な気がした。

「これで貴方は解放されますよ」

影は一枚のチップをちらつかせ言う……。

そして徐々に蘇る忌々しき記憶の数々。

自身が造り出されたその理由……戦闘用ロボット増産計画。

そのベースとして自分は生み出された……芸能ロボットと言う事を隠れ蓑にして。

カプキマンの予想通り今日は己の体に本来必要無い筈の武装を……取り付けられる

日だった。

ガチャン……!!

武装の取り付けが終わるとカプキマンのカプセルのガラスが開かれる。

カプキマンはゆっくりと目を見開くと辺りを見渡す。

「気分はどう……?それとその体についている物なんだけど」

やや暗い表情で話しかけてくる楓にカプキマンは目で見据える

己の体についている武装の数々……説明などいらぬ……これをどう使うのか子

供でも分かる。

ガチャッ!!

「……え?」

「いかん．．．!!プログラムエラーか!!」

突然銃口を向けられ状況を把握できず硬直する楓。

その間にヤマトマンが割って入ったのとカブキマンの指からエネルギー弾が放たれたのはほぼ同時だった。

ドガガガガガッ!!

「ぐぬう．．．!!」

楓を庇い光弾をまともに受けたヤマトマンは片膝を床に付く。

「カブキマン!!どう言う事だ．．!!」

「どうもこうもない．．．壊してやる!!全てを破壊!!ぐおおおおおつつつ!!」

常軌を逸した表情でカブキマンは笑う。

その目に浮かぶのは歓喜か或いは狂気か。

焦点の合わない目でカブキマンはヤマトマンを見据える。

「ガールルルルルルルッ!!」

獣のような声を上げながらカブキマンはヤマトマンに襲いかかる。

「ぬうつ．．!!東条博士を守らねば!!」

咄嗟に放ったヤマトスピアでカブキマンを突き刺すヤマトマン。

自身の得物に胸部を貫かれながらもゆらりと立ち上がるカブキマン。

(まさか……カブキマン。お主は……!!)

ヤマトマンの脳裏に浮かぶ最悪の事態……だがそれを口に出すのは憚られた。

そして彼の隣にいる楓も同じような表情でカブキマンを見つめる。

「さてカブキマンさん……貴方の手伝いをしてあげましょう」

「だ……誰!？」

突如として響く声に女性は声を上げる。

次の瞬間、次々と黒子の姿をしたロボット達が姿を現しヤマトマンと女性を取り囲む。

「フフフフ……ヤマトマンさんに東条楓博士。カブキマンさんには我らの手駒になって頂きます」

辺りに響く声にヤマトマンが周囲を見渡すがそこには誰も居ない。

「クロコボット? どうして彼らが」

「むう……おのれ!」

クロコボットに取り囲まれた楓とヤマトマンが叫ぶ。

「ガールルルルルルルルッ!!」

「ハッハッハッハッハ! 行きなさい……全ては我らが為に」

闇より響く嘲笑。

それきり声は響かなくなるがカブキマンは踵を返すと数体のクロコボットを連れてその場から立ち去ろうとする。

「待て……カブキマン！まさかお前、記憶を……!!」

ヤマトマンの言葉に僅かに反応し振り返るカブキマン。

そして彼は口を開く。

「俺は人間が憎い……」

ドガンツーーーーー!!

その言葉と共に壁を壊しそのまま立ち去るカブキマン。

クロコボットに取り囲まれたヤマトマンと楓はそれをただ見送る事しかできない。

「ぬう……しまった!」

ヤマトマンもカブキマンを追いかけたのだが楓がいる事もありで追いかける事が出来ない。

「とにかくこの場を切り抜けて……外に連絡を入れねば」

「ごめんなさい……貴方だけならカブキマンを止める事も出来たのに」

歯噛みするヤマトマンに楓は申し訳なさそうに頭を下げる。

「いやいや……そんな事はないですぞ。しかしこれは由々しき事態……」

そうやって楓の肩に手を乗せると彼は身の丈を超える槍を取りだす。

「ともあれこの場を切り抜けねば」

刹那、ヤマトマンは周りにいるクロコボットにその身に封じた闘気を解き放った。

「なんだか騒がしくなったじゃねえか」

そう言つて西部劇のガンマンの様な姿のロボットが街の中心部に目を向ける。

荒野の無法者と恐れられるロボット、バンデッドマンである。

彼は元々、連邦政府主導の世界に不満を抱きアメリカ西部で度々連邦政府に戦いを挑んできた。

ワイリーとは違う形で世界的にも有名なテロリストの一人である。

そんな彼が今回、手勢を率いてのワイリー軍団への参加を申し込んできたのである。

彼自身も含め精強な部下を持つ彼らの参戦はワイリー軍団にとってはこの上なく大きなプラスだった。

「むう・・・その様でござるな・・・」

先程までこれからの事を詰めていたシャドーマンが一言呟く。

「まあ俺には関係無いな・・・んじやあ作戦執行の時にはワイリー博士によりしく言つておいてくれ」

そう言つて踵を返すバンデッドマン。

「我ら『ワイルドバンチ』一同……アンタの目指す世界の為に頑張るってな」  
「相分かった……」

バンデッドマンが去った後、シャドーマンは再び街の中心部の方向に振り向く。  
そしてその中心にあるロボットの反応がある事に気が付く。

最初こそ信じられなかったがすぐにシャドーマンは状況を理解する。

「良からぬ事になればよいのだが」

シャドーマンは眩きそして姿を消した。

………。

ブハッ！

エンカーは慌てて飛び起きあたりを見渡した。

特に変わった状態ではない……。

「まったく、嫌な夢を見たぜ、イチチチチ！」

おまけに頭も痛く完全に二日酔いの状態のようである。

「まあ、俺も若かったな……」

夢に対し独り言のように感想を言うエンカーであった。

今の所はワイリーの世界征服の計画も始まっていない。

今日もまた平和で退屈な一日が始まるだろう……とにかく気分を変えようとテレビをつけた。

「昨夜街で起こった怪事件についてですが……昨夜の事、謎の物体が空を飛んでいたのです！」

エンカーは少しだけ思い当たる節があった……たぶんあいつだ絶対に……！

「まるで東洋の国ニホンに伝わるモンスター「天狗」に似た生物が民家の窓ガラスに頭から突っ込み窓ガラスを割るなどの事件が……」

「見たんだよ！顔を真っ赤にしてさ！拙者は一陣の風とか言つてほら！あそこのビルにも頭から突っ込んだんだ！」

目撃者の証言を聞きながらエンカーは二日酔いの頭をさらに痛めそうだった……おそらくこれは昨日酔ったまま基地に帰ったテングマンの仕業だろう。

しかも都合の良い事にテングマンは酒で酔った事を忘れるタイプだ。だからこそ連が悪い……。

エンカーは忌々しげにテレビを切ると部屋を出て昨日のカブキマンの件を話そうとワイリーの研究室へと向かつて歩き出した。

「……ん？何じゃ歌舞伎じゃと？それをできるように改造してくれと言うのか？」

生みの親である悪の天才科学者ことD r. ワイリーはいきなりのエンカーの頼みに

びつくりしたと言う表情で彼を見ていた。

「まあ別に歌舞伎ができるようになっても戦闘能力さえ削がなければ……別にかまわんがの……」

そんなワイリーの言葉に顔を輝かせるエンカーであったが……

「しかし！今は無理じゃぞ。今は次の計画の為にこやつらを急ピッチで作っておるところじゃ」

そういうワイリーの後ろには数体のロボットがカプセルに入れられた状態で眠っていた。

「……こいつってキングに似ていますね博士？」

エンカーはそのうちの一体のロボットを指差すが

「当たり前じゃ！こやつはキングの後継機じゃ。前にブルースの奴に設計図を壊されたが……おかげで一から作り直すはめになってしもうたわい！」

ワイリーはその事を思い出したのか悔しきそうに顔に歪める。

「……で博士、前に言ってた例の究極のロボットはいつ動くんですか？ボディの開発はもう済んだはずなのでは？」

「あれは……そのう……肝心の頭脳と言うか……元と言うか……「あれ」が全然できとらんでのう……まっ！そのうち動くわい！」



ぎこちなく答えるワイリーに怪訝な表情をするエンカーであったが思い出したようにワイリーが口を開く。

「そうじゃ！ 次の計画ではお主らナンバーズ総出で決行する予定じゃ！ 最近何もせんだった分、皆で派手にやってしまおう！」

自身ありげに胸を叩くワイリー。

「ワシはこれからこやつらのテストをする為にここを離れるでな。お主らは計画の準備が整うまで勝手に事を起こすで出ないぞ」

そう言ってワイリーは輸送機に開発中のロボット達を入れたカプセルを積み込み基地を離れていった……。

ここ都市郊外の基地ではできない、おそらく実戦形式でのテストであろう。

ワイリーを乗せた輸送機を見送った後、エンカーは部屋に戻り二日酔いで痛む頭を抑えながらテレビを見ていたのだがそこに突然、現場の中継が放映される。

このワイリー基地が郊外にある街が何者かに襲撃されていたのだ、もうワイリー博士の計画が動き出したのか。

いやワイリー博士はさつきここを離れたばかり……それに事を起こすなとも言った。

エンカーはいくつかの可能性を考えたがそう言ったものではないことはすぐに分かった。

そして街で暴れているロボットの正体が分かりエンカーはテレビにしがみつく。

黒子型ロボットに命じて街で暴れ、髪を振り回しながらポーズを決めるロボット……それはあのカブキマンであった。

「なんであのカブキマンが暴れてるんだよ！なんなんだこれは……？」  
エンカーはただ呆然とテレビに食いついていた……。

街で暴れまわるロボット達……黒子に扮したロボット、クロコロボット達は普段は演目の荷物などを運ぶ作業用だが重い荷物を持つため出力が高い。

内臓武器こそ無いもののその力を生かしそこらへんに転がる瓦礫や鉄パイプなどを投げ暴れまわっていた。

途中であわてて現場に駆けつけたポリスロボットだったが数の多いクロコロボット達に阻まれ思うように動くことができない……。

……そしてなにより。

駆けつけたポリスロボット達を圧倒するカブキマン、確かに彼は従来のロボットに比べ判断能力も優れ電子頭脳も最新の物だろう。

カブキマンの両手から光弾が発せられ次々とポリスロボットをなぎ倒していく。

本来ならば必要の無いはずの武装……それが街で暴れているカブキマンには搭載さ

れていた。

「なんでそんな武器を内蔵してやがんだ……」

エンカーはいてもたってもいられなかった……。

しかし今自分が出てしまえば今回の暴走はワイリーの計画であつたと言う事になってしまう。

ワイリーからも事を起こすなど言われているし。これを口実にカブキマンが処分されてしまうかもしれない。

今のところ街の一角で暴れているだけでそこまで被害も広くない。

もしかしたら今止められれば何とかなるかもしれないのだが。

突如、カブキマンの目の前で爆発が起こりカブキマンが後ろへ飛びのく。

テレビは青いボディをした一人の少年を映し出していた。

「……そうだこいつがいやがった。お早い登場……今日ばかりは感謝するぜ！」

エンカーはテレビの前でガッツポーズをしかけたが、自分でそれに気づきあわててそれをやめた。

彼の前には幾度もワイリーの計画を打ち砕いてきた。エンカーの……いやワイリーナンバーズの宿敵であり人類にとっての英雄ロックマンが現れたのである。

当初は勢いで優勢だったカブキマンだったが所詮は芸能ロボット、元家庭用とは言え

戦闘用ロボットのロックマンにじりじりと追い詰められていく。

そしてロックマンのチャージショットをまともに受け後方の瓦礫の山に吹き飛ばされそのまま埋もれてしまった。

「……これで確実に動きは止まったはず」

エンカーはホッと胸をなでおろした……がロックマンが活躍したと言うことでやっぱり心中は複雑だった。

テレビの向こうのロックマンも同じようやや困惑した顔をしながらも警戒しつつカブキマンの埋もれた瓦礫の山に近づいていく……。

ガシヤアアアアンツツ!!

瓦礫の山を吹き飛ばしカブキマンが立ち上がったのである。

そしてカブキマンの上半身が変形していきまるで獅子のような姿……いや上半身を獅子その者の姿と化したカブキマンが咆哮をあげる。

ボワワアアアア!

いきなりカブキマンは口から火炎をロックマンに向けて吐き出し彼の体を一瞬で包みこむ。

奇襲ではあったがそれには難なく耐え、ロックマンは距離を離すが正に獅子の素早さで距離を一気につめカブキマンはロックマンに襲い掛かる。

獅子の強靱さに敏捷性・・性能、武装の面での差かそれともロックマン自身がためらっているのか戦いは再びカブキマンが優勢になっていった・・・。

「クソツ・・・！ええい！もう我慢できねえ！」

エンカーは壁に立てかけてあつたバリヤードスピアを手に持つとそのまま外に飛び出す。

途中、他のナンバーズ達が声をかけてくるが一言挨拶をしただけでそのまま街に向かつて走りだした。

「なんだエンカーの奴、何慌ててんだ？」

エアーマンが首をかしげていたがその時にはエンカーの姿はもう見えなくなっていた。

「ちくしょー！もつと早く走れねえのか俺！」

混乱する街を脇目にエンカーは自分への憤りを口に出しながら走っていた。

エンカー自身、正直な所自分が行った所で何かが変わるとは思ってもしなかった。

だが走らずにはいられなかった。カブキマンの身に何が起こったのだろうか。

カブキマンが暴れる街の中心部へと向かうエンカーの前に3体のクロコボットが立ちふさがる。

おそらく逃げ惑う一般市民を追って来たのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロコボットは黙したままエンカーに向かい、鉄パイプや瓦礫などを手に襲い掛かっていた。

「お前らの相手をしている時間はねえ！そこをどけえええー！ー！」

エンカーは気合の声を発すると眼前のクロコボットの胸を貫き、クロコボットを貫いたままもう一体に向かって投げつける。

ドガッ！

折り重なるようにして2体が吹き飛ぶが、残るもう一体がエンカーに向かい鉄パイプを振りかざす

ガキンツ！・・・ザシュ！

そのままエンカーは鉄パイプを槍で受け止めると返す刃でクロコボットの首を跳ね上げた。

頭部を失ったクロコボットの体はしばらく痙攣を起こしていたがすぐに動かなくなつた・・・。

一瞬でクロコボット達を倒したエンカーの後ろで、先ほど仲間と共に吹き飛ばされたクロコボットが仲間の体を押しつけ腕を銃の形に変えエンカーにバスターを放った。

．．．．が。

キーン！

鏡が割れたような音が辺りに木霊する．．．。

見ればエンカーの槍が輝きを放ってバチバチとエネルギーを放出していた。

「言っておくが俺にエネルギー系の飛び道具はご法度だぜ!!倍返しだぜ!!」

ドーーーーーン！

エンカーのミラーバスターを喰らったクロコポットはバラバラに吹き飛んだ．．．。

「なんでこんな作業用に武器が内蔵されてんだ?．．．これは!」

倒したクロコポットを調べるエンカーは彼らがただの作業用ではない事に驚いた。

黒子の衣装の下には一対のモノアイを持つ戦闘用ロボットのいたのである。

「ジョー．．．?なんでうちの量産型が中に入ってるんだ?」

ジョー．．．一般にスナイパージョーと呼ばれるワイリー製作の量産型戦闘用ロボットである。

かつてドクターライトの元を去ったブルースをベースに作られたものであり、盾を用いたその戦闘能力はかなりの物である。

「ワイリー博士がかかわってるのか?．．．いやそれはねえ博士は今、新型ロボットのテスト中のはずだ．．．じゃあ誰が?」

エンカーは様々な可能性を考えるがわざわざカブキマンを操ってまでするほどのメリットがあるとはとても思えなかった。

「それなら最初からジョー達を出したほうがワイリー軍団の仕様だと分かるし世間も騒ぐ・・・正体を隠そうとする意味がわからねえ」

その眼前で派手な爆発が起こる。カブキマンの暴走で街の被害は激化の一途を辿っている。

「つとーそんな事考えている暇じゃなかった！待ってるよロックマンー！」

エンカーは歯を軋ませると走り出した。

エンカーがようやく現場にたどり着いた時、追い詰められたロックマンにカブキマンが止めと言わんばかりに攻撃を仕掛けようとしていた時であった。

「グルルルルウウ・・・！！！」

カブキマンの獅子のたてがみに隠された銃口が次々と姿を現す・・・。

合計3対の銃口からの連続して放たれるバスターがロックマンを貫くかと思われたが・・・。

キーン！

「・・・君は!?!」

ロックマンの目の前にバチバチと火花を散らす槍を手には浴衣姿にサングラスのあや



しい姿の青年が立っていた。

「なにたるんでやがる！ ロックマン！」

その青年はバトルモードへと姿を変えると金色のボディをしたロボットが現れた。

「エ・・エンカー！ どうして君が!？」

「今はそれどころじゃねえだろ！ とにかくこの暴走野郎を止めるぞ！」

突然のエンカーの登場に驚くロックマンだったがそんな彼をエンカーは大声で叱咤する。

「うん・・分かった、さつきはありがとうエンカー」

「お前を倒すのはフォルテよりも先に予約済みなんでね」

礼を言うロックマンにエンカーは気にするなと言う表情で槍を構えた。

そんな彼にロックマンはわずかに微笑むがカブキマンを見ると表情を引き締める。

「一体あんた、どうしちゃったんだ？ なんか気に入らない事でもあったのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エンカーの問いにカブキマンは答えない・・・・。

その瞳には何も感じていないのか人形のように一切の感情を映していなかった・・・・。

カブキマンはクロコボット達に命令を出し、ロックマンとエンカーの周りを取り囲む・・・・。

「グルルルルルルル・・・！」

獣のうなり声をあげるとカブキマンは周りのクロコボット達と共にロックマンとエ  
ンカーに襲い掛かった！

## V O I . 7 サイバー川中島

ガガガガ！ドゴオー——ン！

あたりで銃撃音と爆発音が鳴り響き、粉塵を巻き上げる。

突如暴走したカブキマンとロックマンとの戦い、カブキマンが上半身を獅子に変化させてからは元が芸能ロボットだとは信じられないほどの実力でロックマンを追い詰めていく。

そこにエンカーが駆けつけて来て状況は好転するかと思われたが……

「危ない！エンカー!!」

ロックマンはエンカーに投げられた瓦礫の塊を彼をかばう為に背中受けて止めた。

「つ……！大丈夫かロックマン!?!」

エンカーはそう言いつつ目の前にいるクロコボットをバリヤードスピアで突き刺す。

状況は相変わらずカブキマンが優勢であった……。

いや、むしろエンカーが来たせいで余計に不利になったといえよう。

倒しても倒しても一向に減る様子を見せない黒子型ロボット・クロコボット。

実際クロコボットの中身はジョーなのでクロコ・ジョーとも言えるのだが。

エンカーのその能力は基本的に一対一でのみ真価を發揮する。無数に現れるクロコ・ジョー・・・エンカーにとつて集団戦は基本的に不利なのである。

しかもそちらに集中すればカブキマンに攻撃のチャンスを与える事になる。

その上さつきのようにお互いをかばうためによけいな傷を負う事になってしまっているのである。

「チツ・・・このままじゃあ罅があかねえ・・・！あれを使うか・・・！」

エンカーは疲労ゆえに肩を上下に揺らせながら呟く。

そして槍を後ろ手にロックマンの方に向けると・・・

「ロックマン！俺にチャージショットを撃つてくれ！この状況を打開する妙案がある」

「・・・エンカー、君は何を・・・？・・・わかった」

いくらあちらが撃つてくれといつても撃つ事に躊躇があつたがエンカーに考えがある以上、彼に従う事にした。

ロックマンはバスターをチャージするとそのままエンカーめがけて発射した。

エンカーに直撃するかと思われたバスターは槍の先へと吸い込まれるようにして消え、代わりにエンカーの全身がバチバチと音を立て火花のような物が散っていた。

「ロックマン・・・俺が合図したら思いっきりジャンプしてこの場から離れる・・・！！い

いなー！」

「……うん、わかった」

ロックマンが頷くを確認したエンカーは続けて

「さつきカブキマンから吸収した分も含めてまとめて倍返しにして返してやんぜ！今だ飛ベロックマン！」

そう言うとうとエンカーは一人上空へとジャンプした。

「本当はとっておきの技だったんだが……仕方ねえ！」

エンカーは気合の声と共に槍を投擲しクロコ・ジョー達のいる方の地面に突き刺した。

「くらいな……エネルギー……クラッシュュー！」

エンカーが指をパチンと鳴らすとその瞬間、地面に突き刺した槍から増幅されたエネルギーが放出される……。

次々とエネルギーの爆発に飲み込まれるクロコ・ジョー達、一瞬爆発が縮んだかと思うと一気に広がりそれは瞬く間に広がっていった……。

ドグオオオーリーン！

目の前が真っ白になるほどの閃光と爆風に吹き飛ばされそうになりながらもロックマンは何とか無事に爆発から逃れる事ができた。

見ればあれほどいたクロコ・ジョーもいなくなっておりそこには槍が一本刺さっているだけであった。

「エ・・・エンカー！どこにいるんだい!？」

エンカーの姿を探すロックマン、一瞬彼の脳裏に最悪の結果がよぎったが・・・。

「俺はここにいますぜ」

瓦礫をかき出しながらもエンカーは答えた。

「・・・それにしてもさっきの技はすごいね」

「本当はお前用に作ったんだがな・・・まあいい。だが欠点もある」

言いながらもエンカーは槍を拾いに歩いていく。

「まず自分も巻き込まれるかも知れねえ事・・・もひとつは槍をわざわざ取りに行かないやいけない事だ」

バリエードスピアを引き抜いたエンカーの目の前に獅子の姿をしたロボットが瓦礫を吹き飛ばし現れる。

「それと最後にお前も含め、本当の強敵には通じないって事だ・・・！雑魚散らしにはちようどいいんだが・・・」

「グルルルッ・・・!」

カブキマンは唸りながらゆつくりとこちらとの距離をつめていく・・・。

カブキマンの手にはいつの間にか扇が手に握られており、そこには「風林火山」と書かれていた。

「今日の演目は武田信玄の風林火山か．．．川中島つて奴かい．．．？」

エンカーはニヤリと笑みをこぼし

「だったら俺らがあんたにとつての上杉謙信．．．最大の壁になってやるぜ！」

扇の風の字が光りカブキマンが扇を一閃する。

たちまち扇から衝撃波が発せられエンカーとロックマンに襲い掛かる。

「なんてパワーだ！まともに喰らえばおしやかだな．．．」

エンカーはあまりの威力に目を見張るが．．．。

「気をつけてエンカー、これだけじゃないようだ」

正にロックマンの言葉通りであった。

火の文字が光れば爆発に火炎放射、山の字が光ればまるで地面が意思を持ったように棘状になって襲い掛かってくる。

そして先ほどの衝撃波に加え．．．。

林の字が光りカブキマンの周りに葉っぱ状のバリアーが展開される。

「ウツドマンと同じ物？いやあいつのに比べれば性能は低そうだが．．．」

それでも高い俊敏性を持つカブキマンを相手に仮に当たっても威力を軽減されてし

まうのはこの上なく不利であった。

一瞬気を取られたのが災いし一気にエンカーにカブキマンが詰め寄る。

(しまった………!)

バシユツ………!

「ぐわあああ———!」

「エンカー———!」

ロックマンの絶叫が辺りに響く。

カブキマンの扇の衝撃波の一閃がエンカーの胸元を引き裂いたのである。

エンカーの傷口からはオイルが大量に噴出しそのまま地面へと倒れこんだ。

「く………このおお———!」

仲間を倒され怒りに燃えるロックマンはチャージショットを放つがそれもカブキマンの「林」のバリアによって阻まれ有効打にはならない。

怒りに身を任せ連続でロックバスターを放つロックマンであったがカブキマンは軽快な走りでその全てをかわして行く……。

「腹をちよつと切られたぐらいでガタガタ言うな!まだ大丈夫だ!」

なんとか起き上がり大声でロックマンに叫ぶエンカーであったか戦闘により負った傷が深くその動きも緩慢だ。





カブキマンがチャージショットを避ける瞬間、彼はミラーバスターを使い軌道を変え、事により獅子の俊敏さを持つカブキマンに当てる事ができたのである。

「グルルルウウー——！」

カブキマンは唸り声を上げるがそれからの勝負は一方的なものであった。

ロックマンがチャージショットを放ち、その起動を微妙な操作で変え、的確にカブキマンに当てていき。

仮に避ける事ができても今度は背後からエンカーのミラーバスターそのものを喰らう羽目になる。

そうこうする暇に今度はまたロックマンがチャージショットを放つ。

お互いの特性を理解しているからこそできる連携であった。

完全に彼ら二人にペースを支配されたカブキマンはなすすべなく次々と二人の攻撃に撃ち抜かれて行く。

・・・しかしそれで黙っているカブキマンではなかった。

彼ら二人の包囲網を俊敏さで脱出するとカブキマンは全力で扇を振り回し小型ではあるものの強力な竜巻を発生させた。

「ちい……！体も限界だ……これは避けられえかも……」

「く……体が動かない……」

竜巻による風力で・・・この戦いですでに限界に近づいているロツクマンとエンカーは動くことすら間々ならずそのまま飲み込まれるのを待っただけかと思われたが。

「トルネードホールド!」

彼らの目の前にもう一つカブキマンのそれよりも巨大な竜巻が発生しお互いを相殺させながら上空へと消えていく。

「昨日の居酒屋からの記憶が一切、ありませんが・・・どうやら今日は路上でゲリラ的なライブですかカブキマン殿?」

彼らの上空に鼻を突き上げ高笑いをする天狗に似た一体のロボット。

的の外れた言動のテングマンはそのままカブキマンへめがけて扇を一閃する。

「カミカゼエエエー!」

扇より生じた風の塊を難なく避けるカブキマン。

「しかしあまり派手な、他の方々の迷惑をかける歌舞伎は感心しませんぞ!そしてわが宿敵ロツクマンとエンカー殿!この場は万事このテングマンにお任せあれ!」

空を飛びながら調子に乗るテングマンに肩を落としながらエンカーはつぶやく。

「おまえなあ・・・まあ今日は感謝するぜ」

「・・・テングマンありがとう」

ロツクマンもやや戸惑いながらもテングマンに礼を言う。

「いやいや！礼には及びませんぞ！さあさあ主役の拙者が現れ、舞台の役者が揃った所で終幕への大立ち回りと行きましようぞ！」

「言う事は……！俺らはお前の前座かあ!?ふざけるな——！」

そんなテングマンの言葉に気を悪くしたエンカーは怒鳴り散らす。

その様子を見ていたロックマンはクスリと笑うが……その彼の体を爆風が吹き飛ばす。

「……！」

突然の爆発に誰も反応できずにロックマンは地面へと叩きつけられる。

「ロックマン……！」

「だ……大丈夫……！」

爆発でヘルメットは完全に取れ頭から黒い髪があらわになる。

「グルウウウ……！」

いつの間にかカブキマンの扇の「火」の力により起こされた爆発がロックマンを襲ったのだ。

しかしロックマンはボロボロになりながらも立ち上がる。

「僕は負けない……これまでと同様、平和を守ってみせる！」

「ああ……そうだな行こうぜロックマン！」

ロックマンの体を支えながらエンカーはカブキマンをにらみつける。

お互いに満身創痍とは言えこちらには新たに駆けつけたテングマンがいる・・・状況は圧倒的にこちらが有利だ。

「さあ・・・！カブキマンあんたの目を覚まさせてもらうぜ・・・！これで終幕にしようぜ！」

「・・・カブキマン、君に何があつたかは知らないけど僕は君を止める！」

「さあさあさあ！これより始まる拙者の大活躍！目にももの見せて差し上げましょうぞ！」

各々三人が別々の言葉を発しながらもカブキマンに向かって構える。

いよいよ戦いは最後の時を迎えようとしていた。

## Vol. 8 所詮は水と油

「グルルルッ！」

「そんな物、空を飛ぶ拙者にとつてはそよ風と同じですぞー！」

カブキマンの放つ真空波をテングマンが軽々と避けながら言い放つ。

「テングブレード！」

ザシュッ！

そのままテングマンは一気に距離を詰め扇でカブキマンの胸を切り裂く。

「先ほどのエンカー殿のお返しですぞー！」

今や戦いの主導権はこのテングマンが握っているも同然だった。

ロツクマンとエンカーは疲労も激しく動きも緩慢であつたがそれでもテングマンを援護しようとカブキマンに攻撃を加える。

「ロツクバスター！」

「ミラーバスター！」

二つの光弾がカブキマンを吹き飛ばす。

「フフフフッ！拙者は待つておりましたぞー！拙者が最も活躍し目立つこの機会を！エ

ンカー殿が来てからチャンスを狙ったかいはありましたな」

テングマンは自慢げに話すがそれを聞いたエンカーの顔に青筋が走る。

「てめえ！俺が来た時あたりからいたのかよ！だったら早く出て来い！」

「拙者・・・目立ちたいのです！」

「ふ・・・ふざけんな！」

エンカーはまだ何か言いたそうだったがカブキマンが立ち上がるのを見て再び注意をそちらに向ける。

カブキマンの受けたダメージは既にロボットの限界を超えたもののはずである・・・。  
しかし彼は不死身の如く何度でも立ち上がってくるのである。

その点では数々のワイリーの野望を打ち砕いてきたロックマン、そして自前の忍耐強さで戦うエンカーも同じなのであるが・・・。

「ぬう・・・なかなか終わらんでありますな。こうなれば直接沈めてしましましょうぞ！」

テングマンはテングブレードを構え上空からカブキマンの様子を伺うが。

・・・その時。

「テング！油断しすぎだ！」

エンカーは慌てて叫ぶが間に合わなかった。

「何！馬鹿な！グヌヌウー・・・！」





る。

カブキマンの背後には忍者型のロボット、ワイリーナンバーズの一人シャドーマンが立っていた。

そしてもう一人、武者鎧を模したロボット、ヤマトマンも現場へと駆けつける。

「・・・カブキ！これ以上貴様の狼藉は認めぬぞ」

「申し訳ない、極秘任務ゆえに少々遅れたでござるエンカー」

ヤマトマン、シャドーマンがそれぞれエンカー達に声をかける。

もはや絶体絶命のカブキマンだが彼の態度からはそれは感じられない。

「ガルウウ・・・何故だ・・・何故だ！」

「・・・えっ！」

「・・・何！」

その時、初めてカブキマンが喋ったのである。この場にいる誰もがカブキマンは何らかの原因で暴走を起こしており、それ故にまともな言葉が話せる状態ではないと思っていたのである。

「何故・・・人間共の味方をする・・・俺達を道具としてしか思っていない奴らがそんなに大事か・・・？」

「・・・アンタ、一体自分が何をしでかしたか分かって言ってるのか・・・？アンタの

目指す高みはそんな物だったのか！」

その言葉に、エンカーが怒りをあらわに吼える。

（俺には目指さねばならん高みがあるそこにたどり着くまでにはまだまだかかりそうだがな……）

エンカーの脳裏には自分の誉め言葉に照れながらも答えるカブキマンの姿が克明に映し出されていた。

「……お……俺の目指す高み……」

「そうだアンタがそう言ったんだ！ 忘れたとは言わせねえぞ」

カブキマンは僅かだが苦悩の表情を浮かべ目を伏せ唇をかみ締めるが……。

「俺の望む舞台……それは！ この場だ戦場だ！ 俺の演技に見た人間共が見せる恐怖、絶望の表情……それこそが俺の望む高みだああ！」

「カブキ……お主まさか……！」

カブキマンの狂気にヤマトマンが驚いた表情で口を開く。

そのカブキマンの体が光に包まれみるみるその場から消えてなくなってしまう。

「……！ 簡易エスケープユニットか！」

シャドーマンは阻止せんと動くがすんでの所でカブキマンの姿は完全に無くなってしまった。

「ちい．．．逃がしたか」

エンカーはひとりごちに呟く。

そこへようやく10台ほどのパトカーが現場にたどり着き多くのロボットポリス達が車外へと出始めた。

ロボットポリス達と共に一人の人間がエンカー達に近づく。

「詳しい事情を聞こうか．．．ロックマンにヤマトマン、それにワイリーのロボットの方々．．．」

ロボットポリスの間を沿う様にして現れたのはいかにもベテランの刑事と見て分かるいかつい顔をした中年の男性だった。

ジョージ・クエスター．．．この街では知らない者はいないとされるロボット犯罪専門のベテラン刑事である。

人間でありながらロボット犯罪の最前線に立ち、果てはある事件で一人で戦闘用ロボットを倒したという武勇伝まで持つ卓越した能力を持つ人物である。

ロックマンとヤマトマンはジョージ刑事に事件の経緯の報告を行っていたがそれが終わると今度はエンカー達の方に歩みだす。

「君達の事情も良く分かった．．．今回の協力はまことに感謝したい。ついでにこれとは別にもう少し我々に協力してほしいんだが．．．」

ジョージの目が鋭さを増しエンカー達を見据える……激戦を生き延びてきた者でしか出せない冷徹な眼光だ。

ロックマンはその言葉にハツとしたようにジョージを見つめるが彼はそれを横目でちらりと見ただけだった。

「確かに彼らは君に協力をした……だが彼らはあのワイリーの一味だ。彼らを捕らえるのだロックマンにヤマトマン」

「なっ……彼らは！ 僕を助けに！」

エンカーにはこの人間の意図が良く分かる。要はワイリーの居場所を知りたいのである。

「ヤマトマン……言いくいが君は一度問題を起こした身ながらもこうしているのも……」

ジョージが横目でヤマトマンを見据えながら言い放つ。

「わかつております……わが生みの親の汚名を晴らさんが為、人類のために我が槍を振るおうぞ」

そのジョージの言葉を遮りヤマトマンは致し方ないとエンカー達と対峙する。

「ハツハツハツハツ！ まあこうなるだろうと大体分かっではいたがな……」

エンカーは周りを取り囲むヤマトマン、ロボットポリス達を一笑しながら大破したテ

ングマンを担ぎ上げる。

「エンカー殿、申し訳ないこれもワシの……覚悟されよ」

「いいってことよ!……気にするな」

ヤマトマンは詫びながらも槍を構える。それに対しエンカーもまた槍を構える。

「……っ」

ロツクマンはまだ迷っている様だったうつむいたまま顔をあげようとしな

「シャドー行けるか?」

「……うむ」

エンカーの問いにシャドーマンが頷く。

そしてその場に槍を地面に突き刺したエンカーが叫ぶ。

「実はまだちょっとだけエネルギー残ってんだよな……エネルギークラッシュ!」

エンカーの槍から閃光が放たれあたりを包み込む。

その上、シャドーマンの煙幕の煙が立ちこめ周囲の視界が遮られる。

「閃光に煙幕か……!!チツ……!!」

ジョージが目を覆いながら叫ぶ。

エンカーは戸惑いの表情を未だにしている宿敵ロツクマンに対し声をかける。

「いいか……今回は俺らはお前と協力した……だがな所詮俺らとお前らは水と油

だ、戦いあう運命にあるんだよ。次に合う時は敵だ。それを忘れるなよ！」  
「・・・・・・・・」

言い逃れようの無い現実を突きつけられ黙りこむロックマン。

視界を遮る煙が晴れた頃には既にエンカー達の姿は消えていなくなっていた。

「まだ遠くにはいつていないはずだ!!」

ジョージが声を張り上げながらロボットポリス達に命令を出す。自身もその足でエンカー達の追跡にかかるようだ。

うつむいたまま顔を上げないロックマンを見ながら、ヤマトマンは思った。

（彼は・・・現実を知らぬ。我々ロボットが人々にどう思われているのか・・・そしてこの世界の真実を）

そんな純粋な少年の肩に世界の希望がのしかかっているのである。ある意味で残酷であり滑稽であった。

ヤマトマンは槍を携えその場を離れる、行かねばならない場所がある。

彼自身も気づいていた、自分が一番真実に近い場所にいる事を。

何故なら己こそがカブキマンが作られた真の理由を知る者の一人なのだから

それは愚かな考えであり人間の生み出し続ける業でもあったのだ。

・・・・・・・・

誰にも気づかれる事も無くこの場を傍観していた者の影が蠢く。  
やがてその気配は完全に消え去っていた。

## Vol. 9 人間の咎

町外れのスラム街、日も当たたらぬ場所で獅子を模した頭部を持つロボットが体を横たえていた。

「グルルウウ……！」

「ずいぶんとひどくやられましたね……」

傷ついたカブキマンの目の前の闇が動く……。

「お前か……何の用だ？」

カブキマンは影に向かって睨みを聞かせる。

影が揺らいだかと思うと影から一对の眼光が現れる。

「何の用……ですか？それはあなたを助ける為ですよ」

影は丁寧な物腰で淡々と言葉を続ける。

「人類の英雄たるロックマンとあのワイリーナンバーズのスペシャル第一号エンカーを

二人同時に相手をするのはあなたでも骨が折れますかね」

「うるさい……！噛み砕かれたいのか！」

カブキマンは唸るが影は動じた様子は無い。



「あなたにはやる事があるのでしよう？我が主もあなたには支援を惜しみません」

「……」

カブキマンは黙したままもその瞳には怪しい光が輝いていた。

「……俺の……やる事……そうだ……！思い出したぞ……！」

「フフフフ……そうですか。ではまずはあなたの体を修復しましょう。それから存分にお暴れくださいませ……」

夜の闇を映すが如く影は動き出す……深い闇が静かに動き始めた。

「……クソッ！あの化け物刑事め……！」

エンカーは応急処置の済んだ体を動かしながら忌々しげにはき捨てる。

その後、エンカー達はベテラン刑事ジョージ相手に三時間以上に及ぶ逃走劇を繰り広げる羽目になってしまったのであった。

ジョージの指揮は迅速で街の各所にロボットポリスによる取り締まりが行われ。

長年の勤なのだろうかすぐにエンカー達を見つけ出しその度に逃走をする羽目になってしまったのである。

正直シャドーマンが一緒になければ逮捕されていた可能性が高い。

なんとか基地へとたどり着いた頃には陽も既に落ちかかっていた。

基地へたどり着くなり大破したテングマンをメデイカルカプセルに押し込み、自身の体も先ほど応急処置を施しそれなりに動けるようになったところである。

「シャドーマン……あんた、あのカブキマンの事でなんか知っている事はないのか？」

「面目ない……拙者も彼の事については何も……」

シャドーマンは首を横に振る。

「しかし思い当たる節が無い訳ではないでござる。拙者の極秘任務とどうやら彼の者は関係があるようでござる」

「関係……その極秘任務ってやつ無理なら良いが俺に教えてくれ」

拙者が話せる範囲ならばとシャドーマンは最近ワイリーに命じられて行っていた任務を話し出す。

「現在急に世界各国が軍備を増強……要は我々に匹敵するとは思えぬがそれでも高性能なロボットの開発が進められているようでござる。そしてこの都市にはニホンの高性能戦闘用ロボットの試作機が何体か秘密裏に運ばれていると言う事でござる」

「軍備の増強……それとこれがなんの……しかしこれとどうねえ……」

エンカーは思案にふけこんだが頭はこんがらがる一方である。

「拙者が言えるのはこれまで……これ以上は言えぬでござるよ」

そしてシャドーマンは任務の件で忙しいとそのままの足で再びどこかに行つてし

まった。

「忙しい奴だぜ……俺も体が動けばいいんだが……」

エンカーは応急処置が済んだばかりの自身の体を恨めしそうに見つめていた。

結局エンカーの体が完治したのはそれから五日後の事だった。

ワイリーが不在のせいもありメデイカルカプセルだけで治した為、時間がかかりすぎたのである。

テングマンはある程度の修復は終わったもののまだ自由に動く事ができず。

今もメデイカルカプセルでの治療が行われている最中である。

「兄貴……ずいぶん派手にやられたそうじゃないか、傷はもういいのか？」

そうエンカーに声をかけるのは彼と同じロックマンキラーズの2号機パンクであった。

全身にノコギリや突起物が覆い血の様に真っ赤に染まったボディ……どんな素人が見ても戦闘用と分かる見た目で凶悪そうに見えるが、実際正々堂々を好む武人肌であり。普段は無口で無愛想だが人一倍他人には気を使うロボットである。

エンカーは大丈夫だと言うとパンクは無理はしないようにと言ってそのまま基地から街の方へと向かい歩いていった。

今日はおそらくいつもの缶詰工場でのバイトの時間なのだろう、時間を見れば朝の8

時と2分・・・律儀な奴の事、8時30分の仕事時間の前に工場で準備をするつもりなのだろう。

それからしばらくして、エンカーも槍を携え街の方へと向かっていく。

先ほどヤマトマンから連絡があったからである。

「お主に話さねばならない事がある・・・午前10時頃にB地区のスラム街のいつものところで」

スラム街・・・華やかな街の裏で必ずと言ってもいいほど存在する場所。

社会に疲れた者、付いていけなかつた者、中には犯罪を犯したロボットやロボットに居場所を奪われたある方面での技術者など、そういった者たちが集まる場所、様々な社会の闇が存在する治安も悪い危険な場所でもある。

路地の角にうち捨てられた一軒の小屋・・・そこはエンカーの主催する「和風同盟」の集合場所でもある。

見てくれは悪いが中は意外にも整理されておりそこには情報収集を目的にスナイパージョーが一体常にいる、言うなればワイリー軍団の支部基地の様なものである。

エンカーが小屋に着いた時、既にヤマトマンが先に到着をしていた。

「話って何だ・・・?」

エンカーは腰を落ち着けながらヤマトマンに問いかける。

「傷は治ったようだな．．．実は昨日のカブキマンの件で話したい事がある」

あぐらをかきながらヤマトマンは続けて話を進める。

「前にも言ったがあれはワシと同じ生みの親より作られた、いわばワシの兄弟機とも言うべき存在だ」

「．．．ああ、それは前にも聞いたが」

「奴は普通の芸能ロボットでは無い．．．そもそも普通のロボットとは作りが違うのだ」  
ヤマトマンが話し始めた真実．．．それはエンカーですらも予想外の事であった。

ロボット先進国としても名高い東洋の国ニホン、かつては経済大国として名を連ねたが近年、その栄華にも陰りが見え始めている。

ロボットを用いた産業による発展をいち早く行い、その経済で世界で最も豊かな国が作られたはずだった。

しかしロボットの進出によりそれまでの役目を担ってきた人間が追い出される形になり。

その後世界を襲った未曾有の経済危機によりニホンの経済は破綻をきたしはじめる。  
経済危機に対し対策を打てるような企業には優秀な人材がロボットの進出によつて

淘汰されており他の各国に比べそれらの対策が遅れたのである。

人材の流出は人口の減少が懸念されるこの国にとつては致命的であつた……。今やロボット工学以外にニホンの誇れる物はなくなりつつある。

そういう理由からニホンはこう皮肉をこめて言われるロボット先進国と……。

近年……その方針を急に変え始めとある政策……産業を積極的に行っている。

ロボット工学の父といわれるトーマス・ライトが最も忌むべき物……戦闘ロボットの開発と輸出である。

かつてワイリーがMr. エックスを名乗りヤマトマンらを洗脳し世界征服を企んだ計画。

その計画の際にワイリーはWRU（世界ロボット連合）に所属する各国に技術提供を行っている。

元より各国より高いロボット技術を持っていたニホンにとつてそれは柵からぼた餅のような物であつた。

ヤマトマンらに提供された技術を解析しそれを元に新たな戦闘ロボットの開発がなされたのである。

しかし彼らにはボディの製作は問題なかつたのだが逆に高度な電子頭脳の作成を行う技術のノウハウがなかつた。

早急に結果を求める彼らはある事を思いつくそれは・・・人間の記憶、人格をそのまま電子頭脳に収めるという生命の倫理に外れた行為であった。そうして作られたのがカブキマンであった。

歌舞伎界の大御所、蛭名一族。

その代表、蛭名泰蔵には賢三、大輔と言う二人の息子がいた。

彼らのどちらかが泰蔵の跡目を継ぐはずだったのだがそれは優秀ではあるものの平凡な兄より利発で非凡な次男の蛭名大輔が継ぐ事になる。

兄の賢三もそれを認めのだがしかしそれを快く思わない者、兄の周りの者により大輔は事故を起こしてしまう。

もはや死を待つしかない息子を見た。泰蔵はなんとかして息子を救おうとする。

そしてニホンは優秀な人間の頭脳を求めていた・・・。

泰蔵は多額の資金の融資を条件に息子の体を研究者達に提供する。

彼らの思惑が一つとなり海老大輔はこの世に蘇る事になる・・・世界で始めての芸能ロボット、カブキマンとして・・・。

「カブキマンの電子頭脳には生前の記憶が残されていた。それが原因で暴走をしたと考

えられる」

「……命を何だと思つてやがる！」

話を聞いたエンカーは憤る。

「所詮それが現実言うもの……それに」

ヤマトマンは冷静に答えながら

「一カ月後には儂を元に作られた、戦闘用ロボットが正式に配備される……ニホンの軍隊としてな」

それを聞いたエンカーは再び怒りを表す。

「ヤマトマン……あんたはそれでいいのか……？世界中であんたの兄弟達が戦争をするかもしれないぞ！」

「それが我が主の命であるならば……儂のせいで立場が悪くなつた生みの親の為ならば……」

ヤマトマンの意思は堅い。彼は一度犯した罪に対し汚名をそそがんと言葉には表せないほどの努力を重ねてきたのだろう。

自分の生みの親の責任でもあるのでエンカーはこれ以上何も言わなかつた。

「ワイリー博士がいなくても人間同士で争うって事かよ……」

「戦こそが人類の歴史とも言える。残念な事だがな」



エンカーは絞り出すように声を出す、ヤマトマンもそれに答える。

「……次にカブキマンが現れそうな所はどこだ……? 教えてくれ」

「それは儂にも皆目……」

「ビーツ! ビーツ!」

ヤマトマンが持つ通信端末が突然けたたましい音を立てながら鳴り響く。

その携帯端末にはエンカーもよく知る人間の顔が映る。

「俺だ! ジョージだ! 大変だヤマトマン……カブキマンが自然公園近くの地区に現れた

! 至急現場に向かってくれ! 俺もすぐそこへ向かう!」

ジョージは言うだけ言うとすぐに通信を切る。

ヤマトマンとエンカーはお互いに顔を合わすと頷き、小屋を飛び出していった。

「あの……お茶はいりましたけど……あれ……?」

小屋に常駐のスナイパージョーがお茶を持って入ってきたがすでに小屋には彼一人だけが取り残されただけだった。

ジョーは首をかしげながらも自分で入れたお茶を一人で飲んでいた。

## Vol. 10 望む物

エンカーとヤマトマンは東公園のある地区へとたどり着いたがカブキマンの姿はどこにも見えない。

「ムム……どこだ彼の者は……？」

「ここは……」

エンカーは何かを思い出すような目で周りを見渡す。

「そう言えば前にこのあたりでカブキマンの演技を見たんだよな……」

その時エンカーの頭の中で何かがつながったような気がした。

「もしかしたらカブキマンは恨みを晴らそうとしているのかも知れねえ……！人間の頃の記憶があるんだろ？」

「……急ぐぞエンカー殿！」

二人はカブキの会場へと走り出す、今日は確か明日の準備の為にカブキの関係者が残っているはずである。

エンカー達がたどり着いたとき、現場は騒然としていた。

「やめるんだ！カブキマン・・・その人を放すんだ！」

カブキマンが一人の団員の胸倉をつかみ宙に浮かべていた、それを止めようと一人の少年・・・一足早く駆けつけたロックマンが説得している。

「ヒイイ！助けてくれ！この化け物を何とかしてくれ！」

カブキマンに拘束されている男が叫ぶ。

「誰のせいでこんな化け物になったと思うんだ！」

カブキマンは語気を荒げ言い放つ。

「貴様が俺の車に細工をして事故を起こさせたんだろう！お前のせいで俺は俺は！」

「ひい・・・俺が悪かった！まさか死ぬなんて思わなかったんだ許してくれ！」

その男の無責任な言葉にカブキマンはさらに男を締め上げる。

「やめるんだ大輔！・・・この者がした事も罪だが本当に悪いのはこのわしだ！わしがよからぬ事を考えたばかりに・・・」

そこへ着物を着た初老の男が現れカブキマンの前に立つ。

歌舞伎界の重鎮にして蛭名一族の長老、蛭名泰蔵である。

泰蔵の姿を確認するとカブキマンは拘束していた男を無造作に投げ、今度は泰蔵のほうへ向かう。

拘束されていた男は舞台の道具が並ぶ場所に投げ飛ばされたが幸いにして命に別状

はないようだ。

「親父……！よくもよくも俺をこんな人形の体に押し込めやがったなあああ——！」

ここに来てカブキマンの感情は一気に爆発した。

「すまない……わしはお前になんとしても生きてほしかった……だがそれはわしの身勝手な考えだったのだな。大輔わしが憎いのならわしを殺せ」

「生きてほしかっただと……ふざけるな！俺の電子頭脳はどうせ遅かれ早かれ回収され戦闘口ロボット用に量産されるんだろがぁ！」

カブキマンの頭脳を人間の頭脳を元に戦闘口ロボットの電子頭脳を量産化する……おぞましい計画。

しかし彼は本来思い出してはならない人間の記憶を思い出してしまった。

「動くでない！これはわしの業なのだ！」

動こうとしたエンカー達を制止するのは今にもカブキマンに殺されそうな泰蔵本人である。

「さあ大輔……！わしと共に……」

泰蔵は覚悟を決めたように目を閉じる。

カブキマンは手を震わせていたがその手を泰蔵に振り下ろそうと振り上げる。

．．．．その瞬間エンカー達は同時に動き出した。

ロックマンは泰蔵を持ち、転がるようにしてその場から退避させた。

エンカーはカブキマンの拳を槍で受け止め、ヤマトマンの槍はカブキマンの腕を切り落とす。

「ぐぬ．．．きさまらー！」

カブキマンは前の戦いの傷は癒えていたもののこの一瞬の出来事でかなりの深手を負ってしまった。

カブキマンは獅子の頭部へと変形し迎え撃つが白兵戦にかけてはヤマトマンにかなわずそのまま一気に押し切られてしまう。

「あんたの目指していた物はなんだったんだ！こんな下らん復讐だったのか！あんたの演技を見て俺は希望を見出したんだあ！」

エンカーは怒りをそのままに槍をカブキマンの頭部に突き刺した。

びきっ！びきっ．．．！

カブキマンの頭部にびびが入り割れ始める．．．。

完全に電子頭脳が剥き出しになったその姿をみてエンカー達は驚愕する。

「これは．．．悪のチップ！ワイリー博士のチップじゃねえか！」

その頭部にははつきりとWの文字が写ったチップが収められていた。

一陣の影が動きそのチップを頭部より引き抜く。

シャドーマンが一瞬の隙を突きチップを抜き取ったのである。

「ぐおおおー！ー！」

カブキマンは悶えながら倒れるがすぐに意識を取り戻す……。

「俺は……一体……？親父……いや親方！すまねえ!!無礼な事を働いてしまった」

呪縛から解けたのだろうか急に態度が変わり泰蔵に対し謝りだすカブキマン。

「いや……よいのだ。わしがいけなかつたのだ……すまない大輔お前につらい思いをさせてしまった」

カブキマンに抱きつき許しを乞う泰蔵。そこには歌舞伎界の重鎮としてではなく一人の父としての姿が映しだされていた。

カブキマンはエンカーに向き直ると頭を下げながら話す。

「すまない……俺のせいであんたに迷惑をかけた。あんたの言葉、俺の心に届いたぜ」

「あんたのせいじゃない、多分これのせいだ」

シャドーマンの持つチップを指差しながらエンカーは言う。

「……でシャドー、これはなんなんだ？博士の計画なのか？」

「いやこれは博士のものではござらぬ……これを見てみるがいい」

そういつてチップを周りに見せ始めるシャドーマン。

よくよく見ればWの文字がワイリーの使う文字とは少し違うし色やその他の素材も微妙に違うようだ。

「模造品つて奴かよ……」

辟易としながらもエンカーは言い放つ。

「なんだなんだ？もう終わってるのか？」

そこへあの化け物刑事とはエンカーの談だがジョージが姿を現す。

ヤマトマンが事情を説明するが、やはり前と態度は変わらないようだ。

「そのワイリーナンバーズはおいといて……カブキマン！お前の起こした事は大罪だ……よって逮捕する！」

「待つて！ジョージさん彼は悪のチップに……！」

ロックマンは慌ててジョージの間に入るがそれを制したのはカブキマンだった。

「いや良いんだロックマン、エンカー達。俺がした事はとてもじゃないが許される事じゃない……罪は罪として受けるつもりだ」

そう言いジョージに歩み寄るカブキマン。

「ちよつと待つんだ！」

しかしその場にエンカーの声が響きわたる。

「このカブキマンはこのワイリーチップに操られてやったんだよ！これもワイリー様の

計画でな！カブキマンを秘密理に改造して暴れさせたんだよ！」

「・・・フツ、お主らロボットポリスが困惑する面がいい気味でござった」

エンカーとシャドーマンが続けて言う。無論嘘であり・・・ハツタリである。

「だからこのカブキマンは自分の意思と関係の無い所で暴れてたんだよ！」

「その状態では責任は取れないでござろう？かつてのライトナンバーズやコサツクナンバーズ同様に」

「エンカーにシャドーマン・・・一体何を」

それを聞くロックマン、ヤマトマン、カブキマンの三人は困惑気味だ。

「・・・そう言う事でいいんだな？」

ジョージがエンカー達に問う。エンカーは無言で頷いた。

「そういうわけじゃあ・・・多少は軽くなるかねえ・・・よろしいですか？泰蔵殿」

ジョージは肩をすくませながら蛭名泰蔵に確認を取る。

「ジョージ殿・・・まことに申し訳ない」

「いやいや・・・俺も今度娘と歌舞伎の公演を見る約束をしててね・・・まあ主役がない舞台も見てもつまらんしね」

ジョージは笑いながらもエンカー達に歩み寄る。

「今日は見逃してやるワイリーのロボット共。だが次に悪事を働いていたら現行犯で逮



捕してやるからな」

そう言いながら背を向けて現場を去るジョージ、意外にも理解がある刑事である。

「すまない……すまない……」

エンカーの手を取り何度も詫げるカブキマン。

彼ならできるもう一度やり直せる、目の前のカブキマンを見ながらエンカーはそう確信していた。

## エピソードとエンカー編あとがき

「やあ……ひさしぶりだね」

「ああ……まさかこんな所で合うとはな」

歌舞伎公演が行われている会場の前でエンカーはロックマンに会った。

無論お互いに非戦闘モードである。

あれから一週間、カブキマンの暴走はワイリーの仕業とされカブキマンはこれまでの功績から罪を不問とされた。

会場の方は再度の暴走に備えロボットポリスが厳重に警戒をしているが、その心配は普通に無用であろう。

まあ仮にまた暴れれば目の前の少年と一緒にカブキマンを止めればいいとさえエンカーは思う。

会場に入る前にヤマトマンと目が合ったが、幸いにして素通りをさせてくれた。

この辺りは本当に有難い配慮と言えよう。

カブキマン達は今日でここでの公演を終え二ホンへと帰る予定である。

「まあ立ち話もなんだ中でゆっくり歌舞伎を見ながら話そうぜ」

「うん．．．そうだね」

横目で見ればあのベテラン刑事のジョージが妻を思しき女性と女の子を連れて一緒に会場に入つて行くのが見える。

「あの刑事も一緒か．．．まあばれねえよな？」

「ハハハハッ、さあはいらうか？」

「おうっ．．．！」

笑いながらエンカーと一緒にロックマンは会場へと入っていく。

今日も空には青空が見える．．．今日も今日で世界は平和だった。

ブクツブクツ！ブクツブクツ！ブクツブクツ！ブクツブクツ！

水の中の泡が動く音が辺りに響き渡る。

（ほほう．．．カブキマンの件はなかなか上等ではないか．．．）

影が虚空より揺らめき一つの姿を彩る．．．。

全身を黒一色のローブで体を覆い、顔にあたる部分には目が一つあるのみの不気味な姿をしたロボットが姿を現した。

「ははっ．．．正直な所もう少しやってくれるものと思つておりましたが．．．」

（まあよいではないか．．．機械の体を得ても所詮は人間と言うものだ。刻まれた記憶

か・・・我が身を思えば他人事ではない)

面白そうに言葉をつなぐがその口調には感情らしい物はなく機械的なものだ。

(我はここより動くことはできぬ・・・全てはお前に任せるぞ・・・)

「ははっ！お任せくださいませ！」

そのまま影は跪く。

(我が動くにはまだ条件が揃わぬ・・・いずれは思いしらせようぞ・・・この世界の真の支配者が誰であるかを・・・)

泡の音がいつそう激しくなる。

(貴様の本体も漸く動けるようになるのだろうか？後は任せたぞファントムマンよ)

「了解いたしました、必ずや世界をあなたの物に・・・」

跪く影・・・ファントムマンはそのまま闇と同化し消え去った。

(だーっはっはっはっはっはっ!!その時こそ世界は我の物だ！)

闇の中より嘲笑が響く・・・

そう・・・全ては始まりでしかなかった全ては・・・

TO BE CONTINUED

## パンク編

## プロローグ

天にも届かんばかりの摩天楼が各地にそびえ立つ人間たちの都市。

それは人間の栄華と富の象徴であると同時に傲慢さの象徴でもある……。

人間……いやロボットを問わず他人は私の姿を見るとまず私から避ける様にして歩く。

大体の印象など外見がまず大事なのだろう……。

その意味では私の外見はまず他人にマイナスのイメージしか与えないだろう。

体中からつきでた突起物に頭にはノコギリ……見るからに凶悪そうな外見だ。

無論人間ではなく私はロボットである……それも戦闘用なのは威圧的な外見から一目で分かるだろう。

私の名前はパンク、偉大なる天才科学者アルバートⅡWⅡワイリーが生み出したナンバーズの中でも特別なスペシャル・通称ロックマンキラーズ第二号機である。

明らかにおびえた目線でこちらを見る人間達……あそこの子供など母親に抱きついて泣いているではないか……。

まあいつもの事だ・・・私は大通りの路地を曲がりそのまま寂れた一角を目指す。私が向かっているスラム街こそ私の様な見た目のロボットは相応しいのかも知れない。

「・・・でそこにいるのは誰だ？いるなら出て来い！」

裏路地を通る際に妙な気配を感じた私は叫ぶが返事はない・・・。

舐められたものである・・・しかしこの私も何者かが尾行していることに気づいたのは先刻だ。

その気配の消し方は見事としか言いようがない。

・・・相手からの返事はない。気配に向かって動こうとした時には既にその気配は無い・・・。

「一体・・・誰だ？・・・まあいい」

もう気配を追う事をあきらめた私はスラム街の一角にある寂れた小屋を目指す。

そこには常駐のスナイパージョーが一体いるだけの寂れた小屋であるが実はワイリー軍団の支部基地のひとつである。

最近、兄のエンカーが「和風同盟」なる訳の分からん団体の集合場所を利用しているがここは本来ならばスラム街に築いた貴重な情報収集の場なのだが・・・。

私の姿を確認するとボロの身を着込んだ常駐のスナイパージョーは手を上げて挨拶

をする。

「おはようございます、パンクさん。もう相手の方は中で待ってますよ」

「そうか・・・では少しここを使わせてもらおうぞ」

「了解しました」

スナイパージョーは私に会釈をすると私を小屋の中に案内をする。

「すまん・・・少し遅れたようだ」

「いいや、俺もさつきここについたばかりだ」

私は先客に向かって声をかける。

今日はどうしてもこの先客から情報を聞き出す為にここに来た。

私はここ最近に頻発する妙な事件の裏づけをとらなければならぬのだ。

## V O L . 1 敗残兵達のその後

私の目の前にボロボロのマントを身にまとい作業用のヘルメットをかぶるロボットがドンとあぐらをかきながら座っている。

ボロに隠されてはいるもののそこからはドリルが垣間見え彼がただの作業用のロボットではない事が分かる。

「最近起こっている事件で奴が動いているのか知りたいんだが・・・」

「言っとくが最近なので我々が関わっているのは無いからな・そもそもロックマンに敗れて以来、あの方とは連絡は一切ついたらん。キング軍団は休業状態だ」

私の問いにそう無愛想に答えるロボットはかつてキング軍団の幹部の一人だったグランドマンである。

私は彼に最近起こる謎のロボット暴走事件・・・その情報を聞き出したいのである。

彼がキング軍団壊滅以降、道にあぶれこのスラムに隠れ住んでいるのを発見しキング軍団残党の情報を聞き出す代わりにある「密約」を交わしたのだ。

「密約」・・・ロボットである彼の窮状を知ればおそらく我が主Dr.ワイリーは助けの手を差し伸べる事は間違いないだろう。



しかしそれでは彼・・・グランドマンのプライドがそれを許さない。

何せキング軍団は結果的に人類側に付いたワイリーナンバースと刃を交えているのである。

敵であった存在に頭を下げるのは彼らからしてもかなり癪だろう。

その気持ちは痛いほど分かる。

「自分の身の為なら平気で鞍替えをするような奴だと・・・」

現在の状況を抜け出す術は目の前に安易に転がっている・・・しかしグランドマンはそれを選ばずあえて耐え、表舞台に堂々と返り咲くチャンスをうかがっていた。

私は彼に同情でもしたのだろうか・・・まあ数字的に見ても彼単体の能力は最新鋭のロボットと言うこともあり捨てがたい。

今後のワイリー様の計画に彼が加われば戦力としてかなり使えるに違いない・・・だからこそ彼にはここ一帯のスラムにあぶれるロボット達を束ねるように依頼をしている。

ワイリー軍団が世界征服の計画で動き出した時にスラムにあぶれるロボット達を率い我らに協力し参戦するように・・・。

「ふむ・・・やはりキングの仕業ではないか・・・他の者は？」

「だから・・俺には心当たりがないんだよ・・」

そう言うグランドマンを見ながら私はなおも質問を続ける。

「他のキング軍団の幹部は？例えばパイレーツマンは・・・？」

「あいつはこの前、大西洋で荒稼ぎしてる所をダイブマンに逮捕されただろうが！」

パイレーツマン・・かつてグランドマンと共にキング軍団の中核を担った幹部の一人であり。水中戦のエキスパートとして水中では向かうところ敵無しであったそうだ。

各地の貨物船を襲ってはその積荷の一部をキングに渡さず自らの懐に収めていたらしく、キング軍団壊滅後その莫大な資金で大西洋上に建造した水中要塞に籠り各国も手が出せない状況だった。

しかし・・新たに事業を展開しようとして柄にもなく何故かロブスターなどの海産物の養殖に手を出したのが運のつき。

来月には出荷と言う時期を目前に大型のハリケーンに養殖場をやられ大きな損害をこうむつたらしい・・。

ダイブマンがハリケーンによつて壊滅した養殖場を調査に来たところ、ガツクリと肩を落とし魂の抜け殻となったパイレーツマンがそこにいたと言う。

そのままパイレーツマンはダイブマンによつてその場でたいした抵抗もなくあつさり逮捕されてしまったのである。

・・・以上が海の覇者パイレーツマン逮捕の話である。この前ニュースでやっていたのだ間違いない。

「そうであったか・・・ではダイナモマンは？」

「あいつはライトの奴に改造前の状態に戻してもらって普通に元の仕事に戻ってる」

ふむ・・・それは何より。

「・・・バーナーマン」

「あいつはこの前、俺みたい隠れ住んでるって言ってた。そもそも裏でこそこそ出来る頭はねえ」

確か前に森林火災が多発している地域があると言うニュースが・・・おそらくそこだろう。

「・・・・・・コールドマン」

「南米の方のデパートの冷凍倉庫で作業中だ」

コールドマンもコールドマンで頭はいいほうではなかったとフリーズマンが言っていたのを思い出す・・・ともあえ今回の件からは除外だな。

「マジックマンは・・・」

「あいつはサーカスで活躍してるって前に自慢してやがった・・・」

確か有名な巡業サーカスを率いるマジシャンウーマンなるロボットの所に優秀な助

手ががらいるらしいと言う情報を聞いたことがある……テレビで。

ふむ……確かに彼同様、ほとんどの者が自由に動けないようだ……。

「すまんがどうやら無駄な時間をすごさせてしまったようだ」

「フン……ところで俺は本当にワイリーのところに入れるんだろうな？」

「そうでなかったらお前はこうして私の元にはいないだろう……それにスラム街の連中を任せたりしない」

グランドマン不安げに聞いてくるが無用な心配と言うもの。ワイリー様はたとえばどんなロボットであろうとも見捨てる筈がないのだから。

「とにかく例の兵器、8割がた完成したから一回見てくれ。あんたらの期待通りのものかちよつと不安になつてな」

このグランドマン、実際いかつい見た目とは裏腹に意外に臆病な面がある。そんな事を言えば彼のプライドを傷つけるだろう。

人は……まあ我々はロボットだが見た目にもよらないものである……。

そうしてグランドマンは私を例のスラム街の地下に作られた秘密の工場へと案内しようとして立ち上がる。それに私も倣った。

スナイパージョーに礼を言いつつ小屋を去ろうとすると向こうから一体のロボットが近づいてくる。

私はグランドマンに先に行けと彼を促すとあちらから来るサムライ姿のロボットに声をかける。

「む．．お主は．．．」

サムライ姿のロボット、ヤマトマンは私を見るとやや思いつめた様な表情で私を見る。

そう言えば3日ほど前か、こやつ兄弟機．．カブキマンとか言ったか．．そいつが街で暴れたのを兄のエンカーとロックマンが協力して阻止したらしい。

カブキマンは結局、テングマンやシャドーマンまで参戦したというのに捕り逃したという．．まあ私には関係のない事。

「ヤマトマン．．一応言っておくがここは我らの支部基地だ。兄のエンカーはお主らの溜まり場に使っているが常々．．その事、忘れるなよ」

「わかっておる．．昨日のカブキマンの事をエンカー殿に話したいだけだ．．それ以上は何もせんよ」

これ以上、ヤマトマンに突っかかるのは時間の無駄なので私はさっさとグランドマンの後を追うことにした。

私の後姿をヤマトマンはずっと眺めていたがその理由を知るはずと後の事になる。

スラム街の工場跡地・・・一見廃工場に見えるがその地下にある今もなお稼動するこの工場こそがランドマンの秘密基地である。

ランドマンと共に地下室に入った時そこには見知った二体のロボットが忙しく作業をしていた。

ナパームマンとマース・・・彼ら二人もランドマン復帰計画の片棒を担ぐ協力者である。

廃工場の床に寝転ぶは巨大な人型の兵器。

キング事件の際にあのロッキマンとフォルテを苦しめたと言うジェットキングロボの改良機だ。

歓声の暁にはこれを手土産にランドマンはワイリー軍団に合流する事となっている。

「おお！パンク殿！見ろ俺達の夢見た最強の兵器が今ここに！」

「ナパームマンの兵器博物館の展示品をそのまま使用してるから警察とかにも足もつかないからな建造も楽だぜ」

ナパームマンとマースは協力して大きな装甲板を運びながら私に声をかける。

「この二人がいるのなら私がわざわざこれを見に行かなくてもよいではないか？」

「いやアンタの中立的な意見を聞かないと不安で不安で……この二人のせいで当初の予定よりも武装も装甲も大幅に追加してるんだよ。もう本当に動くのかって心配になるくらい」

グランドマンは頭を抱えながらも建造中のジェットキングロボを見下ろす。

成る程、確かに予定よりも巨大化しているようだ。まあ動けば良いだろうと思うが。

「これが完成すれば地上を走る物でこいつを止めれる者は誰一人として存在はしないぜ」

「マースの言うとおり！ボディが巨大化した分、攻撃が当たりやすくなっているがその辺はこの装甲と圧倒的火力でカバーだ！」

意気込むナパームマンとマースを尻目にグランドマンは消え入りそうな声で呟いた。

「それって昔はやった対艦巨砲主義じゃねえか！……ああ不安だ」

相変わらずグランドマンは頭を抱えているが私が見るにマースの言うとおりこれが動き出せば止められる者はいないだろう……あの青き英雄を除けば……。

頭を抱えるグランドマンの肩に手を置き私は話す。

「今度の戦いは今までのものとは桁が違う……あのキングの後継機も含め現在、新たなスペシャルナンバーズの製造も進められ、そして我らナンバーズも総動員して作戦は実行される。その為にもお前の力が必要だグランドマン」

「ああ……ここまで来たら退ける訳無いだろうが。やってやる……やってるぜ」  
その瞳に不屈の炎を燃やし、体を震わせるグランドマン……彼もまた我ら同様、生まれながらの戦士なのだ。

「ワイリー様の計画で我らが動き出した時、我らと共にこれを起動し都市を占領すればいい……」

私は側で頷くグランドマンにそう言いながらもジェットキングロボを見下ろす。

このスラム街に入る前に感じた気配も気になるが全ては杞憂だろう……次のワイリー様の計画で全てを終わらせる。

そして我らをこの世界に作ってくださいだったあの方の世界を我らが創るのだ。それがワイリー様への何よりの恩返しなのだ。

あの人間の救世主に祭り上げられた宿敵にも借りを返さねばならない。

見せてやろう何度敗北をしようとも落ちぶれようと何度でも立ち上がる我らロボットの意地を……。

私の名前は。パンク。

偉大なる科学者アルバートⅡWⅡワイリーに生み出されたワイリーナンバーズの人である。



## V O I . 2 奇妙な関係

グラウンドマンの秘密基地を後に表通りに戻った私を待っていたのは人間達のいつもの視線だ。

私を見て怯えあがる人間を尻目に私はある屋台の目の前で止まる。

車を改造をした最近流行の女性向けのクレープなど甘い物を販売する屋台である。

「・・・ロボット用のストロベリー味のクレープ・・・トッピングはいつもので」

私は屋台の女店主に声をかける。

「ああ・・・パンクじゃん。いつものでいいのね？」

女店主・・・ローズと言うのが彼女の名前である。

今は気さくに接してくれるが最初に来た時はずいぶんと警戒されたものである。

「ちよ・・・ちよつとうちには金はそんなにないわよ！あそこの銀行でも行つた方がいいと思うわよ」

何を勘違いしたのか私をどうやら強盗か何かと思つたらしい。

こちららはちゃんと金を出していると言うのに・・・まあ私の様な見た目のロボットがいきなりくれば無理もない。

いつの頃だったか・・・彼女にシヨバ代と言うのだろうか。

不当な代金を請求する柄の悪い人間達を私が一睨みで追い返したのを境に彼女の方も私に対して普通に接してくれるようになった。

彼女・・・ローズは見たところ今年あたりに18歳になるかならないかの少女である。そんな彼女が何故こういう仕事をしているのかは知らない、知った所で私には何もできないだろう。

私は彼女の作ったクレープを食べ終えるとそのまま彼女に背を向ける。

「また来てねえ〜」

「うむまた来よう・・・」

彼女の笑顔を背に私は歩き出す。今日は休みだ・・・正直な所ロボット暴走事件の件もシャドーマンに任せようと言う楽観的な考えが私を支配しつつあった。

私は空を見上げる、空は一転の曇りもない青空だ・・・。

表面的とは言え世界は平和なのだろう。

やる事が無いのだが私の足は一種のルーチン通りに動いてしまう。

ついつい辿り着いてしまった先で私は大きな溜息を吐く。

スラム街とは言えないものの少し寂れた所にある家具を作る工房。そこは普段なら私が夜間に働く家具店であった。

他のナンバーズもそうだが私は普段、年中赤貧のワイリー軍団の財政を少しでも良くしようとして日中は缶詰工場で働き、夜間はここで働いている。

「なんだてめえ……休みの日に来るなんてお前、電子頭脳バグってねえか？」

そう私に怒鳴り散らすような声を出す老人……この工房の主である。

ダイムⅡカプア……それがこの老人の名前である。

年齢はワイリー様よりも年上でありおそらく70歳は超えているだろう。

そして何よりワイリー様のそれよりも防衛ラインは明らかに後退している……失礼だがその髪の毛は壊滅寸前である。

「バグってはいない……たまたま近くに来たのでつい来たただけだ」

「ふん……！それよりもお前が昨日作ったイスだがこれは何だろ!?足元がガタガタじゃねえか！こんなの売れるわけねえだろ……まったくお前みたいなポンコツに任せた俺が馬鹿だったわい」

本当にイスの足をガタガタ言わせながらダイムは大声で叫ぶ、本当の事なので私は何も言い返さない。

ともあれこのダイムと言う老人は典型的な職人肌な人間で気難しく頑固だが家具を作る腕は確かだ。

彼はただの木の塊を様々な生活の道具へと生まれ変わらせる。

「もう・・・おじいちゃん！今日は休みなんだからこれくらいにしたら？近所迷惑よ！」  
「うるせえ！このポンコツが駄目な物作るからだろが！」

そう言いながら工房の2階から降りてくるのは眼鏡をかけ作業服を着た20代だと私は思う女性・・・ルーテと言うのが彼女の名前だ。このダイムの孫であるそうだ。

「まあでもこのイスも一応、形にはなっているんだからいいでしょう？最初に来た頃に比べたらすごい進歩じゃない」

一応・・・と言う言葉に引つかかるが褒めて貰ったようだ。

まあとにかく今日は休み故にたまたま立ち寄っただけの事・・・ここはそろそろ退散とすべきだろう。

「今日は特に用事もなく来ただけだ。このあたりで失礼・・・」

そう言いつつ踵を返す私であったが・・・。

「待ちな！てめえがガラクタ作った分のサービス残業をしていけや！」

なんとと言う事を言う老人なのだ・・・仕事なら明日またするといふのに・・・。

そう言うときダイムは一抱えもある風呂敷のような物に覆われた荷物を持つてくる・・・  
おそらく家具なのだろう。

「これを今日、依頼主に届けなきやいけねえ・・・今日休みなんだろう？街をふらつくついでに届けてくれ」

「ぶらつく・・・私には」

「じゃあここに住所を書いてあるからな、いいか・・・途中で絶対に壊すなよ！」

完全にダイムにペースをとられる私・・・どうも苦手だ。

どこことなくワイリー様にその職人気質がにているのが原因なのかもしれない。

実際にここで働く事になった経緯自体も、店の前を通った所でこの老人に半ば強引に配達仕事を押し付けられたからなのだからどうしようもない。

因みに私とダイムのやり取りを聞いていたルーテだが、彼女は私に助け舟を出さない。

「パンクさん、急なお仕事ごめんね。じゃあ道中気をつけてね」

この女、最近気づいたがなかなか強かである・・・そして彼女にも頭が上がらない。

紙に書かれた届け先の住所を見て私の顔は青ざめたのだろうか・・・？口が開いたままその住所から目が離れない・・・。

その住所は我々であるならば絶対に忘れられない場所だったのである。

「おい！このポンコツ!!いつまでぼっとしてやがる！きつさと行かんか！」

「ぬう・・・了解した！」

ダイムの怒声に追われる様にしてあわてて店を出る私・・・休日と言うのになんともついていないようである。

よりによつてあの場所に行かねばならないとは……。

そんな私の目の前をたくさんの車が通つていく、その中にスクーターに乗りピザの配達員がバイトに勤しむエアーマンの姿を見つけては、それがそれですぐに消えてしまう。

私は荷物を落とさないように気をつけながらも肩を大きくおろし、ため息をつく。まったくついでない。

一瞬、このままとんずらでもしようかと言う感情が芽生えるが……イカンイカン！  
明日の給料日までには我慢だ。

私は首を大きく横に振ると荷物を運ぶべくゆっくりと歩き始めた。

## V O L . 3 優しすぎる宿敵達

私はこの街から少し離れた・・・と言つても私達が住む基地ほど離れてはいない小高い丘にある場所へ向かう・・・。

そこへ私はゆっくりゆつくりと歩いていく、季節は後一月ほどで春だと言うのにまだまだ寒さが残っている・・・自分の吐く白い息を見ながら体が冷えているのか・・・とくだらない思案にふける。

目的の住所については歩き始めて15分ほどの事である。

「いらつしやいダ・・・ス・・・！ゲツ・・・あんたは！」

敷地の中からも間抜け面なロボットが飛び出して来る。

「あ・・・あんた・・・何してるんだスか？」

「・・・仕事だ。押し付けられたのだから仕方があるまい」

あちらはこちらの訪問に明らかに驚いてる様子だった・・・正直、仕事でなければ私だつてここには来たくは無い。

「勘違いするなこれは仕事だ・・・痛い目に合いたくなかつたら静かにしてろ」

相手を睨みつけ黙らせたのを確認してから私は家のチャイムを押そうと玄関先に立

つ。

「あわわ．．．ロ．．．ロック．．．ライト博士．．．大変ダスよ．．．ワイリーナンバーズが来たダスよ．．．」

私に睨みつけられ体を震わす間抜けなロボット：．．．確かライトツトとか言ったか、何やらあわあわしながら声を出そうとするが私は気にしない。

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！

正確に私はチャイムを三回鳴らす．．．すると少年の声がチャイム越しに聞こえる。

「いらっしやいませ、どう言ったご用件で？」

「フン．．．こちらカプア家具店だ。注文した商品を届けに来たぞ」

緊張でやや声がかすれるがいつもの低い声にならないように気をつけながら声を出す。まったくまるで訪問販売の詐欺でもしているかのような気がする。

「は〜い、すぐに玄関開けますね」

ガチャツ．．．！！

目の前の扉が開けられると一人の黒髪が特徴の少年が私の目の前に現れる。

「あり．．．えっ．．．!?!」

礼を言いかけたが私を見た少年の顔が驚きのあまり引きつる．．．普段の人間が浮かべる表情ではなく単純に驚きの表情である。



私の目の前にいる少年こそが我々の計画を何度も水泡に帰してきた宿敵……ロックマンである。

今は家庭用の姿をしているからロックと呼んでおこう。

「あくまで今日は戦いに来たんじゃない仕事だ。それも押し付けられたな……」

「そうだよ……ね……」

荷物を片手で上に上げながら言う私の言葉にロックは微笑む。

私は微笑む彼の耳元に顔を近づけると

「言っておくがこれはあくまでバイトだ……まあカプア家具店に悪い感情は抱かなくて。ついでもたなにかあつたら注文してくれ」

正直、私がいることによつて家具店の評判が悪くならないのかすごく不安である。

他人に対しこういう感情を抱くこと自体が私自身驚きであるが。

見たところあの家具店、儲かっているような感じがしない。

自分のせいで働き先のお得意を失うわけにはいかないのだ。

「うん……君も大変だね」

「……だな」

そうロックとやりとりをし私達は笑いあう。遠くの方で腰が抜けたライトットが這いずっているが気にしない。

「どうしようか・・・これ以上私が入ると問題だろう。後は任せようか?」

さすがにトーマス・ライトの研究所にワイリーナンバーズが入り込むのは問題だろう。

「いいよ・・・見られて困るような事も何も無いし、それに今日は戦いに来たわけじゃないんでしょ?」

そう笑顔で返すロックに甘いと言う感情を抱いたが、彼の言うとおり今日は戦う日ではない。

「では・・・あがらせてもらおう、お邪魔する」

そう言いロックと一緒に荷物を持ちながら研究所のある部屋に入る。

そこはぬいぐるみやかわいらしいベッドなどがある如何にも女の子の部屋である。

確かロールだったか・・・あの少女の部屋なのだろう・・・しかし今は部屋の主はここにいないようだ。

「今は、ロールちゃんは買い物に行っていないんだ。だから今のうちに・・・」

そう言い一抱えもあつた荷物の包装を解いていくロック。

今まで気づかなかつたが私の目の前に広がるかわいらしい机、これを運んでいたのか  
私は。

「実は今日ね、皆で秘密にしてロールちゃんにプレゼントしようって事になってね。

「これがそうなんだ」

「……ほう」

なるほど……だからあのダイムも無理やり私を行かせたのか……意地の悪い老人の顔を思い浮かべながら私は呟く。

部屋の周りを見渡すとここでの生活が彼らにとって如何に幸せな物かそれが手に取るように分かる。

ライト博士は彼らを自分の子供同然に扱い、一緒に家族として生活していると言う話を聞いた事があつたが本当だつたようだ。

無論我々も似たような物なのだが……しかし彼らは知っているのだろうか人間の都合の為だけに作られ捨てられていくロボットもいるのだと言う事に……。

目の前の少年は自分が特別だと言う事を理解しているのだろうか？

……そんな考えが喉から出かかったがなんとかそれを押しとめる。

とにかく用事は済んだのでこんな所からは早く出て行きたい。

帰ろうとそのまま玄関に向かう途中で奥の部屋から老人の声が聞こえる。

その声の調子から明らかに相手と言いつ争っているのが分かる。

「……だから！私は反対なのです！戦闘……ロボットの量産など！」

「……いえ！そうではありません！……力で押さえつけてもそれはいずれ……」

あの声が我が生みの親の生涯のライバルにしてロボット工学の父と言われるトーマス  
スライイトその人なのだろう。

「ごめん……最近、スライイト博士も忙しいんだ……」

少しさびしそうな声で呟くロック。

「……最近どうやら世界各国で戦闘用ロボットの増産が進められているらしいな。おそらくそのことでの口論だろう」

高性能な戦闘用ロボットの氾濫を恐れるか……あの平和を愛するスライイトらしいと言え  
ばそれまでだが……。

ピーー！ピーー！

そこへけたたましい警告音が辺りに鳴り響く。

奥の部屋で慌しい音が聞こえ、そこから恰幅の良い老人が飛び出してくる。先ほど電  
話で口論をしていたトーマス・スライイトである。

「大変じゃロック！どうやらあのカブキマンが再び現れたらしい……」

「分かりましたすぐに現場に向かいます。ごめんねパンクもうちよつと話をしたかった  
んだけど」

「……気にするな、いつて来るがいい。カブキマン絡みなら兄もそちらに向かうだろう」  
部屋から飛び出してきたスライイトと私の言葉に力強く頷くロック。

急な出動にも不満一つもらさずにラッシュジュエツトに乗り現場に向かつていくロツク。

因果なものであるそれを本来ならば敵であるはずの私が見送るとは．．．。

「．．．．．」

「．．．．．ふむ」

その場に残された私とライトの間には微妙な空気が流れる。

その沈黙を破つたのはライトの方だった。

「君は．．．先ほどの話を．．．」

「どうやら例の各国の軍備増強の話をしたいらしい。」

「我々の存在を理由に軍備の増強．．．自己の権力を誇示したい者には良いチャンスなんだろうな」

「それで．．．他者を傷つける為だけの多くのロボットが作られる．．．」

ライトはうなだれながら言う。まったくそのきれいすぎる考え方には辟易する。

「つまり．．．ロボット工学の父であるあなたは、私のような者は存在してはいけないと言  
う事だな？」

「違うワシは．．．」

私の言葉に詰まるライトを見ながら思う。

この男はロックマン同様にあまりにも優しすぎると。

ワイリー様からあまりライトの事を聞いた事は無いが……一度だけこう言っていた事がある。

「奴は人間と機械の共存などと言うておるがうわべだけに過ぎん……甘すぎるのじゃよ。奴が思っている以上に人間には汚い部分があると云う事を奴は認めたくないじやろくな。所詮奴も人間の側に立つものよ」

絶え間ない努力により世界に認められるライト、その超人的な才能ゆえに世界に理解されないワイリー様……。

かつてはこの二人も友であったらしいが、互いの考えも違いもありその道が交わる事は無いだろう。

ある意味でそれはライトナンバーズと我々との関係そのものと言えよう。

「まあ我らの存在も原因だろうが……私の作られた目的を知っているだろう？ 私は貴方の大切なロックマンを倒す為に生み出された……エンカーの兄貴もバレードもフォルテも同上だ。皮肉な事だが平和を守るはずのロックマンもまた新たな戦いの火種となつていると言う側面もあるとも言えよう」

「……！つまりワシがロックを戦闘用に改造したのは間違いと……？あのままワイリーに世界を征服されていれば良かったと言うのかね……？」

「・・・・・・・・・・」

その問いには私は答えない・・・答えるべきではないと思う。

「ワイリー様に生み出されワイリー様の為に戦う。それが我々の存在意義だ。それ以上でもそれ以下でもない」

ロックと話す時は抑えられていた事もこの老人を目の前にして次々と私自身が抱く考えが口をついて出る。

いかん・・・これ以上は言うべきではないと思う。この老人でもどうしようもない事なのは分かっているのに言葉が続けて出てしまう。

「やはり貴方は・・・ロックマンの生みの親だな。貴方はどこまでも優しすぎる」

駄目だ・・・この老人を目の前になると感情が抑えきれない。私のどこかで彼を嫌うようにプログラムされているのか？

「ともあれ・・・これ以上は止めておこう。だが少なくとも貴方のやっている事はワイリー博士と違い多くの人々を幸せにしている・・・これは事実だ。正直な所、認めたくは無いが」

さすがにこれ以上は私も耐えられないのでそのまま飛び出すようにライトの研究所を後にした。

彼はトーマスⅡライトは私の姿を唇をかみ締めながらもずっと見つめていた。・・・

とても悲しい目で。

私が街に戻ろうと走り始めた頃、天気は急に崩れ始め雨が降り始めた。

途中の道にできた水溜りを私は覗き込む……。

そこには見るも恐ろしい機械の姿が映っていた。

人殺しの為にしか役に立たないそれしか存在意義を見出せない鋼鉄の化け物。

私は水面に浮かぶ化け物の顔に拳をつきたてるが水が揺れるだけで水面には再び顔が浮かび上がる。

心のどこかでこの体に生まれた事を私は呪っていたのかも知れない……他のロボットを妬んでいたのかも知れない……。

知らず知らずに私はこの世界に不満を持っていた。

自分にはまだワイリー様の所と言う居場所があるのに……目的を同じくする兄弟達もいると言うのに情けなかった。

明日には元に戻ろう、明日には忘れよう。そう自分に言い聞かせながら私は拳を何度も叩きつけていた。



## vol. 4 度し難きもの

「どうすりゃいいんだ……俺どうすりゃいいんだよ……」

電話越しながらも相手が憔悴しきっているのは声でわかる。

例のお騒がせロボット、カブキマンの事件が終結してから一週間ほどたったある日、早朝からの電話に私は追われていた。

電話の話し相手はあのグランドマンである。

「どうやらあの後、皆には秘密であるのジェットキングロボ改の機動テスト行ったらしい。」

らしいのだが……ナパームマンらのせいで当初の予定を超えて大幅に巨大化。

現在のエンジンでは動くことすら間々ならないほど肥大化していることがわかったのである。

これに全てをかけるグランドマンにとつてはそれは悪夢以外の何者でもない。

「起動する事はするんだけど全然！キヤタピラとか回らないんだよ……！あれじゃあただのでかい箱だって！」

「まあ……待て、エンジンを新しい物に変えるとか増設するとかでどうにかならんのか

「？」

私はグランドマンに提案するがそれを彼は情けない声で否定する。

「今更エンジンなんて増設しても・無駄だつて……。だつてあの二人、どんどんでかく改造してるから意味が無いじゃねえか……」

どうやらあの二人は私が見た、あの時よりもさらに大型化を進めているようだ。

「俺……なんだか自信がなくなつてきたぜ……。今すぐにもあんたらの所に入りたくなつてきた……」

ついに戦士としてのプライドまで捨てかけぼやき始めるグランドマン。

「て言うかもう……。警察に出頭しようかな……。ハアア……」

いかなな……。かなり鬱に近くなつてきているではないか。

「わかつた！ わかつた！ あの二人には言つておくからとりあえず我慢してくれ」

「頼むぜ本当に頼むぜ……」

グランドマンのネガティブな言動に朝から悩まされていたが、時間は私に安息を許さない。

「おーい、パンク！ ちょっと顔貸してくれ」

グランドマンを何とか説き伏せ、その後ナパームマン達をなんとか納得させ一息つい

ている所に声がかかる。

私に声をかけるのは兄のエンカーだ・・・ロックマンキラーズ記念すべき第一号であり。

対ロックマン用に開発された敵の攻撃を利用する武器、ミラーバスターを使いこなす歴戦の戦士でもある。

もつとも最近では「和風同盟」なる訳の分からないものを結成しているのだが。

そんな兄の趣味には私は一切興味が無い。

・・・が少々、ナンバーズ以外のロボット、特にヤマトマンらを巻き込んで結成しているのは問題だと思う。

「何考えてんだ？まあいい・・・実はワイリー博士から連絡があつてな・・・」

思案する私に詰め寄る兄だがワイリー様の連絡の方が重要らしい、連絡の内容を簡潔に言う。

「・・・まあとにかく新しいナンバーズがロールアウトしたからこの基地に送られてくるらしい。でいつもの俺らで新人研修だよ」

基本的に作られたばかりのロボットは基本的な言語や知識などはインプットされているがそれ以外の知識はあまりなかったり、微妙に偏りがあったりする。

いろんなトラブルの対応など経験が必要な物もある・・・それに人間を間近で見て学



そんな私の気持ちを知ってか知らずかテングマンは手に鼻を乗せるように持ちながら地面に降り立つ。

「おお！エンカー殿にパンク殿！拙者を出迎えてくれるとは恐悦至極に・・・」  
 「てめえじゃねえよ！新しい奴はどこだ？」

兄のエンカーはテングマンに怒鳴りつける・・・いつもの事だがこのテングマン、風を操る能力を持ちながら場の空気が読めないのが欠点である。

「おお！そうでありました！拙者は護衛も兼ねて来たのであります。ささどうぞ。怒っているのがエンカー殿、そっちの赤いのがパンク殿ですぞ」

テングマンは後ろの機内に向かいそう声をかける。

機内からタラップを降りて来る一体のロボット？

・・・ん？

目が点になるとはこの事なのだろうか。

タラップから降りて来るのは金色の髪をツインテールに分けたなんとも天真爛漫と言った少女である。

元氣よく少女は私達の目の前に立つとぺこりとお辞儀をすると口を開いた。

「はじめまして！私ファイナー！よろしくね〜！」

・・・

場の空気が固まる……この少女が新しいナンバーズなのか……？

あまりの予想外の展開に私達は面食らう。

「……でテング。この子どこでさらってきた？」

笑顔でテングマンに話しかけるエンカー……まずい。こう言う時の兄は確実に怒っている。

「……拙者そういう趣味はありませんぞ」

ほう……と顔に青筋を立てながら兄は言うが私も信じられない、こんな小娘が新しいナンバーズだと言うのか……。

「ワイリー博士が作ったのが本当だとしてもこれ、俗に言う愛玩用なんじゃないのか？」  
兄は疑問を口にするが博士にそんな趣味があったらとつくの昔に作っているだろう……大体そういう扱いを受けるロボットはワイリー様からすれば到底許す事ができないはずなのだが。

「拙者も驚きましたがワイリー博士は新しいスペシャルナンバーズとはつきり言っております」

そんな兄の言葉を否定するテングマン……その彼の鼻を持ちながら兄は詰め寄る。  
「本当だな……？嘘だったら鼻へし折るぞ……」

「失礼な拙者、嘘は言いませんぞ！イテテ……鼻が曲がります……嘘は言っておりま

せぬ！」

このままでは埒が明かないのでテングマンと兄に助け舟を出すことにした。

「とにかく兄貴。この子に直接聞いたほうがいいんじゃないか？」

私の言葉にエンカーは気を取り直したのか今度は彼女・フィーネに声をかける。

「フィーネちゃんとかいったかな？君は何の目的で作られたのかな？」

「うくん……フィーネはフィーネだよ！」

ブチッ……兄の血管が切れるような音がした相手は子供、我慢だ兄よ……。

「じゃ……じゃあフィーネ。君は何かすごい能力とかはあるんだろう？一応スペシャルナンバーズなんだし……」

兄のその言葉にフィーネは目を閉じ考えるような仕草で唸っている……もしかしたらこのかわいいう外見であるフォルテやキング並の性能でもあるのだろうか？

「うくん……」

フィーネの答えを皆が固唾を呑んで見守る。そしてフィーネが口を開く。

「私わかんない！」

満面の笑みでそう答えるフィーネついに兄の堪忍袋の緒が切れた。

「ハハハハッ！フィーネ今からお兄さんと一緒にいい所に行こうか！」

そう言うときよんとした表情のフィーネの手を持つとずるずると引きずる様にし

て基地の奥に連れて行く。

兄はいきなり実戦形式で彼女の實力を見定めたらしい。

「テングマン……本当に何も知らんのか？」

「拙者、彼女を護衛してここに連れて来る事しか言われてないですぞ……」

テングマンは曲がりかけた鼻を直しながら私に言う。本当に知らないようだ。

「しかし……彼女」

一瞬テングマンの顔が本来の……戦士としての表情になる。その鋭い瞳が彼女がいなくなつた奥の通路に向けられる。

そう言えばこやつは、今の我々よりも彼女といふ時間が長い。もしかしたら隠された實力を感じ取つたのか？

「……下着の色は白でしたぞ！パンク殿！」

「……ほう。そうか。期待した私が馬鹿だった」

次の瞬間、私の拳はテングマンの顔を正確に捉えテングマンの体を数メートル吹き飛ばし、私の拳をまともに受けたテングマンの鼻は見事にへし折れていた。



## V O I . 5 存在する価値

「なあ．．．あんたら、ワシの様な年寄りをからかつて楽しいのかのう？」

私の前の立つロボットが不機嫌そうな声で話す。

そして私に抱きついて泣きじやくる少女を宥めながら、電子頭脳の処理が遅くなるのを感じていた。

あの後、すぐに兄のエンカーが研究所内の戦闘訓練を行うこの場所に連れてきた。

ここはコンピュータに蓄積されたデータを下にあらゆる状況、あらゆる環境などが再現できる。

やろうと思えばホログラムではあるものここにいない筈の者との戦いも可能である。

ワイリー様が開発した3次元立体コピーシステムの賜物である。

この新しいナンバーズのファイナーの実力を知る為、ホログラムの相手ではなくこのスナイパージョープロト、通称プロト翁に任せただが．．．。

翁のバイザー越しの単眼が私を睨みつける．．．この私ですらも冷や汗をかく程、この相手は恐ろしい。

スナイパージョープロト、彼はかつてライトの元を離れたブルースを元にワイリー様が作った最初のスナイパージョーでありナンバーズにこそ入ってはいないもののオリジナルであるブルースとその性能はまったく遜色ないという。

ライトロボを洗脳し世界征服を行った最初の計画、その後初のワイリーナンバーズの登場となった2度目の計画、ライトと共同で開発したガンマを巡る3度目の計画……。これらの戦いの際にスナイパージョー達を率いて戦ったのが彼であり、ワイリー軍団創成期よりワイリー様と共に苦楽を共にした数少ないロボットの一人である。

もともとほとんどがサポートや裏方の仕事をやっていたせいで表舞台には上がらずロックマンとも直接、刃を交える事は無かったのだが。

ガンマを巡る事件でのワイリー様がガンマを強奪する時間を稼ぐべくロックマンと単身で戦い彼を相手に一步も引かずに繰り広げた激戦は今も語り草である。

あのまま続けていけばロックマンに勝てたのではないか？ そう言う者もいる。

尤もあの時はガンマの強奪が確認された時点でプロトが退いた為に決着をつかなかったのだが……。

現在ではあまり前線に立つことも無くなり若手の戦闘訓練の仮想敵（おもにロックマン）の役をしたり、戦術の指導や日頃の悩みの相談などに周ることが多くなってきた。

彼の誕生こそが我々ワイリーナンバーズの始まりでもあるのだ。

戦いは一瞬でけりがついた……。

なかなか攻撃してこない相手にいらだったプロトの翁がフィーネの頬を掠めるようにバスターを放ったのだ。無論威嚇射撃だが……。

バスターが掠った痕に残るこげた頬を触るフィーネの顔がみるみる崩れていく……最初から私もおかしいとは思っていたのだが。

そして今、私は泣くフィーネをなんとかあやそうとしながらもプロトの翁にどう弁解しようか必死に考えていた。

「……でこの小娘が新しいスペシャルだと言うのか？信じられんのか……」

「……むう、まことに申し訳ない。スペシャルならば我々同様、何かに特化した能力でも持つと思ったのだが……」

翁はフィーネを見据えながらも疑念を抱いた瞳でこちらを見る。

「この小娘、後で解析装置にでもかけたらどうだ？ワシが見るに戦闘にはまったく向いとらん。戦闘の適性ならあのアストロの小僧よりも悪いぞ」

アストロマン……あのナンバーズでもっとも気弱で臆病な者より低い評価の下されたフィーネ……一体何の目的で作られたのやら。

翁はそのままぶつぶつ言いながら退席してしまい。その場には私とフィーネ、そして

奥で明後日の方向を見る兄のエンカーだけとなる。

「使えねえ……博士は何考えてやがるんだ」

あまりのフィーネの戦闘能力のなさに頭を抱え魂ここに在らずと言った状態の兄。

「まあ博士の事だ。何らかの理由なり特性を持つておるのは間違いないじやろうて。例えば学習機能に優れておるとかの……」

単眼を光らせながら翁はフィーネを見下ろす。

彼の言う事に理解が出来ていない様子でフィーネは笑みを返す。

我らがナンバーズには似つかわしくないが、存在そのものが無駄と言う事は無いだろう。

そうであると信じたい。

「……と言う訳で我々に新しい兄弟ができました！しかも女の子です！ワイリーナンバーズ始まって以来初の女の子です！」

手でガッツポーズを取りながら演説風味に語るメタルマン、酒も入っており気分は上々のようだ。

フィーネはもう眠いと言って、今は眠っているので主役不在の会議ではあるが今、年寄りには早寝と欠席したプロトの翁以外のこの基地にいるナンバーズが勢ぞろいしてい

た。

私も含め様々な形をしたロボットが円形に椅子を組んで並んでいる。

兄のエンカー、私、メタルマン、エアーマン、ヒートマン、シャドーマン、ストーンマン、ナパームマン、テングマン、アストロマン、マース・・・計11名での会議だ。

「まあ、先ほどパンクが言ったとおり彼女の戦闘能力は皆無なので扱いには注意する事・・・後はワイリー様の指示待ちって事だな」

扇風機を体にはめ込んだロボット、エアーマンが皆の意見をまとめようとする。

「・・・で普段の生活で誰が面倒を見るんだ？見たところ電子頭脳にろくに情報入ってないだろ？」

そういいながら腕を組み思案するのはストーンマンである。

「燃えるね・・・燃えるよ・・・女の子は」

「アース隊長の方が萌えるぞ!!しかも美人だ!!」

一人呟くヒートマンに突っ込みを入れるのはマース。

彼らルーラーズを率いるのは名前を挙げたの彼女なのだが、私の口から説明はすまない。

と言うかここで触れない方が己の身の為になるだろう。

「しかし女の子は良いですよ！目の保養になりますな・・・」



例のジェットキングロボの建造が忙しいしそもそも内蔵した武装が危険なので却下。

マースも武装がいくらなんでも危……（以下同上）

ヒートマンもやつぱり武そ……（以下略）

テングマンは空気が読めない子になると困るので却下……本人はやる気満々だったが。

アストロマンも遠慮がちに手を上げたが誰にも相手にされず事実上却下された……残るは私とエアーマン、そしてストーンマンだけとなった。

「そーいや今日はパンクが彼女の世話見たそうだぜ」

マースがそう言う……この空気はまさか……！

「妹の面倒を見るのパンクが良いと思う人！挙手で！」

私にとって死の宣告にも等しいメタルマンの声が響き渡る。

この会議にもはや関係なくなったマースやナパームマン達が手を上げる……関係ないから気楽に上げやがって……。

アストロマンも相手にされなかった悔しさを胸に涙を流しながら手を上げる……泣く位だったら譲ってやるのだが。

「私の意見は……もう尊重されんか……」

肩を落とす私……気づけば私以外の者、全員が手を上げていた。

そして会議の結果、当面私が彼女の面倒を見る事に私以外の者の全会一致で決まった・・・。

といっても私にも普段の仕事もあるのでその時にはエアーマンやストーンマンら他のナンバーズが面倒を見てくれる事になった。

しかし本当に・・・最近ついていない・・・疫病神にでも憑かれたのだろうか私は。



## vol. 6 兄と妹

「おにいちゃん！もう朝だよ！お仕事遅れるよ！」

私が目を覚ますとフィーネが私を起こそうと体を揺すっていた所だった。

さっきのは夢なのか・・・それにしても妙にリアルな夢であった。

「おにいちゃん・・・やつと起きた。私なんだかもう目を覚まさないような気がして心配したんだから・・・」

そう言うときフィーネは泣きそうな目をするが私は心配ないと声をかけフィーネを落ち着かせる。

そして時間を見ればすでに朝の缶詰工場の仕事の時間まで後・・・15分を切ろうと  
していた。

「だあああー！なんてこったー！フィーネいい子にしてるんだぞー！」

そうフィーネに言い聞かせながら私は机の上にあったエネルギーパックを飲みながら急いで仕事場に向かった。

・・・結局。

ものの見事に20分ほど遅刻をしてしまい、まだ工場長は話が分かる人物だったので

給料のダウンこそ無かったが。

朝の眠気が取れないまま私は缶詰工場にて日中の仕事に従事する事になった。

正直な話、単純な作業である。旧世紀より変わらない専用の機械が缶詰を休むことなく詰めていく。

私はそれをじつと眺めているだけである。

たまにだが不良品が混じっているのでそれを発見しては生産のラインからはずしていく。

それを夕方まで繰り返す。

気がつけばいつものように夕方になりいつものように工場長から今日の日当をもらう。

仕事から帰る道すがら同じ工場で働くおばちゃん達や同じロボットとたわいの無い世間話をしながら道を歩く。

そしておばちゃん達と別れてから、私はダイムの家具の工房で夜が更けるまで働く。いつものように：：だがそのいつものがいつまで続くのかそれは私にも分からなかった……。

不意にだがこの平穏とやらも一時の者ではないかと不安を覚える。

結果的にだが他所事を考えながら作業をしている事となり脇からダイムの怒鳴り声

が響く。

「おい！そのポンコツ！何ぼうつとしてやがる……そのあれ取って来い！」  
あれと言われても何がなんだか分からんのだが……。

とりあえず言われたとおりあれと呼ばれる、木材を持っていく。

「ちったあ、分かるようになったか……そうだよこれだ」

正直指を指されたものを持ってきただけなのだが……それにしても名前くらいはつきり言つて欲しいものである。

「しかし所詮お前もロボットだな……。もつと力の強弱を付けねえと駄目だろうが」  
「……はあ」

私は机の足の部分作りに苦戦をしていた、ロボットの我々には微妙な力加減を制御するのが難しいのである。

と言うが無論、軽く物を持つたりするなど力加減を制御する事はある程度できるが何かを作りながら加減をするというのは元々が戦闘用である私には本来不必要な物である。

それがあつた種の人間と創られた存在である我々の差でもあつた。

「ま、ここに来た時よりかはマシになつたがな……ここは俺に任せろ」

そう言うときタイムは私の代わりに家具を作り上げていく……。

あつという間に家具を作り上げそれに笑みを浮かべるダイムの顔はワイリー様の我々を見る姿を髣髴とさせる。

この2人は分野こそ違うが同じような境地に達した者なのかもしれない。

気づけば時刻は夜の10時を過ぎておりこのまま今日の仕事は終わりとなった。

「パンクさんくちよつといい?」

そうこの工房の2階から声をかけてくるのはダイムの孫娘、ルーテである。

彼女も苦手な人間の一人であるのだがここで断る訳にも行くまい。

「……何か用ですか?」

私は彼女がいる2階へと上がる、ここの2階は住居も兼ねており丁度彼女とダイムの

二人が暮らせる程のスペースがある。

「確か、パンクさんの家つて家族が多かったわよね?」

「……多いといえば多いが? ……なんだ?」

「これさあ……皆でいただいでくれない? いつもお世話になってるお礼にね」

そう言うのと彼女は箱を私に差し出す。中を確認するとチョコレートケーキであった。

「バレンタインまで2日ほど早いんだけどさ、デモンストレーションで作ったのが結

構余っちゃったんであげるね」

「むう……兄弟達も喜ぶと思う。ありがたくいただきます……」

バレンタイン・・・それは恋人同士がお互いの愛を深めるためにチョコやクッキー等お菓子をプレゼントをするという人間達の記念日である。

これは俗に言う義理チョコと言うものなのだろうか・・・？

私としてはそんな物は頭にインプットこそされていたものの正直縁遠い物であった。

「これ今はいいけど。熱で溶けるかもしれないから食べ終わったら冷蔵庫で保管してね。」

「・・・了解した」

ルートエとの話が終わると私はそのまま基地へと帰ろうと足をやや速めながらも歩いていった。

・・・。

またあの気配である、前にグラウンドマンに会った時に感じたあの気配・・・。

しかし今回は私は無視を決め込む、あちらから手は出してこないのなら放って置くのが一番である。

そして気づけば気配は消えていた・・・相手の動向が分からんのが一番癪なのだが。

「おおい！おじようちゃん。俺らと楽しくやってかねえ？」

「やめて！通してよー！」

私の進む道の前方から柄の悪そうな男達の声と女の子の声が聞こえる。

「ハア………」

その当事者達を見て私はまたため息を付く……。

柄の悪そうな如何にも小チンピラな風体の2、3人の男達……そして彼らに絡まれているのはフィーネである。

チンピラ共はフィーネを取り囲み、にやにやといやらしい笑みを浮かべる。

「兄貴……いつロボットですぜ」

子供達が一番大柄な兄貴と呼ばれる男に話しかける。

「けっけっ！人間とほとんど変わらないか……これほどまで精度が高いとその筋のマネアには高く売れるぜ」

下品でまったく持つて下劣な話である。

確か前にこう言った子供誘拐が流行っていると聞いた事がある……。

尤もそれらは例の敏腕デカのジョージの活躍によって組織は壊滅、子供達も全員救われたというが。

それをこの組織の構成員とも思えないチンピラ共は真似をしようとしているのだろうか……？

「おい！いい加減にしておけ。怖がっているだろうが……」

「なに〜!」

私の声にチンピラが反応する。

「このガキは俺の服を汚しやがったんだぞ。この服はな5万ゼニーもしたんだぞ。それと慰謝料も含めて10万お前に払えるのか〜?」

そう言いながらアイスクリームで汚れた服を見せるチンピラ・・・どう見ても5万もするような服に見えない。

「あ、クリーニング代も含めて20万な!」

げらげらと笑う男達・・・尤も人間の負の部分の剥き出しにする人間に対し私は元の・・・本来の姿に戻れるような気がした。

「そうか・・・なくに、クリーニングも服の染み出しも気にする事も無いぞ・・・。今からお前達の血で服を染めてやるからな・・・!」

そう言い放つと私はわざと大股で歩きながらチンピラ達に近づく・・・。

ようやく彼らにも私の姿が分かったようだ。

「・・・な!お前戦闘用ロボットか!」

「20万分、体で払ってやろう!お前達の体に直接なああああ!」

体から一切の手加減も無く怒気を振るい出す私・・・。

ボキン!ボキン!

私の金属の指が音を立てる……。

「さあ！じわりじわりといこうか！足か？それとも手からの方がいいか？」

「ヒイイイー……！冗談じゃねえ！ずらかるぞ！」

「あ、兄貴〜！待って〜！」

兄貴と呼ばれた男が逃げ出すと同時に男達も一斉に逃げ出す……所詮は弱者としか戦えない臆病者の集まりである。

「もう大丈夫だぞフィーネ」

「お……お兄ちゃん」

体をガタガタと震わせるフィーネ、無理も無い……ロボットと言っても彼女は人間の少女と殆ど変わりが無い。

「だが……関心はせんな。こんな時間にしかもこんな裏道を出歩くとは……」

「お兄ちゃんを迎えに行こうと思ったの……」

どうやら私の帰りが遅いので迎えに行ったものの道がわからず迷ってしまい。

基地に電話をしようものの自動販売機でアイスクリームも買った為に手持ちのお金が無くなってしまい。

裏路地に入ろうとしてさっきのあのチンピラ達にぶつかってしまった……と言う事だそうだ。



「私なら大丈夫だ……それ、私の肩は……トゲが危なかったな。背中に乗るといい……」  
「うん、ごめんねおにいちちゃん……」

「気にするな、だが次は気をつけるんだぞ」

ファイネは私の背に乗ると疲れからかそのまま眠りへとついてしまった。

「おにいちちゃん……大好き……」

すやすやと寝ながら寝言を言うファイネ……今のこの状況と私の姿はいささかギャツ  
プを禁じえない……。

私はそのままファイネを背負い、ルーテから貰ったケーキを持ちながら基地への帰路  
へと着くのだった。

## Vol. 7 皆が欲しがる物体

「おい．．．なんだよ。それは！」

フィーネを部屋で寝かせた後、私が持つケーキに気がついたメタルマンの大声が基地に響き渡る。

酒で酔っ払い達が悪くなつてはいるメタルマンは私の持つケーキを指を指しながら硬直している。

「それなんだよ？パンク」

さつきも同じことを言ったような気がしたが．．．．．

「バレンタインで作ろうと思つて余つたらしいのでバイト先の女性から貰つたのが．．．．」

「嘘つけ！おい！パンクの奴がチョコ貰つたつてよ〜！」

メタルマンは他のナンバーズも呼びつけわあわあと騒ぎ立てる：勘弁してくれ：

「自分で買ったんだろう！いやもしくは脅してむりやり作らせたんだろう！」

まったくそんな事までして手に入れる価値もないと思うが．．．．

メタルマンはなおも私が他人から貰つた事を認めようとせずに指を突きつける。

「・・・・・・・・ならば確認すればいいだろう」

ややあつてこの基地にいる全ナンバーズが見守る中・・・ケーキの箱が開けられる。

そこにはいかにも手作りと分かるチョコレートケーキがあり、真ん中の板チョコには「パンクさんと家族様へ」と書かれており

ケーキに同封されたカードにルーテの字で「いつもうちのおじいちゃんがお世話になっていきます・・・パンクさんとその御家族様へ。どうぞお召し上がってね」と言う文が添えられていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

場には重苦しい空気が流れる・・・。

沈黙破つたのはメタルマンの絶叫だ。

「うそだぁー！俺だつて貰つた事ないのに！どうしてこんな格好のパンクがもらえるんだよ！」

「・・・・・・・・知らん」

私はもう、明日のために寝なければならなかったのだからこれ以上付き合いたくなくなったのだが結局、皆でケーキをつまみにしてのパーティになってしまった。

「俺も欲しい！バレンタインでチョコを女の子から欲しい〜！」

・・・酒で酔っているメタルマンはうつとういしい事この上ない。皆で分けたケーキを食べながらもメタルマンは叫びだす。

私はフィーネの分もとっておこうとひとつをラップで包み冷蔵庫に入れておいたのだが・・・。

それをテングマンは勝手に食べようとし、私達の鉄拳制裁を受ける羽目になる。

まあいつもの事だが。

しかしメタルマンも含め他のナンバーズもどこことなく私を見る目が厳しいような・・・そんな気がした。

そんなにバレンタインと言うのは重要な物なのか私にはさっぱり分からなかった。

「女の人からチョコがもらえるなんて、もてもてだね・・・パンク」

「・・・そうなのか？でヒートマン、お前もチョコは欲しいか？」

「欲しいね、僕だったらすぐに溶かして直接お腹の中に流し込むよ」

そう言いながら溶けたチョコを指でねちよねちよさせながらヒートマンはそれを飲み込んでいた。

「・・・腹を壊しそうだな」

掴みどころの無いヒートマンと話をしながらも私は横目に地面で手をバタバタさせながら暴れるメタルマンを見る。

いい歳こいて情けない・・・ワイリー軍団最古参と言うのにその威厳ぐらい保って欲しいものである。

そんな私の頭の中に一つの妙案・・・いやある種の賭けが浮かんだ。

「そんなにチョコが欲しいならファイネに作ってもらえばよからう・・・」  
ピタツ・・・。

私の独り言に近い言葉にメタルマンの動きが止まりゆつくりとこちらを見る。

「それだよ！それだよ！パンク！あの子に作ってもらえばいいんだ。いっつも男所帯だから気づかなかったぜ」

目を輝かせ私に詰め寄るメタルマン・・・。

「だけど、彼女・・・チョコなんか作ったことないだろう？材料とかもどうすんだよ」  
ストーンマンが疑問を口に出す。

確かにこの基地にチョコを作れるような料理器具や材料は一切無い。

「大体料理の腕もどうなんだか・・・」

ナパームマンも微妙に不安のようである。

「そう言う事なら言いだしつぺのパンクが面倒見ろよ」

兄のエンカーは関係ないと言いたげに私に言い放つ・・・。

兄は和風の物しか受け付かない体質なのでケーキも一口しか食べおらず、自分で入れ

たお茶をすすりながら和菓子を食べており完全にこの話には蚊帳の外であるのだが。

その一言で流れは一気に変わってしまう……。

「じゃあパンクが手伝うって事でいいと思う奴！手を上げる」

またしてもメタルマンが多数決で決めようとする。

「……………」

もはや私はあきらめ全てを成り行きに任せるしかなかった。

……結局、そのままフィーネがチョコを作る事になり、その手伝いを私がする羽目になってしまった。

意外であったのはフィーネにバレンタインの件を教えた所、彼女自身が乗り気で基地に居るナンバーズ全員にチョコを作る事を了承した事だろう。

ナンバーズ達が見送る中、私とフィーネはチョコの材料の買い出しに街へ繰り出す事になる。

なるのだが……。

一人の少女といかつい外見のロボット……これほど異様な光景もめつたに見れないだろう。

周りの人間の目がそれを如実に表している。

「……あの子誘拐されてんじゃないの？」

「あんなロボットと二人きりにさせるなんて親は一体……」

そんな声がどことなく聞こえてくるが……我慢する事にする。

「ねえねえ後、どの材料が必要かな？」

抱えるように両手に袋に入ったチョコや調理器具を持ったフィーネが声をかける。

「むう……調べた限りではこれで大丈夫なはずだ」

「なんか足りないような……あつ！」

ドスンッ……！

目の前の注意がそれたのだろう、目の前を歩いてきた人間に当たるとフィーネは両手に抱えた荷物を撒き散らしながら盛大に音を立てこけた。

その人間は見て見ぬ振りを決め込むとそのまま歩き去る。

私はそれに憤りも覚えたがそれよりも今にも泣きそうな顔をしているフィーネをどうにかしようとしたのだが……。

「えーーーーーん！」

泣いてしまった……私はフィーネをあやそうとするが彼女の声はますます大きくなるばかりである。

「フィーネ、フィーネ！荷物も大丈夫だし……いい、痛いところは無いか？すぐに直すからそれで泣き止むんだぞ」

我ながら情けない・・・私とした事が完全に狼狽していた。

「ねえ・・・アンタ、こんな趣味持ってたの？」

後ろからかかる声に私は振り向く・・・その声の主を見て私の顔は険しくなる。

金髪をポニーテールした10代前半の少女・・・あの憎きロックマンの妹的存在のロールその人である。

「ほーら大丈夫、何も怪我してないから大丈夫よ」

彼女はファイネにつこりと笑顔を見せながら話しかける。

それも聞いたファイネも次第に落ち着きはじめた・・・。

「・・・でこの子、どこからか誘拐でもした訳じゃないでしょうね・・・」

じとりとロールは私は見つめるがこの外見ゆえのあらぬ誤解である。

「言っておくがその子は我々と同じナンバースだ」

「ふーん」

半信半疑ながらも私の言葉を聴くロール。本当の事を言っているというのに・・・。

「なら、お兄ちゃんなんだからもっとしつかり面倒見なきや駄目ですよー！」

「・・・申し訳ない」

彼女にそこまで言われる筋合いはないのだが気づけば私は頭を下げていた。

最近ファイネという事が多いせいなのだろうか私の調子は狂いつぱなしである。



「……で、何してるのこんな所で？」

「むう……実は」

私は私が持つてきたケーキのせいでこのファイネにバレンタインチョコを作らせる羽目になった経緯をロールに説明をした。

「あんた達つて……」

うむ……分かつている、分かつているからこそ言わないで欲しい……。

「……馬鹿よねえ」

「それには反論をしないでおう……」

予想通りの彼女の言葉に私は肩を落とす。

「ふくん……あんた達も大変ね」

ロールは私の向かいの椅子に座るとクレープをおいしそうに食べていた。

「いつもこの店で食べてるなんてずるいよ！おにいちゃん！今度は私も一緒に連れてつて」

「分かったファイネ……今度から一緒に食べような」

私の隣に座るファイネは顔を膨らませながらもチョコ味のパフェを食べる。

あの後ロールにチョコ作りの意見を求め足りない機材や材料を購入し、それが一段楽

したので私の行きつけの店であるローズの店で休憩がてら食事をしているのである。無論私の自腹だが……。

「パンクに妹がいただけでも驚きだけでもさかか・・・彼女までいたとはねえ」

店主のローズが笑いながら言うがそれを私はあわてて否定する。

「彼女とはただの・・・か、顔馴染みなだけだ。そういう関係ではない！」

「ふくん、人から見るとそう見えるのかしら？」

明らかに狼狽する私とは違い、ロールは腕を組みながら思索している。

「でも結構パンクってさあ、女性にもてるタイプだと思うんだけどな・・・ほら見た目はあれだけど中身は結構真面目じゃん？そのギャップに弱いつて人もいるんだよ」

ローズは説明するがそんな物なのだろうか？女性と言うのは。

「・・・参考にしておこう」

「そうそうそれなんだよね、いちいち答え方が真面目なんだもん」

そう言うとお笑いをするローズ。

「確かにそうかも」

「おにいちちゃんはまじめだからえらいんだよ」

ロールとフィーネはそれぞれ勝手な言葉を言い始める・・・どうにでもしてくれ。

「さあ、必要な物も買ったしそろそろ基地へ戻ろうか」

昼も過ぎそろそろ基地へ帰ろうと椅子から立ち上がる。

「あ、それなんだけど」

慌ててロールは椅子から立ち上がる。

「よかつたら私の家でチョコを作らない？今日はライト博士も仕事で出かけているし、ちようどこれから明日のバレンタインチョコを作ろうと思つていたし・・・」

「・・・フィーネだけならともかく私まで行つて問題ではないのか？」

ロールの申し出はありがたい、フィーネと私が作るよりも効率的にいいだろう。だがやはり日頃の敵の本拠地にまたしても行くというのは気が引ける。

そんな私の考えを見透かしたのかロールは私ではなくフィーネに話しかける。

「いいの、いいの。ね？フィーネちゃん」

「は～い、ロールおねえちゃん」

「わかつた、わかつた！ただしフィーネ。あんまりあちらではしゃぐんじやないぞ・・・」  
「は～い」

私に笑顔で向ける2人に私は折れざるを得なかつた。

どうも私は女性の扱いとやらは本当に苦手の様である。

・・・そしてまたしてもライトの研究所へと足を踏み入れる事になった。

「わあ・・・きれいな家だね、うちとは違うねえ」

「パンク・・・あんたらの基地、掃除してらんでしょかね？」

ファイネの言葉にじと目でにらみつけるロール。

あそこは前線基地も兼ねている・・・完全に清潔にするのは無理なのだが。

「おかえりなさいダス、ロールちゃん。今日はかわいい女の子も連れてくるダスね。ワシの名前はライトットダス」

「私、ファイネ！よろしくライトットさん」

ファイネはライトットにぺこりとお辞儀をする。

「これで2度目だな・・・また失礼するぞ。ライトット」

「・・・うひよ！あ・・・あんたもダスカ!? って言う事はこの子もワイリーナンバーズダスカ？」

私の出現に明らかにびびるライトット。

「そうだ・・・ワイリーナンバーズだよ」

「あんたと言いたい人は見かけによらないもんダスなあ・・・」

「どういう意味だと問い詰めたくなかったがファイナの手前、私はぐつと堪え他無いのであった。」

# v o l . 8 平和ゆえの不安

「・・・どう？口に合うかな？」

「・・・うむ、おいしい」

お茶を飲む私に遠慮がちに笑みを浮かべるロック。

奥でチヨコレートを作り始めたフィーナとロールを横目に、何もする事の無い私はあろう事か宿敵であるロックマンとテーブルを挟んでお茶を飲んでいる。

普段ならありえない状況である・・・。

「二度目は無いと思ったがまたしてもここへ来るとはな・・・」

「別に戦いさえなければ僕としては・・・」

嘆息する私に笑みを浮かべるその姿は私達の野望を打ち破ってきた人類の英雄とはあまりにも想像とかけ離れている。

「・・・あの子は新しいナンバーズなの？」

「・・・ああ。番号順ならばキングの次になるだろうな・・・」

「ワイリーが彼女みたいなのロボットを作るなんて驚きだね」

「否定はしない・・・私も驚きだ」

ロックはロールの指導を受けてチョコを頑張つて作ろうとするフィーネの姿を目を細めて見る……。

彼に見えるのは平和な光景か・・それともかつての自分の姿を重ねているのだろうか？

しかしフィーネには謎が多すぎる。その性格、容姿もそうだが一体何の為に制作されたのやら。

プロトの翁は学習能力かもと言っていたが、それには一理あると私は考えている。

事実、彼女は天真爛漫な姿とは裏腹に一度覚えた事は殆ど忘れる事は無い……。

学習能力に関して言えば一を学べば十を知る……そんな天才的なものを持っている。だからこそ私は彼女の底の知れない可能性に不安を覚える……はつきり言えば心配なのである。

彼女が私達と同種の存在へなる事に……彼女はこのままが一番ではないかと私はそう思い始めていた。

「彼女のみたいなロボットを作ったって事はワイリーも平和について……」

淡い期待を胸に抱くロック、甘い……甘すぎる……。

「言っておくがワイリー様は世界征服の為の準備を今、急ピッチでしている所だ……あの御方がそうそう諦める筈が無かるう」

「・・・そうだよね」

私の言葉に顔を俯かせ分かっていた・・・そういう風な表情でロックは呟く。そんな彼の表情を見て私はまたいたたまれない気持ちになる。

しかしそれでも彼の身の上に同情する気にはなれない。

そもそもが私は目の前の少年を破壊する為に生み出されたのだ。

兄のエンカーら同様に以前までの様にそこまで執拗にはなっていないが。

打倒ロックマンの意思は今も尚、捨てていない。

ワイリー様が世界征服を諦めていないのと同様であろう。

バラードもあのフォルテも同じくだ。

因みにだがフォルテに関してはあまりにもロックマンに対し戦闘を仕掛けるので別基地へと現在は飛ばされてしまっている。

監視役にバラードも付けているがそっちの方で好き勝手やっているらしい。

そう言えば以前の私も街中でたまたま遭遇したロールを拉致してロックマンに戦いを挑んだ事があったか。

脳裏にその時の事を思い浮かべるが、クスリと笑うロックに見透かされた気がして思考を中断する。

まあ全ては過去の事・・・私は顔をパンパンと叩くと目の前に座るロックを見据える。

「ま……こういう日もあつてもいいだろう。こうしてお茶を飲むのも悪くは無い」  
「……うん、そうだね」

お茶を飲みながらロックは笑顔で私に返す。

見れば奥でフィーネがはしやぎながらチョコに飾り付けをしているところであった。彼女とロールやロックと並べばまるで本当の人間の兄妹のような光景である。それを私は目を細めてみる。

「それにしても、パンクが彼女を……フィーネを見る顔……とても優しいね」

「フン……優しいさのレベルではお前には敵わんよ」

そうお互いに言うどどつと笑い出す私とロック。

こんな日が永遠に続けばいい……しかしそれは無理な事も理解している。

だからこそ……永遠に続かず変わるものだからこそ今が貴重に思えるのだと私は思った。

その後基地にいるナンバーズ分のチョコを作り終えた私達はライトの研究所を後にしながら歩いている。

私とロックの会話が聞こえていたのだろうか……？私の後ろを歩くフィーネは怪訝な顔をしている。



「ねえ．．．おにいちゃん？」

「．．．．．なんだ？」

「もしも戦いになったらロールおねえちゃん達とも戦うの．．？」

「ようやく口を開いたフィーネの言葉に私ははつきりと答える。

「ああ．．敵として対峙したのなら容赦はしない．．敵は倒す。それが我らと彼らの運命だ」

「嫌だよ．．．私、お姉ちゃん達と戦いたくない。だってあんなに優しいのに」

「フィーネは肩を震わせながら言葉をつなぐ．．．」

「それに私、おにいちゃん達もおねえちゃん達も．．どちらも傷ついて欲しくない。どうしたらお互いに傷つけなくていいんだろう？」

「私は彼女の頭をなでながら話す。

「それを考えるのは私の仕事ではないだろう．．それはフィーネ、お前の様な者の仕事だ．．．」

「おにいちゃんじゃなくて、私の仕事．．？」

「自分の思う事、心を素直に表せる様になったら考えればいい。慌てなくていいぞ、ゆっくりと確実に考えるんだ」

「ロック達やフィーネが考える世界が実現すれば私のような者はお払い箱だろう．．．」

彼女には・・・ファイネには変わって欲しくない、今のままでいて欲しい。

「ファイネ・・・今の気持ちを忘れるんじゃないぞ」

「おにいちゃん言う事は難しく分かんないや・・・でも頑張るね」

ああ・・・その意気だ。私はファイネに笑いかけるとそのまま彼女を背負い歩き出す。いつしか私にとって彼女はかけがえの無い者となっていた。

彼女の笑顔が永遠に変わらずに続いて欲しい、そう思い始めていた。

## vol. 9 バレンタインは何時もの如く

「おお．．．!!これが手作りのチョコ．．．」

メタルマンの感嘆とした声が基地に響く。

メタルマンに渡された物はちょうどメタルマンのそれと分かるように彼の顔をあしらった形となっていた。

他のナンバーズの物も彼らの顔を模した形のチョコとなっておりそれぞれフィーネの手から直接渡されていった。

ちなみにあのアストロマンも忘れられておらず貰った時には滝の様に涙を流しながら例を言いそのまま別空間へと姿を消してしまった．．．。どこまでも恥ずかしがりやな奴である。

「エンカーおにいちゃんどうぞ」

「バレンタインなんて貰って喜ぶような歳じゃあ．．．」

甘い物は和風の物しか受け付けないと公言している兄はバレンタインなど何処吹く風、独り寂しくお茶をすすっていたのだが。

フィーネから包みを受け取る兄はあまり期待しないような顔であったが、包みを開け

た瞬間目を大きく見開く。

「団子……？ チョココで包んでるのか？」

「ロールおねえちゃんか、エンカーおにいさんは和風の物じゃないと受け付けなくて言つてたから頑張つて作つたんだよ」

私から言わせて貰えば団子をチョコでコーティングするのもどうかと思う……見てるだけで兄は腹が痛くなつてきたぞ、妹よ。

恐る恐る手を伸ばし団子を口に入れる兄……無理はしなくてもいいのに。

「……………」

「どう？ おにいちゃん？」

黙る兄にフィーネは心配そうに顔を覗き込む。

「正直な所……俺はチョコが嫌いだが食わず嫌いだったのかもな。おいしいよ」

おいしいと答える兄にフィーネは喜び兄にそのまま抱きつく。

「だけどなフィーネ次からはまんじゅうかアンパンにしてくれよ」

「チョコは嫌いって言つてたからちよつと不安だったんだ。うん、今度からそうするね」  
そのまま兄は次々と団子をほお張りあつという間に食べてしまう。

「ギイイイ……」

不意にドアが開けられ顔を出すのは件のトラブルメーカー。

「拙者のチョコは何処でござるか……?」

招かれざる客……テングマンはそう言うと言つ直ぐにフィーネの元へと向かう……と意外にすんなりとフィーネからチョコを受け取る。

それは他の奴のチョコと違いちゃんと「鼻」が再現されており立派なできであった。

「おおー！これはこれは拙者の鼻が完全に再現されおります……実に素晴らしい出来ですな」

「この鼻を作るのに大苦戦したんだよ、ちよつと曲がつているけど私、頑張つたの」

これでこの基地にいる全ナンバーズの分を配る事ができたはずである……。

私は一応の成功を収めたこのバレンタインにホツと胸をなでおろす。

「あ、パンクおにいちゃんの方はこれなんだ」

そう言うときフィーネは包みから私のチョコを出す……それは明らかに他のナンバーズの物より大きく。テングマンの鼻なぞ霞んで見えるくらい精巧に作つてあつた……。

「あー！なんでパンクの奴だけ大きいんだよー！」

それを見たメタルマンが悲鳴を上げる。

またしても他のナンバーズ達にもみくちやにされる私、むかついたのでさつさと食べる事にした。

「フン……だつたら来年は彼女に頼めば良からうが……！」

ぼりぼり食べながら私はメタルマンに悪態をつく。

「確かにフィーネの奴はお前になついているからな、俗に言う本命って奴だな」  
腕を組みながらストーンマンはうんうんと勝手にうなづき始める。

「うん、私パンクおにいちゃんだーい好きー!」

「くううー! やっぱ本命か! 表へ出るパンク! どつちがこの基地で赤い色が似合うロボットかフィーネの目の前で決着をつけるぞ!」

そんなに本命のチョコとやらが欲しいのならちゃんと面倒を見ればいいのだろうに……いや既にメタルマンの言っている事はもはや意味が分からない。

そんな私達が騒いでいるのを横目にテングマンはフィーネからのチョコを目の前に夢見心地だ。

「拙者の為のチョコレート……フフフ! 世界でたった一つのバレンタインチョコ。まずはこの鼻からいただきましょうか……いやいやそれとも」

しかしその時、普段の奴の空気を読まない行動の報いかテングマンに悲劇が起こる。

「ねえ……食べないの? じゃあ僕食べるよ」

いつの間にかテングマンの隣に立っていたヒートマンはテングマンを模したチョコの鼻を掴むと自らの熱で溶かし、それを口に入れ始める。

「あー拙者の鼻が! いやいや拙者のチョコの鼻が! ……違う違う! チョコの拙者の鼻が

！」

ドロドロ溶け始めたチョコを慌てて口に入れるが熱かったのだろうゴホゴホとテングマンはむせ始める。

「あれ？食べるの？なーんだ」

ヒートマンはまったく罪悪感を感じていないのか溶けたチョコを指でいじるとそれをなめ始める。

「フフフフフフ．．．！ヒートマン殿！いくらなんでもそれは酷くはありませんか！」

そう言うとテングマンの目に殺気がこもる。

．．．．．それからはいつもの通り。

怒ったテングマンのトルネードホールドをヒートマンは避けるがその直線状にいたナパームマンを吹き飛ばし、その衝撃で暴発した火器がストーンマンに当たる。

そのストーンマンがバランスを崩しそれに異空間から帰ってきたアストロマンを下敷きにする。そうこうする間にテングマンはヒートマンに掴みかかる。

エアーマンがそれを止めようとするが酒に酔ったメタルマンに泣きながら足をつかれ阻まれ転倒と騒ぎは更に大きくなる。

因みにだがシャドーマンはいつの間にか姿を消していた．．．。

既に部屋から退室していたマースは除き、兄のエンカー、私、プロトの翁以外のナン

バースによる大乱闘となつてしまつたのである。

「喧嘩は駄目だよ……ねえ、喧嘩は……」

フィーネはうろたえながら周りを止めようとするが誰も彼女の声は聞こえない。

「ガキの喧嘩だな……」

「いい歳して恥ずかしいのう……」

止めるつもりはまつたく無いプロトの翁と兄は一緒にお茶に飲みながら静観を決め込む。

「フィーネ……駄目だぞ。ここは私が……」

私は声をかけるがそれは彼女には届かない。

「喧嘩は……ダメエエエエ……」

小さな彼女の体からは信じられないほどの大きな声で部屋にいる私達を一喝する。

取っ組み合いまでに発展していた他のナンバーズ達も目を点にしてフィーネを見る。

「せつかく……せつかく！私、バレンタインだから頑張つたのに……頑張つたのに！」

肩を震わせるフィーネ……その目からは次第に涙があふれ始める。

「皆に仲良くして欲しいから……喜んで欲しいから……ロールお姉ちゃんに教えてもらつたのに……」

「す……すまん、お……俺らが悪かつたからさ。な！フィーネ、ほら俺らは仲良しだ



「ぜ」

完全に酔いが覚めたメタルマンはぼつの悪そうに言うがそれでフィーネの怒りは収まらない。

「ひつく．．．そんなに．．．ひつく．．．仲良くしないならもう私、バレンタインチョコなんて作らないんだから！」

涙で目を赤くしながらメタルマン一同を睨みつけるフィーネ．．．あまりのすごさにメタルマン達は一歩程、後ずさりをする。

「．．．ひつく、．．．らい．．．みんな！みんな！大きっらい！ウワワアアアアーン！」  
涙で声をかすれさせながらフィーネは言い放つとそのまま部屋を飛び出し、出て行ってしまう．．．。

「あーあー．．．怒らせちゃった。ああ言う女の子を怒らせると後が怖いんだよなあ．．．」  
メタルマンは頭をポリポリかきながら言う．．．実際彼はうるさかっただけで大した事はしていないのだが。

「拙者のせいですな．．．むううう．．．。しかし先にやったのはヒートマン殿の．．．いかんいかん、これではまた喧嘩に．．．」

フィーネの剣幕のせいか珍しく反省するテングマン．．．乱闘騒ぎの末、情けない事にその鼻は折れている。

「僕のせい？でも泣いてる女の子も燃えるねえ・・キャハハハッ！」

そしてまったく反省していないヒートマン、彼を怒鳴りつけたくなるがフィーネの泣き顔が浮かぶとそれもできなくなる。

途中まで成功であったバレンタインの夜も最悪な雰囲気のまま終わろうとしていた。

「ガキだねえ・・・」

「そう言うなエンカー、誰だつてやんちゃな時はあるんじやよ・・」

重苦しい空気の中、蚊帳の外の兄とプロトの翁の声が虚しく響いた。

コンコン！

私はフィーネの部屋のドアを叩くが反応は無い・・・。

耳を澄ませばフィーネのすすり泣く声だけが聞こえる。

どうしたものか、こういう時どう言葉をかければいいのか私には分からない。

戦闘用の私にこういう時にどう対応すればいいのかそんなプログラムはインプット

されていない。

こういう時あのロックマンならばどう行動するだろうか・・・。

同じ様に妹を持つ彼ならば・・・そんなくだらない考えが私の頭をよぎる。

「私はもう寝るからな・・・今日のチョコおいしかったぞ」

どう言葉にして良いのか分からない私は率直にそう言う彼女の部屋の前から去る。

我ながら不器用な言葉である・・・。

そんな私の心とは裏腹にその日の夜の空は星々を綺麗に写していた。

何光年も離れた星の光・・・昔から変わらない光を私は溜息をつきながら見上げていた。

## V O L . 1 0 我らはナンバーズ

朝、私が目を覚まして部屋を出ると他のナンバーズ達の中に微妙な空気が流れていた。

無理も無い。昨日の一件以来、フィーネの事で皆は頭が一杯なのだろう。

「・・・フィーネは？」

「ああ・・・彼女ならエンカーとテレビ見ているぜ」

私の問いかけに答えるのは唯一あの場を逃れたナンバーズ、マースである。

彼からしてみればいつの間にか状況が一変しており、それに困惑としているといった様子である。

「彼女泣いちゃったんだって？」

「うむ・・・」

「テングマンが話しかけようとしたら目も合わさずに行っちゃったって、本人が凹んでいたぜ」

マースは私だけに聞こえるように小声で話す。

見れば部屋の隅で萎れた格好で肩を落としているテングマン・・・。

ある意味で今回はテングマンも被害者なのだが。

「まだ仕事まで少し時間がある・・・話をしよう」

そう言うとはファイネがいるという兄の部屋に向かって歩き出した。

「控えおろう!!この御方をどなたと心得る!!」

兄の部屋に入ると兄のエンカーとファイネと一緒にテレビを見ていた。

兄が見ているのは隠居した老人が旅をするニホンの時代劇のビデオである。

「おう、パンクか。今日は休みなんだな。前にヤマトマンから貰ったビデオをファイネと一緒に見ているんだ」

「毎回いつものお約束のの時代劇をか・・・」

私は溜息をつく、これに限らず大衆向けの時代劇と言うのは毎回ワンパターンで：何と言うかマンネリ感が否めない。

「てめえ・・・同じって言うんじゃねえよ・・・。いつ見ても面白いつて言うのが時代劇じゃねえか!てめえはだいたい和の・・・!」

私の言葉に顔に青筋を立て怒鳴りかける兄だったが、隣にファイネがいるのに気がつき、言葉を切る。

「・・・まあなんだ。人の好きな物にいちやもんつけるな。つて言う事で・・・」

明らかに勢いの削がれた兄の言葉、子供は嫌いと言っていたがさすがに邪険に扱う気はないらしい。

「・・・ファイネ」

私はファイネに声をかける。

「・・・」

しかし彼女からの答えは無い。

私の背を向けたまま彼女はテレビを見続ける。

「フオフオフオフオフオ!!ハッハッハッハッハ!!」

テレビの中の隠居した老人の笑い声が部屋に響き渡る。

老人の笑い声の性か・・・私の苛立ちが頂点に達してきた。

「・・・ファイネ!!返事をしなさい!!」

「まあまあ、昨日の事もあるし今日は俺に任せておけ・・・」

兄はそう言うが私としてはいままでずっと一緒にいたのだ。自惚れに過ぎないかもしれないがここにいる誰よりもファイネの事を理解していると言う自負がある。このまま黙って引き下がる事はできなかつた。

「ファイネ・・・昨日の事は皆、反省している。お前の気持ちも分かるがお前がずっとこのままだと皆が心配する。だからいつもの元気なファイネに戻ってくれ」

私はなんとか昨日考えた言葉をつなぎ彼女に声をかける。

彼女が先ほどから私の顔を見ないばかりか微動だにしない……。

「私……皆に嫌われちゃったね……だつてさ、勝手に怒つて挨拶もしないもんね……」

「……何？」

フィーネの意外な言葉に私は目を見張る。

「いい子にしてなきや駄目だよね……今までしてたのに……頑張つたのに」

「……」

「皆に気に入られようとして……馬鹿だよねわたし……。自分で全部台無しにして

さ……」

「……くだらんな」

私の言葉にフィーネはビクツと体を震わす。本当にくだらない……所詮子供の浅知

恵か……。

フィーネはフィーネなりに努力をしてきたのだろう、周りは誰も知らない者ばかりで

その中でどうにかして嫌われない様にあぶれない様に。

だからこそくだらないと思う……そんな我慢なぞせずに本来の自分どおりに行動す

れば良いものを……。

仮にわがままにしてもそんな事で我らが嫌うと思つたのだろうか……？見下げら

れたものである……。

「いつまでもそうしてきたいのなら勝手にしろ。私はもう知らん。ついでにお前の世話係も降りる」

そう言うのと私は踵を返すと兄の部屋から出てそのままの足で仕事に向かう。

「あいつもきつい事言うなあ……」

部屋に取り残されたエンカーはぼりぼり背中をかきながら気まずそうにテレビのリモコンを操作する。

「………」

フィーネは座ったまま手を握り締め唇を噛みながら声も無く泣いていた。

そんなフィーネの頭にエンカーが彼にしてみれば優しく手を置く……。

「ま、この「遠山の金さん」見たら。後で街でも行こうぜ、最近おいしい茶店ができただよ」

「……うん。……ねえパンクおにいちゃんも私の事嫌いになったかな……?」

「んな訳ねえだろ。パンクも含めて他のやつに謝りづらかったら俺も一緒に謝ってやるからさ」

フィーネの頭を優しく撫でながらエンカーは笑っていた。



(こりやまあ、誰でもある試練って事で……)

エンカーにしてみればこれは誰しもがまずぶつかる問題だろう。

(若いつていいねえ……)

そう言うほど彼も年寄りではないがかつては自分も当たった壁だ、彼女も乗り越えるだろう。そうエンカーは確信していた。

「おい!!パンク!!そこ不良品!!不良品!!」

工場長の声があたりに響き渡る、見れば目の前に明らかに不良品の缶詰が生産ラインに流れようとしている。

それを私はあわてて取るとなんとか事無きをえる……。

こんな事は今日で5回目である。

「大丈夫か?今日はえらい調子が悪いな」

「すいません、今後気をつけます」

工場長の言葉に私は何度も頭を下げるしかない。

今日はどうもフィーネの事で頭が一杯で作業に集中することができない……。

言い過ぎた……それが私の中で何度も後悔の念となって現れる。

イカンイカン、今は作業に集中することが何よりも先決である。

その後フィーネの事を振り払い集中しておかけかその日の作業はそのまま何とか何事も無く終える事ができた……。

その日はそのままダイムの所へ向かう……。

しかし……でも……。

「帰れ!!お前の顔なぞ見たくない!!」

一瞬自分の事かと思つたが、身に覚えがない。

どうやら工房の中でダイムと誰かが言い争っているようだ。

「せっかくアンタに活躍の場を与えようと持っているのにねえ……」

ダイムと話すのは四十代ほどのスーツを着た身なりの良い男だ。

話しぶりからするとダイムにビジネスの話でも持ちかけたのだろうか?

「この工房も古臭いじゃないか……アンタみたいな腕の持ち主をここで腐らせるには惜つた」

「古臭いじゃと!ふざけるな!ワシから大事な物を奪つておいて何を言うか!」

「やれやれ……まあ、今日は客も来たみたいだし帰るよ」

私の存在に気がついた男はそのまま工房の外に出る。

ふと私の姿を見た男は驚愕の表情をする……明らかに客ではないのは分かるだろう。

「……驚いたな、まさか……ここで働いているとか言うロボットってのは君かい?」

「……そうだが」

「……ふん、あの頑固爺がまさかとは思ったがねえ」

そう言う男はそのまま私の目の前から去る。

私はその後姿を訳も分からず見ていたが、考えても意味がないだろう。そのまま工房へと入る。

「お前は……」

ダイムは憔悴した顔で私の顔を見る。

「……スマン、今日は帰ってくれ。仕事をする気分じゃない」

明らかにいつもの調子とは違うダイム……。

「……そう言うのであれば」

そう言う私と私はすぐに工房から出る。ダイムと男の関係が気になった。

ダイムの過去に一体何があったのだろうか？だが彼のあの姿を見ると生優しい物ではないのは明白だ。

……それよりも困った事はこのまま工房で夜まで過ごす予定が狂ってしまった。

このまま帰ればフィーネと会ってしまうだろう。気まずい、本当に気まずい。

「……ハア」

私は街の路地を歩きながら今日何度目か分からない溜息をついていた。

とりあえずまだ夜までは早い、とりあえずローズの店に行つて時間を潰そうと私は考えていた。

同じ女性である彼女に相談をすればフィーネの事で何か突破口も開けるかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ローズの店があつたはずの場所を見る影もなくなつていた。

辺りには物や破片、料理の材料などが散乱していた。

「あ・・・パンク」

「・・・何があつた？」

彼女は物陰にじつとしていたが私の姿を認めるといつもの様に話しかける。

「この前のシヨバ代請求して来た奴で・・・アンタが追い払つた時の仕返しにきたつて  
訳」

例のゴロツキ共を追い払つたのは私の中ではまだ記憶に新しい。

「私の父親が飲んだくれでさあ・・・とんでもない借金を残して逃げちまつたんだよ。で借金の催促ついでにこうして嫌がらせをしていくんだよ」

「・・・・・・・・・・ふむ」

「やっぱりどんだけ努力しても無駄なのかな。あたしの力じゃ無理なのかな・・・」

へへッ．．．ごめん湿っぽくなっちゃったね」

ローズは涙ぐむがすぐに元に戻る．．．まだ二十歳にもならないというのに強い娘だ。「少なくともお前の作るクレープは美味しい、私はどんな事があるうともこの常連だ」「ありがとうね．．．今日は無理だけどもまた明日．．．って！忘れてた!!それどころじゃないよパンク!!」

札を言いかけたローズは思い出したように声を上げる。

「アンタの所のフィーネ!!あたしの店にたまたまいたんだけど因縁つけられてあいつらに連れ去られちゃったの!!あの後エンカーって言う人にそれを伝えただけど．．．」  
「何!!それは本当か?!」

私も驚きを隠せない．．．ローズの話によると今日の昼ごろにフィーネは兄と一緒  
にこの店に来たと言う。

その後、例の刑事ジョージに兄はたまたま発見されローズにフィーネを任せて逃げて  
しまったのだと言う。

そしてゴロツキどもがローズの店を襲撃した際にフィーネはローズの身内に勘違い  
されてゴロツキ共に連れ去られてしまったそうだ。

返して欲しくば借金を返せとお約束の言葉を残して．．．どこまでやり方に反吐が出  
る奴らである。

私はその時、物陰に潜む気配を感じ取る。

「……シャドーマンか？」

「……うむ」

私が声をかけると物陰からいきなりシャドーマンが姿を現す。

ローズはそれに驚くが私の仲間と言う事は分かっているので何も言わない。

「兄は……エンカーはどうしている？」

「……今、一人で奴らのアジトに乗り込む気の様でござるよ」

「……兄に自重してくれと言ってくれ。ついでに基地にいる全ナンバーズに声をかけてくれ」

「……む？」

私の言葉にシャドーマンは一瞬、怪訝な顔をするが私の意図が分かったのだろう。

「……了解した」

シャドーマンはそう言うとすぐに影に溶け込むように姿を消す。

「ね……ねえ。パンク？何するつもりなのアンタ達？」

目が点になっているローズに私は不敵な笑みを浮かべる。

「なくに!!奴らにちよっと早いホワイトデーだよ。ついでにローズ、お前に二度とちよつかいをかけん様にするだけさ」

「はあ・・・？」

「我々の大切な妹に手を出した事に後悔させてやろう・・・フフフツツ!!」

久しぶりの戦いの予感に体を震わす・・・我々ナンバーズを舐めた事を一生後悔させてやろう。

私はフィーネが連れ去られたと言う奴らのアジトに向かいゆっくりと歩み始めた。た。

・・・そんな私がアジトへの道をシャドーマンに聞くのを忘れていた事に気づくのは三十分後の事である。

## Vol. 11 守るべきもの

「全員揃ったな？」

兄の声が裏路地の一角で響き渡る。

「……一応これで全員だろう」

私は夜空を見上げながら言う。気づけば既に辺りは日が沈み夜になっていた。

できれば早くフィーネを助けたかったがこの街の各場所に日中は散っているナンバーズを集めるのは至難の業である。

それにただでさえ怪しい戦闘用ロボットが10体近くたむろしていれば普通に怪しいし、それを警察に通報する者もいるに違いない。

その為集合する事すらかなかなか難しく、なんとか集合できる場所の確保に手間取っているうちに夜になっていたのである。

「まずは作戦の再確認だが……」

兄はシャドーマンが手に入れた。ゴロツキのアジトの見取り図を見ながら腕を組む。

「まず敵の名前はドフォーレ・ファミリーとか言うギャングだ。いつぞやの誘拐事件にも関わっているらしいが警察も証拠を掴んでねえ。金儲けや自分らの為ならなんでも



する最悪な奴らだ」

敏腕刑事ジョージによって壊滅した身代金目的の幼児誘拐組織・・・それに関わっていたのであれば下手をすればフィーネの身もただではすまないという事である。

彼女は戦闘用ではないものの現在の最新鋭の技術で作られている。言うなればどんな手を使ってもそれを手に入れたい者もいないとは限らない。

「で敵の数だけど、機関銃とかで武装した人間と十数人と性能とかは大した事はないが何体かの戦闘用ロボットの確認もされているので用心するように。・・・でまず先陣なんだけど」

「は〜い！一番なら僕が行く〜!!」

「拙者の汚名ここで晴らしましょうぞ！」

ヒートマンとテングマンがそれぞれ手を上げる。

「じゃあお前ら二人は空からあそこの二階辺りの窓から中へ強襲で決定。で今回パンクの申し出で協力してくれるグランドマンが内部へ進入できるように穴を掘ってるのでそこからナパームマン、マース、メタルマンの三名は進入して派手に暴れまわってくれ」「ヒヒヒッ！今日はウオツカを3本空けたから手加減せず行くぜええ！」

「最初から最後まで派手に行くぜ!!」

「メタルとマースの2人に負けんように頑張るわ・・・」

それぞれ三人が意気込む。

「入り口はパンクがそのままスクリューアタックで一気に突破、そこをエアーマンと俺で後を追いかける形で突入する」

「我が怒りの風を奴らに思いしらせてやる……」

「……了解」

私とエアーマンそれぞれが言いながらうなづく。

「後、プロトの翁とシャドーマン、アストロマンは混乱した隙にフィーネの救出を目指してくれ。アストロマンはコピービジョンで攪乱しつつ敵に囲まれたら問答無用でアストロクラツシュだ、いいな？」

「う……うん」

「……御意」

「ワシまで動員とはやれやれ……」

3人の中でプロトの翁だけはやる気が無い様だ……無理に動くと言ってくる。そう悪態はつくが参加はするつもりらしい……。

「作戦開始はあそこの大時計が9時を知らせた時だ……鐘が三回鳴ったら開始だ!!作戦名は『ネコネコネコ!!妹奪還大作戦!!』ぬかるなよ!!」

……その作戦名もどうかと思うぞ兄よ……。

明らかに全員が呆れた顔をしたが、それも一瞬のもので全員の顔が引き締まる。

もはやナンバーズとかワイリー様が自重しろと命令等もそう言うものは関係ない。

ここにいる全員がファイネの・・・愛する妹の為に集まっているといるのだ。

(ファイネ・・・待っているよ。すぐに助けてやるからな)

私はファイネが監禁されているアジトを見ながらそう心に誓っていた。

「後、10秒ほどで鐘が鳴る・・・心しろよ!!」

「・・・了解!!」

兄の言葉に通信機越しにそれぞれ確認の声が聞こえる・・・。

夜空には風の音しか聞こえない・・・まるで嵐の前の静けさの如く・・・。

ゴーン!!

ついに一つ目の鐘が鳴る。

私も含めた全員に緊張が走る・・・。

ゴォォォォォ!!

二つ目・・・。。。

・・・そして。

ゴオオオオオォォォォォ!!

「作戦開始!!」

兄の言葉は鐘の音に消され殆ど聞こえない。

私は体を球状に変形させるとそのままギャングのアジトの大きな門に大穴を空けながら中に進入した。

「な・・・なんだ!!」

門の外側と内側それぞれ2人ずつ見張りがいたが私はそのまま内側の2人を武器を構える暇も与えず一瞬で叩きのめす。

外側の見張りも今頃、兄とエアーマンが対処している事だろう。

「キイイイイーーン!!」

「天が導き!!地が叫び!!嵐が呼ぶ!!拙者こそが天下の体現者、テングマンである!!」

見ればヒートマンとテングマンはそれぞれアジトの2階と3階へと突っ込む・・・アジトの中は大混乱となっているのが手に取るように分かる。

「貴様ら何者だ!?!」

機関銃を装備したギャング達と旧式ながらそれなりの火器を装備した戦闘用ロボットが出てくる・・・。

「アーム・・・パンクとだけ言っておこう!!」

私はそう答えるとギャング達目掛け間合いを詰める。

戦闘用ロボット達が銃弾を浴びせるがそれはことごとく空を切る。



に裁かしてもらおう。

「死ね！この化け物野郎!!」

「……!!」

見ればロケットランチャーを構えた男が半狂乱気味に私に狙いを定める。

正直、銃弾ぐらいなら問題はないがさすがにそれは無傷と言うわけにはいくまい。

私はそれを避けるべく体の全身に緊張を高めるが……。

男のロケットランチャーが糸で釣られたように上に浮かぶとそのまま天井に溶け込むようにして消え去る。

哑然とする男の前で壁からすり抜けるようにして現れる一人のロボット。

「お……おぼけだぁー!!」

男はいきなり壁から這い出るように現れたアストロマンにびびり勝手に転げて気絶した……。

むしろ脅かした本人であるアストロマン自身が男の声に驚いていたのだが……。  
オロオロしていたアストロマンは意を決したように私に話しかける。正直こう言う時はさっさと行ってほしいものである。

「あ……ファイネちゃんだけどこの地下にいるみたい。そこへこのボスみたいな人が逃げていきました!」

「……アストロ、案内しろ!!」

「……うん!!」

アストロマンの案内で私はアジトの地下へ足を進める。

私が地下室の鋼鉄の扉をこじ開けるとそこは以前金庫だったのだろうか？  
かなりの広さがある空間である。

「おにいちゃん!!」

ファイネの声が空間に木霊しながら響く。

ファイネの体はクレーンのような物にくくりつけられたロープにつるされており、そこにはスキンヘッドで小太りのいかにも組織のボスと思しき男が立っていた。

悪名高き組織のトップであるドン||ドフォーレその人である。

「勝手な事をすればこの娘の命はないぞ!」

彼はファイネを人質にとるつもりらしい……如何にも三流の悪役が考えそうな事だ。

「妹を返してもらおうか……!」

私は彼の忠告を無視しそのまま歩み寄る。

「ならば! ルムガビースト! こいつをかみ殺せ!」

「グルルルウウー!!」

私の目の前に大きな犬型のロボットが姿を現す……。

「こいつはな．．．とある裏のルートから仕入れた奴だ!!お前ごときには倒せぬわ!!ワツハツハツハ!!」

「こいつごとき．．．なめられたものだな私も」

「なに?」

ドフォーレの言葉に私は嘲笑を浴びせる．．．目の前の現れた犬型のロボット。それは我がワイリー軍団で使われていたフレンダーを改造した物であった。

しかも見たところ大して性能も上がっていないように見える．．．この程度の物が裏ルートでしか入らないとは笑うしかない。

「おのれえ行けえ!焼き殺してしまえ!」

ルムガビーストの炎が私の体を包み込む。

「いやあああぁぁぁぁぁぁ!!」

ファイネの絶叫があたりに響くわたる。

「ハハハツハ!!わしに逆らう者がどうなるか分かったか!!」

ドフォーレの嘲笑が響く．．．。

「．．．正直この程度の温度で私を倒そうなど片腹痛いぞ．．．」

「なに．．．!!」

ルムガビーストは相変わらず火炎放射を行うがそのまま私は体を球状に変形させる



と回転しながら相手の火炎放射など構わずに口を目掛け体当たりをかます。

相手の体を突き抜け地面に降り立つ私の背でルムガビーストは爆発し四散する……。

「な……なにいい!!」

「さあ遊びは終わりだ……」

私は一歩、また一歩と間合いを詰めていく。

「寄るな!!これ以上近づけばこの娘の命はないぞ!!」

銃を取り出すドフォーレ……しかもそれは対ロボット用に貫通力を高めた銃弾がセツトされているのが確認できる。

家庭用となんら変わらないフィーネに当たれば致命傷は避けられないだろう……そう当たれば。

「好きにするがいい……!」

私は一向に構う事無くドフォーレに歩み寄る。

「おのれえ!ならば小娘の無残な姿を見るがいい!!……ヘッ?」

ドフォーレは後ろに振り返りロープにつるされたフィーネを狙おうとするが……そこに既にフィーネの姿は無い。

私がドフォーレと話をしている間にアストロマンが彼女を救出していたのである。

「アストロ!!彼女を安全な所へ!!」

「・・・はい!!」

そう言うのとすぐにフィーネと一緒に異空間へと消え去るアストロマン。

「ななな・・・!!何者だ!!一体・・・貴様は!!」

「お前さんはいらん相手に喧嘩を売った。ただそれだけだ」

私はそう言うとそのまま彼の顔にパンチを一発（無論手加減した）を叩きこむ・・・私の鉄拳を受けた彼はそのまま意識を失った・・・。

気絶したドフォーレを引きずりながら外へ戻ると既にあれほど豪勢な造りだったアジトは瓦礫の山と化しており我々によつて縛り上げられたギャング達が庭に並べられていた。

「この借用書とか言うの燃やしていい?」

「いいぞ、ヒートどんどんやっちゃえ!!」

ヒートマンの言葉におそらくアジトの酒を飲みながら、飲めない分を持ち帰ろうと集め始めているメタルマンが喝采にも似た声をあげる。

ヒートマンはそのまま手形の入った借用書を一枚一枚、丁寧に燃やし始める。

これによつて彼らに苦しめられている者も救われるのだろうか。

「よし!!すぐにずらかるぞ・・・ここに警察が向かっている様だぜ。て言うか俺が呼んだんだぞ」

兄の言葉どおり遠くからはあの聞くのも嫌なパトカーのサイレン音が聞こえてくる。しかも音からしてかなり数である。これだけの騒ぎを起せば無理もないだろう……。

「作戦成功!!撤収く撤収!!」

そのまま私達は夜の闇へと消えた。後に瓦礫の山を残して……。

「ちい!!遅かったか!!」

現場にジョージとヤマトマンが辿り着いた時には既にパンク達が去った後だった。

抜かりの無いジョージはロボットポリスにギャング達の身柄の確保を命じると縄で拘束されたドフォーレの元へと歩み寄る。

「ドン!!ドフォーレ殿。貴方を銃器取り扱い違反、及び危険ロボット不許可所持の現行犯で逮捕する。ついでにこの前の誘拐事件についてもゆっくり聞かせてもらいますよ」

「……くそっ!おのれえ……!」

ドフォーレは観念したかのようにがっくりと肩を落とす。

「今回も彼らにやられましたな」

「言うなヤマトマン……まあ今夜はあいつらに感謝だ」

そう言うとジョージは踵を返しロボットポリス達に命令を出し始める。

ヤマトマンはその光景を複雑な心境で見ている。

(彼らが悪であるのは間違いない・・・その悪が我らが裁けなかった悪を裁くとは皮肉よな・・・)

ヤマトマンはそう自嘲気味に心の中で呟くと自らもロボットポリスを率い現場の調査へと赴いていった。

・・・そして同時刻。

シャドーマンはアジトの跡地を見下ろせるビルの上立ちながら全員の退却を確認し終えていた。

「・・・総員の退却を確認」

一言呟いたシャドーマンは後ろを振り返る。

「・・・そろそろ出てきたらどうでござるか？拙者からはそうそうと気配は消せぬでござるよ」

闇に向かい言い放つシャドーマンの前で闇が揺らめく。

そしてやや間があつて・・・。

「ふむ、さすがはワイリー軍団の諜報活動を総括する立場にあるだけの事はありますね」

そう一言、声を出した闇は形をとり始め・・・黒衣のローブで全身を包み込んだ一体のロボットに姿を変える。

「お主・・・先ほどの我らの活動を見ていたとなると。ギャング共に雇われた者でござる

か？それとも・・・」

「いえいえ、ただ面白そうだった・・・それでは理由にはなりませんか？・・・おおつと私の名前はフアントムマン、以後お見知りおきを」

シャドーマンの質問に驚くような仕草で答え、自らの名前を名乗ったフアントムマンは優雅に一礼をする。

「質問に答える気はないか・・・ならば！」

「お互い闇を・・・この状況を最大限に使えるもの同士。まともにやればただでは済みそうにないですね。ですがここは退きませんか？お互いに」

「ほう、面白い」

シャドーマンとしてはようやく姿を現した相手の正体はなんとしても突き止めたいところである。

おそらくパンクや一部の者が感じたと言う気配はこの者であろう・・・。

例のカブキマンの事件然り・・・近年続発するロボット暴走事件が発生する前後に黒い影を見たという目撃証言がシャドーマンの調査の結果、判明している。

これが単なる偶然であるはずが無い。おそらくは全ての事件にこのフアントムマンが関わっているのだろう。

「一つだけ聞きたい・・・続発するロボット暴走事件はお主の仕業か？」

「はい・・・そうですよ」

シャドーマンは一瞬あつけにとられた・・・相手がまさかあつさりと認めるとは思わなかったのだから。

「・・・ふむ、こちらにも質問に答えましたので一ついいですか？」

「なんでござるか？」

「貴方達にとつて兄弟とは・・・こういう風に体を張つてでも守ろうとするほど大事なものでですか？」

「・・・は？」

相手の意図がまったく分からないその質問にシャドーマンは目を白黒させた・・・。

「・・・拙者はともかく。同じナンバーズ同士、仲間意識が出来ているのは確かであるうな」

「ふむ・・・どうやらそのようですね」

シャドーマンとしては先ほどの質問で完全に勢いがそがれた形になったが相手を逃がすつもりなど毛頭無い。

シャドーブレードを手に取ると相手との間合いをギリギリと詰めていく。

「やれやれ・・・仕方ない」

フアントムマンもシャドーマンに呼応するように構える。

(こやつ・・・なかなかやりおるな)

シャドーマンは一切の殺気を感じぬ敵に違和感のような物を感じていた。

どんな者であれ気配を完全に消す事などできるはずが無い・・・。

まるで名前の通りの亡霊・・・シャドーマンの頭の中にはそんな考えが浮かぶ。

「まずは・・・シャドーブレード!!」

「フツ・・・ダークマタークラッカー!!」

シャドーマンがシャドーブレードを放つと同時にファントムマンは右腕から闇色の鉋物らしき物体を放つ。

ガキンツ!

鉋物が碎ける音が辺りに響き渡る。

お互いの攻撃が相殺される形になりシャドーブレードも鉋物と一緒にきえさるが・・・  
碎けた鉋物はそのままシャドーマン目掛け勢いよく飛び散る。

「・・・ッ! 反射弾としての性能もあるのか?」

無論そんな物は俊敏さではナンバーズの上位に入るシャドーマンに当たる事はなかったが予期せぬ攻撃を避けた為、体勢は大きく崩れる。

(しまった・・・)

シャドーマンは内心舌打ちしていた・・・相手は自分とほぼ同等の実力を持つ。この隙

を逃すはずは無い。

しかし……。

ファントムマンは何もせずに体を中に浮かせると体の全身をゆがませ始める。

徐々にはあるがその体は闇に溶け始める……この場から脱出する気なのだろう。

「今日は戦いに来たのではありません……ここで退散するとしましょう」

「ぬぬぬ……」

恥辱に体を震わせるシャドーマンにファントムマンは意に介さずと言う風に言葉を続ける。

「いずれまたお会いしましょう。ではこれにて……」

そう一礼するとファントムマンは完全に消え去り辺りには闇が残るばかりである。

「この借りは必ず……」

そう言うシャドーマンもまた姿を消す。

眼下にはジョージにより連行されていくドフォーレファミリーの面々の姿が映し出されるのみである。

こうしてドフォーレファミリー壊滅の記事は次の日の新聞、ニュースで大きく取り上げられる事となる。



## Vol. 12 変わるもの

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

私の体に抱きつき、謝り続けるフィーネ……。

さすがにあれだけの騒ぎを起こしてすんなりと逃げ切るのは不可能であり、我々は街の各所に造られたロボットポリスの包囲網をかくぐりなんとかこの基地まで逃げ切る事ができた。

全員の無事を確認し終えた時には日付も変わり太陽が昇りかけていた……。

「気にすることは無い。我らは当たり前前的事をしたまでだ」

「あたりまえ……?」

私の言葉にフィーネはきよとした表情で私達を見る。

「そうだ。我らはワイリーナンバーズ!!偉大なる天才科学者アルバートWワイリー様により生み出された兄弟だ。兄弟が危機に陥った時に助ける理由などないだろう?」

「くせえぞパンク!お前らしくなく熱いじゃん……」

メタルマンが茶々をいれるが気にしない……。

「ナンバーズ……兄弟。でも私は皆の事……その……」

「そんな事なら気にするな。テングマンとかはいつつもこんな事してるんだよ」  
フィーネを慰める様にエアーマンが声をかける。

そこに慌ててテングマンと彼に引つ張られたヒートマンがフィーネの前に進み出る。  
「むむむ．．．拙者のせい．．．？あれはそもそもヒートマンのせいであるのだが．．．  
ええい!!ともかく拙者のせいで騒ぎを大きくしてしまい誠に誠!!この通り許してく  
だされ」

「キャハ．．．!!なんだか良く分からないけど謝るねえ。来年もチョコでねちよねちよ  
したいからさあ。ごめんねえ」

頭を下げ謝るテングマンとまったく反省していないが一応謝るヒートマン。

そんなヒートマンに苛立ちながらも彼に掴みかかるテングマン。しかしヒートマ  
ンは自身の体の全身を炎で包み込み、逆にテングマンを黒焦げにしてしまう。

プスプス音を立て足を痙攣させながら横たわるテングマン．．．。

それを見たメタルマンが酒が入っているせいもあるのか地面を叩きながら笑い出す。  
私とフィーネは顔を見合わせるとプツと頬を膨らませたと思えばついに耐え切れず  
息を吐き出す．．．。

それはいつしかその場にいる全員の笑いへと変わる。

ようやく．．．バレンタインで尾を引きずっていた気まずい雰囲気全て吹き飛ばす

笑い声であった。

黒焦げとなったテングマンはある意味でやられ損ではあるのだが……。

フィーネ誘拐事件もとイドフォーレファミリー襲撃事件の一件から一週間ほどの月日が流れた……。

その間フィーネは持ち前の明るさを取り戻しいつもの天真爛漫な彼女に戻った。

ある種、兄の入れ知恵なのだろうか？我々に対しても言いたい事ははつきり言うようになり、時にはわがままに我々に反抗もある程度するようになった。

それが彼女本来の姿なのだろう、我々はそれに手を焼きつつも充実した毎日を送るようになっていった。

「おにいちゃん、お弁当忘れてるよ〜!!」

今日も元気なフィーネの声が響き渡る。

最近どうやら勝手にまたロールの所へ行ったらしく、そこで学んだと言うお弁当を仕事に向かう私達に毎朝配るのが彼女の日課となっていた。

「……むう。すまん慌てすぎたようだ」

「はい!! 気をつけてね!!」

弁当を受け取るとフィーネの見送りを背に私は街に向かい駆け出す。

その日、工場での仕事を終え。私はいつもの様にダイムの工房へと向かう。

いつぞやの男がやって来て以来ダイムの様子が少しおかしいが彼が口を開かない以上、真相を知る事はないだろう。

時とは非情な物、いきなり私の目の前にダイムは立つところ一言告げる。

「お前……明日から来なくていいぞ。クビだ!!」

「……………」

いや本当にいきなりだった。正直こちらにクビになるほど不備を起こした事は無い。それならばなぜ……?」

「お前のようなポンコツの面倒を見るのは正直もう勘弁だ!今日までありがとうな……ホレ!!これは退職金代わりに持っていけ!!」

そう言うたダイムは金が入っているともしき封筒をこちらに投げるようにして渡す。いきなりのクビには何か理由でも……?」

私としてはいきなりのクビを宣告されて黙って引き下がる訳にはいかない……。

「うるせえ!もともとワシはロボットなんざ大嫌いだっただんだ!!たまたま気まぐれで気をかけてやったら調子に乗りやがって!!ワシの前に二度と姿を現すな!!この機械人形が!」

機械人形・・・それはロボットの事を侮辱した言葉である。

「・・・・・・・・了解した。そこまで言うなら辞めてやろう!!そんなはした金はいらん!!世話になったじゃあな!!」

その言葉に私は怒気を隠そうとせずにそのまま工房を後にしようと思いを返す。

上の階から慌てるような音と共にルーテが降りて来る。

「おじいちゃん!いくらなんでも・・・・・・・・!!」

「うるせえ!!ここはワシの工房だ!嫌ならお前も出て行け!!」

お互いの顔を合わせにらみ合う二人・・・それにととうとう耐えられなくなった私は声を上げる。

「・・・・・・・・もういい!!私が出て行く!!ではな・・・・・・・・」

そう言うのと私はそのままダイムの工房から出て行く・・・・・・・・。

理由は分からない・・・だが二度とここには来れないそれだけは確かなようだった。

それから私はダイムの工房に立ち寄ることは無くなったが、それでも日々の生活が忙しい事には変わりはない。

そして気づけば五日程の時間が過ぎていた。

「やあ・・・・・・・・君はダイムさんの所のお手伝いだよね?」

工場の勤務が半日で終わりローズの店で休憩をしていると一人の老紳士が私に声を

かける。

「・・・あなたは確か」

この老紳士には見覚えがある。前に何度かダイムの工房を訪れているお得意様の人である。

なんでもかつての上流階級の流れを組む。かつては貴族の位も得ていた名家であつたそうだ。

現在は没落しインテリア関係の仕事をしていると言つていた・・・だからなのかこの老人の顔ははつきりと覚えていた。

「いやあ、ダイム君とは古い付き合いだね。あのロボット嫌いの彼が君を雇つたと聞いたときは本当に驚いたよ」

ロボット嫌い・・・？そんな事は一度も聞いたことは無い。

私は既にダイムの工房をクビになつている事を話すと老紳士は残念そうな顔をし目を伏せる・・・。

「差し支えなければ教えていただけませんか・・・工房の親方の過去を。そしてあの時来たあの男の事も・・・」

「そうだな君には聞いてもらつたほうがよきそうだ・・・だがあの男とは？」

老紳士に前にダイムと言ひ争つていた男の話をする。

「ふむふむ……なるほどねえ彼か……。まあそれはさておきまずは何を話そうか。そうだな彼の生い立ちについて……」

老紳士はうなづきながら私にダイムの過去を話し始める。

かつて若くして名工とまで言われるほどの技術を持つ若者がいた。

彼の作る家具は命を吹き込まれたかのようにそれはそれは見事な物だった。

彼の工房には同じ道を志す多くの仲間や弟子達が集まり日夜、自らの技術を磨かんとしていた。

……しかし、そんな彼らの時代も終わりを告げる。

一人の科学者が多くの苦勞と挫折の末、生み出した機械……ロボットと言われるものが現れてから彼の運命を大きく狂いだす。

当初こそは名工と言われる者のレベルの物をロボットが造れるはずも無くまだお互いの共存ができていたと言えよう。

しかし彼らはロボットは違った……一度見たものならある程度の模造もできるし。自分の判断で作業をする事もできる。

脅威としか言い様のない作業の精度を持つロボット達に人間が太刀打ちできるはずも無く。

あつという間にそういった職人などと言われる人間は淘汰されていった。

そして若者の工房からもその現実から挫折し一人、また一人と人が去っていった。その若者ほどの腕を持つていればこの競争にも打ち勝つ事ができたのかもしれない。しかしそんな人間が五万といえるはずも無くいつしか若者の工房は寂れていった。

その後、彼はロボットを嫌い世界に背を向けた・・・それでも自らの道を捨てる事だけはしなかった。

彼は仲間も家族も・・・誰もいなくなつた工房で一人働き続けた・・・。

その彼こそがあのダイヤモンドだったのである・・・。

「まあ歴史の流れと言うもので・・・仕方の無い事ではあるのだがねえ」

老紳士はそう言うと言つて紅茶をすすりながら胸に溜まつた物を吐き出すかのように息を吐く。

「つまり親方は我々に仕事を・・・居場所を奪われたと言つ事ですか？」

「まあ・・・単純に言えばそう言う事になるが・・・それ以上にね」

私を見つめる老紳士の顔はますます陰りが見える。

「ダイヤモンドに会つていた人物の話だけだね・・・ほらあそこがその男の会社だよ」

老紳士が指を指す方向に顔を向けると大きなビルが目につく・・・たしかあそこは？

「あれはカプアコーポレーション。家具を取り扱う一流メーカーさ。うちも利用しているがね。でその社長の名前がウォーレンⅡカプアさ」



カプアコーポレーションとは世界でも有名な家具メーカーだ・・・作業用ロボットを使いその高い生産性と技術を持ってかなりのシェアを誇る。

たしかうちの基地にある机のいくつかもそのメーカーだったはずだ。

その会社の名前に私は少し違和感を覚えていた。

「もう分かっていると思うけど・・・社長のウォーレンとダイム君は親子だよ」

「やはりか・・・」

老紳士の言葉に彼も含め私も深い溜息をつく。

そのウォーレン、ロボットの登場により現実に挫折しカプアの工房を去っていった者の一人である。

そして数年後、彼はかつて学んだ家具を作る技術を利用しそれを作業用のロボットに学ばせる事により、自ら立ち上げた小さな会社は他社のメーカーに勝る精度を誇る企業へと成長させる事ができた。

カプアコーポレーションの台頭は細々と経営を続けていたダイム含め多くの技術者の止めを刺したことに変わりない。

自らが頑なに守って来た居場所を最終的に実の息子に奪われる形になってしまったのだ・・・これほどショックな事もあるまい。

私は過去を知る前からダイムにワイリー様の姿を重ねていた。

その天才的な頭脳ゆえに世界に認められず何度も己の野望を達成しようとしたワイリー様。

類まれな技術を持ちながら時代の取り残され繁栄する世界に背を向けたダイヤモンド……この二人は目指す道は違えど一緒にタイプと言える。

「おっと、そろそろ次の仕事の時間だ。まあ君もそんなにダイヤモンド君を悪く思わんでくれ」  
そう言うとき老紳士は踵を返し街の大通りへと消えていく。

そしてその場には私だけが取り残される。

私は常にロボットは人間により使役され搾取されるものだと思っていた。

しかしダイヤモンドの様に我々に居場所を奪われた者もいるのだ……我々もダイヤモンド達から見れば加害者なのだろう。

ローズに代金を払うと私はそのままダイヤモンドの工房へ向けて歩き始める。

どうしても彼の口からもう一度だけ聞かなければならない事がある……。

私はダイヤモンドの工房の目の前に立つと息を整える……正直かなり緊張している。そしてそのまま工房の中へと入る。

「親方……親方はいるか？」

「……………」

私に答える者は無くただあたりには静寂が支配しているだけである。

「・・・よう、また会ったな」

静寂を破るその言葉に私は振り返る。そこにはいつぞやのスーツを着た男が立っていた。

ダイムの息子にして先ほど話題に出たウォーレン・カプアその人である。

「親父はいるか？」

「いや・・・私もさつき来たばかりだ」

男の問いに私はぼつの悪そうに答える。正直この男がいるとダイムに事の次第を聞くのが気まずくなるのだが・・・。

「いつもなら俺が入った途端に怒鳴り返すんだが、静か過ぎるな」

「確かに・・・妙だ」

そのまま私達二人は工房の奥へと進む・・・私達の不安は的中した。

「お・・・親父!!」

工房の奥で倒れていたダイムにあわてて駆け寄るウォーレン。

その顔は死人のように青白く、息も絶え絶えであった。

「お・・・おい!!親父しつかりしろ!!きゅ・・・救急車!!早く」

「・・・わかった!!」

ウォーレンの声にはつとなり私は工房の2階にある電話から救急車を呼んだ。

それからは慌てすぎてあまり覚えていない。

気づけば搬送されるダイムと一緒に救急車に乗り込んでおりそしてそのまま病院の手術室の前でウォーレンと一緒にダイムが手術室から出てくるのを待っていた。

「親父はな十年ほど前から心臓を悪くしていな・・・」

ウォーレンは夕日が射した空を見ながらぼやきがちに言う。

「歳だつての・・・良い病院に入つて養生すりやもつと長生きもできるのに。あの頑固親父、首を縦に振りやがらなかつた」

おそらくダイムはこれを口実に工房を奪われるのでないか疑心暗鬼になつたのだらう。

「いつ倒れても大丈夫なようにと勉強もかねて娘のルーテを行かせていたのに・・・」

ウォーレンは頭を抱え溜息をつく。

「お父さん!!おじいちゃんは!?!」

場の雰囲気も気ままずく病院に来る患者の数を気晴らしに数え、五十六人目を数えようとしてた時・・・。

いつもの作業着とは違い、今時の女の子が着る服に身を包んだルーテが私達を見つけ駆け寄る。

「まだ手術中だ。正直どうなるか分からん」

ウオーレンは立ち上がりルーテの問いに首を振りながら答える。

「そんな……」

ルーテは口を手で押さえその顔はみるみる青ざめる。

「あの頑固親父が意固地になったからいけないんだ。お前の責任じゃない」

ウオーレンの言葉に何とか落ち着きを取り戻すルーテ。

その時、手術を終えたダイムをストレッチャーに乗せた医師が私達の前に現れる。

「先生……親父は？」

「手は尽くすだけ尽くしたが……正直な所、本人の気力しだいでしょう」

「……そんな」

医師は首を横に振りながら答える。

病室に運ばれたダイムが意識を取り戻したのはそれから間もなくだった……。

「親父!!」

「おじいちゃん!!」

ウオーレンとルーテはダイムが目を覚ましたのを見ると顔を輝かせ、あれやこれやと

ダイムに話しかける。

「……お前は？」

「……」

私の姿に気づいたダイムはばつの悪そうな顔をする。

それもそのはず彼にとつて我々ロボットは不倶戴天の敵である……それにクビにしたにもかかわらずここにいるのだから。

「意識が戻り何より……では私はこれにて」

「……ちよつと待て」

さすがに居たたまれなくなった私はその場を去ろうとするがそれをダイムが引き止める。

「お前に頼みたい事がある……」

そうダイムは語り始める……それは今、製作途中の机を作つてほしいと言う話であった。

無論私は最初は断つた。いくら工房で働いていたとは言えダイムの域に私はとてもじゃないが達しているとは言い難い。

「お前には俺の技術を全部見せてきた……頼む!! 図々しいのは分かっている。だが仕事を途中でホッポリ出すなんて死んでも死にきれねえ……」

興奮したのか息をぜいぜいしながら私に哀願するダイムの姿を見て結局私は折れざるえなかつた。

「頼む……設計図どおりに作れば大丈夫だ……」

「……了解した」

そうやりとりを交わすと私は病室の扉をボタンと閉じる。

沈みゆく夕日を背にしながら基地への帰路に着く私の目の前に小さな影が目に入る。

その影は私を見つけると一直線に私に向かって駆け出す。

「おにいちゃん!!」

「……フィーネか。良い子にしてたか？」

「……うん!!」

そう言うときフィーネは私の背に乗り私はそのまま歩き出す。

「……? おにいちゃん、元気無いの?」

「こう言う時ばかりは彼女は鋭い……」。

「ああ……ちよつと色々あつてな」

沈みゆく夕日を見ながら私は晴れぬ事の無い思いを胸に残し歩き始めた。

## V O L . 1 3 魂を吹き込め

「……でこれをどうしろと？」

時間は深夜、ダイムの工房で私は彼から受け取った設計図を見ながら頭を傾げていた。

私も一応ダイムの元で働いてきた自負がある、だからこそこれを見ながらも机の一つぐらい作れると思ったのだが。

さすがは天才職人ダイム・カプア！必要最低限の事しか描かれておらず私の戦闘に特化した電子頭脳ではまったくもって理解不能である。

とにかく設計図と睨めっこをしても埒が明かない。

善は急げ!! ……急がは回れと言う言葉もあるが。

私は木材を持つと設計図通りに作ろうと作業を始める……。

気づけば朝になっていた。辺りはまだ薄暗いがどこかで鳥の鳴く声も聞こえる。

私の目の前にはまるで子供……否それ以下の者が作ったかのような歪な形の机らしき物が立っている……いや立っていた。



先ほどその机らしきものはバランスを崩し地面に横たわっている。

無理だ……私の頭の中ではその言葉が埋め尽くされる。

所詮機械に過ぎない私には無理なのだろうか……

「ええい！何か良いアイデアが浮かぶまで街に出かけよう……」

一人虚しく叫ぶ私は作業道具を置くと街へと繰り出す。

街に繰り出しながら私は街の建物の形や車などを観察しながら良いアイデアが浮かばないか考えていた。

正直そう言う目で周りを見るのは初めてである。

私が周りをじろじろ見るたびに目線の先にいる人間が驚くが、もはや背に腹は変えられない私はそんな視線は一向にお構い無しに辺りを見渡す。

基地にいるナンバーズ達に相談する事も考えたが生憎こう言った事に精通している者はいない……

他人の協力を仰ぐと言う事で私は一つ思いついた事があった。

彼に会えば何か分かるかもしれない……彼の意見を参考に見よう。これは一種の賭けである。

「……ロックマンはいるか？」

私は彼の住む研究所の前に立つと間抜け面をしたライトットに言い放つ。

「いるダスけど・・・今日は何をしにきたんだスカ？」

「・・・相談に乗って欲しくてな」

そのまま研究所の入り口のチャイムを鳴らすとややあつてロックが姿を現す。

「あれ？パンクどうしたの？」

「むう、実はお前に相談したい事がある」

「それって・・・フィーネちゃんの事？」

「いやそれもゆくゆくは聞きたい物ではあるが今日は違うのだ」

人の良いロックはそのまま私を研究所の中に招き入れると彼の部屋で相談を聞いてもらう事になった。

ロックが出したお茶と茶菓子を食べながら正面に座る私はロックに話をきりだす。

「ロックマン、お前は机を作ったことはあるか？」

「・・・え？・・・机？」

私の突然の質問にやや困惑気味な表情をするロック。

「まあ驚くのも無理は無い・・・実はな」

私はこういう話をまとめるのは苦手だがそれでも必死に考えながら話を続けた。

ダイムの事、ダイムから請け負った仕事の件。ついでに妹との付き合いのコツも聞いておいたのだが・・・。

正直な所、話をしてている自分でも分からなくなりそうな取り止めの無い話ではあったが、ロツクはそれを一つも嫌な顔をせずうんうんと頷きながら話を聞いてくれた。

「その設計図見せてもらってもいい？」

突然ロツクは閃いた様に私に尋ねる。

「むう……これだが私には何がなんだか理解不能なのだ」

その設計図には確かに机の作製のおおまかな工程が描かれているが肝心の細かい数値や順番と言った物が一切書かれていない。

それゆえに私は作る事ができないのである。

「ごめん……僕も簡単なものならいくつか作った事は有るけど、そこまで精度の高い物を作った訳じゃないよ」

ロツクは申し訳なさそうに私に話しかける。

「でも、もう答えは君の中にあると思うよ。パンク」

「何……？どう言う事だロツクマン？」

「これを見て、この設計図の隅を」

そうロツクが指差す所には小さく「物を作る時はまごころを大切にしろ。このポンコツが」と書かれていた。

それはダイムのいつもの口癖だった。無論私もそれは発見していた……だが。

戦闘用ロボットの私にはまごころと言う物の情報がまったくインプットされていない……だからこそ理解できなかった。

「……それは一体どういう意味だ？」

「まごころって言うのはね……飾りや偽りの無い心、生まれてからそのままの心って意味だよ。僕が口出しするのもあれだけどパンクがダイムさんに教わった事をそのままその机にぶつけなければいいんじゃないかな？」

（いいか……ここは微妙に力を調整するんだ……均一の力じゃ駄目だ。この木だつてな俺やお前達同様生きてるんだよ。相変わらずあぶなつかしいが大分様になってきたな）

私の頭の中に今まで聞いたダイムの言葉が蘇る。

そうか……私はあくまでもダイムの作ろうとする机と言うものに固執するあまり本来の何たるかを忘れてしまっていたようだ。

そうと分かれば善は急げ、私は立ち上がりロックに礼を言うとそのままたイトの研究所を後にする。

「今度何か礼をしに伺うぞ。フィーネも連れてな」

「うん……楽しみにしているよ」

ロックの言葉を背にしながら私はダイムの工房へと向かう。

その足取りは知らず知らずのうちに速くなっていた。

「あ、おにいちやん!!」

工房に着くとファイネとルーテの二人が私を待っていた。

「さすがにあの後、パンクの事が心配になっちゃって」

「あれを見れば嫌でも心配になるだろうな」

ルーテの視点の先にあるものを私は指を指す。私が昨日一日がかりで作った「机らしきもの」である。

「もう答えも見つかった・・・だからこれからは本気で行くぞ」

「私も手伝うね」

正直な話、ルーテのこの申し出は私にとつてもありがたい。

いやむしろまたさつきと同じ様な物を作られると困るのか・・・。

私は傍らに座るファイネを見ると彼女も元氣よく手を上げると。

「は〜い、ファイネも手伝うよ〜!」

笑顔でそう答える・・・少々心配と言えば心配だがまあいいだろう。

木材を目の前にして私は静かに目を閉じる・・・そして電子頭脳に蓄積されているメモ리를整理し始める。

タイムが私の目の前で見せた技、そして言葉が先ほどの事の様に再生される。

私はカッと目を見開くとそのまま無言で作業道具を持つと形にこだわらず今自分が持ちうる全ての技術を目の前の木材に叩き込みはじめた。

「・・・・・・・・できた!!ようやくできたぞ!!」

それから一週間近くたった・・・。

様々な試行錯誤の末、ようやく一台の机が私達の目の前に現れる。

後はこれを依頼主の所へ届けるのを待つばかりである。

大きく伸びをしながら外に出ると間もなく太陽が姿をあらわそうとした所だった。

あの机はまさに私の子供も同然・・・ワイリーナンバーズである私がこう思うのも

どうかと思うが、まるで太陽が我が子供の誕生を祝福しているようなそんな気がした。

キイーーーーン!!!

どこからともなく私の耳にかすかにだがエンジンの音が聞こえる。

見れば前方の小さな点の様な影が段々と大きくなってきているのが見える。

間違いない・・・奴だ!!

私は疲れも忘れ駆け出すと大きく跳躍し彼の進路（先ほど私が立っていた場所に向かっていた）を邪魔するが如く腕をクロスさせながら彼の前方に立ちはだかる。

「・・・・・・・・むおっ!!」

ガキーーーーン!

突然の私の出現に驚いたのはテングマンである。

彼と体が接触し火花を上げるが気にせずのそのまま私達は勢いを殺す形で地面に降り立つ。

「いきなりとはひどいですぞ!!」

テングマンは体をさすりながら私を恨めしそうに睨みつけるがもしあのままの勢いでテングマンが地面に降り立てばかなりの風圧が発生する。

万が一とは言えもしも私の机に何らかの事があれば冗談ではない。

「お前がスピードも下げずに飛んで来るからだ・・・」

「拙者、少々慌てていましてな・・・で話なんですが」

テングマンは私を真つ直ぐに見つめると持っていた袋の中から封筒を取り出す。

「ワイリー博士から今日メールが届きましたな。なんでも南極探査に何人かの人員を派遣せよとの事・・・詳細はこちらに」

「・・・了解したと伝えておいてくれ」

私は手探りで中身を確認する・・・おそらく何らかの電子チップだろうか？

「後・・・そろそろキングを元にしたロボット達が完成するそうなので、それを回収しなければなりませんな。またこことはしばらくお別れですな」

まあテングマンがいてもトラブルが発生するだけなのでいいほうが良いが・・・。

フィーネを除けばの話だが・・・ついに完成したのかキングの後継機が・・・あれ一体だけでも戦局すら覆す事もある・・・それが数体開発されているのだ。それほど今回のワイリー様の計画への意気込みが窺い知れる。

テングマンは言う用だけですとあつと言つ間に一陣の風となり私の視界から消えてしまった。

まあともかく後はこの完成した机をダイムに見せるだけである。ルーテに連絡を取つた私はフィーネと共に工房でダイムを待つ。

そのまま置いておくのも味気ないのでちゃんと白い布に覆い、ひもを引つ張れば姿を現れるように工夫しました。

ダイムを待つている間の時間はまるで僅かだったはずだが私にはかなり長く感じた。工房の前を車が通るたびに私は腰を宙に浮かすがそうでないと分かるとまた腰を置く。

それを何度も繰り返す為、拳句の果てには・・・。

「おにいちゃん、ちよつと落ち着いて」

とフィーネに注意をされる始末である。

工房の前に車が止まり車椅子に乗つたダイムが姿を現す。

それをつくウオーレンもそして手伝つてくれたルーテも一緒である。



車椅子に乗ったダイムはまるで倒れる前とは別人の様な姿をしておりその体は痩せ枯れてしまったかのようなのである。

だがその目だけは変わってはいない、未だに冷めやらぬ魂のこもった目で私を見るとこう言い放つ。

「さあ、ワシに見せてみる。お前の作った奴をな．．．」

私は黙って机を覆う布を剥がす為にひもを大きく引く。

私達の目の前に太陽の光を受け黒光りの光沢を放つ机が現れる。

一応ダイムの渡した設計図どおりではあるがそれ以外の所はアレンジを加えてある。

やや見た目の軽さなどは感じられないものの私なりと言えはいいのだろうか無骨な印象を思わせる机である。

「．．．．．」

「．．．．．」

場を重い空気が支配する．．．

私自身、緊張のあまり目を泳がせてしまう始末である。

フィーネは一人きよんとした表情で私とダイムを見ていたが．．．

「へっ．．．．．こんなぐついでに机を作りやがって」

ダイムの言葉が沈黙を破る。

「だがお前の魂は感じたぞ．．．お前の様な機械でも魂って奴はあるんだな。今日それが分かったよ」

満足げに一人頷くダイム、私の胸は言葉では言い表せないもので一杯だった。

ダイムは私に手を差し伸べる．．．それを私はしっかりと握った。

「親方．．．ありがとうございませす」

私はただ頭を下げる事しかできなかった。

「礼を言うのはワシの方だ．．．」

熱くなった目頭を押さえながらダイムは私にそう話しかける。

その後は机も無事に依頼主の所へと運び、ダイムもそのまま病院に戻っていった。

そして私とフィーネは工房の中の使用した道具や散らかった物を片付けながら基地へと帰る準備をしていた。

「おにいちゃん。よかったね」

「．．．．．ああ」

フィーネの言葉に私は頷きながら後片付けを済ました工房の扉を閉める。

そしていつもの様にフィーネと一緒に帰路に着く。

その途中私は日も落ちかけた空を見上げながらある思いを抱いていた。

私はロツクマンを倒す為に生まれた．．．正直それが達成された後の事を考えた事は

無かった。

いや、達成されなくてもいい。いずれ私も戦いのレベルについて行けなくなる時はいずれやってくる。

その時、キラーズとしての役目が果たせなくなった時は静かに家具でも作って暮らそう・・・。

ロックマンを倒す事よりも可能性は低そうだが、それでもこの命が残っていたのならそう暮らそう。

自分ながら馬鹿げた思いではあるがそう思いながら姿の見えなくなった太陽を私はいつまでも眺めていた。

## エピソードとあとがき

．．．．．それから三日後だっただろうか。

ダイムの訃報を聞いたのは．．．．．

カラーンツツ．．．！

その話を工房に来たウォーレンから聞いた私は手に持っていた金鎚を動揺のあまり落としてしまう。

「親父は幸せだったよ．．．．．最後にアンタに自分の技術を伝授できたんだ」

顔を伏せながら私にぼやく様に言うウォーレンを私はただ黙って見ている事しかできなかつた。

ウォーレンの話によると私が机を完成させた次の日．．．病室で大きく溜息をつくとき意識を失いそのまま帰らぬ人となったのだ。

「親父はロボットに仕事を奪われて、俺がそのロボットを使って家具を扱う商売をするのが気に入らなかつた．．．」

「親父は私を認めてくれたのか．．．？」

「さあな．．．だがこれだけは言えるぜ。アンタのおかげで親父は最後までロボットを

恨んだまま死ななかつたって事だ」

私は何故、彼が私を自分の工房に働かせようと思ったのか……その理由は今となつてはもう知る由もない。

「親父は本当は認めたかつたんだと思うぜ。ロボット産業つて奴を……だけど自分のプライドを捨て切れなかつた。……そこにあんたが現れた」

「親方は試したかつたのか……?この私をロボットを……」

「馬鹿だよな……世の中つてのは動き、変わり続けるもんだ。それを知つてながら認めなかつたんだからな」

そうウオーレンは自嘲気味に語る。

「いや……違うぞ」

「な……?」

私の言葉にウオーレンは驚いた様に顔を上げる。

「変わらないものならここに……ここに……」

私はそういうと自分の胸を指差しながらウオーレンを見据える。

「あんたにそう言われると信じたくなるわ!!ハッハッハッハ……!」

目から一筋の涙を浮かべながらウオーレンは笑い出す。

それに釣られ私も笑い出す。

工房の中にしばらくの間二人の笑いが木霊していた。

「あんたの腕なら、うちの会社に特別待遇で迎えてやつてもいいんだが」

「いや・・・私にはまだやらねばならん事がある。それが終わった時覚えていければ世話になるぞ」

主人がいなくなった工房・・・ここは息子であるウォーレンが引き継ぐ事になる。

ここは老朽化も激しく立地も悪い・・・残念だが一旦建て壊して倉庫にでもするしか使い道がなさそうだ。

そうウォーレンは言う。

残念な事ではあるが私の・・・いやここに関わった者達の記憶には残り続ける事だろう。

「それと親父が世話になった分の礼金だ、受け取ってくれ・・・それとあんたが会社に入ってくれるのを首を長くして待っているからな」

私はウォーレンからお金と形見代わりにダイムの道具箱を譲り受けるとそのまま工房を後にする・・・。

私は古ぼけた工房を一度だけ振り返る。何度も何度も見た姿だがそれも私にはなんだか主人がいらない事を悲しんでいる様な・・・そんな気がした。

道具箱を背負いながら私はローズの店にも立ち寄る……。

注文はいつものストロベリー味のクレープである。

「あの後、うちの親父がさ。ようやくまともに働いてくれるようになってさ」

ローズは嬉しそうに私に話をする。

ドフォーレファミリーを襲撃した際にヒートマンが丁寧に燃やしていた借借書……。

その後の警察の調査で法外な金利で金の貸付をしていた事が判明……裁判所も不当な貸し付けと判断しまあ簡単に言えば借金がチャラになったのである。

その上シャドーマンがアジトにあったコンピュータからドフォーレファミリーに連なるギャンブルの金融関係を警察に横流ししたのも理由の一つだと付け加えておく。

表には出ていないがこれで救われた者も何人かいるだろう。

「そうか……それはよかったな。今度はフィーネも連れて来よう……」

「あいよ……フィーネちゃんには大盛りであげるからまた来なよ」

ローズの声を背に私はクレープを握りながら店を後にした……。

コンツコンツコンツコンツ！

まだ朝だと言うのに基地の内部ではけたたましい音が響き渡る。

「うるせえぞ!!パンク!!……俺は二日酔いなんだ。チンドン屋みたいな事するんじゃ

ねえ!!」

頭を抱えたメタルマンの大声が辺りに響き渡る。

昨日も居酒屋で飲みまくった拳句に基地に帰った後にもストーンマン、シャドーマンらを入れての大宴会をするからである。

正直こちらとしては知った事ではない・・・。

「何作ってんだよ・・・?」

メタルマンは相変わらず頭を抱えながら私の製作している物を覗き込む。

「・・・椅子だ」

私はまずは小さい物と言う事で椅子を二脚作ることにした。

一つはヒントをくれたロックへのお礼の為である。

そしてもう一つは自分を生み出してくれたワイリー様への贈り物として作っている。

「あ、おにいちゃん!!」

私の姿を見かけるとフィーネは元気良く私に駆け寄る。

「ねえねえ、私のも作って!!」

「今のを作ったらフィーネのも作ってやるからな」

「今すぐがいい!!」

私の言葉にフィーネは頬を膨らませて抗議するが私は笑いながら彼女の頭を撫でる。



「仲がよろしい事で・・・あく頭イテエ・・・。もつかい寝ようよと・・・。」  
メタルマンはぶつぶつ言いながら再び部屋へと帰って行く。

興味津々に私が椅子を作るのを見続けるフイーネを横目に私は作業を再開する。  
私は思う・・・時代は常に動き変わっていく。

それは紛れもない事実である。

しかしそれでもたとえ人間や我らが滅んだとしても変わらないものがある。

それは不可能を可能とし運命すらも変える・・・。

私はそれを信じたい・・・全ての生命に宿る「心」と言う物を・・・。

## バラード編

## V O I I 　　バラード南米にて

「甲斐性の無いご主人を持つとつらいツスね」

厳しい日差しが照りつける街中で一人の青年が犬・・・否、狼型のロボットに話しかけている。

「くうーん・・・」

「なになに？ 買い物に出かけたのはいいいけど勝手にガンガン進んでいつて見失ったツスか？？」

狼型のロボットは低く鳴くとその場に座り込む。

「それでそのままエネルギー切れツスかあ・・・俺のをやるツスよ」

青年は手に持つカバンから市販のエネルギーパックを取り出すとそれを狼型のロボットに渡す。

「あんなご主人様は放つて置いて俺と一緒に買い物でもするツスか？ ゴスペルの欲しいのも金に余裕があれば買うツスよ」

その言葉にゴスペルと呼ばれた狼型のロボットは本物の犬と同じ様に青年にじゃれ

つくと尻尾を振りながら青年の後を付いて歩く。

肩に掛かるほどの紫色の髪を伸ばした青年はゴスペルを連れて街中を歩き出す。

その光景はまるでペットを連れて人間に見えなくも無いだろう……。

しかし青年は人間ではない……彼の名前はバラード。

かつてロックマンキラース三号機として生み出されたワイリースペシャルナンバーの一人でもある。

空を見上げながらバラードは思う。

「綺麗な空ツスね……こんな日が永遠とも続くわけは無いツスけどね」

バラードは少々皮肉げに周りを見渡しながらゴスペルを連れ目的地へと歩き出し始めた。

「いやあ……なかなか良いモンがあるじゃないツスカ」

Tシャツに半ズボンと夏の格好のバラードだが周りは誰も気にしない。

それもそのはずここは南米の都市、ゼーネルシティ。

近くにジャングルもある蒸し暑い熱帯地域なのだ。

「このパーツなんて見てくれはあれだけど最新式ツスよ」

「アウウ〜ン？」

ゴスペルと一緒にエネルギー缶を飲みながらバラードは先ほど買った商品を見ながら恍惚な表情をする。

バラードがいるのはフリーマーケットの会場……と言えば聞こえが良いが実際は古くなったロボットやパーツを売る闇市である。

ここには実際の軍隊で使用されているパーツなども横流し品として出される事もある。

バラードはそういったお宝を狙ってここへ来たのである。

そんなバラードの目の前で古くなった作業用のロボットが新しい人間に買われていく姿が映る。

(良い主人に拾われるといいんだけどスねえ……)

そんなロボット達にバラードは多少の複雑な感情を抱くがそれでもこれが現実だと頭の中では理解している。

いらなくなったら処分されるか売られる……それが多くのロボットの行く末である。「うほっ!!このパーツは政府軍が使っているガトリングのドラムの部分ツスねえ……おっちゃん!!これ頂戴ツス!!」

「あいよ〜」

如何にも怪しい風貌の中年男性から代金を支払いパーツを受け取るバラード。

その度に恍惚な表情をしてパーツを眺めていた。

「くうーん」

ゴスペルにとってはここは退屈な場所ではあったものの適度にバラードがエネルギーを補給してくれるのであまり不満もなかった。

「次にあそこの物を見たら今日はもう帰るツスよ……。途中でベットロボット用のおいしいのエネルギーフードを買ってやるからちよつとだけ我慢するツスよ」

「アン!!アン!!アン!!」

その言葉に嬉しそうに駆け回るゴスペル。

「この様子だと……。フォルテの奴ろくなもん食わしてないツスね……」

バラードは今はいないゴスペルの主人、フォルテに悪態をつく。

「あ、どうもおひさしぶりです」

「あん……。?」

突然響いた声にバラードは辺りを見渡すが誰もいない……。

だいたい今のこの姿を知っているのはナンバースぐらいのはずなのだが……。

「あ、ここですここです。右足の先っぽです」

バラードは言われたとおり足の先に目線を送るがそこには露天の商品の冷蔵庫があるだけである。

「喋る・・・冷蔵庫ツスカ・・・？」

バラードが呆れながらその冷蔵庫を触るといきなり目のような物が現れさすがの彼もビクツツと体を震わす。

「どうもどうも。二年振りですかね。その節はお世話になりました」

「・・・お前確か・・・キングの所の」

バラードの目の前に現れた（と言うか置いてあった）冷蔵庫・・・それはかつてのキング軍団、幹部の一人コールドマンであった。

「お前こんな所で何やってるんスか？」

「いやあ・・・実はですな」

コールドマンは事の顛末をマイペースながら話し出す・・・。

キング軍団壊滅時のドサクサに紛れ逃げだしたコールドマンであったのだが、仲間ともはぐれエネルギー切れでダウン。

次に目を覚ました時にはボディをバラバラにされた状態で、闇市に商品として売りに出されたのだと言う。

「いやあ・・・手足が無いので歩けませんし箸も持てませんしね」

「それ以前の問題のような気がするんスけど・・・」

バラードは頬をほりほり搔きながらも至つてマイペースなコールドマンの話を聞き

ていた。

バラード自身、二年程の前の事件でコールドマンを見たことは、何度かあるものの実際に対峙をしたり言葉を交わすのはこれが始めてである。

恐竜のDNAを保管する為に造られその温度はマイナス270度とんでマイナス273.15度……。

キング軍団の一角を担っただけに極めて高い性能を誇りながら、彼は頭の回転が非常に遅い。

自分の事なのにどこかピントもはずれ他人事のように話すコールドマンにバラードは半ば辟易としていた。

「なかなか、私の買い手も見つからないので困っていたのですが。先程、買い手がつきましてね」

屈託の無い笑みを浮かべながらコールドマンはバラードの目の前で台車に乗せられていく。

「キング軍団が壊滅して身の振り方に困っていましたがこれで私も第二の人生を送る事が出来そうです。それではまたどこかでお会いしましょう」

「た……達者でツスよ」

彼の行く末がなんとなく心配になるバラードだが、生憎コールドマンを買い取るだけの

現金は持ち合わせていない。

運ばれていく彼に手を振りながらバラードは闇市を後にする。

帰り道にゴスペルにエネルギーフードを食べさせつつ、都市郊外にある基地へと帰って来たバラードを待っていたのは。

「おい!!てめえ!!俺のゴスペルを何、勝手に連れまわしてんだ!」

「あゝ．．．次々から次へと．．．!!」

全身からにじみ出る怒気を隠そうともせず、目の前に立つ少年．．．その姿こそあの程度違いはあるものの、その姿はあのロックマンに何処となく似ている。

系列的に言えば自分の弟にあたる少年を見ながらバラードは憂鬱な気分になりそうだった。

(こりやあ．．．またドンパチツスカねえ．．．)

これから起こる事を想像しながらバラードはどうしたものかと思案し始めていた。





「チイツ……!!」

チャージショットの直撃を受けバラードの体は閃光に包まれる。

爆煙の中から腕を交差しフォルテの渾身の一撃を防ぎきったバラードが姿を現す。

「ロートルで悪かったな……ッス!!」

「フンッ……!!」

口から煙を吐きながら不適に笑うバラードに慥然とした表情のフォルテ……この二人似た者同士であるものの非常に仲が悪い。

元々がロックマンを倒す為に作られた両者。

バラードはエンカーとパンクの両名に続くロックマンキラーズ第三号機として生み出された。

高いプライドを持ちその実力はかつてロックマンとの戦いの際には執念とも言える執拗さで後一步と言うところまで追い詰めた程である。

だが戦いの内容がどうであれ彼もまたロックマンに勝利出来た事は一度もない。

そしてフォルテも同じくロックマンを倒すべくロックマンを基に造られた戦闘用ロボットである。

バラードと同じくヒマラヤ級のプライドの高さを持っており、バラードと同じく最強を目指しロックマンに戦いを挑んでいるがやはり勝てた事は一度も無い。

挙句の果てには悪のエネルギーと言う物にも一時期、手を染めたが結果は同上……。その宿敵であるロックマンとはキング事件の際にお互いに一時休戦し共に戦つても尚、打倒ロックマンの志は一向に揺るぐ事は無い。

お互いに高いプライド……。似たりよった性格と打倒ロックマンの執念。

正に同族嫌悪とはこのことか……。この二人は顔を合わせれば喧嘩をするそんな仲である。

特にフォルテ自身は否定してはいるもののバラードは言わばフォルテにとってプロトタイプであり、彼を踏み台にしてフォルテが生み出されたのである。

お互いにワイリーナンバーズの中では別格のスペシャルといわれる者……。彼ら二人の激突は一進一退の攻防であった。

フォルテはバラードの放ったバラードクラッカーをバスターで撃ち落とすと爆風を突き破るようにしてバラードの眼前に現れる。

「いい加減てめえの顔も見飽きた!!くらええ!!」

ドゴオオオooooooooon!!

「ケツ! 図に乗るんじやねえッス!!」

フォルテのチャージショットをまともに喰らいながらもバラードは倒れる事は無い。

そのままフォルテの顔に掴みかかると凄まじい膂力でフォルテの体を投げ飛ばす。

「・・・野郎!!」

空中で受身を取れない状態のまま続けざまにバラードの放った炸裂弾に喰らいながらもフォルテはバラードを睨みつける。

それに対しバラードも嘲る様にわざとらしく作った笑みでフォルテを見返す・・・。

「お・・・!!なんか良い事おもいついたツス!!ゴスペル来るツスよ!!」

バラードはモニター室で二人の成り行きを見ていたゴスペルを呼ぶと耳元でなにやら囁き合う・・・。

「おい・・・ゴスペル!」

一応主人である自分に向かって対峙するように唸るゴスペルにフォルテも驚きを禁じえない。

「そりゃあ自分を放って置いてどこかに行くご主人なんて見捨てられるに決まってるだろうがあ・・・ツス!!」

「いや・・・あれはCDの特売をやってるってんであわてて・・・」

慌てて弁明するフォルテだがそれを聞いてますますゴスペルの機嫌も悪くなっている。

「さつき言ったとおりの事試すツスよ!ゴスペルチェーンジュー!!」

跳躍するバラードの肩にゴスペルが乗ったかと思つた瞬間二人の体は閃光に包み込

まれる。

「な・・・何ッ・・・!!」

その光景を驚愕の表情で見つめるフォルテそれは正に自分とゴスペルに与えられた機能だった・・・。

ゴスペルもまた自分がロックマンを基にしたように彼のサポートメカであるラツシユを基に造られている。

ラツシユはロックマンの行動をサポートする為に造られたのに対し、ゴスペルは単純にフォルテの戦闘その物をサポートする為に造られており単純な戦闘能力ならばナンバーズに匹敵する。

いつぞやのスーパーロックマンの設計図を奪い新たに追加された機能・・・ゴスペルブースト。

それはゴスペルとの合体により飛行能力を得たフォルテ最強の戦闘形態。

まさかそれをバレードがやってのけるとは思いもしなかったのである。

閃光が晴れるとフォルテ同様、悪魔の如き漆黒の翼を生やしたバレードの姿が現れる。

「よっしやゝッス!!」一応俺、お前の試作機だからもしかしたらある程度互換性があると思ってたんだけど大当たりッスね!!」



飛ぶバラードとゴスペルの姿だった。

「きよ……今日は俺の負けッス!! だけど次は負けないッスよ! ごめんなあゴスペルすぐに治すッスからね」

傷ついた体をさすりながらバラードは詫びを入れつつ、完全に伸びてしまったゴスペルの体を修理しようとするのだが。

「これは……一体どういう事だ?」

不意にその場に顔を出すのはニードルマン。

バラード達が居る第三基地の纏め役だ。

俗にエアーマンタイプと言われる独特のボディに鋭い眼光を伴いながら彼はバラードとフォルテを交互に見据える。

「……フンッ」

鼻を鳴らすフォルテを見るまでも無く、この二人がシミュレート室で行った事など容易に想像が出来るであろう。

「シミュレート室を使う場合は事前に申請をし、それに加えあくまでも武器などは仮想の物を使えと言っていた筈だが……」

ニードルマンが反論は許さぬとばかりにバラードとフォルテに詰め寄る。

武人肌で無骨なエアーマンと容姿同様に似ている所があるニードルマンだが、彼はそれに加え若干嫌味な所がある。

まあ基本的に問題行動を起こすバラード達が悪いと言えるが、相手の失敗に対し細かく指摘するのが難と言えよう。

徐々に間合いを詰めてくるニードルマンに後ずさりながらバラードが慌てて頭を下げる。

「つ．．．次からは気を付けるツス」

「何度聞いたが分からんがまあ良い」

バラードが謝ったのを見て次はフォルテに目を向けるニードルマン。

フォルテの方は舌打ちをしながら身構える。

長い活動時間の内に丸くなった部分があるバラードはさておき、フォルテの方は人間でいう所の反抗期真っただ中。

彼の頭の中では己の非を認めるイコール負けを認めると言う認識なのだろう。と言うかフォルテが他人に対し謝罪をする所など誰も見た事が無い。

「基地内の物資の持ち出し禁止．．．それとエネルギー補給の禁止の措置」

ぼそりと自身への処分を口にするニードルマンにフォルテが唸る。

「ゴスペルへのエネルギーフードの提供を禁止．．．」



「・・・キャイン!!」

続けざまに言い放たれる言葉にゴスペルが悲鳴を上げる。

「おい・・・ゴスペツ!!」

「クウーン、クウーン!!」

フォルテが止める間も無くゴスペルの方は普段、寄り付く事など決して無いニードルマンの足に体を擦り付け始める。

因みにこのゴスペル、外見に反し女の子好きと言う一面がある。

こんな事をするのは普段であれば可愛い女の子を見つけた時だけだとバラードは記憶している。

「フォルテ・・・謝った方が早いッスよ」

「がう!!」

バラードの横からの言葉にフォルテが呻く。

ゴスペルの方も同意とばかりに声を出す。

「ぐぬぬぬ・・・」

歯を軋ませるフォルテにニードルマンが顔が引付くのではないかと言う位置にまで近寄る。

その見た目もありかなりの迫力があるがフォルテはまだ負けを認めようとしなない。

「何時までも身勝手に行動出来ると思うなよ。貴様よりも若いナンバーズ達も始めてきたのだ。打倒ロックマンに燃えるのは構わぬが自分も組織の一員であると言う事を認めろ」

「う・・・うるせえ!!」

「そもそも打倒ロックマンの以前に裏切り者のキングすら倒せなかったのお前が・・・」  
ブチッ・・・。

先に起こった戦いで痛い所を指摘されフォルテの額に青筋が浮かぶ。

キング事件の際にワイリー軍団はロックマン達及び連邦政府と共闘する事となったのだが、その際にもフォルテは独断で行動をし周囲に迷惑を掛けてばかりであった。

最終決戦の際にフォルテは単身ロボット王キングと戦うのだが、力及ばず敗北。

後から駆け付けたロックマンに助けられる形となる。

その件はフォルテにとって更なる屈辱となったのは間違い無く一種の禁句と言っても良い。

「うるせえ・・・俺は、俺は最強っつ!!」

逆上し思わず拳を繰り出しそうになった所でニードルマンが持つ携帯端末がアラーム音を鳴らす。

「・・・待て」

あつさりとフォルテに背を向けながら携帯端末を手に取るニードルマン。

振り上げた拳の落としどころを失いフォルテが更に苛立つのが傍目にも分かる。

これはこのままシミュレート室でニードルマンと戦いになるかも知れないとバラードは溜息を吐くのだが。

「成程・・・キングの後継機の運用テストをしたいですか。未完成との事ですが大丈夫なのですか？」

ニードルマンが端末の向こう側に居る人物と話をし始める。

恐らくはあちら側に居るのはワイリーなのだろう。

ニードルマンが敬語を使うのは目上のナンバーズかワイリーしか居ない。

「分かりました。直ちに受け入れ準備を始めます。ハイ・・・バラードとフォルテには俺の方から言っておきますのでご安心を」

端末を切りニードルマンはバラードとフォルテを再び交互に見る。

「聞いての通りだ。キングの後継機の運用テストをこの基地でするとの事だ。言うまでもないがそいつらは俺達にとつては期待のホープ。くれぐれの無用な喧嘩を吹っ掛けるなどの問題行動は許さんからな」

もはやバラードとフォルテの一件など些末な事と言わんばかりにニードルマンは踵を返し、他のナンバーズ達に連絡を取り始める。

完全に置いてきぼりとなったバラードとフォルテ。

特にフォルテの方はわなわなと体を震わせていたのだが、元より単純な彼はすぐさに思考を切り替える。

「キングの後継機だ？と言う事は奴に匹敵するかそれ以上に強いつて事だよな・・・」  
再び体を震わせるフォルテだが今度は武者震いと言うやつだろう。

（ワイリー博士もなんでこいつが居る所に送り込むかな・・・ツス）

勝手に闘志を燃やし始めるフォルテにバラードは大きく溜息を吐いた。

## V O I 3 王の名を継ぐもの

「押忍!!開発コードネーム『ナイト』WKN(ワイリーキングナンバーズ)・005のパスヨナーでありまあああす!!」

テングマンが指揮するエアガツパーより降り立つなり出迎えたナンバーズ達に大声で挨拶をするのは、如何にも騎士然としたロボットであった。

見た目の方はあのキングの後継機なのだから仕方が無いとして、その登場に若干と言うかかなり引いてしまう面々。

さしものバラードも思わずすっこける。

「.....」

壁にもたれたままのフォルテも面食らった様な顔をしていた。

「なんか.....イメージと違うツスね」

バラードが額を指で押さえ伸く。

あのキングの後継機と聞いてどれだけプライドの高いロボットが来るのかと思ったのだが。

良い意味でその予想は大きく外れた。

「先輩の皆様方宜しくであります!!あ、そちらはバラード殿にフォルテ殿。噂と言うかお二人の事は電子頭脳にインプットされたデータで知ってるであります!!」

肘を伸ばし敬礼をしたのも一秒も経たずにバラードに駆け寄り話しかけてくる。

因みにと言うかかなり距離が近い。

パッションナーが人間であれば唾が顔に飛んでいたであろう。

「バラード殿は中断を含めた引き分けの七回を除けば一度も勝ちは無しではあります  
が、公式の戦いを含めロックマンに勝負を挑んだその回数は十二回!!」

至近距離で己にとってかなり痛い事を言われムツとなるバラードだが、恐らくと言う  
か相手の方は嫌味でも何でもないのだろう。

詳細な数はもう少し多いが街中でばったりと遭遇した時も含めて、何度もロックマン  
と戦いを繰り返している。

「十二回も挑んで勝っててねえのかよ」

腕を組むフォルテがほくそ笑むが。

「そしてフォルテ殿は二十三回の戦いを挑み、引き分け三回と記録にはあります

!!対ロックマンの先輩として尊敬してありますよ!!」

「ぶっ……俺よりも戦い挑んで勝ってねえのツスカ」

「う……うるせえ!!」

至近距離で敬礼をするパッションナーを押し退けながら、からかってきたバラードを睨みつけるフォルテ。

「対ロックマン用のロボとして兄にも当たる両者の居る基地で運用試験が出来て自分は幸せでありますよ!!」

頭部の兜の隙間から滝の様な涙を流しながら敬礼をするパッションナーに他のナンバーズが後ずさる。

「ねえねえ・・・本当にあれがキングの後継機なの?」

スパークマンが首を傾げながらテングマンに問う。

「そう言う事になりますな。まあ拙者としてもただ命令通りにこの基地に運んだまでの事。詳細は何も知らないとしたか・・・」

伸びた鼻に触れながらテングマンが言う。

「てか005って・・・他にも四人いるのか?」

強面のナンバーズであるジャンクマンが首を傾げる。

パッションナーの番号が彼の言う通りであれば他にも後継機達が居る事になる。

前回の世界征服の作戦が突然のキングの反乱で凶らずも人類側に味方する事になると言う不本意な結果となっただけに、ワイリーも今回ばかりは本気なのだろう。

かつてのロックマンキラーズに相当するロボットを一度に大量に投入するつもり

様だ。

「ああ……それとまだ居りませぬ。運んできたのはパツシヨナーだけでは無いんですな」  
思い出した様にテングマンが手を叩きニードルマン達が驚く。

ジャイロマン、ウエーブマン、クラウドマン、シエードマンにソードマンら他の面々も同様の顔となる。

「いやあくスペースの関係上格納庫にしか入りませんでしてな」

機動戦艦エアガツパーの格納庫を端末で開きながらテングマンが言ったのはその一言。

乗務員が乗り込む入り口には入る事ができず結局普段は大型のロボットを入れる格納庫に入れざる得なかつたそうだ。

ウイーーーーー！

テングマンが駆るエアガツパーの格納庫の扉が静かに開く。

「さあ！出て来てもいいですぞ！」

その声に反応するかの様に一つの影が飛び出してくる。

「ヒヒーン!!」

巨大な馬型ロボは息を呑む面々を尻目にパツシヨナーの方に走り出す。

「自分のサポートメカのダルセニョーであります!!ダルセニョー!!挨拶をするであります



すよ!!」

大声を上げながらパツシヨナーがフォルテらを馬型ロボに紹介をするのだが。

「・・・フン」

まるで小馬鹿にした様な声が聞こえたのは気のせいか。

馬型と言うだけあって巨大なダルセニョーに都合見下ろされる形となったフォルテは射殺さんばかりに視線をぶつける。

「あと・・・それともう一人おります。早く来て欲しいですな」

「・・・まだ居るのか」

わざとらしく手を広げ格納庫の奥に居る存在を呼ぶテングマンにニードルマンは頭痛を覚えていた。

ニヤリとどこか自信ありげな笑みを浮かべるこの男に一同は嫌な予感を脳裏に過らせた。

キング事件の際にロツクマンに雪辱を果たさんが為であろう事か敵の軍門に降った男だが、裏切り云々の前にその性格に大いに問題ありな人物である事は言うまでもない。

良くも悪くもこの男は当てにできないと言うのがその場にいる面々が思う所である。

まあ風を操る能力を持ちながら空気を読めない彼が、その思いに気づく事は無いだら

う。

ドスンッ！ドスンッ！

格納庫の奥よりゆっくりと何者かが歩く音が聞こえる。

まるで鉄の塊が歩く様な・・・そんな重厚感ある音がバレード達の耳へと入ってくる。

「フイーネと言う女の子ロボが第一基地に配属されたのを知っておりますかな？」

「ああ・・・確かそんな人畜無害のロボが居るとか聞いたな」

ニヤニヤと笑みを浮かべるテングマンに面倒くさそうにニードルマンが答える。

「・・・フイーネ？誰だそりゃ？」

事情に詳しくないフォルテが首を傾げる。

「なんでもワイリー博士がロックマンの所のロールちゃんみたいなロボを開発したんだって。あくあく僕もそっちの基地に配属されたいなく」

スパークマンが心底残念そうに口を開き対照的にフォルテが興味無さげに舌打ちをする。

「あの女みたいなロボをジジイがか？遂にボケやがったか。戦闘の役にも立たないロボなんて生み出しても意味ねえだろ」

フォルテが興味は無いとばかりに話を打ち切り格納庫の奥を見る。

「今回拙者が運んだのはパツシヨナー殿にダルセニョー殿。そしてそのフイーネ殿に続

く女の子ロボなのですぞ〜!!」

テングマンが大音響を響かせる中、一同が目を見開く。

「しかもWKN(ワイリーキングナンバーズ)ツツ!!戦闘も出来る色々と至れり尽くせりな我が軍団待望のナンバーズ!!」

「・・・おおっつ!!」

力むテングマンの言葉に何人かが目を輝かせた。

悲しいかな男所帯のワイリー軍団は何かと色々な飢えている。

ある者は美味しい料理を作ってもらうなり考えただろう。

またある者はラツキーすぎるハプニングを考えたやも知れない。

多くの者が色々とあれやこれやと考える中。

格納庫の中では鈍い金属音が響き続ける。

思うにテングマンの紹介より数十秒は経ったであろうか。

一向に出てこない存在にニードルマンが目を細めテングマンを見た。

「レント〜大丈夫でありますか?」

同じ様に待ち続けていたパツシヨナーがダルセニョーと共に格納庫に入っていく。

奥から何やらもう一人の声が響くが問題でも発生したのか。

ややあつてパツシヨナーが頭の裏を搔きながら戻って来る。

「申し訳ないであります。動けないそうなので出るのを手伝って欲しいであります」  
パツシヨナーの言葉に一同が思わずずっこけたのは言うまでもない。

ズウウウウンツツ!!

「重ツ・・・!!てかでかつ!!」

ここ第三基地に居る面々全員で格納庫より運び出したそれはロボットと言うよりも戦車なりの機動兵器を連想させる存在であった。

まあナパームマンなりマースなり戦車の様なロボットは居るには居るが、それにしてもそれはでかすぎた。

「俺よりもでかい・・・」

ナンバーズでもかなりの巨体を誇るジャンクマンが思わず呻く。

「皆さん。本当にありがとうございます」

運び出され漸く一息を付いた新入りが申し訳なさそうに頭を下げる。

「WKN・004で開発コードネーム『ルーク』のレントです。よろしくお願いします」  
そう言つてペコリと頭を下げる声は紛れも無い少女の物であった。

確かにテングマンの言う通り彼女なのだろう。

彼女なのだろうが。

(なんか思っていたのと違う・・・ッス)

先程も言ったが巨大な戦車を思わせるフォルムにそれをランドセルの様な形で背負う少女の外見は分厚すぎる装甲に包まれていた。

「キングの要塞にあった戦車に似てやがるな。そういやロックマンの奴も厄介な飛行艇と遭遇したって聞くが」

ぼそりとフォルテが呟く。

因みに彼もレントの運び出しには手伝った。

「あ、ハイ。私はキングタンク及びキングプレーンを参考にダウンサイズを目指して開発されました」

「どこのつまりはそれらが合体したジェットキングロボをロボットサイズで再現したって事か」

「そう言う事になります」

ニコニコと笑みを浮かべるレントにニードルマンが溜息を吐く。

「レントは戦闘ユニットを背負つての歩行システムがまだ未完成なのでありますが。一応ロボとして出来たので自分と一緒に配属となりましたであります」

どこか誇らしげに説明をするパッシュヨナーにニードルマンは頭を抱えた。

「また出たよ。博士の見切り発車が・・・」

「・・・重すぎて自分で動けないナンバーズなんて前代未聞だろ」

ウエーブマンとソードマンが引き攀った笑みを浮かべレントを見る。

「た・・・確かにこの状態で歩くのは難しいですがアーマーの背部に取り付けたロケットエンジンで動く事が出来ます!!」

プシウウウウツツ!!

どこか失望の色を浮かべる仲間には焦ったのかレントがボデイの背より煙を吐き出す。

「ちよ・・・ちよつと待て。ここでロケットエンジンなんか吹かしたら偉い事になるぞ」  
ニードルマンが慌ててレントを押し止める。

「エンジンを吹かしたら後ろにあるエアガツパーが吹き飛ぶでありますよ」

パツシヨナーの指摘にレントが呻く。

「そ・・・それは困る。拙者はこれからプロト殿らを連れて南極に行かねばならないのだぞ」

テングマンとエアガツパー内に居たジョー達が慌てて声を上げる。

「と・・・とりあえず動けるようになります」

シユウウウウツツ。

今度はボデイから煙を噴出したのでテングマンらが声を上げるが、今度はアーマーの各所が外れレントの本体が分離される。

レントの重厚なヘッドギアも取り払われ中から銀髪の少女が出て来たので何人かが

思わず声を上げる。

「ボディは基本的な人型か。原形は留めてないが俺やロックマンを参考にしてているアーマーシステムだな」

こういう所の観察眼は優れているフォルテがレントを見つめ口を開く。

「アーマーを纏った状態での歩行システムは完成してませんが、コアユニットだけの状態になればこの通り皆さんと同じ様に動く事が出来ます」

若干引き攣る様に笑みを浮かべながら話すレントだが。

額に指を置きながらニードルマンが深々と溜息を吐く。

「それで……今の状態のお前は何か出来るんだ？」

「……ええ？」

ニードルマンの指摘に完全に硬直するレント。

「ええと……動けま……す？」

「ああ……動けるな」

ゼンマイ仕掛けの様に首を傾げるレントにニードルマンは思わず明後日の方向を見つめるのであった。

「ちよつと俺はワイリー博士に連絡入れてくる。他の奴らは……パッションナー共々、こいつらの面倒見てやってくれ」

クルリと背を向けながらニードルマンはその場を後にする。

端末を弄りながら恐らくワイリーに事の次第を確かめるつもりなのだろう。その場に残された一同は気まずい雰囲気のまま佇むのであった。



## V O I 4 問題多き後継機達

「ダルセニヨー!!GOオオオオオであります!!」

戦闘シミュレート室に響く暑苦しい声。

ダルセニヨーの背に跨り文字通り人馬一体となつて突っ込むのはパツシヨナーである。

そんな彼と相対しフォルテは大きく溜息を吐く。

性能だけで言えば流石はあのキングの後継機。

超高性能ロボットと言えるだけの物は持っているであろう。

だがワイリーが運用試験をしようと云つた理由がなんとなくが分かつた。

ヒョイ・・・。

馬鹿正直に突っ込んで来たパツシヨナーをあつさり回避するフォルテ。

通り抜けた先でフォルテが光弾を放つた事でパツシヨナーは盛大に吹っ飛び馬上から転げ落ちる。

先程から何度も繰り返ししてきた光景だ。

「コキュートスランスとイージスの楯が完成していれば・・・であります」

悔し気に呻くパッショナーだがフォルテの方は大きく首を振った。

「武器が完成しても動きが単純じゃあ話にならねえよ」

当初こそその性能の高さを存分に生かしたパッショナーだったが、既に何度も実戦を経験しているフォルテに動きを見切られ先程から一方的な展開となっている。

フォルテ自身がロックマンをモデルに制作された事もあり、仮想敵としては申し分ないだけに仮にロックマンと今の状態で戦っても結果は見えている。

因みにパッショナー自身の言葉通り、今の彼は武装が未完成であり徒手空拳なのだが言い訳にしかならないだろう。

「バーニングウウ!!でありますう!!」

全身を炎で包み込むパッショナー。

あらゆる戦場で高い汎用性を発揮する事を目指して生み出されたパッショナーは、ロックマンやフォルテの武器チェンジシステムの応用で己の属性を変える事が出来るらしいのだが。

「クレットセントキック!!」

バキツツ!!

一瞬の間に間合いを詰めたフォルテの飛び蹴りを顎先に食らいパッショナーは倒れ伏す。

「……続けるか?」

「……むううううう」

頭上より己を見下ろすフォルテにパッションナーは悔し気に歯を軋ませるのであった。

そしてバラードの方と言えば。

ドガンツツ!!

「……キャツ」

バラードクラツカーの爆風に煽られ僅かに浮かび上がるレントの巨体。

フォルテと同じ様に性能のテストを行っているレントの方だが、やはりというか問題点が多い。

あの後、ニードルマンがワイリーに確認を行った所、アーマーの方に移動用の車輪が内蔵されている事が判明して辛うじて段差以外の場所は動けるようになったのだがとにかく重い。

機動性と言う点ではメットールにすら劣るだろう。

確かにバラードのバラードクラツカーを食らっても無傷でやり過ぎせる装甲は凄まじい。

対ロックマン用兵器として開発されているバラードクラツカーは爆発範囲こそ限定的だが、特殊装甲すらも破壊する程の威力を持つ。

言うなれば個の対象を破壊するのに特化した武器と言えよう。

それを受けて無傷で姿を現したレントにバレード自身、思わず声を上げたものだ。とは言えである。

如何に装甲が厚く自身の武装で有効打が狙えなくても、全く以って付け入る隙が無い訳ではない。

「それでは・・・反撃します」

若干のぎこちなさと共にレントが両足を踏みしめ若干大勢を低くする。

「チェインガトリング!!」

レントの両肩部が開き機関砲が姿を現す。

一呼吸する間も無く放たれる無数の銃弾を前にバレードは慌てなかった。

真横に飛び銃弾の嵐を回避するバレードだが。

ガコンツツ!!

レントの背部に備え付けられた巨大な筒が三本も競り上がる。

「デイバインミサイル・・・です」

無骨な筒の先に取り付けられたのは六連装のミサイル。

シユバババババツツツ!!

上空へと舞い上がり次々と方向を変えて計十八発のミサイルがバレードに襲い掛か

る。

反射的に何発かのミサイルは相殺するが全ての迎撃は無理と判断したバラードは歯を軋ませる。

ジャキツ!!

不意にバラードの足元に現れるのはローラーブレードである。

「対ロックマン用の追加兵装を試す良い機会ツスね」

メットより出現したバイザーに目を隠しながら、ニヤリと笑みを浮かべたバラードは足元のローラーを利用し通常の倍以上の速度で地面を駆ける。

それを前にアーマーの一部をビットの様に射出しバラードにぶつけてくるレントだが、それらは瞬時に破壊されてしまう。

高速で移動しているのにも関わらずそれを為したのは、バラードのメットに取り付けられているスーパーサーチャーである。

本人はあくまでも後付けの力として多用はしないが、このスーパーサーチャーなる兵装はあらゆる物体の位置を即座に把握する事を可能とする。

爆弾ではあるも範囲が限定的とされているバラードにとっては、鬼に金棒と言うべき物であった。

ビットを即座に撃ち落され驚くレントにバラードが迫る。

「イ……イレーザービーム!!」

レントの胸部が開かれそこに隠された砲門がチャージを開始するがその前にバラードクラッカーが針を縫う様に炸裂する。

「……ツツ!!」

驚く間もなく砲門を潰され逆流したエネルギーがレントのボディに亀裂を生じさせる。

ドゴンツツ!!ドゴンツツ!!

続けざまに足元で爆散するバラードクラッカーによって自身の身が大きく浮き上がる光景にレントは驚く間も与えられない。

元より機動性は皆無でありボディのバランスは非常に悪い事もあって大きくひっくり返った彼女は、裏返しにされた亀の様に転がってしまう。

「わああああああ!!」

驚きの声を上げるレントの眼前にバラードがクラッカーの発射口を突き付ける。

反射的に目を閉じるレントであったが、目の前のバラードが溜息を吐いたのを聞き彼女はガクリと頭を下げる。

「……参りました」

自らの負けを認めたレントの言葉を合図にして周囲の風景が無機質な物へと変わる。

戦闘シミュレートが終わりレントのボディに付いた傷なども瞬時に消え去ってしまった。  
う。

先程までの光景は極めて本物に近い疑似的な物なのだ。

ワイリー軍団ご自慢の訓練装置だ。

少なくとも政府軍などで使われる物よりも上等な品らしい。

話によればワイリーはホログラムとは言えほぼ忠実なロックマンのコピーを作り出した事もあったそうで、これはその技術的な応用に当たる。

「訓練終了・・・おい、お前達。レントの兵装を運び出してくれ」

レントの性能をチェックしていたニードルマンが控えていたスナイパージョー達にレントのアーマーを運ばせ始める。

「重くてスイマセン・・・」

数人がかりのジョーが唸りながら運んでいくのを見てレントが申し訳なさそうにするが、女子の為ならとジョー達もまんざらではなさそうだ。

「いくぞお前ら!!」

「ハイッツ!!」

ジョーだけでは難しいと判断したのかハンマージョーのハンジョーも加わってアーマーが運び出されていく。

それを見送ったバラードとアーマーを脱いだレントはニードルマンの下に向かう。

「ジェットキングロボをダウンサイズしたとは聞いていたが想像以上の性能だな。まあ戦闘経験こそまだ少ないが我らが束になっても勝てないだけの物はある」

端末に示された数値を目にニードルマンが感嘆とした声でレントを褒める。

「だがバラードとの先程の戦い通り、数値での性能差などあつさり覆される物だ。あまり大きくは言えんがロックマンはもつと強い」

「は・・・はい」

ニードルマンの言葉にオドオドしながらレントが頷く。

機動性が悪いと言う点はあれどその圧倒的な火力で敵を圧倒する事が出来る彼女の性能は、打倒ロックマンに燃えるワイリーの執念すら感じさせるものだ。

(次の戦いでロックマンを倒す。博士も本気ツスね)

横目でレントを見つめながらバラードは久しぶりに燃えあがる己の闘志と言うべき物と感じていた。

「いやあ感服であります。スペックで言えば自分の方が上なのに全く手も足も出ないとは。流石はロックマンを倒すのに一番近い御方。このパッションナー、感服したでありますよおおお!!」

「・・・うるせえ」



耳元で叫ばれうんざりした顔でフォルテがシミュレート室から出て来る。

「どうやらそちらの方も終わったようだ。」

「いずれにせよフォルテの圧勝だったのだろう。」

すっかりフォルテに惚れ込んだ様子のパッショナーはまるで舎弟の様に彼を褒め称える。

常日頃、他人に馬鹿にされる事はあれど褒められる事に免疫が無いのか僅かに頬を染めるフォルテはまんざらでもない様子だ。

「ロックマンを倒すのに一番近いって……どちらにしる勝つてから威張れッス」

「……んだと」

バラードの一言にフォルテがその顔を険しくする。

因縁を付け合う不良の様に睨み合う両者にニードルマンは『まるで成長していない』と溜息を大きく吐くのであった。

一方、その頃である。

バラード達が居るゼーネルシティの郊外。

当然の事ながらワイリー軍団の支部基地がある場所とは違う裏路地で、一人のロボットは身に纏ったボロを膝の上で丁寧に折りたたむと寝転んでいた場所よりゆっくりと

起き上がる。

今は一見すれば人間と変わらぬ姿だが、かつての部下達が自身の姿を見ればどう思うであろうか。

一瞬だがそんな事を考えながら男はゆっくりと立ち上がる。

彼は昨夜、ここで寝ようとした際に絡んで来た不良ロボット達を返り討ちにした際に相手が置いて行ったエネルギーパックを一気に飲み干す。

喧嘩を売って来たのはあちらの方とは言え、他人から奪った物で腹を満たすなど『王』を名乗った者にあるまじき行為であろうか。

行く当ても無く各地を放浪する彼は苦笑を浮かべながら路地裏より、視線の先を歩き交う人々の姿を見る。

人間もロボットがそれぞれの表情を浮かべながら歩くのを見て、彼は思わず微笑んでいた。

もしも自分が人間達を滅ぼしていたのであればこの光景は見る事は出来なかったであろう。

未だにロボットを道具扱いする者達が多いがそれが人間の全てではない。

自身もまだ人類に心を許した訳ではないが英雄と呼ばれし少年との間に交わした誓いもある。

一方的にその道を閉ざそうとした己の罪を償うが為に彼はこうして世捨て人同然に日々を過ごしていた。

「まだ全てを見極めるには時間がかかる。再び答えを出すのはまだ先で良い。まずは・・・互いに歩み寄らねば」

ぼそりと己に言い聞かせるようにボロを纏った王は摩天楼の隙間より遙か先に見える空を見る。

徐々にだが迫り来る黒い雲に彼は大きく溜息を吐いた。

「嵐が・・・来るか」

かつてのロボット王キングはそこに渦巻く物を静かに見据えていた。

## V O I S 迫り来る嵐

時は半日ほど前に遡る。

「これはどうも・・・失礼するぜ」

一人の壮年の男の突然の訪問に軍服を着た男性の顔が澁くなる。

南米にある政府軍の基地内において人間やロボットが慌ただしく動く中、彼は招かれざる客であった。

男はモニターに映る計器の数値を見つめその眉をピクリピクリと動かしていた。

「キング事件の際に色々和外にデータが流出したとは聞いていたが・・・あんまり流用すると痛い事になると以前に言ったが。まあでもやりたくありませんわな。司令官殿・・・」

「今はそれ所ではない。すぐに隔離を・・・何なら破壊しても構わん。稼働テストを行つたばかりでこれか」

忌々し気に歯を軋ませながら司令官と呼ばれた男性は周囲の兵士らに命令を下すが、基地全体が振動に襲われる。

「パイレーツマンが潜伏していた隠れ家兼ロブスターの養殖場を破壊した兵器と聞いた

がどうやら勝手に動くこうとしているみたいだな。言わんこつちやない……大方ワイリーナンバーズやMr. X事件の際のウィンドマンの改造データを流用したのでは？」

相も変わらず慌てふためく己らを詰る様に口を開く男に司令官が反論をしようとするが、再び起こった振動と爆音に彼の意識は別の所に向かう。

「隔離は出来んのか!?! エネルギーは空の筈だぞ!!」

「駄目です。確かにエネルギーは抜いていた筈なのですが。何らかの方法でエネルギーが補給されたとしたか」

司令官の苛立った声にオペレーターの兵士が怯えた様に答える。

舌打ちをする司令官の目の前のモニターに映し出されるのは厚さ何メートルはあるうかと言う隔壁を破壊し、外へと飛び出そうとする巨大な兵器の姿。

「そもそもあれにはキングの様に我らに反逆をするレベルの電子頭脳など搭載されていない。まして起動するだけでも膨大なエネルギーを消費し、我らの支援を付けて数時間の稼働が精一杯なのだぞ。それが稼働テストを終えてそれ以降エネルギー注入をしていない状況で動くなど」

「ですが動いていますなあ……」

「まさか貴様やあの男の仕業ではないな?」

男の言葉に司令官の視線が鋭くなる。

周囲の軍人らの視線も厳しくなる中で男は大きく両手を上げわざとらしく首を振る。「俺や兄貴があれを？失礼だがあんな制御も難しいデカブツ、うちの会社にはいらぬし兄貴の軍団にも必要ない。それこそ何人かのナンバースで協力すれば小型の台風を引き起こせる訳だしな」

ニヤリと笑みを浮かべ軍人らの疑念を否定しつつ、男はゆつくりとだがその巨体を宙に浮かばせようとする兵器より立ち昇る煙の様な物に目を向ける。

「そーいやあの煙みたいなのだが宇宙からロボットが二体落ちて来た時の物に似ているな。兄貴はそれがそのまた以前にあった超エネルギー元素と似たような性質があると言っていたが。軍の方にもサンプルあるんじゃないか？」

男の言葉に司令官が『すぐに照合しろ』と部下に叫ぶ。

そうこうする間に巨大な兵器は空へと浮かび上がり、軍の妨害を物ともせず悠々と飛び去ってしまう。

「これは・・・問題だな。まあ俺には関係無いんでまた来ますわ」

別件でこの基地へと来訪した男は更に慌ただしくなる司令室を後にする。

「ああ・・・そーうだ。一応ですが近くにある軍団の支部基地には連絡しておきますよ。普通の軍隊じゃ止められそうに無いでしょうからな」

自動扉が締まり切る前にそうとだけ言って完全に姿を消す男に司令官や周りの軍人

は喉の奥で唸る他無かった。

「ええい・・・ロボットアーミーに連絡を入れる。何らかの原因で氣象兵器テュポンが暴走をした。これは一刻の猶予も無いぞ」

去っていった男の事を思考より振り払う様にして首を振ると司令官は周りの部下達に次なる命令を下すのであった。

そして現在である。

「なんなんスカ・・・!!」

パッシヨナーやレントの社会見学も兼ねて街へと繰り出したバラード達だったので、お約束と言うべきであろうか行く先々でトラブルが発生。

街に配備されていたロボットポリスと裏路地を舞台に鬼ごっこに興じる羽目になったのである。

「ハア〜なんでお前はトラブルしか起こさないツスカ」

「・・・うるせえ!!」

帰り道で放たれるバラードの文句に主要なトラブルの原因となったフォルテが叫ぶ。

「フォルテ殿!!あのお楽しみが待っている場所は何だったのでありますか?自分は非常に気になるでありますよおおお!!」

「う……うるせえ!!お前にはまだ早い所だったの!!」

隣で大声で叫ぶパツシヨナーにフォルテが若干顔を真っ赤に言い放つ。

彼が言うお楽しみが待つ場所と言うのは歓楽街の入り口で客引きが言っていた場所の事である。

まあどう言う所かは言うまでもない。

と言うかフォルテの方もまだ行くには色んな意味で早すぎる場所だ。

「……………」

レントの方はホストっぽい男性からもらった名刺を何度も見ていたのだが、これはバ  
ラードが即座に没収した。

一見すると人間の少女と殆ど変わらない姿のレントだけにナンパ目的の人間だの口  
ボットが来るわ来るわ。

基本的にバラードが追い払っていたのだが、中には喧嘩腰になる者も居りそれとフォ  
ルテが騒ぎを起こすのが一種のお約束となっていた。

何度目かの騒ぎでロボットポリスへの通報がされていたのだろう。

先に説明した通り、バラード達は駆け付けたロボットポリスから逃げる羽目になった  
のであった。

「なんか怪しい天気ツスね」



空の向こう側が暗くなっているのに気付いたバラードだが、その日の疲れもあり天気  
の事などすぐに気にしなくなってしまう。

社会見学の結果報告も手短にしたバラードはさっさと眠りにつこうとしたのだが、そ  
の日は所謂厄日であったのだろう。

今、正に眠りにつかんとしたバラードにニードルマンからの緊急通信が入ったのであ  
る。

舌打ちをしながらもバラードが基地の司令室に入った時、呼び出したにも拘らず部屋  
で寝ているフォルテなどを除き、ほぼこの基地にいる全ナンバーズが集結していた。

「まずはこれを見ろ・・・」

ニードルマンが指を指す司令室の大画面。

そこにはワイリー軍団が独自に入手している映像と現在テレビの中継で行われてい  
る映像が所狭しと映し出されている。

街に・・・土砂降りの雨が降り注いでいるのだ。

「ハリケーン・・・？　そういや帰りに空が暗くなっているのを見たツスけど」

ここ南米では熱帯地域に属する為にスコールやハリケーンなどが発生する地域では  
あるものの。

「当たり前だがハリケーンには発生前の予兆があるのだが。こいつはいきなり現れ今、

この街に真つ直ぐに迫ってきている」

ニードルマンが短期間で発生したハリケーンが自然の物ではない事を指摘する。

「正直これくらいの規模の奴を発生させるとエアアの兄貴でも難しい・・・テングマンなど天候系の奴らを何百人と集めねばならんだろうな・・・」

エアーマンやテングマン・・・そしてこの基地にいるクラウドマン。彼らは部下の口ポットと力を合わせれば小型の台風を発生させる事も可能だ。

しかしそれは無条件と言わず前準備も含め周到な計画が必要となる。

「おい・・・クラウド!!なんか原因は分かったか?」

ニードルマンが端末に向かって話しかける。

「こちらクラウドマン!!ゼーネルシティの上空に高エネルギー反応あり!!これが原因でこの異常気象が起こっているものと・・・!!」

恐らく司令室の画面に映される映像も彼が流しているのだろう・・・クラウドマンが強風にあおられながら必死に状況を説明する。

「高エネルギー反応・・・降下!!街に降りて来ます・・・!!あつ・・・あれはつ・・・!!」

「おいクラウド!・・・どうした・・・!」

「ば・・・化け物です!!化け物が嵐の中心に・・・!!」

クラウドマンの絶叫が司令室に響き渡る。

彼の目から送られる映像から現れる「化け物」の姿を見て司令室に居合わせた全員が声を上げる。

「化け物」まさにそうとしか言えない縦だけでも十数メートルはあるだろうか巨大な機械が街の中心部の空へとゆっくりと姿を現す。

巨大な二本の角、血走った双眸、大きく裂けた口・・・そしてその下半身は蛇の様に足が無く自身が発する風により竜巻そのものの形をしていた。

化け物は周囲に巨大な竜巻を発生させるとそれはみるみると巨大化し街のビルや車そして人々を飲み込んでいく。

「・・・・・・・・!!!!」

次々と破壊される街の様子に啞然とする一同。

「確かどこぞの実験施設で都市圏の天候をコントロールする為の装置が開発されていると聞くんが・・・」

ニードルマンが唸る様に口を開くが、映像に映る光景はとてもではないが天候をコントロールしているとは言い難い。

寧ろ暴走していると言っても良いだろう。

後の世になって周辺の天候を自在に操る技術が確立され、大都市圏を中心に気象コントロールセンターが整備されるのだがこの時代にそんな物はまだ無い。



基地が一瞬大きく揺れたかと思うと部屋中の照明が消え真っ暗になる。

「停電・・・!!何も見えないッス」

「暗いである!!我輩暗い所苦手であるよ!!」

「ひつつくな!!シールドてめえ・・・そのなりでそれは無いだろうが!!」

先ほどの映像もあいまってシールドマンの悲鳴とジャンクマンの怒号が部屋に響き渡る。

「慌てるな・・・ちよつと待ってろ」

慌ててカメラアイを夜間用に変える一同の中、ニードルマンがパニックを制する様に言う。

そしてしばらくして点く非常灯・・・。

「チツ・・・非常電源になりやがった。あれだけやられれば街の変電所も駄目か・・・まあ一応三日は持つ様になってるから安心しろ」

ニードルマンは腕を組みながら周りのナンバーズ達に冷静になるように諫める。

「確か普段動かしていない自家製の発電施設が基地内にあつたな・・・スパーク頼めるか?」

「うん・・・了解!!」

ニードルマンの指示を受けるとスパークマンは急いで部屋を後にする。

先ほどの停電で気づいたのかようやく起きたフォルテが眠気眼な顔で司令室に入っ

て来る。

「なんだよ・・・基地の電気が急に消えたり点いたり・・・」

「そんな事よりやばい事態ツス・・・!!」

バラードに指を指された画面を見てフォルテの顔が一気に引き締まる。

「これは・・・!!」

バラードはこの経緯を簡潔にフォルテへ伝える。

「おもしれえ!!ああ言うでかい奴とも久しぶりにやりたかったんだ・・・!!」

「フォルテ殿!!自分もお供するであります!!」

そう言うや否や部屋を飛び出していくフォルテとパッションナー。

「かっくー!あいつらは学習能力無いツスカ!!」

分かっていた事とは言えフォルテとパッションナーが飛び出して行くのを見たバラ

ードは頭を抱える。

緊急事態だがこうなると誰にも止められないのがあの二人である。

そんな折、ニードルマンが手に持つ端末に着信が入る。

溜息を吐きつつ彼はそれに応答をする。

<よう・・・久しぶりだな>

端末の画面に映し出されるのは鋭い目つきをした壮年の男性である。

「貴様か……今は相手をしている時間は無い」

ニードルマンの素っ気ない言葉に男は肩を竦め眉をピクリピクリと動かす。

くまあそう言うな。既に分かっていると思うが街の方で暴走しているのは政府軍が開発した気象兵器だ。何時ぞやパイレーツマンの隠れ家と言うかロボスターの養殖場を破壊したのもそれな>

「気象兵器……?」

<ああ……気象兵器テュポンと言うらしい。大方兄貴のロボットのデータを解析して造ったんだろうさ。何せキング事件の時に多くの研究データを外に流出させちまったからな>

男の言葉にニードルマンが唸る。

キング事件の際に研究所を襲撃された事もあり、ワイリーは今までの研究データの幾つかをキング軍団や政府軍に奪われてしまっている。

まあ元よりその手の管理に甘いワイリーだけに戦いの度にデータの流出は起こっているのだろう。

付け加えておくが当時連邦政府と共闘する事にもなった事もあり、ワイリー自身がデータを提供したケースもある。

「情報提供には感謝しよう……だが無用な連絡は止めて頂こう」

くそう言うなよ。可愛い甥っ子共と話をするくらいは良いじゃねえか」  
態度の変わらないニードルマンに男は豪快に笑う。

まるでどれだけ嫌っても構いに行くと言宣するかの如くだ。

その姿にバラードは生みの親の顔を重ねてしまう。

それもその筈でこの男の名前はヴァイスⅡWⅡワイリー。

悪の天才科学者アルバートⅡWⅡワイリーの年の離れた弟なのである。

兄と違い科学者としての才能は無かつたらしいが、代わりに経営者として才能があったのだろう。

彼は巨大企業ヴァイスカンパニーの社長を務めている。

当然ながらまともな企業ではなく裏では連邦政府との癒着も噂され、次いで言えば世の中に居るワイリー軍団の裏のスポンサーの一つだ。

く詳細なデータは後で送っておく。だが気を付けておけ、どうも何時ぞやの異星のエネルギーが関連しているみたいだ」

「異星のエネルギー……？悪のエネルギーツスか？」

くその声はバラードか。政府軍の基地でエネルギーを切った筈なのにテュポンは動き出した。それにあれは元より試作品……巨大なボディを見りやわかるが稼働時間も本来なら数時間しかない筈だったんだが」



「悪のエネルギーなり無蓄蔵のエネルギーを媒介にして暴走している・・・と」

くまあそう言う事になる。だからただのデカブツと思うなって事とこれを裏で操つて  
る奴が絶対に居るって事だ。話は以上だ・・・切るぞ>

話すだけ話して通信を切るヴァイスに何度目かの舌打ちをしながらニードルマンが  
バラードに振り返る。

「俺も街に行くツス。ヴァイスの話が本当ならフォルテ達でも大苦戦ツス」

バラードの言葉にニードルマンは無言のまま頷くと自らは他のナンバーズと共に基  
地への被害が最小限で抑えられる様にすべく行動を開始する。

「バラードさん!!私も行きます!!」

そんなバラードに慌てて声をかけるレント。

「レント・・・ツスカ!ニードル!!いいツスカ?」

「仕方あるまい・・・だが如何に高性能と言えど初陣には変わりあるまい・・・気をつけろよ  
!!俺達も基地の点検が終わり次第に駆けつけるからな」

その声に頷くとレントに『ゆっくりで良いから後で来い』とそう言いながらバラード  
はフォルテに追いつくべく一気に駆け出す。

フォルテが現場に駆けつけるとそこには遠巻きに魔獣を囲むロボットポリス達の姿

があつた。

(ケツ!!何もできん無能共が・・・!!)

そう心の中で吐き捨てるフォルテ、しかし彼らも彼らなりに被害を最小限に抑えようと必死である。

「貴様・・・フォルテだな・・・!!」

一人のロボットポリスがフォルテの姿を確認すると周りの仲間もその声に一斉に身構える。

どうやらあの魔獣と戦う前に彼らと一戦交えなければならぬようだ。

好戦的なフォルテが鼻を鳴らした時であつた。

「・・・待テ。オ前達デハ・・・コイツヲ倒スノハ無理ダ・・・」

たどたどしい声と共に姿を現すロボット。

不気味な紫色のローブを身に纏い魔法使いを連想させる姿をしたロボット、カースマンである。

彼はフォルテの前に立つと一つしかないモノアイでフォルテを見据える。

「ヘッ・・・!!お前だつたらこいつらよりもあのデカブツ相手の準備運動に丁度良いぜ!」  
フォルテが残忍な笑みを顔に浮かべるがカースマンは無機質な顔に付けられたモノアイを静かに点滅させる。

「・・・才前ト戦ツテモ意味ガ無イ・・・」

カースマンはフォルテを制する様に手の平を見せるとさらに言葉を続ける。

「アノ「マジユウ」ヲ倒スノカ・・・?ナラ協力シロ・・・!!」

「チーフ!!何考えてるんですか!!こいつはあのフォルテですよ!!?街が混乱しているのに乗じて何を仕出かすか」

フォルテが口を開く前にロボットポリスの傍らにいた少年型のロボットがカースマンに食って掛かる。

あのトマホークマンをそのままスケールダウンした様な外見を持つ真面目で実直そうな少年である。

「ケツ・・・俺としてはどっちでも構わねえが・・・」

フォルテがそう呟くのを少年は見逃さず、そのまま苛立った様に身構える。

感触としては馬が合わないそう思いながらフォルテは上空で咆哮を上げる魔獣へと視線を移す。

「フェザー・・・アレハ政府軍方造ツタ氣象兵器ダ。少ナクトモワイリー軍団ハ関係ナイ」

「しかし・・・チーフ!!」

フェザーと呼ばれた少年型ロボットはそれでもなおカースマンに食い下がる。

「内輪ノ恥ダガ今ハ、ワイリー軍団ノ手モ借りタイ状態ダ。頼メルカ・・・」



はそれを手で制すると先端に水晶を象った杖を手に構える。

フェザーマンはフォルテを睨みつけていたが今はその時ではないと表情を戻すと得物の短槍を取り出す。

各々三人が魔獣を見据える……。

「グオオオオーノン!!!」

魔獣の咆哮と共に発生する嵐と雷……それが戦いの合図となった。

「ガーツハツハツハツハ!! さあて面白くなって来やがったぜ」

遠目よりその光景を目にし笑い声を響かせるは黒衣を身に纏った巨漢の人影。

その彼の傍らにはもう一人黒衣を身に纏った人物が居た。

巨漢のロボットとは裏腹に感情の籠らない目で眼下を見下ろす。

「……さてどうなるか」

「ヴォイド。もう少し楽しんだらどうかだあ? それにしてもあれは……あれなんだろう?」

ヴォイドと呼ばれた人物の視線を巨大な腕で指差しながら巨漢はほくそ笑む。

対してヴォイドの方は特段反応を示さない。

「テュポンの制御は任せるぞソロー」

機械的に己に話しかける相手にソローと呼ばれた巨漢は面白くなさそうに鼻を鳴ら

す。

「任せる……あれの中身には俺様が生成した水晶を数本突き刺してあるからな。どう動くもこの俺様の思い通りだあ」

巨大な腕より立ち昇る怪しげなオーラ。

禍々しきとしか形容出来ないそれを触媒にソローは巨大な兵器を遠隔で操っていた。

「慣らしの運転には丁度良い。まあモノをけしかけるつてのは相には合わねえがなあ」

ソローが握り締めていた拳を開け放つのと呼応するかのようにテュボンが辺りに咆哮を響き渡らせる。

自らが操る兵器に果敢に立ち向かう者達を見据え、彼は薄笑みを浮かべるのであった。



容赦無く襲い掛かる魔獣に三人が身構えた時であった。

「GOオオオオ!!ダルセニヨー!!」

声を張り上げながら馬型ロボのダルセニヨーへと跨った。パッションナーが文字通り飛び出してくる。

フォルテと共に基地を飛び出したパッションナーだったが、彼はサポートメカのダルセニヨーを連れて来るのを忘れており彼を迎えに行く為に戻っていた事もあつての到着の遅れとなる。

先も言ったが本来であれば装備される筈の武装が届いておらず徒手空拳の彼。

傍から見れば自殺行為以外の何者でもないのだが、その動きは非常に速い。

「馬鹿野郎・・・何を!」

フォルテが叫ぶのを聞いてか聞かずかパッションナーはテュポンの眼前を横切る。

バチバチバチバチツツ!!

自らの小回りが利かない事を熟知しているのかテュポンは周囲に無数の電撃を撃ち放ち、動き回るパッションナーを迎え撃つのだが。

「エレメントチェンジ!!ライトニングモードオオオ!!」

咄嗟に自身の属性を変えたパッションナーは放たれた電撃をその身で受け止めていた。

ニヤリと笑みを浮かべダルセニヨー共々、金色に光り輝くパッションナーがその腕を



テュポンへと向ける。

「お礼を言うでありますよおお!! 出力最大で放つうう!! ライトニングウウ!! アロオオオオ!!」

正しく雷光の矢と表現する他無い一筋の光がテュポンの頭部へと叩きこまれる。

「グオオオオオ!!」

苦悶の声を上げるテュポンの姿にフォルテは驚く他無い。

今まで自身が有効打を与えられなかった敵に一撃を決めたパツシヨナー。

まだまだ動きも単調だが、本来与えられる武装を手にし経験を積みば更に強くなるかも知れない。

正直な所、先の戦闘訓練で拍子抜けしたところもあつただけにフォルテは彼を内心で見直したのだが。

「押忍!! 見たでありますかああああ!! 自分の力をおお!!」

馬上でガツポーズを決めるパツシヨナー。

「ヒヒーン!!」

そんな彼に警告する様に声を上げるダルセニヨーだがもう遅い。

ズサアアアアアアアツツ!!

「なんと!! ダルセニヨー!! ブレーキでありますうう!!」

自身の眼前を倒壊したビルが塞いでいるのに気づき声を上げる。パツシヨナーであったが、勢いが付き過ぎたダルセニョーはそのまま瓦礫の山に突っ込んでしまう。

ズドオオオオンツ!!

辺りに散乱する瓦礫の中に一人と一頭の姿が消えてしまう。

これはテュポン相手に一撃を決めた事で調子に乗ったパツシヨナーのミスであるが、サポートメカであるダルセニョーの方ももう少し場数を踏んでいれば今の事故は防げたかも知れない。

「……………」

カースマンが困惑気に見てくるが、フォルテもどうコメントをすれば良いのか分からない。

勝手な自滅で脱落したパツシヨナーはさて置きである。

己に一撃を見舞い少なからずの損傷を与えた敵が一瞬で現れ一瞬で消えた事もあり、真下の瓦礫の山を見渡していたテュポンであるがその搜索を諦めた再びフォルテ達に視線を向けた時であった。

ドオオオオン!

突然起こった爆発に魔獣の体が僅かながら仰け反る。

フォルテが振り向くとそこには慌てて後を追いかけてきたバラードの姿があった。

「フォ・・・フォルテエ・・・!!いくらなんでも走るのが速すぎッス!!」

肩で息をしながらバラードはフォルテに言い放つ。

「遠くから見えていたツスけど・・・どんなに風で攻撃を逸らせても爆風だけは防ぎきれないッス!」

そう言うや否やバラードは宙に浮く魔獣目掛けバラードクラッカーを連発する。

風で遮れ方向こそ反れるものの爆発により確実に魔獣に手傷を与えていく。

嫌らしい事にバラードの放つ炸裂弾は微妙に方物円を描いておりしかも適当に連発したうちの一発が魔獣の頭部に直撃する。

「グオオオオー!!」

魔獣の体が大きくぐらつくくと魔獣の体を覆っていた風が消えてなくなる。

無論それを見逃すフォルテ達ではない。

「今度こそ・・・!!喰らえええー!!」

フォルテの渾身のチャージショットが魔獣の頭部に直撃する。

パッションナーの一撃を受けた箇所へと叩きこまれた一撃は更に傷口を広げていく。

「今ダ・・・カースビーム!!」

「行くぞ!ジャベリンシーカー!!」

カースマン、フェザーマンもそれぞれ攻撃を仕掛ける。

立て続けに爆炎が魔獣の体を包み込みこんで行くが。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

辺りに響き渡る魔獣の怒りの咆哮・・・そしてそれに呼応するかの如くますます嵐が激しくなる。

先ほどよりも遥かに強力な風の鎧を纏いながら魔獣は怒りの形相でバレード達を睨みつける。

「本当に・・・化けものツスね」

その言葉にフォルテが突っ込む間も無く巨大な竜巻がバレード達に襲い掛かる。

「うわああー!!!」

全員なんとか避けたと思ったのも束の間、フェザーマンが横薙ぎの強風に煽られそのままビルの壁面に体を強かにぶつける。

「フェザーマン・・・!!大丈夫か・・・!?!」

「チ・・・チーフ・・・」

先ほどの衝突で頭部を打ったのだろう。

朦朧とした様子で口を開くフェザーマンにカースマンは手を挙げそれを制するのだが。

「ち・・・チーフ。俺の事はともかく早くあいつを・・・!」

「アア・・・分かつた。オ前ハ、一旦サガレ」

仲間の無事を確認しカースマンがテュポンを睨み据える。

フェザーマンとてワイリーナンバースなどに匹敵する性能を持つてはいる筈だが、氣象兵器たるテュポンが巻き起こす嵐はロボットですらも簡単に破壊出来るだけの力がある。

「全く何て性能だ。ジジイが基地の防衛に当たらせてるメカよりも強いんじゃないか？」

「まあ政府軍が造つたみたいツスから。うちと違って潤沢な資金があるんじゃないツスカ。羨ましい限りツス」

フォルテの悪態にバラードが溜息を吐きながら言う。

それを確認すると強風を全身に浴びながらバラードは魔獣の前に仁王立ちの格好で立ちはだかる。

「ケツケツケツス！俺らワイリーナンバースをなめると痛い目を見るツスよ!!」

ニヤリと笑みを浮かべたバラードの姿は一瞬で消え去る。

ドゴオオーン！

そして次の瞬間魔獣の頭部が再び爆風に包まれる。

一瞬の間にビルの壁をよじ登ったバラードがバラードクラッカーを放つたのだ。

「台風の目で思い出したツス．．．！その中心には風がない．．．つまり上から攻撃すればツス」

「グオオオオー！！」

魔獣はビルごとバラードを吹き飛ばそうとするが既にバラードは地上に降り立っている。

「さあ！反撃開始ツス！！」

倒壊するビルを背にバラードがフォルテに叫ぶ。

「うるせえ．．．言われなくても分かっているー！」

バラードが意気揚々と言うのにフォルテもまた茶々を入れる。

「よし！！行くぜえー！！」

「うおりやあああーツス！！」

二人は魔獣に向かって見据えるとそれぞれ一気に動き出した。

．．．のだが。

バキツツツツ．．．．．！！

今まさに魔獣に向かって動かんとしていた二人だったが．．．．。

二人は丁度、鏡合わせの様に横に動いた為にお互いの首にリアットをかます形で地面に突っ伏す。

「てめえ……!!」

「気をつけろっス!!」

立ち上がったフォルテとバラードは瓦礫が顔に張り付いたまま睨み合う。

こんな状況であっても戦闘でのお互いの相性は最悪だった……。

「……………」

困惑した様にカースマンが振り返って来るのもあってフォルテの顔が真っ赤になる。

「い……今のはいつが悪い」

「ふざけんなッスよ!!悪いのはお前の方ッス!!」

互いに歯を軋ませ先程の様にならないとばかりに距離を取る二人だったが。

バラードが炸裂弾を放てばそれをフォルテのバスターが相殺する形で放たれる。

フォルテがダッシュで回り込もうとすればそこに罠として仕掛けられた（と言うか時

限式に爆破して相手に注意をひかせる為に設置した）バラードクラッカーがフォルテを

吹き飛ばす。

バラードが動いた際にはフォルテが跳ね上げた瓦礫がその行く手を阻む。

「てめえええ……!!ふざけんなああ!!さっきから俺の邪魔ばかりしやがって

!!」

「それはこっちのセリフッス!!さっきから俺の仕掛けた罠をどうして壊しちゃうッスか

!!  
」

魔獣をそつちのけで睨み合う二人の兄弟。

それはあつと言う間に取っ組み合いの喧嘩へと発展しかける。

「……………」

再度、彼らを見据えるカースマン。

心なしかテュポンの方も待っていてくれるように思えるのは気のせいだろう。

「いっつもいっつもガキ扱いしやがって!!ちよつとばかり早く生まれたぐらいで調子に乗るなあ!!」

「ガキにガキって言って何が悪いツスカ!!大体お前はもつと年長者に対する礼儀ってもんが……………!!」

まるでマンガの様に砂埃を上げながらぐるぐる転がる二人。

「あつ!そーいやこの前貸したCD返すツス!!後こないだの五百ゼニーも返せツス!!」

「今はそんな事関係ねえだろうが!!」

両者とも肩で息をしながら兄弟はお互いに一步も引かずに顔を合わせる。

グオオオオオオオオー!!!

先程から無視されていた魔獣が上げた咆哮に二人は漸くテュポンの方を見た。

「……………オ前ヲ。喧嘩ハ後テヤレ」



テュポンと同じくすっかかり蚊帳の外に置いてかれてしまっていたカースマンも唸りながら、二人に思わず注意をしていた。

「……チツ」

「……ツス」

それを聞いたかどうか二人はテュポンの方に身構える。

「そっさいやこいつと戦ってたんツスねえ……」

思い出した様に口を開くバラードに

仕切り直しとなるが状況は圧倒的に不利としか言い様がない。

バラードらの攻撃である程度ダメージを与えたものの、テュポンは弱るところか一層勢いを強めて襲い掛かってくる。

上空を飛び全身を覆う風の鎧でもってテュポンは殆どの攻撃を無力化させてしまう。

先程のバラードの様にビルをよじ登り上空から攻撃をする手もあるが気づけば周りの殆どの高層物はなぎ倒されている。

彼ら二人は魔獣に対して有効な手が無い……正に手も足も出ない状態なのである。

「ガウツ！ガウツ！」

そんな折、フォルテの目の前に一体の狼が姿を現す。

「ゴ……ゴスペル!!今まで何処に行つてやがった!!」

「ゴスペルツ・・・!!その手があつたツス!!ゴスペルブーストで空からあいつを攻撃ツス!!」

「うるせえ!!てめえに言われなくても分かつてらあ!!」

フォルテはゴスペルと合体すると漆黒の翼を纏いし姿ゴスペルブーストへと姿を変えらる。

そしてそのまま合体しブーストを全開に魔獣に向かって飛んでいく。

「これでなんとか勝算がありそうツス!!よくし!!俺は下から援護ツス!!」

そう言うバラードも弟に追いかける様に魔獣に走り出す。

ゴスペルとの合体により飛行能力を得たフォルテは魔獣の上方へと回り込みチャージショットを浴びせ続ける。

「オラオラツ!落ちやがれ!!」

「グオオオー!!」

文字通り翼を得たフォルテからの攻撃に先の勢いはどこへやら防戦一方へと追い込まれる魔獣。

フォルテのスピードに真空波も竜巻も文字通り空を切る。

その上、地上にいるバラードやカースマンによる容赦の無い攻撃が加えられるのだからたまらない。





この世界に住まう者が自然現象に勝てる訳が無いフォルテ自身もそれは理解している。

フォルテと言えども竜巻の直撃を受ければ助かる自信は無い．．．それほど相手は強力だった。

彼の心に屈辱とも怒りとも取れる感情が渦巻く。

ダメージの差で言えばフォルテよりもバラードの方がダメージも少なくまだ戦えたはずだ。

それなのにバラードはフォルテを庇つたのだ．．．いや庇われた。

その事がフォルテの胸に言葉に表せないような感情が芽生える。

こんな思いを抱くのは思うにあの時以来だ。

いつもそうだった。

確かに普段から喧嘩もするし仲も決して良いわけでもない。

しかしバラードは何かにつけてフォルテの事の面倒も見ると面倒事を起こせばその尻拭いもしてくれる。

「．．．クソツ!!クソツ!!」

宿敵であるロツクマンに敗れた事でフォルテは苛立ちを隠そうとせずに拳を地面に

叩きつける。

圧倒的な敗北感を少年は感じていた。

宇宙より飛来した未知のエネルギー『悪のエネルギー』を巡る一連の事件。

その悪のエネルギーに手を染め絶大なパワーを得たフォルテはロクマンに戦いを挑んだ。

しかし・・・勝てなかった。

その苛立ちは己への不甲斐なさか・・・それとも。

壁を叩くのも疲れたのか・・・その場に手をつきながらフォルテは肩を震わせながら泣いた。

「よー!!負け犬野郎・・・心気くせえツスね!!」

涙で赤くなつた目でフォルテは声の主・・・バラードを睨みつけるがすぐにその顔を伏せる。

「あつちに行きやがれ・・・!!」

フォルテの言葉を聞いたもののそのままバラードはフォルテの隣に座り込む。

「男つてのは親が死んだ時かタンスの角に足をぶつけた時にしか泣いちや駄目ツスよ・・・これはエンカー兄貴の受け売りツスけど」

バラードはなおもケタケタ笑いながら続ける。

「百回負けても百一回目に勝てればそれでいいじゃないツスカ．．．これもパンク兄貴の受け売りツスけど」

ニヤリとしまりの無い笑みをフォルテに向けるとバラードは彼の肩に手を乗せるとその体を引き寄せる。

「大体ワイリー博士なんて何回負けてるか数えられねえツスよ．．．」

「ジジイと一緒にするんじゃないやねえ気持ち悪い奴だな．．．!!クソツ．．．!!」

「明日一緒に釣りでも行くツスカ?気分も晴れるツスよ」

バラードは大きく笑いながらフォルテの肩を叩くとその場から去っていく。

フォルテはその後姿をただ見つめる事しかできなかつた。

その後の事である．．．バラードが生まれた当初、自分に勝るとも劣らない問題児だった事を他のナンバーズから聞いたのは。

「出来の悪い奴ほどかわいってね．．．お前がどう思おうと俺から見たらお前はガキだし弟には変わりねえツス!!」

いつの日かバラードが基地への帰路に言った言葉が脳裏をよぎる．．．。

「てめえ!!よくも俺の兄貴を．．．!!許さねえ．．．!!」

フォルテは兄が身代わりになって助かった事への己の不甲斐なさを怒りに変えゴス







「・・・・・・・・・・なに!!」

魔獣は一瞬の隙を突きその巨大な腕でフォルテを捉えると明らかに殺意の籠った目を向けてくる。

「ぐおっ・・・・・・・・!!」

バチバチバチバチツツ!!

テュポンの角が稲光を放ち始め眼前のフォルテを真っ直ぐに捉える。

「フォルテさん!!」

「・・・・・・・・イカン」

レントとカースマンが叫ぶが間に合わない。

先程はレントの攻撃によって妨害された電撃だが、今度はどうあつても防ぐのは不可能とフォルテも腹を括った時であった。

「シャアアアア!!ライトニングモード!!」

眼下で叫ぶ声にフォルテはハッと目を見開く。

今の位置からは見えないが何時の間にか姿を現したパツシヨナーがその腕を天に掲げダルセニヨーと共に宙を舞う。

「ゴアツ!!」

突然の乱入に注意が削がれたテュポンの腕が突然爆散する。

「・・・離れるツスよ」

後方より響く声に振り返る事無くフォルテは拘束の力が緩んだ隙を狙いゴスペルブーストの出力を全開にする。

続けざまに放たれるフォルテの光弾とパッショナーの雷撃を逆に頭部に食らい巨大な魔獣は地面へと真つ逆さまに落ちるのであった。

ズドオオオオオオンツツ!!

凄まじい地響きと共に地面に倒れ伏すテュポーン。

「よっしゃツス!!」

行方不明になっていたクラウドマンに抱えられながら宙に浮かんでいたバラードがガッツポーズを決める。

全身が傷だらけだが少なくとも五体満足で動いているので大丈夫なのだろう。

「てめえ・・・」

死んだと思っていただけに思わずフォルテが声を震わせそうになるが、彼は慌てて明日の方向を見る。

泣きそうになったのを彼にだけは悟られる訳にはいかないのだ。

「いやあ・・・何だかんだで勝利ツス!!」

ピースサインを作りながら高笑いをするバラードにフォルテはわざとらしく舌打ち

をするのであった。

まるで一時でも心配してしまった自分が馬鹿みたいである。

「バラード殿おお!! フォルテ殿おお!! お見事であります!! 自分は二人の実力を間近で見れて感動でありまあああ!!」

ダルセニョーと共に暑苦しくパツシヨナーが駆け寄ろうとしたので二人が思わず身構えた時であった。

沈黙していたテュポンが上体を起こしたのは。

バキツツ!!

無造作に剛腕を振るわれパツシヨナーがダルセニョー共々、吹き飛ばされる。

「きゃああああああ!!」

機能停止していたと思っただけにレントが少女らしい悲鳴を上げる。

大破したも同然のテュポンであったが、不屈の闘志とは裏腹の淡々とした様子で起き上がるうとする。

「お前からレントちゃんを守るぞ!!」

「イエツサー!!」

ハンジョーの言葉にジョー達がシールドを持って立ち塞がるも放たれた電撃を食らい一発でノされてしまう。

「・・・無念」

呻き声を上げながら倒れ伏すハンジョー達にレントの顔が恐怖に引き攣る。冷静になれば既に機能停止寸前の相手なのである。

いくらでも反撃の手段はあったのだが、レントの方はロールアウトしたばかりで経験が圧倒的に足りていなかった。

眼前に迫る巨大な腕を見てその場に縮こまる彼女。

ドガアアツツ!!

レントを掴まんとしていた魔獣の巨大な腕が文字通り吹き飛ばす。

バラードクラツカーによる一撃は厚いはずの装甲を難なく破壊していた。

元より宙に浮かび風の鎧を纏う事で得て来た防御力も既に失われて等しい。

今のテュポンはただ大きいだけの的であった。

「さっさと死んでいろツス!!」

「消し飛ばせよ!!デカブツツツ!!」

「往生際が悪いゾ!!」

バラード、フォルテ、カースマンが放った一撃がテュポンの巨体を大きく後方に吹き飛ばす。

「ゴアアアアアアアア!!」

断末魔の咆哮を上げテユポンの全身がバラバラになる。

今度こそ間違い無く動きを止めた魔獣を前にバラードは息を吐くと頭を押さえて蹲るレントの方を見る。

「ううつつ．．．来ないでください!!」

バラードが肩に手を置こうとするも反射的に払われてしまう。

若干の痺れを生じさせる手を見つめバラードは苦笑いを浮かべるしかない。

ややあつて漸く落ち着きを取り戻したレントは自分が何をしたのか理解し、その顔を青ざめさせる。

「あ．．．バラードさん。ス、スイマセン」

「いや．．．良いッスよ」

平謝りのレントにバラードは笑顔で首を左右に振る。

フォルテの方はフォルテで鼻を鳴らしていたのだが。

そんな彼らの前にカースマンが近づいて来る。

「．．．なんだよ」

ギロリと鋭い視線を向けてくるフォルテにカースマンは僅かに単眼の光を点滅させる。

「協力感謝スル．．．才前達ガイナケレバ街ノ被害ハ更ニ大ククナツテイタ」

独特の機械音で自身らに礼を言うカースマンにバラードは頭の裏を搔く。

「ま、たまにはって事ツスね。出来る事なら今度、俺らを見つけてもロボットポリスが動しない事を祈るツスけど」

「ソレハデキナイ・・・ゾ」

「・・・やつぱり」

自身の言葉にきつぱり断るカースマンにバラードは肩を落とす。

「それにしてもあれ・・・なんでこれ暴れていたんだろう?」

エネルギー切れを起こしたゴスペルにE缶を飲ませつつ、クラウドマンがテュポンの残骸を示し首を傾げる。

結果的に暴走し街を破壊したテュポンだが、政府軍が造った兵器であり本来であればこの様な事をする存在ではない。

「ソモソモ・・・テュボンニアレダケノ長時間動ケルダケノエネルギーハ無い筈ダ」

クラウドマンの疑問に答える様にカースマンがフルパワーで稼働出来る時間は極めて少ない事を説明する。

「僕やエアーにテング、それに加え軍団のメカを総動員してもあれだけの嵐を起こしての活動は無理だよ」

天候を操る事も条件次第で可能な事もあり、クラウドマンが付け加える。

「じゃあ一体どうやって．．．？」  
レントが首を傾げる。

「どうやってだあ．．．？そりゃあこうやってだあ!!」

不意に辺りに響く声。

ドスンツツ!!

今の今まで気配さえ感じさせずに突如として地面に降り立つは漆黒のローブを身に纏った巨漢のロボット。

バサリとローブの頭の部分を取り去った彼は黒紫色の重厚な装甲に覆われた顔を歪ませる。

「なかなか楽しませてもらったぜ。何とか軍団のガキ共く」

「お．．．お前。一体何者だ!!」

正体不明のロボットにフォルテが声を上げるが相手の方は思い出した様にテュポンの残骸を見る。

「まずは落としモンは回収しねえとな．．．」

ヴゥヴゥヴゥヴゥヴツツツ!!

ロボットの掌より立ち昇る禍々しいオーラにフォルテが思わず声を上げそうになる。そしてテュポンの残骸より浮かび上がるのはオーラと同じ色を放つ結晶体であった。



「・・・あれは」

クラウドマンが声を上げる中で水晶体はロボットの腕の中に納まり消失する。

「そのガキからは俺様と同じ匂いがするがまあ良い。俺様がこの星に来た時、どうやらこれを巡ってひと悶着あつたんだろ？」

掌の上で禍々しいオーラを髑髏の形に変えながら巨漢のロボットはほくそ笑む。

「そーいや名乗り忘れていたな。俺様の名前はソロー・・・宇宙の破壊者つて奴さ」  
自らをソローと名乗りしロボットにバラード達が一斉に身構える。

ワイリー軍団の実力者を含む面々に取り囲まれながらもソローの余裕は崩れない。

(この野郎は・・・俺の記憶が正しければ)

歯噛みするフォルテの意図を読んだのかソローが笑みを深くする。

「お前さんの予想通りだよ。ともあれ折角なんだからちよいとばかり付き合えよ」

巨大な腕をわざとらしく振るいながらソローも身構え腰を落とす。

「少しは楽しませろよ。サンゴッドやデューオ程じゃないにしろ・・・この星のロボットと前から戦ってみたかったんでな」

宇宙より舞い降りし暴君はその全身よりテュポンの比ではない圧倒的なエネルギーを辺りに吐き出すのであつた。

## V O I 7 舞い降りし暴君

南米においてバラード達が思わぬ強敵と対峙していたその頃、火星と呼ばれる惑星が存在する軌道宙域において一人のロボットが苛立った様にモニターを見つめていた。

猛禽類を思わせる姿をしたロボットの名前はジュピター。

ワイリー軍団の中では異質とも言える非ワイリー製と言うか地球外の技術で製作されたロボットの一人である。

「奴め・・・まさか地球に戻って来るとはな」

進路上の偵察衛星や観測用のドローンが拾ったデータからジュピターは近づきつつある存在の正体を察する。

と言うかそもそもデータを見るまでも無く彼らには分かる。

今の状況下において単独で宇宙を自在に移動できるデータラメな存在など、あのロボットを置いて他には居ないだろう。

スペーススルーラーズと呼ばれる彼ら宇宙ロボは、迫り来る『調停者』なる存在と何度も戦場で対峙している。

ジュピター自身、別段生まれ故郷への未練は持たないがそれぞれが属する惑星が血み

どろの戦いを繰り広げていた敵同士の間柄だと言う事もあつて因縁は深い。

「アース隊長が居られぬ時に厄介な……」

忌々し気に呟きながらジュピターは再建なったワイリースターの管制室を飛び出す。

スペーススルーラーズ事件の際に最終決戦の場となったワイリースターは、その際に爆散し大破しているのだがワイリーはルーラーズに命じて密かにそれを再建させている。

キング事件の際には8割方の修復は完了していたのだが、アクシデントもあり起動には至らず……再建が完了した現在では次なる出番を待ち待機をしていると言う状態だ。

ワイリーの号令さえ下れば何時でも動けるようにしている彼らであつたが、今回の件は想定外と言わざるを得ないであろう。

政府軍ですら手が出せないと高を括つていた事もあるが、まさか自分達の方に敵が接近してくるなど誰も考えても居なかつたのだ。

(これは後で対策を練らねばな……)

ジュピター自身も思わず己の驕りに反省をする他無い。

何時ぞやのロックマンとの戦いの際にはその驕りゆえに勝てる筈の敵にまさかの敗北を喫したのだから。

「アース隊長は数時間前に地球に向かわれた。もしかするとそれも関係あるのかも知れん……が漸く再建なったワイリースターを破壊される訳にはいかん。ワイリースター

はこのままカモフラージュ装置を稼働させつつ後退させる」

ワイリースター内に命令を下しジュピターは急ぐ。

「奴の迎撃には我らスペーススルーラーズが当たる。他の奴らは絶対に動くな!!」

宇宙空間より飛び出したジュピターは既に迎撃準備に取り掛かっていた他のルーラーズの面々と目配せする。

現在ワイリースターに居るのはジュピターにビーナス、マーキュリー、サターン、ウラノス、プルートとの六名である。

彼らの隊長のアースは先にも言及があったように不在であり、マースとネプチューンは地球の支部基地に配属されている。

同じ様にここ宇宙にはワイリー軍団からはスターマンが派遣されているが、彼には万が一のことを考えワイリースター内で待機をしてもらっている。

「フーツツツ!! デューオだニヤ!!」

全身の毛を逆立たせながら猫を思わせる姿の少女が叫ぶ。

精神プログラムの幼いプルートは今にも飛び出さん勢いである。

「まずは敵の狙いを探るぞ。俺達が力を合わせて勝てるかどうかの相手だ・・・慎重に動くぞ」

「話によればあの野郎も地球に落ちて来た事で本来のボディを喪失。コサツクなる科学

者が製作した間に合わせのボディのまま宇宙に飛び立っていったらしい」

「つまりは今の奴は俺らが知っている頃よりも弱くなってる可能性があるってか?」

ジュピターの言葉にサターンとウラノスが口を開く。

「だとしても簡単に倒せる相手とは思えん。我々のサンゴッドと同等かそれ以上の力を持つ存在が敵なのだ」

一瞬、付け入る隙があるのではと考えてしまいがジュピターは己の楽観的な考えを即座に頭から捨て去る。

「アワ〜!!それを言ったらビーナス達も一緒アワ」

こんな危機的な状況にも拘わらず笑みを絶やさぬビーナスだが、彼の言葉通り現在のルーラーズはアースを含め全員が本来の性能を發揮出来て居ない。

ワイリースターの原型となった異星の巨大要塞に封印されていた彼らを発見したのがあのワイリーなのであるが、一言で言えば天才科学者たるワイリーの技術を以てしても異星の文明の副産物であるスペースルーラーズを完璧な形で修復するのは無理であった。

彼らのボディの内部は本来の物と地球産の代用品で構成されており、そういう意味では本来のボディを喪失し間に合わせのボディとなっているデューオと同じである。

まあこの状態でも地球に居るロボットらを圧倒できるだけの性能を有しており、彼ら

を生み出した文明が如何に高度な存在であつたかを物語っている。

(我々の星があつた場所にいずれば舞い戻る必要もあるかも知れんな……)

既に滅亡してはいるが本星周辺の宙域には軍事関係の基地が無数にあつた事を記憶しているだけにジュピターは、自身らのボディを元通りに戻す手段を探すのも必要と考へた所でセンサーが急速に接近する光を捉える。

「来たぞ……!!」

己の身を分裂させながらマーキュリーが叫ぶ。

「ニヤニヤニヤニヤニヤツツ!!」

真つ先に飛び出していくのはブルートであるがタイミングが早すぎる。

思はず声を上げそうになるが一瞬の内に最高速となる彼女を止めるのは不可能だ。

「ブレイクダツシユだニヤアアアアア!!」

自らも光の矢となり迫り来る光に真つ向より立ち向かうブルートであつたが。

ガキンツツ!!

一瞬の激突の後、真横に吹つ飛ぶのは。

「フニヤアアアア!!」

やはりと言うかウエイトの軽いブルートの方である。

非情ではあるが勝手に飛び出し吹き飛ばされた彼女に構っている時間は無い。

ズドドドドドドドドドツツツ!!

プルートのがぶつかつた事で僅かに動きが止まった光の前で無数の爆発が起こる。ビーナスが抜け目無く展開していたバブルボムである。

一連の爆発の影響で完全に光の動きが止まり、デューオが僅かに声を上げたのが分かった。

「ブモオオオオツツツ!!」

その隙を逃さぬとばかりに雄叫びを上げながらルーラーズ随一の怪力を誇るウラノスが迫る。

ガキツツツツ!!

プルートとは違い放たれた拳を真つ向から受け止めたウラノスの眼前で光の中から無骨な外見のロボットが姿を現す。

「お前達は……」

ウラノスと距離を取りながら宇宙の守護者は自身を取り囲むルーラーズの面々に目を向ける。

「この星の言葉でこう言うらしいぜ。ここであつたが百年目つてな!!」

「アワ〜ここは通さないアワー!!」

マーキュリーとビーナスがデューオに向かって啖呵を切る。

「話には聞いていたがお前達もあの星に辿り着いていたのか」

サターンの話通り記憶と違うボディではあるが、その巨大な左右非対称の腕は殆ど変わらない。

「悪い事は言わん。今、お前達を相手にしている状況ではない」

デューオがその顔を険しくさせながら言うが『どけ』と言われて簡単に通すジュピター達ではない。

「俺の記憶が正しければ問答無用とばかりに悪を断罪してたつてのにちよつと丸くなつたか？」

ジュピターの皮肉に相手の方は殆ど反応は示さない。

無言で拳を握り締めるのみだ。

元より彼が他人とましてや敵である自身らと話をする様なタイプでは無かつたとジュピターは遙か昔の事を思い出してしまふ。

何が理由で戦争状態になったのかは末端の兵士に過ぎないジュピターらが知る由も無いが、自身らを生み出した惑星と彼らの惑星は気の遠くなる程の年月の間、戦争を続けていた。

奇しくも互いに生み出した二柱の人造神と言える存在を前面に押し立て、戦いはより凄惨な物となっていく。



あの戦いの最終局面で起こった事はジュピターに限らず他のルーラーズもまた脳裏に焼き付いているであろう。

ヴヴヴヴヴヴヴヴツツ!!

真横で発生したサターンのブラックホールを強引に突破し、デューオがその剛拳でもってマーキュリーのボディを粉碎する。

「ケケケケ・・・知ってるだろ？俺の体が液体だったのは」

液体金属性のボディである事を利用し無数に分裂したマーキュリーが次々とスナツチバスターを放つ。

エネルギーを吸い取る事に特化した光弾を数発まともに受けながらもデューオの動きは鈍らない。

通常のロボットであれば今の攻撃で動く事が出来なくなっていただろう。

「エレクトリックショック!!」

片腕のバスターを構え巨大な電撃を撃ち放つジュピター。

それに続けとばかりにビーナスもバブルボムを放ち、その爆風に紛れる様にウラノスが拳を叩きつけようとするのだが。

ガシイイツツ!!

「ブモツツ!!」

己が放った拳を受け止められ驚愕の声を上げるウラノスに対しカウンター気味に巨大な拳が叩きつけられる。

一撃でウラノスを昏倒させたデューオはバブルボムの爆風から逃れると、片腕にエネルギーを集め始める。

(俺らが総がかりで殆どダメージはなしか。絶望的じゃねえか・・・)

分かつていた事だがデューオとの実力差は圧倒的だ。

先程以上にエネルギーを全身に集め始める敵を前にジュピターらが覚悟を決めた時であった。

「おっ!!皆、ちょっとストップだよ!!」

自身らの背後から場違いな声が響きジュピターは思わず声を上げそうになっていた。

配下のビリバリーのビリーと共に近寄って来るのはワイリースターに待機していた筈のスターマン。

「お前・・・待機している」と

「そんな事より大変なんだよ。今、地球で謎のロボットとフォルテ達が戦ってるみたい」  
ジュピターの言葉を遮りながらスターマンは手にした端末を掲げ、地球上で起こっている非常事態を告げる。

映像に映し出される敵側のロボットにジュピター達が息を呑む。

「・・・ソロー。やはりか」

構えを解いたデューオがその名を口にし彼らは互いに顔を見合わせる。

「二度去った地球に私が舞い戻ろうとしているのはソローの気配を察知したからだ。地球の平和はロックマンに託したつもりであったがああソローが・・・あの星で活動をするのであれば話は別だ」

巨大な拳を握り締めデューオが言う。

「つまりそちら様はあくまでも我々ワイリー軍団の邪魔をしに来たわけではなく。このソローを止めるが目的なの？」

彼の方はルーラーズの面々程、デューオと個人的な因縁も無いためにどこか能天気に見えていた。

「じゃあ素通りさせても良いんじゃないの？ほら・・・私達も大事な作戦前に戦力を無駄にしたくないし」

「だがそれでは・・・」

「どう足掻いてもそつちの方が穏便だよ」

「じ・・・自分もそう思います」

渋るジュピターにスターマンとビリバリーがそれぞれ口を開き、ルーラーズの面々を呆れさせる。

長年戦争を続けて来たルーラーズと違いワイリー軍団と言うか地球のロボットはどうしてこうどこか能天気なのか。

敵と言えば殺すか殺されるかと言う認識しか持っていなかっただけに、この独特の温さはどうも慣れない。

「はあゝ……」

手にした輪を戻しサターンが大きく溜息を吐く。

見ればビーナスやウラノスも同じ様に構えを解いていた。

マーキュリーの方も体は再生させたが、すぐに動く気配はない。

「確かに……こいつが本当にソローなら下手すると地球が破壊されるな。俺達としても大恩あるワイリー様が居る星を破壊されるのは勘弁だ。そもそもワイリー様の目的は地球の征服であり破滅じゃねえからな」

ジュピターも構えを解いた所でデューオも彼らに続いて握り締めた拳をゆつくりと離していた。

「通してくれるのだな？」

「ああ……どうせこのまま戦つても勝ち目が無いしな。まあワイリー様に戦えと命じられれば話は別だが」

確認する様に訪ねて来るデューオ。

追い払う様に手を振るジュピターだったが。

「あ、そうだ。どうせなら皆で行かない？一応は共通の敵なんですよ？敵の敵は味方って言うしさ」

思い出した様に腕を叩くスターマンの言葉に一同は思わず目を点にさせるのであった。

「「・・・は？」」

異口同音に響く声を前にスターマンはピンとこなかったのか逆に首を傾げていた。

一方、地球である。

気象兵器テュポンを撃破したのも束の間、バレードとフォルテ達は突如として現れたソローなる謎のロボットと対峙していた。

挨拶代わりに周囲に放ったエネルギーの余波で瓦礫を軽々と吹き飛ばすソローにフォルテは歯噛みする。

目の前の相手は確実に自身よりも強い。

自信家のフォルテであってもそれを認めざる得ないだけのエネルギーが感じ取れる。だがそれで臆するかわれれば話は別だ。

「おおおおお！！」

雄叫びを上げながら地面を蹴るフォルテに巨大な拳を握り締めソローは笑みを深くする。

「来るかあ・・・!!」

底冷えする声を響かせながら巨大な腕で接近するフォルテを握り締めんとするソロー。

左右非対称の腕を見るまでも無くソローは接近戦を得意とするのだろう。

フォルテの方と言えばロックマン同様にバスターを基本装備としており、接近戦よりは相手と間合いを取つての戦いを得意としている。

ましてや今のフォルテにはゴスペルと合体した事によって飛行能力も得ているのである。

自ら敵の懐に飛び込んだ形となるが、フォルテには一つだけ直感的に理解している事があった。

「フォルテさん!!援護します!!」

胸部の装甲を開きながらそこに隠された砲塔から巨大なビームを放つレント。

先程テュポンを事実上の戦闘不能に追い込んだ一撃が側面よりソローに迫る。

接近するフォルテに気を取られた事もあり、ソローがビームの方に目を向けた時、光芒は眼前に迫っていた。

絶体絶命としか言えない状況にも拘わらずソローが大きく鼻を鳴らすのをフォルテは確かに聞いた。

「バチイイイイツツツ!!」

フォルテを拘束せんとしていた腕を真横に伸ばしソローは迫るビームを受け止める。あのジェットキングロボの主砲に匹敵する一撃を軽々受け止めたのである。

「卑怯とは言わねえが・・・人の楽しみを邪魔するんじやねえよ小娘えええ!!」

全身より立ち昇るどす黒いオーラを放出させながらソローはレントに血走った目を向ける。

「ブンツツ!!」

無造作に振るわれた腕がビームを捻じ曲げレントのすぐ脇を通り抜けていく。

己の放った攻撃を受け止められたばかりか逆に跳ね返され彼女はその場に硬直した。

「次にやったらぶっ殺すぞ!!」

「・・・ヒグッ」

射殺さんばかりの視線と殺気を向けられレントが声にならない悲鳴を上げる。

「済まねえな。久しぶりのシャバだけに・・・」

ニヤニヤと笑いながら振り返るソローの顔面に叩きこまれるのはフォルテの放った蹴りだ。

至近距離から放たれた強烈な蹴りであったが、ソローの巨体は僅かに仰け反るのみで全く以って有効打にならない。

「これだけ近づけば防げねえだろ？」

「・・・チツ」

すぐさに体勢を立て直すソローを前にバスターを構えるフォルテ。

舌打ちをするソローの姿を見るにフォルテの読みは当たっていた。

ズドドドドドドドドツツツ!!

速射性に優れるフォルテのバスターから放たれる光弾がソローのボディへと命中していく。

先程、レントのビームを防いだのとは対照的にその全身に僅かな傷を付けていく。

「その力の障壁は一定の距離からの攻撃にしか意味がねえ。レントのビームを受け止める時にはその拳にエネルギーを集中させて受け止めたみたいだが、この距離からの俺の光弾に対する防壁に防壁は出来ねえだろ？」

「ゴ名答だあ。お前さん、見かけによらず頭が働くじゃねえか」

巨大な腕で顔や胴体を隠し致命傷を避けたソローが感心した様に声を上げる。

「まあ俺様が持つていたこの力がある程度は使いこなせただけの事はある・・・な」

声からして笑みを浮かべたのか隠していた腕を僅かに上にあげたと思つた瞬間で



あつた。

「ガトリングジャブ・・・!!」

ソローの巨大ではない方の腕・・・即ち左腕が僅かに動いたようにしかフォルテには見えなかった。

「ゴスペルツツ!!」

彼の声に反応する様に反射的にゴスペルがブースターを作動させねばどうなつていたか。

ズドドドドドドドドツツツ!!

ソローが放つた無数の拳から発せられる拳圧が地面を抉り、背後にあつた倒壊したビルの壁面に大穴を開けていく。

文字通りの機関銃を思わせる拳の連打。

「・・・くっ」

完全に避ける事は出来ず左側の翼と肩口を抉られフォルテが呻く。

拳を振るつただけでここまでの事が出来るなどやはり尋常ならざる相手である。

「避けたか・・・じゃねえと面白くねえよ」

薄笑みを浮かべながらソローはわざとらしく巨大な左腕を振るう。

「小僧・・・お前さんは勝つのは好きか？」

ソローの動作に反射的に身構えてしまうフォルテ。

「俺様は好きだあ。だが勝つよりももつと好きな事がある。それは骨のあるやつと心行くまで殺し合う事だあ」

油断なのか自ら背を向けながらソローは語る。

「ロックマンだったか・・・あいつは不完全だったとは言えあのサンゴッドを倒したんだろ？そして使い慣れてはいないとは言え俺様と同じ力を宿したお前さんすらも一蹴した」

「あんな力に頼ろうとしたのがどうかしてたぜ。あんな嘘っぱちの力なんぞ」

ソローの言葉は否応なしにあの時の屈辱的な出来事を思い出させる。

フォルテの放った言葉に振り返ったソローはどこか残念そうな顔をしていた。

「嘘っぱちい・・・？おいおい、言っておくがそれは使いこなせなかつたお前さんの責任だ。今の俺様を見ろ!!力に吞まれる事無くあのガラクタを意のままに操り、こうして御に攻撃にと様々な形で応用している。それを嘘だと言われると心外だあ」

逆に自身のせいと指摘するソローに怒りがふつふつと沸いてくる。

「・・・てめええ!!」

ヴウンツツツ!!

逆上したフォルテの全身より溢れ出るのはソローが纏う物と同種の物。

デューオとソローが地球へと飛来した際に地球上にばら撒かれた未知のエネルギー。所謂悪のエネルギーである。

「・・・ぐうっ!!」

喉の奥より引き絞った様な声が出る。

ソローの指摘通り初めて戦いに用いた際、フォルテは現在に至ってもその力を使いこなす事が出来ていない。

キング事件の際にはロックマンとの敗北の記憶が色濃かった時期もあり、殆ど使う事は無かったが目の前の敵に対し力の出し惜しみをしている暇は無かった。

ボアアアアアアア!!

「フォルテ、落ち着くツスよ!!」

背後からバラードの声が響いたような気がしたが今はそちらの方に意識が向かない。

溢れ出るエネルギーに身が刻まれた様な錯覚すら覚えながら、フォルテは顔を上げる。

「そうだあ・・・それで良い」

巨大な腕を手招きする様に広げるソローにフォルテの意識は一瞬だが吹き飛ぶ。

この時、フォルテはソローの事を単純に敵だとしか認識出来なくなっていた。

「オオオオオオオオオツツ!!」

雄叫びと共に空を舞うフォルテがバスターを構える。

チャージする事も無く巨大な漆黒の光弾を放つフォルテにバードらは言葉を失う。

普段のフォルテが今の規模のバスターを放とうとすれば、動力炉の暴走で自滅するか全てのエネルギーを出し尽くして動けなくなるだろう。

「があああああああ!!」

放った光弾の結果を見る事も無く側面に回り込み次々と通常のチャージショットに匹敵する光弾を撃ち放つフォルテ。

悪のエネルギーを解放したフォルテは誰の目に見ても間違いない暴走していた。

ズウウウウウウウツツ!!

「ぬおおおお!!」

始めて響くソローの驚く声。

真正面から巨大な光弾を受け止めソローの巨体が大きく後方に押し出される。

「ガーツハツハツハツハツハ!!面白くなってきたああああ!!」

巨大な光弾を上空へと弾き飛ばしながらソローは笑う。

側面より次々と光弾を食らいながらも彼はそれらを全く以って意に介さない。

ガリガリガリガリツツ!!

ソローが身に纏う障壁すら無力化するのか離れた距離からの攻撃であっても、フォル

テの放つ光弾はその強固な筈の装甲を次々と抉っていく。

「ちよいと本気出すかあ?」

自身に遠慮すら無く次々と攻撃を繰り出すフォルテに向けられる巨大な拳。

先程のフォルテ同様にチャージすら必要とせずに拳に集まる莫大なエネルギー。

「まあこの力を発動して自滅しなかつた事だけは褒めてやる。だがなあああ!!振り回されてんじやねえぞおお小僧おおおお!!」

禍々しいオーラを纏う拳が宙を舞うフォルテに突き出される。

「ジエノサイダージャガーノート!!」

ソローが放つは先程見せた拳圧を更に巨大化させた物であった。

握り締められた拳そのままの形をしたエネルギーはフォルテに直撃をし吹き飛ばしたばかりか後方にある街まで問答無用で吹き飛ばして・・・否、消滅させていく。

「があああああああ!!」

辛うじてではあるがフォルテが人の形を留める事が出来たのは悪のエネルギーを身に纏う事で、それを障壁にする事が出来たからであろう。

当然の如く合体していたゴスペルも弾かれ地面に倒れ伏す。

「一撃で戦闘不能か・・・ちよいと期待したんだが。俺様の見込み違いか?」

倒れ伏すフォルテの背を踏みつぶしながらソローが心底残念そうに顔を歪める。

「てめえええええ．．．どきやがれ」

呻くフォルテであったが殆ど声にならない。

今の彼にとって目の前の敗北以上に衝撃であったのは、またしてもあの力に振り回されそうになった事だ。

悪のエネルギーを用いれば確かに強くはなる。

だがそれは己の望む力ではない。

（せめてさっきの半分でもいい．．．それだけの力を維持してこいつみてえに使えれば．．．）

などと考えても後の祭りか。

徐々に強まる背の重さにフォルテの意識は徐々に薄れていく。

ドガンツツ!!

下した相手をいたぶる様に足蹴にしていたソローであったが、自身の顔面が爆風に包まれそれを放った相手にゆっくりと振り返る。

「俺の弟から足をどけろツス」

「ああ．．．?聞こえねえな．．．弟よりも弱い兄ちゃんよお」

バラードクラッカーを構えるバラードにソローは嘲るように口を開き．．．。

ヒュンツツ!!

一瞬の内に眼前に移動するソローにバラードは反応も出来ずに歯を軋ませる。  
ドゴンツツツ!!

予備動作無しに繰り出されるのはソローの蹴りだ。

単純な攻撃ではあるがソローの巨体から繰り出されるだけあって殆ど一撃必殺に近い。  
い。

一瞬の内に胸部を大きく潰されバラードはその場に倒れ込む。

「弱い……お前から弱すぎるぜ」

失望も露わにソローは足元のバラードを一顧だにせず、フォルテに振り返る。

「つまんねえな……じゃあ終わらせるか」

先程放ったのと同じ一撃をソローは無造作にフォルテに向けて放つ。

これで終わりだとソローのみならず、その場にいる誰もが思った時であった。

巨大な拳が伸びる先に黄金色の楯が立ち塞がったのは。

ガキイイイイイイイイツツツ!!

放たれた一撃を真っ向から受け止め後方にある街への被害すらも完全に防ぎきられた事にソローは目を見開く。

反射的に跳躍したソローであったがそんな自身に襲い掛かるのは、己が放った筈の膨大なエネルギー。

「チイイツツ!!」

辛くも自身の攻撃によるカウンターを回避するソローだが、己の思惑を覆された事で苛立ちを隠せずにフォルテの前に立ち塞がるロボットに目を向ける。

「誰だあ・・・てめえはああ!!」

苛立ちもあつてか空気を震わせる大声で相手に問うソロー。

それを真つ向から受けても尚、相手の方にまだ余裕があつた。

多少色褪せてはいるが、金色に輝くアーマーを身に纏うその姿は初対面の者であつても彼が王である事を連想させるであろう。

「てめえ・・・キングなのか?」

呻きながら立ち上がったフォルテは先の戦いで死闘を繰り広げた相手の背を見る。

巨大な楯を構えながら半身だけ振り返り、自らに会釈をするロボット王にフォルテは内心で気に食わないと思つたものだ。

どこか芝居がかったその動作は気に入らないが、目の前の相手に助けられた事に不思議と嫌悪感は抱かなかつた。

そつとフォルテの眼前にE缶を置きながらキングは恭しくソローに一礼をする。

「私の名前はキング・・・かつて身の程も弁えずロボットの王を名乗つた者だ」

どこか自嘲気味な笑みを浮かべつつも以前と変わらぬ不遜な態度で名を名乗るキン



グ。

対するソローは明らかに苛立った様な表情を浮かべていた。

この辺りはフォルテなどが抱く物と同一の物であろう。

「割って入るつもりは無かったのだがね。いずれにせよこれ以上、街に被害が出るのは忍びないと判断させてもらったよ」

ソローの一撃を受け止め亀裂が走り火花が飛び散る楯を手にキングが苦笑を浮かべる。

「私の楯はエンカーのミラーバスターを参考に如何なる攻撃も受け止め反射する機能を持っていたのですが・・・」

やれやれと首を振りながら半ば壊れた楯を地面に放り投げるキング。

彼としてはあくまでもそれが普通なのだろうが、ソローは彼の態度を挑発と受け取った。

「俺様の拳を一撃とは言え受け止めるとはな。なかなか頑丈な楯じゃねえか・・・キングとか言ったな。次はてめえと楽しもうか・・・」

「お望みとあれば・・・」

拳を握り締め臨戦態勢となるソローにキングも巨大な斧を構えるのだが。

ガシツツ!!

不意にキングの肩を後ろから叩く様にして掴むのは片手でE缶を飲み干しながら立ち上がったフォルテだ。

「キング……てめえはすつこんでろ。この糞野郎の相手は俺だ」

「ふむ……では我が兄よ。それが希望であれば私は下がりますが」

「お前に兄と呼ばれる筋合いはねえ!!」

ソローに指を衝きつける自身に苦笑を浮かべるキングだが、今度はそのキングに兄と呼ばれフォルテが彼に噛みつく。

余談ではあるが自らの意思で人類に反旗を翻した史上初のロボットたるキングの生みの親はあのワイリーその人である。

キング自身、フォルテを超える最強のロボットとして製作が始められたのだが、その開発は難航に次ぐ難航を極め更には同時期に悪のエネルギーが発見された事もあって当然のようにキングの開発設計は中途半端な形で中断されてしまう。

一連の戦いが終わってワイリーが改めてキングの開発を再開しようと、秘密研究所で確認を取った時には既にキングは自らの意思でその場を去った後であった。

止む無くキング不在で新たな世界征服計画を実行しようとしたワイリーであったが、結果は言うまでもないであろう。

キング軍団なる独自の軍勢を用意したキングに寝首を搔かれる事となったワイリー

は這う這うの体で宿敵であったトーマスライトに保護を求める事となったと言うのが、二年前に起こったキング事件の顛末である。

まあ事件の終盤にキングの制作者である事がばれてしまった事で、元々ゼロに等しかったワイリーの社会的信頼度がマイナスの極みに達したのだけは付け加えておこう。

とは言え実際に人類抹殺を掲げるキング軍団の進撃を食い止める事が出来たのは、主の命令で止む無く連邦政府の味方をする事になったワイリーナンバーズ及びその軍勢である事も事実であり、その点に関しては連邦政府も認める他無いだけに今日に至る不可思議な共存関係が続いている事となる。

「ソロー……一つだけ礼を言うぜ」

全身より溢れ出るオーラを吐息と共に調節しながらフォルテが薄笑みを浮かべる。

ソローも先程との違いに気づき僅かに目を見開く。

「さつきみたいに最大で力を出さなきゃ。何とか……自分を見失わずに済みそうだな」  
「俺様と戦ってワンステップ進んだか」

先程よりもエネルギーは抑えられているが、それでも悪のエネルギーを僅かながらに己の物としつつあるフォルテにソローは心底嬉しそうであった。

（この力を俺の物にすれば……そうすりゃこれは嘘なんかじゃねえ本当の力になる!!）

目の前のソロー、そしてその先に居る最大のライバルたる少年の顔を思い浮かべなが

らフォルテは再びソローと対峙する。

対するソローも拳を握り締めるのだが、さすがに彼の顔が歪む。

その理由はフォルテにもすぐに分かった。

自身らの上空より一つの強大なエネルギー反応が近づきつつあるのだ。

「あ……いっはあ？」

ソローは首を傾げるがフォルテのエネルギー感知器はその人物を即座に特定していた。

バシユバシユバシユバシユツツツ!!

わざわざ名を名乗るなどと言う外連味は持ち合わせていないとばかりに大気圏を突き破った勢いそのままに、ソロー目掛けて無数のレーザーが放たれる。

自身の顔や動力炉と言った何れも急所となる場所目掛けて放たれるを必要最小限の動作で回避するソローであったが、その眼前で不自然にレーザーが動きを止める。

と言ってもその硬直は一秒にも満たない間だ。

まるで意思を持ったかのように屈折し再び己へと襲い掛かるレーザーにソローが舌打ちをする。

ソローは障壁の強度を全開にする事でダメージを最小限に抑えるのだが、対処を間違えればたちどころに致命傷を負うであろう。

不意打ち気味の攻撃もそうだが殆ど回避不可能と言える攻撃のえげつなさにフォルテは、ある意味で先のキングの態度以上に嫌悪感を覚える他無い。

「思い出した・・・思い出した。そういやこんな攻撃をしてくる奴らがいたな。お陰で思い出したぜ」

己のボディに付けられた傷を見据え暴君は宇宙の支配者を名乗った者の長を見据える。

「・・・フンッ」

あちらも先程の攻撃で仕留められるとは思わなかったのだろう。

対して気にした風も無く鼻を鳴らすのは背まで伸びた翠色の髪を持つ一人の女性。

スペーススルーラーズを率いるアースはフォルテ達に視線を向ける事も無く、片腕にエネルギーを集め始める。

戦闘に関する事以外の無駄な事は極力しようとしないう彼女の態度にフォルテは無視された気がしてしまう。

「お前さん・・・サンゴッドの近くをウロチョロしてやがった小娘の一人か？」

「『暴君』ソロー・・・デューオと共にこの星に落下したと聞いたがまさか生きていたとはな」

「ガーツハツハツハツハ!!俺様としても結構危なかったがなあ。まあ何とか今の一応の

主・・・『旦那』に助けてもらったって訳だ」

かつての因縁もあつてか普段は殆ど顔色一つ変えないアースが僅かに歯を軋ませる。ソローはアースとフォルテそれぞれ交互に視線を向け、次に大きく肩を上下させて息を吐いていた。

「ガーツハツハツハツハ!!面白くなって来やがった。どっちでも構わねえ・・・さつさと掛かつてきな」

満面の笑みと共にソローはその巨体に先程以上のエネルギーを滾らせるのであった。

## V O I 8 虚空の闇に潜む者達

「押忍ツツ!! 気を失って居たでありますっつ!!」

「ヒヒーン!!」

瓦礫を押し退けダルセニョーと共に起き上がったパツシヨナーが真つ先に目にしたのは残骸と化したテュポンの姿であつた。

「おや・・・これはこれは!! 何時の間にか撃破されているとは流石はフォルテ殿にバラード殿!! 感服する次第で・・・」

自身が気を失っている間に強敵が撃破された事もあつて、フォルテらの強さに感心しパツシヨナーは一人で拍手をし始めるのだが。

「・・・おや? 何か様子がおかしいでありますな」

単純な思考の持ち主ではあるが場に漂う不穏な空気と殺気にパツシヨナーはすぐさに異常を察知する。

見れば己から横に数メートル先の街が直線状に消し飛んでいる。

如何に嵐を起こす事が出来たとは言えここまで街へ被害をもたらす事をテュポンは勿論の事、仲間であるバラード達が行つた事ではないと彼は即座に判断する。

どの様な状況でも即座に思考を切り替える事が出来る事が、パッショナーの一つの特徴である。

まあ弊害として物事を深く考えない単細胞に近い思考パターンとなつてしまつて居るのだが。

「レントゥ!!何があつたでありますか!?おや・・・その御仁は?」

その場に棒立ちの状態のレントを見つけるや一目散に駆け寄るパッショナー。

「パ・・・パッショナー。無事だつたんですね」

ゆっくりと振り返つた彼女の顔は恐怖で青ざめていた。

そんな彼女を守る様にキングが佇んでいたのだが、彼の方はパッショナーを見ると僅かに口元を緩める。

「成程・・・Dr.ワイリーは私をモデルに新しいナンバーズを生み出したと聞いていたが」

「お前はキングでありますね。ワイリー博士に生み出されながら博士を裏切つた愚か者と記憶して居るであります!!」

自身を値踏みする様に見えるキングにその拳を構えるパッショナー。

彼らキングの後継機は反乱防止も兼ねて予めキングに対する予備知識（と言ってもワイリー側から見た偏つた物ではあるが）を与えられて製作されている。



その為、自身のオリジナルに対する嫌悪感はかなり強いのだ。

「待ちたまえ……今、君と戦うつもりは毛頭無い」

パッションナーを手で制しながらキングはカースマンやハンジョー達に抱えられてくるバラードとゴスペルに振り返る。

「キングカ……本来デアレバ貴様ヲ逮捕シタイトコロダガ」

ジロリと単眼でカースマンがキングを睨み据える。

対してキングは身構える事はしなかったが僅かの間、カースマンとの間で緊張が走る。

ロボットでありながら自らの意思で反乱を起こしたキング。

ある意味でワイリー以上に連邦政府が身柄を確保したい存在だ。

人間上位の政策を掲げる連邦政府にとって彼の存在は許されざるモノなのだから。

「ダガ今ハソソナ事ヲ言ッテイル暇ハナイカ」

クルリとキングに背を向けカースマンは端末を手にする。

彼は端末を通じ住民の避難を続けるように要請を出していた。

仮に彼がキングの存在を報告すれば、連邦政府に属するロボットアーミーの大軍が送り込まれこの街が戦場と化するの言うまでもない。

彼なりの配慮にキングは恭しく一礼をしていた。

「野郎……言うまでも無く強すぎるッス」

胸部に空いた蹴りの跡を見据え地面に腰を置いたバラードが呻く。

「まさか悪のロボット……自らが名乗るに暴君ソーかともないロボットが降りて来たものだ」

地面に下ろされたバラードの胸部に掌を向けながらキングが苦笑を浮かべる。

「じつとしていたまえ……データ参照。ボディ……リビルディング」

ぶつぶつと専門用語を口にするキングが何をしようとしているのかバラードには分からなかったが、淡い光に包まれるとともに胸部の傷が塞がっていくのを見て驚く他無い。

「あくまでも応急処置だ。無理は禁物だ。後で基地に帰ったらちゃんと直した方が良い」

クルリと背を向け今度は完全に伸びているゴスペルの傷を修復していくキング。

「もしかしなくてもその力を応用する為に世界中のロボットのデータを奪ったんすね」  
「恥ずかしながらそう言う事になる。データと必要な素材さえあれば無から有を生み出す……それが私が持つ力、ロイヤルリビルディングだ」

キング事件が起こる前後に世界中のロボット研究所や博物館においてロボットのデータや展示されていたロボットのレプリカボディが、大量に盗まれると言う事件が発

生じたのだが全てはキングのこの力を活用する為の手段だったのである。

突如として現れ急速に強大な軍隊を用意できた事にもある意味で納得と言えよう。

「尤もルーツを辿ればこの力も．．．彼らのそれと同質なのだろうな」

自嘲気味にキングは己の掌とぶつかり合うロボット達を交互に見つめる。

ドガアアアアアアンツツ!!

巨大な拳が大地を抉り吹き飛ばされそうになるのを辛うじて堪えたフォルテがローに迫る。

「おっ．．．と!!」

自身の顔面に向け飛んでくる光弾をローは大きく身をよじり回避する。

僅かにオーラを纏ったフォルテの放つ光弾を前にわざとボディで受け止める様な事をローはもうしない。

未だに不完全だが先程の様に力に振り回される事無く、確実にその力を己の攻撃にさせてくるフォルテに油断をすれば己の敗北に繋がる事を理解していたからだ。

バシユバシユバシユツツ!!

己の背後で放たれる無数のレーザーを視認している余裕は無い。

ヤマカンで背後に拳圧を飛ばしながらアースのスパークチェイサーを相殺しつつ、ローは腰を大きく落とし巨大な右腕を前面に出す構えを取る。

「ガーツハツハツハツハツハ!! 楽しいじゃねえかああ!!」  
ズンツズンツツ!!

足元の瓦礫を粉碎しながら全身にエネルギーを纏ったソローがフォルテに体当たりを仕掛けてくる。

「ジェノサイダータックル!!」

攻撃としては単純明快な物であるがその巨体と身に纏うエネルギーも相まって強烈な一撃となる。

迫り来る小山のような巨体を前にフォルテは真つ向から拳を構え立ち向かおうとするのだが。

グンツツ!!

不意に首根っこを掴まれフォルテの視界が暗転する。

次に視界が定まった時にはソローの巨大な背が見えた。

「何をしている?」

自身の首から手を離し舌打ちをするのはアースだ。

彼女は自身の首を掴んだ手を何度も払いその顔を大きく歪める。

「てめえ・・・何を」

今にも詰め寄りそうな勢いで口を開くフォルテに向けられるのはわざとらしいまで

の溜息。

「真つ向から奴にぶつかるとなると馬鹿か？まあ死にたいのなら好きにすれば良いが」

明らかに自らを見下している様子のアースにプライドの高いフォルテは額に青筋を浮かべる。

もしもソローと戦っていなければアースと事を構えていただろうが、振り返りざまに拳圧を飛ばされフォルテとアースは弾かれた様にその場を飛び退く。

「フン・・・仲間を助けるとは。らしくねえ事をするじゃねえか」

笑みを浮かべるソローにアースは小さく舌打ちをする。

「勝手にこいつがした事だつての!!」

他人に助けられた事に苛立ちを覚えフォルテがソローに向かって反論をする。

「こんな奴でもワイリー様が製作したロボットだ。そうでなければ誰が助けるものか」

フォルテを触った手を嫌そうな顔で見据えながらアースも言う。

スペーススルーラーズを指揮するアースだが、彼女には一種の病的な欠点として極度の潔癖症と言う点が挙げられる。

最初からそうだったのかはフォルテも知らないが、数少ないワイリー軍団の女性ロボの中にあってその点は極めて残念と言えよう。

彼女以外にも綺麗好きだったり神経質なナンバーズは居るには居るが、戦闘時も含め

他者との接触を極端に避ける人物と言うのはなかなか居ない。

ともあれ今のフォルテにとって彼女が援軍として駆け付けてくれたのは幸運であったと言えよう。

結果的に控えてキングが居るのもそうである。

まずにアース個人が以前の戦いからソローの力のある程度把握している事。

そしてもう一つは。

バチツツ!!

「パラライザー……」

アースより放たれた不可視の電磁波によってソローの巨体が僅かに硬直する。

通常のロボットであれば数秒間は無力化できるのだが、ソローに対しては文字通りの一瞬でしか効果は無い。

「クレツセントキック!!」

僅かに動きが止まった瞬間を狙い、フォルテの飛び蹴りがソローの顔面に強かに決まる。

続けざまに放たれるレーザーはソローの障壁を貫通し、そのボディを確実に傷つけていた。

詳細は不明としか言えないが彼女を始めとするスペーススルーラーズの動力炉には未

知のエネルギーが使用されている。

かつて超兵器ガンマを巡っての戦いで争奪戦となった超エネルギー元素にも似た物であるらしいが、生憎この手の話は極めて苦手なフォルテは殆ど記憶に留めていない。ともあれこれらの物を動力炉に用いる彼女達は悪のエネルギーを源とするソローの障壁に対抗できるのである。

先程とは打って変わり劣勢な様子さえ見せるソロー。

「スパークチエイサー!!」

そんな彼に対し淡々と屈折するレーザーを放つアース。

肩口を貫かれ呻き声を上げていたソローであつたが不意に目を見開く。

「しゃらくせえええええ!!」

シユンツツ!!

巨体に見合わぬ速度でアースの眼前に姿を現すソロー。

今の今まで隠していた素早さにフォルテも驚く他無い。

(な・・・あの野郎。あれだけの強さでまだ本気じゃねえのか?)

ヴァンツツ!!

アース目掛けて振るわれた拳が空を切る。

瞬時に間合いを詰めたソローが拳を振り上げた時には、確かにそこに居た筈だったの

だが彼女の姿は瞬時に消え去っていた。

距離にして僅かに数メートルと限定的ではあるが、アースには自身と触れた対象をワープさせる事が出来る能力を持つ。

振り返りざまに蹴りを入れるもそれも外れる。

逆に背にレーザーを撃ち込まれ危うく片膝を衝きそうになるのをソローは辛うじて堪える。

グルンツツ!!

ソローはまるで上半身をそのまま旋回させたかのような動きでアースが現れた先を向く。

アースも攻撃を行わず即座に消え去るのだが。

「いち・・・に・・・の」

ブツブツと数字を数えるソローにフォルテが怪訝な顔となる。

「・・・さんつつ!!」

ソローが全身よりエネルギーを放出したのとアースが姿を現したのは殆ど同時であった。

この際、無防備な状態で相手の攻撃に晒される事となるのは彼女の方だ。

「うああ!!」



小さな悲鳴を上げその場に浮き上がったアースを残忍な暴君が見逃す筈も無い。

先程の様に一瞬で距離を詰めたソローは宙に浮かぶアースへとその拳を容赦なく叩きつけた。

ドガアアアアア!!

あらゆる方向に体が曲がったように見えたのは気のせいか。

並のロボットであれば即死してもおかしくない一撃を受けアースは背後の瓦礫に突っ込んでしまう。

割れた瓦礫の隙間より溢れ出るのはどす黒いオイルだ。

「まずは一人・・・さて続きと行こうか小僧」

ニヤリと笑みを浮かべるソローにフォルテの中で何かがこみ上げる。

「てめええええ!!」

咆哮を上げるフォルテ。

だが先の様な暴走ではない。

それに言うのもあれだが別にアースに対し仲間意識などこれっぽちも抱いていない。が同族嫌悪なのだろう。

他者に力を見せつけ悦に浸るこの男に純粹なまでの怒りが沸いた。

ガキイイツツ!!

真正面から両の腕を伸ばし互いの腕が絡み合う。

「俺様と力比べだと・・・笑わせ・・・るう!？」

己の膂力には絶大な自信を持つ筈であったのだが、目の前の少年に僅かに体を浮かばせられ言葉が途切れる。

「おらああああ!!」

そのまま強引に投げ飛ばされソローはこの戦いで初めて地面に腰を落とす事となる。

「なにいいいい!!」

驚愕する間など無い。

すぐさにフォルテがバスターを向けていたのだから。

バシユウウツツツ!!

放たれる巨大な光弾を前に舌打ちをしながら巨大な腕で払い除けるソロー。

真横に弾かれる光弾。

だがそれはUターンをするかの様に自身の下へと戻って来る。

「んだとおお!!」

あらぬ動きをする漆黒の光にソローが絶叫を上げる。

眼前に迫る漆黒の光弾を掴み取ろうとするソローであったが、まるで馬鹿にするかのように光弾が掌からすり抜ける。

彼が血走った目で瓦礫の中から延びるアースの腕を睨み据えたのと、フォルテのスパークチエイサーのエネルギーを纏った一撃が胸部を貫いたのは殆ど同時であった。

「てめえらあああああ如きいいつつ!!」

ぽっかりと胴体に大穴を開けたソローは愕然とした表情のままその場に倒れ伏していた。

「へっ・・・ざまあみろ」

倒れ伏した暴君に中指を立てながらその場に腰を落とすフォルテ。

戦闘と言う極限の状態から解放された事もあつて、緊張の糸が解れてしまったのだらう。

再び暴走してしまうと言う醜態は晒してしまつたが、今まで制御が出来なかつた悪のエネルギーを由来とするこの力を少しだけではあるが己の制御下に置けた事は間違いない。

「やつとだ・・・この力を多少なりとも操れるようになった。今度は嘘とは言わせねえ」

打倒ロツクマンに向けて確かな手応えを感じた少年は満足げな顔を浮かべていた。

「フォルテ殿おお!!」

そんな自身に全速力で駆け寄るのはパツシヨナーだ。

ガッツ!!

「自分、感動したであります!! 打倒ロックマンに向けてよくは分かりませぬが奥の手を隠し持っていたとは!!」

両肩を掴みガクガクと問答無用で揺らしてくるパッションナーにフォルテの意識が何度か飛びそうになる。

「うるせえ……反動で体が動かねえんだよ」

テュポンだけでも相当だと言うのにソローと言う強敵と続けざまに戦ったばかりか、悪のエネルギーを解放した事でフォルテの消耗は著しい。

暫くは傷の修復に時間が掛かる事をぼんやりと考えた時だった。

「フォルテ……あんまり無理するなツスよ」

自身に歩み寄り笑みを浮かべるバラード。

キングによる応急処置もあつてか一見するとフォルテよりもバラードの方が大丈夫なように見える。

「無理を恐れて戦えるかってんだ。あいつに蹴られただけで動けなくなつた奴に言われたくねえよ」

「まあそれを言われちゃ何も言えねえツスけど。いや……でもあれはお前を」

「誰も助けてくれなんて言つてねえよ」

悪態をつくフォルテにバラードが大きく溜息を吐く。

その態度を馬鹿にされたと感じたのかフォルテが額に青筋を浮かべる。

何時まで経つても変わらない出来の悪い弟に兄であるバラードが再び溜息を吐く。

「て・・・敵の方は!!」

基地内の電力の復旧に手間取った事もあり遅れて現場に駆け付けるのはニードルマン以下の面々だ。

「お前ら・・・遅えよ!!」

「万が一の事を考え基地のデータのバックアップを取っていたんだが予想よりも時間が掛かってな」

今更のように駆け付けた支部基地の面々にフォルテが声を上げる。

ついとばかりにフォルテは宙に浮かぶクラウドマンと先程から固まつてるレントにも指を差す。

「バラードと伸びてたパッションナーはともかくお前ら二人もな!!」

「フン・・・お前が勝てない相手に僕が勝てる訳ないだろ」

フォルテの糾弾にクラウドマンは開き直ったかのように言葉を返す。

実際、彼はテュポンの戦いの際もそうだが殆ど戦闘経過の観測に回ってしまっている。

このデータは後々に活かされる事を祈るばかりである。

ともあれ一応のやる事はやっているクラウドマンとは違い、一度は援護に回ったもののソローに睨み据えられた後は本当に縮こまってしまったレントの方はフォルテの非難にビクリと身を震わせ俯いたままだ。

「キングの後継機が聞いて呆れるぜ。．．．て言うかキングの野郎は!」

吐き捨てる様に言い放たれる言葉にレントがぎゅつと目を閉じるのだが、フォルテの注意は別の方向へと向く。

「そっういえばツス．．．あれ?」

思い出した様に振り返ったバラードだがそこにロボットの王の姿は既に無い。

端末を手に仲間達に連絡を入れていたカースマンに視線が集まるも、表情に乏しい彼からは何も読み取れない。

「兎にも角にも事件はこれにて解決ツス。レントもフォルテの言った事をいちいち気にしちや駄目ツスよ」

茫然とその場に佇むレントにバラードがフォローを入れた時であった。

瓦礫の中からアースがゆっくりとした動作で起き上がる。

宇宙に居る筈の彼女がその場に居た事にニードルマンが驚くも、それに対し特に質問する事は無かったのだが険しい表情のままのアースに彼は僅かに目を見開いた。

彼女はグルリと周囲を見渡すと倒れ伏したままのソローを睨み据える。

「つつ．．．バラード。それにお前達もだ。すぐにこいつのボディを原型を残さずに破壊しろ」

折れ曲がった足を引きずったアースが、その場にいるバラード達に声を上げる。

あのフォルテですらアースが何を言っているのかすぐに理解は出来なかつた。

「跡形も無くつてちよつと酷すぎじゃねえツスか?」

彼女らとソローの間は何があつたのかは知らないが、彼女の言う事は憎い相手にするにしてもあまりにも過剰だと言いかないようがない。

苦虫を噛み潰したようにアースが理由を説明しようとした時。

ドガツツ!!

反射的に動いたのはレントであつた。

彼女はアースを抱える様に押し倒すやビームバリアを展開していた。

そのビームによる障壁がグニヤリと曲がるのを間近で見据え、恐怖から再び目を閉じるのだが幸いそれ以上障壁が破壊される事は無かつた。

驚く間もなく一同が見たのは倒れ伏したはずの暴君が上体を起こした姿。

ニヤリと殊更残忍な笑みを浮かべ彼はわざとらしくゆっくりと起き上がっていた。

「寝起きの一発はあんまり力でねえな．．．だがよく動けたな小娘」

今のソローは胸部に大穴が空いており、本来であればロボットが持つ動力炉を失つて

いる筈なのである。

普通に考えて動ける事など出来る筈が無い。

出来る筈が無いのだがソローは己の胸に開いた穴からその先の景色を眺め大きく息を吐くのであった。

「まさかあ……ここまでやられるとはな。予想外も予想外だったぜ」

己が破れたと言うのに屈託なく笑う暴君に誰もが言葉を失う。

「ま、普通に考えれば死んだと思うよな。俺様もそう思うんだが……生憎死なねえのよ。そこの小娘はその辺の事をよく理解してやがる」

アースを指差しながら笑う傍でソローの胸部の傷が徐々に塞がっていく。

「力の根源がある限り、俺様は無敵だ。俺様を倒したかったらサンゴツドかデューオを呼ぶんだな」

「ぐっ……ちくしょう」

巨大な右腕を握り締めほくそ笑むソローにフォルテが歯噛みする。

ブオオオンツツ!!

無造作に振るわれた剛腕が衝撃波となりバレード達を問答無用で吹き飛ばす。

「ニードルキャノン!!」

「スパークショット!!」



「ハッ・・・効かねえな!!」

ニードルマンとスパークマンがそれぞれ針状の機関銃と電撃弾を放つがそれらは悉く障壁で防がれる。

「ガトリングジャブツツ!!」

無数の拳の連打に割って入るのは同じく巨体を誇るジャンクマン。

「ジャンクシールド!!」

周囲の瓦礫を集め障壁を生み出したジャンクマンだったが、それでもソローの拳圧を相殺しきれず半ば己の身で受け止める事となる。

側面よりウエーブマンの放つウォータウエーブを受けるもその身は僅かにしか動かず、ジェイロマンのジャイロアタックも同上で全く以って効果が無い。

「おおおおフレイムソード!!」

ガキンツツ!!

ソードマンの振り下ろす燃え盛る刀身を巨大な拳で受け止めるソロー。

「その剣・・・俺様の障壁を突破するか」

博物館よりワイリーが強奪した古代文明の大剣はソローの障壁を易々と突破していた。

振り払うように振るわれる拳を逆に受け止め距離を取るソードマン。

「雑魚共が雁首揃えても無駄と言いたいが．．．ちと骨が折れるなあ」

己の周囲をワイリーナンバーズを囲まれたソローは冷静に己の不利を悟っていた。

殆どの者達は己に傷を付ける事すら難しいがフォルテやアースは勿論の事、何の変哲が無さそうなソードマンの剣を始めある程度の対抗策を持つ者が何人か居る。

流石の彼も複数を同時に相手取れば、個々への注意が散漫になり不覚を取ってしまう事は認めざる得ない。

更にある。

バラードの真横で突然空間が歪む。

「おわわわ．．．!!」

驚くバラードの隣で顔を出すのはブルートとウラノスである。

二人に続いてマキキュリー、ビーナス、ジュピター、サターンと続く。

恐らくサターンの能力を使い宇宙から直接ワープして来たのであろう。

自身らに有効打を与える事が可能な者達がアースに続いて現れた事にソローは大きく舌打ちをする。

そんな彼の顔が最後に姿を現した人物の姿を見るや凍り付く。

「てめえ．．．」

正しく突然の出現にさしものソローも僅かばかり思考が止まる。

「ソロー……貴様を倒しに来たぞ。宇宙の平和の為に貴様を討つ!!」

巨大な左腕を握り締め宇宙の守護者デューオが言い放つ。

「ガハハハ!! デューオ……デューオじゃねえか!!」

驚いたのも一瞬、ソローの顔が歓喜に染まる。

「久しぶりだな!! なんか姿は変わったがすぐに分かったぞ。折角ここで会ったんだ再会を祝して、今から茶でも飲むか? あ?」

今にも駆け寄り肩などを叩きそうな勢いではあるが、どこかふざけている様な態度のソローにデューオは無言だ。

「あくお前は昔つかからそうだよな。こつちが折角言ってるのに本当にノリが悪いんだよ……だから人付き合いが出来ねえんだ」

両の手を広げながら肩を揺らすソローにデューオが静かに間合いを詰める。

「こりゃ……拙いな。遊び過ぎたか」

油断ならぬと思っていた敵に宿敵まで加わった事で状況は明らかに単独のソローの不利と言えよう。

明後日の方向を見ながら口笛を吹き始めるソロー。

彼は何食わぬ顔で後ずさるも当然、それを見逃す面々ではない。

「おおい……ヴォイドに皆。助けてくれねえ?」

周囲に目を向けながら仲間の存在を口にした時であった。  
ヴオオオンツツ!!

不意に今の今まで気配を感知させずに舞い降りたのは黒衣を纏った一人のロボット。

「……!!」

バチンツツ!!

黒衣に全身を隠したロボットは手に何かを持ちそれを振るった様にしか見えなかった。

先程ソードマンの大剣を受け止めたのと同様に相手が放った光の刃を剛腕で受け止めるデューオ。

「光……ビームの刃だと?」

ニードルマンが刺客が手にする武器に小さく呻く。

あのロックマンのロックバスターを始めとして昨今ビームを用いた兵器は当たり前となりつつある。

だがビームを一つの形、目の前のロボットが手にする様に刃などの様に形に留める技術は現代において未だ確立されていない。

政府軍は勿論の事、彼らの生みの親Dr.ワイリーすらも採用には至っていない新兵器を有する敵の存在に彼らの隠し持つ技術力の高さが垣間見えよう。

「……………」

光の刃……ビームセーバーを手にしたロボットは刃を弾きデューオとの間合いを取る。

「ヴォイド……ありがとよ」

「……遊び過ぎだ」

ソローに対しヴォイドと呼ばれたロボットは素っ気なく言い放つ。

どうやら彼はあまり会話が得意ではないようだ。

漆黒のアーマーと武者や騎士を思わせるメットを身に着けた彼の顔は仮面に覆われ、何より半ば虚空を見据えた瞳からは感情が一切窺えない。

「双幻夢……!!」

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴツツツ!!

ヴォイドの全身が大きくぶれるや無数のヴォイドの姿が周囲に現れ逆にデューオ達を取り囲む。

「……アルゴス」

「任せておけ……」

無機質な声で更に姿を隠していた仲間の名を呼ぶヴォイド。

彼の呼びかけにソロー以上の巨体が倒壊したビルに降り立つ。

「滅せよ!!」

身に纏ったロープがはち切れんばかりの巨体を持つアルゴスは全身より無数の目玉を生じさせるやそれらが次々とビームを放つ。

突然自身らを襲うビームに対し面々は慌てて散り散りになって逃げ惑う他無い。

「退くぞ・・・」

「ガーツハツハツハツハ!!じゃあなまた会おうぜデューオ!!」

ヴォイドの言葉にソロウが笑いながら宙に浮かび上がる。

「逃がさんつつ!!」

アルゴスの放つ攻撃は未だに続いており、その中でデューオだけが同じ様に空へと舞い上がるのだが。

バサツツツ!!

追撃せんとするデューオの行く手を身を覆うマントを漆黒の翼へと変形させたヴォイドがビームセーバーを手にし遮る。

ガキイインツツ!!

振り下ろされた一撃を軽く弾きそのまま勢いをつけて宿敵を追わんとするデューオ。

体格差もあり大きくその身を吹き飛ばされるヴォイドだが、その彼も即座に空中で体勢を立て直す。

「ガーツハツハツハツハツハ!! 持つべき者は友達だつてなああああ!!」

漆黒の光にその身を変えその場より飛び去ろうとするソロー。

ボアアアアアアア!!

それを追わんとするデューオであったが、そんな彼の眼前で突然が眩い光と猛烈な熱が集まり始める。

「ぬ……これは!!」

周囲に放たれる熱線を反射的に防御したデューオは光の中で形成される存在に呻く。

それはアースを含めたルーラーズも同じであり。

「馬鹿な……あれは!?!」

驚愕するジュピターは太陽の如き熱量を発しながらその腕をデューオに伸ばす存在を確かに見た。

「ワガナハ……アポロゴースト。ワガマエニハ……ハカイアルノミ!!」

自らを亡霊と名乗った存在はデューオを軽々と地面へと叩きつける。

「……ソローの離脱を確認した。続いて我々も退くぞ」

「……ワカッタ」

「……了解した」

既にソローの姿は見えなくなっており、ヴォイドの言葉に続いてアポロゴーストとア

ルゴスもその場より一瞬で消え去る。

「また会おう。ワイリー軍団の者達よ」

僅かに口元に笑みを浮かべヴォイドも簡易転送装置を使ったのかその場より姿を掻き消す。

一瞬の内に現れ己らを手玉に取った正体不明の敵に一同は愕然とする他無い。

「ぬう……待て!!逃がさんぞ!!」

既に相手を見失ってしまったが追跡を諦めぬデューオはそのままソロー同様に空の彼方に消え去ってしまう。

後に残されるのはバラード達を始めとする面々だ。

「ええと……」

困惑気な顔で廃墟と化した街を見渡すバラード。

「退かせた……いや退いてくれたと言うのが正解か」

「……ちくしょう」

声を絞り出すニードルマンに言われるまでも無い。

ソローだけでなく彼の匹敵する者達を何人も隠し持っていた相手が本気になれば、全滅していたのは自身らの方であつただろう。

その事を自覚するあまりフォルテは声を震わせていた。



騒ぎが収まり次第にロボットポリスや政府軍などが集まり出す中、混乱に乗じる形で面々はその場を後にするほか無かった。

## エピソード

太平洋上の某所にて。

「なんじゃと!」

キングの後継機の最終調整を秘密研究所にて行っていたアルバートⅡWⅡワイリーはニードルマンからの報告に耳を疑った。

南米において暴走した気象兵器とそれを操る謎のロボットとの戦闘で多くのナンバーズに被害が出たと言うのだ。

次なる世界征服計画の準備を行っている過程で想定外の被害が出た事に、ワイリーは思わず頭を抱える。

まあ気象兵器テュポンが暴走した事はどうでも良い事だが、それを操っていたのがデューオと共に地球に落下して来た悪のロボットことソローとなれば話は別である。

「そう言えばあやつのはボディは回収できなかったからの」

ワイリーの脳裏に少し前の事件の事が過る。

今とは別の秘密研究所を備えた島に落下したのは大破したデューオと彼と対峙していたと思しきロボットのバラバラになったパーツであった。

ワイリーからすればデューオを含めて全てを回収し調査したかったのだが、生憎ぐさきにロックマンが現地に赴いて来た事もあって結局ソローのパーツ及びそれに残存する未知のエネルギーしか回収できなかった。

その後は説明するまでも無くロックマンによって世界征服計画は失敗に終わり、フォルテにボディに残存する物を除いて悪のエネルギーはその殆どを喪失してしまった。

「そうかソロー……もう一体のロボットもおつた事をすっかり忘れておつたわい。あの後キングに基地を乗っ取られて反乱を起こされたりと立て込んでおつたからのう」

未知のエネルギーを手に入れ有頂天になっていた事もあり、ソローの事を失念していた事に後悔の念を露わにするワイリーだったがすぐに思考を切り替える。

「まあ良い。クラウドマンが記録した映像から敵の能力を割り出すのじゃ。とにかく詳しい説明はワシが直接本人らから聞こう」

> <ワイリー博士自らが？しかし……今はキングの後継機の最終調整をしているのでは

「ワシしか重傷を負ったアース達を修理できんじやろう。それに再び例の力を解放したフォルテのボディに確認したいしのう」

驚くニードルマンにワイリーは面倒臭そうにしつつもそう言うてすぐさに出発の準備をし始める。

「あのデューオに匹敵するロボットがもう一体も居るか。場合によつては次の計画の練り直しも検討せねばな……」

ワイリーはカプセルの中に眠るキングに酷似したロボットに目を向ける。

「何者かは知らぬがワシの邪魔をする者にはそれ相応の報いを受けさせてやる。如何なる敵が相手でも最後に勝つのは悪の天才科学者たるこのワシじゃあ。だーっはっはっはっはっは!!」

不敵な笑みを浮かべワイリーはまるで子供の頭を撫でるかのようにカプセルに触れていた。

「いやあ悪い悪い。少々遊び過ぎた……油断して敵に取り囲まれたドジな俺様を助けてくれるなんて、本当に俺様は優しい仲間達に囲まれて幸せだあ」

自身を見る面々に対し詫びる様に深々と頭を下げるソロー。

当然の事ながらその顔に反省の色は一切無い。

寧ろわざわざ自身の援護に回った面々を嘲っている所さえ見受けられる。

「気を付けて頂きたいものですねえ。貴方のせいで我々の存在が露見してしまった。テュポンが倒された時点で退くべきだったのでは?」

黒衣を纏った人物フアントムマンがソローを糾弾する。

「あんな活きの良い奴を前に手ぶらで帰るなんて出来るかよ。デューオの奴も帰って来て楽しみが増えて良いじゃねか」

「よくありません。それにデューオと言えば我々の天敵とも言える力を持っているのです。余計な不確定要素が増えれば我々の計画にも支障が出ます」

「ガーツハツハツハツハ!!まとめてぶつ潰せば問題ねえだろ?」

結果的に本来戦う必要も無かった筈の敵が増えてしまった事を指摘してもソローの方は反省する素振りは全く無い。

彼の頭の中にはデューオに対し借りを返す事しか無いのだろう。

これ以上の糾弾は無駄と判断したのかフロントムマンが大きく肩を落とす。

「それで次だが……」

ヴォイドが感情の籠らない声で口を開く。

「我が行こうか……?」

ソローを超える巨体に無数の目を出現させアルゴスが一同に問う。

「私も以前ほどには動けなくなりましたからね。その彼と違って貴方の方が冷静でしようが」

ジロリとソローを見据えつつフロントムマンが溜息を吐いた時だった。

くふうむ……アルゴスか。それならば彼の性能をテストも兼ねて頼もうか>

辺りに響き渡る不気味な声。

闇の中で液体が泡立つ音だけが聞こえる。

「あの骨の野郎ですかい……『旦那』」

「ああ……ボンダインのボディが完成してね。慣らし運転は必要だろうか？ 君もそうだったろうし」

片目を閉じつつ『旦那』と呼んだ人物に問うソロ。

暗に先の失態を指摘された事もありソロもそれ以上、口を挟む気は無いのか腕を組み黙り込む。

「サポートには引き続きヴォイドに行ってもらおう。それで構わないかな？」

「……了解した」

主の言葉にヴォイドは小さく頷く。

傍らでソロが舌打ちをする。主の前もあつてかそれ以上特に何かを言う事も無い。ヴォイドの方も視線を向ける事すらせずにただ淡々としていた。

「くそれにしてもデューオか……予想外の敵ではあるが。緊張感を保てて丁度良いじゃないか……皆、今度は今まで以上に気を引き締めて活動を続けたまえ」

闇の中で響くその声にソロを含めた全員が頭を下げる。

「くいずれにせよ……最後に笑うのはこの私だ。むはっ……むはははははっ!!」

主の笑い声に呼応するかのように闇の中で液体が泡立つ。  
奥に鎮座する巨大なカプセルの中で闇の者達を操る主は笑い声を響かせる。  
自らの枷が外れるその日を彼は静かに待ち続けるのだ。

## 後書き　バード編と設定色々

この辺りから独自設定が色々出て来るのでバード編の後書き及びその辺の設定を付け加えようと思います。

○ルーラーズとその文明について

当時はギガミックスも出ていなかったかもしれませんがワイリーが宇宙を漂流していた古代遺跡（正確には移民用の巨大プラント船・・・のちのワイリースターの原型となる）に残されたロボットを回収し修復した存在となります。

ルーラーズを生み出した異星の文明に関しては、作中の地球よりも数段上で本家3において争いになった超エネルギー元素に似た物を製造し兵器に転用できる程の化学力を持っていました。

ただゲーム中でも語られているように文明が凄いやかという訳もなく、ルーラーズ達の同型機を製造して他の星に侵略行為を働くなどお世辞にも褒められた種族ではないイメージです。

勝手に性転換したプルートの少女の姿をしているのも相手の油断を誘う為だったりとにかく合理的かつ冷徹な性格をした者達が多かった形となります。



最終的にデューオ達を生み出した文明と遭遇し、星間戦争を続けた挙句にソローの暴走に追従する形でサンゴツドも暴走、壊滅的な被害を双方にもたらして戦争は終了しています。

因みにルーラーズ側の文明の本星をオリュンポスと言う名前に設定しているのですが、オリュンポスは一連の戦闘で生命が暮らせないレベルで環境が破壊されています。この辺は完全に余談ですが。

ルーラーズに関してはギガミックスと違いワイリーを主として認めています。

自身らを発見し修理してくれたのもあるのですが、彼らは生みの親である異星人からは完全に道具扱いだったので世界征服の為に役に立つと言う前提があるも普通に接してくれる人物が殆ど居なかった中で外様の自身らを幹部扱いしてくれるワイリーに心酔している形です。

作中でも言われていますが、そんな彼らですが作中においてその性能は結構落ちていきます。

動力炉こそ超エネルギー元素に似た物を使っているので高性能ですが、その一部あるいは大部分を地球産の数段劣った部品で補っているので戦えば戦うほど、修理を重ねれば重ねるほどに性能は本来の物よりもさらに悪くなるというジレンマを抱えていると言いう設定です。

そもそも技術体系が違う筈のを問題なく運用させてるワイリーが凄すぎると言う事になるのですが（笑）

彼らの本来の性能はギガミックスのそれかなと個人的に思っています。

彼らもある程度はワイリー・ナンバーズと付き合う中で多少は丸くなっていますが、戦闘に対する容赦の無さは殆ど変わらずです。

彼らは他者を傷つける事に関しては殆ど罪悪感を持っていません。

○ソローに関して

作中の黒幕に仕える部下の一人としてソローを出しましたが、性格と名前以外は本家8で出た悪のロボットその人となっています。

地球に來た設定もほぼゲーム通り。ルーラーズと因縁があるのが追加設定でしょうか（汗）

デューオがデュエットなのでソロと名前はあつさり決まりましたが、当時流星のロツクマン2が出ていて同名となるので伸ばしてソローとなった経緯があつた次第です。

とにかく性格面ではデューオの逆をいく形で残忍で狡猾、結構ペラペラ喋ると言う形となっています。

強さは作中においての最強格と手に負えない感じですね。それと残忍と書きました

が弱者を徹底的に苛め抜くよりも強い奴と戦う事に燃えるタイプです。

一応は自分の筋は通すと言いますか。まあどっちにしる厄介な存在です。

○デューオ及びサンゴッドについて

ゲームの通り地球に落下したデューオは大破して本来のボディは喪失。ギガミックスやボツ設定も踏まえエオサク博士に修復して現在の姿となっております。

8の事件の後にそのまま宇宙に帰ったのですが、ソローが地球に居ると知り再び舞い戻って来た形です。

元の設定もそうですがロックマンよりも遥かに格上な存在であり個人的になかなか出しづらい所があるキャラです。

名前だけ出て来たサンゴッドをはじめ。上記のソローとデューオは人間の手で作上げた神であり人造神と言う設定にしています。

○キングについて

とりあえず普通のロボットなどでは相手にならないと思っただけならば幸いです。

上記の面々に続いてチートな人。一応は前作のラスボスな扱いでしょうか。

ロックマンとの戦いの後は人類抹殺を一旦保留にし再び人間とロボットの関係を守る立場になっています。

一応ワイリーナンバーズの系譜ですが前回の事件もあり軍団内では裏切り者と言う認識であり、連邦政府からも冗談抜きで命を狙われている立場です。

この辺はキング軍団が人類抹殺を掲げた事でのそれによる無差別攻撃によって多くの犠牲者が出ているためで、人的被害が出てもあくまでも世界征服の一環に過ぎないというワイリーと違い普通に戦争レベルの死人が出たため彼個人に恨みを抱く遺族の人らが多い為です。

自分の意思で反乱を起こすロボットなんて危険すぎると言うのが一般市民の考えでしょうし、それが可能と言う事を示してロボットに対する不信感を根付かせてしまったりと後々の事を考えるとかなりの事をしてしまってます。

データと素材さえあればその場で即席の軍団を生み出す事が出来るロイヤルリビルディングなる能力の持ち主。

これは作中でソローが見せた悪のエネルギーを利用してボディを再生させたのと同質の物。

キングの方は試作型ではあるが本家3の時に手に入れた超エネルギー元素の技術を活用した動力炉を内蔵している為に行使が可能となっている。

○最後に女性化について

これなんだけどぶっちゃけるとブルーートは趣味な所ありますがアースに関しては、初めてアースを見た時に純粋に女性に見えたからと言うのが根底にあります。

俺駄目だつて人居たらごめんよ。

まあでもこの世界はこういう設定だから気にすんなよ。

男のキャラばつか書いてると飽きるから良いだろ。ハハハハ（コラ

それとケンタウロスマンも池原版なノリでそういう扱いだぞ。

そもそも池原先生だつてそう言う改変してるだから別に・・・ええと黙ります（汗

とまあ色々書き直して続いています。次回からバラード編に代わりましてアース編と言うか半分くらいバラード編の続きみたいなのが続きます。

元々のもそうでしたが今回のバラード編と言いながら半分フォルテ編なんですよね（汗

今回の再構築で更にそれが強くなった感じですよ。

ともあれこのまま話は続いていく予定です。

次回もお楽しみにですw

## アース編

## プロローグ

この日、ワイリー軍団の第1基地はちよつとした騒ぎとなっていた。

まずに太平洋上の秘密研究所より主であるアルバートⅡWⅡワイリーが帰還して来た事。

そして先に起こった南米の方での一件での後始末を行う必要が生じたなどから、基地内は今までの平穩が嘘だったかのように忙しくなる。

ここまで慌ただしく面々が動くのは世界征服計画を実行する時ぐらいであろう。

ワイリーに敬礼をしながらも何人ものスナイパージョーが工具や素材などが入ったケースを手に慌ただしく駆け出していく。

「お帰りなさいませ」

「・・・うむ」

出迎えたエアーマンらが敬礼をする中、挨拶もそこそこにワイリーは端末を目にしたまま基地の中に入っていきこうとする。

その隣をエアーマンが影の様に付き従う。

「それで南米の第3基地からの連絡は・・・どうなっておる？」

「ハツ・・・テングマンのエアガッパに命じて負傷した者を収容し現在こちらに向かっています」

「そうか・・・メンテナンス室をすぐに使える様に準備しておけ。ワシはそれまで少し休む」

予定に無い形で秘密基地から移動をした事にさしもの彼も疲れたのか、肩を大きく回しながら小さく欠伸をしていた。

「博士。ちよつと良いですかい？」

仮眠室に向かおうとしていたワイリーを呼び止めるのはメタルマンである。

これから休もうと思っていただけにワイリーの顔は渋くなる。

が流石に無視する訳にも行かず振り返ったワイリーはメタルマンの持つ端末に表示される映像を見る。

「こりやなんじゃ・・・？」

「・・・見ての通り侵入者です。どうします？」

ここに限らず世界各地にあるワイリー基地は普段外からは分からないようにカモフラージュされており、ナンバーズを始めとするワイリー軍団に属する者でなければ進入路を発見する事自体が極めて困難となっている。

にも拘らず基地内への侵入を果たしたのか白衣を着た一人の女性が袋小路で監視用のカメラに向かって何かを言っているのが分かった。

「まあ部外者がたまたま侵入してしまったケースは過去に何度かありますんで、何時もの通り危害は加えずに基地から追い出そうかと考えましたが。何やら自分は博士の内だとか何とか言ってますね……どうすればと対応に苦慮してた所に博士自身が帰って来た訳で」

白衣を着た分厚い眼鏡を掛けた女性の顔をじつと見据えるワイリー。

カメラの向こうで何を思ったのか女性は電動工具を取り出し火花を散らし始める。

「やろ……入って来た時みたいに強引に入り口を開けようと……」

女性の強硬な行動にメタルマンが今にも飛び出しそうになるが。

「この娘は……」

目を細め僅かに首を傾げるワイリー。

僅かな間の後、ワイリーは大きく舌打ちをする。

「仕方があるまい。ワシの所に連れて来い……言うまでも無く手荒な真似はするなよ」

折角の仮眠時間を潰される事を悟ったワイリーはメタルマンや近くにいたスナイパージョーにそう命じるや深々と溜息を吐く。

「この娘は一体誰なので？」



「ああ……一応は身内じやよ」

エアーマンの問いにワイリーは殊の外、面倒くさそうに答えるのであった。

## V O I I 招かれざる客

「お嬢さん・・・動くんじゃねえぞ」

スナイパージョーを数人引き連れたメタルマンが開かれた扉の向こうに居た女性に警告を発する。

ジジジジジツツ!!

メタルマンらが現れたと言うのに尚も電子扉の操作盤に工具を突き付けるのは、分厚い眼鏡をした白衣姿の女性である。

火花が散る操作盤を見据えメタルマンの顔が険しくなる。

「あのな・・・これ以上うちの設備を壊さないでくれるか」

呆れながら話すメタルマンの言葉に漸く女性の方が気づいたのか操作盤より工具を外す。

シユンツツ!!

恐らくは半ばロックが外れかかっていたのだろう。

メタルマンが開けたのとは逆に勢いよく閉まる電子扉。

「イテテテテツツ!!」

後ろに居たスナイパージョーの一人が足を挟まれ悶絶したのはさておきである。

ワイリー基地のカモフラージュされた入り口をあつさりで見つけたばかりか、工具を使い強引に電子扉を開けて中に入って来た女性にスナイパージョー達が無言で銃口を向ける。

メタルマンを始め戦闘用ロボット数人に取り囲まれば絶体絶命と考えるだろうが、こんな所に押し入ろうとするのだから普通の反応を示す筈も無く。

「貴方、メタルマンね。ワイリーナンバーズの記念すべき第一号機!! こうして見るのは初めてだわ」

分厚い眼鏡を指で押し上げ足取り軽く近寄って来る女性。

その手に工具が握られていた事もあり、メタルマンは反射的にメタルブレードをその首筋に押し当てていた。

「あのな・・・俺は動くなって言ったからな」

「あら? ごめんなさいね。動いているロボットを見たらつい興奮して」

ギロリと睨み据えるメタルマンだったが女性の方はそう言って笑うだけであった。

何とも言えない不気味さを感じながらメタルマンは指でついて来る様に女性を促すのだが。

「この楯・・・意外に軽いのね。何かコーティングでもしているのかしら?」

ワイリーの下に連行する間、女性がスナイパージョーが持つて居た筈の楯を手にしていたのでメタルマンは思わず声を上げそうになる。

その隣で青い顔となるのは関節ごと分解されて楯を取り上げられてしまったスナイパージョーの一人だ。

「あわわわわわわ．．．」

工具を用いた目にも止まらぬ速さで腕の関節を切り離されたスナイパージョーが情けない声を上げる。

所謂ワイリー軍団において戦闘要員として多数配備されているスナイパージョーだが、かの有名なブルースを簡易量産化したロボットでありその戦闘力は決して低くない。

現在政府軍で正式採用されている戦闘用ロボットに比べ数こそ少ないが性能は上であり、仮に生身の人間が重火器などを用いても簡単に勝てる様な存在ではない。

と云うのが一般的な常識なのだ。

「はい．．．ありがとう」

外れた腕ごと楯を返され茫然となるスナイパージョー。

「次はバスターの構造を．．．」

「や．．．やめてください!!」

ぼそりと呟く女性にスナイパージョーが隊列を乱しかける。

ワイリー軍団が誇る戦闘用ロボット達が女性の早業にすっかり及び腰だ。

(このお嬢さん・・・博士の身内とか言ったが誰なんだ?)

恐れをなして涙目となるジョー達はさておき。

油断無くその目を光らせるメタルマン。

「さて・・・この部屋に博士が」

と言いかけたメタルマンだが額の刃が僅かに緩んでいる事に気づき、即座に指で押さえる。

パシツツ!!

ついでに反射的に腕を動かし女性の工具の先を弾くのだが、一瞬遅ければ指の一本でも外されていたとメタルマンは判断した。

女性の口から小さく舌打ちの声が響いた様な気がしたが聞き間違いではないだろう。

「・・・自分の武器に二回刺さると行動不能になるって話を聞いたのだけれども」

「へえ・・・懐かしい話じゃねえか」

油断していたつもりは無かったのだが、それ以上の動きを見せる女性にメタルマンは苛立ちを募らせ女性を部屋に通す。

それを見てスナイパージョー達が安堵の息を吐くのを見るにメタルマンは何だか情

けない気持ちで一杯になるのであった。

「どうもお元気そうで何よりでございますわ。近頃の季節は……」  
「世辞は良い……で何の用じゃ？」

基地内の一室に入つて来た女性に主であるワイリーはズルズルとカップ麺をすすりながら無愛想に呟く。

突然の訪問ではあるがどう見ても歓迎している様子が無いワイリーと女性の間には沈黙が流れる。

と言つても険悪な空気ではない。

互いにその腹を探つていふと言ふべきか。

「……フンツ。ヴァイスか……あの愚弟はお主の親は元気にしとるか？」

「ええ……おかげさまで。今日もどこかで食べ歩いてますわよ」

ワイリーが口にした名前にメタルマンが眉を動かす。

「ヴァイスつて言いますと例の博士の弟ですかい？」

メタルマンの問いにワイリーがカップ麺の汁を飲み干しながら頷く。

「こやつはその弟の娘……言つてしまえばワシの姪じゃよ。昔のワシと同じローバート大学に通つていふと聞いてはいたが」

眉をピクリピクリと動かしながらワイリーは女性を割り箸で差す。

「まさかそっちの方に進むとはな・・・で話は戻すが何の用じゃ。お主が身内でなければ痛い目に遭わせて追い返していた所じゃぞ」

「実は私、大学の休みを貰いまして。この期間に是非とも伯父様からロボット工学を学びたくここを訪れました」

「ワシなんかよりもライトの所へ行けば良からう・・・ワシは他人に物を教えるのは苦手じゃ」

ワイリーは鼻を鳴らしながら自身の下で学びたいと志願する姪に迷惑そうな態度を見せる。

(確かに博士が他人に何かを教えるのは想像も出来ねえな)

生みの親自らが口にした事ではあるが妙に納得してしまうメタルマン。

ライバルであるライト博士と違いあまりにも独自性と自らの我が強すぎるワイリーが、効率良く他人に何かを教える姿は正直想像が出来ない。

ワイリーの言葉通り何か教えを乞うのであればライト博士の方が適任であろう。

知らず知らずの内に頷いてしまっていたメタルマンにワイリーが横目で睨み据えて来た事もあって、メタルマンは慌ててその目を逸らしていた。

「あら？ライト博士のヌルすぎるロボット工学なんて大学でいくらでも学べますもの。

せつかくの休みなのだから普段学べない事を学ばないと・・・」

分厚い眼鏡を光らせ不敵に笑う女性。

他者を寄せ付けぬ独特の空気を醸し出す姪にワイリーはまたしても眉を動かす。

「まあ・・・好きにするが良い。ただしうちのナンバーズは気が荒い奴もおるからの。下らぬ三原則なんぞには縛られておらぬから、下手な事をして酷い目にあつても知らんからな」

「それは覚悟の上ですわ。私も私で三原則に縛られないロボットがどう言う事を考えて動くのか興味ありますので」

優雅に礼をする姪を視界に捉えつつワイリーは端末に目を向ける。

「ともあれじゃ。今はそれどころではなくてな・・・お主の泊まる場所などは後で手配しようかの」

端末に表示されるのはこの場所に近づきつつあるエアガツパーの位置だ。

「博士・・・もう間もなくエアガツパー到着します」

敬礼をしながらエアーマンがワイリーにその事を告げる。

大きく頷いたワイリーが椅子から立ち上がりエアーマンと共に出て行った事もあり、一室にはメタルマンと女性が残される事となる。

「とっころで・・・だ」



「・・・何かしら?」

メタルマンに振り返り首を傾げる女性。

「アンタの名前を聞いていなかったんだが・・・なんて名前だ?」

彼の問いに女性は満面の笑みを浮かべていた。

「エストよ。エスト=W=Wワイリー・・・宜しくね」

一見すれば魅力的な笑みと共に自らの名前を名乗るエストであったが、メタルマンはその笑みから背中では何か走っているのを感じていた。

思い返すにそれが何であるかメタルマンは即座に察していた。

『これは博士がロクでもない事を考えた時と同じ笑みだ』だと。

「予定時刻より数分早く到着しましたぞ!!」

テングマンが指揮する機動戦艦エアガッパが隠しドックに到着するなり、基地内の慌ただしさは最高潮となる。

「・・・で詳細は?」

「それはここに」

詰め寄る様に近寄るワイリーにデータチップを差し出すテングマン。

ワイリーはデータチップの中身を端末を用い確認をする。

時折ピクリピクリと眉を動かす間にジョー達がエアガツパーの格納庫から担架で傷ついたロボット達を運び出す。

「フォルテ、バラードの修理は予定通りに行え。軽傷のレントとパツシヨナーも同上じゃ」

「・・・ジジイ」

担架の上で呻くフォルテにワイリーはフンと鼻を鳴らす。

「例のエネルギーを再び使ったか・・・ともあれ今は黙っておれ」

若干棘が残る言葉を向けられフォルテは反論をしようとするが、半ば意識が朦朧としている事もありジョー達が持つ担架にそのまま運ばれていく。

南米のゼーネルシテイにおいての戦いで受けたワイリー軍団の損失は甚大だ。

ワイリーからすれば街の被害はどうでも良いが、スペシャルワイリーナンバーズを連ねるバラード及びフォルテが重傷を負ったのは極めて想定外と言えよう。

程無くして次なる世界征服計画を行おうとしている時期と言う事もあり、今は一人でも使える戦力は確保しておきたい。

その事もありワイリーはキングの後継機の運用テストを一旦切り上げて傷ついたナンバーズの修理を優先しようとしていた。

「自分らがいながら・・・申し訳ないであります」

「す……すいません」

パッシュヨナーとレントがワイリーに向かって頭を下げる。

主にテュポンとの戦いで損傷を受けた二人だが、幸いにして軽傷で済んでおり動いている所を見ると短時間の修理で終わりそうである。

次なる計画の主力と位置付けている二人が破壊されなかったのは、戦った相手があつたソローと言う事もあると運が良かったと言えよう。

そんな彼らに軽く声を掛けつつワイリーは鋭い目で最後に格納庫から降ろされる人物に目を向ける。

緊張気味な動きで担架ではなく医療用のカプセルを押すのはウラノスだ。

彼の後ろに部下のルーラーズ達が続く。

運ばれてくるカプセルの中で昏々と眠り続けるのは彼らの隊長であるアースだ。

悪のエネルギーを解放したフォルテすらもあしらうソローとの戦いに駆け付けたアースであったが、圧倒的な実力を誇るソローとの戦いで重傷を負いこの基地に運ばれてきている。

傷の度合いで言えば彼女もフォルテやバードと同じレベルと言えるのであるが。

アースを含めた宇宙ロボであるルーラーズはメンテナンス面での事情がやや複雑だ。

何せ現在の地球の物よりも数段上の文明の副産物であり、そもそも適合するパーツが

あるのかさえ分からない。

ワイリー自身も彼らの体の構造を地球上において誰よりも理解している自負はあるが、本当にそれで正解なのかは正直分かっていないのだ。

そんな事もあってアースの方はワイリーの指示で医療用カプセルに押し込む形で本人に負担の無い形で運ぶ事となる。

「アースの修理はワシ一人でやる。他の者達はマニュアル通りに動け、分からない事があればすぐにワシに言うのだぞ」

軍団内の技術班に所属するジョー達にそう指示を出しつつ、ワイリーは眠り続けるアースに目を向けていた。

「何があつたのだ？」

ツインテールの少女と外出から帰って来たパンクが慌ただしくなった基地内を見てヒートマンに尋ねる。

「キャハハハハ。南米で悪のロボットと戦ったフォルテとバラード達が怪我したんでワイリー博士が帰って来たんだよ」

「フォルテとバラードが・・・？」

ヒートマンの言葉にパンクが眉を吊り上げる。

軍団内の問題児とは言えその実力は折り紙付きなだけにフォルテらが重傷を負ったのが信じられない。

そんな顔を浮かべた。パンクを心配するような顔でフィーネが見上げる。

「それにルーラーズのアースもだつて。ホラ……」

ヒートマンが指差す先でルーラーズの面々が落ち着きなく佇んでいた。

特に目立つのはルーラーズでもかなりの巨体を誇るウラノスだろう。

彼の顔を見るまでも無く事態の深刻さが垣間見える。

……ダンツツ!!

電子扉を開けて勢いよくメンテナンス室より出て来るのはワイリーその人。

ピクリピクリと眉を動かした彼は基地内の自室に入っていく。

普段から資料や機材が散らかり放題であり開かずの間と化している場所だけに、何やら物がひっくり返される音が響き渡る。

暫くして出て来たワイリーが手にするのは普段使っている端末とは別の端末だ。

「あの時、繋いだ配線は間違いだったか。いやそうであるなら動力炉のエネルギー効率  
は……」

ブツブツと自身の考えを口にしながら端末の画面を指で払うワイリー。

若干血走った目で画面を見るワイリーにアースの事が心配なルーラーズすらも声を

掛けれずにいた時であった。

「伯父様……ナンバーズの皆の修理作業は順調かしら？」

そんなワイリーに若干空気を読まずに話しかけるのは与えられた一室に荷物を置いて出て来たエストだ。

神経を逆撫でする様な質問にジロリと睨み据えられるエストだが、彼女の方はキョトンと首を傾げる始末だ。

「……丁度良い。お主の腕を確認する良い機会じゃ!!ちよつと一緒に来い!!」

端末を閉じ半ば強引にエストの腕を引っ張るとワイリーはメンテナンス室に連れていく。

途中で何度かワイリーが声を出していたが何をしているのか問う事など誰も出来る筈が無い。

エストが作業服姿のまま疲れた顔で出て来た時には数時間が経過していた。

因みにパンクと一緒に居たフィーネはとっくの昔に眠りについていた。

「ねえねえ……彼女ってなんで動いてるの？」

一人のスナイパージョーに出されたコーヒードで一息ついたエストが状況を聞こうとしたジュピター達に逆に問う。

「なんで……と言われてもな」

そう答えるジュピターの顔は歪んでいた。

「だって配線の類も普通のロボットと全然違うし、あれって貴方達の文明で言う所のコンピュータの基盤なの？ 私には美術館にある様なコインや石板の欠片にしか見えなかったんだけど」

エストが修理中に見たアースの内部機構について話し出す。

先にも言ったがスペーススルーズを生み出した文明の技術力は地球のそれを越えており、ルーラーズ自体が動くオーパーツその物と言っても過言ではない。

それを地球産の部品で代用しつつも運用しているワイリーがおかしいレベルなのが、エストには作業中にワイリーが何をしているのか殆ど分からないと言った状態であつた。

「伯父様もかなり苦戦していたし。こんな事を言うのもあれだけど同じ文明から生み出された貴方達が何とかしたらいいんじゃないかしら？」

自分達でアースの修理作業をすれば良いのではと言う尤もな指摘にルーラーズの顔色が変わつた。

流石の彼女もその変化を前に思わず瞬きをしていた。

「……出来ないのだ。我々も我々自身が如何なる原理で動いているのか正直分らないだ」

絞り出すような声でジュピターが呻く。

その言葉にパンクは無言で目を閉じる。

黙り込むルーラーズの面々に代わって口を開くのはメタルマンだ。

「こいつらには何かを造るって言う概念が元々無かったんだ」

それは圧倒的な性能を持っているが故に彼らの創造主が持たせた枷なのだろう。

曰く彼らにとって必要な物資は後方より送り届けられてくる物であった。

曰く彼らにとって何かを造るのは専らそれ専用の製造マシンの仕事であった。

曰く彼らにとって損傷を受け動けなくなった仲間は足手纏いに過ぎず、状況次第では

その場で破壊処理をする対象であった。

ともあれ異星人がルーラーズとその同型機達を支配する為に、彼らに物を創造する概念を与えなかったのは極めて合理的な考えと言えよう。

自身らに対し彼らが反逆を起ささないのは勿論の事、敵に鹵獲され自身らの兵器を利用されない為と言う対策もあつたらしい。

だが巡り巡ってその対策は今も悪い意味で有効に働き、ワイリーを苦しめる事になるのだから笑えない。

「マースなどが良い例だがこの星に来てからモノ作りにハマった奴もいるくらいだしな」



ルーラーズで随一の火力を誇るマースを引き合いにメタルマンが苦笑を浮かべる。

「ともあれ我々は自らの体の構造を何も理解していないのが現状だ。もしかすれば本星やその周辺の衛星にあった施設にはデータなどが残っているかも知れんがな」

渋い顔をしてジュピターが言った時であった。

「・・・どうもツス」

メンテナンス室から出て来るのは非戦闘形態になったバラードだ。

一連の戦いでアーマーが大きく損傷した事もあり、アーマーの殆どを取り払われてしまったのだろう。

今の彼は一見するとロボットと分からぬ風貌となってしまうている。

「傷の方は大丈夫なのか・・・」

「パンク兄貴ツスカ。キングの奴に応急処置をしてもらったからフォルテ程、酷くは無かったんすけどね。まあこの機会だから次の作戦の為にアーマーを強化するとかで外してもらったツス」

パンクの言葉にバラードが何時もと変わらぬ表情で受け答えをする。

彼自身が言った事だが思った程、重傷では無かった様だ。

「それでアースは長引きだろうけどもう一人の弟は・・・？」

一応と言うべきなのか暇そうな顔をして残っていたエンカーがバラードに問う。

「ああ・・・それなら」

エンカーに促される様にしてバラードがさつき出て来た部屋の扉に目を向ける。

ややあつて出て来たのは一際青ざめた顔をした一人の少年。

特徴的な漆黒のアーマーは無く彼は苛立つ様に両腕を握り締める。

「あのクソジジイ・・・あの女の修理に手間取っているからつて手を抜きやがった」

バラードの様にアーマーどころかバスターを始めとする武装まで外された事に怒り心頭なのはあのフォルテだ。

ベースがああロックマンと言う事もあつてか、彼の今の姿は人間の少年と殆ど変わりが無い。

「怒るなよ。我が弟よくつてな。レディーファーストつて奴だ」

メタルマンが横で笑う中で一瞬の内にフォルテに間合いを詰めるのは、やはりというか工具を手にしたエストだ。

「貴方の内部機構ならまだ理解出来るかもね・・・なんだつたら私が修理してあげよつか？お姉さんに任せなさい」

「・・・ツツ!!つてお前誰だ!？」

顔がくっ付かんばかりの距離でニヤリと笑うエストにフォルテは本能的に危険を感じ取る。

数歩、後ずさるフォルテだったがエストの笑みはますます深くなる。

「くそっつ・・・覚えてろ!!」

脱兎の如くその場から逃げ出すフォルテの背にナンバースの笑い声が響くが、それに構っている暇は無い。

どちらにせよ捕まれば何をされるか分からない相手を前に無謀な戦いを挑むほど、フォルテの方も馬鹿ではない。

「ついてくるな〜!!」

「待って〜大丈夫痛くしないから。ちよつとだけ・・・ちよつとだけだから」

叫ぶフォルテの後を人間と思えぬ速度で追いかけて来るエスト。

手には電動の工具が握られておりどう見ても無事に済みそうにはない。

それから数時間の間、ワイリー基地内でフォルテがエストの魔の手から逃げ惑う事になったのは言うまでもない。

一方その頃である。

南米のゼーネルシティより遠く離れた欧州にて。

< 現在北米を訪問中のカンパネラ公国の姫の動向ですが・・・ >

薄暗い酒場の壁に取り付けられたモニターが最近のニュースを取り上げる中、男は無

言で手にしたグラスを傾ける。

「お前も……何か飲むか？一杯ぐらいは私が奢ろう」

男の問いかけに黒いコートを着た青年が席に座りながら苦笑を浮かべる。

「王と呼ばれた男の奢りとあれば断る訳にはいかないな」

「王か……今の私にとっては重い名前だな」

王と呼ばれた男が苦笑を浮かべる。

「この店のおススメを一杯……」

男の言葉に店主が無言で頭を下げ酒を用意し始める。

向かい合う様に座り互いの顔に浮かぶのは苦笑いだ。

思うに奇妙と言えるのだろう。

南米での騒動の後に一目散にその場から離脱したキングは、見計らった様に連絡を入れて来た知り合いと落ち合っていた。

知り合いとは言っても普通の友人では勿論無い。

二年前の戦いにおいては彼は敵であった。

あちらからすれば自分は体を真っ二つにした存在であり、普通に考えれば恨まれてさえいるであろう。

「……で会えたのも何かの機会だ。南米に現れた不可思議な連中の映像を渡しておこ

う」

そう言つて一枚のデータチップ受け取ったコート姿の男はそれを手にした端末に入る。

「1997年物のローズバットです」

店主がグラスに液体を注ぎ、その場を去る中で男が身に着けるバイザーに端末の映像が反射する様に映り込む。

「宇宙の暴君或いは破壊者と呼ばれしソロー。そればかりかヴォイドにアルゴス。更にはアポロゴーストなる存在が例の気象兵器の裏で動いていた。由々しき事態と言えるだろうな」

「確かにな・・・」

キングの言葉に男は淡々と答える。

暫しの間、映像を早送りで見続けていた男はある場所で映像を一時停止させる。

「お前も気になったか・・・ブルース」

笑みを浮かべるキングにブルースは無言で頷く。

宇宙から舞い降りて来た存在であるソローはキング達の常識を遥かに超える存在であり、自身らよりも同じ宇宙ロボであるスペースルーラーズの方が知っている事は多いであろう。

最後の方に現れたアルゴスとアポロゴーストに関しては情報が少なすぎる。

それ故にブルースはヴォイドなるこの時代には不釣り合いなビームセーバーなる武装を持つロボットを注視した。

「語るに及ばずだが私も記憶しているデータを照合したのだがね……彼のとほぼ一致したよ」

「このヴォイドとか言うロボットは間違い無く……」

キングとブルースが互いの視線を合わせる。

「ワイリーナンバーズ……だよ（だな）」

殆ど一緒の言葉を互いに言い放った後、キングは手にしたグラスを一気に飲み干す。

ブルースの方は僅かにグラスを傾けるがすぐには口を付けない。

ややあつてブルースがゆつくりと液体を喉に流し込むのを見据えながら、キングは己の頭の中を整理し始める。

「現在の技術ではビームセーバーはまだ実用化されていない……となれば」  
現代においては実用化されていない兵器。

と言う点に着目すれば一つの答えは出よう。

「……さてと私はそろそろ失礼させてもらうよ。色々と調査する必要が出て来たのでね」  
ゆつくりとした動作で席から立ち上がるキング。

そんな彼を遮る様にブルースも立ち上がる。

「あの時の様に邪魔をするのかね」

冗談っぽく口を開くキングにブルースが微笑む。

「お前が行こうとしている所で何が起こるか分からない。幾らお前でもたった一人では危険だろう」

そう言つてブルースはキングを遮るのではなくその真横に並び立つ。

若干酒場の通路が狭い為互いの肩がぶつかりそうになるのはご愛敬。

「一緒に来てくれるのか。私としては正直有難いな」

「元々そのつもりだったのだろう?」

「そうじゃなくても一応の行き先を示せば、私が帰つて来なかつた時にそこに何かがある事を知らせる事が出来ると思つてね」

「人に頼る時には遠慮なく頼れ」

言葉通りキングがここでブルースと会つたのは自身の動向を伝える為であり、万が一の時にはブルースに後を託すつもりであつた。

だがキングの予想よりもこのブルースと言う男は黙つてじつとしているタイプではないらしい。

「今は君が味方で良かった」

ブルースの言葉に笑みを浮かべていたキングだったが、不意に足を止める。

横目でチラリと席に座る二人の人物に目を向けるが、彼らは手にした端末や雑誌をわざとらしく掲げその視線から逃れようとする。

「君達の主にもそう伝えたまえ・・・」

そう言いつつ代金を支払いその場を後にするキングとブルース。

場の空気が僅かに和らぐ中で両者を監視していた二人組は頭に被っていた帽子をテーブルの上に置く。

「バレバレか・・・まあこっちはそれも承知で居たんだがな」

大きく溜息を吐くのはワイリー軍団に所属するロボット、スネークマンだ。

南米から姿を消したキングを監視する過程で思わぬ人物と合流するのを目撃した事になるのだが、二人ともどこへ行くかは一切口にしていない。

恐らく店内や路地裏にサーチスネークを設置していた事もばれていたのだろう。

付け入る隙は極めて少ないと言える。

「どうする・・・追跡を続けるか？」

スネークマンと向かい合うのは電子頭脳をそのまま剥き出しにした様な不気味な姿をしたロボット。

複数居るダークマンと呼ばれる諜報専門のロボットで彼はその二号機だ。



「いや・・・止めておく。途中で振り切られるのがオチだ」

「了解した。盗聴した会話はすぐにワイリー様の下へ送っておこう」

無機質な声を響かせるダークマンに頷きながらスネークマンは深々と溜息を吐く。

「正体不明の敵か・・・デューオと言いきんぐと言いきんぐ。最近この手の敵が多すぎねえか。ワイリー博士は何か対策でも考えてるのかねえ」

偉大ではあるがどこか抜けている生みの親が笑う顔を思い浮かべながらスネークマンは頭の裏を搔くのであった。

## V O I 2 意外なる才能

「あの糞ジジイ・・・俺は世界最強のロボットだぞ!!」

目の前の火力を全開にしながら少年は朝っぱらから大声で叫んでいた。

ソローとの戦いでメンテナンスも兼ねて強制的に武装を外された今のフォルテの姿を見たら殆どの者が二度見するであろう。

エストに追い掛け回されて漸く眠りについた彼だが、朝からフライパンを握らされ他のナンバーズの朝食を作らされる羽目になっていた。

十八番と言える戦闘行為が出来なくなった事もあるがエンカーに『今は戦えないからって不貞腐れてる暇あったら何かしろよな』と割かし真顔で言われてしまい、プライドを傷つけられたフォルテは挑発に乗る形で料理をする事になったのだが。

そもそもこのフォルテがある程度の家事が出来るなど誰が想像できようか。

彼のモデルとなったライバルたるロックマンであれば元々が家庭用であった事もありまだ分かる。

もしかすればその辺の影響もあってなのか意外にもフォルテは家事全般をそつなくこなせる才能を持っているのだ。

流石にあのロールやロックには負けるだろうが、人間でいう所の自炊が出来る程度の能力は持ち合わせている。

男所帯のワイリー軍団では極めて貴重な才能なのだが、元来のフォルテの性格もありそれが生かされる事はまず無い。

だが今、状況が状況だけに滅多に見られぬ光景に多くの仲間達が目を丸くしていた。「とつとと食えよ!!」

人数分の目玉焼きを手際よく皿に盛り付けながらフォルテが叫ぶ。

言うまでも無く接客態度としては最悪だが、いちいちそれに突つかかる者は誰も居ない。

「いやあ噂には聞いていたけど・・・本当だったんだな」

「旨いッス。暫くはお世話になるッス」

驚いた顔のまま卵の黄身を口の中に放り込むメタルマン。

その隣でバラードが満面の笑みで頬張っていた。

「あら・・・やっぱりこれはロックマンの影響なのかしら？ 貴方、意外に家事も出来るのね。流石はスペシャルワイリーナンバーズね」

今は白衣をエプロンに変えたエストがスープの入った鍋をテーブルに置く。

エストの一応の褒め言葉にフォルテは鼻を鳴らしそっぽを向く。

相変わらず素直ではない。

「さてさて居候の代金代わりと言ってはなんだけど。私特製スープを召し上がれ」

何度も言うが普段は男所帯のワイリー軍団にとって食事風景と言うのは皆無である。

味気ないエネルギーパックやE缶による食事に慣れきってしまった反動で、彼らはこの手の料理に殆ど耐性が無い。

殆どのナンバーズが喝采を上げながら朝食を己の胃の中に押し込んでいく。

「流石は世界最高峰のワイリー軍団のロボットね。人間と同じ食事が出来るなんて凄くない」

自分が作ったスープを飲み干す面々にエストもまんざらではない顔で微笑む。

エストの言葉通りと言うか普段の食事風景を示した通り、ロボットである彼らは本来人間と同じ食べ物を食べる必要は無くエネルギーパックやE缶などに代表される物でエネルギーを補給している。

言うまでもなくメタルマンら初期のワイリーナンバーズには、当然の事ながら食事をする機能は存在してはいなかった。

その為、唯一の人間であるワイリーがナンバーズが見守る中で独り食事をするという異様な光景が繰り広げられていたらしい。

何とも言えない気まずさに耐えかねたのかは不明ではあるが、ワイリーが出所不明の

ロボット用消化器官をメタルマンらに搭載したのは三度目の世界征服計画が失敗に終わった頃だったらしい。

ロボット用消化器官：・簡潔に説明すれば人間を始めとする動物と同じようにロボットが食事が食べられる内蔵装置である。

体内に入った物体を分解する事でエネルギーへと変換するのだが、その効率はエネルギーパックなどに比べ極めて効率が悪い。

だがこれも人間的思考を持つが故なのか効率が悪いと分かかっていても癖になった食事は好みとなる訳で。

「毎日料理が出来る程度にウチも潤沢な資金があると良いんだがな」

苦笑いを浮かべるエンカーはインスタントのミソスープを作り始める。

先にエネルギー効率が悪いと言った通り、普段のエネルギーパックと同じだけのエネルギーを確保しようとするすると普段の倍以上の食費が掛かってしまうので常に資金不足に苛まれるワイリー軍団には無理な話である。

実際に彼らのテーブルにはフォルテが作った目玉焼きとエストのスープしか料理は置かれていない。

料理と一緒に肩身が狭そうに置かれているエネルギーパックが本来のメインデッシユである。

「今、戦闘行為が出来ないんだったらロックマンの所に行って料理でも習って来たらどうだ？」

「絶対に嫌だ!!てかふざけんな!!なんで俺があいつに料理なんぞ教えてもらわなきゃいけないんだ!!」

冗談交じりにメタルマンがフォルテに言うが彼は顔を真つ赤に首をブルンブルンと振るう。

「いいよなあ・・・あいつらさ。ロールちゃんに毎日料理作ってもらってんだぞ」  
ナパームマンが遠い目をしながら言う。

そう言えばロックマンを始めとするライトナンバーズも自身らと同じ様に食事をしてるのを見た事がある。

出所不明の消化器官だがワイリーはライト博士の研究をパクったのだろうか。

或いは以前にその手の機能を共同開発していた可能性も大いにあると言えよう。

「私が作ったスープを食べられるんだからマシだと思いなさい」  
「すいません!!ありがとうございます」

ロールと比べられた事に若干頬を膨らめますエストにナパームマンは慌てて頭を下げ  
る。

確かに普段のそれに比べれば今の状況は遥かに良い状態だ。

「ともあれ皆、早く食べなさいな」

エストの声に促される様に一同は目の前の食事を口の中に押し込んでいくのだが。

その中で一人、手にしたスプーンを止め目の前の液体をじっと見つめる存在が居た。

遠目ながら起きてきてからキッチンでせわしなく動くフォルテやエストを凝視していたファイネである。

「あれ？ファイネちゃん・・・食べないと冷めちゃうわよ」

ニコニコと笑みを浮かべるエストは固まったままのファイネにそう声を掛けるのだが。

「・・・どうやって」

「え？」

ぼそりと呟いたファイネにエストとフォルテが首を傾げる。

「どうやってこのスープ作るの？」

少女の言葉に二人は困惑気に互いの顔を見合わせた。

「お主・・・今頃気づいたのか？このワシが普通のロボットを造ると思っていたのか？」

アースの修理を終えた事もあり仮眠を取っていたワイリーは大欠伸をしながらエストらに鼻を鳴らす。

「伯父様・・・あ、あのフィーネちゃんには一体何が搭載されてるのかしら?」

若干早口になりながらフィーネの事を話すのはエストだ。

共に昼食を作る事になり一緒に調理を行ったエストだが、そこで彼女はフィーネの特性に気づいてしまう。

見た目こそ幼い少女ではある彼女が優秀なのはロボットであるのだからまあ分かる。

だがそれ以上にエストが驚いたのは。

「あれはワシらしからぬロボットじゃろう。お主が察した様にフィーネには学習進化に特化したプログラムが内蔵されておる」

「にしては驚異的よ。多分だけど彼女、一度やった失敗は二度としないぐらいに賢いんじゃないかって?」

「まあ失敗を糧に次の改善を目指すと言うのは他のナンバーズでも出来る事じゃが。あれはそれに特化して製作しておるんじゃないや・・・二度目は無いと言う事じゃ

苦笑を浮かべながらワイリーはエストを見る。

ワイリーの言葉通りフィーネの記憶力と他者の動きを参考に自身の物へと取り組む動きはただただ驚愕する他無かった。

当初こそ覚束無い動作で調理器具を手にしていたフィーネであったが、傍らで調理を行うエストの動きを見本にすぐさに己の物へとしていた。



聞けば話題にも挙がったライト研究所に居るロールにも料理をある程度は教えてもらっているらしい。

「フィーネのボディには武器は内蔵されておらんし、一応他のナンバーズには劣る身体スペックとなつてはいるが。だーっはっはっは!!自分の体の動かし方を覚えれば見た目とは裏腹の脅威になるじゃろうな」

眉を動かしながら悪の天才科学者は小気味よく笑つたものだった。

「流石にキングの一件もあつたんでな。データが取れる前に反逆をされては堪らんから人畜無害な見た目通りの性格にしたがの。まあその性格も一つのリミッターじゃ」

「確かに思わぬ形に進化して反逆されたらとんでもない事になるわよね」

自身が製作したキングに寝首を搔かれた事もあり、フィーネに対しては万が一の防止策を幾つも設けている事を話すワイリー。

「フィーネは学習プログラムの試作機。あれの運用で得られたデータを基に本当の意味での自己進化プログラムを完成させるつもりじゃ」

ほくそ笑むワイリー。

目の前に控える次の計画のみならずこの老人は先の先まで見据えているようであった。

「先の戦いで悪のエネルギーを行使したフォルテからは良いデータが取れた。そして映

像で見る事が出来た件の悪のロボットが行った悪のエネルギーを応用したボディの再生能力・・・否、ボディの再構築と言うべきか。それとフィーネのプログラムを組み合わせればロックマンを遙かに超える最強のロボットの誕生じゃあ!!」

高笑いを上げるワイリーにエストも釣られる様に笑みを浮かべる。

「ワシに敵対する者を全て破壊する究極のロボット(仮)の完成がまた一歩近づいたと言  
う事じゃよ。むははははは・・・笑いが止まらんぞ」

『この伯父はとんでもないロボットを造ろうとしている』と普通であればドン引きすべ  
き所をエストは寧ろ自身の想像を超えていた事に感激していた。

「伯父様。私が大学を卒業したら助手で雇ってくれないかしら? 無給で何でもするわ  
よ」

「むはははは・・・お断りじゃあ」

拳を握り締め伯父であるワイリーの手伝いをすると宣言するエストであったが、笑顔  
と共に断られその場でずっこけそうになる。

「ちよつと・・・なんで」

「弟の大事な娘を犯罪者にする訳にはいかんからの」

「だつたらもう悪の天才科学者の姪で犯罪者の身内なんですけど」

「それでも・・・じゃ」

抗議の声を上げる姪にワイリーは軽く手を払いながら首を横に振る。

尚もエストが食い下がろうとした時であった。

「おいジジイ!! どう言うこった!! あのフィーネとか言う奴は普通のロボットじゃ……」  
「だ〜か〜ら〜普通のロボットなんぞワシが造ると思つたのか。さつきから同じ事を何度も聞かれると……答えるのが面倒だわい」

勢よく部屋に入って来るフォルテにまた同じ話かとワイリーは面倒臭そうに欠伸をしていた。

そんなワイリーに近寄ろうとするフォルテだが、その肩を後ろから伸びた腕が掴み取る

「フォルテ……とりあえずフィーネに謝れツス」

「ゲームで勝てないからって手をあげた時点でお前の負けな」

バラードとメタルマンの二人の言葉からワイリーは事の次第を察した。

何かのゲームでフィーネと対戦をしていたフォルテだったが、学習プログラムの真価を發揮したフィーネが途中でフォルテを圧倒する様になり最後には負けず嫌いな彼女が彼女を叩くなりしてしまったのだろう。

歯を軋ませるフォルテだがバラード達の後ろに他のナンバーズも非難めいた視線を向けて立っている事に気づき、その視線を周囲へと巡らせていた。

はつきり言つてかなり分が悪すぎる光景だ。

「負けた時には一応は形だけでもそれを認めるのは大切な事じゃぞ〜」

「毎回最後に土下座しているお前が言うと言説得力あるな・・・くうううつつ!!」

満面の笑みを浮かべ己に諭すように言い放つワイリーにフォルテは地団駄を踏むが他のナンバーズがジリジリと包囲網を狭めていく。

子供同士の喧嘩の延長線のこととは言え負けず嫌いのフォルテがフィーネに謝るのにかなりの時間を要したのは言うまでもない。

「ワオオオオオオオンツツ!!」

ワイリー基地内での騒ぎは続く。

真夜中だと言うのに響き渡る狼の遠吠えに何人かのナンバーズがうなされる中、それに釣られる様に無数のアニマルロボ達の声が聞こえ始める。

『なんだなんだ?』と自室より外に出るナンバーズが見たのは。

「ニヤンニヤンニヤン!!」

「ガウウウウ!!」

基地内の廊下を走り回るのは一体の猫型ロボット。

そしてそれを追い回すのは修理が終わったばかりのゴスペルと彼に従うフレンダー

達だ。

「なんだ・・・タンゴか」

日中の建築現場での仕事もあり疲れが溜まっているストーンマンが興味無さげに言う。

敷地内に侵入しているのはタンゴと言うライト博士が製作したロボットである。

ラッシュユ同様に一応はロックマンをサポートするロボットのひとつと言えるのだろうが、その猫な見た目同様に放浪癖があるのかあまりライト研究所には居ついている様子は無くこうしてワイリー基地の内部でも見かける時がある。

当初こそワイリー軍団の面々も侵入者扱いし追い払っていたのだが、どれだけ嚴重にセキュリティを敷いても侵入してくるので最近では殆ど放置と言う状況だったのだが。

同じアニマルロボの矜持が許さないのかタンゴを見つけたゴスペルは、自身の部下と言えるフレンダー達を従えるやタンゴを追いかけて回し始めたのである。

「・・・程々にな」

眠そうな目でエアーマンがゴスペルに言い放ち自室に戻る。

生真面目なエアーマンですらタンゴに対しこの対応なのだから分かるように、彼らはすつかりタンゴを排除する事を諦めている。

この時点で大半のナンバーズは部屋に戻っていつてしまうがその事を気にするゴス

ペルではない。

「ガルルルルツツ!!」

「フーーツツ!!」

壁際に追い詰めたタンゴに威嚇の声を出すゴスペル。

タンゴの方も負けておらず尻尾を逆立たせるのだが。

「ゴスペル〜ツツ!!」

背後から響くその声にゴスペルがギョツつとした顔になる。

ガシイイツツ!!

その背にのしかかる様にして抱き着いて来るのは本人曰く豹なのだがどう見ても猫にしか見えない姿の少女。

スペースルーラーズの一人であるプルートだ。

「あつ〜タンゴだニヤ。もしかしなくてもエスト姉ちゃんが無理矢理開けた入り口から入って来たのニヤ?」

「ニヤ〜」

「そうかニヤ。そうかニヤ〜」

笑顔でタンゴに話すプルート。

どうやら彼女はタンゴの話す言葉が分かるらしい。

「キヤインキヤイン!!」

対してのしかかられているゴスペルの顔は青白い。

見た目とは裏腹に女の子好きと言う一面を持つゴスペルだが、何故かプルートに対しては苦手意識が働くのか基本的な逆らえない関係となってしまうている。

「タンゴはただ遊び来ているだけニヤ々。皆で追い回しちや駄目ニヤよ」

「クウ〜ン」

タンゴを背に乗せ笑みを浮かべるプルートに周囲のフレンダー達も声を上げつつ臨戦態勢を解いていく。

「お前達・・・うるさいぞ」

「・・・ニヤツ」

背後から声を掛けられプルートがゴスペルの上から飛び降りる。

どこに行つても相変わらずなプルートに溜息を吐くのは翠色の髪を背に流すの一人の女性。

今しがた目を覚ましたばかりのアースである。

恐らくはフォルテ達と同様の措置が取られたのか今の彼女はアーマーを始めとする武装を外されており、一見すると人間と殆ど変わらない見た目をしていた。

「ニヤニヤツツ〜隊長!!」

勢いよく抱き着いて来るプルートにやれやれと言った顔で受け止めるアース。

甲高いプルートの声に再び何人かが外に出て来る。

その中には当然、ルーラーズの面々も居る訳で。

「ブモッツ〜!! た．．．隊ちよ!!」

バキイイツツ!!

鼻息荒く近寄って来るウラノスだったが、その彼に返答代わりに向けられたのはアースの拳であった。

潔癖症で男嫌いと言う性格の彼女に不用意に近づけばどうなるかと言うある意味で模範的な回答と言えよう。

「ブモオオオオツツ!!」

迫った勢いそのままに壁に叩きつけられめり込むウラノス。

何時もの光景と言うのもあって殆どの面々は彼の事を気にする風も無い。

抱き着いていたプルートを地面に下ろしつつアースは騒ぎのせいで集まって来た面々に目を向け溜息を吐く。

「あらあら〜タンゴじゃない。またスパイ活動なの〜?」

どさくさに紛れ基地から出て行ったタンゴとすれ違う様に声を上げながら一人の口ポットがやって来る。



「あらやだ。隊長じゃないの。南米で怪我をしたって言うから報告がてら見舞いに来たのに元氣そうね」

野太い声を響かせながらクネクネした動きで一同に近寄るのは、半魚人の姿をしたロボット。

彼らスペーススルーラーズの一人で現在は主に地球の方で活動しているネプチューンだ。

その見た目とは裏腹にオネエな彼だが、水中戦においては軍団屈指の実力者である。

「・・・心配かけたな」

「まあアタシはワイリー博士を信頼してるから。何だかんだで無事だと思ってたわよ」

苦笑を浮かべるアースにネプチューンは笑みで返す。

「それはそうとワイリー博士居る？そうじゃなくても古参の面々で知ってる人がいると良いのだけでも」

そう言つて後ろの方を指差すネプチューンにアース達は首を傾げる。

そこに並び立つのはアースにとって見覚えが無い三人のロボット達。

「ウキッツ!!」

「やつと帰つて来た〜!!」

基地に入るなり三人で輪になって泣き始めるロボット達は動物を思わせる姿をして

いた。

(サルにブタになんだ頭に食器の様な物を乗せた存在は・・・それと少し臭い)

アースが困惑気に顔をしかめる中、メタルマンとエアーマンら古参の面々が電子頭脳内の情報を検索し始める。

「さまよい続けて早2年近く・・・ようやく」

「あー・・・」

感極まる三人とは対称的に一同の態度は冷淡そのものだ。

「お前から誰だ？」

「そんなく!!忘れてたなんて酷いウキッツ!!」

面倒臭げな顔でフォルテが面々が抱く想いを代読した事でズコツと同じタイミングでひっくり返る三人組。

「む・・・貴様らは確か・・・どこかで」

「はいはい。データにありましたよと。お前らは・・・」

思い出したかのようにパンクが腕を組む隣でメタルマンが手を叩き彼らの事を説明しようとするのだが。

その次の言葉を待たずして三人組が動く。

「ウキッツ!!俺っちの名前はバスターロッド・G!!」

「俺様の名前はメガウオーター・S!!」

「じ．．．自分の名前はハイパーストーム・H!!」

「三人揃って!!メガ・ガンダーラース!!」

と各々ポーズを決める三人だった。

「．．．．．」

やはりと言うかナンバーズ達の反応は実に冷たい。

「．．．．．で誰だよ?」

呆れた様に放たれるフォルテの言葉に三人がその場に崩れ落ちる。

「酷いウキツツ!!」

「受けなかった．．．」

「うう．．．」

項垂れる三人は一旦放置して軍団内での古参メタルマンに一同の視線が集まる。

「こいつらが自分で名乗ったけどメガ・ガンダーラース．．正式にはMWN（メガワールドナンバーズ）って言うんだが。見て通り西遊記をモチーフに製作されたナンバーズだ」

「まあ完成直後に『命令通りロックマンを倒しに行く』と基地から出撃したのを最後にそのまま行方不明になってな。私達もすっかり忘れていた」

メタルマンとエアーマンが経緯を説明し始める。

これらはロールアウト直後にワイリーが口頭で彼らが生み出された理由を説明した際に起こった事であり、まあまだ暴走しなかっただけマシだと言えよう。

ともあれ完成してから勝手に出ていくまで基地内に居た時間は僅かに数時間。

それ故にメタルマンらも今の今まで彼らの存在を忘れていたのである。

「アタシが経営している海の家の近くで動けなくなっていてね。あまりにも可哀相だから少しエネルギーを分けて上げたんだけど、話を聞くと自分達はワイリー軍団だって言うからここに連れて来たのよ」

ネプチューンが彼らを発見に至った経緯を説明する。

因みにだがルーラーズの中で水中戦を得意とするネプチューンは共に地上の方がその特性を生かせるマース同様に地球に滞在している。

彼が経営する海の家は情報収集の場と言う名目で設けられたワイリー軍団の資金調達施設の施設なのだが、意外な才能があったと言えるのか経営の方は繁盛しているらしい。

「なんじゃ・・・騒々しい」

場が騒がしくなつて来た所でワイリーが眠そうな顔でやつてくる。

「あ、ワイリー博士。海の家での売り上げよ〜ん」

ワイリーを見つけるなりネプチューンがゼニーが入った封筒を手渡す。

それを見て何人かが反応を示すがあつさりと渡されたので中身を確認するに至らず。

この辺の金の管理がすっかり出来ると言う点もネプチューンが海の家を経営を任されている理由の一つと言えよう。

「ワイリー博士!!迷子になって早数年、色々にご迷惑かけましたがウキッツ!!」

「ネプチューンの協力もあつて何とか帰還しました」

「あ・・・改めてよろしくお願ひします」

彼の顔を見るなりガンダラーズの三人も表情を輝かせるのだが。

「・・・・・・・・」

文字通り目が点となったまま三人を見つめるワイリー。

その顔を見るなりメタルマンらは嫌な予感を脳裏に過らせるのであった。

そしてそれは的中した。

「お前ら・・・誰じゃ?」

メタルマンら同様にすっかり彼らの事を忘れていたワイリーのその言葉に三人が凍り付く。

「酷い!!酷すぎるウキイイイ!!」

泣きながら手にした如意棒を伸ばすバスターロッド。

意図的な物ではないのだが廊下に設置されていた監視カメラが破壊される。

残りの二人はショックのあまり固まったままだ。

「博士・・・キングの時もそうですが」

「造ったロボットの管理ぐらいちゃんとしてください」

ジト目のメタルマンとエアーマンに指摘されワイリーが呻く。

すっかり忘れられていた三人だが当のワイリーも忘れ果てており、彼らに説明されて漸く思い出した程である。

「お主ら・・・勝手に出て行って帰ってこなくなるんじゃないやもん。ワシの管理云々を問われなくても知らんぞ」

明後日の方向を見ながらワイリーが勝手に拗ねる。

この男の辞書に懲りるの文字は無いと言う事か。

ともあれとワイリーはバスターロッド達の姿を改めて見る。

エネルギー切れで倒れていたと言うがボディの所々で汚れなどが目立つ。

見た所、緊急性は無さそうだが中身の方も幾つかで不具合を起こしている可能性も大いにある。

「とりあえずじゃ・・・メンテナンスをせねばの。お主らワシの後についてこい。次の世界征服計画の前にお主らが帰って来て投入できる戦力が増強じゃあ。むはははははっ  
!!」

「世界征服頑張るウキッ〜!!」

文句を言いつつもワイリーが笑いながらバスターロッド達を引き連れてそのままメンテナンス室に入っていく。

そんな主と能天気な三人の姿に残された面々は苦笑いを浮かべるしか無いのであった。

そんなこんなで時間が過ぎ去っていく中、ワイリー基地がある都市の空港にて。

「流石に過剰すぎるのでは・・・?」

母国ニホンより派遣された輸送機より降り立つ無数のロボットの姿に溜息を吐くのは治安維持の為にこの都市に派遣されているヤマトマンだ。

「申し訳ありません。しかし方が一の事があれば外交問題となりますので」

ヤマトマンに対し頭を下げるのはガマ大夫だ。

先のキング事件の際にはヤマトマンの副官として戦った彼の後ろで複数のベンK達が隊列を組み始める。

「キング事件の際に大きな被害を受けた国の代表がそのお礼も兼ねて各国を歴訪か。まあ復興ぶりを内外に示す良い機会ではあるが」

そう言つてヤマトマンは見慣れたベンKとも違う足軽の姿をしたロボット達に目を

向ける。

自身の戦闘データを基に量産化されたアシガリー達だ。

今回先行量産された者達が運用テストも兼ねてガン大夫達と共に派遣されている。

「どうも政治的な事は好かん。まあ僕は僕の役目を果たすまでだ」

そう言つてガン大夫と共に歩き出すヤマトマン。

「この都市の近くにはワイリー軍団の基地があると聞きます。その為、ロボットポリスにも要請が掛かっていると聞きましたが」

「うむ……まあ奴らが動くとは思わんが警戒はした方が良いだろう」

この都市にいるワイリー軍団の面々の顔を思い浮かべヤマトマンは溜息を吐く。

「ハイハイハイ〜なんか面白くなつてきたね〜こんだけ強いロボットが集まるのキング事件以来じゃね?」

ガン大夫達とは別の輸送機より降り立つのは神話における海神を思わせる風貌のロボット。

欧州出身の高性能ロボットである彼、オーシャンマンはキング事件の際にヤマトマン達と共に戦つた人物だ。

着ているアロハシャツもあつて勘違いされやすいが老獪な指揮官でもあり、彼が派遣されてきただけでも連邦政府の力の入れ具合が分かると言う物だ。



「各国のロボットポリスも総動員されてる感じね。確かコサックナンバーズのリングマンもいたんだよね」

オーシャンマンが言うには既に訪問した国でも今のヤマトマン同様に多くのロボットが護衛の任務に当たったのだと言う。

「やっぱり過剰過ぎると思う・・・」

「ワシも同感ね」

頭を抱えるヤマトマンにオーシャンマンも同感と肩を竦める。

はつきり言つて面倒事としか言いようの無い事だが、それが自分達の仕事である。

「最近妙な事件も多い。その上、南米では行方不明であつたキングの姿も目撃されると聞く。身を引き締めなければ」

己に言い聞かせる様にヤマトマンは手にした槍を握り締めた。

## V O I 3 思わぬ邂逅

「お久しぶりですライト博士。今回は我々の我儘を聞いていただきありがとうございます」

「いやなに……私が出席する事で前回の戦いからの復興を印象付けられるならお安い御用だよ」

街で一番の高級ホテルのロビーでロボット工学の父は一人の青年と握手を交わしていた。

キング事件より二年の月日が経つが、各国の復興は道半ばの状況だ。

特に最も被害の大きかった欧州では漸く復興政策が軌道に乗りつつあり、それを内外に示す為もあつて欧州の要人達が世界各地を歴訪しているのだ。

歴訪の順番が回りこの都市に要人らが来た訳なのだが、言うまでも無く彼らの目的は自分と人類の英雄と言えるロックマンなのだと言つてライト博士は悟っている。

個人的な話をすればこの手の政治的なやり取りや窮屈な場は苦手なのだが、だからと言つて個人の都合で欠席をするほどライト博士も偏屈ではない。

自分と要人が話をするだけで世界中の人々が復興を感じられるのであればそれに越

した事は無い。

(・・・それに)

とライト博士は思う。

(人類側に生じたロボットへの不信感を払拭する為のまたとない機会だ・・・)

キング事件が残した爪痕はあまりにも根深い。

それ以前から差別なり偏見はあつたし、ロボットによる暴走事件の度にその危険性は論じられてきたが、今回の一件でロボットは人類に対し簡単に反旗を翻せる事を示してしまった。

ワイリーによる意図的な物や欠陥による暴走ではない。

彼らは自らの意思で人類に反逆したのだ。

ワイリー軍団と共闘する事で何とかキング軍団を退けた形の連邦政府だが、それによつて生まれた恐怖はあまりにも大きい。

事実一部の国では知能を持つロボットの製造や配備を制限する法律が整備されようとしているとも聞く。

中には一定年数を過ぎたロボットを強制的に廃棄しようとする過激な法案を主張する政治家もいるらしい。

自身が夢見た世界が閉ざされようとしている事にライト博士は強い危機感を覚えて

いる。

それ故に彼は慣れないこう言った場に足を運んでいた。

「それで……なんですが。彼はどこに居ますか？」

握手を交わした青年がライト博士の周囲を見渡す。

「ああ……ロックですか。式典の本番は明日と聞いてましたので今日は兄弟達と一緒に別の所に居ますよ」

ライト博士の言葉に青年の顔が残念そうな物となる。

一瞬、政治的に利用しようとしていたのかと勘ぐったがどうもそうではない様で。

「ロックマンのサインが是非とも欲しかったんですけどね」

「ああ……成程。そうだったら後で彼に頼んでみる事にするよ」

子供っぽい表情を僅かに見せる青年にライト博士は笑いながら答える。

「本当ですか!!是非ともお願いします!!」

先程よりも感情の籠った握手をされ苦笑いを浮かべるしかないライト博士。

二度目の握手を終えたライト博士は何人かが近づいて来るのに気づきそちらに目を向ける。

「やあこれはライト博士」

何時もの白衣ではなくライト博士同様にスーツを着た姿で挨拶をしてくるのはミハ

イルセルゲイビツチコサツクだ。

ロシアを代表とする科学者の彼も今回の式典に出向いている。

彼の傍らにはコサツクナンバーズの一人でロボットポリスに属するリングマンの姿がある。

ライト博士がリングマンにも軽く会釈をする中で、青年の方が先程ライト博士にした様にコサツクにも自らの名刺を渡す。

「何時ぞやは娘さんの件で伯父さんが失礼をしました。あの人は絶対に謝らないと思うので代わりに謝罪させてください」

ペコペコと頭を下げる青年に首を傾げるコサツクだったが。

ロウファWワイリーと名刺に刻まれたその名前にコサツクの眉が吊り上がる。

「君はもしかしなくても・・・あれの身内か」

「そう言う事になります」

笑顔で自身に頭を下げるロウファにコサツクは内心で溜息を吐く。

あれは超エネルギー元素及びガンマを巡る戦いの後であったか。

カリンカがワイリー軍団により拉致された為に、ワイリーの世界征服計画に協力を強いられた事はコサツクの科学者としての人生の中で数少ない汚点の一つになっている。

如何にも人質を取られ不本意であったにせよ犯罪を犯したのは事実であり、もしもラ

イト博士が庇ってくれなかったら今頃自分はこの様な場に居る事など出来なかったであらう。

正直な所、ワイリー個人に対する恨みの念は今でも残っている。

(だがそれを目の前の彼にぶつけるのはあまりにも理不尽だ)

一瞬だが浮かび上がった負の感情を押し殺しコサックは指で眼鏡を動かす。

脳裏を過るのはキング事件の際に漸く対面をした時の事である。

「お前さんの娘は元気にしておるか？元気ならそれで構わんがの」

まるでカリンカの一件など無かったかのように話しかけてくるワイリーに内心でコサックは啞然とした物だ。

なんと最初に声を掛ければ直前まで考えていた自分がまるで道化にでもなった様な気がしてしまった。

『ああ・・・この男からすれば少なくとも他者が己に抱く感情など些末な物に過ぎないのだ』とコサックはワイリーが天才科学者と呼ばれる所以を垣間見た様な気がした。

対して目の前の青年は極めて普通に見える。

彼の父親でヴァイスカンパニーなる怪しげな会社を経営するヴァイスにも会った事はあるが、少なくとも彼には似ても似つかない。

「いやあそう言えば妹のエストが大学の夏休みを利用して偉大な科学者の所で勉強して

くると言っていたんですが・・・お二人の所には」

思い出した様に話すロウファに二人の科学者は首を振る。

「ああ・・・やっぱり伯父さんの所に行ったみたいですね」

破天荒な妹の行動に頭を抱えるロウファ。

そんな彼はさておきコサックに続く形でライト博士が来賓達と何度か言葉を交わした時だった。

「あ、お父様」

ライト博士と共に居るコサックを見つけ駆け寄って来るのはドレスを着た二人組の少女だ。

一人は先程話題に上がったコサックの一人娘カリンカIIコサック。

もう一人の方はライト博士と一緒に出席しているロールである。

恐らく会場でたまたま出会った事で先程までホテル内を回っていたのだろう。

「これはカリンカさん。ええと昔の話になるのですが・・・」

本人が来たと言う事もありロウファが何時ぞやの一件を謝罪しようとした時であった。

ホテルの入り口周辺で何やらざわめきが生じたのに一回の注意が向く。

真つ先に目が行くのは重厚な鎧を身に纏ったロボット。

ロボット選手権にも出場経験のあるナイトマンを先頭に彼に似たロボット達が次々とホテル内に入って来る。

「これは・・・例のですかな」

「・・・うむ」

コサツクの呟きに頷く様にしてライト博士は僅かに胸を張る様にして背筋を伸ばすのであった。

今回のVIPの中で最も影響力があると言える人物の登場に二人は若干緊張する様に息を吐いていた。

一方、会場となったホテル近くの道路では。

「おい通行禁止つてのはどう言うっ!!」

道を遮るロボット達に抗議の声を上げるのはフォルテだ。

そんな彼に対しアシガリー達が無言で槍の穂先を突き付ける。

背後にいるベン・K達も腰を低くし身構える。

もしもフォルテが普段通りであれば今頃戦闘になっていただろうが、今は非戦闘形態にしかなれない事もあり拳を握り締め唸る事しか出来ない。

「なんだ・・・お前達か」



騒ぎに気付いたのかヤマトマンがアシガリー達を下がらせながらフォルテや後ろに居るメタルマン達に目を向ける。

「おいヤマト。何かあそこでやってるのか？」

彼に事情を聞く様に話しかけるのはエンカーだ。

「お前達、何も知らないのか？ ニュースにもなっていたはずだが・・・」

「俺は時代劇と二ホンの大河ドラマしか見ねえよ。で・・・なんなんだ？」

自身の興味がない事には全く以って興味がないエンカーに頭を抱えつつ、ヤマトマンは簡潔に彼らに説明をする。

「今、欧州から来た要人があのホテルに集まって会談をしているのだ。明日にはロッキーマンも参加しての式典もある」

「成程ねえ・・・」

ヤマトマンの説明にエンカーが頷く。

「俺達はこの先の通りにある和風の旅館に行く所だ。で何時もの道を通ろうとしたら通行止めなんで短気な弟が怒ったって訳だ」

フォルテを指差しながらエンカーが笑う。

自身が馬鹿にされた事もあり、フォルテが何かを叫ぼうとするがすぐさまにメタルマンに止められる。

「まあ最近色々あつてな。ちよつとした慰安旅行的な。軽く夜をはいで楽しむつもりだけなんだが」

「くれぐれも騒ぎは起こすなよ。この状況でお主らが暴れたら儂としてお前達を逮捕せざる得ないからな」

『旅館には回り道をしろ』とヤマトマンに指示されエンカーはそれを了承するや一同にその旨を伝えその場から立ち去る。

「なんであいつらの指示になんか……」

「止めとけ。あれだけの警護だ。仮に襲うなら入念な準備が必要だぞ」

空には無数の監視ロボットが居たし、少し離れた先にある公園にはここまでどう持つて来たのかは分からないがメカザウルスが二体も待機しているのが見える。

その上、タンクC SーII型と同型の戦車も数台がロボットアーミーと共に周囲を警戒していた。

「嚴重すぎだなあ……?」

ストーンマンが呆れたような声を上げるがまあそれだけ重要な人物らが集まっているのだろう。

「メカザウルスとかってMr. Xに化けた博士が開発した物だよね」

「あんだけ揃えられるなんて……羨ましい。てか著作権侵害だな!!」

ヒートマンの言葉を受けナパームマンが憤慨した様に言う。

彼らの言う通りワイリーはMr. Xに扮しヤマトマンらロボット選手権に出場したロボット達を洗脳し世界征服計画を進めた事もあったが、その際に世界中の科学者に自らの技術を提供してしまっている。

結果的に世界全体で言えばロボット開発における技術力が向上してしまい、元々はワイリーが開発したメカザウルスなどの大型ロボットを兵器として運用できるまでになつてしまっている。

世界征服計画によって生じた弊害ではあるが、ワイリーが行った数少ない善行ともいえよう。

「チヨサクケンってなんだ？」

「言っちゃまえばパクリって事だ」

地球の文化に疎いマースが問うのでナパームマンが答えるのだが。

「パクリってなんだ？」

「いや・・・他人の真似をしちゃいけないって事でだな」

「真似しちゃ悪いのか？」

真顔で問うてくるマースにナパームマンも黙り込む。

因みに他のスペーススルーラーズも同じ様な顔をしていた。

「真似をするって事は他人の武器を使えるロツクマンとフォルテもチョサクケンシンガイだニヤ」

「うるせえ!! あれはパクリじゃねえ!!」

プルトの言葉にフォルテが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「まあ僕達もライトナンバースを解析して生み出されたところあるし、イエローデビルにピコピコ君とかも大元の技術はパクリだよね」

「考えると悲しくなるからこれ以上は止めるぞ」

ヒートマンの言葉にメタルマンは話題を打ち切る。

ややあつて辿り着いた旅館にて早速座敷に案内された一同。

「あくカブキマンの一件だのフィーネがゴロツキに攫われたりだの南米で色々とありましたが。今宵はその辺は忘れて・・・」

エンカーがマイクを片手に司会進行をし始める。

普段の面倒臭がりな彼にしても珍しくやる気が見られる。

ここの和風旅館が気に入っていると言うのもあるのだろう。

一部のナンバースは酒が入り始め何時ものどんちゃん騒ぎとなり始めるのだが。

「ボエエエエエエエ!!」

突然この世の物とは思えない声と共に音が外れたマイクの甲高い音が向かいの部屋

から響きエンカーが耳を押さえる。

「あ……うるせえな。まあ兎にも角にも……」

エンカーが額に青筋を立てつつ進めようとするのだが。

「アアアアアアアア!!」

「ぐああああ!!耳が!!」

濁音を付けるべきか迷う恐ろしく音痴な歌にフォルテが思わず外に出そうになる。

そんな彼も酔っ払ったメタルマンに羽交い絞めにされて拘束されるのだが。

代わりに飛び出すのはエンカーだ。

「うるせえぞ!!下手くそな『男一代』を歌ってんじゃねえ!!」

苛立ちも即座に頂点に達したエンカーが向かいの部屋の仕切りを勢いよく開ける。

「……ああ?」

次の瞬間、互いが発した驚きの声がマイクから漏れる。

マイクを手にしていたのは音痴な歌の張本人、ドカヘルが印象的な作業用ロボット。

「おおいくガッツじゃねえか。お前、帰って来てたのか?」

E缶を片手にストーンマンがガッツマンに話しかける。

共に建築関係の仕事をしている事もあって両者はナンバーズの垣根を越えて仲が良  
い。

「んん．．．ワイリー軍団!!」

頭にハサミを付けた作業用ロボットが刃を手に身構える。

ガッツマンと同じライトナインバースのカットマンである。

そこに居たのは彼らだけではない。

「てめえはロックマン!!」

向かいの部屋に居た一人を見るやそう言つて指を差すのはフォルテだ。

「やあ。奇遇だね」

会うなり速攻で喧嘩腰な彼にニコニコと笑みで挨拶をするのは誰であろうあのロック本人だ。

ロック以外にもカットマン、ガッツマン、アイスマン、ボンバーマン、ファイヤーマン、エレキマンに見慣れぬロボット二人を加えた面々、計九人がその場にいた。

「なんだロックマンにライトナインバースの皆さんじゃねえか。奇遇じゃくん」

千鳥足の状態で彼らの方に上がり込むメタルマン。

言うまでも無くだがワイリー軍団と彼らライトナインバースは敵対関係にある。

ワイリーによる世界征服計画が実行される度に幾度と無く衝突を繰り返してきた間柄なのだ。

それ故に決して相容れる事は無い筈だったのだが。

「この前の花火大会の爆発。ネットで見たぞボンバーマン!!」

「綺麗だった。感動した!!」

ナパームマンがマースと共にボンバーマンに話しかける。

「あの日は小雨が降ってたから万全の状態じゃ無かったんだがな」

イカゲソを酒の肴にボンバーマンはまんざらでもない顔で答える。

普段は解体工場で働く彼はボランティアで花火大会の手伝いをしており、爆発に対し独特の美学を持つナパームマンとマースはその中継に大いに感動したらしい。

これに欧州にある支部基地に居るグレネードマン辺りを加えれば爆破好きなロボットが勢揃いであつたのだが。

「まあなんて言うかだ・・・」

酒瓶を片手に近寄ったエアーマンがエレキマンのカップに注いでいく。

「今日は無礼講つて事だな」

エレキマンの方も笑みを浮かべつつ酒を受け取っていく。

「おいなんで敵と仲良く・・・」

気づけばライトナンバースと合同で飲み会となる場にフォルテがただ一人反論しようとするのだが、場の喧騒に掻き消され虚しく響くのみ

思うにここまで互いの交流が進んだのはキング事件の際の弊害であろうか。

それまでもストーンマンとガッツマンなり、似た者同士の交流は幾つかあったのだがキング事件の際に互いに行動を共にする事が多くなつた事で友好的な関係となつた面々が多く出てしまつてゐる。

その為か酒の席と言うのもあつたが誰もライトナンバーズと遭遇したからと言つて、即座に戦闘になる事は無かつた。

「ロック兄ちゃん、ロールお姉ちゃんはどこだニヤ？」

お子様と言う事で酒類を一切飲んでいないプルートのロックに問う。

「ロールちゃんは博士と一緒にあのホテルに居るよ。僕達は明日の式典に参加する予定で折角集まつたから宴会でもしようって事になつただけど」

「まさか場所が被るとはな」

ロックの説明にジュピターが溜息を吐く。

「ワイリーナンバーズの連中は本当に世界征服をするつもりなのか時々分からなくなる」

敵対者に慈悲を持つ概念を持ち合わせていなかったジュピターが周りの光景に目を細める。

「まあこうしてすぐさに攻撃をしなくなつた辺りは我々も毒されたかな」

苦笑を浮かべるジュピターにロックは笑みで返す。



見ればウラノスやマーキュリー、サターンも他のナンバーズに加わってはしやぎ始めていた。

「でも悪くはないよね・・・」

「確かにな・・・まあ今は無礼講って奴なんだろう？」

屈託の無い笑みで言い放つ少年にジュピターはそう言いつつ皆の所に戻っていく。

「やいロックマン!!他の奴らと違って俺はっ・・・!!」

マイクを手にロックに指差すフォルテだが、後ろから酔っ払ったメタルマン達に羽交い絞めにされる。

「オレンジジュースばかり飲んでじゃねえよ」

「お前も大人の階段昇れツス!!」

「がばがばがばがばっ!!俺は・・・最きよおおおの」

バラードに酒瓶の中身を一気に押し込まれたフォルテが一瞬で昏倒する。

すっかり混沌な状況になった光景にロックは苦笑いを浮かべる他無かったのだが。

「・・・何時もこんななのかYO?俺っちとしては歓迎だけだな」

「状況として極めて最悪です」

若干困惑気に問うてくるのは二人のロボット。

「・・・お前ら誰?」

漸くと言わなければならない顔であった二人のロボットに気づいたエンカーが問う。

「ええと・・・この二人はオイルマンにタイムマン。色々あって行方不明になっていたんだけど最近発見されて。今日はその歓迎会も兼ねてたんだ」

オイルマンにタイムマン。

共にライトナンバーズではあるのだが、オイルマンはワイリーによる最初の世界征服計画の際にそしてタイムマンはロールアウト直前にタイムマシンが保管されていた研究所襲撃の際にそれぞれ消息不明となっていたのだが、

「傑作だな。そう言えばうちの方も似たような感じで行方不明になったロボットが帰って来てやがんだ。西遊記に出て来る猿、河童、豚な三人組なんだが」

「猿、河童、豚の三人組・・・？」

「俺たちのバイト先で自転車盗んだ泥棒三人組じゃねえかYO!」

エンカーの言葉にタイムマンとオイルマンがそれぞれ声を上げる。

思わぬ所で面識があった事に嫌な予感を覚えつつもロツクとエンカーはそれはそれと今の状況を楽しむ事にした。

明日は明日で何が起こるか分からないのだから。

「やはりと言うか帰って来なかったな」

がらんとしたワイリー基地内の食堂でパンクが呟く。

皆で集まって宴会をするのは前から決まっていたのだが、やはりと言うか出て行つた全員が帰つて来なかつた。

何時もの事なのでパンクは特に気にした風もない。

「まあ食事の用意をする手間が省けて私からすれば結果オーライだけど」

出来上がったばかりの焼きそばをテーブルの上に置きながらエストが話す。

ネプチューン曰く海の家で余ってしまったと言う事で、先程まで彼はファイネと一緒にキッチンで焼きそば作っていたのだ。

それ以外にも色々余つた食材を持つて来てくれた事でパンク達にも非常に有り難い。

暫くは食事に困る事は無いだろう。

まあ賞味期限的に少々危ういので早めに食べなければならぬのだが、贅沢は言つていられない。

「それにしてもパンクも行きたかつたんじゃないの？」

「個人的にあまり騒がしい場は好きではないのだな。誰かがここに残らねばならん」

エストの言葉にパンクは腕を組んだまま答える。

彼の言葉通り今、ここにはワイリーが滞在している上に修理中のバスターロッド達に

レントとパツシヨナーと言う面々も居るのである。

万が一にも何者かに襲撃される危険性を考慮すれば全員が出払う訳にはいかないのである。

「奴らめ……」

非戦闘形態となつてゐる面々の内、バロードとフォルテは一緒に出掛けてしまつたがただ一人残る形となつたアースは見るからに不機嫌であつた。

「まあ昼には帰つて来るんじゃないの？うちの面々も行つてるんだし大丈夫よ」

能天気 answers ネプチューンだったがルーラーズを管理するアースの顔はやはり険しい。

アースは宴会に出かけるルーラーズ達にその日の内に帰つてこいと厳命した事もあり、結果的にそれを破られた事となる。

規律を遵守するルーラーズにとって許しがたい事なのだが。

「偶には良いじゃないの。それぞれの親睦を深めるのは良い事じゃないの」

「だがな……」

ネプチューンの言葉に未だに納得がいかぬと腕を組むアース。

「頭が固いな……時には許すと言うのも大事な事だ」

「なんだと……!!」

パンクの言葉にアースが今にも飛び掛かりそうな空気を発する。対してパンクの方は溜息を吐くだけで手にしたE缶を飲み干す。

「……冷静になれ。私如きの小言にいちいち突っかかるなどフォルテと変わらんぞ」  
ぴしやりと指摘され若干顔を赤くしたアース。

「まあまあ……二人とも落ち着いて」

そんな両者の間に入る様にネプチューンが仲裁をする。

アースもアースで子供染みた反応をしてしまった事に気づきますます顔を赤くする。

(今は戦闘が出来ないから隊長の方も結構カリカリしてるわね)

元よりプライドが高い自信家でもあるアースだけに、思わぬ強敵を相手に負傷した事もそうだが今の戦闘能力を失っている状況に焦っているのだろう。

ワイリーは時間はかかるが絶対に直すと言っていたが、果たして本当に出来るか分からない。

冷静な風を装いつつも内心で焦りに焦りまくっているアースを横目にネプチューンが思案した時だった。

若干の気まずさもあったのか何気無くテレビのリモコンをエストが操作し、画面にニュース番組が映し出される。

その間、ワイリーがネプチューンと一緒に作った焼きそばをテーブルに置いて食べ始

めるのだが。

<現在ロイヤルホテル周辺は欧州から招かれた要人が次々と式典会場へと移動を始めており……>

「そう言えばそんな話もあったな」

テレビを見ながらパンクが思い出した様に声を上げていた。

露店でクレープ屋を営むローズが会場周辺で店を出すと言う話をしていたのだ。

「……うわ」

要人達が車に乗り込む映像が映しだされる中で一人の青年が出て来た瞬間、エストが明らかに嫌そうな声を上げる。

一同の視線が集まった事もあり、エストは誤魔化さずにはつきりと言う。

「さっきのあれ……うちの兄貴」

「まだ博士の身内が居るのか……」

エストの言葉にパンクは頭が痛くなるのを覚える。

そう言えば彼女らの父親はワイリーに負けず劣らずの人物だったと記憶していたが、エストの兄もそうなのだろうか。

まあエストもそうだし普通な方がおかしいと思った方が賢明であろう。

「いいなあ……私も見に行きたいな」

「私達が行ったらどうなるか。普通に逮捕されて終わりだぞ」

フィーネが少女らしい感想を口にするが、パンクが言う様に現実には甘くない。

存在自体がある意味危険としか言いよの無いワイリー軍団の一員が会場に近づけばどうなるか言うまでもない。

問答無用で破壊されても文句は言えないし良くても逮捕である。

わざわざこんな日に活動するする方が馬鹿を見ると言えよう。

「まあでも近くまで行って買物をするぐらいは出来るんじゃないかしら？」

ネプチューンの言葉にそもそも人混みが嫌いなパンクが極めて渋い顔をするのだが。

「お兄ちゃん。一緒にいい」

「パンクちゃん。折角可愛い妹が誘ってるんだから行きなさいな。留守番はこのアタシが守るからさ」

フィーネに迫られ唸るパンクに対しネプチューンが胸を叩きながらその背を押してくる。

「なんならうちの隊長も一緒に行つてらっしゃいな」

「な・・・なんだと」

ネプチューンに話を振られアースが驚いたように振り返る。

「良いんじゃないの？今は戦闘行為が出来ないからやる事無いし」

エストの言葉にアースは唖る。

彼女の言葉通り今のアースは何もする事が無い。

ワイリースターの管理運営も一足先に宇宙に帰ったスターマンがしているし、そもそもネプチューンとマース以外のルーラーズは自分の修理の付き添いである。

言うなればワイリーが自分を完全に直してくれるまでアースは何も出来ないのである。

「だったらお前が・・・」

「私は伯父様の手伝いがあるから。それに鬱陶しい兄貴と会う可能性あるから絶対に無理」

逆に言葉を返そうとするもそれはエストの満面な笑みで返されてしまう。

彼女の言葉から兄とは微妙な関係である事が伺える。

『行つたら？どうせ暇なんだし？』と言わんばかりのエストとネプチューン双方の笑みに押されアースはゼンマイ仕掛けの様にパンクとフィーネの方に振り返る。

パンクの方は無表情だが、フィーネの方は少女らしい屈託の無い笑みを浮かべていた。

はつきり言つてこの手の顔は極めて苦手だ。

ややあつて渋々ながら頷くアースにフィーネは飛び跳ねながら喜ぶ。



「なんでこんな事に・・・」

喜ぶフィーネとは対照的にその場に項垂れるアースだがもはや後の祭りである。

「グウウウウウツツ!!」

目の前を横切る監視メカに黒衣を纏った人物が獣の様な唸り声を上げる。

周囲を監視用のメカ達が飛び交う中で気にした風も無く佇む三つの影。

「ボーンダイーン。今は堪えろ」

己らの周りに不気味な目玉達を展開させながらももう一体の巨人が言う。

彼らが立っているビルの上から式典会場までは数百メートル程の距離があるのだが、当然ながら嚴重な警戒網が敷かれる事となる。

地上では屈強なロボット達が配備され、空中の方も監視メカが無数に飛び交う。

本来であれば今頃、彼らの姿は監視メカに察知され通報されているのだろうが、監視メカは眼前を飛ばばかりで何も反応を示さない。

「監視メカに触れるなよ。触れれば偽装も無意味と化す」

「分かっている・・・分かっている」

アルゴスの注意にボーンダイーンが唸りながら返す。

己らの周囲を漂う不気味な目玉としか思えない物体が光を屈折させ、周囲の風景から

彼らの姿を隠しているのである。

監視メカからは何も見えていないだろう。

「式典が行われている中で襲撃を仕掛けるのは愚の骨頂。それが終わりターゲットがそれぞれ単独で動き始めた時を狙い我らは動くぞ」

自身らのバックアップとしてその場に赴いているヴオイドにアルゴスとボーンダイ  
ンが振り返る。

「奴らを蹴散らすのは造作でもない事だが、全てを倒すのは些か骨が折れる」

巨体に不気味な目玉を浮かび上がらせながらアルゴスはほくそ笑む。

彼らの視線の先では式典が滞りなく始まりそして無事に進んでいく。

「ライトナンバースも来ているのか。やはりと言うか今の状態で我らだけで襲撃はせぬ方が賢明だな」

ヴオイドが遠目より彼らを見据え僅かにその目を細める。

頃合いを見て彼は掌の上に立体映像を表示させる。

「今一度、作戦を確認する。よく聞くのだボーンダイン」

始めて活動をする事もありボーンダインと向き合うアルゴス。

「我らの目的は式典の出席者に危害を加える事であるが、トーマスⅡライトとミハイルⅡセルゲイビッチⅡコサックへの殺傷行為は主の命令によって禁じられている。よつ

て狙うのは他の政府関係者となる」

「ライト・・・コサックウウ!!」

立体映像とは言え映し出される人物にボーンダインが縛り出す様な声を上げる。

「両名はターゲットではない。これは絶対に守れ・・・」

アルゴスの言葉にボーンダインは返事の代わりに唸り声を上げる。

「流石に我らでも全員を狙うのは無理だ。よつてここにリストアップした者達を優先的に狙う事になる。よく覚えておけ・・・奴らを発見次第、攻撃するのだ」

十数人の政府関係者の立体映像が映し出され暫しの間、ボーンダインは唸る。

後ろに振り返り眼下の路上を彼が見下ろした時であった。

「・・・見つけたぞ」

ぼそりと呟いたボーンダインにアルゴスとヴォイドが『何を』と問う間も無かった。

「ガアアアアアア!!」

獣如き咆哮を上げビルの屋上より跳躍するボーンダイン。

あまりに突然の行動に面食らったアルゴスとヴォイドは互いに顔を見合わせる。

「・・・使えぬ奴め」

吐き捨てる様に言い放つアルゴスの言葉に遅れて悲鳴が響き渡る。

「襲撃は夜にした方が良いと思ったが・・・計画は変更だな」

「その様だな。忌々しい．．．私は奴を援護する」

ヴォイドの問いに苛立ちを見せつつ、アルゴスもボーンダインに続く。

「．．．了解した」

一瞬の内に静けさが掻き消された街並みを見据えヴォイドはその場より姿を消すのであった。

## V O I 4 蔓延る悪魔達

「貴様ら!! どう言う事か説明しろ!!」

誰も居なくなつた式典会場の控室で響く怒声。

困惑するばかりの面々の次に脱ぎ捨てられたスーツを血走つた目で見据えるのは、重厚な鎧を着た戦闘用ロボットである。

「それが式典を終え控室に入ったきり出てこれないので、心配になつて確認をしたら部屋がもぬけの殻でして」

「そんな事は分かっている!! すぐに探し出すのだ!!」

「ハハツツ!!」

弁明をする護衛用ロボットに指示を飛ばし駆け出していく彼ら。

その場に誰も居なくなつた事もあり、ナイトマンは苛立つ己を抑える様に大きく息を吐く。

「まさか・・・この様なタイミングでここから逃げ出すなど」

自らの主君と言えば聞こえは良いがとんだじゃじゃ馬だとナイトマンは内心で思う。

「ナイトマン・・・騒がしいが如何した?」

自身の怒声に気づいたのかヤマトマンが首を傾げながら一室に入って来る。顔見知りではあるがこの件に関しては部外者であるヤマトマンにナイトマンは言葉に窮する。

ヤマトマンの方も脱ぎ捨てられた衣類などを見るに状況をすぐさに理解した。

「まさか・・・とは思うが」

困惑気に問うてくるヤマトマンにナイトマンも観念した様に頷いていた。

「ここで秘密にしようともいわずればれると判断したからだ。」

「そのまさかだ。あのじゃじゃ馬姫め・・・何が『昨日の移動で疲れたから今日の式典は一人で着替えられるスーツにする』だ!? 思うに最初から逃げるつもりであったか!!」

苛立ちを露わにし今にも控室の壁に手にした鉄球を放り投げそうなナイトマンにヤマトマンは心底同情する。

彼は欧州にあるカンパネラ公国にて製作されたロボットであり、各地を歴訪する要人の護衛を当然の如く任せられる事となる。

ロボット先進国であり欧州の中でも逸早くロボットの権利向上に対し積極的な政策を取ったカンパネラ公国であったのだが、結果として人類抹殺を掲げるキング軍団に苛烈なまでの攻撃を受ける羽目となってしまふ。

ロボット選手権における失態もあり一時非難に晒されていたが、今や『公国の楯』と

名高いナイトマンを始めケンタウロスマンらの活躍もあり、陥落を防いだ事でカンパネラ公国の影響力は欧州でも非常に強い物となっている。

となっているのだが、彼の主である公国の姫はあまり良い噂を聞かないのが現実だ。ナイトマンの態度からもその辺りが窺い知れよう。

「見つけたら引つ叩いてやる!! ついでに私もクビになる!! もうあれの我儘に付き合うのは嫌だ!!」

まるで子供の様に地団駄を踏むナイトマンだが、その動きに合わせて控室が揺れる。

「何が三分以内に有名店のケーキを買ってこいだ!! 紅茶やジュースなどホテルに備え付けた物やそこらの店ので十分ではないか!! 私達は召使いじゃないぞ!!」

護衛対象にである姫に対し今までの不満が爆発したのかナイトマンが叫び続けるのをヤマトマンは若干引いた様子で見ている。

ややあつて落ち着いたのか荒い息を吐くナイトマン。

「しゅ・・・周辺の監視メカに姫の画像を送ろう。そうすればすぐに見つかるであろうに」  
「そうしてくれると有難い・・・」

ヤマトマンの言葉にナイトマンが頭を下げた時だった。

近くで悲鳴と爆音が響いたのは。

その頃、ワイリー基地において。

「あら〜？お帰りなさい〜」

時刻はパンク達が出かけて二時間と言った所。

全員ではないがばらばらと帰って来たナンバース達にネプチューンが声を掛ける。

「まあ予定通りだけど随分と飲んだわねえ〜」

「旅館で飲んでた向かいの部屋にライトナンバースが居てな。つつい話のつちまつた」

エンカーがネプチューンに旅館であった事を説明する。

「だと思った。なんか分からないけどアンタ達の間には因縁めいた物を感じるわあ」

偶然にしては多すぎるこの手の遭遇例にネプチューンもいちいち驚く事は無い。

手を広げるネプチューンの後ろでストーンマンとウラノスが担架で動けなくなつた

メタルマンを運んでいく。

「それでフォルテちゃん達は？まだ帰って来てないみたいだけど」

「ああ・・・あいつとバラードにプルートの酔い潰れてメタルマンみたいに動けなくなつ

たんだが。念の為にエアードとヒートが残つたがあの様子だとまだ時間が掛かるだろう

な」

「ちよつとうちのプルートにお酒飲ましたの？あの子、そう言うのに耐性無いんだから



止めてよね。酔っ払って動けなくなった所に変な事したんじゃないでしょうね」

「心配すんなよ。あれはゴスペルとタイムマンとか言う奴に終始抱き着いて引っ掻いてたから」

幼いが一応は女子としてカウントされるプルートのセクハラ紛いの事をしたのではと勘繰るネプチューンだが、エンカーはそれはないときっぱり否定する。

そもそも旅館の廊下を走り始めた彼女を止めようとしたウラノスを得意の突進で悶絶させたのはまだ良しとしよう。

暫くの間、旅館内を走り回った彼女は次にゴスペルやタイムマンに抱き着くや彼らを自慢の爪で引っ掻き回す事となる。

「あいつに酒は絶対に厳禁な。メタルマンよりも酷い。俺も旅館のオーナーに叱られちゃまった。暫くは出禁だな」

エンカーの顔を見るに相当に絞られたのだろう。

「クウ〜ン」

全身に爪のひっかき傷が生々しく残るゴスペルはいつも以上に情けない声を上げてメンテナンス室に入っていく。

中で作業をしていたワイリーの悲鳴とも絶叫ともつかない声が響くのだが、聞かなかった事にした方が正解だろう。

「押忍!!自分も歓迎会して欲しいであります!!」

ゴスペルが急遽メンテ入りとなった事で追い出されたのもあるのだろう。

修理中であつた事もあり、宴会に参加していなかったパツシヨナーがレントと共に出て来るなり拳を握り締め言い放つ。

「よう・・・怪我の方は大丈夫そうだな」

エンカーの言葉にパツシヨナーは返事の代わりにガツポーズを決めるがレントの方は俯き気味だ。

「南米では武装が完成していなかったであります。遂に自分の武装のコキユートスラースとイージスの楯が完成したのであります!!」

ジャキーンと手にした武装を構えるパツシヨナーにネプチューンが愛想代わりに拍手をする。

「つきましては同じ槍使いとしてエンカー殿に教えを請いたいのであります。宜しいでありますか!？」

顔がくつつかんばんばかりの距離で話し出すパツシヨナーにエンカーは圧倒される。

バラードから勢いだけは凄いと聞いていたが、とりあえず暑苦しいのは間違いない。

「分かつた・・・後でな。お前らの歓迎会もガンダーラーズと一緒にやるから・・・ちよつと離れてくれね?」

エンカーに指摘されて慌てて『失礼したであります』と後ろに下がるパツシヨナー。まあ表裏が無いと言えば利点になるのだが、彼は彼で色々問題があり過ぎると言えよう。

対してとレントの方に目を向けるエンカー。

凄まじい火力と装甲を持っているらしいのだが、今の彼女はアーマーを身に纏っておらずそれもあつてか自信無さげだ。

聞けばソローなるロボットと戦った際にも圧倒的な実力を持つ相手に臆してしまい殆ど活躍出来なかつたらしい。

互いに問題点を抱える新人にどうしたものかとエンカーが考える。

エンカー自身の柄ではないが悩みを聞いた方が良いのだろう。

まあこの辺はエアーマンなりパンク辺りが適任だと彼が両者の顔を思い浮かべる。

「キャインツツ!!」

「コラ〜ゴスペル。待ちなさい!!」

メンテナンス室から悲鳴を上げるゴスペルとそれを追う電動工具を片手にエストが飛び出してくる。

一瞬だがそちらの方に意識が向きかけた時であった。

留守番をしていたネプチューンがそのままにしていたテレビから爆音が響く。

式典も終わり出席者が会場を後にした直後の事であつた。

騒然となる会場の光景にエンカーが立ち上がる。

先程まで笑みを浮かべていたネプチューンも表情を険しくする。

「大変ね。あそこにはパンクや隊長、ファイネちゃん達が出かけた筈よ」

「なんだつて……?」

ネプチューンの言葉にエンカーが顔色を変える。

彼らはテレビの画面を見る事は無く慌てて駆け出すのであつた。

同時刻、ローズの屋台でクレープを買っていたパンク達。

暫くは三人で会場近くを回っていたのだが、近くの旅館ですつかり酔い潰れたと言うフォルテ達とローズの屋台を目印に合流する事となる。

「キャハハハ!!フォルテつて凄く酒に弱くて笑つちやうね。もつと飲んで燃えなきやサイキョーまでの道のりは遠いよ」

「うるせえ……」

周りをクルクルと回りながら茶化すヒートマンに対し、未だに万全ではない状態で話すフォルテ。

人間でいう所の二日酔いの状態であるようだった。

「酒は飲んでも呑まれるなと言う言葉がこの星にはあると聞く。己の程度が分からぬなど貴様も器が知れているな」

対してローズの店で買ったクレープを片手にほくそ笑むのはアースである。

女性ではあるが自信家であるアースの挑発にフォルテの青白い顔が僅かに染まる。

「てめえ……やるって言うのか？」

「何時でも構わんぞ。まあ悔しければ一度くらいロックマンに勝ってみたらどうだ？ 自分で最強のロボットを名乗るんだつたら」

苛立ちを露わにするフォルテにアースが鼻で笑う。

スペースルーラーズを率いるアースはワイリー軍団内で唯一他の者には無い輝かしい功績を持っている。

それは宿敵たるロックマンに対し完全な勝利を一度収めたと言う事である。

スペースルーラーズを投入した世界征服作戦の際に宣戦布告代わりにロックマンを強襲したアースは、彼の攻撃を全て無力化した上で勝利を収めているのだ。

これはフォルテも含めた他のナンバーズですら一度も成し得なかった事であり、フォルテからすると認めたくない事実である。

「まあでもその後で逆に負けてるからアースもオアイコだよね」

無邪気なヒートマンの言葉にアースの顔が凍り付く。

実際にあの計画時にはキラース以外のナンバーズは参加していなかったが、バックアップと言う形では参加していたので一部始終ヒートマンらが記録していたのだ。

「普通に戦ったら勝ってたのに二回目の時のアースってかなりテンパってたよね」  
「続けざまのヒートマンの言葉に何か割れた様な音がした気がした。」

テンパっていたと言うヒートマンの言葉は半ば正しい。

そもそもアース達からすれば圧倒的な性能を持っていた筈の自身らがロックマンに敗れ、逆に追い込まれる事など想像すらしていなかったのだ。

彼女らにとって不幸であったのは自身らの身を守る障壁の正体を早々に解析されてしまった事だろう。

かつて争いの原因となった超エネルギー元素とルーラーズの動力炉として使われていた物質は生み出された文明こそ違えど、極めて酷似した特徴を持った物である事を突き止めた事で対策は進む。

トーマスライトは瀕死の重傷を負ったロックマンを修理する際に、バスターに超エネルギー元素に取り付ける事でルーラーズの障壁を無力化する事に成功。

特に腕その物を弾丸として飛ばすロックンアームの威力はルーラーズですらも容易く致命傷を負いかねない代物であった。

最終的にロックマンが装備していた超エネルギー元素はサンゴッドとの戦いの末に

失われる事になるのだが、であれば今のロックマンを倒すのが簡単かと聞かれれば答えはNOだ。

有体に言えば今のアース達に初めてロックマン達と戦った頃の様な力は無い。

戦う事しか出来ないと言うのに戦えば戦うほど、アース達は確実に消耗し弱体化していく。

そんなジレンマに苛まれる中で彼女を始めとするルーラーズは、主たるワイリーに力を貸していると言うのが現状だ。

「・・・言い過ぎだぞヒートマン」

パンクの言葉にヒートマンは頭の蓋を閉じる。

自身が冷静さを失いかけていた事に気づいたのかアースも舌打ちをしながらそっぽを向く。

「まあ月並みだけ次に挑んで勝てば良い話ッス。とりあえず今度こそは奴に勝ってアースに並ぶッスよ」

バラードの言葉にフォルテが『今度つて何時だよ』と悪態をつくがバラードの方はその辺りを聞き流す。

「ロックお兄ちゃんと勝負するの?」

そんな中、一人黙って話を聞いていたフィーネがパンクらに問う。

「じゃあ私もロールお姉ちゃんに負けない様に頑張ろうっと」

ニコニコと屈託なく笑う彼女にアースが眉を吊り上げる。

恐らく勝負の意味を取り違えている事に苛立ったのだろう。

今の彼女は武装が外されている事もあってやはりと言うか苛立っている。

何時もであれば鼻を鳴らすなりして聞き流していただろうが、その日に限っては黙っ

ている事が出来なかった。

「お前、我々がロックマンと戦うと言うのは遊びでする訳ではない。奴らと我々は敵対

関係にある。言うなれば殺すか殺されるかの・・・」

「・・・アース!!」

極めて正確ではあるが残酷な現実を口にしようとするアースの肩をパンクが掴み取る。

反射的に振り返ったアースがその手を思いつきり払い除ける。

硬い金属音が周囲に響くが幸いと言うか周囲を行き交う人々がそれに気づく事は無かった。

「今は・・・それを話す必要性は無い」

僅かに痛みが残る手を何度か払いながらパンクが言う。

フィーネの方は首を傾げていたが、アースの方は鋭い視線でパンクを睨み据える。



「私に触れるな。下等なこの星のロボットめ。言葉だけの情けや同情など何の意味も無い。我らの存在意義は勝つ事・・・ただそれだけだ」

キツと己らを睨み据えるアースにパンクは目を細める。

別に馬鹿にした訳ではないがますますアースの眉が吊り上がったのを見てパンクは内心で溜息を吐いた。

今の彼女はやはりと言うか冷静さを失いかけている。

「そう言えば初めて会った時もそんな事を言っていたな。今となつては懐かしい限りだ」

「あゝあゝとりあえず仲間内で喧嘩は良くないツスよ」

険悪な雰囲気となる場に先を歩いてきたバラードが振り返りながら手を広げるのだが。

ドンツツ!!

己の背に小さな衝撃を感じバラードは反射的に振り返る。

「痛っく・・・!!」

見れば帽子を目深に被った一人の少女が地面に倒れ込んでいた。

恐らく後ろを振り返ったバラードの背にぶつかったのだろう。

「おっとすまねえツス・・・」

倒れ込んで相手に手を差し伸ばすバラードだが、その手を受け取らずに立ち上がった少女が放ったのは強烈なまでのビンタであった。

一見すると人間に見える今のバラードだが、当然の様に人間よりも強度が高い為に逆に悲鳴を上げたのは少女の方。

「痛いじゃないの!!」

「いきなりはたいておいてそれッスか!」

八つ当たり同然に叫ばれバラードも負けじと声を張り上げる。

「・・・次から次へと」

と良くも悪くも何時もの様にトラブルが生じた事にエアーマンがぼやいたその時であつた。

自身らの眼前に黒衣を纏つたロボットが降り立ったのは。

「・・・え?」

困惑気な声を上げるフィーネはさておきパンクとエアーマンが反射的に彼女の楯となる。

「ガアアアアアアアアアアア!!」

獣の如き咆哮に連動し周囲のショーケースなどのガラスが割れ周囲に散乱する。

辺りに人々の悲鳴と怒声が響き渡るがロボットは意に介した風も無く前に歩を進め

る。

即座に異常を察知した監視メカが動き出すが、振り下ろされた鎌の一撃にあっさりと破壊される。

「……は……?」

とバラードが驚く間もなく監視メカを破壊したロボットが地面にメカごと突き刺さった鎌を強引に引き抜く。

返す刃で鎌を振るう相手の視線が自身とぶつかり合う。

生憎相手との面識は無いと判断するが、長年の勘もありバラードは相手の狙いを即座に看過する。

ヴォンツツ!!

バラードが反応できずに立ち尽くす少女の首根っこを掴んで一緒に飛び退いたのと鎌が振るわれたのは殆ど同時であった。

「え……ちよ!?!」

驚く少女であったが正体不明のロボットの狙いが自身である事に気づいたのか、或いはバラードが動かかねば今の瞬間に死んでいたと認識したのかその顔が青ざめる。

「なんなんスか!?!」

声を上げる自身に反応をしたのかは分からないがロボットが無言で身に纏っていた

ローブを投げ捨てる。

「我が名はボーンダイン。お前を・・・殺す」

絞り出した様な声を上げ白骨化した爬虫類を思わせる頭部を持ったロボットが自らの名前を名乗る。

やはりというか彼が指差すのはバラードが救った少女だ。

無骨な鋼鉄の装甲に覆われたロボットのボディはかなり大型であった。

前屈姿勢ではあるので多少小さくは見えるが、ストーンマンなどの大柄なロボットよりも一回り大きく見える。

「お前・・・まさかとは思うツスが。あのソローとか言う奴の仲間ツスか!」

「グウウウ・・・殺す殺す!!」

バラードの問いに答えずにボーンダインが手にした鎌を振り回す。

「キヤアアアアア!!」

悲鳴を上げる少女を片腕で抱きかかえるとバラードはその場より後退する他無い。今のバラードは非戦闘形態。

何時もの様に戦う訳には行かないし何より少女を守りながら戦うのはあまりに不利だ。

「キヤハハハ!!戦争だあゝ!!」

突然のロボットの乱入によって悲鳴が飛び交う中でヒートマンが興奮した様に叫ぶ。  
元よりトラブルメーカーの彼はこの状況を間違いない楽しんでる。

「あのロボットの狙いはバレードと一緒に逃げている小娘か」

周囲の状況から乱入者の狙いを察したエアーマンが片腕をバスターに変形させる。

パンクの方も非戦闘形態から何時もの凶悪な戦闘形態へと姿を変えていた。

「フォルテにアースはフィーネを頼む」

「・・・んな」

パンクにそう言われるや反論しようとするフォルテだが、彼自身が今は戦えない事を強く認識している事もあり舌打ちしつつもフィーネの腕を掴んでいた。

駆け出していくパンクとエアーマンを見送り、フィーネを間に居れる形で互いに視線を向けるアースとフォルテの間に微妙な空気が流れる。

「キャハハハ!! 足手纏いな二人はお留守番!! 頑張つてね!!」

炎を纏い空を飛んでいくヒートマンにフォルテとアースが何かを叫ぼうとしたが、それよりも早くヒートマンはその場を後にしていた。

「ガアアアアア!! 死ぬええええええ!!」

巨大な鎌を振るいながら進路上にある物を次々と切り伏せていくボーンダイン。

路上に停めてあった車があっさりと同断されてバラードの血相が青ざめる。

「なんて威力なんスか!!反則ツスよ」

原理は不明であるが金属製の鎌の切れ味は異常ともいえる程であった。

「うちのソードマンの剣も訳分からぬ原理で物が切れてるツスけど・・・」

古代遺跡で見つけたと言う剣を装備しているソードマンであるが、製作された年代を考えればなまくら同然の代物である筈の刀身には刃こぼれ一つ付いておらず現代の戦闘において用いられても何ら問題の無い切れ味を誇っているのをバラードは思い出す。

古代の超文明恐るべしと言うしか無いのだが、ポーンダインの鎌も同じ原理の代物なのかと不意に思ったのだ。

現実にはポーンダインの鎌にはあれだけの事をしておきながら刃こぼれ一つも無い。

「ちよつと変な所を触っているんじゃない・・・!!」

抱きかかえる少女が抗議の声を上げるがバラードは無視を決め込む。

「口閉じてろツス!!舌噛むツスよ」

バラードの言葉に少女が黙り込む。

何度目かの攻撃を回避された事で鎌による攻撃を諦めたかのように見える。

ボワアアアアア!!

代わりとばかりにポーンダインの口が大きく開かれる。

口腔内から垣間見えるのは脈打つ様に燃え盛る炎だ。

「インフェルノブレスウウ!!」

ボアアアアアアアアアア!!

吐き出される炎は直線状に延び、正面にある物を次々と飲み込んでいく。

真横に飛んで火炎を避けるバラードだが、辺りに延焼を始める炎に逃げ場を奪われてしまう。

「殺す……殺す!!」

バラードへの包囲網を形成する為か周囲に炎を撒き散らしジリジリと間合いを詰めていくボーンダイン。

「ぬくっ……!!」

呻くバラードの眼前でボーンダインが腰を落とす。

ガチャツツ!!

ボーンダインのボディの各所が開き両肩や腰部などに内蔵された銃口が一斉にバラードへと向けられる。

「貴様ら……これ以上、好き勝手には」

万事休すとなった段階で今更の様にロボットポリスや政府軍のロボット兵らが駆けつけてくる。

ボアアアアアアア!!

のだが次の瞬間にはボーンダインの放った火炎に飲み込まれてしまいあっさり全滅してしまう。

「役に立たねえ奴らツス・・・」

元より期待はしていないがこの状況にはバラードも落胆する。

ズンズンズンズンツツ!!

遠目に一体のメカザウルスがこちらに迫って来るのが見えるが距離からしてどうも間に合いそうにない。

「死ねえええええ!!」

殺意を露わにし再び銃口を向けるボーンダインにバラードが少女の楯とならんとする。

耐えられるかどうかは微妙だが、何もしないよりかはマシと言う判断からの行動だったのだが。

「エアースューター!!」

真横より放たれた猛烈な竜巻にボーンダインのバランスが崩れる。

ズガガガガガガガガツツ!!



バランスを崩した事で放たれるはずだった無数の銃弾はバラードの隣にあったシヨーウインドウを粉々に砕く事となる。

「ガアアア!! 邪魔を・・・」

ボーンダインが吠えるが続けざまにその身を弾丸に変形させたパンクが彼のボディを数メートルは吹き飛ばしていた。

ズウウウウウウウウウウ!!

大の字で路上に倒れ伏すボーンダインだが、ゆつくりとだが起き上がろうとする。

並のロボットであれば一撃で粉砕されてもおかしくないエアーマンとパンクの一撃を受けながらも、ボーンダインのボディには殆ど傷がっていない。

残っているとさえ言えればパンクがスクリューアタックを仕掛けた際に出来た僅かな凹みであろうか。

「兄貴・・・こいつ言うまでもないツスけど」

「例の謎の勢力に属する敵・・・だな」

バラードの言葉にパンクとエアーマンは油断する事無く身構える。

ボーンダインも唸り声を上げながら手にした鎌を大きく振るうと殺気を生じさせていたのだが。

ヒュンツツ!!ヒュンツツ!!

突如として飛び出してきた複数の輪にボーンダインの腕が絡み取られる。

「これ以上の破壊活動は許さんぞ!!」

無数のポリスロボ達を引き連れてその場に駆け付けたのはリングマンであった。

今回はあくまでもコサック博士らの護衛でこの場に居るのだが、非常事態と言う事もあり同僚達であるポリスロボを急遽従える形で現場に駆け付けていた。

リングマンとエアーマンらが視線を交わすのは一瞬の事、リングマンも現場での破壊行為を行っていたのはワイリーナンバーズではないと判断していた。

「リングマン」

ブチイイツツ!!

腕に絡みついた輪を強引に剥ぎ取りながらボーンダインが彼の名前を呟く。

不意にボーンダインがバレードではなく駆け付けた面々の方に振り返る。

今まで執拗にバレードと少女を攻撃したのが嘘であるかの様であった。

自身らに背を向ける敵にバレードらも呆気に取られる。

「殺す……殺す殺す!!皆殺しだああああああ!!」

「……!?!」

紡がれる呪詛の言葉に驚く暇など無い。

取って返すかの如く己らに襲い掛かるボーンダインにリングマンは困惑気にその顔

を歪めていた。

一方である。

式典を無事に終え要人達が宿泊先のホテルに戻って来た所でロック達は謎のロボットが暴れている事を知る。

彼らは当然の様にその場にいたライトナンバーズ共々、現場に向かわんとするのが。

ズガアアアアアンツツ!!

突如として降り注いだ無数のビームがタンクC S ーII型と数体のロボット兵を破壊する。

「ボーンダインめ．．．勝手に暴走しおつて。奴を援護するつもりは無いが．．．貴様を足止めといこうかロックマンよ」

ビームが去った後で数メートルはあろうかと言う巨体を持つロボットがホテルの前にある広場に降り立つ。

身に纏ったロープの隙間より垣間見えるのは不気味な目玉であった。

「誰だ!! てめえは．．．!!」

喧嘩つ早いカットマンがローリングカッターを構えるが、襲撃者であるアルゴスは慌

てる事無く広場の噴水に手を伸ばしていた。

「生まれ出よ・・・我が眷属よ」

自身の指の一部を切り離すやそれを噴水の水の中へと入れるアルゴス。

ブクブクブクブクブクツツ!!

突如として泡立った液体はまるで意識を持ったかのように球体の形となりそこより腕と足が生える。

「我が力たるデビルクリエイションの恐ろしき・・・とくと思い知れ」

無機質な声色であったが僅かに目を細めた事から、相手に感情と言う物があるのがロツクには分かった。

「ウツワアアアアツア!!」

咆哮を上げ警備に当たっていたメカザウルスがアルゴスらに襲い掛かろうとする。

政府軍に属するロボット兵らも同様だ。

「愚かな・・・平伏すが良い!!」

バチンツツ!!

何かが弾けた様な音がした様にしか殆どの者は感じなかったであろう。

ズウウウウンツツ!!

メカザウルスが突如として地面に倒れ伏したのに続き、単純な思考回路を持つロボツ

ト兵などが次々とその場に倒れ伏す。

辛うじてその場に立っていたのはロックを始めとするライトナンバーズら、複雑な思考回路を持つ者達だけだった。

「くっ……なんだ頭が痛い」

エレキマンが頭を抱えながら呻く。

ロックも同様に頭痛を覚えたが今の光景に見覚えがあった。

「これは……」

騒ぎを聞きつけホテルより飛び出していたライト博士がアルゴスの引き起こした現象に言葉を失う。

彼が手にしていた端末も異常を示し何も映さなくなっていた。

そして複雑な思考回路を持たない機械達が機能を停止すると言う今の状況にも似た現象には見覚えがある。

「ロック……これはランフアント遺跡群から発せられた電磁波による障害と同じものだ!!」

「ええ……分かっています。お前は……ラ・ムーンなのか?」

ライト博士の警告に領きながらロックは思い当たる存在の名前を口にする。

対してアルゴスも先程の様に目を細める。

もしも彼に顔があれば恐らくほくそ笑んでいたのだろう。

「半分は正解と言っておこうロックマン。我が名はアルゴス……ラ・ムーン様の従者にしてその意思を受け継ぐ存在である」

自らの名前をロック達に名乗りながらアルゴスは生み出した眷属を前に進ませる。

「ランフロント遺跡群での借りを返すとしようか……まあ覚悟するのだな」

「ブモモモオオオツツ!!」

水を素体にした眷属たるアクアデビルが声を上げる。

自身が放つ電磁波の影響下と言う事もあり、僅かに動きが鈍いロック達を見下ろすアルゴス。

「ブモモモモモモ!!」

次の瞬間、空中で弾け飛んだアクアデビルが無数の液体となってロック達に襲い掛かっていた。

## V O I 5 妄執の死神と暑苦しい男達

白で覆われた視界。

耳鳴りの様な音がしたと認識した瞬間、辺りは静寂が支配する。

次に視界が開けた時、目にしたのは何の事は無い地獄絵図であった。  
遅れて響く悲鳴に怒号。

人と機械が等しく倒れ伏す光景の中で機械の腕が伸びる。

己を『裏切り者』と罵る腕の主を払い除けたと思えば次に焼け焦げた腕が己に延びる。

そちらの方はそちらで己を『人殺し』と蔑む。

全てが己に怒りの矛先を向ける中で己に出来る事は何も無い。

強いて言うなれば戦う事だけであつたか。

自分にとってそれが全てなのだから。

「ガアアアアアア!!」

咆哮を上げるボーンディングが片膝を衝くリングマンを睨み据える。

一瞬の内にターゲットを彼に変え襲い掛かって来たボーンディング。

彼からすれば訳も分からず襲われた感が強いが、無抵抗な民間人を襲われるよりかはマシだと言えよう。

とは言え己を含めた戦闘用ロボット達の攻撃を受けても殆ど怯まない驚異的なタフネスぶりを誇るボーンダインにリングマン達は徐々に追い込まれる事となる。

「死ねええええ!!」

殺意を露わに全身に隠された銃口をリングマンに向けるボーンダイン。

ボーンダインに殴り飛ばされた直後と言う事もありすぐさには動けないリングマン。

「動くなよ!!」

側面よりエアーマンがそう叫ぶと同時に胴体のファンを回し始めるのが見えた。

ブオオオオオオオツツ!!

瞬時にして放出される猛烈な風はリングマンを大きく吹き飛ばす事となる。

結果としてボーンダインの銃撃をやり過ぎす事となり、ボーンダインが悔し気な声を上げたのが分かった。

「お前の相手はこっただけ物!!」

エアーマンの言葉に銃口を露出したままボーンダインが振り返る。

再び火を噴かんとした銃弾であつたがそれがエアーマンを貫く事は無かつた。

「リングマン警部を援護するのだ!!覚悟しろ狂ったロボットめ!!」



ロボット用の拳銃を片手にロボットポリスの面々が口々にボーンダインを遠目ではあるが包围したのと、上半身だけを回転させたボーンダインが銃弾を撃ち放ったのはほぼ同時であつた。

ズドドドドドドツツ!!

一瞬の内に銃弾に貫かれるロボットポリス達。

当然の如くボーンダインの放つ銃弾は普通の物ではなく殆ど機関銃のそれであり、機械であるロボットポリスすらも屠つていく。

大きく穴を開けたパトカーや後方にあるビルなどが抉られるのを見るにその威力が窺い知れよう。

(まともに当たれば我々すらも致命傷を負いかねんな)

パンクが内心で戦々恐々としたのは言うまでもない。

ボーンダインが放つた銃弾によってビルのガラスの破片が地上に降り注ぎ、眼下に居たであろう人々の悲鳴が響き渡る。

「貴様……!!」

リングマンが怒りを露わにリングブーメランを握り締める。

「全く……訳の分からん敵だ」

さしものエアーマンも思わず悪態を衝く他無い。

「・・・リングマン」

ぼそりと呟くボーンダインにパンクが横目で名前を呼ばれた当人を見る。

「知り合いか？」

「いや・・・あんな奴が我々コサックナンバーズに居る筈など無い」

パンクの問いにあっさりリングマンは否定をする。

その言葉にボーンダインの瞳の色が変わったように見えたのは気のせいか。

「ガアアアアアアア!!」

一転して咆哮を上げるボーンダインにリングマンら三人は身構える。

「エアーシューター!!」

ビュオオオオオオオツツ!!

エアーマンの放つ小型の竜巻を受け僅かにボーンダインの動きが止まる。

先程から見せる驚異的な耐久性を見るに殆ど有効打にならないのは承知済み。

側面より飛び出すリングマンの放ったリングブルーメランがボーンダインの腕や足に絡みつく。

臂力にも優れるボーンダインからすれば強引に引きちぎる事も可能ではあるが、即座には出来ない。

「スクリューアタック!!」

全身を弾丸に変形させたパンクが動きが止まったボーンダインの胴体部目掛けて体当たりを仕掛ける。

ズドオオオオンツツ!!

再び大の字に倒れるボーンダインにパンクが駄目押しとばかりにスクリユークラツシャーを空中より放つていく。

分厚いコンクリートの壁すらも簡単にぶち抜く一撃と追撃を受けてもボーンダインは立ち上がる。

その姿はまるで亡霊の様にも見えた。

パンクの一撃に大きく抉られた胸部からは大量のオイルが噴き出すが、ボーンダインの動きに些かの陰りは無い。

見れば徐々に傷口が閉じ始めているのを見て驚異的な耐久性の秘密を知ってしまう。

「自己再生か……」

「傷ついた傍から再生しているのであれば有効打にならないのも当然だな」

三人が思わず呻いたその時であった。

「ちよつと!!早く逃げなさいよ!!」

辺りに響く甲高い声にパンクは思わず頭を抱えていた。

理由は分からぬがボーンダインの標的となった少女はバラードに抱えられる形で十

数メートル先に居たのであった。

「バラード!!なんでその娘と一緒にここから離れんのだ!!」

思わずエアーマンが怒号を響かせるのは無理も無い。

「いや・・・だつてこいつがどんな奴か興味があつたから」

慌てて言い訳をするバラードだが全ては後の祭りか。

「そうだった。お前を殺すんだつた!!」

思い出したかのようにバラードら目掛けて走り出すボーンダイン。

少女が悲鳴を上げる中、バラードが慌てて動くが間に合う筈も無い。

ザンツツ!!

反射的に前に伸ばした腕が鎌の一撃であっさりと切断される。

それで悲鳴を上げるバラードではないが少女の方がまたしても悲鳴を響かせる。

「姫・・・お前を殺すのが俺に与えられた任務だ」

(・・・姫だつて?)

ボーンダインの言葉にバラードが目を見開くがそれ以上の思考は許されない。

バキツツ!!

無造作に殴り飛ばされバラードが昏倒する中、その腕を握り締めながらボーンダイン

がゆっくりと伸ばす。

眼前に迫る恐怖にもう悲鳴も上がらない。

反射的に身を屈める少女の下にリングマンらが駆け出そうとするが距離からして間に合わない。

大きく身を捻り叩き落とされる拳に誰もが最悪の光景を連想する他無い。

ズンツツ!!

拳が何かに食い込む生々しい音にパンクが舌打ちをする。

リングマンも一瞬目を伏せるのだが。

「・・・なに!？」

困惑気なボーンダインの声にその場にいた全員がハツとなる。

「・・・てめえ!!」

起き上がったバラードがボーンダインの突き出した腕を蹴り飛ばす。

辺りに噴き出すのは血の様なオイル。

オイルなのだから当然の如くそれは少女の物ではない。

「この馬鹿・・・護衛を引き受けたのであればさっさと現場から離れろ」

自身の短距離ワープを駆使し両者の間に割って入ったアースが吐血しながらバラードを叱責する。

ドを叱責する。

フォルテと共にフィーネの護衛を任されていた筈の彼女であったが、どう言う訳か

ボーンダインとの戦いの場に姿を現していた。

「貴様つつ!!」

パンクの体当たりがボーンダインの体を数メートル吹き飛ばす。

彼は倒れ伏すボーンダインを尻目にアースに慌てて駆け寄るのだが。

胸部に大穴を開けたアースの姿は非常に痛々しい。

一目で重傷と分かる傷を負いながらもアースの顔に浮かぶのは不敵な笑みだ。

「私がこの程度で死ぬと思ったか？」

咽込みながらも笑みを浮かべるアースはパンクが伸ばす腕を片手を上げながら制する。

どこまで身勝手な潔癖症だが、とりあえずは安心と判断したのかパンクはボーンダインへと向き直る。

「ぐうううう!!」

頭を抱えながら起き上がったボーンダイン。

竜頭の骸骨から怒りの念を瞳に宿す彼が手にした鎌を頭の上で旋回させ始める。

エアーマンとパンクが倒れ伏すアースらを守る様に身構え、リングマンも得物を手にする。

刹那、リングマンが携帯していた端末が鳴り響く。

くザザツツ……リ・グマ……聞こ……？私達……ホテルの近……も謎のロボットが……いるの。そ……の方はどうなって……>

それはカリンカからの通信であった。

この時のリングマンらは知る由も無いがアルゴスの放つ電磁波によつて通信は極めて不明瞭な雑音交じりな物であった。

だがその声の主が誰であるかは知る者が聞けばすぐに分かったであろう。

特に目の前の敵にとっては。

「その声、カリンカ……か？」

己に問う様に口を開いたボーンダインの声は氷の様に冷たく感情の響きを感じられなかった。

まるでコマ送りの様にゆっくりと竜頭がホテルの方向へと向く。

「そうか……だったら!!俺はああああ!!」

静けさが生じるのは僅かな時間であり再び獣の咆哮を上げたボーンダインがパンクらに背を向けホテルの方へと向かっていく。

「ま……待て!!まさかお前は……」

リングマンが声を出す間など無い。

あつと言う間に駆け出ししていくボーンダインを誰も止める事は出来なかった。

「・・・チツ」

去り行く敵の背を見据え舌打ちをするパンクは倒れ伏すアースとその傍らに居るバードと少女に目を向ける。

「私は大丈夫だ。それよりも奴を・・・」

アースの言葉にパンクとエアーマンは領きながら再び騒ぎが大きくなり始める場へと目を向ける。

一方、アルゴスと対峙するロック達と云えば。

「所詮は不完全な機械・・・その程度か？」

巨大な目を細めながらアルゴスがロック達を嘲る。

「くそ・・・体さえ満足に動けば」

分離したアクアデビルのパーツに上からの浴びせ倒しを食らい頭の炎が消失したファイヤーマンが呻く。

アルゴス自身の戦闘能力もさる事ながら彼が常時放つ電磁波はロック達の動きを大きく阻害する事となる。

かつてランフアント遺跡群を中心に発せられ、その範囲を地球全体に広げた際には人類をあわや滅亡寸前まで追い込んだのではと言われる電磁波。



それを限定的ながら己の周囲へと展開するアルゴスと彼が生み出したアクアデビルを前にロック達は苦戦を強いられる。

「ハイパーロックバスター!!」

スライディングでアルゴスの懐に潜り込んだロックが渾身のバスターを撃ち放つ。頭部の巨大な目に光弾が命中するがアルゴスの身は揺るがない。

「・・・効かないのか」

己の攻撃が通じず呻くロック。

かつてラ・ムーンが生み出した新イエローデビルやそのモデルとなったデビルシリーズには目玉を模したコアが弱点と言う特徴がある。

今のアルゴスのボディはイエローデビルなどのそれに比べると完全な人型ではあるが、ボディに巨大な目玉があると言う共通点を持つているだけにそこが弱点なのではと踏んだのだがそうでは無かった様だ。

「顔の目が弱点と思ったか?であれば残念であったな」

ほくそ笑みながらアルゴスは体の各所に無数の目を出現させる。

「このどれかが弱点かも知れんぞ。或いは全てがダメミーかも知れぬ・・・」

闇色の巨体を持つ巨人は囁く様に口を開いた後、全身の目より次々とビームを放ってくる。

一撃一撃がロックのチャージショットに匹敵する恐るべき攻撃だ。

「ブモモモモッツ!!」

回避に徹する他無いロックの視線の先で仲間達がアクアデビルと戦っているのが見える。

早々に戦闘不能となったファイヤーマンはさて置き、エレキマンなどが中心となり激突するも彼らの動きは電磁波の影響で精彩を欠いていた。

ポヨンポヨンッツ!!

無数の水の塊に変形したアクアデビルが次々とライトナインバースに襲い掛かる。

「ア・・・アイススラッシュャー!!」

飛び交う破片にアイスマンが氷の矢を吐き出し凍り付かせるが勢いは止まらずに逆にアイスマンを吹き飛ばしてしまふ。

「駄目だ・・・やっぱりコアを叩かないと」

吹き飛んだ先でボンバーマンに抱えられアイスマンが巨大な水の塊へと戻るアクアデビルを見る。

「てやんでい!!目玉が弱点なのは丸分かりだが・・・攻撃する暇がねえ」

「しかも元が水だから掴むことも出来ねえじゃねえか!!」

ボンバーマンとガッツマンが呻く。



ロックを見下ろす。

「全てはラ・ムーン様の為に……」

カッと目を見開かれた巨大な目玉にエネルギーが集まっていく。

電磁波の影響とダメージの重さから満足に動けない筈のロックであったが、絶望的な状況でありながらも彼は決して諦めない。

「気に入らんな……」

率直にアルゴスが彼の姿勢に対する感想を口にした時であった。

シュボボボボボボボボツツ!!

空より降り注ぐのは無数の火炎弾。

地面に着弾した火炎弾はその場で火柱を上げるやアルゴスの身を炎で包み込む。

「……むうっ?」

始めて漏れるアルゴスの狼狽した声。

先程まで目の前に居た筈のロックの姿が居なくなっていた事もアルゴスの困惑を深くしていく。

「キャハハハハ!!なんだか面白い事になってる〜?」

自身が発する炎をバーニア代わりに宙に浮かぶのはヒートマン。

彼はロックを足元に下ろすと屈託の無い笑みをアルゴスとアクアデビルに向ける。

「あく著作権違反ロボ。もしかしなくても君、ラ・ムーン関係でしょ？パンク達が戦ってる骨の顔したロボも君の仲間〜？」

「確かに我はラ・ムーン様の従者だが我は著作権違反ロボではない!!」

ヒートマンの言葉にアルゴスが激昂した様に声を荒げる。

「怒った〜キャハハハ!!」

唸るアルゴスを無視しながらヒートマンはその場でダウンしているファイヤーマンの下に駆け寄る。

「どうしたんだよ〜ファイヤ〜。もしかしなくてもアクアデビルに頭の火を消されたの？そんなんじや暑苦しい男の名前が泣くよ〜!!」

「ヒートか・・・フツ。俺の燃えパワーはすっからかんだ。今日はもう燃え尽きたぜ」

ヒートマンに肩を揺さぶられるもファイヤーマンは自嘲気味な笑みを浮かべ答える。

「ようし仕方が無いなく。おいでチャンキー!!」

ヒートマンがそう叫ぶなり彼のボディから火の玉が浮かび上がる。

ライターを模したボディの内部に潜んでいたチャンキーなる火の玉型ロボットを次々とファイヤーマンの頭部に乗せていくヒートマン。

「チャン〜!!」

「キー!!」

チャンキー達が高い声で鳴く中でヒートマンは端末を操作し、画面に映る画像をフアイヤーマンに見せつける。

「これうちの妹達。遂にワイリー軍団にも待望の女子が加入したんだよ〜」

端末に映し出されているのはファイネとレントの姿だ。

「今度フラツシユが来たら更衣室に侵入してもらおうと思ってるんだけど。とにかく見てよ特にレントの方を・・・ロールちゃんみたいなのも良いけどレントはちゃんとした女子なボデイなのさ」

「か・・・可愛い!!」

ボウツツ!!

ファイネとレントの姿を見たフアイヤーマンが喉を鳴らすと同時に頭部の炎が点火し始める。

「そろそろ夏だし。個人的にネプチューンの海の家に遊びに行こうと思ってるんだ〜。今はアースも居るし・・・なんならフアイヤーマンも一緒においでよ」

怪しい雰囲気醸し出すヒートマンとフアイヤーマンの姿にその場にいる全員が困惑気に見つめていた。

ガシツツ!!

「その節はお世話になるぞおお!!アイスマンとロールちゃんもついでに連れていけれ

ば燃えのパラダイスだああ!!」

ヒートマンの肩を掴みながらファイヤーマンが立ち上がる。

「うおおおお!!燃えてきたああああ!!」

チャンキーを頭部に乗せながら何時も以上の高さまで炎を立ち昇らせるファイヤーマン。

体感温度にして数度は上昇したと思わせるだけの暑苦しさを周囲にばら撒きながら彼はアルゴスに身構える。

ポオオオオオオオツツツ!!

「キヤハハハハ燃え燃え燃え!!」

ヒートマンが笑い声を上げる中でアルゴスは頭を抱える様に額に手を置いていた。

「なんなのだ……この星の不完全な機械は。訳が分からん……燃えとは一体?」

問う様に巨大な目玉をロツクらに向けるアルゴスだが、ロツク達はロツク達で乾いた笑みを浮かべる他無い。

数秒の間があつた後、思い出したかのようにアルゴスがその場で手を横に払う。

「ええい……這いずり回れ!!」

苛立った様に自身が放っていた電磁波の出力を上げるアルゴス。

先程よりも更に行動を抑制する電磁波にロツク達が膝を衝きそうになる。

そんな状況の中でヒートマンとファイヤーマンは笑みを浮かべて立っていた。

「なんだと・・・私の電磁波が効かんのか？」

「ランファント遺跡群の件もあって同じ事を政府軍にされるといけないから、僕達ワイリー軍団にはこの手の電磁波に対するコーティングがされてるんだよ。だから効かないのさ。」

驚愕するアルゴスにヒートマンが指を突き付け勝ち誇る。

「ぬう・・・貴様はともかくそつちは何故？」

「今の俺にそんなやわな電磁波は効かん。今の俺は燃えているのだからな!!もつと熱くなれよおお!!」

問いかけるアルゴスに回答にならない言葉で答えるファイヤーマン。

元より理解する気も無いが出来れば付き合いたくないとアルゴスは率直に思った。

「行くよファイヤーマン。著作権違反ロボ達を気合と燃えくさな炎で吹き飛ばすよ」

「了解だヒートオオオオ!!」

ヒートマンの囁きにカツと目を見開くファイヤーマンであったが、そんな二人にアクアデビルの巨体がのしかかる。

先程、戦闘不能になった一撃を再度食らう形となったファイヤーマンもそうだが、元が水と言う事もあって膨大な質量を持つアクアデビルはその重さだけでも十分な威力



を持つ。

如何にヒートマンでもダメージは免れない。

誰もがそう思った時だった。

ボコボコボコボコツツ!!

アクアデビルの全身が大きく脈打つ。

「ブモツツ!!」

驚いたように声を上げるアクアデビルであつたが、次の瞬間には無数の蒸気と共に体の半身が弾け飛ぶ。

「キャハハハ!! そんな水で僕達の炎は消せないよ!!」

「その通りだ!! あああああ!! 燃えてきたああああ!!」

アクアデビルのボディを構成する水は二人の炎による急激な温度上昇に耐える事が出来ずに蒸発し、一種の水蒸気爆発を引き起こしたのだ。

力なく倒れ伏すアクアデビルの姿にヒートマンとファイヤーマンが間髪入れずに動く。

「キャハハ!! アタック〜チャ〜ンスツツ!!」

「トコトン熱くなれよおお!! ファイヤアアア!!」

全身に炎を纏ったヒートマンが飛び上がる中、ファイヤーマンが両腕に炎を集め始め

る。

「あ、ボンバーマン!!ファイヤーマンに燃料宜しく!!」

「合点、了解だつてんだ!!」

ヒートマンに促されファイヤーマンにハイパーボムを投げ放つボンバーマン。

「パーズツツ!!」

それをファイヤーマンが足で蹴り宙に居るヒートマンに受け渡す。

ハイパーボムを受け取ったヒートマンの瞳とボディを慌てて再生させるアクアデビルの視線が交差する。

「今!!必殺のおおおお!!」

ドガアアアアアツツ!!

ハイパーボムの爆風を加速用の燃料代わりに宙を舞うヒートマンとファイヤーマンの放ったファイヤーストームが絡み合う。

「燃えくな炎の二重奏!!ハイパーアトミックストームアタック!!」

自らを炎の砲弾へと変えたヒートマンの一撃はアクアデビルのコアを一撃で溶解させそのまま破壊していた。

「ブモモオオオ!!」

コアを失いたただの水へと戻ったアクアデビルの残骸が辺りに降り注ぐ中、ヒートマン

が不敵な笑みと共にアルゴスを睨み据える。

「おのれ……ワイリー軍団。不完全な機械の分際で」

悔し気に巨大な拳を握り締めるアルゴスの目には先程まで満足に動けなくなった筈のロック達が自身へと迫る姿が映る。

当然だがアルゴスが電磁波の出力を下げた訳ではない。

訳では無いのだがロック達の動きに機敏さが戻りつつあるのを確認し、内心で動揺を示していた。

（何故だ……私の放つ電磁波の中では奴らはまともに動く事さえ出来ない筈だ。電磁波への対策を施しているヒートマンやその暑苦しい馬鹿はともかく……どういう事だ？）

不可思議な現象に首を傾げる間など無い。

ザンツツ!!

己の片腕がローリングカッターに僅かに裂かれた事を認識したアルゴスの顔面にエレキマンのサンダービームが直撃する。

「ぬ……うっ!?!」

並のロボットであれば一撃で致命傷となるエレキマンの電撃を受けたアルゴスの身が僅かに後方に引き下がる。

「ド派手な反撃の狼煙でえ!!ハイパーボムツツ!!」

ドガアアアンツツ!!

ボンバーマンが投げ放った爆弾がアルゴスの全身を包み込む。

サンダービームもそうだがハイパーボムをまともに受けながら致命傷にならないアルゴスにエレキマンとボンバーマンが内心で舌を巻く。

「・・・おのれっっ!!」

苛立ったような声を上げたアルゴスが見たのは自身に向けてバスターを構えるロツクの姿。

バシユウウツツツツ!!

放たれた光弾を前に小さく舌打ちをするアルゴス。

ピキイイイツツ!!

ロツクの一撃が自身に炸裂する瞬間にアルゴスは全身を硬化させ防ぎきる。

そして次の瞬間には全身を液化させてロツク達との距離を取るのであった。

「あれは・・・」

「・・・液体金属か」

全身を硬化させたのも一瞬の事ですぐさに液状のボディへと変わるアルゴスにロツクとエレキマンが驚く。

「一部のロボットのボディに利用はされているがボディ全体を液体金属で構成出来たなんて話はまだ聞いた事が無い」

そう話すエレキマンの言葉通り、現在では液体金属は未だに開発途上の技術である。以前にあつたワイリーの世界征服計画でボディの一部を液体金属で構成されるダークマンが、ブルースの姿に偽装する事が出来たがその機能は極めて限定的である。

「柔らかき生物の尺度で物事を図ってもらっては困るのだよ」

自らを誇る様に胸を張るアルゴスだが彼は構えを解くや先程まで放っていた電磁波を止めてしまう。

それと同時にロック達の体も軽くなるのだが、彼らは困惑した様にアルゴスを見つめる。

「頃合いか・・・目標は達成出来なかったが我らの力を見せつけると言う目標は・・・」  
要人を殺傷すると言う目的はこれだけの騒ぎを起こしてしまつた事もあり、殆ど不可能に近いと判断したアルゴスがその場から去ろうとした時であつた。

「ガアアアアアア!!」

進路上にあつたパトカーや装甲車を薙ぎ倒しながらその場に姿を現すのはボーンダイン。

突然の新手の登場にロック達は動く事が出来ずに啞然となる。

「殺す殺す殺してやあああるううう!!」

不意を衝く形でホテルの中に飛び込むボーンダイン。

けたたましいガラスの破砕音と共にボーンダインが内部へと侵入して来た事でホテル内に避難していた人々の悲鳴が上がる。

「なに・・・ええいボーンダインめ。勝手な事を・・・!!」

暴走する仲間にアルゴスが舌打ちをするが時既に遅し。

「て・・・てめえ何者だYO〜!」

「オイルマン!!とにかく一秒でも奴の足を止めるよ!!」

万が一の事を想定しホテル内で待機していたオイルマンとタイムマン。

驚きのあまり初動が遅れたオイルマンと違いタイムマンは即座にボーンダインの眼前に立ち塞がる。

「ガアアアア!!」

雄叫びを上げ巨大な鎌を振り回すボーンダイン。

その一撃がタイムマンのボディを切り裂いたように見えた事で避難していた何人かが思わず声を上げる。

だがボーンダインが切り裂いたのはタイムマンの残した残像であった。

ガキッツ!!

「ボーンダインの肩口に時計の針を模したエネルギー弾であるタイムショットが命中する。」

「僕を切るにはあまりに遅い」

次に瞬間移動したかの様にボーンダインの背後を取ったタイムマンが余裕の笑みを浮かべる。

ガキんツツ!!

続けざまに背後にタイムショットを受けるボーンダインだが、僅かに怯むのみでダメージを与えられた様子は無い。

元々時間操作の研究を行う為に試験的な時間操作ユニットを搭載したタイムマンは他のライトナンバーズ同様に完全な戦闘用ではない。

攻撃能力が皆無と言う訳では無いがやはりと言うか火力不足な面は否めない。

この辺りは彼の上位互換とも言えるフラッシュマンにも言える事なのだが余談であらう。

「邪魔をするなあああ!!」

上半身だけを後ろに振り向かせタイムマンを睨み据えるボーンダインだが。

「余所見は危険だYO〜!!」

その彼の後頭部に足元にオイルを纏い勢いよく飛び上がったオイルマンが激突する。

「ぐおおおおお!!」

呻き声を上げながら地面へと倒れ伏すボーンダインにオイルマンが親指を立てる。

「どうだ。俺っちの実力を見たか!!」

「僕だけでも出来ました。数秒だけ早くなった事は認めて上げます」

自身の足をオイルで覆う事で高速移動を可能とするオイルスライダー。

勢いをつけての体当たりはかなりの質量を持ち、見ての通りボーンダインなどの様な敵であってもダウンさせる事が可能なだけの攻撃力を持つ。

「ボーンダイン。撤退するぞ!!」

余裕を見せていた彼ら二人もロック達よりも早くアルゴスがホテル内に入って来た事もあつて慌てて身構える。

だが彼の言葉を見るにボーンダインを連れ戻しに来た様だが。

「どこだ?カリンカ・・・どこに居る?あれが居るんだつたらコサツクも居るのか?どこだ・・・どこに居るう?」

オイルマンの一撃を受けても尚、手傷を負った様子も無く周囲を見渡すボーンダイン。

白骨化した竜の仮面の向こう側に光る瞳は不気味な色を宿していた。

「博士はロールちゃんと一緒には奥の方に・・・つて!?!」



騒ぎを聞きつけて出てきそうになるライト博士に大声で下がる様に言うオイルマンだったが。

「ロール？あの小娘が居るとなれば・・・」

ボーンダインの言葉に不用意に声を上げてしまった事をオイルマンは後悔する。

敵の狙いは分からないがライト博士や来賓の面々が傷つく事だけは絶対に避けねばならない。

「ド・・・ドロップオイル!!」

慌てて片腕からオイルの塊を発射するが、それによってボーンダインの動きが止まる事は無い。

「ん・・・こうなったら今一度のオイルスライダーだYOKU!!」

満足な助走はつけられなかったが壁に向かって反転しつつ迫り来るボーンダインに向かつてオイルマンが突貫する。

勢いや質量の差から負けは明らかだが多少の時間は稼げるとオイルマンなりの判断をしたのだが。

ギロリツツ!!

振り返ったボーンダインの視線がオイルマンを真っ直ぐに見据える。

ゾクリと背筋が凍るのを感じながらもオイルマンは怯む事無く地面を滑る。

先程同様に頭部狙いでオイルマンが跳躍した時だった。  
カコンツツ!!

ボーンダインの体の各所が弾け飛ぶ。

一見すると無機質な骨を思わせるパーツは電磁波を帯びると瞬時にバリアーを形成する。

「スカルバリアー・・・デベロツパー!!」

（スカルバリアーだと・・・？）

電磁結界を創り出しオイルマンの突貫を防ぎ切るボーンダインに遠目でそれを見たコサツクが目を見開く。

バチンツツ!!

オイルスライダーを無力化した上である。

耳を劈く音が発生したと思った瞬間、オイルマンの全身が後方に弾き飛ばされる。

「な・・・オイル!!」

倒れ伏した慌ててタイムマンが駆け寄るがオイルマンは目を見開いたまま身動き一つしない。

（傷は浅い・・・にも拘らずオイルを一撃を昏倒させるとは）

タイムマンやそれをまともに受けたオイルマンとしては未知の攻撃であったが、ボ-

ンダインが放ったのはアルゴスが放っていた電磁波を指向性にした物である。

自身を中心にはなく直線的な射程を持つそれは、単純な威力で言えばアルゴスよりも強くそれを至近距離で受けたオイルマンは完全に気を失っていた。

「例え数秒でも・・・!!」

タイムスローを使いボンダインに立ち塞がるタイムマンだったが現実是非情だ。

バキツツ!!

「タ・・・タイムマンツツ!!」

一瞬で殴り飛ばされ壁に叩きつけられるタイムマンの姿にロールが悲痛な声を上げて彼へ駆け寄る。

「ここに来ては・・・」

タイムマンが逃げる様に促すもロールは首を真横に降り、タイムマンを抱きかかえる。とボンダインを気丈にも睨み据える。

「折角の式典なのにこんな事をしてアンタ、どこのロボットか知らないけど最低よ!!」

強気な彼女らしい啖呵の切り方であったが、その言葉にボンダインの目の色が変わる。

「最低・・・だとおお!!」

逆上した様に声を唸り上げるボンダイン。

「ええい・・・ボーンダイ。命令が聞けんのかこの失敗作め!!」

今にもロールに襲い掛からんとしたボーンダイだが、自身の背から掛かる暴言に今度はアルゴスの方を振り返る。

「俺は失敗作じゃない!!」

「だったら私の命令を聞け不完全な機械よ・・・」

「不完全だと・・・!!」

アルゴスの言葉にボーンダイが反論をする様に声を荒げる。

暫しの押し問答を繰り返すアルゴスとボーンダイ。

「・・・ロールちゃん早くこっちに」

避難している人々の中からカリンカが顔を出しロールの下に駆け寄ったのと、ボーンダイがそれに気づいたのはほぼ同時であった。

「カリンカ?」

彼女の名前を口にするや手にした鎌を大きく振り上げるボーンダイ。

「カアアアアアアリンカアアアア!!」

悲鳴など上げる暇も無いしそもそも反応すら出来ない。

反射的にロールがカリンカの楯になろうとするが、車すらも軽々と両断する鎌の威力を前にしては殆ど役に立たないだろう。

二人の少女が目を閉じたのと鎌が振り下ろされたのはほぼ同時であった。音も聞こえないし感覚も無い。

死ぬと言うのはこう言う事なのかとカリンカが思った時だった。

「フフ・・・困るなこの小娘共にはまだ価値がある。ましてここで死ぬべきではない」  
誰かの声が聞こえた事もあり薄っすらと目を開けるカリンカとロール。

彼女らが見たのはボーンダインの鎌を光の刃で受け止める謎のロボットの姿。

「ヴォイドオオオ・・・俺の邪魔をするな!!」

「小娘共はターゲットに入っていない。それに撤退命令が出ているのだ。それに従え」  
ヴォイドと呼ばれたロボットは横目で起き上がっていたタイムマンに合図を送るや自身は手にした刃を背後に弾きボーンダインを大きく仰け反らせる。

続きざまの回し蹴りを受けボーンダインのボディが大きく後ろに吹き飛ばされる。

その間、ヴォイドに促される形でタイムスローを作動させたタイムマンが二人を抱えその場から離れる。

「ぐおおおおお!!」

「アルゴス。ボーンダインを捕縛して退くぞ」

「分かっている!!」

呻き声を上げるボーンダインに覆い被さるのは液状にその身を変えたアルゴス。

強引にボーンダインを拘束するやアルゴスは彼共々、その場より姿を掻き消す。

「・・・遅いぞ」

ボーンダインが居なくなつた事を確認しヴォイドはビームセーバーの柄を懐に収める。

ぼそりと誰にも聞こえぬ声でその場に駆け付けたロックを見据えるヴォイド。

「・・・君は」

「今はその時ではないと言っておこう。また会おう・・・我が宿敵よ」

その彼も捨て台詞を吐きつつその場から消え去つた事でロック達だけが残される事となる。

「ぬう・・・遅かつたか」

後から駆け付けて来たエアーマンとパンクにリングマンが息をせき切つて周囲を見渡すが、言うまでも無く後の祭りであつた。

「ようし・・・お前ら。協力してもらつて本当に悪いんだが・・・ちよいと事情を説明してくれないかな?」

襲撃者が去つた事で別の意味で騒がしくなる中、パンクに遅れてファイネを連れたフォルテや負傷したアースまでが集まつた所で、この街に居る刑事のジョージックエスターがロボットポリスや政府軍のロボと共に話しかけてくる。

「言っておくがこれは……」

我々の作業ではないなどと言う言い訳など通用する筈が無く、パンクらに突き付けられるのは、無数の銃口であった。

更にはロツク達ライトナンバーズにリングマンなども居る事もあり、数の上では圧倒的に不利な。パンク達は溜息を吐きつつその手を上げるしかない。

「おい……この娘だけには手荒な真似はするなよ」

手際良く己らの手に拘束具が巻き付けられていく中で、パンクが不安そうな顔となる。フィーネとロボットポリスを交互に見据え口を開く。

幸いな事にその辺の空気を察知したのか、ロールがフィーネを招き寄せると、近寄ろうとしたロボットポリスを一睨みで追い払っていた。

「うう……おにいちゃん」

「大丈夫よフィーネちゃん。多分事情聴取だけで済むと思うから」

今にも泣きそうになるフィーネをロールが微笑みながら宥めようとする。

「貴様ら……私に触るな!!」

その中で一番騒ぐのはフォルテでは無く潔癖症のアースだ。

エアーマンが落ち着く様に促すも元来の悪癖もあり、数人がかりで抑え込まれる事となるアース。

彼女も彼女で無駄な抵抗である事は理解しているのだが、頭では分かっているでも黙っていられないらしい。

漸くその手に拘束具が嵌められたと思つた瞬間、小さく呻いたアースの頭が大きく前後に揺れる。

「おい・・・アース!!」

その場に文字通り崩れ落ちるアースにパンクが叫ぶが拘束具に動きを制限された事もあり駆け寄る事が出来ない。

フォルテも含めた他の面々も彼女の名前を呼ぶのだが、彼女がその声に応える事は無かった。



## V O I 6 行方知れずなモノ

「だから我々は・・・」

「無関係だ?!? ああそうだな。大体がそう言うけどなあああ!! 我らの姫に似た少女とお前達の弟が一緒にいたと言う情報があるのだ!! 姫の居場所を教えてもらおうか?」

取調室にて淡々と自身らの事情を説明するエアーマンに顔が引つ付きそうなくらいに密着して声を荒げるのはナイトマンだ。

と言うか警察の事情聴取も早々に終わったにも拘わらず今度は行方不明になった要人の件でナイトマンから取り調べを受ける事となる。

「キャハハハ!! カツ井頂戴」

どこまでも自分のペースを崩さないヒートマンに呆れつつもエアーマンはナイトマンの追及に首を横に振り続ける。

「とにかくお嬢様達が無事で何よりでした」

刑事のジョージと共にワイリーナンバーズの取り調べを終えたリングマンは自身を待っていたコサツクに声を掛ける。

因みに現在カリンカはライト博士らと共に研究所の方に出向いている。

ある意味で彼女が居なくて幸いであったと言えようか。

咳払いをしつつリングマンはコサックに目を向ける。

「あのボーンダインと言うロボットですが……私の名前を口にしました。聞けばお嬢様の名前も叫んでいたとか」

「……」

リングマンの言葉にコサック博士は驚く事も無く無言であった。

「私の記憶違いでなければ我々コサックナンバーズにあんなロボットは存在しません。ですがボーンダインに酷似した特性を持つロボットの事は知っています」

「……リングマン」

追及を制する様にコサックが口を開くがそこで黙る彼ではない。

「私が博士達の護衛の為に研究所に戻った際、奴の姿はカプセルの中には無かった。奴は……今、どこに居るのですか？」

リングマンの追及にコサックは僅かに視線を上にしつつ溜息を吐いていた。

「彼はとある人物からの依頼である場所に派遣されている。詳しい場所やその人物の事は私の口から言う事は出来ない」

コサックの言葉にリングマンは唸る。

不満げな顔をする彼にコサックは『分かってくれ』と言うかの様にその肩に手を置く。

「彼とボーンダインの関連を疑う気持ちは分かる。恐らくは何らかの形で私の研究が悪用されたと見るべきだろう。ともあれ・・・ご苦労だった」

そう笑みを浮かべ自身に背を向けるコサツクの背中はどこか寂しそうだった。

流石にこれ以上は追及を続ける事は出来ずにリングマンも己の任務に戻る他無い。

「つまりは・・・パンク達は式典襲撃の件で事情聴取を受ける為に拘束されたと」

テレビを見て慌てて出撃したエンカー達だったが、距離的に間に合う筈も無く途上で一人の少女と共に居たバラードと合流し基地へと戻って来る事となった。

「まあ普通に考えてアタシ達の仕事って考えるわよね」

ネプチューンが溜息を吐く中、バラードがその場にいる面々に頭を下げる。

「済まねえツス。結果的にパンクの兄貴達を見捨てる事になったツス」

コンセプト的にプロトタイプと言う事もありフォルテに似ている性格のバラードだが、自分の非は認められる分はまだ大人だ。

もしもフォルテの場合は逆切れしていただろう。

ともあれ理由は不明だが見知らぬ少女と共に基地へと帰って来たバラードにワイリーが気だるそうに目を向ける。

ここ数日は整備室に籠りきりであった事もあり、ワイリー自身の疲労は限界に近い。

恐らくはバラードの報告を聞いた後で爆睡モードとなるだろう。

因みに爆睡モードとなったワイリーは最低でも三日は起きないと言われるぐらいに寝る。

「……でその小娘は誰じゃ？」

何時も以上に面倒臭げな顔でワイリーが少女を見据える。

対して少女は僅かに目を吊り上げバラードの背に隠れる様に身構える。

「ええと……名前ってなんスか？」

今の今まで名前も知らずに居たのかとエンカーらが呆れたのはさておき、自身に振られた少女は表情を強張らせる。

「わ……私の名前は」

自身の名前を名乗ろうとして目を泳がせる少女を見て誰もが悟ったであろう。

絶対に本名を言う気は無いだろうと。

だがたまたま二人のアストロマンがオドオドしながら見ていたテレビが回答を示してしまう。

因みにと言うか何故アストロマンが二人いるのかと言うと分身や立体映像の類ではなく、片方が悪のエネルギーを巡つての戦いの際に用いられたオリジナルでもう一人の方はキング事件の際に残されたデータを用いて生み出されたコピーである。

正直な所、生みの親のワイリーですらも見分けはつかない。

元より臆病な性格も原因なのだが何かあるとすぐに異空間に逃げ込んでしまう事もあって、ワイリーナンバーズの面々がアストロマンが二人居る事に気づいたのはキング事件から半年以上経った頃なのだから笑う他無い。

コピーされて生み出された方もオリジナルに変わらず臆病で基本的に人畜無害な性格である事もあって、オリジナル同様にあっさりワイリー軍団に迎え入れられている。

一度アストロマンらに自分の同型機が居てどうなのかと聞いたが『今まで基本的に一人だったので仲間が出来て嬉しい』との事だ。

まあ本人達がそれで良いのなら良いのだろう。

「・・・んんっ!？」

ワイリーが声を上げながらテレビの方に鋭い視線を向けたのでアストロマン達がビクリと背を震わせる。

謎のロボットの襲撃事件に関連して予定されていたカンパネラ公国のプライドⅡカンパネラ公女の会見が中止となりました。報道官によるとあくまでも安全の都合上とされていますが詳細は不明です。尚、今回の襲撃による被害は・・・>

テレビの画面にでかでかと映る少女の顔とブラードの背に隠れる少女は言うまでも

無く瓜二つであった。

「ははくん。こりやワシにも分かるぞ。理由は知らぬがお主がああ公王の娘か……」

ピクリピクリと眉を動かしながら底意地の悪い笑みを浮かべるワイリー。

「悪い事は言わん。自分の足で大使館なりあのホテルに帰れ。ワシらはお主の事は知らんしお主もワシの事は知らん。これで万事解決じゃの……」

高笑いをするワイリーだがバラードの背に隠れる少女がそれに従う筈も無く。

「バラード。お主が拾って来たんだからお主が返して来い。これは命令じゃ……」

「あ、いや博士。色々事情があるみたいだし」

「そこらの猫や犬ぐらいなら構わんがこの娘に何かがあつたらワシは無用な事で欧州の国々を敵に回す事になる。今はそれは避けたいんじゃないや……分かるな？」

少女ことプライドⅡカンパネラを庇おうとするバラードに笑みを浮かべていたワイリーの顔からすうつと表情が消える。

蓄積された疲労もあるのだろうが普段は喜怒哀楽が激しいワイリーから表情が消えると言う事は、冗談抜きで激怒していると言う事になる。

暫しの沈黙の後、ワイリーがわざとらしく手を叩く。

「シャドー!! シャドーはおるか!?!」

「ハッ……ハハハ」

ワイリーの呼びかけに彼の足元から姿を現すのはシャドーマンである。

「この小娘を元居た場所に送り返せ!! 多少手荒にしても構わん!!」

「・・・御意」

主の命令を受けシャドーマンがゆっくりとバラードに歩み寄る。

「ちよつと博士にシャドー。俺の話を聞いて欲しいッス」

「博士の命令にごさるよ。手前はそれに従うのみ・・・」

後ずさるバラードにシャドーマンが徐々に間合いを詰めていく中で後ろの方から大きな欠伸が聞こえる。

苛立った様にワイリーが振り返る中で当の本人は平気な顔をしていたものだった。

「何か騒ぎになっていいると思つたらこんな女の子の身柄の一つで揉めるだなんて。伯父様やワイリー軍団の名前が泣くんじゃなくって?」

姪であるエストの言葉に鋭い視線を向けるワイリー。

普通であればこの時点で黙り込むだろうがエストの方は分厚い眼鏡を光らせ不敵に笑うだけだ。

やっぱりと言うか彼女も彼女で図太い。

「伯父様は悪の天才科学者。欧州どころか世界中を敵に回す野望の男と聞いていたのに正直失望よ。まさかここまでビビリだなんて」

言葉通り呆れた様子で息を吐くエストにワイリーが肩を震わせる。

「伯父様は女の子一人の身柄すら預ける事が出来ない程、器の小さい男でしたの？」

「なんじゃとー！ー！ー！！貴様！！」

エストの挑発とも取れる言葉に顔を真っ赤にして声を上げるワイリー。

「このワシを悪の天才科学者たるDr. ワイリーを侮るでないわ！！良いじゃろう！！小娘の一人や二人、ワシの下で預かってやるわい！！」

そう言ったもののすぐに乗せられたと顔をしかめるワイリーだったが言ってしまった以上仕方が無い。

シャドーマンもワイリーの発言を受け確認する様に振り返って来た事もあり、ワイリーは舌打ちをしつつ手を払う。

主の命令もあってシャドーマンも下がった事でバレードがホツとした様に息を吐いていた。

暫しの間、唸り続けていたワイリーであったが矢継ぎ早に着信音を響かせる端末を苛立った様にして取っていた。

「・・・ワシじゃ」

自身の不機嫌さを隠そうとせずにワイリーは端末に向かって口を開く。

通信相手からの話を聞くワイリーの顔が先程以上に険しくなっていくのが分かる。



「・・・分かった。報告ご苦労じやった。ちよつとワシは今から出かける!! とりあえずお主らはその小娘の部屋の準備でもしておけい!!」

そうとだけ言うど踵を返しどこかへ行つてしまふワイリーに誰もが首を傾げるのであつた。

その頃である。

ライト研究所では普段であれば決して生じないであろう重たい空気が場を支配していた。

原因の一つは不機嫌な顔をしたままその場に佇むフォルテのせいだろう。

どちらにせよ騒ぎになると言う事もあつて事情聴取を受ける事が無かつた彼だが、成り行きもあり宿敵の住む場所に来てしまつたのだから不機嫌極まりない。

「ええと・・・どうぞ?」

「・・・いらん」

苦笑いを浮かべコーヒーの入つたマグカップを渡すロックにフンと鼻を鳴らすフォルテ。

だつたらもう帰つても良いんじゃないかと思うのだが、それはそれで気に食わないらしい。

どこまでも素直ではない弟に呆れつつパンクが出されたコーヒを口に含む。

「あ……あのパンクお兄ちゃんにフォルテお兄ちゃん。アースお姉ちゃん大丈夫かな？」  
不安げな顔で両者を見るフィーネ。

彼女は先程からライト博士が入っていた一室の扉を見続けていた。

拘束された際に突然意識を失ったアース。

事の重大性を察したライト博士は彼女への拘束を止めさせ、すぐさま自身の研究所へと彼女を運び込んでいた。

パンクにフォルテ、フィーネはその付き添いとしてこの場に留まっているのだが。

原因はいちいち考えるまでも無いだろう。

ボーンダインが放った拳を体で受け止めた際に動力炉に損傷を負ったのだ。

普通に考えて致命傷なのだが、瘦せ我慢なのかアースは倒れる直前までその辺りを表に出す事は無かった。

拘束された際に限界を訪れたのはたまたま偶然であつたが、ライト博士の目の前で意識を失つたのは不幸中の幸いであつたと言えよう。

「心配だろうが任せる他あるまい。トーマスとライトは我らのワイリー様に並び称される科学者だ。間違つても悪い様にはならんさ」

不安げなフィーネを宥める様に口を開くパンクにロールも笑顔を向けてくる。

「当たり前でしょ。ライト博士はロボット工学の父って呼ばれてるんだから。それにカリンカちゃんも手伝いに入っているし……」

研究所の作業場となっている一室にはライト博士に自称助手のライトットに今回はカリンカも加わっている。

父であるコサックと同じくロボット工学を学ぶ彼女が自ら志願してアースの修理を手伝っている。

「フン……どうだかな」

両手を組みながらフォルテが悪態を衝く。

「あの女は地球外の文明が生み出したロボットだ。そもそも俺らと違ってどうやって動いているのか詳しい理屈や原理も分かつちやいない。あの糞ジジイですら辛うじて運用を可能している代物をお前らの所のが修理できるとは到底思えねえがな」

「ちよつとくうちの博士がワイリーよりも腕が悪いつて言うの!」

「人間的には問題点は多いがお前らの所よりは糞ジジイの方が上だろ? 安全第一が motto のそちらに比べればな」

生みの親の悪口にロールが即座に噛みつく。

フォルテもフォルテで言葉で返し二人は互いに睨み合いを始める。

一応と言うべきかフォルテもフォルテでワイリーの才能は認めていると言うべきか。

「・・・子供か」

呆れた様に口を開くパンクに今度は二人が睨んでくるので彼は溜息を吐きつつ大きく首を横に振っていた。

「あ、カリンカちゃん」

長時間の作業になったので一旦休憩する様に言われたのかカリンカが作業服姿のまま出て来る。

ロールに渡された飲み物を口にしながら、カリンカはパンク達を見る。

「あの・・・聞きたいんだけど。アースの・・・彼女のボディってどうなってるの?」

以前にも聞いた事がある台詞だと思いつつながらパンクはカリンカやロック達にルーラーズの事を簡潔に説明する。

因みに修理作業を行う直前に一時的に意識を取り戻したアースは、何時もの悪癖でライット博士に拳をお見舞いしたそうなのだがライット博士が宥められ大人しくなったそう  
だ。

アースに殴られれば普通の人間であればただでは済まないのだがこの辺りは人格者であるライット博士のなせる業か。

余談だがワイリーの場合は有無を言わさぬ空気を発し、逆に相手の方が抵抗する気を無くさせる状態にするタイプだ。

「まあ言うなれば古代の遺跡を元通りに修復しろと言っている様な物だ。流石にワイリー様でも完璧にルーラーズを直すのは無理だろうな」

簡潔なパンクの説明にフォルテが鼻を鳴らす。

ライト博士の力ではアースを修復するのは無理だと言わんばかりだ。

場に気まずい空気が生じる中、カリンカが咳払いをしつつ作業の手伝いに戻ろうとした時であった。

ガタンツツ!!

ノックもせずに開け放たれる研究所の扉。

挨拶すら無く大股で入って来る人物の姿にロック達も言葉を失う。

「あ・・・あんた!!ワイリーじゃないの!?!」

驚く様な声で自身の名前を呼ぶロールに悪の天才科学者は眉をピクリと動かすのみで返答はしない。

「ライト達は作業場じゃな?」

ロールを無視する形でパンクらに問うワイリー。

何故ここにと言うかその辺の諸々の疑問を抱く暇も無くパンクが頷いたのを見るや、慣れた足取りでワイリーはライト博士の居る作業場に入って行くこうとする。

「コサツクの娘、お主も手伝え・・・これは少々骨が折れるぞい」

通り過ぎざまにカリンカにそう声を掛けてそのまま作業場に消えるワイリーに一同は茫然とする他無い。

まるで嵐が過ぎ去ったとしか言いようがない瞬間だったが、この辺の他者の反応にいちいち歯牙を掛けない辺りはワイリーが天才と称するが由縁と言えよう。

「わ・・・私、ライト博士達を見て来るわね」

慌てる様にかリンカは作業場へと戻っていく。

残されたロックやパンク達は互いに顔を見合わせ苦笑いをする他無い。

「うくん・・・なんて言うか」

「糞ジジイらしいな」

ロックの言葉を受けてフォルテが呆れた様に口を開き、両者は口元を緩める他無い。

慌ててワイリーの後を追ったカリンカであったが、あのワイリーが作業場に入つて来たと言うのにライト博士は驚く事も無くすぐさまに修復作業を再開していた。

「な・・・なんなんダスか？」

口を開けたままのライトットだったがギロリと眼光鋭くワイリーに睨まれ、慌てて手にしていた部品を作業台に運ぶ。

「南米の方で負傷した事で本調子では無かったが・・・先の襲撃事件で動力炉を完全に破壊したか」

「動力炉に当たる部分なのだろう。彼女が普通のロボットであつたら今頃死んでいただ」

ワイリーの独り言にライト博士は相槌を打つ様に口を開く。

共に作業の手は休めていない。

「彼女らルーラーズの構造は理解しかねるがワイリー、お前が手を加えた所は分かるぞ。こここの配線の結び方が強引すぎる、これではオーバーヒートを起こす可能性が高まる。事故を防ぐ為にもロボットの動力炉には安定性をだな・・・」

「安定など求めればこ奴らの絶大なエネルギーを有効活用する事は出来ん。ましてワシの部下として世界征服を手伝うロボットなのじゃ。多少の無理はしてもらわねばな・・・」

互いにそれぞれの口調を論議するかのように口にする二人だが、不思議と作業の効率が上がったように思えるのはカリンカの見間違ひであろうか。

聞けばワイリーもルーラーズのボディの構造を完全には理解していないと言うのに彼の動きには迷いが無い。

ライト博士もライト博士でワイリーの作業の合間に助言を行い、ワイリーも全てでは無いが幾つかの言葉には従っている様に見えた。

後半の方は殆どカリンカはライトとと共に二人に言われたとおりに部品や工具を

持つてくるだけとなっていた。

それだけ二人のレベルが常識を超える物であったと言う事である。

「よし……とりあえずはこれで当面は安全じゃ」

掌にアースのボディから取り出した亀裂の走った水晶を手にしほくそ笑むワイリー。彼女の動力源となっていた超エネルギー元素に似た物体である。

ライト博士とワイリーは破損した動力源の修復が現状では困難と判断するや、既存の動力炉を彼女に改めて内蔵する方向に作業をチェンジしていた。

人間でいえば合うかどうか分からない心臓を入れ替える極めて危険な作業ではあるが、二人の天才の手で作業は僅か数時間で終わる事となる。

「戦闘能力はガタ落ちじゃが。まあ命には変えられん」

作業の終わったアースをシートで包むとワイリーは指を鳴らす。

それを合図にワイリーから影が伸びたかと思うやアースの姿はその場より消え去っていた。

「ワシの部下を助けてくれた事には礼を言うぞい。設備やら部品も使わせてもらったんじゃ……これは代金代わりに置いておくとするかの」

アースのボディから取り出した水晶を作業台の上に置いてその場を去ろうとするワイリー。



「ワ、ワイリー。これは彼女にとつて大事な……」

「フツ……ワシを誰だと思つて居る。なあに……これの代用品の目途が付いているとしたらどうする？」

困惑するライト博士にワイリーが不敵に笑う。

現在のこの星の文明よりも数段は上の産物である超エネルギー元素の代用品など、簡単に見つかる筈が無いのだがこの男なら本当にやりかねない。

「久しぶりにお主と仕事が出来て楽しかつたぞ」

「ワイリー……私は」

「お主の言いたい事は聞くまでも無く分かつておる。……がワシはこのままで終わる気は毛頭無いのでな。いずれにせよまた会おう」

屈託なく笑いながら自身の引き留めを断りその場を去ろうとするワイリー。

「ここでの用事は済んだぞい。アースはシャドーに命じてワシらの基地に運んでおいたのでな。お前達はワイリーと一緒に帰れ……じゃあの」

来た時と同様に足早に研究所を後にするワイリー。

外でワイリーのUFOの音がしたので来る時も恐らくそれで来たのだろうか。

「……むう」

残されたパンクが唸る隣でワイリーがその顔を見上げる。

「お姉ちゃんは大丈夫なの？」

「ああ・・・ワイリー様が修理をしてくれたのだからきつと大丈夫だろう」

「なら良かった」

心配げに見つめる少女に笑みを向けるパンク。

その顔に釣られたのか少女の方も屈託なく微笑むのであった。

ワイリー基地に運び込まれたアースが目を覚ましたのはそれからまるつと一日が過ぎた後であった。

「ご無事で何よりです」

ジュピターが安堵の息を吐く中で彼に迷惑を掛けたと礼を口にしつつ、寝かされていた作業台から立ち上がるようにするアースだったのだが。

ズルツ・・・。

まずに彼女は足を滑らせて動揺する。

この辺りは意識を取り戻したばかりだからと言い訳は出来ようが慌てて立ち上がるうとした所で腰に力が入らず、アースは困惑気な顔のまま地面に座り込む事になる。

「あゝ・・・説明するぜ」

ワイリーから渡されたメモを片手にメタルマンがアースに口を開く。

殆ど勢いだけで書かれギリギリ文字としての体裁を保つメモだが、付き合いの長いメタルマンはそれを一応は読む事が出来た。

「えー掻い摘んで話すと。先の襲撃事件でお前の動力炉に搭載されていた動力源は完全に壊れました。よって現在搭載しているのは間に合わせの仮の動力炉です。あのライトと一緒に作業をしたので安全第一な日常的な動作が可能なだけの代物となっております。よって今のお前は戦闘行為が一切出来ない。てかやったら冗談抜きで命に關わるのでワシの方からもリミッターを掛けさせてもらった。修理の目途は立っているものでそれまでの間、大人しくしているように・・・ともあれワシは眠いので寝ます。ワシが起きるまではゆっくり過ごす様にとの事だ」

メタルマンの説明にアースの顔色が真っ青になる。

思えば体全体が重い様な気がするのは動力炉が変わったからか、それともリミッターを付けられたからか。

「し・・・暫くは俺達が業務を代わりますので隊長はゆっくりと」

「あ・・・ああ。た・・・頼む」

ジュピターの言葉に頷くアースの顔色は真っ青のままであった。

「まあワイリー博士が修理の目途は立っているって言うんだ。博士を信じな」  
メタルマンの言葉も殆ど耳に入っていない様子のアース。

そんな彼女を置いてメタルマンはさっさと部屋から出ていく中、ルーラーズの面々がアースに近づくと。

「隊長、心配しましたニヤ〜!!」

起き上がろうとした段階でプルートの抱き着かれアースは再びその場に倒れ伏す。

何時もであれば軽く受け止めるなり避けるなどしていたのだが、今はプルートの華奢なボディすらも重く感じられる。

「ブモオオオ!!隊長が重傷を負って俺達は心配で心配で・・・!!」

ウラノスが巨体を揺らしながら鼻息が届きそうな距離にまで近づく。

心配してくれる気持ちには有難いがデリカシーの無い彼に向って、何時ものアースの鉄拳が強かに決まると誰もが思った時だった。

カンツツ!!

何時もの様に放たれた拳はウラノスの顔面に金属音を響かせたのみで大した衝撃は無かった。

当のウラノスも驚いたようにアースの顔を見つめ、他の面々に慌てて引き離される。

僅かに痺れが残る手を見据えるアースの顔が先程の様に青ざめる。

ついで言えばプルートの体すらもどかす事が出来ない事に気づいてしまう。

「プルート・・・どいてくれないか」

「ニヤツ・・・ごめんニヤさいニヤ」

困惑気味に口を開くアースにブルートはハツとなりその場から飛び退く。

一連の状況を見ていたネプチューンがわざとらしく咳払いをする。

「ワイリー博士の言う通り仮の動力炉もそうだけどリミッターを掛けたのは本当みたいね」

「つ・・・つまりは」

問いかける様に目を向けてくるマースにネプチューンは手を広げる。

「今の彼女はこの星の家庭用ロボット並に弱くなつてゐるって事ね」

その言葉にアースが完全に凍り付く。

「まあメタルマンの言葉を借りるまでも無くワイリー博士を信じましょう。隊長も大丈夫だから・・・」

ニコニコと笑みを浮かべるネプチューンだがその言葉が届いているかどうか。

「という訳で暫定的にジュピターが隊長の業務をこなさいな。ワイリースターに待機している他の面々に仕事を任せるのも酷よ」

ネプチューンに仕切られ心配そうにしていたジュピターらがワイリースターに戻らされ、この基地にはマースとネプチューンが残る事になる。

「ハア〜こりや大変ね」

「・・・何がだ？」

翌日の朝になってネプチューンのぼやきにパンクが首を傾げる。

「隊長の事よ。戦闘能力が失ってるから完全に自信喪失よ」

「修理の為に武装を一時的に外す事は我々でもよくある事だが・・・」

現在のバラードやフォルテがそうである様にワイリーナンバーズと言うかロボット達の常識からすれば、一時的に武装や装備を外したりする事はまあある事だ。

人間でいえば治療の為に点滴をしたり、腕や足をギプスなどで固定する感覚に近いと言える。

確かにその間は動きが思う様にならなかつたりで不便ではあるのだが。

「アタシ達のアイデンティティーが何かぐらい分かってるでしょ」

ネプチューンの言葉にパンクは彼らと自分達では価値観や認識に違いがある事を今更の様に思い出してしまふ。

「戦えなくなつたロボットに価値なんて無いって徹底的にプログラムの植え付けられるんだから。幾らこの星の影響でアタシ達全体が丸くなつてもその辺の事を頭から拭くのは無理な話よ」

元よりモノを作る概念を持たなかつただけにネプチューンの話す言葉は闇が深い。

「まあ隊長の場合はちよつと事情が違うけどね」

「どう事情が違うのだ？」

「・・・察しなさいよ」

自身の言葉に首を傾げるパンクにネプチューンは大きく溜息を吐く。

「戦う事が出来なくなつた・・・役に立てなくなつた自分の同型機が廃棄処分よりも酷い扱いを受けていたのを知っているんだから。隊長が感じる恐怖は察して余りあるわよ」

「ワイリー様や我々がそんな扱いをする事は無いのだが」

「それでも拭えないのよ。簡単にはね」

ルーラーズを造つた地球外文明の事は分からぬが、彼らへの扱いを鑑みるに正直褒められた物ではない事は分かる。

文明が滅しても尚、彼らを縛り付けるそれにパンクは内心で憤慨する他無い。

そんな話をしていた所でフィーネが向かいの席に座つたのを見て二人は会話を打ち切る。

その見た目もあるが純真な彼女には聞かれたくない話は結構ある。

「あらあらフィーネちゃん。この前よりも目玉焼きが上手く焼ける様になつたわね」

「うん。エストお姉ちゃんに教えてもらったから。それよりもネプチューンさん。海の家で作っている料理を教えて」

「良いわよ。じゃあ今度、アタシの海の家に来なさいな。フィーネちゃんぐらいの子

が店番をしてくれたらお客さんも増えそうだし」

先にも説明をしたがスペーススルーラーズ達にモノを作る概念は元々無かったのだが、概念が無かっただけで全く何も作れない事は無い。

ナパームマンと共に兵器造りに目覚めたマースもそうだし、ネプチューンの場合は海の家を経営するのに必要な料理全般が作れる。

二人が料理の話に花を咲かせる中で食堂の一角から声が響く。

「誰かジュース買ってきなさいよ」

「押忍!!ここには牛乳しか無いであります!!どうぞであります」

ジト目で自分達に命令をするプライドに牛乳の入ったグラスを渡すのはパツシヨナーだ。

「欲しかったら自分で買ってこいッス。ついで言うどジョーの皆は召使じゃ無いッス」

成り行きから彼女を庇ったバラードだったが、噂以上に高慢ちきなプライドを見るに庇った事をすっかり後悔し始めていた。

当初こそ相手はお姫様と下手に出ていたのだが、スナイパージョーをパシリに使うわ口を開けば文句ばかりと軍団内の彼女の評判は極めて悪い。

仕事とはいえそんな彼女を守らねばならないナイトマンの苦勞が窺い知れよう。

「あらあら〜朝っぱらからパシリをさせようだなんて、困ったお姫様ね〜」



わざとらしく口を開きながらプライドに向かい合う様に席へ座るのはエストである。

聞けば二人とも社交界などの席で知り合っているとの事で、何ともワイリー軍団の面々には遠い世界の話だがエストの方はプライドに気さくに接している。

プライドの方はツンと鼻を鳴らすのだが、それで簡単に引き下がるエストではないだろう。

「ワイリー博士は起きたツスか？」

「ああ・・・さつき一瞬だけ起きたわよ。起きて速攻でトイレに行つてその場にあつた水と栄養食品食べたと思つたらまた寝ちやつた」

バラードの問いにエストが言う。

連日の激務もあつたが一旦爆睡モードに入るとワイリーはエストの言葉通りの寝て起きるだけの生活リズムとなる。

暫くはこれが続くであろう。

「博士が起きるまでは仕方が無いとは言え・・・」

ネプチューンの目は遠慮がちに食堂に入つて来たアースの姿を追っていた。

普段のそれとは全く違うすっかり委縮した様子の彼女を見据え、ネプチューンはパンクを横目で見る。

「こゝなつたら気分転換を図るしか無いわね。博士が寝ている以上、ワイリー軍団の活

動も休止状態なんだから。お姫様達も巻き込んで・・・行くわよ」  
「・・・？」

意を決するネプチューンに首を傾げるパンクとフィーネ。

そんな彼らにネプチューンは一見すると不気味にしか見えない笑みを浮かべるのであつた。

## V O I 7 シンフォニーシティに潜む魔

「まさかここに来る事になるとはな・・・」

自嘲気味な笑みを浮かべロボット王キングは時が止まった都市に足を踏み入れていた。

その隣を歩くのは黒いコートにサングラスを付けた青年。

非戦闘形態のブルースだ。

キングも同様に一見すると人間と変わらぬ姿をしておりこちらはボロボロになったローブを身に纏っている。

彼らの眼前に広がるはかつてシンフォニーシティと呼ばれた都市である。

総人口数万人を誇ったこの都市は人類とロボットの平和共存を実現すべく建設されたモデル都市であった。

キング事件の際にも奇跡的に被害を免れた事でシンフォニーシティは、不和が生じつつある人類とロボットの関係を取り持つ象徴となるかに思えたのだが。

今より一年前にデイモンジョンズを名乗る謎のロボット達が都市を襲撃、街を占拠し要塞化を進めると言う事件が発生した。

その事件の首謀者はロックマンシャドウを名乗る未来から来たと言うロボットであった。

政府の要請を受けて出動したロックや紆余曲折があつてその場にいたフォルテなどの活躍によってロックマンシャドウは倒されているのだが、事件の爪痕は今も色濃く刻まれている。

「デイメンジョンズが都市全体を要塞化した弊害もあつて一般市民の帰還はままならずか・・・」

放置されたままの規制線を乗り越えブルースが言う。

「恐らくこの都市は放棄せざる得まい。元々が経済的に重要であつた都市では無いからな」

キングがブルースの後に続きながら言う。

「そう言えば聞きたかつたんだが。何故お前はこの都市を狙わなかつた？国全体でシンフォニーシティと同様の理念を掲げた欧州のカンパネラ公国にはあれだけ執拗な攻撃を加えたと言うのに」

「人間とロボットが相いれない存在だと認識すれば、街の住人が勝手に争い自滅すると思つた・・・では理由にならんか？」

「ならないな。お前自身がそれ程楽観的な思考を持つとは思えん」

ブルースの言葉にキングは苦笑を浮かべる。

暫しの沈黙の後に彼は観念した様に口を開いていた。

「ここは・・・ワイリーの基地から逃げ出した私が初めて辿り着いた場所だ。そして王となる決意をした場所だ。言うなれば思い出の地なのだよ」

製作者にすっかりその存在を忘れられ意図せずして目覚めた後のキングは、半ば生存本能だけでその場から逃げ出した結果この都市へと流れ着く。

表前人類とロボットが平和共存するとされたこの都市も必要とされなくなった者達があぶれる場所があった。

「あの時の私は肉体的にも精神的にも弱かった・・・弱かったがワイリーに与えられたこの力があつた」

掌の間で光を生じさせながらキングは言う。

元となる設計図と素材さえあれば如何なる物ですらも創造可能なロイヤルリビルディング。

この力を応用しキングは自分自身を完成させ、最終的にはキング軍団を結成するに至る。

「いやはや今となつては懐かしい。飢えや乾きを満たす為に泥水をすすり残飯を漁ったのが昨日の事の様に思える」

遠い目をしながら話すキングにブルースは特に反応は示さない。

質問をして来た当初よりも表情が硬くなっているように思えたのは気のせいか。

「そう言えば君も……いや詮索はよそう。ともあれだ。私がこの街を攻撃しなかつた理由は話させてもらつたよ」

苦笑を浮かべながら首を振るキング。

ブルースの出生に關してはキングも知つてはいるがどの様な理由があつて彼が生みの親の元を離れているのかは知らない。

キングからすれば自身と違いトーマスⅡライトなる人物は人格者であり、そんな彼と兄弟達を避ける理由が分からないのだが。

まあこの辺りの事を追求するのは野暮だとキングは判断する。

誰だつて知られたくない言いたくない過去の一つや二つはあるものだ。

暫くして二人はシンフォニーシティの庁舎であつた場所へと辿り着く。

ロツクマンシャドウの手で要塞の中枢部へと姿を変えられた元庁舎は事件の後、放置されたままになつておりかつては嚴重であつたセキユリティも殆どが機能を停止している。

それ故に大した障害も無く二人は歩を進めるのだが。

「……侵入者を確認。エネルギー反応の照合を行います」

そんな両者を頭上よりスコープ越しに見つめるのは一つの影。

「指名手配中のロボット王キングともう一人はブルースです。如何致しますか？」  
端末に侵入者の情報を送信しながら影は指示を待つ。

「了解しました・・・暫く監視を続けます」

監視用のドローンを彼らに気づかれない様に起動させながら影はそれらの目を利用して二人の監視を続けるのであった。

恐らくフォルテの物だろうと思いき穴の開いた電子扉を見つけた時、二人の顔に笑みが零れる。

彼は扉が開くのを我慢出来なかったのだろうなどこの場で起こった事が想像出来る。  
壊れかけた電子扉を強引に開けつつキングは、かつてロックマンシャドウが居たエリアへと足を踏み入れていた。

「ロックマンシャドウ・・・未来でロックマンを拉致し現代に連れ帰った彼をクイントに改造した際に改造の試作品として造られた存在。そのまま放置され未来で覚醒した彼は世界を破壊しつくしたと聞く」

「ある意味でもう一人のお前だな。自分で自分を改造した経緯と云い」  
ブルースの言葉にキングは『否定はしない』と苦笑を浮かべる。

「だが幸運にも私にはまだ止めてくれる存在が居た。思うに彼がわざわざ過去の世界に飛んでここへ来たのもロックマンと言う存在を求めての事なのかも知れん」

かつてロックマンシャドウが座していたと思しき玉座があつたであろう場所に目を向けながら、キングは彼の思いを察する。

まるで霧がかかったかの様に未来は不明瞭だが、ロックマンシャドウは現代に生きる者達に警告を発したかつたのかも知れないとキングは思う。

彼が来た事で言える事は未来が確実に変わったと言う事。

それが起こる事が分かればある程度の対策は講じられるのだから。

「・・・やはりな」

掌を玉座があつた場の奥に向けてキングは呻く。

一見すればただ廃墟となつただけの一室と壁にしか見えないがエネルギーの波長に乱れが見える。

「空間が歪んでいるか・・・」

ブルースも表情を引き締め僅かに揺らめく場を見据える。

これがデイメンジョンズが排除された後もシンフォニーシティが放棄されたままの理由の一つなのだろう。

ロックマンシャドウが出現したからなのかは不明だが、この場において本来ある筈の



無い空間の揺らぎが生じているのだ。

キングやブルースとてその先が何と通じているのか分からない。

「アストロマン辺りを連れてくれば分かったかも知れんな」

「それで・・・どうする？」

顎に手を置きその場には居ないロボットの名前を口にするキングにブルースが問いかける。

「わざわざ二人で来たのだ。正直、無事に帰れるかは不明だが飛び込んでみるのも一興じゃないかね？」

「意外と言うべきか大胆だな」

「でなければ人類に宣戦布告などせんよ」

互いに笑みを浮かべつつ二人は空間の揺らぎに向かって足を踏み入れる。

距離にして数歩、玉座の後ろに回り込む形で足を入れたと思った瞬間であった。

ヴンツツ!!

吸い込まれたと言う感覚は無かった。

が不意に辺りの風景が変わった事で自分達が揺らぎの中に入ったのだけは分かる。

「この泥棒がつつ!!」

「・・・!?!」

脇の方で不意に声が響いた事もありブルースが慌ててそちらの方を見る。対してキングの顔は非常に強張っていた。

何時の間にかどこかの路地裏と思われる場所に二人はいた。

険しい顔で追いかける人間とロボットが、彼らから盗んだエネルギーパックを手にした一人の少年型ロボットの壁際に追い詰めていた。

彼らは謝罪の言葉を口にする少年を容赦無く暴行を加え始める。

「まあ何れにせよ窃盗を働いたのだ……こうなるのは自業自得だろうが」

キングは地面に倒れ伏したまま動かないかつての自分を見下ろしその顔を歪めていた。

ブンツツ!!

忌々し気に不甲斐無い自身を蹴り飛ばそうとするキングだが、映像に過ぎないのか彼の足はすり抜けてしまう。

ややあつて倒れ伏した彼に近寄り声を掛ける人物が現れる。

今にも壊れそうな配線などが剥き出しのロボットは、手にしたエネルギーパックを少年に渡すのであった。

「……あの時に今の力があればなどと言うのは野暮か」

自嘲気味に話すキングにブルースは何も答えない。

が次に流れて来た映像に彼の顔が一層に強張る。

「待て・・・待つんだブルース!!」

降りしきる雨の中、走り出す青年を追いかけるのは恰幅のいい初老の男性。

言うまでも無くライト博士である。

そしてその制止を振り切る形で走り出すのは。

「・・・・・・・・」

終始無言なブルースにキングも言葉を発しない。

互いに見られたくない物を見てしまったのだ。

「ほう・・・まだ動いておる。あの偽善者のライトが造り出したロボットなだけの事はあ

る」

もう一人の見知った人物の姿も声もブルースの記憶なのだろう。

それすらも過ぎ去った後に幾つかの映像が流れるが、両者は気にもせず前を進み続ける。

が本当に前に進んでいるのかも途中で分からなくなる。

前も後ろも分からぬ状態に恐怖すら覚えるが、ややあつて辿り着いた先で彼らを待ち受けていたのは。

「グルルルルルッ!!」

キングとブルースを見るなり唸り声を上げるのは十数メートルにあらうかと言う巨体を誇る狼の姿をしたロボットであつた。

「・・・!!」

反射的に戦闘形態となつたキングが楯を構えたのと巨狼が炎を吐き出したのはほぼ同時であつた。

「ぬうううう!!」

あまりの熱量に堅牢さを誇る楯が熔解し始めるのを感じキングが呻く。

「・・・キングッツ!!」

キング同様に戦闘形態へと変じたブルースが彼の背から飛び出す形でバスターを構える。

「ブルースストライクッツ!!」

バチンツツ!!

ブルースのバスターから放たれる巨大な光弾が巨狼の顔面に命中する。

「ウオオオオオオオンツツ!!」

光弾を受け僅かに仰け反つた巨狼は火炎を止めるや今度はブルースを睨み据える。

バチバチバチバチツツ!!

両肩に膨大な稲妻を集め始める巨狼。



「ガオオオオオンツツ!!」

巨狼が大きく前脚を振りかぶるのが見える。

その脚に取り付けられた鋼鉄の爪をまともに受ければキングとて無事では済まないだろう。

だが振り上げられた前脚が下ろされる事は無かった。

ドガンツツ!!

まさに頭部に直撃した光弾が巨狼を僅かに怯ませる。

続けざまに放たれるブルースストライクが振り上げた前脚へと叩きこまれ、巨狼の動きは完全に硬直する。

ロックやフォルテにとってチャージショットに匹敵するブルースストライクの連射。

動力炉に欠陥を持つと言うブルースにとってはリスクの高い行為ではあるが、それに躊躇いを見せれるような相手ではない。

結果として僅かに動きを止める事に成功するのだが、それはキングにとっては十分な時間であった。

「むうううんつつ!!キングダムアックス!!」

ズガアアアアア!!

キング渾身の一撃が巨狼の頭部へと突き刺さり、頭部に大きな裂傷を走らせる。



＜私の名前は、大首領（マスター）ア．．．つと名乗りたいんだけど止めておくよ。何せ私が名前を名乗れば歴史が変わる可能性があるからね。と言えば分かるかな？＞

ブルースの問いかけに声は悪戯っぽく言う。

小馬鹿にした様な口調もあり表情が険しくなる両者だが、その反応も声の主を喜ばせるだけに終わる。

＜ここを維持する片手間にハンター共を相手にするのは私でも骨が折れるねえ。あつと．．．これ以上、喋るとボロが出そうだ＞

キュイイイイイインツツ!!

声が何かを合図したのと同時に辺りに金属音が響き渡る。

＜兎にも角にも暫くは誰にも入れない様にしておこうか．．．とりあえず二人に言っておくけどここへと辿り着いた君達の推論は正解だ。まあいずれにせよ君達をこちら側に来させる訳には行かない。先の事を知られて君達に未来を書き換えられるのは何かと都合が悪いんでね＞

「未来．．．だと」

＜アハハハハ．．．そう言う訳だからお二人とも強制退場く!!＞

カツツ!!

空間の内部で凄まじい光が生じたと思った瞬間、ブルース達の意識は文字通り消し飛



ぶ。

「むう……」

ロックマンシャドウが座した玉座の傍らでゆっくりと起き上がるキング。

彼の隣には同じ様に意識を失っていたブルースが立ち上がるうとしていた所であった。

既に一室にあつた空間の歪みは無い。

声の主の言葉を信じるならば入り口を閉じられたのだろう。

全身についた傷が無ければ先程の事は夢だったのではとさえ思ってしまう。

「あれは……一体？」

首を傾げるキングにブルースも腕を組み思案する。

「俺達の推論は正解だとあれは言った……それだけでも収穫はあつたと見るべきか」

「正しく未来からの挑戦者か」

一応の答えは得た事もありこれ以上ここに留まる理由は無い。

キングが苦笑を浮かべ元来た道を帰ろうとした時であった。

ピイツ……。

自身の頭部にレーザーポインターが当てられている事に気づくキング。

反射的に斧を手にするがそれよりも前に一室に十数人の武装したロボット兵達が雪

崩れ込んでくる。

「・・・動くな」

無機質な声でロボット兵は手にしたロボット用のアサルトライフルを二人に突き付ける。

目に見える彼ら以外にも居るのだろうか周囲の風景が僅かにぶれるのが分かる。

「ロボットアーミーの特務部隊か・・・成程こうもあっさりと入れるのはおかしいと思っただが」

ブルースにも一応は銃を向けられているが頭部や胴体を中心に無数のレーザーが当てられているのは当然の様にキングの方だ。

人類に反旗を翻し現在指名手配されているキングに対して当然の反応と言えよう。

「貴様らが徒党を組んだ所で・・・私に勝てるかな？」

キングとしてもここで捕まる訳にはいかない。

斧を手にこの包囲網を突破せんと身構えるのだが。

「どうも失礼しますよ」

更に数名のロボット兵を伴い一室に入って来るのは一人の軍服姿の青年。

一見するとにこやかな笑みを浮かべる彼はキングを見るなり恭しく頭を下げる。

「お前は・・・」

その青年のロボットにキングは見覚えがあった。

「こうして会うのは初めてですね。初めましてキング陛下。政府軍旗下ロボットアーミーの司令官を務めておりますオクターヴです」

ロボットアーミー、文字通りのロボット達で構成された政府軍の主力になりつつある組織だ。

カットマンを始めとするライトナンバーズを洗脳し開始されたワイリーの世界征服計画で、連邦政府が有する政府軍は全く以って歯が立たなかった。

結果はご存知ロックマンと言う一人のロボットの手で解決するのだが、その一件で連邦政府並びに政府軍が受けた衝撃は計り知れない物であっただろう。

ワイリーが引き起こす事件に並行する形で連邦政府に属する各国は次々と戦闘用ロボット開発し、最終的にその殆どをロボット達で構成される軍隊が誕生する事となる。

それが彼らロボットアーミーであり、キング事件の際には連邦政府の戦力の一翼を担いキング軍団と各地で激突している。

言うなれば互いに仇同士と言えよう。

司令官と言う立場もあり前線に出る事は無かったが、オクターヴの個人的な性能は並の高性能ロボットを遙かに上回る。

先程の戦いで負傷したキングが彼らを相手に勝てるかと聞かれると些か微妙と言え

よう。

「誤解している様なのでまず言っておきましょう」

後ろに手を組みながらオクターヴは言う。

「私は貴方を逮捕する気もまして破壊する気もありませんのでご安心を」

「・・・なんだと？」

己を油断させるつもりなのか敵意は無いと言うオクターヴ。

彼は指を立てながら笑みを深くする。

「貴方の脅威が無くなったと知れば我々の来年の予算が減らされますので」

笑みを浮かべながら俗っぽい事を口にするオクターヴにキングは呆気にとられる。

「ここへどうして来たのか・・・ここで展開されていた空間の揺らぎを調査しに来たのでしようけど。まさか貴方達が来るとは・・・予想外でしたよ。いずれにせよキング陛下には一度お会いしたかったのでこうして出向いた訳です」

司令官である自身がここに来た理由を話すオクターヴ。

自分に危害を加えるつもりは無いとしつつもわざわざ会いに来るなど酔狂な男だとキングは率直に思う。

「シンフォニーシティーを封鎖したのもあれが原因か？」

「はい・・・一般市民やロボットが不用意に足を踏み入れれば何が起こるか分かりません

からね」

ブルースの問いかけに市民の安全の為と口にするオクターヴだが果たして本当に信じて良いのか。

思案する様にバイザーの奥の瞳を光らせるブルース。

そんな彼の視線を知ってか知らずかオクターヴはキングに銃を向けていた兵士らを下がらせる。

「実は私以上に貴方に会いたいと思つて居ましてね。私達に強制する権利はありませんが・・・お会いになりますか？ 貴方にとって悪くは無い事だとは言つておきましよう」

ニコニコと笑みを絶やさずに言うオクターヴにキングは顎に手を置き唸る。

目の前の男を結果として使い走りにする存在と考えれば自ずと人物も限られてくる。

彼らは自身に危害は加えないと言つている事を完全に信じるつもりは無いが、興味が出て来たのも事実。

と考えたキングの判断は早い。

「良いだろう・・・では会わせてもらおうか。お前以上に私に会いたいと言う酔狂な者に」

キングの言葉に満足げに頷いたオクターヴは傍らの兵士に何やら指示を出す。

端末を手はどこかへと連絡を取り始める兵士を横目にブルースが溜息を吐く。

「いいの？」

「面倒な事になつてスマンなブルース。私も好奇心とやらには勝てんのさ」

どこか呆れた風も感じさせつつもブルースは苦笑するキングに同じ様な笑みを返すのであつた。

「あんまり言いたくないけど．．．邪魔だから出て行つてくれる？」

真顔で軍団古参のスナイパージョーの一人にそう言われアースは歯を軋ませる他無かつた。

今やワイリー軍団の中でも現役で稼働しているのは十数人に絞られるらしいのだが、彼はワイリーによる最初の世界征服計画の際に作戦に参加したジョーの一人らしい。

立場上ナンバーズよりも格下だがメタルマンらにも古参のジョー達は敬意を払われている存在だ。

いやそもそも今の状況において自分に非があるのだから反論出来ない。

「掃除なら自分やメットール達にやらせておくから。違う所で作業お願いします」

床の上に盛大にぶちまけられたバケツの水を雑巾で拭き始めるジョーやメットール達にそう言われアースはその場より立ち去る他無い。

そもそもモノを作ると言う概念が無かったルーラーズの彼女にとって、戦闘以外の作業は未知の領域に足を踏み入れるに等しい行為だ。

「と言うか今自身が使用としている掃除を始めとする雑用は下の者がする行為と言う認識がある。」

「が戦闘能力を喪失している今、何かしら作業をしなければと言う責任感からこうして作業をしようとしているだけ以前よりは彼女も成長したと言えよう。」

足元をせわしなく動き回るメットールを見るにアースの胸がざわつく。

「次いで言えば先程洗濯が終わったシーツを持って廊下を歩いていたフィーネの姿にもだ。」

（今の私はメットール以下の存在なのか・・・）

「自分が役に立たないと認めたくはないが現実是非情である。」

「あらあら・・・ちよつと重症ね」

力なく肩を落とすアースの姿を遠目に口を開くのはネプチューンだ。

「まあそうなるとは思っていたけどな。ところでお前の所の海の家の準備どうなのよ？」

メタルマンの言葉にネプチューンは指で丸を作り笑みを浮かべていた。

「本当はもつと早くしたかったんだけど色々準備があつてね・・・今しがたバブルマン

からOKの連絡が入った所よ」

そう言ってスキップしながらアースの下に近づくネプチューン。

「隊長く色々大変なのは分かっているけど皆で海に行かない？」

ネプチューンの姿に慌てて取り繕うとするアースだがその言葉を聞いて顔が険しくなる。

「海・・・汚染物やらゴミまみれの液体が漂う場所に？」

「それは皆が掃除しないからよ。まあ気分転換も兼ねてつて事になるんだけど。ワイリー博士も一向に起きる気配が無いし」

潔癖症のアースから見た見た散々な海への認識に唸りながらもネプチューンは彼女をここから出そうと躍起になる。

「いやだが・・・他の者達が働いている中で私だけが遊んでいる訳には」

「役に立たないんだったら遊んでた方が他の皆には有難いんじゃないやなくて？」

ネプチューンの遠慮の無い言葉にアースが一瞬涙目になる。

何時もであれば激昂するか鼻で笑うかのどちらかであろうがそのくらいに今のアースは心が折れかけてる。

「ワイリースターの再建からの本格運用まで働きづめだったし。この機会に充実した休暇を送りましょうよ。ちよつとぐらい遊んでも罰は当たらないわよ」



ニコニコと微笑むネプチューンにアースは悩みぬいた末に頷くのであった。  
でもって日付は変わり。

「・・・と言う訳で従業員も確保出来たのでアタシの海の家も本格的に今シーズンの稼働をしようと思います」

パチパチパチツツ!!

とマイクを手に口を開くネプチューンに拍手を送るのは普段彼の下で働いているジョー達だ。

その彼らだがトランクやら大きなバッグを持つており今にも旅行に出かけそうな様子だ。

「普段から働き詰めのジョーの皆さんには慰安旅行に行ってもらい。代わりに確保した他の皆で海の家を盛り上げるわよ」

「おっ・・・」

「声が小さいわよ!!」

「おっおっ!!」

ネプチューンに促されその場に集まった面々は揃わない声をそれぞれ上げる。

「てかなんで俺まで働かなきゃいけないんだ!!」

そう言つて抗議の声を上げるのはフォルテだ。

彼もアース同様に修理が完了しておらず現在も非戦闘形態のままだ。

「つたくこいつが下手な事してなかったらジジイに今頃修理してもらってるのによ」

ジロリと傍らのアースを睨み据えるフォルテ。

アースの方も今にも射殺さんばかりの視線をフォルテに向けていた。

「はいはい喧嘩は駄目よ」

ネプチューンの声にフォルテがそっぽを向く。

「じゃあ自分達はこの辺りで」

「いってらっしゃい」

ジョーの一人がそう言うなり数人居た彼らは足取りも軽やかに慰安旅行に出かけてしまふ。

彼らに手を振りながらネプチューンは残った面々に目を向ける。

現在絶賛非戦闘モードなフォルテとアース、それにフィーネとその保護者のパンク、社会見学目的でパツシヨナーがその場に派遣されていた。

あとゴスペルとダルセニョーも居るが便宜上人数には数えないとする。

と言うか二人ともネプチューンの話そつちのけで勝手に遊んでいる。

因みに副店長のバブルマンは先程から黙々と店の準備をし始めていた。

基本はネプチューンと彼に先程出て行ったジョー達数人に経営されている海の家な

のだが、今回は何時ものジョー達に代わり彼らを従業員として営業を始めようとしていた。

「・・・スマンが一つ質問がある」

手を上げるパンクにネプチューンは『どうぞ』と彼に返す。

「多少の家事能力があるフォルテやフィーネはまあ分かるしパツシヨナー達も社会の見学と言う意味での派遣は分かる。・・・が私もそうだがアースやパツシヨナー達は料理の類は出来ないぞ。そもそも水中用じゃないから溺れた客が出ても助けられん可能性が高い」

パンクの言葉通り水中用ではない者はあまり海の中に入らない方が良いと言うか逆に溺れる危険性もある。

「海の監視はアタシとバブルマンで何とかするんで安心してね」

「となると我々は軽食か・・・そうなると思います」

「まあパンクは海でのトラブル解決なり迷子の担当なりしてもらおうつもりだけど。フィーネちゃんが居るとは言え料理の方の不安が出て来るのは御尤もよね」

パンクの指摘に頷きながらネプチューンはジョー達が去っていった道路の向こう側からやって来る人影を見るなり口の端を緩める。

「何時もだったらクイントちゃんに応援を頼んでるんだけど。今回は家事能力を中心に

色々と万能なスペシャルゲストの派遣をライト博士に頼んでおいたのよ!!」

そう言つて海の家に姿を現したのは一人の少年型ロボット。

「て……てめえは!!」

彼の姿を見るなりその指を突き付けるフォルテ。

「た……確かに家事を含めて万能だが何故こいつを」

アースが呆れた様な顔で言うも来てしまったものは仕方が無い。

「てかライト博士つてお人好しよね〜電話して頼んだら二つ返事で了承をもらったわ  
〜」

ネプチューンの言葉に苦笑いを浮かべながら彼らの宿敵たるロックは礼儀正しく頭を下げるのであった。

「どうも……ライトナンバーズのロックです。短い間ですがよろ……」

「お前とは宜しくしたくねえ!!」

口を開くロックにフォルテが声を上げながら遮る。

どこか子供染みた反応を示すフォルテにロックは屈託の無い笑みを返す。

「ロックお兄ちゃん〜。ロールお姉ちゃんは?」

「後でカリンカちゃんと一緒に遊びに来るつて言っていたよ」

そんなフォルテはともあれ早速フィーネに懐かれるロックは彼女に言葉を掛けつつ、

早速ながら準備を始める。

「もはや・・・嫌な予感しかしないな」

前途多難な状況に。パンクは深々と溜息を吐いていた。

## V O I 8 宿敵達との暑いバトルと出会い？

アース達が海の家で働き始めて二日経った後の事である。

「なんで俺が買い物に付き合うツスカ」

ぼやいている傍で荷物が渡されたバラードはそれを持つ他無い。

気分転換に買い物しようと言うエストとプライドに無理矢理付き合わされた彼は荷物持ちをさせられる事となる。

エストの方は時折怪しげなパーツ類を買っていたのだが、その辺はまだバラードも興味はある。

だがプライドの方はやれ高そうな服だのアクセサリーだの、バラードにとっては一切興味が無い物を買っていった。

そんな折に後ろの方で何かが慌ただしく動く気配を感じたバラードはエストとプライドを表通りから路地裏に誘導する。

ザッザッザッザッザッ!!

表通りを歩くのは西洋甲冑の姿をしたロボット達。

カンパネラ公国が誇るロボット兵、アイアンナイツの面々だ。

「ナイトマンの簡易量産型であり下手をするとジョー達よりも強い可能性がある面々と遭遇すればバライドとて彼女を守り切る事は不可能だ。

一見すると警備の一環で巡回しているように思えるが言うまでも無く彼らの目的はバライドの搜索だ。

「うわあ〜これはかなり物々しくなってるわね」

バライドと同じくアイアンナイツの姿を見ながらエストが率直に感想を口にする。

次いで二人に視線を向けられたバライドはビクリと肩を震わせていた。

「て言うかさ・・・なんで逃げ出したのよ?」

エストの率直な疑問にバライドは横を向いたまま黙り込む。

「まあまあ人には言いたくない事の一つや二つ・・・」

場の雰囲気が悪くなった事もありバライドが両者の間に立つ。

バライドもバライドの逃避行の理由は気になるが無理に聞き出そうとするほど野暮ではない。

小さく舌を出しながらエストもそれ以上は追及せず話題を打ち切る様に笑みを浮かべる。

「さ・・・気を取り直して買い物続きでもしましょ」

ややあつて表通りに出て来た一行は次なる店に入ろうとした時だった。

「さて・・・プレゼントは買ったし後は切っ掛け作りを」

紙袋の中にブティックで買った品物を入れて出て来るのは一人のスーツを着た人の好さそうな青年。

普段であれば互いに素通りするであろうがこの時ばかりは勝手が違う。

「・・・あれ？」

「・・・げっ!？」

互いに声を上げるエストと青年。

「エスト・・・この街に居るって事はやっぱり伯父さんの所に」

「な・・・なんで兄貴が」

「いやそれはちよつとあの子にプレゼントでもって・・・そんな事より!!」

驚きの声を上げる兄妹であったが兄のロウファの方は、妹はさておきとプライドの方に目を向ける。

「貴女はプ・・・プライドッひ!!」

とプライドの姿を見るなり声を上げそうになったロウファであったが、速攻でエストに口元を押さえられそのままブティックの店舗横に連れられる。

彼の額に突き付けられるのはエストが隠し持っていた工具だ。

「兄貴はちよつと黙っててくれるかな? まあ私も理由は分からないんだけど、色々あつ



て彼女の身柄は私達が預かっている。次いで言うところここで騒ぎを起こしたりこの事を他の誰かにチクつたら・・・」

工具を額に押し付けられくぐもった声しか上げられないロウファ。

「分解するからね？」

分厚い眼鏡で表情は窺えないが口元に不気味な笑みを浮かべエストは兄を脅す。

呻きながらも必死で頷く兄を解放したエストにバラードとプライドは困惑する他無い。

エストの兄なのだからワイリーの身内と言えるのだろうかがこのロウファに関しては、先程のやり取りも含めそこらの普通の青年と代わり映えがしない。

若干涙目になっている彼にはバラードとて同情を覚えてしまう。

「と言う訳だから後は宜しくねえ」

そうエストがロウファに声を掛けて元の道に戻ろうとするのだが。

戻った先に居たのはヤマトマン。

恐らく今回は式典での要人でもあるロウファのボディガードも兼ねてるのである。

「妹であるのは把握していたから何もしなかったが・・・」

本来であればロウファを抑え込もうとした段階で動いたのであろうが、エストがロウ

ファの妹である事を知っていたヤマトマンは傍観に徹する事となる。

「まあそれはともあれだ」

「ホンと咳払いをしつつヤマトマンはバラードとプライドに目を向ける。

「ちよ……ちよつと待つツス。これには深い訳が……」

「……もう遅い」

バラードが慌てて弁明しようとするもヤマトマンが指差す方には端末を手にするアイアンナイトの一人が佇んでいた。

「三番通りで姫を発見。ワイリー軍団のバラードと一緒にです」

「了解……すぐにそちらに向かう」

アイアンナイトが通信を終えバラードの前に立ち塞がる。

「さて……我らが姫。今すぐにでもお帰りくださいませ。でなければ各国の要人のみならず公国に居る父君にも迷惑が……」

「い……嫌!!」

アイアンナイトの発する言葉を見た目以上に幼い娘の様に声を出すプライド。

「お父様なんて関係無い。私は……」

まるで悪い事がばれた子供の様に話すプライドの声は既に涙声だった。

彼女は半ば反射的にバラードの腕に抱き着く。

「助けて・・・お願いだから」

頬から涙を流しながら自身に助けを乞う少女を前にして『自分の所に帰れ』と冷静に言える程、バラードは大人では無かった。

・・・ダツ!!

プライドを片手にその場から身を翻すバラード。

「あ・・・待て!!」

一瞬反応が遅れたアイアンナイツが追いかけてやるとするが機動力で劣る彼がバラードに追いつける事は無かった。

「姫とロボの逃避行。何だか面白くなって来たわね」

「・・・・・・・・・・」

どこか他人事の様になり行きを楽しむエストは横目で見てくるヤマトマンをそのままにしつつ、地面に置かれたままの買い物で買った商品をロウファに預け渡す。

「これ後でワイリー基地に届けておいてくれる?」

「ええ・・・てかエストは」

「当然、追いかけるに決まってるでしょ」

嫌そうな顔をする兄に荷物を押し付けエーストは足取り軽やかに逃げ出したバラード達を追いかけるのであった。

「かき氷のメロン味を二つ追加であります!!」

パッションナーの大きすぎる声もこの様な場では極めて有用な物となる。

「おらああああ!!今の時世になって電動じゃねえんだよ!!」

勢い良くレトロな手動式のかき氷機のレバーを回しながらフォルテが叫ぶ。

「電動式はよく壊れるんだよ。そもそも電気代が勿体ないのとアナログな方が長持ちするんだ」

海の家にある冷蔵庫からE缶を取りに来ていたバブルマンが言う。

彼は監視員と言う仕事があるのでさっさとその場を後にする。

ネプチューンが経営する海を家の仕事は一言で言えば過酷であった。

まあ別に馬車馬の様に働かされる訳では無いのだが、照りつける太陽の下での接客業はとにかく堪える。

「本当に忙しいねえフォルテ」

「うるせえ!!」

ニコニコと笑みを浮かべるロックが焼きそばを手際よく焼いていく。

ロックに話しかけられフォルテが怒鳴り返すが彼も彼で出来上がったかき氷をトレーを持って来たフィーネに手渡す。

「迷子が五分で三名も増えた・・・全員泣いているから宥める為にとりあえずかき氷を追  
加で作ってやってくれ」

端末を片手にパンクが困り顔で海の家に設けられた待合室から顔を出す。

因みに今の彼はロック達と同様に非戦闘形態だ。

当初は普段の姿であつたのだが、海水浴客に怯えられたのもあつて今の姿を維持して  
いる。

「ワオオオオンツツ!!」

「ヒヒヒン!!」

ゴスペルとパッションナーが迷子の情報が表示された端末を首などに掛けながら浜辺  
を行き交う。

各々が自分で出来る事をしている中。

「・・・・・・・・」

アースは何もしていないかった。

正確には何もしていないのではなく何も出来なかつたのである。

既に言うまでも無く食材の調理は無理。

であればかき氷ぐらいはと思つたのだがカットした氷を二個砂浜に落とした時点で  
『これ以上は損失になるわ』とネプチューンに止められた。

その上、潔癖症な所もあつて接客や迷子の対応など出来る筈も無い。

結局ワイリー基地に居る時と変わらずに完全にぼっちとなつてしまう訳なのだが。

「う〜ん．．．これはちよつと予想外ね」

遠目にネプチューンがアースの様子を見て思わずぼやく。

アースがその性格故に戦闘行為以外の事がからつきしなのは分かつていたが、ここま  
で酷いとは思わなかつたのである。

ネプチューン自身もモノを作ると言う概念はワイリー軍団に入つてから得た物だ。

自分出来るのであればアースにも出来ると思つていたのだが、少々甘い考えであつ  
たか。

「フィーネちゃんも居るから何とか引つ張つてくれるかなとか思つただけど．．．」

自身はアースそつちのけでテキパキと働くフィーネの姿にネプチューンは逆に感心  
する他無い。

何でも学習進化プログラムの試験機との事だが、元々の性格もあり一度覚えた事は殆  
ど間違えずに行えるだけの高い適応能力をフィーネは持っている。

まるでアースとは対照的だと考えた所でネプチューンは視線を彼女から逸らす。

勘の良い彼女の事だ。

自身を見ている事で馬鹿にされていると思つてしまうかも知れない。

そこまで考えた所で海の家がある浜辺に見知った人物達がやって来る。

「キヤハハハハ!!海だ〜水着だ〜恋だ〜!!」

まずに甲高い声を上げるのはヒートマン。

「お〜いお前ら頑張ってるか〜」

気楽な様子で一同に手を振るのはメタルマンだ。

そんな彼らと道中で合流したのかアイスマンとタイムマンを荷物持ちにしたロールと同じ様にカリンカの荷物を脇に抱えるのは、潜水艦を思わせる姿をしたロボット。

リングマンと同じくコサックナンバーズの一人ダイブマンである。

先の襲撃事件の後にリングマン一人では護衛任務の荷が重いと判断したコサックの判断で、急遽彼が招集されている。

これはリングマン自身がロボットポリスの仕事がある為であり、コサック個人の護衛にダストマンとファラオマンも派遣されている。

結果として半分のナンバーズが派遣された訳だが、先の式典襲撃を行ったロボットの實力を鑑みるに過不足ではないだろう。

「あら〜ロールちゃんに皆、それにダイブちゃんまで〜」

クネクネと上半身を揺らしながらネプチューンが面々に声を掛ける。

「どうも〜ロックがお世話になってます〜」

「いえいえこちらこそ。ロックちゃんのお陰で大助かりよく本当にありがとう。後でライト博士にもお礼をしなくちゃ」

ロールとハイタッチをしながらネプチューンは彼女に満面の笑みを浮かべる。「なんで敵に礼なんてするんだよ!!」

「他の人の倍動けるロックちゃんには倍のバイト代払うに決まってるでしょ」

ネプチューンの言葉にフォルテが大声で叫ぶがそれも真顔で返され低く唸る他無い。そんなフォルテにロールは腕を組んだまま得意げな顔で近づく。

「あくあく喉乾いたから飲み物頂けるかしら? ロックよりも働ける(自称)のて・い・い・んさくん」

「ぐっ……てめえ!!」

わざとらしく自身を小馬鹿にした様に口を開くロールにフォルテが額に青筋を作る。

この二人は二人で対ロックとは違う形でいがみ合う関係である。

勢い良く店の机に置かれる炭酸飲料を鼻で笑いながら受け取るロール。

「お嬢様。すぐに休める場所を設置します」

「ありがとうダイブ。それにしてもあのフィーネちゃん。話に聞いていたけど本当にテキパキ動けるのね」

その場に荷物を置くなり早速パラソルを広げようとするダイブマンに礼を言いつつ、



カリンカはロボット工学を学んでいる事もありフィーネの動きに興味があるようだ。

聞けば最初は殆ど何も出来なかつたそうだが、他の者が行う作業を観察或いは教えてもらう事で短期間の内に出来る様になるらしい。

外部的にプログラムをインストールする訳でも無く、まるで生物が環境に適応し進化する様である。

(彼女は自分の中で最適化したプログラムを構築して自分に適応している・・・もしもこれが戦闘用ロボットに応用されれば)

絶大な脅威となるのは言うまでも無いだろう。

まして彼女の制作者はあのワイリーなのだ。

恐らくその事を見据えてフィーネを製作したに違いない。

と考えた所でカリンカはロールに呼ばれた事もあり、思考を中断し彼女らの下に駆け寄る。

「アースさくん。そんな所で何をしているの？」

ロールに呼ばれアースが気まずそうに出て来る。

「あ、いや・・・私はだな」

戸惑った様に口を開くアースであったが。

「この女、役に立たねえんだよ。俺みたいに簡単な作業も出来やしねえ!!」

鼻を鳴らしながら言うフォルテの言葉がアースの胸に突き刺さる。

一連の事もありすつかり自信を喪失していたアースは一瞬涙目になる。

バキツツ!!

そんなフォルテにお見舞いされるのはダイブマンが広げようとしていたパラソルの一撃。

「て・・・てめえ!!」

フォルテはパラソルを手に自分を睨み据えるロールに拳を握り締めるが。

「役に立たないとか、そんなの彼女が戦闘用なんだから当たり前でしょ!! だったらやり方を教えて上げなさいよ」

「んだとっ・・・!!」

今にも殴り掛かりそうなフォルテにロックとアースが慌てて止めに入ろうとするが。

「二人はすつこんでいなさい!!」

とロールに凄まれ後ずさるしかない。

暫しの間、二人の口論が続きアイスマンやタイムマンも含め一同は見守る他無い。

見れば周囲の観光客もその光景に釘付けだ。

「もう分かったわ。本当は海を楽しみたかったけど。私がアースさんを仕事を出来る様に鍛えてあげるわ!!」

「やれるもんならやってみな!!この潔癖女が俺ら並に働けるようになったら土下座でも何でもしてやるぜ」

「言ったわね。ついでにケツを棒で叩いてやるわよ!!」

互いに子供レベルの口論となるのをやっぱり一同は見守る他無い。

「ケツバット〜ロールちゃんのケツバットだ〜。キャハハハ〜」

「フォルテ〜大人になれよな〜まあ面白くなりそうなんでヨシ!!」

ヒートマンとメタルマンの茶々にパンクは深々と溜息を吐く。

「お兄ちゃん。ケツバットってなに？」

その隣で自身に教育上宜しくない言葉を問うてくるフィーネにパンクは呻く。

「フィーネが知るにはまだ早い・・・他の者達に聞いてもいかならな」

「私は大人だもん!!ケツバットってなんなの〜?!」

慌ててその言葉を忘れさせようとするパンクだが、子ども扱いされた事にフィーネが頬を膨らませてくる。

このフィーネもそうだが見た目とは裏腹に負けん気の強い所がある。

ロールと言いついてどうして女子ロボは気が強いのかと。パンクは内心で頭を抱えるのだった。

一方である……現在より僅かに時は遡る。

キングの後継機として造られた『ルーク』のコードネームを持つレントは路地裏でロボットポリスとアイアンナイツ達に取り囲まれていた。

テュポンやソローとの戦いで己の弱さを実感した彼女は、このままではいけないとまずは単身で基地の外に出歩き帰って来る事を目標に外出したのだが。

元より周辺の地理に明るくない事もあつて道に迷つたばかりか、運悪く遭遇したアイアンナイツとロボットポリスに不審者として事情聴取を受ける事となる。

「所属と登録IDを確認させてもらえるかな？」

「あの……その」

仮に他のナンバーズが居ればあしらう事が出来たのであろうが、その点では彼女はまだその手の事に場慣れしていなかった。

その上、今の彼女は武装を殆ど解除しており殆ど丸腰だ。

果たして自身がワイリーナンバーズであると言うべきなのかも分からない。

黙り込むレントにロボットポリスの一人が端末を手にした時だった。

「ハイへ〜イ!!ポリスメ〜ン。可愛い女の子ロボを取り囲んで何やってるんだYO〜。まさか俺っちみたいになンパじゃやないだろうな〜?」

文字通り地面を滑りながらやって来るのは真つ黒なボディのタラコ唇が特徴的な口

ボット。

他のライトナンバーズ同様に街の警備を手伝っているオイルマンだ。

「いや怪しいロボットだと思った訳で」

「怪しいって道に迷ってるだけじゃないかY O O。まあ仕事だつて分かってるけどこんな可愛い子が悪い事をしそうなロボに見えるのか？」

「た・・・確かに見た所、何も武装はしていなさそうだし」

「H A H A H A O Oじゃあ問題ねえじゃん。あんまり無理矢理な捜査すると警察の評判落ちるぜ」

ロボットポリスにあれやこれやと言いかめ、最終的に解放されるレント。

とは言え登録IDの確認はすべきとロボットポリスの一人が口を開きかけたその時だった。

＜緊急だ。三番通りにて姫を発見。ワイリー軍団所属のロボットと行動を共にしている模様!!近くににいる者は直ちに応援に向かえ＞

「・・・了解!!」

仲間からの通信に血相を変えてロボットポリスとアイアンナイトの面々は走り出していく。

「忙しい奴らだY O O。まあそれはそうとお嬢さんのID確認させてもらってもいいか

い？それと連絡先も良ければ？」

ロボットポリス達を見送りオイルマンはレントに気障っぽい笑みを浮かべる。

「ロボットなら皆持つてる筈だYO」。別にお嬢さんがそこの工場や雇い主とかから逃げて来たロボットでも警察には通報しねえから。まさかワイリー軍団な訳もなさそうだし……」

実際に各都市のスラム街には製造元から逃走したロボットなどが潜伏する事例がある。

オイルマンなどは本人が犯罪をしなかったから問題にはならなかったが、長らく行方不明になっており一種の不法ロボットと言う扱いであったのでその辺の事情にも詳しい。

オイルマン自身、レントの事をてつきりこの辺の事情を持つロボットと判断して助け舟を出したのだが。

「あの……私」

若干口籠るレントにオイルマンは相変わらずのペースだ。

「おつと女性に対して質問をする前に自分から名乗るのが礼儀だな。俺つちの名前はオイルマン。色々あったんだけどこれでもライトナンプーズの一人なんだYO」

「私は……WKN・003のレントです。だからその……ワイリー軍団の一員です」

「へッ．．．？あのワイリーが君みたいな可愛いロボ造つたのかＹＯ？」

自身の出自を話すレントにオイルマンは目が点となる。

暫く困惑していたオイルマンであつたがすぐさま元の調子を取り戻し。

「まあ細かい事には気にしないＹＯ。ともあれお嬢さん．．．一緒にお茶でもしなくない？」

そこら辺に生えていた花を取りレントへ差し出すオイルマン。

とにかく気障つたらしい姿だが、何度も言う様にまだ本格的に稼働して日が浅いレントにこの手の免疫は無かつた。

「お茶ですか．．．？はい、分かりました!!」

一瞬間つた様な顔となるもすぐさまにそれに応じるレントにオイルマンは、自分で言っておきながら彼女に不安を覚える。

（こりや絶対に夜道を一人で歩かせちゃいけない子だ）

彼自身もナンパな台詞はあくまでも女性への礼儀であり、断られるのが前提で言つた所があるのだがそれを言葉通り受け取る彼女にあまりにも無垢だ。

「だったら俺つちが美味しい店知ってるから。すぐに表に出ようぜ」

レントの手を繋ぎながらオイルマンは路地裏から表通りに出ようとすする。

店を知つていふと言つたが殆どこの街の事は把握してないにも拘わらずである。

ロボットポリスから解放された安堵もあるのか自身に笑みを向けてくる少女にオイelmanは内心で焦りを覚えつつも、顔に何時もの表情を張り付けつつ道を歩くのであった。

「ガーツハツハツハツハ!!ものの見事に作戦は失敗かあ」

自身らが身を潜める廃工場にて己らを嘲笑うソローにアルゴスがジロリと視線を向ける。

「.....」

ヴオイドはそれに反応を示す事は無かったが、アルゴスの方は表前こそ感情を露わにしなかったが内心で苛立っているのが分かる。

「ボーンダインが先走ったからだ.....だが奴を制御出来なかったのは私の責任だと認めよう」

アルゴスが巨大な目を蠢かせながら唸る。

「それで.....どうするんだ?今更要人共を襲撃するのはリスクが大きすぎるんじゃないやねえか?」

個々が圧倒的な実力を持っている面々だが無敵ではないし、あまり事を大きくしすぎるのも本来の目的を逸脱してしまう。



思案する様に唸るアルゴス。

そんな一同の前で闇が大きく盛り上がる。

やがて闇はローブを身に纏った一体のロボットへと姿を変えた。

「全くなんですかあのボーンダインは・・・」

開口一番にフアントムマンが言い放つのはその場にいる面々と同じく厄介者への文句であった。

「今回の様な慎重を要する任務には不向きなのでは？」

「それに関しては私の認識不足であったと認めよう・・・それで聞きたいが」

ローブの奥にある瞳を不快気に吊り上げつつ口を開くフアントムマンに小さく頭を下げながらアルゴスは逆に問う。

「姫の方はバレードと共にロボットポリスに追われネプチューンの海の家に住みますよ。戦えなくなつたあの女も一緒です。まああそこにはロックマンも居ますので留意した方が良いと思います」

「海の家・・・？」

フアントムマンの言葉にソローが首を傾げる。

「海水浴を楽しむ者共に飲食を提供する店の事だ。そこにネプチューンが経営するそこに姫が逃げ込み、ついでにアースとロックマン達がいると言う事だ」

この星の文化を完全に理解しているとは言いがたいソローに補足する形で、今まで黙っていたヴォイドが口を開く。

「働いている？ ロックマンはともかくあの女、全く以つて役に立たないと言うのに本当に石潰しも良い所ですよ」

吐き捨てる様にアースへの文句を口にするファントムマンにソローが豪快に笑う。

「ともあれ……その海の家とやらに姫が居るのだな？」

「……はい」

アルゴスの問いに頷くファントムマン。

暫しの間、巨大な目を蠢かせていたアルゴスはじつと崩れかかった天井部を見つめる。

「エキドウナ……エキドウナは居るか？」

アルゴスの呼びかけに応じる様に暗闇に閉ざされた天井部が蠢く。

「アルゴス様……お呼びですか？」

巨大な何かが蠢く中でアルゴスはエキドウナと呼ぶ存在が居るであろう天井部を見つめていた。



こういう時に見栄を張ったりしても意味は無いと彼は判断し、自身の身の上を隠す事無く話す。

ワイリーの世界征服計画による混乱と破壊の中で気を失い、次に目が覚めた時にはどこの場所とも分からぬ所であつた事。

今思うにビルが倒壊した際に瓦礫の中に埋もれてしまい、そのまま瓦礫ごと処理施設に運ばれてしまつたらしい。

目覚めた当初は自分が何者なのか分からず一種の記憶喪失状態であり、怪しげな連中に拾われて彼らの機械の整備を手伝わされていた。

彼らはロボットを使った強盗などを行う犯罪者集団でややあつて彼らはロボットポリスの手で逮捕される事となるのだが、オイルマンはロボットポリスが踏み込んで来た際に自身も処分されてしまうと思ひその場から逃亡。

行く当てもない逃亡劇の末に出会つたのが似た様な境遇でライト博士の下から離れたタイムマンであつた。

彼の方は彼で今となつては勘違いだつたのだが、自分が失敗作だから捨てられたと言つて居たのだが彼のお陰で自分がライトナンバーズである事を思ひ出す事が出来た。

オイルマンはそんなタイムマンと共にライトナンバーズからはぐれる形で生活をしていたのだが、キング事件の際に迫り来るキング軍団を相手に孤軍奮闘していた際に現

地に派遣されたカットマンらと出会う事となる。

結果としてタイムマンの勘違いが判明し、今回漸く家族が一つになった訳だが。

「まあここまで来るのに色々あったけど俺たちは後悔してないYO。ライト博士も俺たちやタイムを見て泣きながら抱き着いて来たし。いや俺たちの生みの親は俺たちらロボットの為に泣けるような人なんだ。って考えると本当に尊敬って・・・あれレントちゃん？」

とそこまで話していた所でレントの頬に涙が流れ落ちている事に気づき、オイルマンは言葉を切る。

「俺たち・・・何か変な話でもしてしまっただか」

慌てて彼女を宥めようとするオイルマンの言葉を遮る様にレントの方が抱きしめ始める。

「ふえええええんっ!! オイルさんっ!! 私、オイルさんの話を聞いて本当に感動しました。実は私、この前の戦いで大した活躍も出来ずに居て。次の作戦の主力なのにどうしようって世界征服なんて全然向いていないって思っていたんです。でもそんな私に比べたらオイルさんの方が凄く苦労して苦しんで・・・わああああんんっ!!」

そもそもたった一人で街に出たのも自分に自信を付ける為であったのだが、オイルマンの話を聞いたレントは自分の境遇に比べれば彼の方が断然重かったと思ったのだろ

う。

途中から殆ど嗚咽交じりになって何を言って居るのか分からなくなったのだが、とりあえず自分の様な者の苦勞話を聞いただけで泣き出す彼女にオイルマンは照れ臭くなる。

次いで言うと思いつきり彼女に抱き締められている事にもだが。

「は〜い・・・次」

と間が悪く観覧車が地上に辿り着いた事で一人のロボットが入り口を開けてくるのだが。

「・・・！！」

自身を抱きながら号泣中のレントをそのままにロボットで目だけで訴えかけるオイルマン。

「・・・そのまま延長戦でどうぞ」

そう言われ再び閉められる扉。

相手が空気が読める相手で良かったと思いつながらオイルマンは彼女の背中を落ち着かせるように擦る。

「可愛い女の子に涙は似合わねえよ。でも俺たちの為に泣いてくれたのは本当に感謝だぜ」

オイルマンは心優しい彼女に声を掛けつつ、彼女が泣き止むまでそのままの姿勢で居続けるのであった。

「はあくお熱い事で」

そんな二人を横目に遊園地で働くロボットは深々と溜息を吐く。

二週目どころか最終的に三週も回る事になる二人なのだが、ロボットことかつてキング軍団の幹部であったダイナモマンはやって来る客を次々と観覧車に乗せていく。

キング軍団に参加したのは自らの意思であったが、無理な改造もあり周囲に電気を撒き散らしてしまう体質になった彼だが、元々が子供好きの性格もあつてかロック達に敗れた後は他の面々と違い改心し現在は保護観察中の身である。

確かにロボットへの人間達の対応には不満があつたが、何も滅ぼすまではしなくてもと言うのがダイナモマン個人の考えである。

その為、彼個人が行つた侵略及び破壊活動はどこか手緩い物となつてしまつた所があり、それが此度の寛大な処分に繋がっている。

(ライト博士達にも迷惑かけたし頑張らないとな)

そう言つて自身の仕事に集中しようとする彼だが。

仕事の合間にふと向けた視線の先において、遊園地内の池でスワンボートを漕ぎながらロマンチックなひと時を過ごすオイルマンとレントの姿が見えた。

ややあつて互いの唇を重ねる二人を見てダイナモマンは思うのだ。

(事故に見せかけてライトニングボルトでもやっちゃおうかな……)

幸いと言うべきか仕事の忙しきでオイルマンの頭上に雷が落ちる事は無かった。

「済まないが……中の捜査を」

と言いかけて入ろうとしたリングマン以下のロボットポリスの面々だが厨房に居たロールに睨まれ動きが止まる。

彼女の前には両手の指を中心に傷だらけにしたアースが涙目で焼きそばを作ろうと  
していた。

「……何よ」

ギロリと視線を鋭くしたロールにリングマンは呻く。

「……この近くで行方不明者に似た者が居たと目撃情報が」

「私達は見えてないしそんなの知らないわよ。て言うか邪魔だから出て行ってくれるか  
らっ」

若干臆しながら話すリングマンに眼光鋭く言い放つロール。

アースに半ば強引に家事能力を身に付けさせると言ったロールだが、アースの方は壊滅的なまでの家事能力の無さには半ば閉口してしまう。



彼女ですらも向いていないと言いそうになったのだが、『それ見た事か』と勝ち誇った顔となるフォルテを見るや彼女の對抗心に火が付いた。

海の家の奥にある厨房を借りるや彼女は付きっ切りで料理を教える事となるのだが。

「そこ焦げてるっつ!!早く裏返して!!」

「わ・・・分かった」

ロールの言葉にアースはすっかり委縮した声を上げて慌てて焼きそばをかき混ぜる。

彼女の指導を始めて二時間近く、漸くと言うべきか形になる物が出来て来た事で

ロールは満足げに頷き。

クルリとリングマン達に振り返る。

「とりあえずこれあげるから。邪魔しないでくれます?」

アースが作った若干焦げた焼きそばを数パック程、リングマン達に渡しながら彼とロボットポリスを海の家から追い出すロール。

「あの・・・警部」

「・・・仕方が無い」

「ですがこの浜辺で身を隠せるのはここぐらいしか」

「お前はあそこに踏み込めるのか? 私には無理だ」

部下の一人が意見してくるがリングマンはあそこに踏み込んで無事で済む自信が無

い。

店先で店番をするロックやカリンカ達も知らないと言っていたのだから、信じる他無  
いだろう。

『お仕事ご苦労様』とニコニコ笑みを浮かべてくるカリンカに頭を下げながら、リングマ  
ンは浜辺を後にしようとするのだが。

そこまで来て彼は自身に先程から背を向け続けているダイブマンの存在に気づく。

「ダイブ・・・お前にはお嬢様の護衛を任せて」

と言いかけてリングマンは言葉を切る。

対してダイブマンは背を向けたまま無言だ。

「・・・おい」

「お・・・おう。ご苦労さん。なんて言うか色々大変だな。要人の護衛ばかりか行方不明  
者の搜索だなんて・・・姫と一緒に居る野郎とか見つけたら俺も通報するから」

背を向けたまま若干棒読みで話しかけてくるダイブマン。

リングマンは見えない形となったのが彼の後ろでロックとフォルテの顔が引き攣る。

次いで言うとうとパンクの眉も動き、バブルマンが小さく舌打ちをする。

(行方不明になったのは少女とだけしか言っていないんだがな・・・成程)

嘘をつくのが苦手な様子ダイブマンは悟られまいと必死なあまり逆にばらしてし

まう結果となる。

「警部殿ー!!ここには姫様なんて居ないであります!!」

敬礼をしながらパツシヨナーが口を開いて来るが速攻でバブルマンに黙らされる。

ともあれその場では事を荒げるつもりはないリングマン。

(まあワイリー基地に居られるよりかはまだマシだろう)

と言うのがリングマン個人の考えだ。

「ダイブ・・・お嬢様と一緒に居る方々もよろしくな。とりあえず・・・後でまた来る事にするが馬鹿な事は考えるなよ」

相変わらず背を向け続けている彼の肩を叩きそう囁きながらリングマンはその場を後にしていた。

数分ほどして彼らが居なくなったのを確認したのもあって、海の家の中から顔を出すのはバラードとプライドだ。

「ちよつとアンタら、馬鹿じゃないの!？」

真つ先に噛みつくのはロールだ。

手にしたスイカ割り用の棒でパツシヨナーを張り倒した後、彼女はダイブマンに詰め寄る。

「いやだつて俺にはそう言うの無理だつて・・・」

ダイブマンは両手を広げながら言い訳をする。

コサツクナンバーズで最も巨漢の彼だが、やはりというかロールには敵わない。

「まだ強引に踏み込んでこないだけ良心的だった・・・と考えた方が良いわね」

どこか諦めがちに口を開くのはプライドだ。

「リングマンの事だから今回だけは見逃してくれたのだろうけど。恐らくこの周辺は固められたと見るべきね」

「・・・と言うと?」

「つまりは今からワイリー基地に隠れる事は無理だつて事。そしたら速攻で確保されるに違いないわ」

カリンカの言葉に質問をしたロックを含め全員が苦笑いをする他無い。

ロボットポリスに追われたバレードとプライドが逃避行の末に辿り着いたのが、奇しくもネプチューンが経営する海の家であった。

様々な目撃情報から場所の目星をつけたリングマン達がやって来たのが、その翌日の朝の事である。

「あのリングマンは多分だけドナイトマン達を呼びに行ったのよね」

自嘲気味に笑みを顔に作りながらプライドはその場に座り込む。

「ねえねえ・・・どうせならお姫様も海を楽しんだら?」

ネプチューンの言葉にプライドが首を傾げる。

「逃げ出した理由はさて置きもう連れ戻されるのは確定したんだから、限られた場所と時間を使って遊ぶだけ遊んじやいなさいな。普段はこーやって好きにする事も出来ないでしょ?」

続けざまに言い放たれる言葉にプライドは困ったように唸るのだが。

暫しの間、考え込んでいた彼女だったが意を決した様に頷く。

「ええ……そうね。こーうなったら遊び倒してやるわ!!」

と拳を握り締めた所で黒塗りのリムジンが海岸前の道路に停まり、中からエストとロウファが買い物袋などを手に出て来る。

当初は単身でバードらを追いかけたエストであったが、ロボットと人間では身体能力の差もあり途中で疲れて休んでいた所をたまたま通り掛かったロウファのリムジンを停車させるとそのまま足代わりに利用し夜通し走った末にこの場所に辿り着いていた。

「え……カリンカさん!?! て言うかプライド姫も!!」

とロウファが驚くのはさて置きである。

プライドはエストが持っていた買い物袋から水着を取り出すとそれを片手に海の家更衣室へと入っていく。

「あれ・・・？何が起こったの？」

首を傾げるエストにパンクは頬を搔く。

「何と言うか・・・色々と吹っ切れたみたいだ」

そう言つてパンクはトラブル担当の仕事に戻つていく。

フォルテが面白くなさそうに鼻を鳴らす中、水着姿のプライドが出て来るやヒートマンが勝手に燃えあがるのだが即座にバブルマンに水を掛けられたのは言うまでもない。

「・・・・・・・・」

何時に無く神妙な顔で氷の塊をかき氷機にセットするアース。

少し前まで氷を手にするなり滑つていた事を考えるとセットできるようになつただけでも十分な進歩と言えよう。

ロールが彼女に料理を教え始めてまるっと一日が過ぎている。

時刻は既に夕暮れとなつており海水浴客も殆どが居なくなつていた。

「後は氷を押さえて・・・このレバーを回す」

ロールやロツクに言われた事を反芻しつつアースは慎重に回していく。

下に置いた器に小さくなつた氷が出て来るのを見るにアースは満足げに頷くのだが。

「こんなの誰だつて出来るっての・・・」

とやはりと言うか悪態を衝くのはフォルテ。

鋭い視線で睨み返そうとするアースだが今は自分が出来た事が嬉しいのかすぐに笑みを浮かべる。

「ど・・・努力すれば出来ない事は無いのだな」

自分で作ったかき氷を口に含み自然と表情が緩む。

「ロール。お前のお陰で多少は作業が出来る様になった。礼を言うぞ・・・」

常に険しい顔を浮かべている印象が強いアース。

逆に最近では戦闘能力を失った事もあり沈んでいた事が多かったのだが、漸くと言うか本来の顔となりつつあった。

「どういたしましたして。まあ女性だから絶対に家事が出来なきやつて訳じゃないけど。出来るに越した事は無いからね。アースさんは美人だし色々と勿体ないから」

ロールの方もまんざらでもない顔で微笑むが不意に思い出した様に日中にスイカ割り用に使った棒を慣れた手つきで拾う。

「・・・と言う訳で今からアンタのケツバットね」

「あ？てめえふざけんなっつ!!俺は了承してねえ」

棒を片手に薄笑みを浮かべるロールにフォルテが思わず立ち上がるのだが。

「つたく・・・あの姫と言いお前らと言い互いの立場つてのを理解してやがるのか？まず

に俺らは敵同士だ。それをこんな形で馴れ馴れしくしている暇は」  
「……………」

片手を大きく横に払いながらフォルテが言うのをロックは一瞬寂しげな表情を浮かべる。

「この星の言葉で昨日の敵は今日の友って言うじゃないの？」

「だから俺はこいつらと馴れ馴れしく……」

ネプチューンの言葉にフォルテが声を荒げようとするのだが。

ロックもそうだがアイスマンと一緒にジューズを飲んでいたフィーネやカリンからが振り返って来る。

壁にもたれながら無言で佇むパンクも含めこの場においてロック達と積極的に敵対するつもりは無いのが窺える。

自分が孤立無援な状態である事に気づきフォルテが唸りながらその場を後にする。

「馬鹿よね〜」

呆れた様に言うロールの言葉はどこまでも容赦無い。

「私もそうだし兄達も同じく貴様を倒しワイリー様の世界征服を達成すると言う事を諦めた訳ではない」

今まで黙っていたパンクが静かに口を開く。



彼の言葉にアースがかき氷を作りながら同意とばかりに頷く。

「だが今はその時ではないと私は考えている。お前達と戦うのはワイリー様が次の計画を立てた時だ。ともあれフォルテの様に場所を問わず喧嘩を売るほど若くも無いしな」  
最後の方は自嘲気味だったがパンクの言葉が現在のワイリーナンバーズの総意を代弁した物と言えよう。

(でも僕は・・・フォルテや君達とはどんな形にしるこれ以上戦いたくはないんだけどな)  
言葉にした所でパンク達の意思を変える事は出来ないのは分かっているだけに口にしないが、ロック自身可能であれば争いは避けたいと考える。

キング事件の際に一時的に共闘したとは言え、自身らと彼らの間には見えない壁がある事を感じてしまう。

まあだからと言って彼らとの和解を諦めた訳ではないのだが。

「・・・あら？もしなくてもアンタは!？」

とネプチューンが驚いたような声を上げたのでロックはそちらの方に顔を向ける。

店先に姿を現していたのは黒紫色の巨漢のロボット。

鋭い眼光と時折折全身より放出される漆黒のオーラはロックの様な温厚な者でも反射的に身構えていた。

「き・・・貴様は!？」

練習用に作っていた焼きそばをひっくり返しながらアースが叫ぶ。

その声色には普段の彼女なら決して含まない怯えの念が含まれていた。

「て・・・てめえ!!」

フォルテの方も即座にその場にあった棒を片手に身構えるのだが。

「戦えねえ奴と戦うほど俺様も無粋じゃねえよ。それにしても久しぶりだなネプチューン。そういうや南米の方じゃ会わなかったな」

巨大な右手をフォルテに向けつつ戦う気は無いと言う彼はネプチューンの方を向く。

「この星にデューオと一緒に落ちて来た時にはびっくりしたわよ。あの時、私達とは運良く会わなかったけど。ともあれお久しぶりねえソロー」

ネプチューンの言葉に悪のロボットたるソローは小さく鼻を鳴らす。

南米でフォルテらを前に圧倒的な力を見せつけたソローは何を思ったのか単身でロック達の前に姿を現していた。

「この星に来てお前さんらも変わったと聞いていたが成程な。モノを作る概念が無かったお前さんらがと考えるとなかなか愉快になってやがるな」

喉を鳴らしながら海の家の経営が板について来たネプチューンと料理を作ろうとしていたアースに目を向けるソロー。

「貴様・・・!!」

侮辱されたと思ったのか焼きそば返しを手にするアース。  
だが彼女の強がりもそこまでだった。

「別にやるなら構わねえが．．．戦いとなれば今のお前さんでも俺様は容赦しねえぞ」  
圧倒的な殺気を向けられアースの顔が青ざめる。

反射的に後ずさる自身の醜態に彼女は更に屈辱を感じていた。

「まあそれはそうと．．．だ」

アースは捨て置き彼はロツクを頭上から見下ろす。

「お前さんがロツクマンか？」

「そ．．．そうだけど」

「じゃあ聞くがサンゴツドを倒したつてのは本当かあ？」

「確かに彼とは戦った事があるけど．．．」

自身に質問をするソローにロツクは戸惑いながらも答える。

アースらを生み出した異星の文明において最終兵器とされたサンゴツド。

確かにロツクはそのサンゴツドと戦い彼に対して勝利を収めている。

彼を目覚めさせたワイリーの制御すら受け付けず暴走し、圧倒的な力を見せつけた彼を一体どうやって倒せたのかロツク自身も殆ど分からないと言う印象が強い。

エンカー達キラーズやルーラーズの面々達と繰り広げられたワイリースター内での

戦いでワイリーの下に辿り着いた時点でロックの状態は殆ど満身創痕と言える物であった。

普通に考えれば勝てる筈など無い相手であったのだが、結果としてロックはサンゴツドを倒し見事生還を果たしている。

「普通だったら信じたくはねえが・・・そうか。お前さんにサンゴツドは倒されたか」  
考える様に唸るソローは暫しの間、ロックを見据えていたのだが。

何を思ったのか彼は掌から一つの水晶体を店のレジに置くや余っていたフランクリトを指差す。

「代金代わりにそれやるから・・・これとかき氷とか言う奴をくれ」

超エネルギー元素と同質の物体と引き換えではあまりにも釣り合わないのだが、ソローの注文にロックは困惑しつつもそれらを渡すのだが。

「フン・・・まあこれを食べようとしてみたくなる気持ちは分からんでもない」

おおよそこの手の物を食べる姿は似合わないが異星のロボットである彼にも、食事をする機能が備わっている事にロックは共感めいた感情を抱く。

「そういうボンダインの野郎が派手に暴れやがったみたいだな。まあ俺様個人は不参加だったんだが、予定では式典とやらに集まった要人らを殺すつもりだったのさ」

かき氷を巨大な手で混ぜながら言うソローの言葉にカリンカがハッと表情を変える。

「まあそれもこれもボーンダイスが勝手に突っ込んでご破算。俺様よりも暴走する奴が居るとか笑えねえ話だよなあ」

どこか他人事の様さに話す彼だったが一人の少女が前に来た事もあり、怪訝な表情で片目を見開く。

「なんだあ？この星のお嬢さん・・・質問でもあるのか？」

「・・・そうよ。貴方に聞きたい事がある」

察しの良いソローにカリンカは震えそうになる身を必死で抑えながら息を吸う。

ソローがその気になれば無造作に片手を振るうだけで、カリンカを簡単に殺す事が出来るだろう。

「ボーンダイス・・・その暴走したと言うロボットだけど。あれは私が知っているロボットと同じ声をして私の名前を呼んだ。あれは・・・」

「あいつの事は俺様も知らねえな」

カリンカの問いにソローは首を傾げながら言う。

「まあ俺様はあいつの事を骨野郎と呼んでるがな。中身のコアユニットが骨格だけの姿なんぞなあ」

喉を震わせながらソローはかき氷を食べ終え考えこむ様な顔をしたままのカリンカを見下ろした時であった。

ヴヴヴヴヴツツ!!

不意にカリンカの後ろで空間が歪むのを見たソローが彼女の胸倉を掴むやそのまま強引に引き寄せる。

突然の動きにダイブマンは勿論の事、ロック達も身構えるのだが。

「ちよつと・・・何!!ロック・・・たすけっ!!」

全員の意識がカリンカとソローに向いた隙を狙ってか今度はロールの悲鳴が響く。

ロックが彼女の方に振り向いた時にはロールの体は空間の割れ目に吸い込まれ消えてしまう。

「なにが・・・ぐむっ!!」

「えっ・・・!?!」

アースが声を上げようとするが背後から伸びた腕がその口を塞ぐ。

見ればフィーネも片足を掴まれ空間の割れ目に飲み込まれていく。

一瞬の内に三人がその場より消えた事でソローが大きく舌打ちをするのだが。

「あれく?何かあ・・・」

そう言つて顔を出したエストだが彼女もアース同様にどこからか伸びた手に捕まれ声を上げる間も無く割れ目に飲み込まれる。

ヴヴヴヴヴツツ!!

再度カリンカを捕獲せんと伸びる腕だったが真つ先に反応を示したソローがその腕を掴む。

「誰だ．．．？お前さんはあ!!」

声を上げたソローであったが、突然自身の眼前に妖艶な美女の顔だけが浮かぶ光景にさしもの彼も一瞬だけ反応が遅れる。

「邪魔よ．．．石になりなさい!!」

カツと光を放った視線を覗き込んでしまった事もあり、ソローの全身が言葉通りの石化の浸食が始まる。

「お前さんは．．．アルゴスの．．．？」

呻く様な声と共にソローが完全に石像と化す中でカリンカの襟首を軽く持ち上げた腕は彼女すらもあっさりりと連れ去ってしまう。

その間、僅かに十数秒の出来事だ。

ロツクを含めフォルテやパンク達、高性能ロボットが複数人居たにも拘わらず何も出来なかった。

唯一反応を示せたソローもただの石像と化してしまっている。

「あ．．．兄貴つつ!!プライドが．．．」

血相を変えてバラードが外より戻って来るが何が起こったのか確認するまでも無い

だろう。

一瞬の内に女性達を攫つた存在に何も出来なかつた彼らは茫然とする他無いのであつた。



## V O I L O 凍てつく軍団

「私なんて最初から居ない方が良かったのよ」

と波が打ち寄せる海岸を見つめながらプライドは口を開く。

バラードはその隣に立ちながら彼女の言葉を無言で聞いていた。

リングマンに居場所を特定され自身が連れ戻されるのが確定的となった事から、完全に吹っ切れたプライドはあれから水着に着替え遊んでいたのだが今は白のワンピースに身を包んでいる。

普段の高慢な姿とは対照的に今は気持ち的に沈んでいる事もあり、一見するとお淑やかに見える。

まあ普通に一国の姫なのだからそれが普通か。

「私のカンパネラ公国がキング軍団に執拗な攻撃を受けたのは知っているでしょ？」

「ああ・・・欧州の方にはパンク兄貴と一緒に派遣されてたツスけど。確かにあれは酷かったツスね」

バラードはカンパネラ公国の惨状を思い出す。

国家の理念として人類とロボットの平和共存を掲げていたカンパネラ公国であった

が、それ故に人類抹殺を掲げるキング軍団に事件発生当初より激しい攻撃を加えられる事となる。

国土の殆どは焼け野原となり、国民にも多数の死傷者が出たのだが公国出身のロボツト、ナイトマンや駆け付けた政府軍やワイリー軍団の奮闘もあつてか辛うじて国として陥落する事は無かつた。

とは言え被つた被害はあまりにも甚大。

被災した国民を守る為にプライドの父である公王はある苦渋の決断を下す事になる。

「今回の歴訪が終わつたら私は顔も知らない男と婚約をしなくちゃならない・・・そんなの絶対に嫌!! だけどそうしないと・・・お父様達が」

プライドの言葉から彼女が逃げ出した理由が漸くバラードにも理解が出来た。

要はキング事件での被害を何らかの形で肩代わりする代わりにプライドは、その資金を出す人物なり関係者と婚約をする事になったと言う訳だ。

事実上の身売りなのだが元より我の強い彼女はそれをあつさりと受け入れる筈も無く今回の一件になつたのだ。

「公国は弟が継ぐ。最初からそんなのは私も分かっていたけどそれでも私だつて普通に恋とか色々楽しみたいし・・・それにそれに!!」

因みにと言うかプライドには年の離れた弟がおり、王位継承権の優先順位はそちらの

方にあるようだ。

何時もの様に我儘を言う勢いで声を出すプライドだが、最後の方は言葉にならず嗚咽交じりの声となる。

そんな反射的に彼女を抱きしめるバラード。

「悔しいツスけど世の中は自分の思い通りにはならねえツス。お前の親父さんには会った事は無いツスけど、自分の娘を訳の分からない様な相手に差し出すほど馬鹿じゃないと思うツスよ。それに……」

バラードは拳を握り締めプライドに白い歯を見せる。

「もしもお前が酷い目に遭ってると聞いてたら、俺らがそいつをボコリに行くツスよ」

「ほ……本当に?」

「正直我儘で気に入らないツスけど。まあ根は悪くないってのは分かるツスから。俺らは世間で言えば悪党の部類だけど知り合いを酷い目に遭わされて黙っている程、腐っちゃいないツス」

涙目で自身を見上げてくる少女にバラードが不敵に笑う。

その笑みに釣られプライドも屈託なく微笑む。

「アンタが……ロボットじゃなくて人間だったら。どこか遠くに連れて行ってもらったのに……」

「・・・え？」

プライドの言葉に反応する間も無くバラードの唇と彼女のそれが重なる。

一瞬何が起こったのか分からぬバラードは目を白黒させるが、自身から離れて悪戯っぽく微笑むプライドの顔を見て更に顔を真っ赤にさせる。

「後で連絡先教えてね・・・絶対に約束よ」

そう言う彼女に照れた様にバラードが背を向けた時だった。

ヴンツツ!!

背後で響く何かが歪む音。

慌てて振り返ったその時、プライドの姿はそこには無かった。

数秒の硬直の後、バラードが慌てて皆にそれを告げようとするのだが時既に遅し。

海の家の方でもロールやカリンカを含めた女性達は忽然と姿を消していたのだった。

「どう言う事だ!! 姫はどこに居る!？」

顔を真っ赤にしバラードに詰め寄るナイトマンを宥めつつ、ヤマトマンとリングマンが一同に事情を問う。

予想通りと言うべきか翌朝にナイトマンらを引き連れて現れたリングマン達口ボツ

トボリス。

彼はカリンカも含めた女性陣が姿を消した事に驚きつつも、ロック達から情報を収集する。

「つまりは・・・何者かに攫われたと」

「ああ・・・悔しいが何も出来なかった」

ヤマトマンの言葉にエンカーが頷く。

「まあ彼が何か知っていたみたいだけど・・・」

ネプチューンが溜息を吐きながら石となったままのソローを見つめる。

「彼はアルゴスのと・・・腕の主に言っていた。仲間同士で敵対したって事？」

ロックが首を傾げた時であった。

ピキッ!!

ソローの全身に一筋の亀裂が走る。

反射的に一同が後ずさる中、徐々に亀裂が大きくなっていき。

バリバリバリバリバリッ!!

全身を砕きながら石の下よりソローが出て来る。

「あの野郎・・・!!」

血走った目を周囲に向けながら石化を強引に解除したソローが大きく舌打ちをする。

「おい!! 貴様っつ!! 姫はどこに居る!!」

「ああつつ!?なんだあゝてめええ?」

自身に詰め寄るナイトマンにソローが鋭い双眸を向ける。

殆どの者が委縮するであろう殺気を向けられながらもナイトマンは一步も退く事は無い。

彼がその気になればこの場に居る面々全てを相手取る事も可能だが、まだこの時点でソローはある程度の冷静さを保っていた。

「あ・・あの。理由は分からないけど君はプライド姫や他の皆を攫うつもりは無かったと言う事で良いよね?」

このままでは争いになりかねない事もあり、ロックが慌てて両者の間に入る。

「当たり前だあ。なんで俺様がそんな事をしなくちやならねえ。俺様はロックマン、お前さんが居るって言うんで顔を見に来ただけだ」

ギロリとロックを睨みながらもソローが言う。

確かにソローの性格を考えれば人質を取る様な事を進んでは思えないとロックは判断する。

「ねえねえ、あれは誰の仕業なの?アンタ程の相手を石にするなんて・・そもそもどうやって相手を石にするのよ?まさか魔法とか訳の分からない事を言うんじゃないでしょうね」

ネプチューンの質問にソローは腕を組み考える様に唸る。

「あれはエキドウナとか言うアルゴスの部下の作業だ。俺様も原理なんぞは分からねえが、まさか石にされるとはな……」

思い出したのか苛立つた様に足で地面を踏み躪るソロー。

己の力に絶対の自信を持つ彼にとつて時間にして数時間程とは言え、石にされてしまった事に激しい憤りを感じていた。

「奴らめ……俺様がぶん殴つてえ。いや……それよりかは」

(こいつらにあそこの場所教えて殴り込ませるか?)

アルゴスへの個人的に仕返しも兼ねて彼らに拠点としている廃工場の座標位置を教えようかと考えた時であった。

ボオオオオオオオツツ!!

自身らの頭上で炎が燃えあがる。

小型の太陽かと思わせる熱量を持ったそれは徐々に人型へと変じていく。

「……サンゴツドのバツタもんか」

舌打ち交じりにソローが口を開く。

「ワレハ……バツタモンニアラズ。ワガナハアポロゴースト。ワレハワレデアル」

ボディの殆どを燃えあがる炎だけで構成された存在は時折垣間見える瞳をソローに

向け言う。

「彼はサンゴツドの……？」

「本人じゃねえよ。見ての通りな……」

かつて死闘を繰り広げた強敵を思わせる姿のアポロゴーストにロックが問う様に口を開いて来た事もあり、ソローが説明するよう口を開く。

「……でアポロ。何をしに来た？俺様はこいつらにアルゴスの居場所を教えようとしてるんだが」

「……ソウカ。デアレバチヨウドヨイ」

平然と裏切り同然の行為を口にするソローにアポロゴーストは一枚のメモリーチップを放り投げる。

反射的にそれを受け取ったロックは困惑気にアポロゴーストを見上げるのだが。

「ワレラハ……ソコニシメサレタザヒヨウニイル。ニゲモカクレモセヌカラ、エキドウナニツレテイカレタモノヲタスケタクバコイ」

そうとだけ言つて現れた時と同様にその場より消え去るアポロゴースト。

「手間が省けた……か。まあだつたら構わねえかあ」

ソローは薄笑みを浮かべロックらを見た後、巨大な拳を握り締める。

「アルゴス……あの野郎はとにかく気に入らねえが強いのは知ってるだろ？だからお前



さんらも全力で来い。俺様は高見の見物とさせてもらうぜえ」

自身らに発破をかける様に言い放つとアポロゴーストと同様に姿を消すソロー。

彼が居なくなつたことを確認したロックは渡されたチップの中身を端末で確認する。

「ぬうううう!!そこに姫達が居るのだな?ではアイアンナイツ!!すぐに出撃するぞ!!」

「はっ!!」

ナイトマンの号令に部下達が従うのだが。

その彼らを止めるのはヤマトマンやベンK達だ。

「・・・待て。単騎で突つ込むのは極めて危険だ。奴らの居場所を特定し強襲をかける訳では無く。逆にあちらから挑戦状を叩きつけられているのだぞ?」

「だからどうした?騎士たる者、主の為ならば罠の一つや二つ気にせずに戦う!!確かに姫は高慢ちきな娘ではあるが主は主だ。万が一の事があれば我らは・・・」

冷静になる様に諭すヤマトマンにナイトマンが言う。

そんな彼を見てリングマンが溜息を吐く。

馬鹿にされたと思つたのかギロリと視線を向けてくるナイトマンだが、そんな彼にリングマンは真つ直ぐにその瞳を向けていた。

「攫われたのはお前の所の姫だけじゃない。うちのお嬢様もだ・・・それどころかロールにアース、フィーネやエースとか言う娘もだ」

リングマンが今にも飛び出しそうなダイブマンを指差し、ナイトマンは己が冷静さを失いかけていた事に気づく。

彼だけでなくロックやパンク、アイスマンらも同じ様な表情を時折浮かべていた。

彼らもまた罠が待ち受けていようともしも大切な人を取り返しに行きたいが、それをしては意味が無い事をギリギリの所で受け入れていた。

「だが奴らも馬鹿だな。ここに居る全員に世界でも指折りの強豪ロボット達にもれなく喧嘩を売ったんだからな」

「キヤハハハハ!!ボッコボッコだあ〜!!」

不敵に笑うエンカーに続きヒートマンが口を開く。

凶らずともエキドゥナはライト、ワイリー、コサック及びナイトマンを始めとする全員が赴かねばならない状況を作ったと言える。

だが逆を言えばこの場に居る面々全てを敵に回しても問題が無いだけの力を彼らは有している事となる。

<あゝあゝ・・・ちよつとスマンが端末越しに話は聞かせてもらったぞい>

一同が顔を見合わせ頷く中、メタルマンが手にした端末より聞き覚えのある声が響く。

端末の画面に映し出されるのは数日ぶりに目を覚ましたワイリーだ。

彼はピクリピクリと眉を動かした後、フォルテとバラードの姿を見つけ指を向けてくる。

「今すぐにお主ら二人は基地に帰ってこい。武装の修理の方は先程、完了させたのである。奴らの拠点を攻めるのはそれが終わり次第でも遅くはあるまい。何せ逃げも隠れもせぬと言ったのじゃからのう……」

「漸くかよ……遅えよ」

「だがこれで俺らも戦えるツス!!」

魅力的な笑みを浮かべる悪の天才科学者に二人が歓喜する中、一人の青年がひよつこり顔を出す。

「ご無沙汰しています。ワイリー伯父さん。なんかうちの妹も攫われたみたいで……」  
「お主はヴァイスの……まあお主が居るのであれば話は早い。奴らが待ち受ける廃工場周辺から適当な理由を付けて邪魔な市民共を避難させておいてくれんか? しようもない巻き添えが出るのは勘弁じゃからな」

「了解しています。警察やロボットポリスの人手にも余裕ありますので可能ですよ。流石に我々も姫の脱走の件も然り正体不明の存在に拉致されたなんて、マスコミなんかには知られたら大問題ですからね」

身内と言う事もあるが己の指示にあっさりに従うロウファ。

ただでさえ式典襲撃と言う事件もあっただけに今回の一件は可能な限り無かった事にしなければ、ロウファ達どころか式典を主催した連邦政府への責任が及んでしまう。

「連邦政府にもある程度口止めをしておきますのでご安心を」

＜別に連邦政府がどうなろうと知った事ではないがな・・・まあ協力感謝すると言っておこう＞

通信を切るワイリーに一同が『やれやれ』と言う顔をする中でネプチューンが手を叩く。

「そんなこんなで皆、出来る限りの準備をしてから集合つて事で・・・宜しいかしら？」彼の言葉にその場にいる全員が深く頷くのであった。

「・・・エキドウナよ」

一方その頃である。

それぞれ拘束具を嵌められたまま気を失った女性達を前にアルゴスが重々しく口を開く。

「はい、アルゴス様。ご命令通り姫達を連れてきましたわ」

対して誇らしげに胸を張る妖艶な美女。

彼女の顔からはアルゴスから褒められる事への期待がありありと浮かぶ。

「我はプライド姫だけを攫えと言ったのだが……」

「どれが姫なのか分からなかったので全員連れてきましたよ」

唸るアルゴスに屈託の無い笑みを浮かべるエキドウナ。

妖艶な風貌とは真逆の幼い子供の様な表情をする彼女にアルゴスは軽い頭痛を覚えていた。

「姫はこいつなのだが……後の奴らは余計であつたな」

プライドを指差しつつロール以下の面々を面倒臭そうな顔でアルゴスを見る。

「ちよつとアンタ!!私達を攫つてどう言うつもりよ!!」

意識を取り戻し真つ先に抗議の声を上げるのはロールである。

「少なくとも貴様らを拉致するつもりは無かつたのだが……」

溜息を吐くアルゴスに残念そうな顔をしていたエキドウナ。

「アンタ、式典で襲い掛かつて来たイエローデビルの黒いのじゃない。姫を攫つて何をするつもりなのよ」

「うるさい小娘だな……邪魔だ」

尚も叫ぶロールにアルゴスが呻く中。

「……であれば始末しましょうか?」

不意にエキドウナの顔から表情が消える。

無機質な彫像の様な顔となりロール達を見下ろす彼女。

「不完全な機械の分際でアルゴス様に失礼な口を聞き過ぎよ？ 姫以外の柔らかい生き物も大した価値なんて無さそうだし」

と言うや否やロールが反論の声を上げる間も無くエキドウナが動く。

手にした刃を無造作に振り下ろした彼女であつたが、真横から延びる刃がそれを受け止める。

「……………」

「……………」

自分の首筋に突き付けられた刃を見つめロールが呻く。

そして次の瞬間には血の気が引くのだが、そんな彼女はさて置きエキドウナは自身の行為を邪魔した人物を睨み据える。

「こやつはナンバーズの順番で言えばロツクマンの妹だ。そこなカリンカなる小娘も含め、上手い具合に纏めて連れ去つたものだ。ここで殺すよりかは人質として利用した方が良いと思うのだが」

「ふむ……確かにヴォイドの言う通りだな」

仮面を被つた黒衣のロボットの意見にアルゴスが目を細める。

対してエキドウナの方は面白くなさそうに頬を膨らませるのだが。

「まあそう拗ねるな。お前もよくやってくれた」

エキドウナの頭に手を置きながらアルゴスは指を鳴らす。

それを合図に姿を現すのは爬虫類を思わせる風貌のロボット達。

「プライド以外は工場内に閉じ込めておけ。それと下手に暴れられたり仲間と通信でもされると厄介だ。不完全な機械のお前達には・・・この箱の中で身柄を拘束させてもらう」

ロボット達に持ち運ばれ工場内の独房に運ばれていく気を失ったままのカリンカ以下の人間達。

「ちよつとアンタ達。何を・・・ってどこ触ってるのよ」

持ち上げられ足をばたつかせるロールだが、両手を拘束具で固められており大した抵抗も出来ない。

まあそもそも抵抗などしても無意味だったのだが、問答無用で箱の中に押し込められ錠を閉められる。

外部へのあらゆる通信を遮断する特殊な構造となっている拘束用の箱は、防音となっているのか中でロールが騒いでいるのが聞こえるが何を言っているのかは分からない。

「相も変わらず五月蠅い娘だ」

とヴォイドが嘆息するのはさておきである。

・・・ヒヨイ。

アルゴスが気を失ったアースを虫でも掴む様に持ち上げる。

「なっ・・・お前は!？」

その時になって意識を取り戻すアースだが状況を把握する前に箱の中に投げ入れようとする。

「ま・・・待て!!」

自身が何かの中に閉じ込められるのを悟ったのか悲痛な声を上げるアースだったが、アルゴスはそれを気にもかけずに物をゴミ箱に捨てるかのように無造作に放り投げる。

箱の中に落とされた瞬間、手足をばたつかせる彼女であったが何か出来る筈も無く箱の錠は閉じられる。

ややあつて先程のロールとは別の意味での絶叫が響き渡るのだが、アルゴスらがそれを気にする事は無い。

「これは柔らかい生き物とは違うエリアに運びなさい。姫は予定通りに・・・」

エキドウナの命令に頭を下げながらロボット達が箱を運んでいく。

気を失ったプライドも更に別の場所に運ばれていく。

「さて・・・それはそうとだ」

ヴォイドがただ一人残されたロボットに目を向ける。



「全く……よくもやってくれましたね。困りますね……困るんですよ。せめて連絡ぐらいはして欲しかったですね」

黒衣のローブを全身に身に纏ったロボットことファントムマンが苛立った様に口を開く。

「まさか私が他人を攫う事はあっても逆に攫われるとは……まあ以前にもありましたがあれとは違い本当に反応も出来ずにしてやられるとは屈辱ですよ」

全身より闇を噴き出しながらファントムマンはエキドウナに鋭い視線を向ける。

「我々はラ・ムーン様の従者、凍てつく（ブリザー）軍団に名を連ねる者。我々に似た力を持った所で所詮は不完全な機械……同じ物差しで測れるとは思わない事ね」

ファントムマンの視線など意に介さずに胸を張るエキドウナ。

二人の争いにヴォイドとアルゴスは無反応だ。

「アポロゴーストを使いに出した。間も無くここに奴らが来るであろう……手筈通りそれぞれが迎え撃つつもりだが貴様はどうするのだ？」

「さて……どうしましょうかね？恐らくは私も助けるべき対象に入っているでしょうし……まあ少しこの姿で遊んであげるのも一興かもしれません」

ヴォイドの問いにファントムマンはわざとらしく首を傾げる。

「実は一度戦ってみたかったですよねロックマンとは。一応私も彼らに負けたくない

「気持ちには……私にもあるんだから」  
バサツツ。

ローブのフード部分を払い除けその下にあつた顔を露わにしながら、ファントムマンと名乗っていた少女は酷薄な笑みを浮かべていた。

## V O I L L VS他国籍連合（前編）

「ようしっつ!!これで今までの鬱憤も晴らせるぜ!!」

漆黒のアーマーを身に纏った少年が握り拳をしながら作業室より飛び出て来る。

目を覚ましたワイリーによって武装の修理を終えたフォルテである。

彼に続いてバラードもアーマーを身に纏った姿で出て来る。

正体不明の敵に連れ去られた女性達を救う為に多くの者達が出払っている事もあり、普段はロボット達で往来が激しいワイリー基地もがらんとしていた。

「留守は我々が預かる・・・お前達は言うまでもないが」

「ひと暴れして来るツス!!」

ワイリー基地において留守番を任されたエアーマンが見送る中、バラードとフォルテがそれぞれ飛び出していく。

「レントの追加装備の調整も出来たし。むはははは・・・奴らのデモンストレーションには丁度良いわ」

と作業室から出て来たワイリーがほくそ笑む。

追加装備の調整など何時の間にと思われるが、どうやら寝る前に作業用の機械に自動

で組み立てておくように設定していたらしい。

基地から出て行ったバリード達と入れ違う形で基地内に戻って来るのはサングラスを掛けた黒コートの青年。

ダークマンⅣを背後に伴った彼はワイリーに向かって恭しく一札をする。

「それで……報告は聞いたが」

「はい……無事に手に入れてきました」

ワイリーの問いに青年ことプロトジョーは手にしたアタツシケースを開く。

ケースを開けた瞬間、辺りに淡い光が生じるのもあってエアーマンが反射的に身構える。

「博士……これは？」

「プロト達にちよいとお出かけしてもらってな。兎にも角にも超エネルギー元素と同質の物体を手に入れてもらって来た訳じゃ」

ケースの中に入っているのは拳大程の光を放つ水晶。

それに手に恍惚気な笑みを浮かべるワイリー。

よくよく見ればダークマンⅣやダークマンⅡもプロトと同じアタツシケースを手にしてている。

「本来であればランフロント遺跡群に取りに行きたかったがあそこは政府軍が目を光ら

せておるし、アルゴスなる者が居る事を考えるにそこには行かんで正解じゃったな」  
喉を震わせながらワイリーは掌で水晶を転がす。

「いずれにせよこれでアースを修理出来ると言うものよ。奴だけでなく他の者もな．．．  
まあアースの方の修理は救出された後で良いとしてまずはあれよな」

懐に水晶を入れながらワイリーは顎でエアーマンを促す。

「どうやらワイリーは超エネルギー元素と同質の水晶を使い誰かを修理するつもりの様だ。」

プロトとダークマンIVもエアーマン同様に作業を手伝うべく彼の後ろをついて歩く。

「長年動力炉の問題が解決せんかった故に長らく封印されていたんじゃが．．．サブライズで復帰させるには丁度良い。ましてラ・ムーンの従者とか言うアルゴスにぶつけられればあの時の仕返しも出来るしもう」

「そう言うって作業室の機械を操作し奥の格納庫より一つのカプセルを作業台まで移動させるワイリー。」

「(ハ)．．．(ハ)いつは」

エアーマンが驚いたような声を上げるのも無理は無い。

ランフアント遺跡群での戦いで失われていた筈のロボットがカプセルの中で眠りに  
ついていたのだ。

「さて……超エネルギー元素改め超エネルギー結晶の取り付け作業を行うとするかのう」  
手早く作業服に着替えながらワイリーが工具を手にする中でプロトが彼の耳元で何やら囁く。

「ほう……現地には奴が居たのか？時刻で言えば式典での襲撃事件があった頃の筈じゃが……となれば」

一瞬だが思案する様な顔をするワイリー。

「あの娘が攫われたとなればコサツクもあれを投入せざるえまいに……これは面白くなって来たのう」

再び薄笑いを浮かべながらワイリーは目の前の作業に集中し始める。

エアーマンらはそれを慣れた手つきで手伝い始めるのであった。

「早かったじゃねえか」

バラードとフォルテが集合地点に辿り着いたのを見るやメタルマンが片手を上げて彼らに声を掛ける。

敵が拠点としていているらしい廃工場から数キロ程、離れた資材置き場を集合場所とした面々。

「避難は完了したか……分かった」

端末を手にしたリングマンが部下からの報告に頷きながら一同に振り返る。

「一般市民の避難は完了した。表前はキング事件の際に生じた不発弾の処理と廃工場内に残された警備ロボットの処理としている。まあ普通に暴れても多少はOKと言う訳だ」

「てかあの工場ってなんなんスか？」

リングマンが説明する中でバラードが尤もらしい疑問を口にする。

長年都市郊外に放置されたままの廃工場。

バラード達もある事は知っていたが思うに自身らも含め殆どの者が再利用する事も無かった。

「あそこは何時ぞやの一件でお前達が潰したマフィア・・・ドフォーレ・ファミリーが所有していた。施設自体は組織が壊滅する前から打ち捨てられていたみたいだがな」

『裏取引』をするにはうってつけの場所だっただろうと最後にリングマンは付け加える。

ともあれ持ち主不在となった廃工場は今や正体不明の敵が潜伏する一種の魔境と化している。

ワイリー軍団以外にもリングマンも始め多くの高性能ロボットが集まるが、敵の実力を考えるに過剰とは言えないだろう。

まして人質を取られている事を踏まえれば人員は一人でも多く確保しておきたい。

「全員そろったのだな？」

今か今かと逸る気持ちを抑えていたナイトマンが口を開く。

それぞれのロボット達が互いに顔を見合わせる。

この期に及んで臆する者は誰も居ない。

「君と一緒に戦うのはシンフォニーシテイ以来だね」

「フン・・・まさかまた組むとはな」

遠慮がちに微笑むロックにフォルテは鼻を鳴らす。

「互いの立場は異なるが拉致された者を救いたい気持ちは一緒と思いたい。連携して事に当たる事が何より重要だ」

「まあ俺らが組めば勝てない相手は居ないさ」

パンクとエンカーの言葉にロックが力強く頷く。

「おおおおお行くぞストーン」

「了解だガッツ!!」

力自慢が売りのガッツマンとストーンマンが拳を重ね合わせた時だった。

「それでは・・・各自作戦を」

コサックが端末を手に作戦を開始するロボット達に向かって合図を送ろうとする。

「開始するっ!!」



彼の言葉を合図に一斉にロツク達が動く。

<火力支援を行うぜえええ!!>

端末越しに響くボンバーマンの声。

事前に工場を見下ろす小高い崖に陣取ったボンバーマン、ナパームマン、マースにレントの四人による砲撃が廃工場周辺に降り注ぐ。

ロール達の身に危険が及ぶ可能性があるので工場その物には攻撃は行えないが、砲撃は敷地内にある壁などを破壊し障害物を強引な手段で取り除いていく。

「GO〜!!ダルセニョー!!」

「ヒヒーン!!」

真つ先に先陣を切るのは馬型のサポートメカに跨ったパツシヨナー。

彼に続く形で敏捷性に優れるリングマン、フアラオマンが先を進む。

稼働する防衛兵器を勢いそのままに破壊するパツシヨナーに追隨する二人に遅れる形で、ナイトマンが騎士団を率い廃工場に迫る。

「アイアンナイト、陣形を保ちつつ突撃っっ!!」

ナイトマンが号令を出し楯を持ったロボット達が砲撃で破壊された壁の箇所から敷地内へと踏み込んだ時であった。

ドオオオオオツツ!!

破壊された工場の壁をぶち破りながら姿を現すのは巨大な恐竜を模したメカだ。

「メカザウルスだどつつ!!」

驚愕するナイトマンらを尻目にメカザウルスを先頭に複数体のヤドカルゴまで姿を現す。

「こやつらは確か・・・」

炎を吐き出すメカザウルスにナイトクラッシャーを食らわせつつ、ナイトマンがメタルマンに振り返るが。

「いやいやメカザウルスはそっちが量産化してるじゃねえか。てかヤドカルゴの方も俺らは知らねえよ」

大きく手を振るメタルマンであったが跳躍したヤドカルゴに危うく押し潰されそうになる。

「同士討ちにだけはなるなよ。とにかく足を止めるなつつ!!先に行ける奴は先に行け!!」

メタルマンの言葉を聞いてか聞かずかメカザウルスを相手取るナイトマン、ヤマトマンらの脇をすり抜ける形で何人かが先を進む。

「まったく・・・馬力と装甲はあるが所詮は単純な思考回路しかもたねえ奴だ。俺らが負ける要素はねえ!!」

メタルブレードを連射する彼に続きガッツマン、ストーンマンがヤドカルゴを殴り伏せる。

「キヤハハハハッツ!!燃えるっっ!!」

複数体のヤドカルゴを前にメタルマンを中心にしたメンバーがそれぞれの武器を敵に向けていた。

「この先にロールちゃんが!!」

半ば崩れかかった工場内にロックらが入った瞬間、工場内の灯りが灯る。

反射的に身構えるロックらの眼前で液体が大きく盛り上がる。

何時ぞやの式典と同じく水を素体としたアクアデビルがその巨体を揺らすのだが。

ズドドドドドドドドドツツ!!ドガアアアアツツ!!

言葉も無くバスターを連射したフォルテとバラードの放ったバラードクラッカーをそれぞれコアに食らい瞬時に爆散するアクアデビル。

「・・・邪魔だ」

「でっかい雑魚を相手にする暇はねえッス!!」

啞然とするロックらを尻目に先を進むフォルテとバラード。

彼ら二人は人質の救出なり強敵の撃破をロックと競うつもりなのか。

そんな彼らに苦笑するロックであったのだが。

ヴヴヴヴヴヴヴツツ!!

不意に周囲の風景がぶれると思った瞬間、ロックが空間の割れ目に飲み込まれる。

「一名様ご案内〜!!」

笑い声と共にどこかふざけた調子で声を上げるのはエキドウナである。

「なる．．．てめえ!!」

両手の周囲を歪ませるエキドウナにフォルテが食って掛かろうとするがその彼は自ら飛び込む形で姿を消してしまう。

「飛ばされたい方はどなた〜? ハイハイハイ〜♪」

次々と掌より歪曲させた空間の割れ目を発生させるエキドウナを前にフォルテに続いてバラードやエンカー、パンクも成す術無く飲み込まれる。

彼女は遅れてやって来たエレキマン、カットマンにアイスマン、ファイヤーマンに目を向ける。

「さあ貴方達も私の力で彷徨いなさいな．．．永遠につっ!!」

クスクスと笑いながら再度空間を歪ませるエキドウナであったが。

「．．．?」

自身の放った歪みが掻き消され彼女は目を大きく見開いた。

反射的に目を鋭くさせる彼女に同じく空間の割れ目より顔だけ出したロボットが泡

を吹く。

「あわわわわっつ!!」

「やばいよやばいよっつ!!」

互いに見合わせながら恐怖に体を震わせるのは二人のアストロマンだ。

元々異空間を操る能力を持つ彼らはエキドウナの力を相殺する事が可能とされていた。

まごまごしてしまいがちな臆病な性格故にロックやフォルテらを守る事は出来なかつたが、これ以上の被害を増やす訳にはいかないと勇気をふり絞り干渉を行ったのだ。

「なんだか分からねえが・・・」

「そっちの方は任せたぞ」

ローリングカッターを手に身構えるカットマンに続きエレキマンが頭上のアストロマンに声を掛ける。

自身の力で飛ばす事が出来ないと判断したエキドウナは指を弾き、伏せていた自身の部下達に合図を送る。

直立歩行した爬虫類を思わせるロボットとも普通の生命体とも判断出来る者達がカットマン達を取り囲む。

それと同時に周囲に霧が立ち込めてくる。

屋内にも拘わらず不意に出現した霧にエレキマンが低く呻く。

当然ながら自然現象ではないのは薄笑みを浮かべるエキドウナの顔を見るに明らかだ。

「一応言っておくけどヴォイドとファントムマンに頼まれたのよ。標的のロックマンやフォルテにキラーズが現れたら各々が待つ場所に運べとね。まあ残り物の貴方達は私とガード達でお相手するとしましようかしら」

異空間に飛ばされたと思われたロック達が無事である事を面白げに語るエキドウナ。

「それにしてもまさか自分から異空間に飛び込んでくるなんて、ロックマンとか言う不完全な機械も意外に好戦的よね。あと口も少し悪かったけど目的の場所には運べたからヨシね」

独り言の様に呟く彼女の言葉にアイスマンが首を傾げる。

「あのくすいません」

今にもエキドウナガード達が襲い掛かってきそうな中、アイスマンが手を上げて質問をする。

「は〜いどうしたのかしら？遺言でも残したくなかった？」

「その好戦的だったって言うロックマンって黒かったですか？」

ニコリと屈託無くともんでもない事を聞く彼女にアイスマンが困惑気に問う。

「確かに黒かったけどロックマンってラ・ムーン様を倒したのだから、あれくらい血の気は荒いんでしょ？」

「ああ・・・なんて言うか別に良いです」

（フォルテとロックマンを勘違いして覚えてるなこの人・・・）

きよとんとした顔で首を傾げてくるエキドゥナにアイスマンが内心で呆れつつも、質問を打ち切り彼は目の前の相手に集中するのであった。

箱の中に閉じ込められてどれだけの時間が経ったのか。

音も響かぬ中で自身の体内にある時計だけが虚しく現在の時刻を告げる。

無駄なエネルギーの消耗を避ける為にスリープモードに移行しようかと考え始めていたロールであったが、不意に己を閉じ込めていたはずの箱が開いた事もあり困惑する。

恐る恐る外に出た彼女が見たのは黒衣を纏った一人のロボット。

「あ・・・あんたは？」

「外ではロックマンのみならずワイリー、コサックナンバーズ達が我らと交戦を始めています。奴らを誘き寄せた時点で人質としての貴様らの役割も終わりだ」

マントを翻し己に背を向ける形でロールに状況を説明するのは。

「我が名はヴォイド。虚無の者にしてまつろわざる存在……」

無機質な声を響かせるヴォイドにロールは警戒する様に身構える。

目の前に確かに相手が居るのは分かるのだが、エネルギー感知器に一切反応がしないどころか目を閉じてしまえばそのまま居なくなってしまうのではないかと思わせるぐらいに目の前の相手は普通とは違う気配を身に纏っていた。

「警戒するな。先にも言ったが既にお前には人質としての価値は失われた。だからと言つて殺すつもりも無いから安心しろ……寧ろ私としては感謝したいぐらいだ」

「か……感謝つて」

「何度も言うがお前の存在のお陰で奴をこの場に引つ張り出す事が出来たからな。我が宿敵をこうして迎え撃つ事が出来るのだから……」

ヴヴヴツツツ!!

困惑するロールを他所にヴォイドが一室の頭上で空間が歪むのを見るや、小さく笑みを浮かべる。

「貴様とこうして戦うのも随分と久しい……」

今までの無感情な姿とは対照的にどこか恍惚気な笑みを浮かべたヴォイドであったのだが。

ドスンツツ!!



「いてえええええ!!あの野郎・・・何をしやがった!？」

尻餅を衝く形で地面に降り立ったのはフォルテ。

そんな彼の姿を見るなりヴォイドの顔から感情が消え失せる。

「エキドウナめ・・・私は奴を所望したのだが」

遅れてその場に飛ばされてくるエンカーに視線すら向けずにヴォイドは大きく舌打ちをする。

「てめえは・・・あの時の」

「・・・・・・・・」

自身を指差すフォルテに興味など無いとばかり鼻を鳴らし彼は懐より小さな柄を取り出す。

ヴンツツ!!

柄の先より生じるのは光の刃。

現代において携帯用の兵器として未だ実用化されていないビームセーバーだ。

「お前が南米で色々やってくれた奴・・・か」

エンカーがバリヤードスピアを構えつつじつとヴォイドを見据える。

一瞬だが怪訝な顔となるエンカーだがその彼を押し退ける様にフォルテがバスターを構え前に踏み出す。

「クソジジイのお陰で今の俺はあの時と違って万全の状態だ。あの時はテュポンやソーの後だったから満足に戦えなかったが・・・」

「だからどうした？万全の状態だから私には勝てる・・・と言いたいのか？」

得意げな顔で己に口を開くフォルテに対するヴォイドの声には僅かながらの怒気が孕んでいた。

「手にした力すら満足に扱えぬくせによく嘔る」

吐き捨てる様に言い放たれる言葉にフォルテの眉間に皺が寄る。

「なんだと・・・」

「もう一度言つてやろうか？フォルテよ・・・お前は弱い。今のお前ではロックマンの足元にも及ばぬ・・・そしてこの私には絶対に勝てん」

煽る様に口を開きながらヴォイドが腰を落とす。

そんな彼にフォルテもバスターを突き出しながら身構えるのであった。

「エキドウナの空間を渡る力を封じ込めるとはな・・・不完全な機械とは言えなかなかやる様だな」

アストロマン二人の干渉もあつて当初の予定通り廃工場内の各所に攻め込んで来た者達を誘い込む事が出来なくなったアルゴス達。

無数の眷属達と共に一室で待ち構えていた彼だったが、後が続かないと判断した後は拘束したプライドを引き連れ仮設の司令室で施設内の様子をモニター越しに見つめる事となった。

言うなれば様子見なのだが元より待ち構えるつもりだっただけに多少の時間の余裕が出来たと言う事にも繋がる。

「既にこの娘の生体データは送り届けた・・・もはやこの場で戯言を興じる必要はないのだが」

「ロックマンを始めとする邪魔者は一人でも多く潰しておきたいってか？」

何時の間にか己の背後に居たソローにアルゴスは目を細める。

「エキドウナの一件に関しては詫びておこう」

エキドウナの手で石にされてしまった事を根に持っているかと判断し、アルゴスは普段の不遜ぶりからは意外なほどにあっさりとして己の非を詫びる。

「何時ものお前さんらしくねえなあ・・・どういう風の吹き回しだ？」

「異星の人造神たるお前と戦うほど我には余裕が無いのだ。仮に貴様と戦うのであればロックマンらを倒した後だ」

己とは戦う意思を見せようとしぬアルゴスにソローも『フン』と鼻を鳴らすのみでそれ以上は何も追求しようとはしない。

彼はアルゴスの隣に並び立つと複数のモニターに目を向ける。

「今回俺様は何もしねえからな」

「了解した。寧ろ貴様には次の一手で動いてもらおうつもりだ」

ソローの言葉に相槌を打ちつつアルゴスは巨大な目を蠢かせる。

「コサックナンバーズ共がパsshヨナーと先行か・・・体よく柔らかき人間共を閉じ込めている箇所に近づきつつある」

アルゴスが司令室にあるパネルを操作しほくそ笑む。

「目には目を・・・コサックナンバーズにはコサックナンバーズを当てるとしようか」

モニターに映される拘束カプセルを遠隔操作で起動させるアルゴスにソローは面白くなさそうに鼻を鳴らす。

「グオオオオオオオオオオツツ!!」

施設内のどこかで聞き覚えのある獣の咆哮にロックがハッと目を覚ます。

エキドゥナによって成す術無く別の場所に飛ばされた彼は強引に飛ばされた事もあつてか転移先で意識を失っていた。

慌てて上体を起こす彼だが目の前を光弾が掠めていくのを見るや即座に起き上がる。

「ロックマン・・・起きたか」

「早く起きろツスよ!!」

安堵する様に息を吐くパンクに炸裂弾を放つバラードがそれぞれ声を掛けてくる。

バシユバシユバシユバシユツツ!!

次々と自身らへと光弾を放つてくるのは黒子の姿をしたジョー達。

便宜上クロコジョーと言うべき存在の彼らは、ジョーシリーズにはあるまじき軽快な動きで周囲を飛び跳ねる。

通常のスナイパージョーと違い楯を持っていない事から防御力や耐久性には劣る様子だが、トリツキーな動きが厄介なのととにかく数が多い。

パンクとバラード兩名を相手取りながらもジリジリと包囲網を狭めていくクロコジョー達。

「寝ていた分、働けツス!!」

「分かっているよ」

バラードの言葉にロツクは苦笑しつつもその場で跳躍する。

「パンクにバラードつつ!!伏せてつつ!!」

瞬時にボディカラーが変化するのを確認するまでも無く、二人はその場に倒れ込む様にして伏せる。

「ライトニングウウ!!ボルトオオオツツ!!」

ロツクの叫び声に呼应し辺りに電撃の嵐が吹き荒れる。

キング軍団の幹部であったダイナモマンが使用した特殊武器をロックはクロコジョー達に向けて放っていた。

一瞬の内に半数近くが破壊されるクロコジョー達。

彼らが楯を装備したスナイパージョーであればもう少しだけ被害は少なかったかもしれないが、敏捷性を得る為に防御力を捨てた彼らにとつてロックらを包囲した事が却つて裏目に出てしまう結果となる。

「やるッスね」

「ともあれ包囲網は崩れた・・・後は何とでもなる」

バラードとパンクの称賛の言葉に笑みを浮かべるロック。

一瞬の間でこの場の状況はあっさりと状況を一変させられた形となるのだが、クロコジョー達は仲間達の屍を乗り越え尚もロック達に光弾を撃ち放つてくる。

「このジョー達。カブキマンが暴走を起こした時にも居たジョーだ」

見知った顔と言える敵にロックが声を上げた時だった。

「・・・ダークニードル」

ぼそりと呟く様な声が響いた瞬間、ロックはその場より跳躍する。

ズドドドドドドドドドドツツツ!!

数体のクロコジョーをも巻き込みながら先程までロックが居た場所に無数の棘が地

面より出現する。

数秒後には四散する棘を横目に彼はその場に舞い降りる黒衣を纏ったロボットに身構える。

「全く・・・お二人が居なければそもそもクロコジョー達を繰り出すまでも無くロックマンを始末出来たと言うのに」

舌打ちをしつつファントムマンは宙に浮かびながらロック達に恭しく一礼する。

「私の名前はファントムマン。ロックマン、貴方とこうして出会うのは・・・初めてですね。カブキマンの一件ではお世話になりました」

フードの向こうで笑みを作りながら全身より闇を放出するファントムマン。

ファントムマンが軽く手で合図をするや奥の方から伏せてあったクロコジョー達が姿を見せる。

「このままジリ貧に追い込もうと思いましたが先程の系統の特殊武器を使われると分が悪いと判断しましたので、私自らが出る事にしました。やはりあの御方の敵と言うだけの事はあります」

目を細めロックを見るファントムマン。

「てめえ・・・何者ツスカ!?!」

「見ての通りの者です。名前は先程名乗りましたよバラードさん」

バラードの啖呵をファントムマンは小馬鹿にする様にして返す。

そんな敵に歯噛みするバラードはさておきとパンクがじつと視線を向ける。

「貴様がファントムマンか・・・こうして会うのは初めてな筈だな」

「・・・そうなりますね」

探る様なパンクの言葉にファントムマンが僅かに瞳の色を変える。

目深にフードを被っている事もそうだが、相手の全身より噴き出す闇色の煙によって外から相手の表情を窺うのは難しい状態だ。

ビキビキビキビキツツ!!

「いずれにせよ貴方達には死んで頂きます」

先程の一撃と同じ特性なのか自身から噴き出る闇を掌の上で結晶化させていくファントムマン。

その水晶が勢いよく回転したと思った瞬間であった。

「ダークマターニードル!!」

突如として弾け飛んだ無数の欠片が銃弾の様に辺りに吹き荒れていた。



## V O I 1 2 VS他国籍連合（後編）

「スクリュークラッシュャー!!」

パンクが高速回転弾をクロコジョー達に投げ放つ。

貫通力に特化したこの武装はメタルブレードと同じ材質の物理的なノコギリとエネルギーによる物の二種類がそれぞれ搭載されている。

対ロックマン用ロボットと言う事もあるが仮に相手がどちらにも有効な障壁を張ろうとも、放つ武器の属性を使い分ける事が出来ればたちまち無意味なものと化す。

ワイリーが宿敵撃破の為に賭ける執念の一端が垣間見えると言えよう。

何体かのクロコジョー達がスクリュークラッシュャーに身を貫かれる中、ロックがフロントムマンに肉薄せんと跳躍する。

先程全身より無数の棘を放ってきたフロントムマン。

咄嗟に崩れた壁などを障害物を楯に難を逃れた三人であるが、一瞬でも遅れれば今頃致命傷を負っていただろう。

そして未だにその能力の全貌を見せぬ相手にロックは慎重に対処しようとするのだが。

「ハイパーロックバスター!!」

宙に浮くフロントムマンに光弾を放つロック。

それを前にフロントムマンは避けようとせず迫る光弾をじつと見据えていた。

ロック自身も半ば牽制の為に放った一撃であり当たるとは思っていないだけに相手の動きに首を傾げる。

バチンツツ!!

迫る光弾に掌を翳しそれを弾くフロントムマン。

その衝撃に僅かに後方に退くのだがローブの向こうでフロントムマンが目を細めたのがロックには分かった。

「成程・・・これがハイパーロックバスターの威力。一撃として見れば大した事は無いですが何度も食らう或いは弱点に当たれば致命傷は避けられませんか」

反芻する様に頷きながらフロントムマンがロックを見据える。

四度目のワイリーによる世界征服計画よりロックに搭載されたロックバスターのチャージ機能。

現在では当初よりも改良が加えられハイパーロックバスターとなっているが、単純な威力で言えば高性能ロボットの武装には劣る面が多々ある。

まあ単純な数値的な強さがロックマンとしての強さではない事は付け加えておく。

「スクリューアタック!!」

「・・・フツ」

自身のボディを弾丸に変え突っ込んでくるパンクに足元の闇に姿を消す事で回避するフアントムマン。

壁に跳ね返り人型に戻るパンクの背後を衝く形でフアントムマンが掌を広げる。

ズドドドドドドツツ!!

両手より放たれるのは漆黒の光弾だ。

色こそ違えどロックバスターなどのビーム系の光弾と思われるそれを前にパンクが身構えるのだが。

「リーフシールド!!」

パンクとフアントムマンの間に割って入ったロックが放たれた光弾を防ぎ切る。

「ぬう・・・礼を言うぞロックマン」

「気にしないで」

小さく頭を下げるパンクにロックは遠慮がちな笑みを浮かべるのだが。

「馬鹿ですね。パンクなど構わずに私に一撃を加えれば良かったものを」

「それを言うって事は僕が君に攻撃を加えた際の対応策を持っていたと言う事だよね？」

見下した様に口を開くフロントムマンドだったが、逆にロックに己の考えを見透かされ低く唸る結果となる。

(良い具合に煽るな・・・)

と内心でパンクがロックの言動に苦笑する。

彼自身の性格を鑑みるに狙ってやっているつもりは無いだろうが、ライトナンバーズを洗脳して行った最初の世界征服計画よりロック自身の戦歴はある意味で他のあらゆるロボットを超える物と言えよう。

それ故にロックはその性能以上の実力を発揮する事が出来る。

彼の強さは武器トレースシステムによつて他のロボットの弱点を衝く事が出来るからと評する声もあるが、パンク自身はそうではないと考えている。

先も言った様に彼の強さの根源は数々の激戦を制した末に手に入れた経験による戦術眼とそして何より。

(私の様な本来であれば敵である者にすら助けに入つてしまう優しさを持つ事か・・・私達には到底手に入れる事が出来ん物だ)

尤もその優しさは時として仇となるのだが、その辺りもご愛嬌と言うべきだろうとパンクは考えている。

当初こそこの辺りの考えは気に食わなかったが、今では普通に受け入れてしまつてい

る事にパンクは彼の影響を受けてしまったと思う。

「兄貴にロック。俺は雑魚共を相手にするツス!!二人はそいつに専念しろツス!!」

周囲の炸裂弾をばらまきながらバラードが叫ぶ。

見ればバラードは周囲に瓦礫の山を作る事でクロコジョーとファントムマンを分断していた。

「・・・了解した!!」

バラードの言葉に短く相槌を打ったパンクがスクリユークラツシャーをファントムマンに投げ放つ。

「ダーククラツカー・・・!!」

対するファントムマンも硬質化させた闇を掌より放つ事でスクリユークラツシャーを相殺する。

パキパキパキパキツツ!!

パンクの一撃を相殺したばかりか破片となり周囲に拡散するダーククラツカーに二人は回避に転じるのだが。

「ファントムブレード!!」

その隙を衝く形で一瞬の内に懐に踏み込んで来たファントムマンにロックが目を見開く。

振り下ろされる硬質化された刃から致命傷を避けられたのは、ロツクの持つ膨大な戦闘経験からの反射的に体が動いたからだろう。

「・・・チツ」

小さく舌打ちをするファントムマンはその場より退こうとするが。

ガシツツ!!

その腕をロツクが掴み取り動きを封じ込める。

相手が振りほどこうとするのもあつたが振れた先の腕の感触に違和感を覚える。

意外と言うべきか相手の腕に対し細いと言う印象を持ったのだ。

とは言え戦闘中である事もありロツクはそんな自身の考えを頭の隅に追いやる。

「ロツクアツパー!!」

至近距離で相手の顎先に決まる強烈な拳。

並のロボットであれば一撃で昏倒するであろう打撃を受けながらも、ファントムマンは宙で態勢を立て直すやキツとロツクを睨み据える。

ロツクアツパーで吹き飛ばされた事もあるのだろうか、ファントムマンの頭部を覆う

闇色の煙が僅かに晴れていた。

それ故に一瞬だが垣間見えたその瞳にロツクはまたしても違和感を覚えてしまう。

正確には既視感か。

どこかで見た事がある様な気がしたのだ。

ズドドドドドドツツ!!

フアントムマンの背後を衝く形でパンクが体当たりを仕掛けようとする。

「もう見切りましたよ。貴方の動きは極めて単純だ」

勝ち誇った様に言うフアントムマンの全身が文字通り透ける。

闇と同化し一撃をやり過ぎしたフアントムマンはパンクが通り抜けたのと同時にその背に向かって硬質化させた物体を投げ放つ。

「ぐおっっ!!」

背に反撃を受けパンクが呻きながら倒れ伏す。

「パンクツツ!!」

声を上げながらバスターを放つロツクの攻撃もあつさりと掌で受け止められる。

「無駄ですよ。貴方達の動きは既に見切らせてもらいました」

喉の奥を鳴らしながらフアントムマンは起き上がるようにする。パンクを冷ややかな目で見つめる。

起き上がり際に無数のスクリュークラッシュヤーを放つパンクだが悉く空を切る。

ロツクが追撃にと放ったスプラッシュドリルも同様に回避される。

「・・・ぬう」

パンクが思わず唸る。

当初は様子見の様な行動が目立ったファントムマンだが、自身の動きが見切られつつある状況にパンクは焦りを覚える。

パンク自身も認めざる得ないが彼の動きは極めて単純明快。

武装のスクリュークラッシュャーやスクリューアタックなどは直線的な軌道を取っており、予め対策を施されると途端に欠点を露呈してしまう。

これはパンクに限らずエンカーなどにも言える事であり、ある程度武装を換装するなりして変更できるバラードには劣る点と言えよう。

「食らいなさい!!ダークニードル!!」

地面にファントムマンが拳を叩きつけ直線状に無数の棘がパンクに迫る。

それを跳躍して回避したのを計算してかファントムマンがダーククラッカーを放つてくる。

直撃こそ回避したものの周囲に飛び散る破片に体の各所を傷つけられパンクは思わずその場で片膝を衝く。

「私の動きを見切ったと言うのは嘘ではないか・・・」

「大丈夫?パンク」

片膝を衝くパンクにロックが駆け寄る。



「あのロボット。異常なまでに学習能力に優れているな・・・」

短時間の戦いで自身の動きを見切った相手にパンクが呻く。

彼の感想にロックも頷く。

一般的な生物のそれとは違うがロボットにも学習をする事で新たな能力を得る事は可能だ。

最近の事で言えば今まで料理が出来なかったアースが猛特訓の末に最低限の料理が作れる様になったのが一つの例と言えよう。

「まあ私の動きが直線的な動きなのはお前との戦いで嫌と言うほど理解してはいたがな。こころもあつさりと見切られると傷つくな」

苦笑を浮かべるパンクだがその瞳に絶望感は無い。

寧ろ目の前の敵に対する闘志が漲っていた。

「だが動きが見切られようとも私のやる事は変わらん。目の前の敵に全力でぶつかるまでの事だ。お前もそうだろう?」

「うん・・・そうだね」

パンクの問いに頷くロックは互いを支え合う様にフロントムマンに対し身構える。

「既に貴方達の行動パターンは把握させて頂きました。もはや貴方達の勝ち目は・・・」  
ダッ!!

二人を見据え嘲笑うファントムマンを尻目に弾く様に飛び出すロックとパンク。

真横から光弾を放つロックの一撃を掲げた手で軽く弾いたファントムマンは真正面から来るパンクに視線を向ける。

「スクリュークラツシャー!!」

至近距離から次々と高速回転弾を放つパンクだが、それらの軌道を見切っているファントムマンは回避或いは闇と同化する事で攻撃をやり過ごす。

続けざまに後方から再度光弾を放とうとするロックにダーククラツカーをぶつけるのだが。

フツツ。

投げ放った硬質化された物体は空を切り後方の壁に衝突する。

見れば吹き飛ばしたと思われたロックの全身が大きくぶれる。

「立体映像・・・コピービジョンですかっ!?!」

キングに再生させられたアストロマンより得た特殊武器によって発生した質量のある立体映像にファントムマンが呻く。

その上である。

「ミラーバスター!!」

続けざまにパンクが放ったエネルギーのスクリュークラツシャーをロックがエン

カーの特殊武器で弾く。

立体映像に気を取られた事で初動が遅れ避けた筈の一撃が背に決まる。

「ぬぐうつ・・・!!」

くぐもった呻き声を上げるファントムマン目掛けてパンクが跳躍する。

「スクリューアタック!!」

ギョルルルルルツツ!!

体を変形させ弾丸の如く突っ込んでくるパンクにファントムマンが紙一重で回避し

ようとするのだが。

ザンツツ!!

すれ違いざまに突如として伸びる刃にファントムマンの肩口が抉り取られる。

「なん・・・だとお!?!」

フードの向こうで目を見開くファントムマンが見たのは、パンクの両腕より伸びる三十センチ程の光の刃だ。

「次の世界征服計画の際に対ロックマン用の追加武装だ。この様な形で使う羽目になるとは思わなかったが」

両腕より伸びるビームセーバーを消しながらパンクがほくそ笑む。

片腕に滴るオイルが地面に染みを作っていく中、思わぬ手を使ってきた敵にファント

ムマンは苛立ちに全身を震わせる。

未だに携帯式のビームセーバーは実用化されていないと言うのが世間の常識だが、パンクに搭載されている物はワイリーが開発した試作式のビームセーバーである。

と言つても常時刃を出せる訳も無く、長さや強度も試作式の域を出ない物な上に燃費も非常に悪い代物なのだが、パンクの体当たりと合わさる事でロボットに対し有効な一撃となつていた。

「なまじ私の動きを見切つた事で必要最小限の動きで避けようとしたのが仇になつたな」

すれ違いざまに光の刃を出す事でその射程を伸ばしたパンク。

まんまとその策に嵌つた事もありフロントムマンが苛立ちを露わにした時だった。

ジユウウウウツツツ!!

不意に地面が溶けだした事に宙に浮いていたフロントムマンが気づいたその時だった。

ガタンツツ!!

「はあぁ〜い!!皆さん、お待たせ〜!!」

溶解した床を突き破り床下の配管から飛び出してくるのはネプチューンだ。

下水道を通り他の面々とは別ルートで侵入した彼は頭上で戦いが繰り広げられてい

るのを察するや、ソルトウォーターで床を溶かし強引な形で乱入するのであった。

当然の事ながらファントムマンが学習能力に優れると言ってもこれに反応出来る筈が無い。

「はい。毒霧殺法みたいなく」

両腕より発生させた濃硫酸の液体を息に混ぜる形で霧状にしてファントムマンに浴びせるネプチューン。

「ああああっ!!」

真下からそれも至近距離で浴びせられたファントムマンが悲鳴を上げる。

「今だ・・・ハイパーロックバスター!!」

宙で大きく仰け反ったファントムマンにロックが渾身のチャージショットを撃ち放つ。

ドガアアアアアアアツツ!!

この戦いにおいて初めて決まるロックの一撃にファントムマンが背後の壁に叩きつけられる。

ネプチューンのソルトウォーターを食らった事もあり、黒衣のローブはフード部分を始め多くの部分が千切れボロボロになっていた。

「おのれ・・・よくもっつ!!」

その素顔を露わにしながら鋭い視線を向けるファントムマン。

牙城が揺らぎつつある相手に追撃を仕掛けようとしたロック達だが、その下にあった素顔に呆然となる。

カブキマン暴走事件の裏で暗躍した正体不明の敵ファントムマン。

不気味なそのローブの下に隠された素顔はロックらにとつて見知った顔の少女の物であった。

「え．．．フィーネちゃん?」

少女の名前を口にし思わず構えを解いてしまうロック。

対するファントムマン．．．否、フィーネの方も己が素顔を晒している事に気づいたのか反射的にその顔を隠そうとするが生憎ローブはボロボロになっている。

「し．．．しまった」

狼狽する様に声を上げるその声は先程までの男性の声とは違い少女の物となっていた。

この様な状況で追い込まれる事もそうだが、正体を露呈してしまう事を想定しなかった為かフィーネは表情を引き攣らせながらその場より飛び退く。

「．．．こうなったら仕方が無いわ。ファントムマンとはこのフィーネの仮の姿。私は偉大なるあの御方に仕える従者が一人だったのよ」

若干早口で開き直ったように己の正体を話すフィーネ。

対してネプチューンがジト目で溜息を吐く。

「なんか威厳とか怖さが足りないわね」

「うっさい!!オカマ半漁!!」

「いやん!!オカマじゃないわ乙女よ」

ネプチューンの突っ込みにフィーネが顔を真つ赤に反論するがそれも彼に軽く受け流されてしまう。

「ロックお兄ちゃんやパンクお兄ちゃんはともかく。アンタはそんなに驚いてなさそうね」

呆然となる両者はともあれ特に反応を示さないネプチューンにフィーネが指を突き付けるのだが。

「そりやそうよ。あれだけうちの隊長へ馬鹿にした様な視線を向けてたら、『ああ、あの子。いい子ちゃんの皮被ってるけど腹黒いわね』って思うに決まってるでしょ」

海の家でのバイトの際に時折フィーネが向けていたアースへの視線は極めて厳しい物が含まれていた。

他の面々がそれぞれの仕事に忙しい中、監視員をしていた事もあつてか多少の余裕があつたネプチューンは彼女のその視線に気づいていたのだ。

「フィーネ……どう言う事だ？」

問いかける様に口を開くパンクにフィーネは小馬鹿にした様に鼻を鳴らす。

「どうもこうも私が言えるのは今の今までの姿は全部演技だったって事よお兄ちゃん。私は貴方達の所に潜り込んだスパイと言えば分かるかしら？」

幼い顔に妖艶な笑みを浮かべるフィーネ。

彼女の教育係に任じられた事もあつてか明らかに動揺の色を隠せないパンク。

「謝るなら今の内よ。お尻ペンペンで許してあげるわよ」

「さつきからうっさいわよアンタ!!」

尚も自身にふざけた言動をするネプチューンにフィーネが大声を上げるが、やはりと言いか先程までの余裕はあまり感じられない。

「フィーネちゃん。僕には君の事情は分からないけど……今すぐにそんな悪い事は止めるんだ」

じつと己の瞳を見据え語り掛ける様に口を開くロックにフィーネが反射的に顔を逸らす。

「私に説教なんて……」

と言いかけたフィーネだが鳴り響く端末の画面を見据えるや忌々しく舌打ちをする。

「くそっ……それにしてもこんな事になるなんて。覚えてなさいよ!!次はこうはいかな



いから!!」

己の正体が判明してしまうと言う失態もあつてかフィーネは、これ以上戦う事無くその場より姿を掻き消してしまう。

バラードと対峙していたクロコジョー達もそれに続く形で転送装置を使い消えてしまう。

「ちよ・・・兄貴にロック。ファントムマンの正体つてあのフィーネだったんすか?!」  
敵が居なくなつた事もありバラードが駆け寄つて来る。

対するロック達は無言だ。

思わぬ相手の正体に言葉に出来ないだけの衝撃を彼らは受けていた。

滅多な事で動揺しないパンクは暫しの間、虚空を見据えていたのだがやがて頭を振ると己に言い聞かせる様に頷く。

「フィーネの事は後だ。今はロールやアース達を助けるのが先決だ」

冷静さを取り戻した。パンクの言葉に一同は頷き先を目指すのであつた。

「・・・弱すぎる」

ぼそりと呟かれた言葉を聞きながらフォルテの体が地面に吸い込まれる。

全身に傷を付けられたフォルテを前にマントを翻しながら背を向けるヴォイド。

『絶対に自分には勝てない』と相手が宣言した通り、フォルテの攻撃は悉くが見切られ逆に反撃を食らい続け今の状況となっている。

普段はフォルテ自身がそのプライドもあつてか滅多に使わない特殊武器を使つても目の前の敵は揺らがない。

「所詮はその程度だ。どうせなら使いこなせない力も使つてみたらどうだ？」  
煽る様に口を開くヴォイドにフォルテが齒噛みする。

言葉通り悪のエネルギーを解放すれば戦いを続けられない事は無いが、目の前の敵にはそれをして無駄と思わせるだけの実力差を見せつけられてしまっている。

フォルテからすればそんな事を考える状況も腹立たしい。

「文字通りの完封か・・・」

結果的にロールを守る形で対決を見守る事になったエンカーが口を開く。

「ちよつとどうして助けないのよ」

高見の見物を決め込むエンカーにロールが当然の様に非難の声を上げる。

対するエンカーは顎の裏を搔くのみで動こうとはしない。

「二対一の勝負に割つて入るのはちよつと無粋だ。それに・・・な」

ヴォイドに意味深な視線を送るエンカーにロールがもう知らないとばかりに小さく唸りながら駆け出していく。

ヴンツツ!!

倒れ伏す自身に突き付けられる光の刃。

ヴォイドは多彩な攻撃を仕掛けたフォルテをこの武器一つで制している。

当然の事ながら本気を出していない事は明白だけにプライドの高いフォルテにとつては屈辱極まりない。

「さて……どうする？このまま死ぬか？」

「ふざ……けんなっ!!」

己を嘲笑うヴォイドにフォルテが震える体を必死で抑えながら立ち上がろうとするのだが。

ドンツツ!!

脇腹に強かに決まる相手の拳にフォルテの膝が折れる。

両の手を地面に衝き叩くフォルテをヴォイドは冷やかな目で見下ろしていた。

「弱い……弱いのだフォルテよ。今のお前はただの強がっている子供同然なのだ」

失望の念を露わに光の刃を上段に構えるヴォイド。

それが振り下ろされれば相手に殺されると認識したフォルテだったが、その前にロールが両手を広げ立ち塞がる。

「もう勝負はついているじゃないの。これ以上は止めてよ!!」

「・・・どけ小娘」

戦いを止める様に言うロールにヴォイドが底冷えする声を響かせるのだが、ロールはその場より一步も動こうとしない。

暫しの間、対峙する両者であったがフツと笑みを浮かべたヴォイドが刃の柄を握り締める。

「世界最強を名乗る癖にこんな小娘に庇られるとは笑わせる。ではまとめて死ぬが良い!!」

そう言い放ちヴォイドが刃を振り下ろそうとした時だった。

歯を軋ませ立ち上がったフォルテが真横にロールを突き飛ばす。

続けざまに振り下ろされた刃を片腕で受け止めたフォルテは空いた腕でヴォイドの顔面に拳を叩きこんでいた。

僅かに後方に退くヴォイドに息荒くフォルテが睨み据える。

「舐めるなよ・・・俺が世界最強のロボットだ。お前なんざ今からすぐに倒してやる」  
初めて相手に決める事が出来た一撃を放った拳を握り締めるフォルテ。

ビームセーバーを受け止めた方の腕は刃が食い込んだ事もあり大きく損傷しだらりと下がっていた。

「・・・フン」

鼻を鳴らしながらヴォイドは構えを解くとビームサーバーを懐に仕舞う。

マントを翻し背を向けるヴォイドにフォルテが顔を真っ赤にする。

「てめえ・・・逃げるのか!!」

「そう取るならそう取るが良い。ましてお前が来た時点で私としては目的を果たせなくなっただけだからな」

簡易転送装置を用いその場より姿を消すヴォイド。

相手に見逃してもらった形となりフォルテが歯噛みする。

彼は思い出した様に自身が突き飛ばしたロールの所に向かうのだが。

「なんで俺を助け・・・」

敵である筈の自身を庇う様に相手との間に立った事を問おうとしたフォルテだったが、それよりも早くロールの平手打ちが頬に強かに決まる。

痛みに顔を顰めるフォルテが怒鳴り返そうとするも、ロールの目から溢れ出る涙にその勢いが削がれる。

「馬鹿!! たまたま相手が見逃してくれたから良いけど、あのままだったらアンタ死んでたでしょ」

「お・・・女なんかに庇われて俺の面子が」

「面子なんかよりも大事な物があるでしょ。男の面子なんてドブにでも捨てておきなさ

い!!」

泣きながらも己に声を上げるロールにさしものフォルテも押され気味だ。

そんな二人を前にエンカーは苦笑を浮かべる他無い。

「とりあえず・・・ロールに礼の言葉と謝罪はしておこうぜ」

エンカーの指摘に顔を真っ赤にするフォルテだが、ロールに泣かれてしまった事とここで強情になっても更に面倒になると判断したのか彼にしては素直に頭を下げるのであった。

## V O I L 3 戦場の死神達（前編）

ロック達が待ち受ける敵と戦いを繰り広げていたのと同時刻。

「一点突破でありますっつ!!」

ダルセニョーの背に跨り手にしたランスを構え前へ前へと行くパツシヨナーの動きを止められる物は殆ど居ない。

途上でバリアー発生装置やら防衛用のメカが道を阻んだようにも見えたが、彼は言葉通りの一点突破で意に介する事も無く工場の奥まで足を踏み入れていた。

「ヒヒーンツツ!!」

「・・・むむ!!?生体反応あります!!」

突如として足を止めたダルセニョーにパツシヨナーが目を見開く。

ダルセニョーが首で差し示す方向から僅かに生体反応が感じ取れたのだ。

馬上より地面に降り立った彼は足早にその地点を指す。

ややあつて発見したのは何の理由で作られたかは考えたくは無いが、鉄格子が付けられた独房であつた。

「扉が開いているであります・・・これはどこに」

と言いかけた所でパツシヨナーは一角の隅に身を隠す二人の少女を見つけていた。

「自分であります。大丈夫でありますか!？」

「誰かと思つたらパツシヨナーじゃないの。これでとにかく助かつたわね」

反射的に工具を向けてくるのはエストだったが、現れたのがパツシヨナーであると確認した後は安堵した様に息を吐き構えを解いていた。

独房から抜け出したのは彼女が工具を用いて鉄格子をこじ開けたのだろう。

「見張りはどこに行つたでありますか?」

一応と言うか周囲を警戒しパツシヨナーが問うのだが。

「それなんだけど私とカリンカを独房に入れたきり見張りも置かずに放置されちゃつて。驚く事に持ち物検査も無しよ。鍵は閉まっていたんだけどこれを使って開きそうだったからそのまま開けて逃げようと思つたら戦闘が始まったんで隠れていたんだけど」

首を傾げつつエストが手にした工具を自慢げに見せは為す。

エストの後ろに居たカリンカもパツシヨナーの姿にホツとした様であった。

「ともあれお二人が無事で何よりであります。女性を守るのは自分のポリシーでありますからな」

相手の対応に疑問は多く残るがともあれと頭を下げるパツシヨナーにエストとカリ



ンカがクスリと笑うのであったが。

「お嬢様!!大丈夫ですか!!」

パツシヨナーから遅れる様にリングマンとアラオマンが姿を現す。

それに遅れる様にしてダストマンも息を切らしながらやって来る。

元よりカリンカを救出する為にこの場に赴いた彼らは、パツシヨナーが道中の防衛用のメカを無力化した事もあり殆ど素通りでここまでやって来る事が出来たのだが、あまりの速度に追いつくのに難儀した様子であった。

ドゴオオオンツツ!!

排水溝を床ごと強引に魚雷でぶち抜きながらダイブマンも顔を出す。

「途中でネプチューンとはぐれるし・・・まあ人質の所に来ただけマシか」

カリンカに駆け寄るダイブマンの後ろで溜息を吐くのはメガウオーター。

敵は水路からの潜入も対策をしていたらしくダイブマン達は水中で警備用のロボツト達と戦いを繰り広げる事となる。

道中でネプチューンとはぐれてしまうとと言うアクシデントに見舞われたのだが、とにかく前に進み続けるダイブマンを見捨てる事も出来ずにメガウオーターはここまで一緒に付き合う事になってしまう。

そんな彼はさて置き人質の一部を解放出来た事に歓喜の声を上げる面々。

「兎にも角にもこの廃工場から脱出する必要があります!!」

そう言つてカリンカとエストをダルセニヨーに乗せようとするパツシヨナー。

本人に悪気は無いがワイリー軍団の一人である彼にカリンカの身柄を預ける事にダイブマンらが顔を険しくした時であつた。

ガラガラガラガララツツ!!

不意に天井部の一部が欠け床へと突き刺さる。

目を見開く間もなく天井部の崩落は彼らの頭上全体に広がり無数の瓦礫が降り注ぐ事となる。

「とんだ事故物件でありますっつ!!」

ダルセニヨーに跨つたままパツシヨナーが手にした楯から光の障壁を発生させる中、けたたましい音と粉塵が辺りに広がる。

パツシヨナーが展開した障壁はカリンカとエストらを軽々と包み込み天井部の崩落からその身を守つていた。

「ガアアアアアアアッ!!」

天井が抜け日が沈んだ空を背に獣の咆哮が響き渡る。

まだ崩落していない別区画の天井部からパツシヨナーらを見下ろすのは、式典で襲撃事件を引き起こした不気味なロボット。

「カリンカにコサツクナンバーズ・・・殺すうう!!」

唸り声を上げながら地面に降り立つボーンダインにリングマンらが身構える。

あの後、どの様な処置がなされていたのか分からないがボーンダインの背には強引に引き千切った配線やチューブが垣間見えており、彼はそれを引きずりながら巨大な鎌を振り回していた。

「カリンカ嬢とエスト嬢はダルセニヨーに」

ダルセニヨーに二人の身柄を任せつつパツシヨナーが身構える。

「折角の式典の邪魔をする無粋な化け物は自分がボコボコにしてやるであります!!」

追加装備であるコキュートスランスとイージスの楯を手にするパツシヨナー。

南米での事件の際は装備の開発が間に合わず徒手空拳であった彼だが、今の彼は本来の性能を存分に発揮できる状況にある。

「リング・・・こいつが」

「ああ・・・スカルマンのデータを流用なりして造り出されたコピーロボットだ」

確認する様に問うダイブマンにリングマンが己の推論から導き出したボーンダインの正体を口にする。

「流用・・・?コピーだとおお!?」

己を侮辱する言葉にボーンダインが爬虫類の骨を思わせる頭部の向こうで目を光ら

せる。

「俺を馬鹿にするか・・・俺を紛い物呼ばわりするかああああ!!」

ボーンダインが両手に掴んだ鎌を風車の如く回転させ一足飛びにパツシヨナーの眼前に迫る。

「ガアアアアアアア!!」

咆哮を上げながら鎌を振り下ろすボーンダイン。

あらゆるものを両断する筈の一撃はパツシヨナーのイージスの楯によって受け止められる。

「・・・!?!」

目を見開くボーンダインにパツシヨナーがニヤリと笑う。

「自分の持つイージスの楯はあらゆる攻撃を防ぐでありますよおお!!」

バチンツツ!!

イージスの楯より展開される障壁にボーンダインの巨体が仰け反る。

「ライトニングアロー!!」

至近距離でパツシヨナーが放つ雷の矢に胸部を貫かれボーンダインが後方の壁に叩きつけられる。

「グオオオオオオオツツ!!」



パッションナーの放った槍の一突きはボーンダインの動力炉を確実に貫いていた。「おおおおおおおつっ!!」

断末魔の様な呻き声を上げるボーンダインの体が大きくぐらつく。

パッションナーがコキュートスランスを引き抜くと同時にボーンダインの全身が爆発四散する。

バラバラになったボーンダインを見据えリングマンらが息を吐く。

「漸く動かなくなつたで……ありますか?」

パッションナーが首を傾げる中、職業柄かりングマンがその残骸を調べようとする。

「やはりスカルマンの……」

白骨化した爬虫類を思わせる頭部をリングマンが慎重に取り扱う。

一見すると頭部その物に見えたのは一種の仮面であり、その下には同じ様に骸骨を思わせるロボットの顔があつた。

「つつ……スカルマン」

カリンカが口元を押さえながら見知つたロボットの名前を呼ぶ。

「どう言う事だ? スカルの野郎はちよいと前に用事でどこかに派遣されてたんだろ?」

「奴が洗脳されてボーンダインに改造されたなどは考えられんし、時期的にも難しいと思うが……何せ奴はこんな所に居る筈が無いんだから」

ダイブマンが首を傾げる横でダストマンが口を開きかけて慌てて黙り込む。

一同の視線が自身に集まった事でダストマンが困った顔をしつつも観念した様に息を吐く。

「この前のメンテを受ける前に研究所に戻った時にカプセルから出て来たスカルマンとすれ違ったんだよ。詳しくは分からないがどこかに行くみたいだった」

「やはりというか極秘任務か・・・」

ダストマンの説明にリングマンが唸ったその時であった。

ボーンダインの目に光が灯ったのは。

「・・・!!」

一同がその場より大きく飛び退く中、バラバラになったボーンダインの体が浮き上がる。

パキパキパキパキパキツツ!!

まるで時間を巻き戻すかのように吹き上がった黒色の煙が吹き飛んだ筈のボディを繋ぎ合わせていく。

「ギギギギギツツ!!」

歯を軋ませるような音を発しながら四つん這いの状態でボーンダインはボディを元通りに再生させていた。

(何という再生力だ。まさかとは思うがこいつは不死身なのか?)

あまりの事にリングマンが内心で戦慄する。

当然の事ながらリングマンを始めとするロボットは予備のパーツなどを用いるなどして、損傷した部位を修復する事は可能だ。

理論上電子頭脳にあるメインメモリーさえ無事であれば、それ以外の個所を損傷しても復活は出来るのだが、それも簡単に出来る事ではない。

眼前のボーンダインの様に何も用いずに大破した状態からボディを再生させるなど、理論上不可能な筈であった。

だが自身らの目の前でボーンダインは自らのボディを元通りに再生させていた。

「先程噴き出した煙・・・悪のエネルギーと同種の物か?」

フアラオマンが身構えながら疑問を口にするのだが。

「ううう・・・ううつつ!!」

ボーンダインが漏らす嗚咽にリングマン達が一瞬だが構えを解いてしまいそうになる。

ボディを再生させその気になればすぐさまに襲い掛かる事も可能な筈であるボーンダインだが、四つん這いのままその場を動こうとしない。

そればかりか肩を震わせ泣き出した事もあり、リングマンらは互いの顔を見合わせ



る。

「スカルマン・・・泣いているの?」

カリンカの言葉にボーンダインが顔を上げる。

既にその顔には爬虫類を模した髑髏が取り付けられていたが、その隙間より涙が零れ落ちる。

「酷い・・・酷いぞ。俺が何をしたって言うんだああ!!」

文字通りの号泣と言わんばかりに泣き叫ぶボーンダインにリングマンらも戦意を失いかける。

戦いの最中に何をと思うであろうが同じ製作者から生み出された兄弟と同じ声で泣く相手を問答無用で攻撃を加える程、コサツクナンバーズは非情になれなかった。

部外者である。パツシヨナーやメガウオーターも同じくだ。

「お前達は何も知らない。お前達がのうのうと生きていく中で俺がどれだけ手を汚しているのか。お嬢様や博士の為にどれだけ嫌な思いをしているのかを。空っぽな俺を見て何も無かったと思っているし知ろうともしないいいつつ!!」

自身らを責め立てるように指を何度も突き付けるボーンダイン。

何度目かの嗚咽の後に不意にその指が止まる。

ゆつくりとその指を下ろし立ち上がるボーンダインの姿は亡霊のそれを連想させた。

「ハハハハハ!! ちよいとみつとも無かったな。いやあ悪い悪い。急に湿っぽくしまつてなあくだから続きを楽しもうぜ」

瞬時に表情を変え今度は逆にケタケタ笑い出すボーンダインにリングマンらは面食らう。

「お前らもお嬢様も皆で仲良く死んでもらうぜ」

仮面の向こうでニヤリと笑つたと誰もが悟つた瞬間、ボーンダインの全身より殺気が滲み出る。

「つつ……スカルマン!!」

「喜ばしい事に俺はボーンダインと言う名前とボディを与えられた。そんな空っぽである事を強いられる奴の名前はいらねえ」

ダイブマンが叫ぶ中でボーンダインが周囲にビットを展開する。

バチバチバチバチツツ!!

ビットその物がバリアーを展開し周囲を飛び回つた事でリングマンらはその場より後退を余儀なくされるのだが。

「まあそう動くよな……」

後退した面々を前にパチンと指を鳴らすボーンダイン。

不意にボーンダインが姿を現した崩落した天井部より殺気が複数生じる。

天井部より自身らを不気味な骸骨の顔をしたロボット達が見下ろしている事に気づいた時にはもう遅かった。

「フアラオシヨット!!」

「リングブーメラン!!」

「フラッシュストッパー!!」

ロボット達が無造作に繰り出す特殊武器はそれぞれが弱点とする物であった。

「ぐあっっ!!」

「くっ!!」

巨大な光弾の直撃を受け昏倒するリングマン。

ダストマンは致命傷こそ避けたが片腕をリングブーメランで切断される。

ザンツツ!!

フラッシュストッパーによって視界を奪われたフアラオマンが、あっさりとボーンダインの振るう鎌に真横に両断され地面へと転がる。

次々とやられる大切な家族を前にカリンカが叫ぶ暇も死神は与えない。

「スカルバリアーデベロッパー!!」

眼前で弾け飛ぶスカルビットが放つ電磁波をまともに受けダイブマンも意識を失い倒れてしまう。

「フン・・・弱いな。だがお蔭さんで喜ばしい!!」

天井部より姿を現したロボット達、ドクロロボットに目を向けながらボーンダインが誇らしげに言う。

「ドクロロボット・・・データ通りなら我々がかつて運用したロボットでありますね」

「あれって確か高性能ロボットの動きとかも含めて完全な再現が出来ると言う優れもののロボットよね？」

パッシュヨナーの言葉にエストが眼鏡を持ち上げながら口を開く。

ドクロロボット、正式名称はドクロロボットK-176と呼ばれる量産型のロボットでありワイリーによる三度目の世界征服計画の際に運用されている。

その最大の特徴はロックマンのウェポントレースシステムを参考にした事による他のロボットの武装及び行動パターンのはほ完璧な模倣である。

ドクロロボットと言う固定した器に収まる事でオリジナルとは多少の運用上の違いは生じるものの、単純な特殊武器の模倣或いは応用とは違い完全な再現という点では、ロックやフォルテよりもドクロロボットの方に軍配が上がるであろう。

製作された時期などを鑑みれば量産型のロボットとしては破格の存在と言えるドクロボットなのだが、その高性能故に生じる問題があるのは世の常か。

「運用コストの問題さえ解決出来ればジョーシリーズを超える存在になった・・・と言う

話を聞いた事があるであります」

パッシュノナーの言葉にエストが苦笑いを浮かべる。

このドクロロボット達だが悲しい事に製造および運用に多大なコストが生じるのが最大の問題点として挙げられている。

あらゆる武器と地形に対応する汎用性を持つボディを製造するそのコストはナンバーズを代表とする高性能ロボットよりも割高となり、しかも彼らはオリジナルと違い比較的単純な思考回路しか持たない事から柔軟な動きを求める事はほぼ不可能となっている。

ぶつちやけるとドクロロボットを量産化するくらいなら新しい高性能ロボットを生み出す方がコスト的にも安く済むと言うのが懐事情に厳しいワイリー軍団の本音と見えよう。

それ以外にも行動パターンその物が所詮は模倣と言う点も理由の一つと言える。

悲しいかな投入当初こそロツクに苦戦させたドクロロボット達であったが、後半の方になると殆ど行動パターンが見切られてしまいほぼ完封と言う散々な結果となつてしまった。

以上の理由からドクロロボット達は量産化されず今に至つていた筈なのだが。

ボーンダインの隣に並ぶ立つ三体のドクロロボット達。

リングマンらを倒したと言うのにその顔には感情も無く人形の様に佇むのみ。

「さてどうするんだお嬢様？残ったのはその若造に馬と河童だけだ。俺とドクロボット達を同時に相手取れると思っっているのか？」

身動きの取れないダイブマンを足蹴にするボーンダイン。

その姿にカリンカが動こうとするがダルセニョーとメガウオーターに押し止められる。

対して軽く手で合図を送ったボーンダインはドクロボット達と共に徐々に間合いを詰めていく。

ダッツ!!

地面を蹴り真つ先に動いたのは二体のドクロボット。

「メタルブレード!!」

「ナパームボム!!」

瞬時に武器を換装したドクロボットがそれぞれの特特殊武器をパッションナーに投げ放つ。

「ブリザードアタック!!」

送れるようにして動いたもう一体はメガウオーターに苦手とする冷氣系の特特殊武器を撃ち放つのだが。

「押忍!!バーニングであります!!」

突如として全身を炎で包み込むパッションナー。

その熱量は自身に放たれた攻撃ばかりかメガウオーターに向けられた吹雪まで消失させていた。

「自分もある意味でドクロロボット同様にあらゆる状況に対応すべく生み出された存在であります。如何に性能が高くて単純な思考しか持たない・・・魂を宿さない輩には負けませんよおお!!」

ナパームボムを放った方のドクロロボットが発せられた熱風によつて爆弾を誘爆させられ自滅する中、炎の塊その物となつたパッションナーがもう一体のドクロロボットへとコキュートスランクスを繰り出し一撃で破壊する。

「バーニングアロー!!」

残ったドクロロボットが慌てるにしては淡々とブリザードアタックを放ってくるが、炎の塊と化したパッションナーには一切通じずに逆に炎の矢で動力炉を貫かれ沈黙。

瞬時に三体のドクロロボットを倒したパッションナーだが、背後でカリンカの悲鳴が響き渡り慌てて振り返る。

「流石はキングの後継機・・・だ〜が〜所詮は単騎だ!!周りをよく見なつての」

陽気な声を上げながら鎌を振り上げるボーンダイン。

ドクロボットを相手取る。パッションナーを尻目に彼はカリンカの元へと肉薄していた。  
「ウオーターウォール!!」

咄嗟にメガウォーターが水のバリアを張って庇わねばカリンカは間違い無く殺害されていただろう。

本来であれば相手の攻撃を無力化するだけの強度を持つメガウォーターのバリアであつたが、ボーンダインの鎌の勢いを削ぐだけの結果に終わる。

袈裟懸けに身を切られ呻きながら崩れ落ちるメガウォーターにカリンカが駆け寄ろうとするが。

「は……早く逃げろって」

目だけ動かしながらエストら共々逃げる様に促すメガウォーター。

倒れ伏すメガウォーターの眼前に鎌が突き付け、ボーンダインが仮面の向こうで目を細める。

「アンタにとつちやあ……恨みがある筈のワイリーナンバーズだつて言うのに随分とお優しい事で」

「貴方は……スカルマンなの?」

己を見下ろすボーンダインにカリンカが凜とした瞳を向け問う。

彼女の後ろの方でエストがダルセニョーと声を上げるが届かない。



暫しの沈黙の後、ボーンダインが肩を震わせ笑う。

「その問いは正直意味が無い。何故ならアンタはここで死ぬからだ!!」

質問に答えず鎌を振り上げるボーンダイン。

「憎い!!」

「悲しい!!」

「喜ばしい!!」

それぞれの声を同時に響かせボーンダインが無造作に鎌を振るった時であった。

ガキイイイイイインツツ!!

甲高い金属音が響き自身の体が尻餅をついた事が分かった。

どっちにしろ死んだと思ったのだが、大きくぶれた視界が次第に定まっていく。

「なにいいいい!!」

己の攻撃を防がれ怒りの声を上げるボーンダイン。

メガウオーターですら軽減させる事しか出来なかつた鎌の一撃を展開した障壁で完全に防ぎ切りながら、彼は頭一つ分は背の高いボーンダインを見上げる。

「汚い手でお嬢様に触るんじゃねえ」

ドスの利いた低い声を響かせながら驚愕するボーンダインの顎先を蹴り上げ、後方へと吹き飛ばすのは不気味な骸骨の姿をした口ポット。

「ぐおおおおおつっ……お前は!!」

咆哮を上げ起き上がったボーンダインに大した反応も見せず佇むロボットの名は。

「ス……スカル……マン」

意識を取り戻したダイブマンが呻く様に彼の名前を呼ぶ。

コサツクナンバース最強と名高いスカルマンはゆっくりとボーンダインにその指を突き付ける。

「さあ仕置きの間だ。カリンカお嬢様を傷つけようとしたお前らをもれなく墓場に送ってやるよ」

決め台詞にしてはどこか棒読みな調子で言いつつ、スカルマンは両の手にマシンガンを手にするやそれらを問答無用でボーンダインに向けて撃ち放つのであった。

## V o l l 4 戦場の死神達（後編）

僅かに時は巻き戻る。

戦闘が繰り広げられる廃工場を遠目に見る事が出来る仮設の司令室。

先程まで火力支援を行っていたロボット達が続々と戻ってくる中、コサツクは急遽この場によつて来た装甲車に駆け寄っていた。

装甲車の荷台から降りてくるのは骸骨の姿をしたロボット達。

コサツクナンバーズのスカルマンとその配下スケルトンジョー達である。

「博士・・・戦況は」

「数の上では我々が有利・・・だが敵もかなりの実力を持っている様だ。しかもカリンカ達を人質に取られている」

問うてくるスカルマンにデータを送信しながらコサツクは淡々と状況を説明する。

「・・・分かりました。では行ってきます」

数秒程、スケルトンジョー達と相談する様に顔を見合わせたスカルマンだったが、そうとだけ言うとうと迷う事無く廃工場へと駆け出していく。

「頼むぞ・・・スカルマン」

小さくなっていくスカルマンの背に送り出す様に言葉の口にするコサック。

「むむむむ……」

「……どうしたの?」

その様子を見て武者震いの様に全身を震わせるのはバスターロッドだ。

自分の仕事は終わりとエネルギーパックを口にしていたハイパーストームはのんびりと首を傾げる。

「漸くワイリー軍団に合流出来たと言うのに。この一大決戦を前にメガガンダラーズのリーダーである俺たちが後方で待機していても良いのか!」

「……良いんじゃないの?」

「ウキッツ!!駄目だ!!お留守番なんて俺たちの柄じゃないぞ!!」

見た目通りの猿の様な奇声を上げながらバスターロッドがその場で飛び跳ねる。

数年も行方不明になった挙句に漸く復帰が叶った事もあり、バスターロッドは焦りに身を焦がしていた。

自身らの内の一人、メガウオーターがその特性を生かす形でダイブマンらと前線に向かった事も大いにあるだろう。

今にも勝手に出て行きそうな彼を見据えコサックが溜息を吐く。

「少し良いかね?」

「なんだウキツツー!!」

コサツクに声を掛けられただけで飛び跳ねるバスターロッド。

「君やその豚君はワイリーナンバースでもキラースなどと同様に特別製のロボットと私は見る。謂わば万が一の時の保険だ」

多くの戦闘用ロボットが出払った周囲を指差しながらコサツクが言う。

コサツクの言葉通りバスターロッドらの性能は現在の水準においても上位に値する者であり、彼ら二人が居ると居ないのでは大きな違いがあると言えよう。

「手薄になったこの場所を敵が狙わないと言う可能性はゼロではない。もしも君達が勝手に出撃をして……ここが壊滅となった場合。ワイリーは君達に失望すると思うよ?」

「ウキキキキツツ!!」

「た……確かに」

脅す様に忠告を口にするコサツクに二人が喉を鳴らす。

ただでさえロツクマン打倒と言う本来の役目を果たせていない事もあり、バスターロッドらは本意ながらも己の役目を果たさなくてはならなくなるのだが。

「……と言う訳だ。君達はこの場で待機をしてくれたまえ」

笑みを浮かべコサツクが二人に背を向けた時だった。

「うわああああ!!ちよつ……ちよつと待ってくれ!!」

全身よりロケットブースターの炎を吹き上がりせ空を舞う物体にしがみ付きながら悲鳴を上げるのはオイルマンだ。

ここにもバスターロッド同様に待機しているだけでは我慢が出来なくなった者が一人。

「気を付けて行つて来いよ〜」

「派手にやつてこ〜い!!」

自分らの仕事は終わりとE缶を飲んでいたナパームマンとボンバーマンに見送られるのはレントとオイルマン。

全身より炎を吹かしながら勢いよく飛んでいくレントを見送り、ナパームマンが無言で佇んでいたタイムマンに声を掛ける。

「お前は行かないのか?」

「行つた所で時間の無駄です。そもそも二人が行つた事でこの場の戦力低下は避けられません」

計算する様に指を上げながら淡々と話すタイムマン。

「ウキッツ!! 抜け駆けだウキッツ!!」

飛び去つて行つたレントに抗議の声を上げるバスターロッド。

「これですますます行けなくなつたね」

のんびりとはあるがはつきりとした事実を告げるハイパーstormにバスターロッドは悔し気に唸る他無いのであった。

そして現在。

ズドドドドドドドツツ!!

両手に持ったマシンガンを乱射しポーンダインの全身に風穴を開けていくスカルマン。

「ぐおおおおおおおつっ!!」

怒りの咆哮を上げるポーンダインであったが、容赦なく自身に攻撃を加えてくる相手に一旦距離を開ける。

ガチャツツ!!

負けじとポーンダインの両肩のカバーが開かれる。

彼の両肩に隠されているのはガトリング砲だ。

「ガンスレイブウウツツ!!」

ズガガガガガガツツ!!

スカルマンの倍以上の弾丸を撒き散らすポーンダインだが、それらはスカルバリアーによって悉く防がれる。

いや防がれると言うのは語弊があるか。

バリアーを以てしても防ぐ事が出来なかった幾つかの弾丸は確実にスカルマンのボディに傷を付けていた。

「……………」

仁王立ちしたままその場を動こうとしないスカルマンに一瞬怪訝な顔となるパツシヨナーだが、彼の後ろにカリンカが居る事に気づくや行動は早い。

「スカルマンとやら!!そこのお嬢さんは自分に任せるであります」

イージスの楯より障壁を発しながらカリンカの前に立ち塞がるパツシヨナー。

彼女の安全が確保されたと見るやスカルマンは振り返らず一直線にポーンダインに向かう。

ダッツ!!

無数の弾丸を掻い潜り肉薄するスカルマン。

ガキツツ!!

放たれた拳を顎で受け止めたポーンダインの眼光が一瞬だが光る。

「死ねええええ!!」

砕けた顎先が自己再生する中、ポーンダインがスカルマンを両断せんと鎌を振るう。振るわれる鎌がスカルマンの左腕が宙を舞う。



が左腕を犠牲する事で一撃を凌いだ彼はボーンダインの頭部に拳銃を突き付ける。

ダンツツ!!ダンツツダンツツツツ!!

「ガアアアアアア!!酷い!!痛いじゃないかあああ!!」

怒りの咆哮と共に泣き叫ぶボーンダインにスカルマンは無言のまま銃弾を続けざまに叩きこむ。

ガシツツ!!

六発目の銃弾を叩きこもうとした右腕であつたが、それはボーンダインに腕を掴み取られ開けられた天井部に向けて発射される。

「痛い痛い・・・だがテンション上がってえええ!!」

喜々として笑うボーンダインの頭部に傷が徐々にだが再生していく。

人間のみならずロボットであつても致命傷と言うべき傷を負いながらもボーンダインは倒れない。

そもそもが一度バラバラになって大破した筈の彼だが、悪のエネルギーを用い元通りに再生したのだ。

不死身の化け物としか形容する事が出来ないその姿に殆どの者は恐怖を覚えるであろうが、スカルマンはそれに反応を示す事無く無言だ。

「テメーら・・・俺ごと撃て!!」

一瞬だが周囲に目を向けスカルマンが叫ぶ。  
ドンツツ!!

まずにボーンダインの背に直撃したのはダストマンの放つダストクラッシュャー。慌てて飛び退こうとしたボーンダインの両足にリングブルーメランが絡まった所で上半身だけのファラオマンが巨大な光弾を放つ。

続けざまにダイブミサイルを受けたボーンダインが崩れ落ちる右半身をそのままに天井部に飛び退いた時だった。

「なかなか・・・やる・・・んっつ?」

ピツツーーー!!

スカルマンらを見下ろしながら口を開くボーンダインの全身に無数の赤い線が走る。

「お前らは・・・!!」

目を見開きボーンダインが呻く。

彼の視線が捉えたのはマシンガンやライフル、ロケット砲などの小火器を持つスケルトンジョー達の姿であった。

「ス・・・スカルバリアー!!」

反射的に電磁バリアを身に纏うも右半身を失っている事から展開できるビットの数も限られる。



四度目のワイリーによる世界征服計画の際に生み出されたスカルマンは、他のコサツクナンバースと違う所がある。

当初より何らかの形で人々の役に立つ為に製作されたコサツクナンバース達。

彼らはカリンカを人質に取られたコサツクによって戦闘用としての改修或いはリミッターを解除され、世界征服計画に利用されたのだがその中でスカルマンはロックマン抹殺の為に生み出された純粋な戦闘用ロボットである。

一応リングマンも戦闘用ロボットの範疇にはあるが、彼はそもそもがロボットポリスとして製作された所がありリングブーメランと言う武装も本来の用途は敵対者の捕縛を目的としている。

敵対する者には一片の慈悲も無く淡々と破壊する。

ある意味で最もロボットらしい殲滅者。

それが世間でのスカルマンの評である。

次々と武器を持ち換えボーンダインに攻撃を加え続けるスカルマンに部外者のパツシヨナーも若干顔が強張っていく。

既にボーンダインの方は原型を留めておらず、元の姿すらも判別出来ない状態となっていた。

「やり過ぎでは・・・」

「噂には聞いていたけど純粋な戦闘用……いえ、戦争用ロボットと言った方が正確かしら」

思わず不満げに口を開くパツシヨナーの隣でエストが顎に手を置きながらスカルマンの動きを見つめていた。

これではまだ単純な思考回路を持つロボットのほうが温情があるのではと思わせてしまおう。

ピタツツ!!

不意にだが床の上に転がっていたボーンダインの指が真上を指差す。

「……!!」

その動きに目を見開いたスカルマンは反射的にバリアーを張り頭上より降り注ぐ弾丸を凌ぎ切る。

見れば先程までボーンダインを攻撃していたスケルトンジョーがスカルマンに対し武器を構えていた。

< あゝあゝ……本日は晴天なりじゃないな。悪いがスケルトン達のコントロールを奪わせてもらった。ここまで容赦無く破壊しに掛かるとは外連味の無い奴だゝな >

> 若干間延びした声が周囲に響く。

声と言つても音で発せられた物ではない。

直接脳裏に響く一種のテレパシーの様な物であった。

自身と同じ声が響いても眉一つ動かさないスカルマンはボーンダインの残骸より吹き上がる煙が人の形を彩つた所で銃弾を次々と撃ち放つ。

<本当にゝ外連味ねえな。我ながらの容赦のゝ無さに呆れるしかねえなゝ!!>

呆れた様な声を上げるボーンダイン。

ズオオオツツ!!

再生しかけた片腕がスカルマン目掛けて射出されそれを回避する間にボーンダインが一気にボディの再生を進め始める。

<あくあくこれじゃ元の形に戻せねえ。しやあねえ・・・懐かしい形になるか>

スカルマンの容赦の無い攻撃によってボディを粉々に碎かれた事もあり、ボーンダインは本来の形にボディを再生出来ないのか残された部品を使い即興でボディを再構築していく。

パキパキパキパキツツ!!

「元々・・・それに近い物は持っていたがゝ悪のエネルギーは使いこなせりや便利なモンだな。理論上は見ての通り不死身に近い力も得る事が出来る」

彼が言う懐かしい形。

スカルマンと瓜二つの姿となりながらボーンダインは両肩や掌を確認する様に回していた。

バサツツ!!

「・・・黒いスカルマン」

瓜二つの姿になりながらも悪のエネルギーの影響かそのボディを黒くさせたボーンダインは小さく呻いたダイブマンに皮肉気な笑みを返す。

「さあスカルマン。仕切り直しと行こうかそれぞれの感情を強調させた人格の中でオレが一応のリーダー格でなく。兎にも角にも普段は眠っているオレが起きたからには」

新たに生み出した黒マントを羽織りながらボーンダインは屈託なく笑うのだが。

「空っぽのオメーに勝ちはねえ。ともあれ吹き飛んだ左腕を繋いで表に出ろい!! 一対一の正々堂々な勝負しようじゃねえか」

バツツ!!

そう言って天井部に向かって跳躍するとボーンダインは向こう側へと姿を消す。

対するスカルマンは床に落ちていた左腕を拾い上げるとそれを切断面に突き付ける。

ピキピキピキピキツツ!!

切断面が合わさるや僅かに泡立ち徐々にだがスカルマンの腕が繋ぎ合わされていく。

「テメーらはお嬢様を守つてろ」

そうとだけリングマンらに言い放つとスカルマンはボーンダインを追い外へと向かつていく。

「スカルマンツツ!!」

彼の背にカリンカが叫ぶがその言葉に彼が反応を示す事は無かった。

一方エキドウナと戦いを繰り広げるライトナンバーズにアストロマン二人と主に遅れて飛び出す事になったゴスペルらは。

「ウフフフ・・・所詮は不完全な機械。私達に勝てる筈など無いのよ」

配下のガード達を使いジリジリと包囲網を狭めエキドウナは自らの勝ちを確信する。

周囲に展開した質量ある霧も上手く作用しエレキマン達の動きを奪う事に成功。

その隙間を埋めるようにガード達を展開し彼らは一室の隅にまで追い詰められている。

負傷したファイヤーマンとカットマンを庇う様にエレキマンとアイスマンが前に立っているが、今や彼らの眼前にガード達が構える槍の先が突き付けられている。

「グルルルルツツ!!」

威嚇する様にゴスペルが吠えるがガード達は怯む事無く距離を詰め始める。



「ガード達!! 一気にかたを付けてしまいなさいな!!」

主の命令を受け一斉に動き出すエキドウナガード達。

苦し紛れにエレキマン達が攻撃を加えるがガード達は怯む事無く槍を突き立てる。

彼らが串刺しになったと確信したエキドウナが妖艶に笑い声を上げるのだが。

「ギャツ!! ギャヤヤツツ!!」

「・・・!?!」

エキドウナガード達が困惑した声を上げるのを聞くや彼女は慌ててエレキマン達が居た場所に目を向ける。

見ればそこには誰もおらず槍を手にしたガード達が右往左往していた。

「ど・・・ど(ハ)ん?」

と言いかけたエキドウナの背後から回転する刃が飛び込んでくる。

カンツツ!!

手にした刃でローリングカットを弾いたエキドウナであったが、いつの間にか己らの背後に居たエレキマンらに彼女は驚きを隠せない。

が彼らの後ろでオロオロする二人のアストロマンの姿を見るや誰も仕業かは一目瞭然である。

「また貴方達・・・邪魔をしないでもらえるかしら!？」

ギロリと睨み据えるエキドゥナにアストロマン達が慌てて目を逸らす。

「アイススラツシャーだよ!!」

「サンダアアアビイムツツ!!」

「燃えろおおお!!」

左右に弾かれる様に散ったアイスマンとエレキマンの攻撃を軽く弾くやエキドゥナは眼前で炎を放ってきたファイヤーマンの追い打ちを小型のブラックホールを発生させる事で悉く防ぎ切る。

「無駄よ。偉大なるラ・ムーン様の従者である私に下等な貴方達のお!!」

跳躍しエレキマン達に襲い掛かろうとしたエキドゥナであったが、自身の背から延びる蛇の尾に重みを感じ反射的に振り返る。

見ればもう一人の方のアストロマンが控えめに自身の尾を両手で掴んでいた。

完全に彼の気配を感じ取れなかった事もあり、もしも彼が攻撃を仕掛けていけば手傷を負っただけにどこか戦いに消極的な彼の態度にエキドゥナは苛立つ。

「先程から鬱陶しいわよ!!石になりなさい!!」

カツと怪しく目を光らせるエキドゥナであったが。

「わああああ!!」

反射的に目を閉じ顔を背けるアストロマン。

それ故に彼のボディが石になる事は無かった。

「もう！！いい加減にしなさい！！」

対人恐怖症の彼に更に苛立ったエキドウナは片腕に発生させたブラックホールでアストロマンに殴りかかる。

これまた反射的に回避するアストロマンだが、球体上のボディの一部が挟り取られてしまう。

「うわあああああんつつ！！痛いよおお！！」

「あわわわわ！！大丈夫つつ！！」

泣き叫ぶアストロマンにもう一方のアストロマンが駆け寄る。

「わあああああつつんんつつ！！もうヤダー！！！！」

互いに泣き出したアストロマンは手を合わせながら叫ぶのであった。

「ア・・・アストロクラッシュウウツツ！！」

「・・・！？」

正直、驚く間など無い。

今の今まで己の妨害ばかりして来たアストロマンに大した戦闘能力は無いと思っていた事もあるが、一瞬だが膨れ上がるエネルギー量と大きく歪む空間の割れ目に反応する事すら許されない。

ズドドドドドドドドドドドドドドドツツ!!

一瞬の内に空間の割れ目より出現した無数の流星群にエキドウナは悲鳴を上げる間も無く飲まれてしまう。

普段はワイリー軍団で最も臆病と言われているアストロマン。

その実力は極めて高いのだが、余程の事が無い限りその真価が発揮される事は無い。

これはその滅多に見る事が出来ない一例と言えよう。

「あいつ冗談抜きで強いじゃねえか」

カットマンが呆れた様に口を開く。

事が終わって数秒後、すっかり崩壊した一室でエレキマンが恐る恐る周りを見渡す。

「………とりあえず勝てたのか?」

見ればエキドウナガード達も瓦礫の下に埋もれてしまい自身らを除きその場で無事にいる者は誰も居なかった。

ガラツツ!!

突如として瓦礫の一部が飛びそこよりエキドウナの腕が伸びた事でアストロマン達  
が怯え、エレキマン達が身構える。

「ふ……不完全な機械達。お……覚えておきなさいよ。この雪辱は必ずや……」

震える腕を伸ばし粉々に砕けた眼鏡のフレームを掴みつつエキドウナの気配がその

場より消え去る。

それと同時に倒れ伏していたガード達の姿も消え去り、辺りに満ちていた殺気は消え去ってしまう。

ドゴンツツ!!

天井部より響く音に目を見開くエレキマン達。

スカルマンとボンダインが天井部で戦いを始めたのだが、この時の彼らに何が起こっているのかを確認する術はない。

「ガウツガウツツ!!」

先を見据えゴスペルが声を上げる。

次いで複数の足音が聞こえた事もあり一同はそちらの方に目を向ける。

「あ、皆つつ!!大丈夫?」

エンカーを先頭に向こう側から走って来るのはロールである。

それに遅れて負傷したフォルテが一人で足取り重く歩いて来る。

「クウ〜ン!!」

傷ついた主に鼻を鳴らしながらすり寄るゴスペル。

そんなゴスペルにフォルテは苦虫をすり潰したような顔を浮かべていたのだが。

ズガアアアアアアツツツ!!

再び響く爆発音とともに建物内が大きく揺れる。

「とにかく一旦外に出た方が良さそうだな・・・」

「皆、ロックは？」

エンカーが苦笑いを浮かべる中、ロールがエレキマン達に問う。

「それが・・・俺達もさつきまで戦っていたから」

カットマンの言葉にロールが心配げな顔となるのだが。

「ウツワアアアアア!!」

外より響き渡るのはナイトマン達と戦いを繰り広げていたメカザウルスの声だ。

見れば頭上より降り注ぐ弾丸を頭部に受けその巨体が横倒しになるのが見える。

ヤドカルゴ達もメタルマン達の手であらかた倒された様だった。

「よし・・・とにかく俺らはロールを安全な場所まで連れて行くって事で良いな」

「言われるまでもない」

安全が確保された事を確認しつつエンカーが口を開き、エレキマンが同意と頷く。

ややあつてロールを守る形で円陣を組みながら一同が外に飛び出した時だった。

ズシヤアアアアア!!

「ストツプツツ!!」

何物かが地面を転がって来た事もあり、慌ててエンカーとエレキマンが停止を促す。

地面を転がったのはスカルマン。

無言のまま立ち上がる彼と対峙するのもカラーリングが黒になっただけのスカルマンだった。

「え……スカルマンが二人？」

驚いたような声を上げるロール。

他の面々も同じ様に困惑気な顔となるのだが。

「おや〜これはロールお嬢さんじゃねえか〜。そういや〜お前さんも人質にしていたっけか〜式典の時は半分暴走してたんでな。勢いあまって襲い掛かっちゃった〜一応は詫びておくれ〜」

ロールから見れば黒い方のスカルマンことボーンダイスがわざとらしく頭を下げる。

何が起こったのか分からず困惑する面々を他所にスカルマンがボーンダインに殴りかかった事で戦いが再開される。

「……遅い!!」

迫った所で半歩退き、足払いを掛けられその場で転倒するスカルマン。

顔に泥を擦りつかせる起き上がろうとするスカルマンを足蹴にしながら、ボーンダインはほくそ笑む。

「つつ……ふ、二人とも止めなさい!!」





「あつたが、思わぬ形でプライドを発見する事となる。

「アイアンナイツツツ!!陣形を整えろ!!姫を極悪非道の敵から取り戻すのだ!!」

ナイトマンが檄を放つのにアイアンナイツの面々が領き一斉に身構える。

「愚かな・・・不完全な機械共が」

自身目掛け集まり始める彼らを見下ろしつつアルゴスは大きく鼻を鳴らすのであつた。

## V O I 1 5 廃工場での決着

フアントムマンことフィーネを退けたロックにパンク、バラード、ネプチューンは先を進む。

エキドウナの手によつて各所に分断されそれぞれの敵と戦う事となつたが、最優先は人質となつた女性達の救出である。

ややあつて進んだ先に一人が入れる程の金属製の箱が目に入る。

恐らくジャミングの効果もあるのだろうが、箱の中から微弱ではあるがエネルギー反応を感じ取れる。

「あくもしかしなくても隊長かしら？」

箱に手を当てながらネプチューンが呻く。

普段は陽気な彼が珍しく困つた様な顔をするのでロックらが首を傾げるのだが。

「実は・・・隊長つて人間で言う所の閉所恐怖症なのよね。ちよつと出す時が大変かも」

「・・・は？」

ネプチューンの言葉にバラードの目が点となる。

そうでなくても色々な悪癖持ちのアースなのだが、まさか狭い場所まで苦手とは思わ

なかつたからだ。

「ギリギリエレベーターぐらいなら耐えられるけど。隊長の場合、修復用のカプセル入る時も速攻でスリープモードになるから」

ネプチューンが掌を広げ説明する横でパンクが箱に付けられた端末を操作していく。

「どちらにせよ放っておく訳にはいくまい。多少無理矢理でもここから連れ出す・・・」  
そう言つて端末を操作し箱を開くパンクだったが。

バキツツ!!

箱が開くなり自身の顔面に何かが飛んできたのもあつてパンクは反応しきれずにそれを正面からまともを受けてしまう。

幸いと言うべきかそれで負傷するなどと言う事は無かつたのだが、突然の事に反応出  
来ず目を白黒させる。

もしもネプチューンより説明聞いていなければ更に混乱しただろう。

ブンツツ!!

次いで飛んでくるのは飲み干され空になったエネルギーパックだ。

それを軽く手で払いながらパンクは箱の中を覗き込もうとするのだが。

またしても飛んでくるのは先程と同じくアースの足である。

「アース。私だ・・・パンクだ。もう大丈夫だから出て来い」

こう言う場合、相手が出て来るまで待つのも一つの選択肢なのだがある意味で彼らしい行動と言えよう。

次いで自身に手が飛んでくるのだが、それを軽々と受け止めるパンク。

先程の蹴りもそうだがもしも彼女が本来の戦闘能力を発揮できる状態であつたらと考えるにゾツとしてしまう。

グツ・・・。

腕を掴まれた事でアースの喉から小さな呻き声が聞こえる。

そんな中でパンクが強引に腕を引っ張り彼女を箱から外に引き摺り出す。

「あ・・・ぐうっ」

外に出されたアースの体に目立った傷は無い。

だが助けに来た面々に向けられるのは殺気の籠った視線だ。

泣き腫らした真つ赤に充血した目で睨み据えてくるアースだが、その姿はあまりに弱々しい。

ネプチューンの言う通り狭い場所に閉じ込められた事で精神をすり減らしてしまつたのだろう。

暫しの間、パンクらを睨み据えていたアースだが次第に冷静さを取り戻して来たのかその顔がクシャクシャに歪む。

手で顔を覆い嗚咽交じりに泣き出すアース。

彼女を隠す様にパンクが彼女を抱きかかえる。

「・・・ちよつと」

アースの悪癖などお構いなしの行動にネプチューンが非難する様に声を上げるのだが。

「誰彼構わずに泣き顔など見られたくないだろうからな。こいつのプライドの高さを考えれば猶更だ」

パンクに抱かれたアースは怒った様に拳を叩きつけてくるのだが、殆ど力など入っていない。

暫くして殴るのを止めたアースはパンクの胸の中に顔を埋めると大声で泣いた。

「こんな言い方も癪に障るだろうがここの所のお前は偉かったぞ。戦闘能力を失っても不貞腐れる事も無く料理が出来る様になろうと努力しようとした。私だったらロールにしごかれた時点で投げ出している。まあ誰だって苦手な事はある・・・狭い所に閉じ込められれば怖いもんな」

ニコニコと笑みを浮かべながらアースの背を擦るパンク。

肩を震わせるアースがパンクの言葉に頷く様に何度も嗚咽する。

「とりあえずアンタ達、先に行きなさいよ」

そう言つてロックとバラードをネプチューンが促す。

「アタシとパンクはここで隊長が落ち着くまで待機してるから」

ネプチューンの言葉にロックとバラードは互いに顔を合わせる。

「じゃあねえッス。行くッスよ!!」

「・・・そうだね」

バラードに肩を叩かれロックは力強く頷くと一緒になつて駆け出していく。

彼らを見送つた後、ネプチューンはパンクに振り返る。

「普通だったらアンタも行かせるけど・・・」

「まあそれが妥当な判断だろうが・・・心遣い感謝するぞ」

そう言つて息を吐くパンク。

彼の声は何時に無く弱々しい。

フアントムマンの正体がファイネであり、彼女がワイリー軍団内でスパイとして動いていた事に教育係でもあつた彼は少なからずのショックを受けていた。

それを僅かな挙動から感じ取つたネプチューンは彼をこのまま待機する様に促したのだが、それは半ば正解であつたと言えよう。

「まさかファイネが・・・これが夢なら覚めて欲しいものだ」

「ううっ・・・何もしてなくてごめんなさい。すれ違いざまに舌打ちしないで」

溜息を吐く。パンクだが、アースが泣きながら謝り出したので呻く他無い。

未だに混乱の極みにある彼女が二人の会話を正確に理解した訳では無いのだが、フイーネの名前が出た事で思い出したのだろう。

「うわっ・・・あの子、本当に性悪ね」

はつきりと言うネプチューンの言葉に教育係であったパンクは更に肩を落とすのであった。

「データ送信完了・・・これによって何時でも準備は整った」

〈お勤めご苦労・・・漸く私も我が身の戒めを解く事が出来ると言う物だよ〉

端末越しに主と会話をするアルゴス。

「・・・・・・・・・・」

〈おやどうしたかね?〉

「いや・・・どうやらエキドウナが退けられた気配を感じたのでな」

不意に黙り込んだアルゴスは問いかけてくる主にその理由を口にする。

〈ふむ・・・ともあれここでの仕事は終わったと見るが〉

「確かにそうだがこのまま黙って退くのは癪だ。相手がロックマンであれば尚更な」

〈彼に関しては私に譲って欲しいのだが・・・まあ好きにしたまえ〉

苦笑気味にそう言いつつ通信を切られた事にアルゴスは気にした風もなく近づきつつある者を待ち構える。

「来たな・・・ロックマンよ」

巨大な目を僅かに細めアルゴスは自らの宿敵に向かって口を開く。

「アルゴスツツ!!プライドを返せツス!!」

アルゴスの姿を見るなり真っ先に声を上げるのはロックと共にその場にやって来たバラードだ。

僅かに遅れる様にしてロックが姿を現す。

「その小娘がそれ程までに大事か・・・」

気を失ったままのプライドを手で掴むや楯にする様に掲げるアルゴス。

「てめえ、卑怯ツスよ」

「人質は有効活用すべきだと思うが。戦いに卑怯も何も無い・・・!!」

バラードの言葉に淡々と言いつつアルゴスはロックだけを見据える。

文字通りアルゴスはロックにしか眼中に無いと言わんばかりの対応だ。

「全ては我が主・・・ラ・ムーン様の為に」

宣言するかのように主への忠誠を口にしながらアルゴスが目から巨大なビームを撃ち放つ。



「うわっっ!!」

慌ててスライディングで避けるロックだったが予め左右に伏していた眷属達が追い打ちをかける。

ボアアアアアアア!!

「炎を素体にしたフレイルムデビル・・・そしてこちらは雷を素体にしたボルトデビルだ」  
バチバチバチバチツツ!!

自身の能力であるデビルクリエーションで生み出した眷属達の名前を口にしながらアルゴスがほくそ笑むが、その顔面にバレードクラッカーが炸裂する。

先の戦いでもその驚異的な耐久性を見せているアルゴスだが、バレードクラッカーの直撃にまで耐えきる姿にはロックも驚きを禁じ得ない。

「貴様・・・邪魔だ!!」

ズンツツ!!

バレードに向かって歩を進めるアルゴス。

巨大な体である事もあり、小回りが利かないアルゴスからバレードが距離を取ろうとした時であった。

バチンツツ!!

一瞬ではあるがアルゴスが放った電磁波にバレードの膝が折れる。

全周囲に長時間電磁波を展開する形では電磁波に対するコーティングがなされているワイリーナンバーズには効き目が薄いと判断したアルゴスは、指向性の強力な電磁波を一瞬だけではあるが放つ事でバラードの動きを妨害する事に成功。

続けざまに大きく振るった拳によってバラードの片腕が粉々に砕ける。

「・・・くっ!!」

「不完全な機械の分際で我に勝てると思ったら大間違いだ」

拳が当たった瞬間、その先を硬質化させる事で威力を何倍にも高めたアルゴスはバラードに向かってそう言い放つ。

前後をフレイルムデビルとボルトデビルに囲まれたロックを見据えつつ、尚も抗戦の意思を捨てようとしないうバラードの前にアルゴスは巨大な壁の様に立ち塞がる。

シユババババババツツ!!

バラードの背中より無数のミサイルが放たれるがボディを硬質化させたアルゴスの前に悉く防がれる。

液体金属で構成されたボディを持つ事で殆どの攻撃その物を無力化するアルゴス。

ボーンダインとは方向性は違えど、ボディの特性を用いる事で彼もまた半ば不死身に近い耐久性を持つと言えよう。

「愚かなり・・・その無力さを呪いながら死ねっつ!!」



る選択をしている。

「プライドを返せッス!!」

崩れ落ちる瓦礫から這い出る様に飛び出したバラードが叫ぶ。

アルゴスは今に至るまでプライドを拘束し続けている。

「アイアンナイツツツ!!陣形を整えろ!!姫を極悪非道の敵から取り戻すのだ!!」

外に飛び出した自身やフレイムデビル、ボルトデビルを見るなり騎士の姿をした口ポットが部下達と共に身構えるのが見える。

「愚かな・・・不完全な機械共が」

吐き捨てる様に言い放つアルゴスだが既に外の防衛戦力が壊滅している事を即座に把握する。

認めたくは無いが外に居る面々もその実力は極めて高いと判断する他無いであろう。

「デビルクリエーション!!」

自身の片腕を足元へと落とし即席の眷属を造り上げるアルゴス。

次の瞬間、周囲の床や地面が大きく脈打つ。

「なんだとっ!!」

突然地面が隆起した事でナイトマンやアイアンナイツの面々の陣形が崩される。

「・・・遊んでやれ」

眷属を生み出す為に失った片腕を再び再生させながらアルゴスはナイトマンらにフレイムデビル、ボルトデビルも加えて彼らにけしかける。

その上、頭部を破壊され倒れ伏していたメカザウルの姿を見るや指を弾く様に自身の指先を飛ばしこれまた自らの眷属と化す事で再び再起動させる。

「ウツワアアアアア!!」

咆哮を上げながら頭部をデビルシリーズ特有の単眼に変えたメカザウルスが起き上がる。

「ふはははは……廃工場の壁や床を素体に生み出したブロックデビルの恐ろしさ思い知るが良い!!」

僅か十数秒の間に即席の戦力を生み出しつつ、アルゴスは瓦礫の中から姿を現すロツクを見据える。

「アルゴス……プライド姫を解放するんだ」

「嫌だと言ったら?」

バスターを向けるロツクに楯にする様にプライドを持った手を前に出すアルゴス。

他の面々ならいざ知らず心優しい、アルゴスから見れば甘すぎる性格のロツクでは今の自身に全力で攻撃できないとアルゴスは判断していた。

ミラーバスターで撃ち返した一撃を己に返さなかったのもプライドを傷つける可能

性があったからだろう。

しかもそのせいで今のロックは重傷に近い傷を負っている。

そもそもフィーネとの戦いで消耗しながら自身と連戦しているのである。

もう一人バラードと言うロボットも居るが既に片腕を失い戦闘能力も低下している。

全てにおいて己に有利な状況である事を確認し、アルゴスが笑みを浮かべた時であった。

ズドドドドドドドツツ!!

頭上より降り注ぐのは無数のミサイル。

それらを浴びたメカザウルスのボディが大きく弾け飛ぶ。

自身の眷属化している事もあり、足りない箇所は液体金属で補おうとするメカザウルスだが、続けざまに放たれる銃弾に頭部のコアが貫かれる。

「YOYOく復活再生したデカブツなんてそんなモンなんだYOく!!」

空に浮かびながら陽気な声を上げるのはオイルマン。

「オイルマン・・・?」

ロックが困惑気な声を上げる中、オイルマンは空を飛ぶ物体にぶら下がりながら彼に親指を立てる。

「バラードさんにロックマン。援護します!!」

そう言つて身の丈ほどあるライフルを振り回しながら宙に浮かぶのは一人の少女。  
「え……?もしかしてなくてもレントツスか!」

何時もの重厚なアーマー姿とは違い背に巨大なブースターを背負う形で空を飛ぶレントにバラードが驚く。

ジェットキングロボを参考に生み出されたキングの後継機たるレントだが、その装甲の重さ故に火力は凄まじいが敏捷性には著しく難点があると言うのがバラードの認識であつたのだが。

「今の私は高機動形態(プレーンモード)です。普段は重装甲形態(タンクモード)なんです。状況に応じて変形する事が出来るんです!!」

どこか得意げに話すレントの顔は普段のオドオドした表情と違い非常に明るい物であつた。

ジェットキングロボをロボットのサイズにまでダウンサイズ化を図つたレント。

南米支部に到着した当初は一種の試験配備的な所もあり、武装が完成していなかったパッショナー同様に未完成の状態であつたがワイリーによる修理及び最終調整を受ける事でその真価を発揮する事が可能となつている。

シユババババババツツ!!

宙を舞いながらダイバインミサイルをメカザウルス目掛けて撃ち放つレント。

「ええい・・・おのれ!!」

爆散するメカザウルスの姿にアルゴスがカツと目を見開く。

シユバアアアアア!!

目より巨大なビームを撃ち放つアルゴス。

巨大なブースターを用いる事で宙を舞うレントだがその動きは極めて直線的だ。

しかも今のレントのボディは重装甲形態と違いブースターなどに装甲の大部分が移動しており、防御力が低下している様に見えたのだが。

バチバチバチバチバチツツツ!!

彼女の周囲を舞う装甲の一部がバリアー機能を持ったビットとなる事でアルゴスの一撃を完全に防ぎ切る。

変形した事によって装甲が薄くなった欠点を補うには十分な武装と言えよう。

ダンダンダンダンツツ!!

両肩のガトリング銃で牽制をしつつ、レントが手にしたライフルから銃弾をアルゴスへと次々と撃ち放つ。

当然の事ながら片腕に握られているプライドは避ける形で銃弾はアルゴスの額を正確に貫いていた。

「ぬう・・・!!」



その威力にアルゴスの巨体が後ろへと下がる。

「強すぎ……ッスね」

キングの後継機である事は分かってはいたが殆ど弱点など無いのではないかと言うレントにバラードが引いたように呻く。

次なる世界征服計画の切り札とされている彼女だが、ワイリーの並々ならぬ意気込みが窺い知れよう。

「……不完全な機械の分際で!!」

バチンツツ!!

放たれる指向性の電磁波にレントの首がガクリと下がる。

一瞬目を白黒させる彼女に続けざまにアルゴスが目を見開く。

並のロボットであれば一度目で昏倒させられるであろう電磁波を連続で受け、レントの意識は吹き飛ぶ。

「……ウツ!!」

「あの〜レント。だ……大丈夫……じゃねえYO〜!!」

宙で意識を失ったレントがそのまま雑木林の中に落下していくのを見据えながらアルゴスは全身より無数の目玉を出現させる。

「忌々しいぞおおお!!」

バシユバシユバシユバシユバシユツツ!!

それぞれの目から無数の光弾を放つアルゴス。

自身が有利な状況にも拘わらず思う様に事が進まずに苛立ちを募らせるアルゴスは誰彼構わずに攻撃を仕掛けるのだが。

「クールタイムウウウウ!!」

全身に氷を纏ったパツシヨナーがダルセニョーと共にフレイムデビルに突撃を仕掛け全身の炎を消失させ凍り付かせる。

「押忍!!」

そのまま槍の一撃を繰り出されフレイムデビルは粉々に碎けてしまう。

「邪魔だどけっつ!!」

ボルトデビルの電撃を物ともせず強引にナイトクラツシャーを放つナイトマン。

ヤマトマンもそれに続きアイアンナイツの面々がコア目掛けてそれぞれの武器を叩きつけた事でボルトデビルのコアは文字通り粉碎される。

ズドドドドドドツツ!!

地震の様に床や壁が揺れ動く中、地面に映し出されるのは巨大な目玉だ。

「さっきから邪魔してくるのはおまえかよ!!」

カットマンがローリングカッターを投げるのに続いてエレキマンらもそれに続く。

意思を持った様に飛来する瓦礫や光弾はナイトマンらが身を楯にする事で防がれる。いずれにせよ戦いの形勢は徐々にではあるがロック達の方に傾きつつあった。

「であれば……」

己の不利を感じたアルゴスが手にしていたプライドを高々と掲げた時であった。フツツ……。

一瞬の内に己の手から消え去るプライドにアルゴスは自身の目を疑う。

僅かだが己の腕に違和感を感じたと思った瞬間、プライドの身柄は数メートル離れた箇所に移動していた。

「これでもうお前達の負けは確定した。これ以上は時間の無駄です」

自身の特殊武器タイムスローを使用し一瞬の内にプライドを救出したのはタイムマン。

彼は宙に放り投げる様にしてプライドを投げるのだが、それを受け止めるのは二人のアストロマンだ。

「二人は姫を連れて異空間に離脱してください。迷っている時間はありませんよ」

タイムマンに指示を受けアストロマン達は慌ててその場より姿を消してしまう。

元より自身の戦闘能力は他の面々に劣っている事を認識しているのか、タイムマンは己の役目は終わったとその場から一目散に離脱してしまう。

去り際にほくそ笑む様な顔を浮かべた事でアルゴスを苛立たせたのだが、それも彼女のやり方であろう。

「ぬぬぬ……おのれえええ!!」

地団駄を踏みながら怒りの声を上げるアルゴス。

血走った目でロックらを睨み据えるのだが先程までの余裕は微塵も無い。

「だーっはっはっはっはっは!!いい気味じゃのうラ・ムーン……いやアルゴスと言ったか」

そんな折に無数のスナイパージョーを引き連れ、自身はUFOに乗りながら姿を現すのはDr. ワイリー本人だ。

ダークマンやプロトからも引き連れ現状で持ちうる全ての戦力を引き連れながら、彼はスピーカーで声を響かせる。

「Dr. ワイリーか」

「ランフアント遺跡群でこのワシを利用しあろう事か世界滅亡の片棒を担がせようとした恨み。今こそ倍にして返す時じゃああ!!」

以前にラ・ムーンがランフアント遺跡群より放った電磁波によって世界は滅亡寸前にまで陥れられたのだが、自業自得ではあるがその片棒を担がされたのがワイリーである。

自身の世界征服計画の為にラ・ムーンを利用したつもりが逆に利用された事への恨みは、プライドが人一倍高いワイリーにとつてこの上ない屈辱であり、今がそれを倍にして返す為の絶好の機会とワイリーは判断していた。

「言つておくがお主の相手はワシではない。こやつじゃあ!!」  
ザツツ!!

ワイリーに促されその場に姿を現すのは漆黒のボディに無機質な顔を持った一人のロボット。

バラードも含め殆どの者が首を傾げる中、メタルマンやヒートマンにロックがそのロボットの姿に驚く。

「「ラ・・・ラ・ツールっつ!?!」」

三者三様に口を開く中、ラ・ツールと呼ばれたロボットは無言のままアルゴスへと接近する。

「お前はラ・ツール・・・!!」

バチバチバチバチツツ!!

無数の電撃弾がアルゴスへと叩きこまれていく。

「あの時の様に・・・我が意思に従え!!」

呻きながらもラ・ツールに命令を下そうとするアルゴス。

かつてラ・ムーンが揭示したデータを基に製作されたラ・ツールなのだが、結果として支配権をラ・ムーンに奪われ先兵として使われてしまった経緯がある。

あの時と同様にラ・ツールを自身の戦力にせんとするアルゴスだったのだが。

アルゴスの念を無視するかのようにラ・ツールの蹴りが強かに決まる。

「だーっはっはっはっは!!当り前じゃがそつちの対策はバーツチリしておるわい!!かつて自身の手駒にしたラ・ツールに今度は逆にボコボコにされるが良いわ!!」

後ろの方でワイリーがアルゴスを挑発し続けるがそれはさて置きである。

「なにはともあれ・・・」

「・・・だね」

バラードがロックと顔を見合わせるやアルゴスに向かっていく。

「うおおおおお!!このまま寝てられっか!!」

重傷を負いながらも飛び跳ねる様に起き上がったフォルテがゴスペルと合体しながら飛び出してくる。

「お前・・・邪魔だ!!」

それを阻止せんと地面より目玉が浮かび上がるが、その目玉はフォルテのバスターに問答無用に撃ち抜かれる。

その勢いそのままフォルテがアルゴスにバスターを撃ち放ち、ロックやバラードそして

ラ・トールも無言のまま続く。

「ぬおおおおおおおおおつっつ!!」

絶叫を上げながら爆炎に包み込まれるアルゴス。

「不完全な機械共に・・・」

呻き声を上げるアルゴスの全身に亀裂が生じ始める。

「ぬうううう!!馬鹿なっつ!!」

ドガアアアアアアアンツツツツ!!

火柱を上げながら爆発炎上するアルゴスの姿にロック達が互いに頷く。

「・・・・・・・・」

無言ではあったがロックに会釈する様な仕草を見せたラ・トール。

言葉こそ発しないがあの時とは違い彼自身の意思がある事とその辺りの挙動からも分かる。

「おい・・・てめえは初めて見る顔だな」

新顔と見るや真つ先に噛みつきに行こうとするフォルテだが、ラ・トールの方は軽く掌を向けると別の方向に目を向ける。

ロックもそうだが外に居た面々もアルゴスが出現した事ですっかり忘れていた。

彼らの激闘を他所に二体の骸骨が戦いを繰り広げていた事に。

ドガッツ!!

崩壊した廃工場の天井部で回し蹴りを食らい敢え無く転倒するのはスカルマン。

転倒した彼は拳銃を取り出すやそれをポーンダインに頭部に向けて躊躇なく放つのだが。

「どした? その程度で死ぬ事は無いときつきも教えたつもりだが」

弾丸が自身の頭部を貫くのも気にせずポーンダインは肩を震わせスカルマンを挑発する。

「・・・スカルマン!!」

慌ててロック達が駆け付ける中、最も早く接近したのはラ・ツールである。

「・・・・・・・・」

瞬時に懐に飛び込んだラ・ツールにポーンダインが目を細める。

ガキッツ!!

放たれた拳を受け止め蹴りを放つのだがそれも空いた腕で軽く捌かれる。

「ほう・・・やるな。空っぽのこいつよりも戦い甲斐があるっ!!」

ポーンダインがほくそ笑みながら懐よりマシンガンを取り出すが、ロックを姿を見るやそれを仕舞う。

「久しぶりだなロックマン。お前と会うのはあの時以来だな・・・最も今の俺はポーン



「ダインなんだが〜」

ボーンダインの言葉にロックは思わず首を傾げる。

今のボーンダインは色が黒くなっただけのスカルマンであり、その姿や言動から以前のスカルマンを連想してしまうのだが。

「ダッツ!!」

対してボーンダインの注意が逸れたのを見るやスカルマンが起き上がり攻撃を加えようとするのだが。

「スカル接近戦つてな〜!!外連味の〜ねえ奴は嫌われるぞ〜」

「ガシツツ!!」

突き出された拳をあつさりを受け止めボーンダインは逆にスカルマンの腕をへし折る。

腕が折られた事でスカルマンが反応を示す事は無かったが、己の攻撃が悉く見切られている事に内心で動揺を覚えていた。

「オレが悪のエネルギーを有しているから勝てないと思つて〜いるのか?」

ボーンダインの指摘に初めてスカルマンが呻く。

「それは〜大きな間違いだ。アレはあくまでも力を増幅させるモノでしかない。そして今のオレのスペックはテメーと大して変わらねえ〜。じゃあなんで勝てないのか〜」

「・・・経験値？」

ボーンダインの言葉に答えるようにロックが口を開く。

「そう言う事だ〜正にその経験値を上手く使って戦い抜いているロックマンご本人だけに物分かりが良い〜」

スカルマンを指差しながら笑った彼は戦いが終わったと見たのかその場に駆け付け始めた面々の目を向ける。

「まあ詳しくは〜コサックに聞け〜」

どこからともなく黒マントを取り出しそれを羽織るやボーンダインがその場より飛び退く。

「やられたなあ〜アルゴス」

「だま・・・れ」

喉を震わせるボーンダインの背後で人の顔程の目玉が浮かび上がる。

ボーンダインの言葉から判断するにアルゴスのコアだ。

「この借りは必ず返すぞ・・・」

シュンツツ!!

瞬時にその場より消え去るアルゴスにボーンダインが続こうとした時だった。

「・・・・・・・・」

「逃がさねえよ!!」

対してラ・ツールとフォルテが追撃せんと飛び掛かるのだが。

薄笑みを浮かべたボーンダインの全身が大きくぶれる。

と思った瞬間には二人の体は地面に叩き伏せられていた。

「あの御方より授かった『歯車』の力を使えばこんな〜モンだな」

手にした端末を操作しながらボーンダインはほくそ笑む。

「ま〜た〜会おう。今度は手加減も一切しねえからな〜」

次の瞬間にはボーンダインの姿は消え去る。

簡易転送装置を使ったのだろう。

ややあつて張り詰めていた殺気が四散しロックは思わず息を吐く。

思うに連戦に次ぐ連戦だっただけに彼は思わずその場に座り込む。

「ボーンダイン・・・彼は一体」

問いかける様な視線をスカルマンに向けるが彼の方はロックと目を合わそうとはし

なかつた。

「だーっはっはっはっは!!」

そんなロックの杞憂は余所にUFOから飛び降りるヤスピーカーを片手にワイリーが瓦礫の上に立って笑い出す。

「見よ!!我がワイリー軍団の力を。キラースやスペシャル、更にキングの後継機にラ・トールつつ!!万全の体制を整えればラ・ムーンの化身やその仲間なんぞワシの敵ではないのじゃ」

どこか能天気な笑い声を響かせるワイリーの姿を見ると、少々の憂鬱気な考えが飛んでしまいそうになるのは何故だろうか。

長年の宿敵ではあるがどこか憎めない悪の天才科学者にロック以下の面々が呆れ果てた時だった。

<ロック無事だったか・・・>

ロックが手にする端末に映し出されるのは生みの親であるライト博士の顔である。

「このワシも参戦したんじゃ無事で当り前じゃろうに」

画面越しにライト博士に鼻を鳴らしながらワイリーは腕を回しながら背を向ける。

「さて勝利の凱旋と行こうではないか。じゃがその前に・・・」

ワイリーは二人のアストロマンに抱えられる形で地面に降り立つプライドとナイトマンらの姿を横目で見据え掌を広げる。

「やるべき事があるみたいじゃの・・・」

## エピローグ

「……姫様」

恭しく自身に片膝を衝くナイトマンら一同の姿にプライドが申し訳なさそうに顔を逸らす。

文字通り合わせる顔が無いと言った所か、唇をギュツと噛み締めたプライドであったが意を決した様にナイトマンらに頭を下げる。

「心配をかけて本当にごめんさい。私は……一国の姫として恥ずべき事をしたわ」「いえ……まあ確かに姫の我儘は度が過ぎる事もありましたが」

あの高慢ちきで有名なプライドが自身らに頭を下げるなど思いもしなかったが故に驚いたナイトマンであったが。

「見つけたら引つ叩いてやるとか言っていないなかったか」

後ろからヤマトマンが面白そうに言ったのもあり、ナイトマンは慌てて立ち上がる。

「あ、いやそれはあくまでも勢いで言っただけで。そんな事をすれば傷害罪どころか不敬罪でかよくて国外追放。下手をすれば廃棄処分だ」

ワイリーの変装であったMr. エックスによる世界ロボット選手権の一件で、寛大な

処分で許された事もあつてナイトマンは文字通りカンパネラ公国に足を向けて眠れない立場にある。

「引つ叩かれても文句が言えないぐらいの迷惑を・・・」

「いえ・・・とにかくご無事で何よりです」

ナイトマンが怒るのも当然と反省した様に再度頭を下げるプライドにナイトマンは冷や汗を掻きながら、首を振り続ける。

無骨な人物である彼の狼狽する姿など滅多にみられる物ではない。

「まあもしも婚約者が酷い奴だったら、俺らに連絡入れるツス。ワイリー軍団総出で攫いに行つてやるツス」

バラードの言葉を受け表情を輝かせるプライド。

当然ナイトマンは険しい顔をしたのは言うまでもない。

「バラードも色々と心配させてごめんさい。私を助けようとしてくれてありがとう」

そう言いつつ彼の頬に口づけをしたのもあつてナイトマンが鉄球を片手に殺気を生じさせるのだが。

「いやいや俺からじゃないツスよ」

慌てる様にその場より後ずさるバラード。

「まあでも確かに姫個人の幸せを考えるのであれば悪くは無いか・・・その場合は私も殴

り込みに混ぜてもらおうか」

「ちよつと・・・ナイトマン」

「公国には忠誠を誓っているが姫への忠誠もまた別に持っております。ともあれ我ら一同姫の事を第一に考えておりますので」

困った顔となるプライドにナイトマン以下アイアンナイトの面々が片膝を衝く。

「フン・・・その婚約者とやらがロクデナシである事を祈ろうかの。そうすれば小娘のみならずナイトマンも手駒に加えられるわい」

ワイリーがそれを横目に悪態を衝いたのはさて置きである。

次に廃工場よりパンクとネプチューンにアースが姿を現した事でメタルマンらが駆け寄っていく。

パンクにお姫様抱っここの形で運ばれるアースの姿に勘の良い者は何かを感じ取ったのだが、それはまあともあれである。

「ハイハイ〜何とか無事に帰って来れたんだYO〜」

オイルスライダーで滑りながらレントをパンク同様にお姫様抱っこで運ぶオイルマンの姿にライト、ワイリーナンバース双方が色めき立つ。

「ん？お主はライトのロボット・・・と言うかうちのレントとどう言う関係じゃ？」

どう言う経緯で二人が知り合ったのか知らないワイリーが目を点にしながら二人に

問う。

「博士、それに皆さん。本当に本当に申し訳ないのですが・・・私、私つつ皆さんに伝えなきやいけない事があるんです」

目を閉じながら叫ぶように話すレント。

「俺たち達、実は色々あつて付き合う事にしたんだYO〜!!」

締りの悪い笑みを浮かべ堂々と交際を宣言するオイルマンに時が止まった。

冗談抜きで面々が数秒程、思考を停止させた後にワイリーが震える指をオイルマンへと向ける。

「レントは次の世界征服計画の要じゃぞ!!お前の様な抜けた顔のロボットにましてライトのロボットなんぞに可愛い娘をやれるか!!」

当然の如くベタな頑固親父の勢いそのままに二人の交際を反対するワイリー。

「オイル、お前絶対に騙されてるぞ。確かに可愛い子だけど相手はワイリーロボ、どんな凶悪な本性を隠し持っているか」

カットマンがライトナンバーズを代表とする形で反対の意見を口にするのだが。

「フツ・・・カットマン。俺たちはやってから後悔する男だYO〜」

締りの悪い顔で気障っぽくポーズを決めるオイルマン。

「お互いの家が交際を認めてくれないなら世界の果てまで滑って行くぜ」



「はい、どこまで付いて行きます!!」

そう言うや否や一目散にその場より走り去っていく二人にワイリーが指を突き付ける。

「ええい!!何が何でも連れ戻せ!!」

メタルマンらに指示を飛ばしながらワイリーは暫しの間、肩を弾ませていたのだが。「はあ……ともあれじゃ」

溜息を吐きながらワイリーは何時も以上に険しい顔をしていたパンクに目を向ける。

「ワイリー様、フィーネの件で報告があります」

その言葉にロールも反応を示す。

「そう言えばフィーネちゃんはどこにも居ないけど……」

彼女の顔を見て複雑そうな表情を浮かべるロック。

二人は簡潔にフロントムマンの正体がフィーネであった事を説明する。

「そんな……」

ロールが衝撃的な事実を知りショックを受ける中、ワイリーは顎に手を置いたまま黙り込む。

「……そう言えば件のカブキマンの暴走事件の際はまだフィーネは完成しておらんかったの」

「・・・はい。まだ一度も稼働すらしていません」

ワイリーの言葉に彼の足元よりシャドーマンが口を開く。

「にも拘わらずファントムマンと思しき存在の動きは確認出来た・・・と言う事は」

そこまで言つて後は己の中で情報を整理し始めるワイリー。

「それにボンダインと言うかもう一体のスカルマンの事も気になるが、全てにおいて

関係しておるのは悪のエネルギー・・・となれば」

「ちよつと分かるんだつたら説明しなさいよ」

ぶつぶつと一人で話し出すワイリーにロールが文句を口にするが、彼は眉間に皺を寄せるのみで答えようとはしない。

「シャドーマン。フィーネの電子頭脳を含めたボディその物は何時頃完成しておつた？」

「博士が逮捕された後に起こした事件の後にボディは完成しているでござる。学習進化プログラムの完成が遅れた為に稼働が遅れましたが」

足元のシャドーマンに問いつつ勝手に頷きながら、頭の中で答えを導き出すワイリー。

「どう言う事よ?」

ロールの方は足元に目を向けシャドーマンに問うが彼も影に沈んだまま無言を貫く。

無視され続け不機嫌になるロールだが、結局ワイリーが丁寧に説明する事は無かった。

「おい・・・スカル」

スケルトンジョー達と共に無言でその場を去ろうとしたスカルマンにダイブマンが仁王立ちで立ち塞がる。

「あのボンダインはお前の事を空っぽって言いやがった。あいつとお前は言うう・・・」

問いかける彼の言葉を無視しスカルマンはスケルトンジョー達と共に装甲車の荷台に乗り込もうとする。

「オメーらが知った所で意味がねえ事だ。そして俺にも・・・な」

そうとだけ言うスカルマン。

主であるコサツクやカリンカ以外の存在には極めて素っ気ない態度を取る性格のスカルマン。

自身らに限らず彼が他者との対話を拒絶するのは何時もの事ではあるのだが。

「・・・だが」

荷台に足を掛けながらスカルマンが振り返って来たのでダイブマンが思わず目を見開く。

「あいつが俺を空っぽと言った事は紛れもない事実だ。俺には何も無い。今もこれから  
も」

「おい・・・それはどう言う」

スカルマンの答えに驚くダイブマンだが、それ以上は答えを得られる無く彼らは荷台  
に入つて姿を消してしまふ。

彼は去り行く装甲車の姿を見送る他、何も出来なかつた。

廃工場での戦いから一週間経とうとしていた。

「むはははは!!体の調子はどうじゃ!?!」

作業台から起き上がったばかりのアースにワイリーが得意げな顔で問うてくる。

あれから戦いで負傷した面々を修理していたワイリーはプロトがとある場所で手  
入れた超エネルギー元素を使う事でアースの修理にも成功していた。

修理が成功と言つてもアースがワイリーに回収された時点での戦闘能力を取り戻し  
たに過ぎず、そう言う意味で完璧な形での修復とは言い難い。

「完璧です。これで本来の任務に戻る事が出来ます」

以前よりも地球産のパーツの割合が多くはなつたが、それでも戦闘能力を喪失してい  
た時よりも遥かに全身を漲るエネルギーにアースは微笑む。

「お主にはワイリースターの管理を任せておるからの。あそこの次なる計画の重要拠点な訳で……」

とワイリーが口を開いた矢先に作業室に何人かのロボットが雪崩れ込んでくる。

「ブモツツー!!アース隊長!!何はともあれご無事で」

バキツツ!!

一室に入るなり近寄って来るウラノスを鉄拳で吹き飛ばすアース。

天井に顔だけが突き刺さったままの状態となるウラノスをさて置き、アースは仲間達を見つめるとその顔に満面の笑みを浮かべるのであった。

「今まで迷惑を掛けたな。お前達、これからもよろしく頼むぞ」

滅多に笑顔など浮かべないアースに驚きつつも、ジュピターやサターン達もまんざらでもない顔で照れる。

「無事に復帰出来そうぞ何よりだ」

アースに対しそんな言葉を吐くのはパンクだ。

笑みを浮かべ不愛想な彼の胸に肘を突き付けるアースに一同が驚いた顔をする。

アースが自分から他人にそれも異性に触れるなど、今までには考えられなかったからだ。

「それはそうとだ……お前には一応の借りがある。だから今からちよつと付き合え、そ

の・・・なんて言うかデートとやらで貸し借りは無しにしてやる」

片目を閉じながら話すアースの言葉にルーラーズの面々が混乱したのは言うまでもない。

「ブモオオオ!!デートだと!!そんな事は俺を倒し・・・」

床に降り立ちながら叫ぶウラノスだが、今度は作業室の壁にめり込む。

「はあくアオハルね」

その中でただ一人作業室の外で話を聞いていたネプチューンがやれやれと言った様子で口を開く。

ワイリーもさっさとその場より退避し眠そうな顔で欠伸をしていた。

「伯父様、私もそろそろお暇させて頂くわね」

ニコニコと笑みを浮かべながら手にした荷物を片手に挨拶に来るのはエストである。

勝手に来て勝手に帰る姪に『好きにしろ』と言った態度を取っていたワイリー。

彼女はすっかり仲良くなったジョー達やヒートマンなどと別れの挨拶をするや、そのまま来た時と同じく嵐の様に去って行く。

くそれでは次のニュースです。襲撃事件から姿を見せていなかったプライド姫ですが、数日前に姿を現し昨夜帰国の途に着きました

メディアの報道でプライドの近況が告げられ、コメンテーターなどがあれやこれやと

憶測を口にしてているが本当の事を知る者は僅かしかないであろう。

それを興味無きげにワイリーが聞いていた時であった。

突然鳴り出すワイリーのプライベートルーム用端末。

ワイリーから掛けるのであれば分かるが、逆に掛かって来るなど滅多にある事ではない。

面倒臭げに溜息を吐きながらワイリーが端末を手にする。

「……ワシじゃ」

と開口一番に言い放ったワイリーであったが、相手からの声と言うか笑い声に驚いた様な反応を見せる。

横目でその反応に視線を向けるネプチューンであったが。

相手からの通信に暫し頷いていたワイリーはそれを切るなり、ゆっくりと立ち上がる。

「スマンがちよいと出かけてくる。他の者にはそう言っておいてくれ」

とだけ言つてその場を離れるワイリーにネプチューンが手を振つて送り出した時だった。

くそう言えば帰国前の記者会見でプライド姫が言った。『例の約束』とはなんだつたんでしようね？>

テレビの向こうでコメンテーターが首を傾げるのが見える。

「まさか許嫁に酷い目に遭わされたら攫いに来る約束だなんて。口が裂けても言えないわよね〜」

どこか皮肉気に口元を歪めながらネプチューンはテレビの電源を落とすのであった。

一足先に本拠地へと撤退したフィーネは己よりも先にヴォイドが居た事に驚く。

自身を見ても無反応な彼に苛立ちを覚えつつも彼女は真つ先にその場に跪いた。

「申し訳ありません。ロックマンを仕留め損ねたばかりか正体までばれてしまいました」

フィーネの言葉に反応するかのように薄暗い一室に光が灯る。

くふむ・・・やはり我が宿敵。簡単には倒せないか。まあロックマンが強いのは想定通りだったかね〜」

一室にあるスピーカーを通して主の声が響く。

愉快気に笑うその声だったが不意にそのトーンが落ちる。

く私としてはフアントムマン・・・いやフィーネ。君には大人しく内部に潜入していてもらって欲しかったんだよねえ〜」

僅かながらも棘のある言葉を発する主にフィーネは地面に平伏する様に頭を下げる



しかない。

額から冷や汗が流れ落ちるのを感じつつも、そのまま動けなくなる彼女。

暫くするとボーンダインにソロー達もその場に戻って来る。

その間、フィーネは平伏したままなのだが失態を犯しただけに簡単に顔を上げる事は出来ない。

「それでどうするのだ？ 既にプライドの生体データは手に入れた。一応の鍵は手に入れたのだが……」

ヴォイドが平伏するフィーネに見向きもせず口を開く。

そんな彼の態度に歯を軋ませるフィーネ。

「既に種も蒔き終えたし次で王手と行くか。ここに来てアルゴスが戦闘不能になったのは痛手だが」

その言葉に現在コアだけの状態となっているアルゴスに一同の視線が向く。

「おいたわしやアルゴス様。下等な機械の分際で貴方様の仇はこのエキドゥナが必ずや……」

溢れ出る涙をハンカチで何度も拭きながらエキドゥナがコアだけとなったアルゴスに向かつて口を開く。

「我は……まだ死んでいないぞ」



## プロト編

## v o l l 極地にて

サングラスを付けた一人の青年型ロボットが襟を正す様に肩を動かす。

何時に無く落ち着きが無い彼の空気を察してか周りにいる者達も若干表情が硬い。

「全くワシらをこんな所にまで駆り出すとは・・・ワイリー博士の命令もあるが。些か気乗りはしないのう」

青年の姿からは裏腹な老人の様な口調で文句を言いながらプロトジョーことプロトは観測所のヘリポートに降り立つ人物に頭を下げる。

「はくい。貴方がブレイクマンちゃん？」

まずに自身らに声を掛けてくるのは厚手のコートに身を包んだ女性だ。

「ブルースを基に生み出されたと言うスナイパージョーの試作機。言うなればオリジナルブルースのコピーと聞いていたが確かに本人そっくりだねえ」

女性に続く様に恰幅の良い男性が声を掛けてくる。

彼はプロトに強引に握手をしつつ能天気には笑うのであった。

「ワイリー博士は元気かね？キング事件の際に一度会って以来だからね」

「相変わらずですよ。しかしそんな我らに依頼とは……ここ南極での探査とは聞きまじだが」

プロトが二人の人物を迎え入れた場所はこの星の極地。

南極と呼ばれる凍てつく大陸である。

以前より国際的に中立的な地となっており、連邦政府もこの地の環境を守ると言う建前上もあつてここでは殆ど開発が行われていない。

理由は不明なのだがこの二人はこの地での探査をプロト達と言うかワイリー軍団に依頼している。

その為、プロト達はこのような地へと足を運んでいるのだが、詳細な理由を告げられない事もあつてプロト達の不満は強い。

と言うかそもそも自身らにこんな依頼をしてくる方が神経を疑うのだが、プロト達もプロト達で彼らに弱みを握られている。

「いや、何かの役に立つと思つてワイリー博士に資金援助をしていて良かったねえ」  
「本当ね貴方。博士つたら依頼を引き受ける代わりに返済の一部免除を条件に付けたら、あつさりに乗つてくれたのよ」

夫の言葉に夫人が満面の笑みで話す。

男性の名前はニコライⅡエフレモフ。

ロシアでは名の知れた資産家であり、女性の方はナターリヤと言う名前のロシア選出の連邦政府議員だ。

一見するとどこか間の抜けた夫妻にしか見えないが、世界征服を企む悪の天才科学者たるDr. ワイリーのスポンサーの一人である。

でなければ世界に金持ちの数あれどワイリー軍団を雇える事など出来はしない。

「それにしても探査に同行するのは我々だけではない様子ですな・・・」

プロトの言葉に夫妻は眉一つ動かさない。

エネルギー反応から薄々気づいていたのだが、この場には自身ら以外にも高性能ロボット達が複数居る。

それも下手な軍の部隊を上回る程度に。

「流石はプロトジョー。あのブルースの完璧なコピーだ」

背後から響く声にプロトは身を翻す。

反射的に払った腕が一枚のカードを弾きプロトはサングラスの向こう側で目を細めていた。

一瞬でも反応が遅れば指の一本でも落とされていたか。

奇術師の格好をしたロボットがおどけた風に両手を広げているのが見える。

「エフレーモフ殿・・・一応聞いておきますが」

「ハツハツハツハ。彼らも君達同様に雇わせてもらった。なかなか口が堅くて強いロボットを見つけるのも難しくてね」

そう言つてニコライは笑うがプロトは内心で苦笑いを浮かべていた。

同じ依頼人に雇われたと言つても彼らと自身らはずいこの前まで互いに殺し合いをしてきた関係である。

それに先程の態度を見るに友好的な関係を築くのは難しいのは明白だ。

「顔を合わせるなり喧嘩売るなんて止めとかんかい」

「あの動きに反応出来ないのであれば元より戦力外も良い所です」

海賊風の姿をしたロボットが先程プロトに襲い掛かったロボットに向かって呆れた様に口を開く。

彼だけではない後ろから来る数体のロボットにプロトは何時でも動けるように細心の注意を払う。

「つたくこんな寒い場所に連れて来やがって。全部溶かしてやりてええええ!!」

「私は好きですけどね。いや、許されるならずとここに居たいです」

全身のガスボンベから炎を噴き出すロボットが苛立つ中、冷凍庫に手足を付けた様な風貌のロボットが間延びした口調で言う。

コールドマンにバーナーマン、いずれもキング軍団の幹部であった者だ。

そして先程プロトに襲い掛かったのはマジックマンでそれに呆れるのはパイレーツマン。

いずれも現時点における戦闘用ロボットのの中では最強クラスの面々。

対してこちらの方はあくまでも南極の探査と言う事しか聞いていなかった事もあり、連れて来た戦力もある程度少なく編成している。

「キャハハハハハ!!師匠に皆々なんか怒ってる?」

場の空気が険悪になる中、それを知ってか知らずか魔女の姿をした少女型ロボットがマジックマンに話しかけてくる。

「どうもワイリー軍さんの皆さん。師匠ことマジックマンの一番弟子なマジシャンウーマンです」

ピョンピョンとヘリポートの路面を蹴りながらマジシャンウーマンと名乗った少女はプロトの腕を掴むと勝手に上下に振る。

「よろしくね」

「・・・むう」

屈託の無い笑みで挨拶をされプロトは呻く。

何を考えているかは分からないが簡単に心許せる存在ではない。

「まあまあ一応は戦いは終わったんだし、今は仲間って事で良いよね?」

今の今まで黙っていた一人のロボットが被っていたフードを取りながらプロトに話しかける。

彼の素顔にマジシャンウーマン以外の面々の顔色が変わる。

「お前はロク坊やないか!？」

パイレーツマンが驚きの声を上げるのも無理は無い。

少年の顔は人類の英雄たるロククマンと瓜二つな物。

「あれゝ貴方もワイリー軍団に入ったんですか？」

「いや違いますね。彼がライト博士の下を脱走したとなればすぐに噂になります」

惚けた様子のコールドマンの言葉を否定しながらマジックマンが思案する様に顎に手を置く。

あのロククマンと瓜二つでありながら僅かにその身に纏う雰囲気異なる少年型ロボット。

「僕の名前はクイント。今の時代の僕はマジックマンの言葉通り、ライト博士の研究所に居るよ」

ニコニコと先程のマジシャンウーマンと同じ様な笑みを浮かべるクイント。

だがその笑みにはどこか憂いを帯びた物であり、その雰囲気も相まって彼がロククマンであってロククマンでない事を感じずにはいられない。



時を制する・・・時間を自由自在に操る事は人類にとつての数ある悲願の一つと言えよう。

実際にライト、ワイリー両博士も時間制御の研究に取り組んでおり、それぞれタイムマンとフラッシュマンを生み出している。

かつて連邦政府が時間制御の研究に本腰を入れた事があり、政府科学省が管理運営する時空研究所において試作式のタイムマシンが造られた事があつた。

当然の事ながらその手の代物をワイリーが見逃す筈も無い。

タイムマシンの試験運転前日に時空研究所はワイリー軍団の襲撃を受け、タイムマシンは強奪されワイリーによる世界征服に悪用される事態となる。

余談だがその襲撃事件によつてタイムマシン同様に開発されていたタイムマンが行方不明になつた事を付け加えておく。

タイムマシンを使い過去や未来の世界に行く事が出来れば、もはや世界征服など容易い物。

手始めに未来へと飛んだと言うワイリーは未来のロックマンを・・・つまりは目の前に居るクイントを拉致し、現代へと連れ帰り洗脳する事でワイリー軍団の戦力として取り込む事を画策。

かつての自分と戦わせる事でロックを苦しめる卑劣な策略であつたのだが、未来の自

分を犠牲にしてもワイリーの野望を打ち破る事を決心したロックの手によってクイントは撃破されてしまっている。

その後はスペーススルーラーズ事件の際に再びロックと対決しているが、他のキラーズ同様にロックには勝て無かった。

現在の彼はコピーロックマンを素体にしたボディを有しており、以前のそれと違って首に巻いた紫のマフラー以外は殆どロック本人と変わりのない姿をしている。

「つたく・・・呉越同舟とはこの事」

と口を開きかけたプロトだったが再度、こちらに向かって飛んでくる輸送ヘリを見るや口を閉ざす。

ややあつて着陸するヘリから降りてくるのは骸骨の姿をしたロボット達。

言うまでも無くコサツクナンバーズの一人、スカルマンとその配下スケルトンジョーの一団である。

「うわあ・・・戦力集め過ぎだね」

若干引いたような声を出すクイントにプロトも同意と頷く。

「いらっしや〜いスカルちゃん」

呑気に手を振るナターリヤの前にスカルマンが進み出る。

戦う事しか考えずとにかく他者に無関心と言われている彼だが、ニコライとナターリ

ヤ双方に恭しく頭を下げたのだからプロト以下の面々は思わず面食らう。

「博士から命令を受けている。今回の任務中、貴方達が俺の主だ」

「我がロシアを代表とするコサツクナンバース最強のロボットとその一団を雇い入れて私も鼻が高いね」

ニコライが高笑いするのはさて置き。

「お久しぶりです、スカルマンさん」

キング事件の際にロシア方面を担当していたコールドマンがスカルマンに話しかけに行く。

「実はキング軍団が壊滅した後、色々ありましてね。バラバラにされて売られた所をロシアで出会ったエフレモフさんに買われまして」

自らの身の上を能天気話すコールドマンであったが。

「……………」

当然の如くスカルマンは無言で無視を決め込む。

そもそもコールドマンに限らずキング軍団の幹部達はそれぞれ軍勢を率い侵攻した地域で破壊活動を盛大に行っているのである。

プロトらワイリー軍団もそうだが、お互いに戦争をした関係であり仲良く会話など出来る様な間柄ではない。

「いや、屋敷でパーティをしていたらコールドマン君達が乗り込んで来た時はびっくりしたねえ」

「そうそう二人で仮装に手間取って会場に出てきたらお客様が誰も居ないんだから」

エフレーモフ夫妻はコールドマンと出会った時の事を話す。

「いや、私も今から殺そうとした時に『とりあえずお客様が居なくなつたから飲んでいつて』と言われた時にはびっくりしましたねえ」

超低体温のボディを持つ都合、電子頭脳の思考回路の動きが非常に鈍いコールドマン。

彼は地元でも有力者であつたエフレーモフ夫妻を殺害すべく屋敷に乗り込んだのだが、当の夫妻もコールドマンに負けず劣らずの呑気ぶりを発揮し『どうせすぐにでも殺せるのだから』とコールドマンは会場に残された食事や酒で一服してしまふ事となる。

結果としてこの間、コールドマンの指示が無い事から軍勢の動きはストップとなりそれをチャンスと見たロシア方面に派遣されていたワイリー軍団や政府軍を中心とする勢力が攻勢に出た事でロシア方面軍は壊滅している。

すつかりパーティを満喫したコールドマンが夫妻を殺害する事を忘れて、壊滅した基地に辿り着いたのは既に事が終わつて数時間は経つた時の事であつた。

「ハア、まさかそんな事で壊滅とは信じられんかつたわい」

「そう言う貴方もネプチューンに良いようにやられたと聞いていますか？」

「フン・・・あのオカマ半漁の話はするなや!!」

パイレーツマンが呆れるが自身にとつても痛い事をマジックマンに突っ込まれ怒鳴り散らす。

彼も彼でネプチューンの海の家の経営を邪魔した事でネプチューン相手に痛い目を見ています。

「ハツハツハツハ!!バーカバーカ!!」

「放火魔!!お前にだけは言われたないんじやい!!」

軍団一の猛者にして単細胞のバーナーマンが笑う中、尚もパイレーツマンが掴みかかりそうな勢いとなる。

もはや收拾がつかなくなりそうなかでプロトはわざとらしく咳払いをする。

「ともあれ任務の詳細を聞かせてもらおうかの・・・これ程の戦力を集めるとは一体」

プロトの言葉にナターリヤはニコリと笑みを浮かべると自身の持つ端末を見せるのであった。

「吹雪だガー吹雪だガー!!」

コールドマンと共に一同の先頭を歩くのはワイリーナンバーズのフロストマン。

当たり前だが南極での探査と言う事で寒冷地用のロボットも駆り出されている。「寒いよ〜もう帰ろうよ〜」

一団が動き出して数時間が経過しているが早速クラウンマンが根を上げ始める。

「エフレーモフ殿が示した地点までもう少しじゃ。辛抱するんじゃ」

プロトが寒冷地用の装備をしたジョー達と共にソリで荷物を運びながら言う。

フロストマン、クラウンマンら二人にプロトとクイント、何体かのダークマン達にスナイパージョーが二十人と言うのが今回の任務に携わるワイリー軍団の面々である。

キング軍団は幹部四人にマジシャンウーマンを加えた五名と少数精鋭。

まあこれは軍団が壊滅した影響であるの言うまでもない。

「やっぱり陸の上はあかん」

パイレーツマンが不機嫌に口を開くのが吹雪の音に混じって聞こえる。

「……………」

一方スカルマンは十数人のスケルトンジョー達と共に無言で前を進む。

彼らは寒さによる影響を殆ど受けていないと言うか、そもそも依頼主以外との無駄な対話は拒絶していると言った様子だ。

「……………」

プロトが横目でクイントを見る。

「お主はここで起こる結果を知っておるのか？」

未来の世界から来たと言うクイントにプロトは尋ねる。

ワイリースターでの決戦後にコピーロックマンのボディを用い修復された彼だが、過去の自身に倒された時のショックからか自らの自我を取り戻している。

ワイリーの支配から脱した彼だったが、何を思ったのかワイリー軍団から抜け出す事も無く留まり続けており、一応は軍団内の諜報部に属したまま殆ど何もせず至今已に至っている。

彼の扱いには当のワイリー自身も苦慮しており、なまじ未来の事をこれから起こる事を知っているのもあつて捨て置く事も出来ず居る。

まあ幸いと言うべきかクイントは、巻き起こる事件などには一切干渉せずただ見ているだけというスタンスを取り続けている。

キング事件の際にも慌ただしく動く仲間達やかつての自分を尻目に何もしなかった程である。

そんな彼だったが、今回の南極探査参加に自ら志願した事もあり、プロトはその真意を測りかねているのだが。

「残念だけど僕は何も知らないよ。だけど何も知らないからこそ気になるんだ」

遠慮がちに笑うクイントにプロトが眉を寄せる。

「早速だが嫌な予感がして来たのう……」

未来を知る筈の彼すらも知らないと言う時点でプロトは冷や汗を掻く。

それは今回の件は後の世に大っぴらに公開されていないと言う事と言えよう。

「もしかしなくてもだけど。僕やロツクマンシャドウ達が過去の世界に介入した結果、僕の知っている未来とは少し変わったのかも知れないね」

クイントの言葉にますます嫌な予感しかない。

未来は文字通りの白紙である方が良いとプロト個人は思っている。

最初から確定した結果など何の面白みがあると言うのだろう。

とプロトが内心で思った時、彼らの背後から男女の笑い声が響く。

かつて四度目の世界征服計画の際にワイリー基地で運用されたタコトラツシュを改造した雪上車が彼らの後方でゆっくりとした速度で進むのだが、その中に居るエフレーモフ夫妻がマジシャンウーマンと何やら騒いでいるらしい。

「お爺ちゃん。僕も中に入りたいよ〜」

不満げに頬を膨らませたクラウンマンが文句を口にするのも分らないでもない。

タコトラツシュに続く形でガメラライザーが歩行するのだが、こちらの役割は主に物資の輸送用であり生憎中に人を入れるだけの余裕は全く以って無い。

ジョーも含めた人員がそれぞれ荷物を背負う中で依頼主であるとは言え、エフレーモ



フ夫妻との待遇差に不満を覚えない者が居ない筈も無い。

「あの馬鹿夫妻には政府に逮捕された際に身柄を引き取ってくれた恩があるが・・・ちよいと腹が立って来たのう」

片腕の鉤爪を開閉しながらパイレーツマンが舌打ちをする。

今回の任務が陸の上と言う事もあつてか彼は非常に不機嫌であつた。

「あれだけ人間を攻撃したお主や他の連中が人間の雇い主にこき使われるとは皮肉じや  
の」

「ケツ・・・あんな奴。キング陛下が帰ってきたらすぐに焼き殺してやるぜ」

プロトの言葉にバーナーマンが吠えるが吹雪が舞う中ですぐに炎が掻き消える。

「まあ・・・エフレームフ氏は我がキング軍団のスポンサーの一人ではあつたのですが」  
「・・・はあ?」

マジックマンの言葉にプロトが首を傾げる。

人類からの独立を掲げ世界中で破壊活動を行ったキング軍団であるが、そんな組織に  
対し人間でありながら援助を行うなど普通に考えてあり得ない。

が全く以つてゼロであつた訳では無かつたようで。

「確かに中には命乞いの為に貢物を送つて来る連中も居ましたね、それを見て陛下は憤  
慨していましたが」

コールドマンが笑みを浮かべながら話す。

金の力で物事を解決出来ると考えている連中こそ、キングが打倒すべき存在でありそんな彼らに怒りを覚えたのは分からないでもない。

「あの夫婦の場合は命乞いとかそういうつもりでは無く、ただ単に投資をした感覚だったんでしょね」

「まあワイリー博士にも資金援助をするぐらいだからの……しかし節操が無いのう」  
マジックマンが掌を広げる中、さしものプロトも思わず溜息を吐く。

聞けばキング軍団が壊滅した後、マジックマンやバーナーマンを始めとする幹部達をエフレーモフ夫妻は回収して回っていたらしい。

ワイリー軍団に合流する意向のグラッドマンや社会復帰をしたダイナモマンを除く、四人の幹部を手中に収めた形なのだが。

「バーナーが言いましたが我々としてはあの夫妻の命令に従っているのは当面の潜伏先を得る為に止む無くですね。キング陛下が帰られた暁には」

言葉の最後に冷たい笑みを浮かべ話すマジックマン。

当然と言うべきか彼らは夫妻に忠誠など誓ってはいないようだ。

「そのキングだが……確か南米のゼーネルシティに現れたらしいぞ」

「……なんと!？」

「あそこは私が分解されて売られていた場所ですね。いや、ニアミスですか」

プロトの言葉にマジックマンが目を見開き、コールドマンが笑う。

と面々が話をしていった時であった。

くはいはい。皆、ストツプ！>

タコトラッシュの中からナターリヤの通信が一同に入る。

<目的地に到着したよ。いやあここまででは順調だね>

ニコライが笑い声を響かせる中、防寒着を着込んだ夫妻が外に出て来る。

多少吹雪は和らいだが生身の人間であれば長時間活動するのは難しい状況だ。

「さて先も説明したが我々が探しているのは、我がエフレーモフ家に伝わる秘宝でね。

衛星などからここが古文書に記された地点と言う訳なのだが・・・」

そう言つてどこまでも続く氷の大地に目を向けるニコライ。

「ホンマにここに宝があるんか？」

パイレーツマンが目を細める。

「そもそもその古文書つて言うのもホンマモンなんか怪しいわい。この手の話は大体が嘘じやい。これやったらまだ海に沈んだ豪華客船とかを探す方がマシやぞ」

自身もがめつく宝探しを幾度となく行つた経験からパイレーツマンが険しい顔で言うのだが。

「まあお婿さんの貴方には無理よね〜」

「確かにそれは言えているね。古文書によると我が家の初代家長とされるソフィーアⅡエフレーモフが大航海時代の際に南米の遺跡であれを発見したそうだね。それに導かれるままにこの南極にまで辿り着きそこに居た神なる存在と契約をしたと言うんだがね」

ナターリヤが手にするのは不気味な球体を先に取り付けた杖だ。

「南米・・・まさかランファント遺跡群か」

「我々としてはそこに調査に行きたかったんだが・・・」

「政府軍が監視をしているから行けないのよね。それで代わりにこっちに目を付けた訳なの〜」

眉唾物の古文書であるが本の内容と現実を起こった事を加味すれば、あながちデタラメでは無い事が分かる。

「ワイリー博士には感謝しているのよ。博士のお陰で古文書の話に信憑性が増したのだから」

そう言つて杖の先を地面に向けるナターリヤ。

当初こそ何の変哲の無い杖であったが、僅かに光が灯る。

その光が強くなる方向にナターリヤが向かった時であった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツ!!

突然起こった地響きに目を見開く面々。

転倒しそうになったナターリヤをニコライが支える中、眼前の地面が裂け一本の道が出来上がる。

「見て見て〜古文書にあった氷の底への入り口よ〜!!」

興奮したナターリヤが地面の裂け目を指差す。

「ご丁寧にも階段と思われる段差まであり、彼女の先祖の古文書を信じるならこの先に神なる存在が居ると言う事になる。」

「・・・懐かしい空気だね」

クイントが暗くて見えない氷の底を見ながら言う。

何が懐かしいのかプロトは正直聞きたくなかったが、クイントは笑みを浮かべたまま言葉の続きを言い放つのであった。

「ランフアント遺跡群で感じた肌触りを思い出すね・・・恐らくこの先はあの時のあそこと同じになっていると思うよ」

## V O I 2 地に眠るは

「ハツハツハツハツハ!! 古文書に書かれた出来事は本当だったみたいだね」

ニコライが笑みを浮かべながら出現した階段とその先にある空間を指差す。

「そう言う訳で皆。早速だけどお宝目指してレッツ&ゴー」

一同を前にして拳を突き上げるナターリヤだが反応を示したのはコールドマンにマジシャンウーマンぐらいで反応は極めて薄い。

如何に能天気な彼女でもその反応の薄さに首を傾げ。

「この先に古代の遺跡があるとして・・・やで。金銀や宝石を含めた財宝をワシらが手に入れた場合は・・・」

「モチのロンでパイレーツちゃん達の取り分になりまゝす。と言うかワイリー軍団の皆さんにも報酬は現地での現物支給よ」

「ホンマか・・・じゃきにい!! 放火魔やないけど燃えてきたで!!」

ナターリヤの言葉にパイレーツマンがやる気を見せ始める。

強欲な彼らしい反応にマジックマンとバーナーマンの視線が痛い、それを彼が気にする素振りは見せない。

「改めて頑張つてくお宝を目指すわよ」

再度上げられるナターリヤの掛け声に今度はパイレーツマンが加わったのは付け加えておく。

「嫁はあんな事を言つとるが・・・良いのか?」

一応確認と言う形でプロトがニコライに問う。

エフレーモフ家の家長はナターリヤではあるが、主に財産の管理を行っているのはニコライである事を知っているからなのだが。

「我々としては別に財宝には興味が無いので構わんよ。そもそも財宝なんて探さなくても十分な資金はあるし、ただ未開の古代遺跡に一番乗りを果たすと言う体験がしたくて今回の探査の同行を君達に依頼した訳でね」

あつけらかんと金に興味が無いと口にするニコライにプロトは一瞬だが思考が停止する。

なんでも古代遺跡の手がかりが見つからなかった場合は、自腹を切るつもりであったらしくその点では古代遺跡が見つかって損をせずに済んだと言うニコライ。

いやそもそも南極に来ている時点で莫大な出費が生じている訳なのだが、この夫妻は遊園地のアトラクションに挑むのとさして変わらぬ気持ちで古代遺跡を探査しようとしていると言うのか。

と色々考えた所でプロトはニコライに何か言うのを止めた。

ワイリーもそうだがこの世界には常識と言う物差しでは測れない人間がそれ相應の数で居る。

その事実を改めて突き付けられた気がしたプロトであった。

「スネークマンもそうじゃが寒冷地で活動がしやすいフリーズマンなんかも連れて来べきであったか」

氷の下にある巨大な空洞内を歩きながらプロトが口を開く。

あくまでも任務は探査と聞いていただけに限られた戦力しか連れてこなかったのがあまりにも痛い。

もしもランファント遺跡群に匹敵する古代遺跡に行くと聞いていれば、言葉通りフリーズマンらも動員していたのは言うまでもない。

「もしも博士に話したら、先に乗り込まれるかもしれないでしょう」  
自身の不満を見て取りナターリヤが笑いながら言う。

確かにワイリーがこの事を知っていれば夫妻に先んじて調査を行おうとしただろう。夫妻も奇人変人の部類に当たるだけあり、この手の読みはおおよそ当たりとなっている。



空洞の中を進む事、時間にして約数分。

ややあつて開けた場所へと出た所で場の空気が重くなる。

『・・・立ち去れ』

辺りに響く低く重い声は音では無くその場にいた面々の脳裏に直接響いた。

「漸くお出ましやな」

パイレーツマンが鉤爪を鳴らす中、更に空気が重くなる。

『悪い事は言わぬ。柔らかき生物よ・・・そしてそれに従う不完全な機械共。命惜しくばそのまま立ち去るが良い』

再度響く警告の声に夫妻は揃って能天気な笑い声を響かせた。

「古代の遺跡にそれを守る守護者の警告。いやゝ実に探検家モノの醍醐味だねえ」

「更に価値のある財宝があれば尚、完璧よねゝ」

『下らぬ物欲が為に我らが聖域に足を踏み入れるか・・・これは最後通告だ。今すぐ・・・』  
夫妻の言葉に不快感を生じさせながら声は警告の声を放つのだが。

「酒・金・女ゝ。飲む打つ買うの三拍子がモットーのワシらにそんな声だけで脅すなんて片腹痛いで!!」

中指を立てながらパイレーツマンが声を遮る様に叫ぶ。

「なんか堂々としてるけど・・・」

「言つとる事はヒトとして最悪の部類じゃの……」

苦笑するクイントの言葉を受けプロトが大きく肩を落とした時であった。

『そうか……であれば我らが神の怒りを思い知るが良い。己の心の醜さに吞まれて……死ねいっ!!』

文字通り呆れた様な息を含みつつ、声が力ある言葉を口にした瞬間であった。

ウンツツ!!

言葉を合図に足元に不気味な模様が浮かび上がる。

何かの魔法陣の様だとクイントが思った瞬間、彼の意識はその場で途切れる事となる。

「プロト様の反応が途切れた?」

プロト達より遅れてその場に辿り着いたダークマンⅣとダークマンⅢは困惑気に辺りを見渡す。

一部のジョー達を後方に待機させた後に手勢を率いて空洞内を進んだ彼らであったが、ある地点で突如として先行したプロト達の反応が消え失せる。

何が起こったのか分からずに周囲を見渡す彼らだが、重々しい音と共に巨大な扉が開かれていく。

ザツザツザツザツザツザツ!!

『まだ居たのか・・・愚かな者達よ』

誰の声かも分からぬが重厚なそれが脳裏に響くが気にしている暇など無い。

氷の彫像と表現する他無い人型の物体が斧や槍などを手に隊列を組み姿を現したからだ。

『ザウラーガードよ・・・一人残らず始末するのだ』

その声に頷いたのかは分からぬが応じる様にザウラーガードと呼ばれし者達が一斉に武器を構える。

「どうしますか・・・?」

ダークマンIが怖気づいたように声を震わせる。

「ナンバーズと呼ばれる者達が居なくて不安か?なあにあれぐらいの連中など我らだけでも何とかなる」

感情の伴わない声を響かせながらダークマンIVはジョー達と共に身構える。

「・・・ロック」

一体どれだけ気を失っていたのか分からないが自身の体内時計が正確であればそれ程の時間は経っていない。

辺りは闇に閉ざされているがその声だけははっきりと聞こえた。

もう二度と聞くとは思っていなかった彼女の声だ。

「・・・ロック」

再度響く声と同時に闇の一部が晴れた。

ブロンドのポニーテールが特徴的な少女が自身に向かって微笑む。

「ロック、何をしているんだい？早くこちらにおいで」

恰幅の良い白衣の老人も己の名前を呼ぶ。

彼ばかりではないそこにはライトナンバーズを始めとする兄弟達が佇んでいた。

「ロック・・・どうしたの？」

「ロック〜!!早くこっちに来いよ」

次々と自身に投げかけられる声にクイントはかつてロックと呼ばれた少年は足を前へと踏み出す。

あのまま彼らの下に愛する兄弟達の下に駆け寄れば、懐かしい暖かさを感じる事が出来るのであろうか。

「・・・ロックマン」

背後で響くその声にクイントは振り返った。

己の背に立ち尽くすのは無数の傷ついたロボット達。

ロボット達ばかりでは無く人間達もまるで山の様に積み上がる地獄絵図。

(ああ……これは僕が破壊して来たロボット達や救えなかった人達だ)

目を覆い耳を塞ぎたくなる光景だが、それをしなかったのは彼が自身の責任だと認識していたからか。

「ロッキマン……どうして殺した？」

「人間を守る為にロボットであるお前が同じロボットである俺達をどうして殺す」

「バラバラにされても修理すれば元通り？痛みや恐怖は感じると言うのに」

「人間達は俺達を平気で傷つけるのにどうして人間を傷つけちゃいけないんだ？」

ロボット達が次々と呪詛の言葉が投げかけられる。

「どうして俺がロボットに殺された時にお前は来てくれなかったんだ？」

「お前が早く来てくれれば私やお母さんが死ぬ事は無かった」

「正義の味方なんだろう？それなのにこの役立たずがっつ!!」

人間の男性が少女が様々な年代の者達がロボット達の呪詛に続く。

「ロック、そんな人達なんて放っておけばいいのよ」

「彼らは勝手な事を言っているだけだ。彼らが死んだのもお前達の責任ではない」

「俺達は俺達だけで楽しもうぜ」

ロールがライト博士やカットマンが自身を慰める様に招く様にそれぞれ口を開く。

今にも動力炉が停止しそうな動悸を覚えていたクイントであったが、背後で響く見

知った者達の声に薄笑みを浮かべる。

「あの声は……己の心の醜さに吞まれよと言った。成程……これがそう言う事か」  
クイントはゆっくりと片腕をバスターに変えるとその銃口を人々へと向ける。

「これは幻だ。僕の心を投影した……ね」

次々と放たれる光弾は人々を形作っていた闇を掻き消していく。

最後に生みの親と兄弟達にクイントは何の感情も宿さない瞳を向ける。

「もしもこれがが本当にライト博士だったらそんな事は絶対に言わない。だから……消えろ!!」

バシユウウウツツツ!!

放たれた巨大な光弾に闇が切り開かれたと思つた瞬間であつた。

額に冷や汗を掻きながらクイントは目を見開く。

思うに先程見た光景も幻であつたのか。

周囲を慌てて見渡すとそこはそこら中に無数のクレバスが走るトラップルームであつた。

絶えず隆起を繰り返し、一步でも足を踏み外せば奈落の底に真つ逆さまと言う残忍な罠にクイントは苦笑いを浮かべる他無い。

並の者であれば幻を見せられた時点で自滅するのは明白。

「・・・おっと」

足元がぐらつき始めたのを感じ跳躍するクイント。

思うに自分も正気に戻らねば今頃、死んでいただろう。

「全く・・・なんと悪趣味な」

自身と同じ様に意識を取り戻したのかプロトが不快感を露わに口を開く。

「君は何を見たんだい？」

彼が無事なのに安堵しつつも思わず好奇心からそれを聞いてしまった事にクイントは内心で後悔する。

「お前が見たものをワシに言えるのであれば言ってみてやらん事も無い」

一瞬だけ間があった後、プロトにそう言われてクイントは両の手を広げ背を向ける他無い。

プロトもそんなクイントの姿から察したのだろう。

それ以上は問う事も無く彼は周囲を見渡す。

「じ・・・自爆スイッチ!!それだけは勘弁してくれえええ!!」

隆起する氷の上でバーナーマンが涙ながらに叫ぶがそこには誰も居ない。

「大丈夫ですよ、自爆スイッチなんてありません」

今にも走り出しそうになる彼を羽交い絞めにして抑えるのはコールドマンだ。

彼もトラウマ級の幻を見たであろうが至って平然としていた。

「いやあく世界中が温暖化で暑苦しくなる夢を見ました。まあ私の冷氣で冷やして差し上げましたが」

ニコニコと笑いながらコールドマンはバーナーマンを引き摺りながら安全な場所まで歩いていく。

「金が・・・預金の残高がナニモンかに引き下ろされる夢やったわ」

青ざめた顔でパイレーツマンがクイントラに告げる。

彼は真剣な顔であったが、ある意味でこの男らしいとプロトらは呆れ果てる他無い。

「オデよりも大きなロックマンに見下ろされる夢だったガー」

「僕は空中ブランコから落ちる夢だったぞ」

フロストマンとクラウンマンがそれぞれ口を開く。

彼らも彼らで何とか持ち直したらしく全身から冷や汗が噴き出していた。

「ハア・・・ハア」

幻を見せられた面々で今にも崩れ落ちそうなのはマジシャンウーマンだ。

「大丈夫ですか？」

「だ・・・大丈夫。キャハハハ・・・」

師であるマジックマンに抱えられる形の彼女は笑みを浮かべるのだが、その頬を止め



留めなく涙が流れ落ちる。

「無理はしなくてもいいよミュゼット」

笑みを浮かべるクイントにマジシャンウーマンはキヨトンとした顔をするのだが。

「あつ・・・そつか。君は未来から来たロックだったんだね」

「まあ今の時代の僕は君がマジックマンの弟子になった事を知りもしないだろうけどね」

屈託なく笑うクイントに僅かながらも調子を取り戻すマジシャンウーマン。

それはそうとして彼らはその存在をすっかり忘れていた事になって漸く気づいていた。

下手をするついでに奈落の底に転落した可能性も大いにあるだけに、プロトらは無言で互いの顔を見合わせるのだが。

「は〜い皆さん〜ご無事かしら〜」

最悪の事態も想定した時、一人の女性の声が響いた事でその場にいた全員が胸を撫で下ろした。

「ちよつと夫がダウンしてるけど気にしないでね〜」

「う〜ん・・・埋めないで」

スカルマンにお姫様抱っこされる形で安全な場所に降り立ったナターリヤは気を

失つたままスケルトンジョー達に抱えられるニコライを指差す。

未だに虚ろな表情で譫言を口にする彼だったが、数秒後には飛び跳ねる様に起き上がる。

「はっ……走馬灯が過つた!!」

慌てて周囲を見渡すニコライだが誰にも構われない辺りは哀れである。

「ところで」婦人も幻を……」

「え……?何が?」

確認の為、質問をするプロトだがナターリヤは首を傾げる。

「いきなりこんな危険な場所に落とされてどうしようと思つていたらすぐにスカルちゃんに来てくれたのよ」

スカルマンに礼を言うナターリヤ。

彼女に恭しく頭を下げるスカルマンは眉一つ動かさない。

「さあさいきなり閉じ込められた訳だけど、ここから逆転目指して頑張るわよ」  
拳を握り締め上に掲げるナターリヤにプロトが溜息を大きく吐く。

見た所、一室には出口らしい箇所はどこにも無いのだが。

「おっ……ここら辺が脆そうやで」

海上での略奪の際に頑丈な船の底に穴を開ける事を得意としているパイレーツマン

が目聴く壁の一部を目にする。

「グランドが居れば楽が出来たのでしようけど」

溜息を吐くマジックマンを他所にパイレーツマンが氷の壁に爆弾を放り投げる。

リモートマインによる爆発は頑強な氷の壁に亀裂を生じさせる。

徐々にだが大きくなっていく亀裂を前にクイントがパイレーツマンの肩を叩きながら前に出る。

「後は僕のサクガーンで・・・と」

削岩機を模した武器を取り出しながらひび割れた氷の壁にサクガーンを突き付ける。

「流石は未来のロク坊、面白い武器持つとるやないか」

面白うに笑うパイレーツマンに笑みを返しながらクイントはサクガーンを起動させた。

ズドドドドドドドドドドドツツツ!!

全身が大きくぶれるのを感じながらクイントはサクガーンで氷の壁を削り取っていく。

下手をすれば今、自分達が居る足元も崩してしまふ可能性もある為に慎重に前へ前へと進んでいく。

サクガーンを起動させて十数分が経った頃、掘り進んだ穴から風が吹き飛んでくる。

穴が別のエリアに突き当たったと理解するやクイントは一旦サクガーンの動きを止めめる。

「よしやつ!!任せとき!!」

止めとばかりにリモートマインを投げ放つパイレーツマン。

爆弾の爆風と共に別のエリアへの道が開け、プロトらは一斉に穴から外へと飛び出す。

「・・・ふう」

サクガーンを使い続けていたクイントは消耗が激しかったのか一番最後に穴を抜ける中、プロトらが目にしたのは。

「すつごうい!!見て、あなたく南極の底に氷で出来た神殿があつたわく」

「これは世界遺産登録間違いなしだねくしかもまだ現役だ。ははははく前人未到の場所に我々は立っているく!!」

巨大な氷の結晶で造り上げられた神殿の姿にナターリヤが携帯端末を取り出し写真を撮り始める。

興奮気味に叫ぶ彼女とニコライはすっかり旅行気分なのだが、そんな声を上げればさすがに気づかれる訳で。

「なに・・・あの場より生きて帰って来るとは!?!」

驚きの声が自身らに向けられる。

先程とは違いその声は自身らと同じく音を通して聞こえる物であった。

鎮座していた祭壇よりゆっくりと起き上がるのは巨大な氷の彫像を思わせる姿の存在であったが、それを何と表現すれば良いのかプロト達には分からなかった。

プロト達が見た存在は右半身は内部機構剥き出しの機械でありながら、左半身はそれとは真逆の人体模型を思わせる剥き出しの神経が露わとなつた異形の姿をしていた。

ロボットでも無ければ当然の如く自然界に居る人間を含めた動物でも無い存在。

「成程・・・そもそもこの聖域に足を踏み入れたのだ。並の者ではないと言う事か」  
全身から冷気を放出しながら巨人はその口を歪ませる。

人型ではあるがその身長は長身のマジックマンよりも遥かにでかい。

単純に数メートルはあるであろうか、彼の全身を覆う氷の厚さから体重もトンは超えよう。

「まずは名を名乗ろう。我が名はユミール・・・偉大なる神マキナ様に仕える従者にしてこの嵐の神殿を守護する存在である」

重々しく口を開くユミール。

「これ以上、この場を汚す事は許さぬ。命惜しくば・・・」

再び自身らに去る様に命じるユミールであったが。

「アホか先にそつちからやつとるやろが!! あんなチンケな幻まで見せられたんや、宝石の一つや二つ持ち帰らな取まりがつかんわい!!」

歯を軋ませながらパイレーツマンが噛みつく。

「やっぱりここに神様が居るのは本当みたいね。やっぱり私の御先祖様が神様に会ったのも本当だったのね」

「こうなったら神とやらの御尊顔を拝しないといけないね。申し訳ないけど君々拝観料は幾らだね?」

「・・・拝観料だと?」

後ろで騒ぎ出すエフレーマフ夫妻に首を傾げるユミール。

「貴様ら下等な存在が我らが神に会えるとも思うたか!? 身の程を知れ!!」

一瞬だけ黙り込んだユミールであったが、すぐさま彼は怒りに身を震わせ巨大な腕を横に振るう。

それを合図に氷の彫像の如き姿をした兵士達が次々と神殿の内部より出て来る。

「クイントや・・・あのユミールなる者。かなりの強敵と見た」

「そればかりか彼がマキナと言った神だけど・・・恐らくはラ・ムーンに準ずる存在だね」  
プロトの言葉にクイントは静かに頷く。

神殿の壁に刻まれた模様や装飾を見るにかつてランフロント遺跡群にあった月の神

殿に似通った部分が見受けられる。

「僕がここでの出来事を知らないのも無理は無いか。ここにこんな物があるだなんて後世に記録として残す訳には行かないよ・・・全く」

呆れた様に溜息を吐きながらクイントは片腕をバスターへと変形させる。

「死ねい・・・!!」

ズドドドドドドドドツツ!!

ユミールが地面に拳を叩きつけた瞬間、地面より生えた無数の氷の柱がクイントら目掛けて迫り来る。

それぞれ散開する形で攻撃を回避するクイントらであったが、結果として左右に戦力を分散される形となる。

ズンツツ!!

クイントが見たのは一瞬の内に自身らへと間合いを詰めるユミールの巨体。

「ヒヤツハツツ!!燃えろ!!」

その動きに反応を示したバーナーマンがチェインバーナーを顔面に見舞うが、ユミールの氷は溶けない。

「・・・笑止!!」

残像を残しながら放たれる蹴りを食らいバーナーマンが後方に吹き飛ばされる。

「やりますねえ．．．ではアイスウォール!!」  
「くだらん!!」

コールドマンが形成した氷の壁を軽く足蹴にする形でユミールが破壊する。

続けざまにマジックマンが放ったマジックカードもユミールのボディを覆う氷に阻まれる。

ドガアアアーンツツ!!

再度顔面に放たれるパイレーツマンのリモートマインの爆風にも一切動じた様子も無い。

「その程度の力で勝てる．．．」

「まあ僕一人だったら勝ち目は無かっただろうけど」

ほくそ笑むユミールであったが、自身の頭上より声が響いた事で見上げるがもう遅い。

ユミールが最初に生み出した氷の棘を足場変わりにしサクガーンを手にしたクイントが、彼の脳天目掛け急降下を仕掛ける。

「仲間が居るんだから付け入る隙はある!!ましてマキナなる神が後ろに控えているなら尚更だっつ!!」

クイント渾身の一撃を受けユミールは勢いよく地面に顔から突っ込む事となる。



普通に考えれば致命傷と言える一撃であったのだが。

「おのれ……!!」

苛立ちを露わにユミールが起き上がった瞬間、クイントの体は神殿の壁に叩きつけられていた。

壁に叩きつけられたままピクリとも動かないクイントを一瞥し、ユミールは後頭部を手で触れつつ、先程以上の殺気を放ち始める。

「不完全な機械共よ……私を怒らせたな」

そう言い放った瞬間、ユミールの全身は消え失せマジックマン達は容赦なく吹き飛ばされていた。

## V O I 3 古き神の従者

「燃えろおおっっ!!」

吹き飛ばされた味方を尻目に真っ先に肉薄するのはバーナーマン。

キング軍団一の猛将でもある彼は全身より炎を噴き出すやそれらをユミールの胸部へと叩きこむのだが。

「・・・っっ!?!」

ユミールの全身を覆うのは氷であるのだがバーナーマンの炎の直撃を受けながらも溶ける様子が全く見受けられない。

防御さえせずに仁王立ちするユミールにバーナーマンが目を見開く。

「愚かな・・・貴様ら如きに我が身を守る神の楯は貫けぬわ」

パキパキパキパキッツ!!

吐き捨てる様にバーナーマンに言い放ちながらユミールの掌から巨大な氷の塊が生み出される。

「アイシクルキャノン!!」

キャノンの名前に違わぬ砲弾の如き氷塊が破片を含めて放たれる。

「真正面から直撃を受けたバーナーマンは背後の壁まで勢い良く叩きつけられてしま  
う。

「キヤハハハハ!!マジカルボム!!」

「リモートマインや!!」

マジシャンウーマンとパイレーツマンがそれぞれ爆弾を投げ放つがそれも全く以つて有効打にならない。

「あらあら?どう言う事?」

普通のロボットであればまともに受ければ致命傷に至るであろう攻撃を受けながらも平然としているユミールに首を傾げるのはナターリヤだ。

「幾ら全身を覆う氷が厚いからと言っても少しぐらい溶けたり欠けたりはするんじゃないかしら?」

彼女の指摘通りユミールの装甲の厚さは異常と言っても良い。

と言うか彼がこの世界の理に従うのであればバーナーマンらの攻撃を完全に無傷でやり過ごす事は不可能だ。

ズドドドドドドツツ!!

思案するナターリヤの後ろではスケルトンジョー達がザウラーガード達に銃撃を開始していた。

不気味な骸骨を模したロボット達は淡々と敵に攻撃を仕掛けていく。対するガード達も同様であり氷の彫像その物のと言える彼らは、銃弾によって仲間達の体が碎かれるのも気にせず手にした武器を振り回す。

「・・・・・・・・」

バキツツ!!

振るわれた斧を受け止めるや逆に拳でガードの一体を吹き飛ばすスカルマン。

彼はその場で斧を拾い上げるやそれを振るってガード達の体に叩きつける。

スカルバリアーを形成するスカルビット以外の武装を持たないスカルマンの戦い方は人間と殆ど変わりが無い。

彼もスケルトンジョー同様にマシンガンなどの武器は持っているのだが、ここで使うのは勿体ないと言う判断なのか敵が落とした武器を手にするやそれを振るって戦いを始める。

武器が落ちているのであれば使ってしまったえば良いと言うのだろうか。

とにかく彼、スカルマンは戦い方に躊躇が無い。

ズドツツ!!

落ちていた槍を数本拾い上げるやザウラーガード達に投擲するスカルマン。

何体かのザウラーガードが崩れ落ちる中、逆にスカルマン目掛けて幾つかの槍が投げ

返される。

バチバチバチバチツツ!!

放たれた槍をスカルバリアーでやり過ごしつつ弾かれ床に刺さった槍を今度はスケルトンジョー達も手に取り始める。

互いに槍を投げ合う光景はさながら古代の戦争を思わせるが、そこにロマンは無い。ザウラーガードとスケルトンジョーの静寂に満ちた戦いは徐々に膠着状態となり始めるのだが。

「・・・ええいつつ!!」

泡のバリアーを張ったパイレーツマンを弾き飛ばしながら、ユミールがスカルマンに肉薄する。

自身のガードと一進一退の攻防を続けるスケルトンジョーを指揮するのがスカルマンであると、即座に看過したユミールは司令塔であるスカルマンを潰すべく一気に動く。

「アイシクルブレイドツツ!!」

拳の氷を刃の形に変形させユミールがその腕を大きく薙ぎ払う。

反射的に顔を手で覆ったスカルマンだが、その腕とボディが大きく抉り取られる。

ズドンツツ!!

己のボディが半壊しようとも眉一つ歪めずにスカルマンが至近距離でマグナムをユミールの頭部目掛けて撃ち放つ。

銃弾を頭部に受け大きく仰け反るユミールだが、その一撃は彼の全身を氷の厚さに阻まれる。

「・・・図に乗るなっつ!!」

ガキンツツ!!

苛立ち交じりに放たれた拳はスカルマンの上半身を軽々と吹き飛ばす。

スカルマンが吹き飛ばされた先で待ち受けるのは思い思いに武器を持ったザウラーガード達だ。

ズドドドドドドドドツツ!!

さながら生贄の様に落下して来たスカルマンの上半身に槍が突き刺さる。

そのまま床に叩きつけられたスカルマンのボディへ容赦無く斧が振り下ろされる光景に多くの者が反射的に目を逸らす。

「許さないガー!!」

仲間が倒された怒りに身を震わせたフロストマンがユミールに拳を叩きつけた時であつた。

ジロリツツ!!

複数体居るスケルトンジョーの一人が不意に鋭い視線を向けたのは。

「おい……俺の体。どこ行った？」

スケルトンジョーの一人のボディが変形しもう一体のスカルマンとなりながら、彼はグレネード弾でザウラーガードを吹き飛ばす。

胴体部だけになったスカルマンのボディを拾い上げるや、スケルトンジョー達は背負っていたバックパックから腕や足と思しきパーツを次々と取り出す。

時間にして僅かに十数秒後には殆ど元の形となったスカルマンは最後に渡された新しい頭部を胴体部にくつつけると、僅かにだが伸びをする。

「ゴ苦勞……だ」

苦労様に声を掛けられスカルマンとなっていたスケルトンジョーは元の姿に戻ってしまふ。

「なん……だと？」

新たにパーツを取り付けると言う形ではあるが、ボディを短時間で修復させたスカルマンにフロストマンを吹き飛ばしたユミールは目を白黒させていた。

「ロシアの骨格標本の十八番。あれは一人で皆、皆で一人やでホンマに」

何時の間にか起き上がっていたパイレーツマンが笑う。

元よりカリンカを人質に取られたコサックがロックマン抹殺の為に生み出されたス

カルマンだが、戦闘用と言うよりかは戦争用と称される彼最大の特徴は配下のスケルトンジョー達との連携もとい完全な同期。

言ってしまうえばスケルトンジョー達の一体一体がカルマンの端末であり、先程の様にカルマンが倒されてもスケルトンジョーが一体でも残っていれば予備パーツを用いてすぐにも復活する事が可能なのである。

不気味な骸骨の姿通りの不死身ぶりにはさしものユミールも驚く他無いと言った所か。

「配下の軍団との完璧な同期・・・羨ましい限りじゃな」

皮肉気にプロトが笑った時であった。

ズガアアアアンツツ!!

不意に一同が戦闘を繰り広げる一室の扉が破壊される。

そこより飛び出してくるのはダークマンIVに率いられたスナイパージョー達だ。

「プロト様!!ご無事でしたか!?!」

ダークマンIVが叫ぶ中、ダークマンIを先頭にジョー達がザウラーガード達に襲い掛かっていく。

武装らしい武装が手にした武器しか無い事もあり、ザウラーガード達はジョー達の攻撃に次々と撃破されていく。



「貴様らが……ここに来たと言う事は」

「例の彫像達は既に倒させてもらった」

顔を歪めるユミールにダークマンⅣが淡々と言う。

「ダブル!!マジックカード!!」

状況が好転した事を見て取った左右からマジックマンとマジシャンウーマンがカードを投げ放つがそれはユミールの眼前で塵の様に消え去る。

「モクモクモく連続射出です」

ボディ内より冷気を伴った煙を発生させるサポートメカを打ち上げるコールドマンは、続けてアイスウォールをぶつけユミールの動きを封じ込めようとする。

「サンダーカーニバルだぞっ!!」

僅かだが動きが止まったユミールにクラウンマンが電撃を纏いながら体当たりを仕掛けるのだが。

不意にユミールの巨体がクラウンマンの眼前から消え失せる。

ダンツツ!!

「舐めるなあああ!!不完全な機械共おお!!」

天井部近くまで軽々と跳躍せしめたユミールは片手間にモクモクモを破壊するや両腕に冷気を集め始める。

「身も心も凍てつけフィンヴィルヴェト!!」

ユミールが放った猛吹雪は屋内と言う事もあり逃げ場無く吹き付ける。

対してバーナーマンが全身より炎を吹かした様にも見えたがそれすらも飲み込まれ凍結していく。

ジョー達も楯を構えたままの格好で凍てつく中で殆どの者達はそこで意識が閉ざされた。

「・・・むうつ」

寒さのあまり視界に砂嵐が走る中、プロトは自身が機能停止に追い込まれていない事を感じていた。

スカルマンやキングナンバーズを始めとする高性能ロボット達を一手に相手取りながらも、ユミールなる古き神の従者は圧倒的な実力を見せつける。

そもそも戦いが始まってより殆どまともな損傷を被っていない事からも実力の高さが窺えよう。

唯一の救いは彼が使役するガード達が白兵戦を主体としており、飛び道具を殆ど持たない点だがユミールの猛吹雪によってその数の利も失われた。

一瞬の内に殆どのロボットが凍結する中で楯になったフロストマンの足元から顔を出すのはニコライだ。



「い」

祭壇の上にナターリヤを放り投げながらユミールがほくそ笑む。

「待て・・・食べるなら脂肪がある分、私の方が美味しいぞ。それに妻は肉ばかり食べているし昨日もニンニクを沢山食べていたからあんまり美味しくない筈だ!!」

見当違いの事を言いながら妻を生贄に捧げられるのを阻止せんとするニコライ。

「ちよつとそれじゃ私のお肉が何か臭いみたいじゃないの。まだ私は二十代よ!! お肌もまだまだピチピチのつもりよ」

対してナターリヤが抗議の声を上げるのだが。

「貴様ら・・・うるさいぞ!!」

二人のやり取りに苛立ったユミールに怒鳴られ夫妻は黙り込む。

「全く以って解せぬ。何故にこの様な輩がこの聖域に入る事が出来たのだ?」

唸る様に声を発しながら祭壇の上に腰を落とすナターリヤを見下ろすユミール。

「むう・・・拙いのう」

凍結したままのジョー達の間から様子を窺いながらプロトが呻く。

「・・・確かにね」

クイントがプロトに相槌を打つ。

ユミールによって壁に埋まっていた筈の彼だが、どう言う訳かユミールの吹雪を切り

抜け一応は五体満足な形でその場に居た。

「・・・・・・・・」

よくよく見れば生き残ったスケルトンジョーの一人がジロリと鋭い視線を向けてくるのが見える。

本体が行動不能になった事で端末にスカルマンが意識を移したのだろう。

「あのユミールだけだ。何かは分からないけど障壁で身を守っているのは間違いないね」

相手に気づつかれない様に電子頭脳に直接声を響かせるクイント。

「障壁も至近距離の攻撃は防げない・・・が今度は氷の装甲がある」

「くいずれにせよ膨大なエネルギーで攻撃し障壁を突破する必要がある・・・か」

スカルマンの言葉を受けプロトが溜息を吐く。

「くと言うとワシらがやるしか無いのか？」

「くキヤハハハ・・・頑張って」

一同の考えを察しプロトは頭を抱えるのだが、マジシャンウーマンの声が響いた事もあり慌ててその顔を上げる。

見れば彼女も他の仲間達が咄嗟に楯になった事で吹雪の中、機能停止に至らずに済んだ様だ。

くじやあー、二の三でまずはアタシが敵の注意を引き付けるね>

マジシャンウーマンが合図を口にしようとした時であった。

ボアアアアアアア!!

不意に凍結していた筈のバーナーマンが全身より炎を噴き出す。

「ヒヤハアアアアア!! その程度の冷気で俺様を凍らせようなんて百年早いぜええええ!!」

辺りに炎を撒き散らしながらバーナーマンが勝手に駆け出す。

「・・・あいつ」

プロトが呻いたのも束の間。

「あつううううう!!」

バーナーマンの噴き出した炎で凍結状態から回復したのだが、パイレーツマンが尻に火が付いた状態であらぬ方向に走り出していく。

「・・・ぬうつ?」

思わぬ形ではあるがバーナーマンとパイレーツマンの二人が動き出した事でユミールの意識がそちらに向けられる。

自身へと迫ったバーナーマンを拳で弾きつつ、彼の視線は壁の方に走り出すパイレーツマンを追う。

ジウウウウウツツ!!

「あースッキリしたわい!!」

神殿の壁面に尻を引っ付け炎を消すパイレーツマン。

いずれにせよ神を祀る神殿での行為としては極めて無礼な行いだ。

その姿にユミールが歯を軋ませた時であった。

ドガアアアアアンツツ!!

彼の眼前で爆風が生じその視界が遮られる。

その威力以上にド派手な爆発が特徴的なマジカルボムによって一瞬ではあるがユ

ミールの動きが止まる。

「まだ動ける奴が居たのか・・・」

自身最大の技を受けながらも尚も動きを止めない面々にユミールが歯噛みする。

そして感じ取るのは爆風を隠れ蓑に自身へと接近する何人かの気配であった。

僅かにタイミングをずらしつつクイント、スカルマン、プロトの三人が爆風から飛び

出してくる。

「ハイパークイントバスターツツ!!」

「ブレイクストライク!!」

「・・・スカルマグナム」

三者三様で放たれた一撃は至近距離であった事もあり、障壁は機能せずユミールの氷の装甲に直接傷を付ける。

だが彼ら渾身の一撃を以てしてもユミールの装甲は強固な物であり、致命傷には至らない。

「アイシクルキャノン!!」

眼前で生じた氷の塊が放たれクイントらが纏めて吹き飛ばされる。

「密着すれば効くんだな? チェインバーナー!!」

再び起き上がったバーナーマンがユミールの右足に腕を突き付け炎を放つ。

至近距離で放たれた炎にユミールの片足が溶け出すが、思わぬ反撃を受けながらも極めて冷静に対処する。

「おのれ・・・やってくれるではないか!!」

両腕を刃に変えたユミールがバーナーマンの両腕を瞬時に切断する。

次いで胴体部を蹴り飛ばされバーナーマンは両腕共々、炎を撒き散らしながら吹き飛ばす事となる。

「・・・むう」

クイントらの攻撃に傷ついた胴体や溶けかかった右足を見据え、その場に膝を衝くユミール。



彼らの奮闘は決して無駄では無く、一連の攻撃はユミールに確実にダメージを与えていた。

「不完全な機械と侮っていたか。まさか貴様らにここまで手古摺るとはな」

ここに至ってはユミールもプロトラを下等な存在と侮る訳には行かず、ユミールは早期に敵を潰すべきと判断する。

真つ先に手を下すは彼らのリーダーと思しき柔らかき生物だ。

遠くで震えているニコライはさて置きとユミールは手近にいたナターリヤに目を向ける。

ザウラーガードが持っていた槍を拾い上げそれをナターリヤに放り投げようと握り締めるユミール。

その気配を察知したのかナターリヤが後ずさるが、逃げられる物ではない。

「ご先祖様くたくすくけくて〜!!」

と何かに縋る様に叫びながらナターリヤが手にするのは、ここへ入る為に使用した遺物と言うべき杖だ。

「・・・それは?」

杖を目にするなり顔色を変えるユミール。

慌てる様に槍を投げたユミールであつたが、不意に杖に付けられた目玉を模した宝石

が怪しい光を放つ。

ボロツツ!!

杖が放った光は放り投げた槍をバラバラに分解したばかりか、ユミールの左上半身を一瞬の内に崩壊させていた。

それどころか彼の身を守っていた筈の障壁までも消滅していた。

「馬鹿な……我が神の楯まで消滅させるとはその杖は間違いない無くっ!!」

己の身を崩壊させた杖の光に狼狽するユミールが後ずさる。

「ガー!!アイスウェーブだガー!!」

他の面々同様に凍結していた筈のフロストマンが氷の刃を地面に次々と生み出す。

ズドツツ!!

両足に深々と食い込む刃を前にユミールが低く呻くのが分かった。

原理はともあれナターリヤの持つ杖によって彼の身を守る障壁が消滅した。

この好機を見逃す面々ではない。

ズガガガガガガツツ!!

フロストマンに続きスカルマンが本体を再起動させて銃弾を撃ち放つ。

それに連動する様に一部のジョー達もバスターを連射していた。

「ぐぬぬぬっ!!」



キング事件の際に鉄壁の防御を誇ったキングの楯を破壊した物と同等の一撃は辺りを眩い閃光で包み込むのだが。

「グギギギギギツ!!やるではない・・・かあああ!!」

背後の神殿の一部すら余波で損壊する程の一撃を受けながらも、氷の巨人は二の足で立っていた。

震える両足をギリギリの所で持ちこたえ大きく損壊した氷の装甲からは中身と言える内部機構が剥き出しとなる。

大きく神経細胞が脈打つ中、やはりと言うかその身を徐々に再生させていくユミールに一同は息を呑む。

「だが無駄な事よ。貴様らではこのユミールを倒す事は・・・できん!!」

ギロリと鋭い視線を向けながらユミールは片腕を上げ合図を送るや、神殿の奥より控えていたのであろうザウラーガードや獣を思わせる氷の彫像が次々と姿を現すのであった。

「冗談やろ〜」

とパイレーツマンが呻くのも無理は無い。

こちらは殆どの者達が満身創痍であるのに対し、ユミールこそすぐには動けない様子ではあったが代わりに配下の者達は無傷の状態で居るのである。

このまま自身らにザウラーガード達が一斉に襲い掛かればどうなるかは考えるまでも無い。

頼みの綱であったプロトも先程の一撃でジョー共々エネルギー切れで沈黙している。有体によれば万策尽きた状態だ。

唯一あるとすればナターリヤの持つ杖の力を使う事だが、人間である彼女しか使えない事を考えるに有効な手段にはならないしユミールも二度も同じ不覚は取らないだろう。

「数の力で相手するは極めて癪ではあるが・・・私のプライドを金繰り捨ててでもここより先に進ませる訳にはいかんのだ!!」

ザウラーガードに両脇を抱えられる形で支えられたユミールが高々と腕を上げた時であった。

『もう・・・良い』

周囲に響き渡る声にクイント達が辺りを見渡す。

初めてここに侵入した際にユミールが発したのと同じく頭の中に直接響くその声は、ユミールの声以上に重々しく聞くだけで体が震える感覚が生じた。

『そこまでだ・・・ユミールよ』

自身を制止する声にユミールは慌てて跪きながらも首を振るう。

「こ奴らは聖域を侵さんとする不屈き者です。確かに思わぬ苦戦を強いられました。がもはや我らの勝利は確実!!このまま貴方様の賛と致しましょう」

『それには及ばぬ。まずに貴様は大きな間違いを犯しているぞ……その柔らかき生物はかつて我自らが招き入れた者の血を継ぐ者。言うなれば客人だ……貴様もあれを見たであろう?』

「あの杖は……いやしかし」

『そこな者よ……ソフィーアなる者の子孫或いは縁者か?』

声の主にきよんとしていたナターリヤであつたが慌てて杖を取り出す。

「え……ええ。ソフィーアⅡエフレーモフは何代も前の私の御先祖様でこれは南米の遺跡で見つけたと我が家には伝わっているわ」

『その声……聞き覚えがある。ともあれよくぞ我が聖域に再び足を踏み入れてくれた。歓迎しよう……我が従者ユミールの無礼は素直に詫びよう。こここの所、心穏やかならざる事が多かつた故に』

「マ……マキナ様!!」

ナターリヤの言葉に声の主が笑いを含んだが、ユミールの言葉に殺気が生じさせる。

『こ奴らは客人だ……無礼は許さぬ。我が前へと連れて来るのだ……丁重にな』

マキナと呼んだ主の有無を言わさぬ声に平伏する他無いユミールは念を押す様に言

い放つ主の言葉に齒を軋ませる。

ゆつくりと立ち上がったユミールは未だに殺気の籠った瞳を向けていたが、クルリと背を向けると顔だけ振り返って来る。

「マキナ様の命令だ。我が聖域の中へと入る事を許そう・・・ついて来るのだ」

そう話すとユミールはゆつくりとした足取りで神殿の奥へと歩いていく。

彼の姿に互いに顔を見合わせながらもナターリヤはクイントらと共に嵐の神殿内へと足を踏み入れるのであった。

## V O I 4 座する神

主の命令を受けた事もあったのだろうがザウラーガード達が神殿の各所に戻り始めるのが見える。

元より氷の彫像その物の姿をしているだけあって、彼らの姿は神殿内の風景に完全に溶け込む。

「ガルルルルツツ!!」

虎や狼を思わせる肉食獣の彫像が唸りながら一同の脇を通り抜けていく。

彼らは扉の左右に待機するやそのまま微動だにせず固まってしまふ。

「戦いを回避出来た事を不幸中の幸いとすべきか・・・」

プロトが胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。

パシャ!!パシャツツ!!

冷や汗を掻くプロトの思いを知ってか知らずかニコライとナターリヤは二人で記念撮影をし始めるので頭痛が酷くなる。

「スカルちゃん。あの調度品も撮って〜」

「・・・・・・・・」



ナターリヤの命令に従い無言で写真を撮るスカルマン。

今は夫妻を主人と認識しているとは言え文句一つも言わない辺りは感心する他無い。

「・・・・・・・・」

そんな自身らを振り返りながら渋い顔で見つめてくるのはユミールだ。

彼らを神殿の奥まで案内する命令に納得していないのは、顔を見るまでも無く明らか。

既にボデイの再生を完了させている彼がその気になれば自身らなどあつと言う間に殺されてしまうだろう。

ユミールとの戦いを終えたプロトらは一部の面々を後に残して神殿の奥に足を踏み入れている。

ユミールのフィンヴィルヴェドによってジョー達の多くが凍結した事もあつてそれらの復旧もあるが、特にバーナーマンが重傷を負つており現在夫妻に同行しているのはプロトにクイント、スカルマンとパイレーツマンの四人となっている。

「はいはい。氷の虎さんとピース」

「・・・・ガウツ？」

扉の左右に立つ彫像の顔に抱き着きながらナターリヤが写真を一枚。

アポストルと呼ばれる虎の彫像が困惑気に顔を傾げていた。

生贄にされそうになった時、あれだけ騒いでおきながら今やすっかり観光気分なのでから笑えない。

この能天気さはどこから来るのかと思うのだが、ニコライの方も興味深げにビデオカメラを回している。

いずれにせよ自身らは前人未到の古き神々の聖域に足を踏み入れているのだ。

その点に関しては興奮の様な物を覚えるのは分からないでもない。

ドクンツツ!!

不意に心臓の如き鼓動が響いたのを聞きプロトが足を止める。

クイントらも同様の様子であった。

身構えた一同を見てユミールはその口を僅かに歪めた。

苦笑を浮かべたと言う事なのだろうか。

「安心しろ・・・まだ奴らは稼働状態では無い。まあ仮に先の戦いで私が倒されれば動き出しただろうがな」

そう言つて左右の壁に埋まる形で眠りに付くのは二人の巨人。

一人は重厚な西洋鎧を思わせる姿でもう一人は巨大な角と顎髭が特徴的な北歐のバイキングを思わせる姿であった。

「エリークにプロウケンだ。私と同じくマキナ様に仕える従者・・・現在は活動期間を終

え眠りに付いている」

ユミールの説明にパイレーツマンが反応を示す。

「赤毛のエリック・・・北欧のバイキングで有名な奴やないか？ 当時はアメリカ大陸にも到達したやらなんたらで聞いてとるで」

「ああ・・・柔らかき生物の伝承ではそうなっていると本人が言っていたな」

若干興奮気味なパイレーツマンは余所にユミールは興味無さげだ。

「くうく伝説の海賊が目の前におるのに。財宝の在処の一つや二つを教えてもらいたいもんやのう!!」

目を輝かせながら話す彼にユミールは呆れた様な顔を見せる。

元より無機質な彫像を思わせるユミールだが、よくよく見れば感情らしい物があるのが見て取れる。

「先程の話を聞くに君達やその神とやらは幾度と無く我々の前に姿を現していると言う解釈で宜しいかね？」

メモを取りながらニコライがユミールに問う。

対してユミールは肩を竦める様にして笑みを浮かべる。

「全てでは無いが・・・貴様らが神話とする出来事や神、悪魔、英雄などの幾つかはかつて地上で活動していた我々だと言えような」

「……どうも見た所、君達には休眠期間は必要の様だが食事などが必要とは到底思えない。だが地上で活動するには訳があるのかね？かつてのラ・ムーンの如く、人類の抹殺が目的という訳ではないのだろうか？」

ユミールの言葉を受けニコライが率直な質問をぶつける。

かつてランフアント遺跡群で目覚めたラ・ムーンは人類を滅ぼすべく活動し、ロックマンの手によって破壊されたのだがユミールやマキナなる存在をがこうして今の今まで健在であった所を見るとそれが目的であるとは到底思えない。

と言うかそもそも今に至るまでに活動を始める機会は何らでもあった訳で、その時点で人類など彼らの手によって容易く滅ぼされてしまったであろう。

ニコライの顔を真っ直ぐに見つめユミールが黙り込む。

ややあつて背を向けたユミールは奥の光を指差しこう言うのであった。

「その質問であればマキナ様に直接聞くが良い。私が貴様らに直接言うべき事ではないわ……」

そのまま無言で進む一同の中でナターリヤが写真を撮る音だけが響き渡っていた。

「マキナ様……ご命令通りお連れしました」

恭しく一礼をしながらユミールが神殿の最深部へと足を踏み入れる。

最深部と言つても些か語弊があるかも知れない。

そこが開けた空間であつたからだ。

広大な空間の中で真つ先目に目に入るのは氷で出来た巨大なピラミッドを思わせる建築物であつた。

(ランファント遺跡群にあつた月の神殿と同じだ)

先程までの遺跡以上に似た様な様式を持つ建築物にクイントが内心で思う。

『「苦勞であつたぞユミール」』

従者に労いの言葉を掛けるマキナなる神の声が響く。

『神殿の中に来るが良い．．．我はそこに居る』

その声に促され一同はユミールと共に階段を昇つた先にあつた神殿中心部へと足を踏み入れる。

ドクンツツ!!

心臓の様な鼓動を時折響かせながら御神体の如く鎮座するのは、巨大な目玉を持った球体上の金属の物体。

奇しくもかつてロックマンであつたクイントが見たラ・ムーンと同じ存在であつた。

まあ同じと言つても色が青白かつたりと多少の違いがあるのだが。

『今より少し前にソフィアなる者が我が声に導かれこの地を訪れ．．．その血を受け継

ぐ者が帰つて来たか。柔らかき生物と不完全な機械よ……一応はそなたらを歓迎しよう』

(少し前て……普通に数百年前やぞ)

その言葉にパイレーツマンが内心で突つ込んだのはさて置きである。

『我が名はマキナ……マキナザウラー。虚空の闇より舞い降りし古の神にして凍てつく軍団の長たる存在』

自らの名前を名乗つたマキナザウラーに一同は圧倒されるばかりだ。

殺気こそ発してはいないが対応を間違えれば瞬時に消される。

そんな危うい空気を目の前のマキナザウラーは放つていた。

『手荒な歓迎となつた事は詫びよう。だがソフィーアの血族よ……貴様らは何故にこの地を訪れた？我が力を頼つて来たのか？であれば相応の対価を求めろが……』

目を細める様に光を発光させつつマキナザウラーがナターリヤに問う。

「それには不肖ながらナターリヤの夫である私が説明致しますよう」

コホンと咳払いをしつつニコライは話す。

まあ話すと言っても先にプロトラにした様に自身らが家に伝わる先祖の古文書から個々の場所を割り出し、前人未踏の地に一番乗りを果たしたい欲求に駆られ事を身振り手振りを見せつつ彼はマキナザウラーに正直に話すのであった。

パシャパシャツツ!!

そんな夫とマキナザウラーをカメラで撮るナターリヤ。

角度が気に入らないのか彼女はかなりきわどい位置から撮ろうとする。

普通に考えてマナー違反でありユミールが今にも声を上げそうになっているのが分かる。

「南極の奥地には古の神と呼ばれる存在が住まう古代遺跡があつた。凄くロマンだと思  
うわ〜」

『ロマン・・・つまりは冒険家魂とやらか?』

「あら、そんな言葉を知つてらっしやるの?」

ナターリヤに呆れる事無くマキナザウラーが極めて冷静に返す。

『かつてここを訪れたソフィーアがそんな事を言つていたのでな。あれも誰も見た事が  
無い風景を見る為に外の世界に飛び出したらしい・・・』

どこか懐かしむ様に話すマキナザウラー。

当たり前だが彼が話すソフィーアは普通に考えている生きている筈が無い。

「ところで・・・質問いいかな?」

遠慮がちに口を開くのはクイントである。

「貴方とラ・ムーンは一体どう言う関係なのかな」

プロト含め多くの者が疑問に抱いているであろう質問にマキナザウラーが一瞬だけ黙り込む。

『ラ・ムーンがランファント遺跡群にてこの星の不完全な機械にしてやられた事は把握している』

ジロリと見据える様な視線を向けつつマキナザウラーが言う。

『あれと我は似て異なる存在。虚空の闇より生まれこの星へ舞い降りた事は共通しているであろうがな．．．同族やそなたらの言葉で言う兄弟や家族なのかと言われれば些か語弊がある』

「つまりは我々の言う超エネルギー元素並びに悪のエネルギーと呼ばれる物でボディを構築し自在に操る事が出来る存在と解釈すれば良いかの？」

『それで構わぬ。生憎だがそなたら下等な種に上手く説明できる舌は持っておらぬ』  
若干見下した言葉であるが実際に聞いていても理解出来ないのは間違いない。

まあ彼らの主である悪の天才科学者であれば別であったかも知れないが。

『ラ・ムーンは急ぎ過ぎた。自らの力で柔らかき生物の文明を発達させておきながら、そやつらが愚かと判断するや自分諸共文明を滅ぼしてしまつたのだからな』

呆れた様な口調でマキナザウラーはラ・ムーンの事を話します。

ラ・ムーンの力によつて超古代マヤ文明なる存在が南米で発達したらしいのだが、残



された石板や古文書などの記録によれば人々の争いに怒った神（ラ・ムーン）によって文明は地の底へと沈んだらしい。

それがどう言う訳か地底より突然浮上しランファント遺跡群となり、世界滅亡寸前に至りかけた戦いとなったのだが。

『私は奴の様に完璧は求めぬしラ・ソールの様に庇護しようとも思わぬ。それにまだ収穫の時ではないのだから』

何を収穫する気なのか聞けば恐ろしい事になると判断しプロトはその言葉を流す。

「それはそうとマキナ様。私の障壁を消したばかりか体の一部を崩壊させた杖です  
が……」

ナターリヤが手にする杖を見据えるユミール。

『まだ健在か……であれば良かったな。聞けば柔らかき生物の科学者を利用してラ・ムーンは月の神殿の機能を修復させたと聞く。そもそもその杖があれば必要無かったのだが……奴もそう言う意味では運が無い』

どこかほくそ笑む様に言葉を響かせるマキナザウラー。

「ご先祖様はこの杖を南米の古代遺跡で。恐らくランファント遺跡群で見つけたと古文書には書いてあったのだけれど……」

『そなたの考え通りそれは紛れも無くランファント遺跡群なる場所で見つけられた物

だ。そしてかつてそれを手にしたソフィアを我がここへ導いたのだ。その杖を手元に置いておこうと思つたのでな』

ナターリヤの先祖であるソフィアが偶然にも手にした杖を確保しようとしたと言  
うマキナザウラー。

碌な装備も無い時代に彼女が南極に赴いた訳を考えれば、ある意味で自然と言えよう  
か。

『これはな……ラ・ムーンの戦闘端末のコア。正確には起動させる為の鍵となる物体だ』  
「戦闘端末……？」

『今、お前達が目になっている私の姿は制御端末。柔らかき生物で言えば頭脳に相当する  
と言えよう。そして戦闘端末は肉体、その杖は心臓だ』

ドクンツツ!!

マキナザウラーの言葉に呼応するかのように足元で鼓動が響く。

その音に釣られふと足元に目を向けた一同は見えてしまう。

氷で造られた床の中に埋まる形で眠る巨大な恐竜……否、怪獣と言うべき存在に。

彼の言葉を借りればこれがマキナザウラーの戦闘端末なのだろう。

『いやはや愉快であった。ラ・ムーンの奴め戦闘端末を起動する鍵を文明を崩壊させた  
際に紛失してしまったのだからな。そのまま奴が眠りに付いていたのもあるがそれ故

に我がソフィアを招く事が出来た』

その時の事を思い出したのかマキナザウラーの声に笑いが含まれる。

今考えてみれば月の神殿の奥で眠っていたラ・ムーンは、ワイリーが遺跡に迷い込むまで何も出来ないでいた。

あれだけの絶大な力を見せながらも戦闘も含め他人頼りであった理由もそれで説明が出来る。

ラ・ムーンは動かなかつたのではなく動けなかつたのだ。

『我はソフィアにその杖を持つて来た褒美に望む物は何でもやろうと言つた。それが我が手にあればラ・ムーンに対し優位に立てるのでな。だが奴はなんと答えたと思う？』

愉快気に話し出すマキナザウラーは当初と違い饒舌だ。

自身に匹敵する存在を抑止する切り札と言うべき物を持つて来たソフィアにマキナザウラーが大盤振る舞いになるのも分らないでもない。

『奴は巨万の富であれば自分で稼ぐし、不老不死も退屈だからいらぬ。挙句に世界を支配するなど面倒臭いだけと言ひ放ちよつたのだ。代わりに自分の子孫が末永く好き勝手に生きられるようにして欲しいと言ふのが奴の願いであつた』

「あら〜先祖様らしいわね〜』

『故に叶えてやったぞ。あの女とその子孫が未永く生きられるように加護を与えてやったわ。それと本来であれば杖は代わりに頂くつもりであったが割に合わぬのでソフィーアに持たせたままにしてな』

互いに笑い声を響かせるマキナザウラーとナターリヤ。

どこか常識とはずれた感性を持つ二人に一同が溜息を吐く。

その溜息の中にユミールのが混ざっていたのは言うまでもない。

『さてソフィーアの末裔よ。我はあの時と同じ問いをすらしよう。そなたは我に何を望む？可能な限りで願いを叶えてやろう』

「ん〜」

マキナザウラーの言葉に暫し考えるナターリヤ。

相手は文字通りの神であり恐らくはどんな願いすらも叶えてくれるだろう。

俗物であれば永遠の命だの巨万の富を求めらるであろうが。

ピッツ。

己の尻を指差すナターリヤに一同の注目が集まる。

「まだ二十代なんだけどここの目の下の皺がちよつと気になって。それを消してくださらないかしらっ？」

『わはははは!!良かろう!!』

ピカアアアアア!!

ナターリヤの全く以つて欲の無い願いにマキナザウラーは笑いながら光を放ち、彼女の目尻の皺を消し去るのであった。

「やったわゝこれで化粧で誤魔化す心配がいらなくなつたわゝ」

「はっはっはっはっは!! 私も妻の美しさが保たれて満足だよ」

鏡で目の下を確認し皺が消えたと見るや夫とハグをするナターリヤ。

『願いは以上か・・・?』

「以上でゝす」

マキナザウラーの問いに屈託の無い笑みを向けるナターリヤ。

まあ色々あったが目尻の皺を消してもらい彼女としては良い事尽くめであったのだらう。

「ふうむ・・・報酬は現地払いと聞いたが」

思い出した様に口を開くプロト。

「そうだったわね。何かその手の物があれば良いのだけれども」

報酬の話となり困つた表情を浮かべるナターリヤ。

確かに考古学的には価値のある発見ではあるのだが、はつきり言つてこの嵐の神殿には金銀財宝に相当する物が一切見受けられない。

そもそもここに居る者が人間などの類ではないだけにその手の物に価値を見いだせていない点も大いにあろう。

『報酬か……久しく愉快な気持ちになった札もある。我が代わりにこ奴らに代価を支払うとしよう。して貴様らは我に何を求める?』

太つ腹と言うべきかマキナザウラーはプロトを見据え問う。

「であれば……我らワイリー軍団としては」

そう言いつつマキナザウラーに見せる様に端末の画面にある結晶の映像を表示させる。

「この超エネルギー元素或いはそれに匹敵する物体を幾つか譲って頂きたい。これがあればこの星と異なる文明で生み出された仲間の修理が捗るのでな。恐らくとすべきかお主らはこれに値する物を持つている筈と我らは推測する」

『ほう……貴様はワイリーなる存在に仕えておる者だな?』

マキナザウラーの問いにプロトは恭しく頭を下げる。

『ラ・ムーンが利用する程の力を持つ存在か……我も興味がある。良からう……それを所望するのであればくれてやる』

喉の奥を震わせる様な声を響かせながらマキナザウラーはユミールに視線を向ける。

「……はっ」

主の意を受けユミールは神殿内の装飾の一部を取り外すとそれを掌の中でバラバラにしてしまう。

やがて出来上がったのは大小様々な形の淡い光を放つ水晶であった。

「さあ。持つて行くが良い」

ユミールよりそれらを受け取るプロト。

と言うかこうもあつさりともらえてしまうとは思わなかっただけに拍子抜けしてしまふ。

『その杖もそなたらに預けたままにしておこう……。だが気を付けるのだな。先の一時的な復活もあつてラ・ムーンの眷属達が活動を始めておる。もしもその存在を知られればお前達は真つ先に狙われるぞ』

「ラ・ムーンの眷属……?」

『先の戦いにおいてラ・ムーンも万が一の事を考えたのだろう。奴は戦いの裏で即興で新しい戦闘端末を創り上げ、それに自我を与えて野に解き放つた。本来の器を起動させる鍵が現存すると分かれば見逃す筈が無いからな……』

警告の言葉に一同が首を傾げる中、クイントだけは『成程』と一人頷くのであつた。

「つまりはイエローデビルやラ・ツールとは違う分身を生み出したと言う事じゃな……」  
『そう言う事だ。奴の目的はラ・ムーンの復活及び戦闘端末の再起動であろうな』

「あら？ラ・ムーンと言えばそのロックちゃんが倒しちゃったんじや・・・？」

『我らに死と言う概念は無い。例え粉微塵に破壊されようとも知能ある者共の恐怖と絶望を食らい復活する事が出来るのでな』

ナターリヤの言葉にマキナザウラーが当たり前の事だと言わんばかりの口調で言い放つ。

既に確認するまでも無いが目の前に居る存在は、この世の理から外れた物と言えよう。

『さて・・・他の者達は』

と聞くマキナザウラーだがスカルマンは静かに首を振り、パイレーツマンも数秒程だが思案するも彼も首を真横に振っていた。

「身の丈に合わん願いなんぞ言うても碌な事が無いのがお約束やでな。まあ一つあるとすればその彫像やないエリークが目覚めたら、酒飲みながら武勇伝を聞きたいって事ぐらいやな」

『ふむ・・・であればその時に伝えよう』

欲深い意外な所で冷静なパイレーツマンはそう言うで一足先にその場から帰ろうとする。

「言うまでも無いが・・・」



「ここでの事を私や妻も世間に公表する気は無いよ。そもそも話が壮大すぎて誰も信じてくれんだろうさ。まあ記録には残すがあくまでも我が家に伝わるお伽話になるのがオチだろう」

ユミールの言いたい事を察したのか手を振りながらニコライが苦笑する。

南極の氷の底に古代の神殿がありそこに神と従者が居るなど、聞いた所で誰が信じるであろうか。

仮に行こうとしてもナターリヤの持つ杖が必要であるし、物理的に行こうとなると南極と言う極限な環境もあつてロボットでも嵐の神殿がある層まで進むのは困難だ。

結論からすれば現状では余程の事が無い限り、誰もここへ辿り着く事が出来ないと言う事になる。

「では古き神よ。そろそろお暇させてもらおうよ」

『うむ・・・息災でな。恐らくは二度と会う事は無いであろうが』

一同はマキナザウラーに別れを告げ、再びユミールが案内する形で来た道に戻つていく。

『・・・・・・・・』

ただ一人残されたマキナザウラーはゆっくりと視線を一室の隅へと向けていた。

『して・・・そこに居るのは誰だ？』

マキナザウラーの声に反応するかのように闇が立ち昇る。

〈お初にお目にかかる。いやはや突然の訪問、無礼を詫びさせてもらうよ〉

『ほう・・・貴様は』

徐々にだが人の形を形成する闇にマキナザウラーはその瞳を僅かに細めていた。

## V O I 5 エピローグ

ユミールに見送られ嵐の神殿より出たプロト達はその後は特にトラブルも無く南極の施設に辿り着く事になる。

時々忘れそうになるがプロトらワイリー軍団も一応は指名手配される身であり、この様な公共の施設に長居出来る身分ではない。

負傷したジョー達を引き連れそくさとその場を後にするプロトら。

超エネルギー元素と同等の結晶を手に入れる事が出来たのだから、くたびれ損と言う事は無く見返りは十分にあつた。

どうやら南米での事件においてスペーススルーラーズのアースが動力炉を破損したとワイリーから連絡が入っている。

その為、早急に自身の下に帰って来る様にと命令が下っている。

「ねえねえ、スカルちゃん」

任務の終了を口頭で伝えその場を去ろうとするスカルマンにナターリヤが声を掛けるが、案の定スカルマンは彼女の呼びかけを無視しその場から立ち去ってしまう。

任務が終われば即、塩対応になるスカルマンを夫妻は特に気分を害した訳でも無く不

思議そうに見つめていた。

手際良く装備をヘリに詰め込みその場を後にしようとするスカルマンらはさて置きである。

「それにしてもラ・ムーンの従者か……あの二人がちゃんとあの杖を守ってくれれば良いんだけど」

「ワシらが心配してやる義理など無いわ」

自身らも帰りの準備をし始めたエフレーム夫妻を見つめながら話すクイントにプロトが悪態を衝きながら言う。

「それにしてもプロト……」

配下のジョー達の撤収作業が続く中、クイントが彼の背に声を掛けて来る。

若干面倒臭げに振り返るプロトはかつて英雄と呼ばれた少年の屈託の無い笑みを見た。

「もうすぐ嵐がやって来るよ。とてもとても大きな嵐がね」

面白がる訳でも無く脅す訳でも無く。

ただただ淡々と言い放つクイントの言葉にプロトは何も言う事が出来ずに黙り込む他無い。

数分後、彼らは南極の地を後にしワイリーの下へと向かう事となる。

それから数日後。

クイントは爆炎に包まれる廃工場を遠目に見据えていた。

既にここより工場への援護射撃を行っていた面々は居なくなっており、廃工場に突入した者達の加勢に向かっている。

「そろそろ来るかな〜って思っていたよ」

クイントは振り返る事無くその場に姿を現した人物に声を掛ける。

漆黒のアーマーを身に纏ったロボットは僅かにだが口元を緩めていた。

「今はヴォイドって名乗っているんでしょ？まあ僕も名前を変えてはいるけどさ」

「もはやかつての名前は捨てた。我が名が強く響く事は無い」

ヴォイドと呼ばれたロボットは無機質に言葉を紡ぎながらクイントを真っ直ぐに見据える。

「既に言うまでも無いが・・・」

「じゃあ言わなくていいよ。僕もそして君も経験した事なんだから」

勿体ぶる様な口調で話すヴォイドにクイントの言葉は素っ気ない。

「であれば言う必要も無いか」

対してヴォイドの方も特に反応を示す事も無く顎に手を置いたまま黙ってしまふ。

「我々の邪魔だけはしてくれるなよ」

「言われるまでも無く分かっているよ」

警告の言葉を発するニコリと笑みを浮かべその背を向けるクイント。

かつての自身が存在している事もあつてか、クイントはこれから起こる出来事も傍観の姿勢を崩す気は無いらしい。

そんな彼の態度にヴォイドの心配が僅かに揺らぐ。

何かを言おうと思つたのかは分からないがいずれにせよ彼の姿はそれきり、最初から居なかつた様に消え去つていた。

「どちらにせよだ。君にまた会えて少し嬉しかったよ」

彼が居た場所にそう言いつつクイントもまたその場より音も無く立ち去る。

誰も居なくなつた場には廃工場から響く爆音だけが聞こえていた。